

# 奇譚クラス

創刊 1945年7月号

7月号



奇譚クラブ

昭和四十四年七月号

定価三〇〇円



7月号 ¥ 350



'69  
7



# 花と蛇 特集号

好評の傑作集大成第四弾刊行!!

定価 五〇〇円 略号 「花」

団鬼六作長篇サディズム小説『花と蛇』は、昭和37年8月号の奇譚クラブ誌上より現在まで引続いて連載し圧倒的人気を博した傑作であり、過去三回に亘って発行した特集号も悉く売切れとなる人気でありましたので、ここに新しく昭和42年1月号以降の分を一括登載、堂々三百数十頁の特集に加えて四馬孝則伯筆の秀麗きわまりない口絵を添えて御覧にいたします。

## 四馬孝則 口絵

### 美女羞恥責 花と蛇 画集

- 一、恐ろしい洗腸の末排泄を強要される美女
- 二、中腰で縛られた美女の品定めする調教師
- 三、清純な美女に初めて縄掛けしていたふる
- 四、刺毛の羞恥責めに悶える地獄部屋の美女
- 五、全裸の開股縛りで深窓の美少女を責める
- 六、儀のようにつられて宙吊りにされた美女
- 七、股間縛りの全裸責めにされる絶世の美女
- 八、足吊りで強制洗腸を施される全裸の美女

- 第四章 小夜子への執拗な調教
- 第五章 変性色事師の登場
- 第六章 生れかわるスター京子
- 第七章 激しいスターへの訓練
- 第八章 低脳男と令夫人の結婚
- 第九章 愛弟子を調教する静子夫人
- 第十章 羞恥と屈辱の日本舞踊
- 第十一章 悪魔たちの哄笑
- 第十二章 地下室の羞恥と汚辱地獄

- 第一章 清純な令嬢の屈辱
- 第二章 人身御供の令夫人
- 第三章 深窓の美少女とズベ公

- 第十三章 珍芸を開陳する令夫人
- 第十四章 淫靡な時代劇ショー
- 第十五章 華々しきショーの展開
- 第十六章 野卑な妻二人のいたぶり
- 第十七章 ズベ公達の邪悪な責め
- 第十八章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち
- 第十九章 悪党の執拗ないたぶり
- 第二十章 文夫と小夜子の屈辱的対面
- 第二十一章 勝ち誇る悪党一味
- 第二十二章 中国伝来の秘法
- 第二十三章 緊縛された美女の涕泣
- 第二十四章 新しい餌食への触手
- 第二十五章 苦痛と屈辱の生地獄
- 第二十六章 恐怖の責め続く
- 第二十七章 結末なき責めの結末

## 【最新版】美貌女体緊縛写真コレクト集

X組百態 大手札型印刷紙 (9×13cm) 極鮮明焼付

各組 一組一枚 (送料共)

四組四枚	五〇〇円
十組十枚	一〇〇〇円
二十組二十枚	一八〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

郵便番号 545-91

最近撮影の新しいモデルの緊縛写真の中で一粒選りの美しいものばかりを集めました。各組一枚です。お好きなものをお求め下さい。御注文の際の御指定はX組の何番とお書き願います。

- 1 正面強烈亀甲縛 (大島 照代)
- 2 美尻は鞭に泣く (関谷富佐子)
- 3 裂う影に慄く (佐々木真弓)
- 4 弾む裸身に縄目 (佐々木真弓)
- 5 柱縛りで鞭打ち (関谷富佐子)
- 6 縛られて困る (金原奈加子)
- 7 私を辱めないで (左近麻里子)
- 8 縛られて嬉しい (中河 恵子)
- 9 確わしの縛女体 (中河 恵子)
- 10 蒲団の上に狂う (関谷富佐子)
- 11 豊満女体の縄目 (大島 照代)

- 12 二つ折りの裸身 (川越美佐子)
- 13 痛打に美く美尻 (関谷富佐子)
- 14 長身の脚を伸す (佐々木真弓)
- 15 若肌は縄に美し (長井葉津子)
- 16 恥らひの女体美 (中河 恵子)
- 17 何故私を縛るの (金原奈加子)
- 18 感傷する胸縛り (ロイズ秋山)
- 19 猿ぐつわの悦び (関谷富佐子)
- 20 荷造り縛りの女 (中河 恵子)
- 21 足指はく字に (佐々木真弓)
- 22 麻痺の柔肌責め (金原奈加子)
- 23 美しき亀甲縛り (左近麻里子)
- 24 柱縛りの隙間見 (長井葉津子)
- 25 緊縛全裸の極美 (左近麻里子)
- 26 海老責めの苦悶 (佐々木真弓)
- 27 全裸の縄は輝く (佐々木真弓)
- 28 猿轡と縄に泣く (川越美佐子)
- 29 縄に喘いだ童顔 (長井葉津子)
- 30 出陣を願う縛り (佐々木真弓)
- 31 後手吊りの全裸 (長井葉津子)
- 32 首膝屈にあえぐ (長井葉津子)
- 33 大の字で晒す裸 (関谷富佐子)
- 34 全裸緊縛の哀愁 (佐々木真弓)
- 35 高小手の全裸 (佐々木真弓)
- 36 真迫の縛プレイ (ロイズ秋山)
- 37 豊満な裸身縛り (左近麻里子)

- 38 竹棒責めに悩む (大島 照代)
- 39 亀甲縛りで寝る (左近麻里子)
- 40 縄目に喘ぐ表情 (中河 恵子)
- 41 開股縛りの正面 (中河 恵子)
- 42 猿轡に喘ぐ緊縛 (左近麻里子)
- 43 縛りの肌を見て (金原奈加子)
- 44 私を縛りが好き (金原奈加子)
- 45 強烈縛りを味わ (金原奈加子)
- 46 裸身を横たえて (左近麻里子)
- 47 二つ折に弾む胸 (佐々木真弓)
- 48 柔肌に痛む麻痺 (左近麻里子)
- 49 全裸の女体引越 (中河 恵子)
- 50 開股縛りを露観 (左近麻里子)
- 51 突き出した尻 (中河 恵子)
- 52 あどけなき緊縛 (金原奈加子)
- 53 首屈股間縛の女 (長井葉津子)
- 54 強烈後手で括る (佐々木真弓)
- 55 恥しい縛り初め (金原奈加子)
- 56 海老縛りで悶ゆ (関谷富佐子)
- 57 懸られる緊縛女 (長井葉津子)
- 58 豆絞りの猿轡で (金原奈加子)
- 59 もう虐めないで (金原奈加子)
- 60 豊に転ず股間縛 (金原奈加子)
- 61 女体は縄に映ゆ (左近麻里子)
- 62 全裸の縛を見て (長井葉津子)
- 63 背は柔肌を乱打 (関谷富佐子)
- 64 臀部に苦は炸裂 (関谷富佐子)
- 65 この裸身を縛ぐ (佐々木真弓)
- 66 縛観の縛り表情 (長井葉津子)
- 67 足吊りで晒す肌 (長井葉津子)

- 68 美体は縄に映る (中河 恵子)
- 69 淫ましき臀部晒 (左近麻里子)
- 70 両手吊りに喘ぐ (長井葉津子)
- 71 左近麻里子の裸 (左近麻里子)
- 72 開股縛りの羞恥 (中河 恵子)
- 73 縛られる女体 (中河 恵子)
- 74 鉄砲責めの女体 (左近麻里子)
- 75 確わしの肌を縄 (佐々木真弓)
- 76 後手縛りの連続 (ロイズ秋山)
- 77 開股の股間縛り (大島 照代)
- 78 強烈な縄目の女 (川越美佐子)
- 79 逆エビ責め地獄 (ロイズ秋山)
- 80 豊満な裸身の美 (関谷富佐子)
- 81 羞らひの流し目 (佐々木真弓)
- 82 肌を喰い込む縄 (長井葉津子)
- 83 綱轡縛りと猿轡 (長井葉津子)
- 84 投げ出された裸 (金原奈加子)
- 85 正面の亀甲縛り (左近麻里子)
- 86 開股縛りの女体 (左近麻里子)
- 87 後手縛りの全裸 (中河 恵子)
- 88 柱に晒す強烈縛 (長井葉津子)
- 89 羞恥の脚挙げ姿 (佐々木真弓)
- 90 豊かな乳房露示 (佐々木真弓)
- 91 美しい女の縛り (佐々木真弓)
- 92 股間縛りに羞う (長井葉津子)
- 93 ホステスの緊縛 (佐々木真弓)
- 94 椅子坐開股縛り (中河 恵子)
- 95 無防備な両手吊 (関谷富佐子)
- 96 息づまる猿轡 (川越美佐子)
- 97 人身御供の乙女 (長井葉津子)
- 98 両手吊で晒す肌 (金原奈加子)
- 99 爪先立つ強烈縛 (ロイズ秋山)



〔秘蔵版特選SM資料〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

入墨女賊仰向け木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△よひ▽

全裸入墨女賊拷問折檻

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△よせ▽

女賊答打ち白洲糾問

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△よゆ▽

入墨女賊ハリツケ拷問

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△よめ▽

入墨女賊海老責め拷問

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△よす▽

入墨女賊全裸四道い木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△よも▽

入墨女賊逆さ吊り仕置

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△よき▽

女賊全裸大の字獄処刑

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△よさ▽

女囚拷問木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
美木乃々子 略号△もと▽

女囚石抱き算盤責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
美木乃々子 略号△もへ▽

美人女囚海老責め拷問

大手札三枚一組 四〇〇円  
美木乃々子 略号△もに▽

白洲女囚竹棒羞恥責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
美木乃々子 略号△もち▽

美人女囚答打ち折檻

大手札三枚一組 四〇〇円  
美木乃々子 略号△もほ▽

女囚開股羞恥責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
美木乃々子 略号△もぬ▽

美貌女囚土壇で扇斬り

大手札三枚一組 四〇〇円  
美木乃々子 略号△もり▽

艶美女囚白洲に悶える

大手札三枚一組 四〇〇円  
美木乃々子 略号△もほ▽

全裸強烈羞恥縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
東浦ひかる 略号△なの▽

狼ぐつわにあえぐ裸女

大手札三枚一組 四〇〇円  
東浦ひかる 略号△なむ▽

女奴隷を弄ぶ二人の女

大手札八枚一組 二〇〇円  
大塚・東浦・木村 略号△きあ▽

大塚・東浦・木村 略号△きあ▽

くすぐり責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円  
大塚・東浦 略号△きす▽

灼熱の遺涙責め

大手札四枚一組 五〇〇円  
大塚・東浦 略号△きせ▽

豊満な乳房を責める女

大手札五枚一組 七〇〇円  
大塚・東浦 略号△きそ▽

女奴隷を飼育する美女

大手札五枚一組 七〇〇円  
大塚・東浦 略号△きて▽

凌辱されるマソ女

大手札五枚一組 七〇〇円  
大塚・東浦 略号△きと▽

鼻責め悦楽

大手札二枚一組 三〇〇円  
大塚・東浦 略号△きな▽

可憐な牝犬の調教

大手札四枚一組 五〇〇円  
木村 洋子 略号△めあ▽

足詰めをたのしむマソ女

大手札四枚一組 五〇〇円  
木村 洋子 略号△めく▽

足詰めを強要されたマソ女

大手札四枚一組 五〇〇円  
木村 洋子 略号△めゆ▽

足詰め訓練を受ける牝犬

大手札四枚一組 五〇〇円  
木村 洋子 略号△めや▽

愛玩用牝犬の生態

大手札四枚一組 五〇〇円  
木村 洋子 略号△めえ▽

足首縛りの表情美

大手札三枚一組 四〇〇円  
一宮百合子 略号△あひ▽

美しき足首の縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
一宮百合子 略号△あは▽

素足を縛られる快味

大手札三枚一組 四〇〇円  
一宮百合子 略号△あふ▽

生ゴムの狼ぐつわに喘ぐ

大手札四枚一組 五〇〇円  
木村 洋子 略号△むこ▽

股間縛り恍惚境場面

大手札三枚一組 四〇〇円  
一宮百合子 略号△るね▽

鼻責めいたぶられ集

大手札四枚一組 五〇〇円  
一宮百合子 略号△るえ▽

首縄股間膝頭縛り

大手札五枚一組 六〇〇円  
一宮百合子 略号△るそ▽

鼻いじめ三態

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△はね▽

鼻責め万華鏡

大手札八枚一組 二〇〇円  
山原 清子 略号△はた▽

乳房責め五態

大手札五枚一組 六〇〇円  
山原 清子 略号△てら▽

全裸女麻縄強烈縛り

大手札十枚一組 五〇〇円  
山原 清子 略号△いね▽

刺青裸女を踏みにじる

大手札八枚一組 一〇〇円  
山原 清子 略号△いつ▽

洋髪全裸刺青強烈縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△いこ▽

可憐島田全裸縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△いみ▽

黒フンドシ高手小手縛り

大手札八枚一組 二〇〇円  
山原 清子 略号△ひろ▽

刺青女体エビ責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△ほか▽

文身女体股間縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△ほき▽



# 奇譚クラブ

△第三卷 第八号・通刊第二五五号▽

(昭和四十四年) 七月号 目次

## △本 文▽

懸賞入選作品『彼の中の世界』……………	麒麟 欧二……………(10)
ルポルタージュ『異 常』……………	予世場良三……………(20)
レゾウの中の女『十人十色』第三話……………	泉野 薫……………(22)
体験記 女書図絵の系譜……………	南 彦造……………(36)
連載M小説『ピエロ床屋』④……………	鬼山 絢策……………(38)
妊婦ハントに寄せて……………	羽鳥 水江……………(45)
夜と霧の群像『玩 具』……………	花影 叢……………(48)
告白 お風呂の出来ごと……………	小杉 千恵……………(63)
フェチ小説『この胸のときめき』……………	日本 武士……………(66)
愛と死の映像 大奥忠臣蔵……………	中康 弘通……………(74)
連載小説『大噴火』(第十回)……………	千葉 青鬼……………(84)



## 奇クサロン……………編集部構成……………(233)

世は正にSM時代……………	菅田 不及……………
サロン業我記(第六十一回)……………	辻村 隆……………
「甘いメロディの流れる時」……………	みなみ 洋……………
イルリの知識を教えて下さい……………	小宮たづ子……………
「あら・おりこうネ」……………	菊池 淳子……………
妊娠検閲礼讃……………	西野 正一……………
「不安の時間」……………	志羽 利也……………
週刊誌にみる沈黙……………	伊里 豊……………
「脱ぎなッ」……………	山内 鏡……………
「私の願望」……………	大 倉 生……………
映画 通信……………	嵯峨美正子……………
最近のSM映画……………	西 晃 道……………
「悦ばれたい」……………	小杉 千恵……………
「叫び止め」……………	辻 龍太郎……………
「佐野寿雄」……………	麻生 保……………
「カメラ・ハント」ばんざい……………	佐野 寿……………
「先生へお願い」……………	御木本三郎……………
編集部だより……………	結城 志……………
「たのしきかなレジャー」……………	春川ナミイ……………
「SMと金銭」……………	村崎 達彦……………
「治療に必要なものよ」……………	赤 ち ゃ ん……………
「ひとりしはり」……………	早木 夢二……………
「僕のイメージ小説『日曜日』」……………	室井重砂路……………
「わが回想『春を惜しむ』」……………	高柳 浩……………
「イメージ小説『ミス・リガーチュア』」……………	古留 前……………

濡れにぞ濡れし 夕取 材ク……………芳野 眉美……………(92)

幻想と現実の断片「階 段」……………佐藤 額……………(96)

連載時代伝奇小説 緋縮緬地獄(14)……………白鳥 大蔵……………(100)

フォト・ストーリー 私の「SM日記」……………小竹 一浩……………(104)

M的飲食物考現学……………津川 博……………(110)

男性書待快楽座(第六話)……………馬族 保……………(117)

「脚線美ブルジョワ時代」……………馬族 健治……………(133)

有田久美子さんへ「甘い空想」に込める……………草輪 鬼六……………(139)

鬼六談義『蓮華草の話』……………閉 鬼六……………(139)

女武者討死シリーズ 女天草四郎……………川上 米子……………(144)

夢よいま一度「ふんどしハブニング」……………鈴木ゆり子……………(155)

連載小説『花と蛇』(続編第五十五回)……………閉 鬼六……………(159)

告白 ケント紙の女……………幾月由紀夫……………(177)

映画カメラ・ハントへ東映京都作品▽……………辻村 隆……………(181)

徳川いれずみ師「責め地獄」……………編集部選……………(181)

「残酷美の集大成」……………編集部選……………(181)

読者 通信……………編集部選……………(181)

(目次カット「病床の日光浴」…室井重砂路)……………(181)

(扉カット「阿修羅の幻想」…五屋和十)……………(181)



〔最新緊縛資料写真一覽〕

柔からの両手吊り責め

大手札二枚一組 三〇〇円  
木村 洋子 略号(ろふ)

床柱に宙吊り縛り

大手札二枚一組 三〇〇円  
木村 洋子 略号(ろへ)

開股股間縛り正面

大手札二枚一組 三〇〇円  
山原 清子 略号(ろほ)

二女連縛責模様写真

大手札十枚一組 一五〇〇円  
大塚・山原 略号(ろそ)

二女連縛顔面縛写真

大手札十枚一組 一五〇〇円  
山原・大塚 略号(ろひ)

股間縛り刺青競盤

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号(ろさ)

股間縛り正面妖美表情

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号(ろす)

喰込む股間縛りの縄目

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号(ろせ)

手足宙吊り

大手札三枚一組 四〇〇円  
梨花悠紀子 略号(つた)

オムツの股間縛り

大手札四枚一組 五〇〇円  
東浦ひかる 略号(むく)

強烈責、被虐の果

大手札五枚一組 八〇〇円  
梨花悠紀子 略号(りお)

乳房いじめ

大手札二枚一組 三〇〇円  
大塚 啓子 略号(とお)

激痛、逆エビ責め

大手札四枚一組 八〇〇円  
大塚 啓子 略号(きえ)

美貌の裸身に縄目

大手札三枚一組 四〇〇円  
絹川 文代 略号(きん)

腰元吊り責め

大手札二枚一組 三〇〇円  
村井知可子 略号(こり)

腰元間課の拷問

大手札四枚一組 六〇〇円  
村井知可子 略号(こく)

椅子エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
東浦ひかる 略号(おき)

六尺縄縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
東浦ひかる 略号(ろは)

弓吊り責め

大手札二枚一組 三〇〇円  
梨花悠紀子 略号(つき)

狙われた和装の娘

大手札十二枚一組 二〇〇円  
愛川 悦子 略号(ねい)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
水本 茂美 略号(えひ)

ゴム衣緊縛

大手札三枚一組 四〇〇円  
水本 茂美 略号(みす)

抓ねりと樂ぐり責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
大塚・東浦・木村 略号(きし)

バンド責め

大手札五枚一組 八〇〇円  
東浦ひかる 略号(はん)

夫人の表情

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号(せや)

後手吊り足挙縛り

大手札五枚一組 七〇〇円  
東浦ひかる 略号(うら)

二つ折りエビ責め

大手札五枚一組 七〇〇円  
東浦ひかる 略号(うり)

足挙げ椅子責め

大手札五枚一組 七〇〇円  
東浦ひかる 略号(うる)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
大塚 啓子 略号(えり)

鼻の穴責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
大手 啓子 略号(なく)

鼻なぶり

大手札三枚一組 四〇〇円  
大塚 啓子 略号(ない)

鼻責めの陶醉

大手札三枚一組 四〇〇円  
大塚 啓子 略号(なは)

完全逆さ吊りフオート

大判三枚一組 一五〇〇円  
木村 洋子 略号(さつり)

両足首括り逆さ吊り

大判五枚一組 一五〇〇円  
梨花悠紀子 略号(さか)

逆さ吊り女体折檻

大判五枚一組 一五〇〇円  
梨花悠紀子 略号(させ)

手足逆滑車宙吊り

大判五枚一組 一五〇〇円  
梨花悠紀子 略号(さと)

啓子をいじめる清子

大手札八枚一組 一五〇〇円  
山原・大塚 略号(うの)

啓子を縛しめる清子

大手札八枚一組 一五〇〇円  
山原・大塚 略号(うな)

山原を責める大塚

大手札八枚一組 一五〇〇円  
大塚・山原 略号(うね)

逆さ吊り正面と背面

大手札二枚一組 四〇〇円  
増田みゆき 略号(つる)

煙草責めの裸身

大手札三枚一組 四〇〇円  
大塚 啓子 略号(たく)

乳房責め五態

大手札五枚一組 七〇〇円  
山原 清子 略号(てら)

全裸麻縄強烈縛

大手札十枚一組 一五〇〇円  
山原 清子 略号(いね)



# 奇 譚 ク ラ ブ

昭和 44 年 7 月 号

(1969年・7月号<第23巻第8号・通刊第255号>)



## 本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で  
穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象  
として編集しておりますが、青少年の保護  
育成に関する条例には抵触しないよう、十  
分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ  
ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵  
の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順  
次整えて参りましたが、更に挿入写真の減  
少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な  
どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺戟の強いもの  
は極力掲載しないようにするのは勿論、掲  
載した文章は十二分に検討を加え、いやし  
くも青少年の健全なる育成に支障を与えな  
いよう努力いたします。尚、本誌の発行部  
数は最低限度にとどめ、その増大を企るた  
めの努力はいたしません。





☆懸賞入選作品☆

# 彼の中の世界

遺作《黒い恍惚》を中心に

麒麟 田 欧 二

彼が死んでから半年になる。

ごみごみした都会の片隅で起こった取るに足りない一人の男の死亡事件としては、当時異例ともいうべきセンセーショナルな話題をまきはしたものの、それも移り気な世間の記憶からは大分忘れられてしまった今頃になって、無益とも思われるペンを執る気になったのも彼のたった一人の友人として、ついに謎のまま葬り去られた彼の死の真実について、すくなくとも真実に最も近い経緯を、説明しうるのは私ひとりであるという一種の責任感

めいた衝動からである。

たしかに、それは奇妙な死に方だった。ある日、彼は独り住まいのアパートの一室で死体となって発見されたが、その状況は、きわめて異様なものだった。

死体は、枕も掛蒲団もない寝床の上に、全裸のからだを不自然に振ったまま硬直していた。しかも両腕は細引で背中に括り、足首にも同じように縄がかけられていた。そればかりではない。死体の口には、奇妙なものが押し込まれていた。黒いエナメルで塗った子供

用の野球バットで、径五センチほどもある丸い先端が咽喉の入口まで達しており、直接の死因は、このバットによる呼吸圧迫——つまり窒息死とわかった。さらに、もう一つ不可解な事実（このことだけは新聞記事にも伏せられた）があった。口に押し込まれたバットと同じような状態が、死体の肛門にも残っていた。バットほど太くはなかったが、その先端は十五センチ余も直腸の中に没していたのだ。

以上が、検視の際のあらましの状況だが、



そのほかに死の直前に射精したと思われること、また肛門は慢性の痔疾で、弛緩した括約筋の状態から異常性愛の常習者ではないかと想像されたこと、などをつけ加えておく。

こうした状況の異常性と残虐性から当局が最初に想定したのは、痴情——それも男性同志の特殊な関係での——による他殺という線だった。たった一人の友人である私が参考人として、時には不愉快きわまる訊問を受けたりもしたが、捜査が進むにしたがって、他殺説はたちまち行き詰った。内側から鍵のかかった密室ともいふべき現場には、第三者の介在した痕跡が全くなかったこと、それに彼がホモであったという裏付けも、括約筋に類似性があるという以外に何もないこと、従って男性同志の痴情などという想定も根拠のないものであることが判った。つぎには、自殺説が強まったが、同時に事故死あるいは過失死を主張する声も一部に出た。事故死と想定する理由について、ある人は「ごく特殊なケースだが……」と前置きして、変態性慾に関するザイツの報告例を引用した。かなり有名なものだが、参考として概略を記しておこう。

一九一三年の四月五日夕、ドイツのミュン

ヘンで、二十二歳の砲兵が、鍵をかけた自宅に死んでいた。青年は素裸のうえ、頭部には女の髪をかぶり、顔には目と鼻だけ孔をあけた赤ゴム製フットボールの断片を仮面のようにつけて紐で結び、胴には女性のコルセットを纏っていた。さらに陰莖と陰嚢は鞣革の袋で掩ってバンドできつく胸へ締め上げ、その上から紐で縛ってある。こうした奇妙な姿で青年は寝台の支柱へ麻縄をかけ、床に跪いて蹲ったまま縊死していた。仔細に検べると、青年の右大腿部には鞭の痕があり、左腕の肘近くには葉巻煙草を押しつけたと思われる火傷が発見された。なお、ベッドの上には一本の鞭と、ひらいたままの書物があつた。ひらかれたページには、仮面をかぶった多勢の処刑者によって、一人の少女が水責めの拷問を受けている図が掲げてあつた。

こうした状況から判断されたのは、この青年は、いわゆる自虐症の典型であり自己に向かつてのサディズムとマゾヒズムが一体となつて、そのリビドーの根源をなしていたという。すなわち彼は書物に掲げられた処刑者と犠牲者（少女）の二役を、同時に演じたわけである。処刑者（サディスト）としては

仮面をかぶり鞭を持ち、少女（マゾヒスト）としては、髪をかぶり、コルセットをつけ、男性器を掩ったうえ、自分の手で自分を拷問した。その肌に煙草の火を押しつけ鞭打ち、最後に絞首刑を命じた。自ら設定したこの状況の中で、彼のリビドーは頂点にまでのぼりつめ、恐らくは絶頂の恍惚の間に失神し、そのまま窒息死に到ったものと思われる。

たしかにザイツの報告例は、その異常さの類似性において、彼の死を説明するのに最も適切であると私も認める。彼もまた、マゾヒズムの法悦境のさなかに死んだものと私は信じている。事故死であることも、恐らく間違ひなからう。個々の細かい点を除けば、この両者は全く同一ケースといつてよい。だが、その個々の細かい点については、私以外に、確信をもって説明しうるものはあるまい。すなわち、ザイツの例にあるコルセットや鞭の代りに「小道具」として用いられた黒い野球バットと、黒い棒の意味するものを——



彼の中で何が起こり、それがいかにして彼を死にまで到らしめたか、それを端的に裏付ける一編の作品（彼はそれに自筆の挿絵を添え匿名で或る出版社に送ったが握りつぶされ



た)がある。さいわい、その時もらい受けた草稿が私の手許に残っており、あの事件の際にも、それは人目に触れることはなかった。もちろん、それを公開することによって、すべては直ぐにも解決したろうし、私自身、あの不愉快な訊問や取り調べの煩しさから解放されたであろうことは、百も承知していたのだが……。

しかし、現実には彼の死を語るとなると、私がかくどくどしい字句をろうするより、やはり右の一編を公開することがいちばんの早道ということになる。そこで以下に、その梗概と内容のほんの一部を紹介して理解への援けとしたい。

それは『黒い恍惚』と題するかなり長いものだが、まず簡単にプロットを記すと――。

突如として、地球上に『黒い革命』が起る。有史以来、奴隷という家畜並みの地位しか与えられていなかったすべての黒い皮膚を持つ人種が蹶起し、血みどろの死闘の末、白人の支配を覆し、あらゆる権力を握った。かれらは、二千年来の虐待と悲慘に酬いるに、父祖代々の主人であり優等人種であった白人を皆殺しにする代りに、老若男女を問わず鎖

で繋ぎ、白い奴隷として、すべての黒人に分配した。白と黒は、完全にその地位を入れ換えた。白い皮膚を持った人種が生きるためには、黒い主人に、忠実に仕える奴隷としてしか道はなかった。その屈辱に堪えかねて、みずから死を求めるものもいたが、多くは鎖と鞭の下に生きることを選んだ。

白い奴隷はさまざまな形で調教され、やがて、自分が奴隷であることに悦びを感じるようになる。

以上が『黒い恍惚』の概略だが、原文はスベクタクルな白黒の激闘場面から始まり、ついに屈服した白い人種が、みずから奴隷として『黒い恍惚』を感じるにいたる模様を、章を分けて克明に描写しているが、内容の殆どが性的な記述に終始し、その点、ボルノグラフィアに近く、全文の公開はもちろん憚られるが、そのうちの極く一部、ジャンという白人が、それまで奴隷として虐待していた黒人の夫婦に、こんどは寝室用の性奴(性に奉仕する奴隷という意味で、彼の造語)として調教されてゆく過程を描いた、始めの部分を抜萃してみよう。

## 『黒い恍惚』

### 第二部 第八章「性奴」

主客顛倒というのは、まさにこのことだろう。数日前まで、彼らの逞しい足首に食い込み、その黒い皮膚を噛んでいた鋼鉄の足枷は今やジャンの足首に硬く冷たい歯を立てている。背中に高々と捻じ曲げられた両手首にはやはり彼らの血と脂汗をたっぷり吸い込んだ革製の手錠が填められている。

ジャンはもう暴れなかった。いや、暴れるだけの体力はすでに使い果たしてしまったと言った方がよからう。常にオーデコロンのかげり香りに包まれていた彼の美しい皮膚が、汗と泥と血で木偶人形のようにになっているのを見れば、ジャンがそれまでにどれくらい無益の抵抗を試みたかがわからう。

社交界でも屈指のベストドレッサーと評され、伊達男の異名で呼ばれていたジャンを知るものなら、いまブリーフさえ剥ぎ取られ、生まれたままの姿で絨氈の上に投げ出された哀れな犠牲者を、それと同一人とは、とても信じられないだろう。



ジャンは固く眼を閉ざしたまま、死んだように身動きもしなかった。眼を閉ざすことによって、みずからの惨めな姿を、かつて同じ立ち場にあった相手の眼前に晒している苦痛から逃がれようとした。口を大きく割り開いて、泥とともに無理矢理押し込まれた革の喊口具（それも彼が奴隷の懲罰用に造らせたものだった）が、名状しがたい不快な臭気と味覚を伴って彼の呼吸を詰まらせ、嘔吐させそうになった。血の滲んだ唇の端から、薄黒い唾液がジャンの恰好のいい顎に流れている。「だいぶ、まいったようだね。いい気味」

訛りのある甲高い声でそう言って、ケラケラと笑ったのは女奴隷（むろん数日前まではである）だった。

「俺たちを畜生より非道いめに合わせてよ、この旦那は、毎日こんな結構なものを飲んでござったと。お前や俺が受けた仕打ちに比べたら、このくれえは、ほんのご挨拶代り。まあ、おいおい、おもてなしするべえ」

男奴隷（彼こそ今や絶対権をもったジャンの主人である）は上機嫌で、ジャンが秘蔵していたブランドーを喇叭飲みしながら、蹠根と立ち上った。

彼らは先刻から、丸太のように転がされた

ジャンを肴に酒宴を始めていた。男も女もしたたかに酔い、女はしきりに奇声を上げて笑い続けている。

「さあてと、俺たちばかりいたでいたんじや悪いやね。旦那にも御相伴ねがおうじやねえか。旦那、どうだね」

男は、ジャンのかたわらに仁王立ちになると、彼の顔の上にブランドーを注いだ。瓶の口から激しい勢いで落下する液体は、たちまちジャンの顔を濡らし、彼の唯一の呼吸器官である鼻孔から容赦なく流れ込んだ。ジャンは不自由な全身を悶えて苦しみ、無情な液体の雨から逃れようと、最後の力を振りしぼって反転した。が、すぐさま男の力強い爪先が彼の脇腹を軽く蹴った。亀の子のように、再びジャンは仰向けにひっくり返った。

「そう遠慮するには及ばねえよ、旦那。もともと、お前さんのものだて」

こんどは、男の大きな足の裏がジャンの胸を踏みつけ、彼は二度と動けなくなった。

ジャンの苦悶するのを見下ろしながら、黒い男女は快さそうに笑うのである。

彼らは夫婦だった。いや、彼らを夫婦にしたのは、他ならぬジャン自身であった。むろん夫婦といっても、日常生活におけるそれで

はない。いわば「接待用」夫婦として、ジャンが無理矢理にめあわせ、来客やパーティーの折の取っておきのアトラクションとして、彼らの「夫婦」ぶりを披露させたわけである。

彼らは、ジャンが多数の中から選り出した男女だけに、共に素晴らしい肉体をしていた。

男はアポロのように均整がとれて引き締まり黒光りする全身の筋肉は、かつて如何なる巨匠の彫刻も表現し得なかった美の極致を具えていた。とはいえ、ジャンが彼を選んだ理由はそれだけではない。彼がその見事な肉体と共に、漆黒に輝く偉大にして美しいものの所有者だったからだ。彼のその偉大さを目のあたりにした婦人客の殆どは、凄じさと豪快さに思わず叫び声をあげ、しばらくは言葉も出ない驚愕と讃嘆に我を忘れた。むろん、男客の間にも「オーッ」といった、ざわめきの起るのが常であり、それがジャンの自慢でもあった。

この黒いアポロの相手となる女は、さしずめ黒いヴィナスというべきだろう。ことに、その黒光りする乳房と臀部の丸み、肌理（きめ）細かい膚の美しさは、何びともそれを活写することは不可能に違いない。

「さあ、お前たちを夫婦にしてやる。おれの



眼の前で夫婦になれ」

黒い夫婦は、一糸も纏わぬ姿で広間に引き出され、召使たちの鞭のもとに日夜調教された。主人の命に逆らうことは死を意味することを彼らも知っている。彼らの生への執着がやがて「男女のよろこび」を知るまでに飼育された時、接待用の「夫婦」は完成したのである。そして彼らは、引き出されるたびに観客から、やんやの喝采を浴びた。

その黒い夫婦が、かつては其処にジャンがゆったりと寛いで、奴隷夫婦の調教を指図した長椅子に寝そべり、虫の息となった以前の主人を面白そうに眺めているのである。

「俺もお前も、旦那のおかげでいい暮らしをさせてもらったで、そのお礼をせにやあな。こんどは、おれたちで旦那に喜んでもらおうじゃねえか」

「そりゃいい考えでねえの。わたしらばかりが、いい思いをしたら罰が当たるでね」

黒い夫婦は、また声を合せて笑った。

「んじゃ、旦那をベッドへ運ぶか」

男は荷物でも持ち上げるように、無造作にジャンを抱えて寝室まで運ぶと、ダブルベッドの中央に投げ出した。すべての感覚を失い血と汗と泥にまみれたジャンの全裸が、豪華

なベッドの柔らかいクッションに、二度三度弾んでから、仰向けに埋まった。

彼らは、全く抵抗の意志を失ったジャンの四肢から、手錠、足枷をはずし、両腕、両脚を別々にひろげてベッドの鉄枠に固定し、大の字に緊縛した。

「お前、旦那に恩返ししてやんな」

「いやだあ、わたし。気味がわるい」

「何いって。かりそめにも白人サマのお肌に触らせていただくんだ、有難く思わにやあ粗末にするじゃねえぞ」

「だけんど、あんたに比べると、白人さまは頼りないみたいだねえ」

女は、そう言いながらベッドに上った。

「ふにやふにやで、気色が悪いよ」

「もったいねえことをいうのじゃねえ。さあ御恩返しをしてさしあげな」

女の掌に軽い力が加わり、疲れ切り痛み切ったジャンの肉体に、微かな感覚が走った。

「ほうれ、旦那は嬉しいとよ」

「そんなものかねえ」

しかし、肉体的にも精神的にも完全にうちのめされたジャンは、グッタリとなったまま眼も開けない。

「だめだあ。こいつは死んじまってるみたい

だもの。それより、わたし、おしっこがしたくなった」

「何だ、今時分。早くやらかしちまえ」

女はベッドを降りかけた。が、男は何を思ったか、女の腕を掴んだ。

「待て待て。降りるにや及ばねえ。ちょうど旦那が咽喉を乾かしておいでのようなで、いっちょよう振舞って差し上げな」

「いやだあ、そんな」

「いやなことがあるものか。待ってろ」

そう言う男は、ジャンの口からどろどろになった喊口具を引き出し、そのまま両手の指先を口へ割り込ませると、上歯と下歯にかけて思い切り引きあげた。ジャンの口は顎の番がはずれるほど上下に割り裂かれ、咽喉の奥から声にならない喘ぎが洩れた。

「さあ。けど、周りへ滾すんじゃねえぞ。おれたちが、あとで寝るんだでな」

女は、かつてジャンの妻ダニエルが着ていた、スカイブルーの透明なネグリジェの裾をからげた。

次の瞬間、ジャンの口といわず、眼といわず、鼻といわず、耳といわず、一斉に瀑布と臭気が襲いかかり、ジャンに呼吸の余地を与えなかった。ごくろーと彼の咽喉が鳴った。



その殆ど無意識の行為が、彼を窒息から救った。

「ああ、さっぱりした」

女は、ゆっくり腰を上げかけたが、何気なく後ろを振り返って、「あれ」と頓狂な声をあげた。

これはどうしたとか。それまで死んだようであったジャンの肉体に、信じ難い変化が現われているではないか。

「こいつは驚きだ。旦那は、お前の聖水がよっぽどお気に召したと見える」

「あら、いやだよ」

女はベッドの上に横坐りになると、しげしげとジャンの変貌ぶりを凝視め、指で軽くはじいた。——と、ジャンが微かに呻いた。

「ほうれ、旦那がご恩返しに御催促だ」

男は面白そうに、女の尻をぴしゃりと叩いた。

◇

この章はまだまだ続くが、こうしてジャンは、黒人夫婦の寝室に奉仕する性奴として飼育されてゆく。このあと彼は、女に奉仕を命ぜられたが、齒を当てたというので、齒を全部抜かれてしまう。次には、裏面の調教が始まる。これは甚しい苦痛を伴ったが、その苦

痛の中に彼は突然よろこびを感じる。これを契機にジャンは、しだいに違った人間に生まれかわって行く。かつて自分が家畜のように扱った奴隷の男女から意のままに奉仕させられることに、今まで経験したことのない恍惚を感じるまでになった時、彼は身も心も完全に「白い奴隷」としての生命を得る。ジャンは、全く新しい人間となる。

本文を続けよう。

◇

ジャンはそつと手を離して、それを凝視めた。これほど完全な、これほど美しいものを今までに見たことがあったろうか。色彩、形状、光沢、量感、硬度、感触、生命力、動感——どれをとっても、それは欠けるところのない芸術品だった。反射的に、ジャンは自分を見た。そこには、眼前の芸術品と同じ名で呼ばれるには、あまりにも貧弱なものがあつた。何という違いだろう。同じ名であることが不思議なくらいに滑稽に見えた。ジャンは恥かしさで全身が赤くなり、今すぐ自分が煙のように消えてくれたらと希った。

ジャンが僅かに身を動かすと、両手首を繋いだ鎖が触れ合って音を立てた。初めてそれを掛けられた当座と違って、現在の彼には、

その鎖の重みも緊縛感も、何ら苦痛や屈辱感を与えなくなっていたし、殆んど不自由さを感じなくなっていた。一糸も纏わない衣類の代りに身につけたアクセサリーのような具合に、彼はその鎖の許す行動範囲で充分に主人夫婦に奉仕できたし、彼自身の喜びにもそれは妨げとはならなかった。

鎖で繋がれたジャンの両手は、再び眼前の完璧な芸術品に戻った。……

◇

〔筆者註〕このあと原文は、こと細かに永々と続くが、公開を憚るので割愛する。もっとも、世間には文学の名を借りた春本まがいの文章が、知名の筆者と権威を誇る出版社とのなれあいでは氾濫している。それを考えれば、なまじの斟酌は無用ともいえそうだが、私としては、日本が将来、スウェーデンのようにこの種の書物が自動販売機で購えるようになるもなったら、改めて、公表したいと思っている。

それはともあれ、ジャンは奉仕を続けながら必死に祈る。／＼ああ、このまま咽喉を貫かれない。生のまま嚙みたい。ジャンは、千に一つの奇蹟を希ったのである。というのは過去いかなる場合もこの希いは果たされたこと



がなかった。

彼は、いわば男のリピドーを昂めるための奉仕者に過ぎず、男の最終目的はいつの時も必ず男の妻である女にあった。いかに乱れた場合でも、男は誤りをおかさなかった。彼の熱望は、常に裏切られた。へさあ、早く。お願いだVと念じつづけるのだが、その切願も空しく、決まってジャンは女の足に蹴られベツドから転がり落ちる。涎を垂れ流し、手足の鎖をガチャガチャ鳴らして亀の子のようにもがいているジャンの眼の前で、二匹の黒い獣が、つい先日まで彼の命じていたことの再現をみせるのだ。しかしこれは、もはや演技ではない。鞭で打たれながら、恐怖と屈辱に泣きながらのあの頃と、ポーズばかりか泣き声まで似ているが、現在の彼らには華やかに装った観客は居ない。その代り、死ぬほどの嫉妬に身悶える惨めな白い奴隷が床を輾転とする。ジャンとしてはこの時ほど女の肉体に嫉妬を感じることはない。一度でもいい、男のすべてを独占したい。否、自分だけを対象にしてほしい。——そのためなら彼はどんなことでもしただろう。この渴望もやがて果たされる時が来るが、ここでは原文をもう少し続けよう。

◇

強烈な体臭と汗のにおいが縋<sup>な</sup>い混<sup>ま</sup>った熱気の中に、黒い男女は死んだように動かなかった。それは、黒光りする巨大な岩の塊のように見える。

しばらくして、ジャンの仕事が始まった。荒らし放題に荒らされた、暴風雨の跡始末の一切に舌だけを用いるのはジャン自身が望んだことだが、正直いって、女の始末は気が進まなかった。とはいえ、彼はまず女の方から早速作業を、開始しなければならぬのである。次に出来る作業を楽しみにジャンは不快に耐えるのだった。

◇

この章は、さらに幾つかの閨房描写でいろどられる。

かつては、眼の前で彼らに屈辱の行為を強制し、見物者としての愉しみに浸<sup>ひた</sup>って来たジャンが、今や同じ男女の演ずる同じ行為の、苦痛に満ちた見物者とならねばならない運命の廻<sup>めぐ</sup>り合わせを自覚するところで、第八章は終る。

ひき続き第九章では、ジャンの妻であり、かつて暴虐の女王と呼ばれて、奴隷たちから悪魔のように恐れられたダニエルが登場。こ

の絶世の美女が、ジャンと同じ屋根の下で、

現在は黒人夫婦の忠実な使用人となった。もとの下級奴隷たちの共有物として、十人に余る男女から調教される。絶叫し、美しい肉体をのたうち廻らせつつ彼女もまた白い性奴として、十余人の男女を同時に満足させ得るほどの驚くべき奉仕者に変身してゆくわけだが引用ばかりが長くなるので省略する。

ともあれ、僅かな部分だけだが、以上の抜萃で『黒い恍惚』という作品がどんなものか大体はわかってもらえると思う。

原稿用紙にしてどっしりと重いこの作品を初めて見せられた時、正直のところ、私自身はげしいショックを受けた。だから、読後、「どうだった」と、彼に感想を求められても「おどろいた」というより他に言葉がなかった。まったくもって、それが本音だった。

「ぼくの、ユートピア小説さ」

彼は言った。

黒人に対する偏執的な関心、あるいは黒人コンプレックスとでもいうような性格が彼にあることは、以前から何かにつけて感じていた。町で逞しい黒人に行き会ふと、その場で足許に跪<sup>ひざま</sup>ずきたくなるとか、黒人があの厚い唇からチューインガムや唾を路上へ、ペツと



吐き出すのを見ると、それを甜めたい衝動で矢も楯もたまらなくなるとか、共同便所でたまたま黒人となり合い、その前へ飛び込みたい誘惑から逃がれるため、用の半ばでとび出したとか、そういった話は彼の口からよく聞いたが風変わりな冗談として以上に考えたことはなかった。ところが、現実にかうした作品を見せられ、そのあまりにもなまなましい描写に触れるに及び、私は自分の考えに自信が持てなくなった。

「それじゃ、今まで君は、みんな冗談だと思っていたのか。そうしたら、ずいぶん念の入った冗談だ」

色は白いが、艶のない顔で彼は笑った。年齢は多分、私より一つ二つ上の四十をちょっと出たぐらいだろう。私と同じアパートの独り暮らし、私のように妻と別居しているのか、それとも妻子などないのか、それは判らない。アパートでは変人扱いで、周囲からも彼の方からも親しく言葉を交わす者もないが、独り者同志の気易さからか、私とだけは奇妙に打ち解けて、お互いの部屋を往き来するようになった。とはいえ、その私にも、彼が何を職業としているのか、どこで生まれたのか、そんなことは何も判っていない。彼が死んだ

今となって、私は改めて彼については殆ど知らないことに気がついた。

彼の部屋の扉に「中村」と書いた紙が貼ってあったから、私は「中村さん」と呼んでいただけで、もちろんフルネームは知らないが『黒い恍惚』の表紙には「黒井春司」というペンネームが記してあった。

「これわかる？ 黒井春司——すなわち『黒いファルス』さ。ぼくの憧憬して己まぬもの——いわば象徴だ」

「正直にいわせてもらえば——」私は、思い切って言った。「君が理解出来ないよ」

「それは君が、黒人の価値を知らないということだ」

「価値」

「その通り。美しさの価値、力の価値、存在としての価値——黒人だけが、そのすべてを具えている。だから、かれらには凡ゆる権利がある。ぼくが、どんな屈辱や虐待にも喜んで堪えることが出来るのは、相手が黒人であるという理由からだ。つまり、価値の上で劣るもののそれが宿命であり、義務なんだ」

「すると、君の黒人に対する価値観は、今までの歴史の通念と全く逆なわけだな」

「今までの歴史は、白人の歴史だ。白人の作

った歴史が白人を優位に置くのは当然だが、しかし過去のいわば一方的歴史からだけそれを押しつけようとしても、現実にはもはやどうにもならない。古い歴史は崩壊しようとしている。新しい、本当の歴史は、これから始まるんだ」

「黒い革命による黒い支配者の時代——つまり君の作品のような現実が存在しうるというのかい」

「し得る、どころか、もう其処まで来ているじゃないか。君は、オリンピックの百メートルで、今までの人間の限界を突き破ったヘイズの爆発的エネルギーを見たらう。あれが黒人種の力を象徴するものだ。あの力の前には、白人もわれわれ黄色人種も、跪ずかなければならないんだ」

「しかし、それとこれとは……」

「いや、世界を征服するのは力だ。個人個人の持つエネルギーだ。永い間の支配的地位に安住して臍抜けになった白人には、もう世界を支配する権利も力もない。だが、黒人は、人類の歴史が始まって以来、いかなる時代にも被支配者として、あらゆる桎梏に泣きながらもそれに堪え、その間に、何ものにも負けぬあの恐るべき生命力とエネルギーをたくわ



え続けて来たんだ。かれらにはすでに、新しい「あるじ」としての力も充分だし、それを権利として主張する理由も立派に出来た。白人はすみやかに支配者の壇を降り、自ら被支配者となると同時に、数千年にわたる父祖の負債を償うべきだ。黒人がそうであったように、この贖罪も何代にもかけて行なわれることになろう」

彼の瞳が、こんなに生き生きと輝くのを、私はついぞ見たことがない。その魂はすでに「黒いユートピア」を彷徨しているのである。空間の一点をとらえた視線はしばらく瞬きもしなかったが、やがてその眼を私に戻すと、「ところで」と言った。

「君は、こんなことを想像したことがあるかい。ユートピアの世界では、支配階級は衣服など全く着けない。その必要がないんだ。いかなる華美な衣服も、あの磨き込んだブロンズのような漆黒の膚、造形美の極致ともいえるべき肉体、ことに美しさと猛々しさをあわせ持ち、その圧倒的生命力を象徴する雄大な芸術品の前には、何の価値もありはしない。そんなものは、奴隷どもの白や黄色い皮に覆われた醜い肉体を隠すためにだけしか存在しなくなる。地球上のいたるところが、白昼堂々

と雄姿を誇示した黒い肉体に満ちる。彼らは何時何処でも、路上であろうが、群衆の中であろうが、気が向けば好きな時に、その姿のまま白い奴隷に奉仕を命ずることが出来る。奴隷は、道ばたや公園に脆ずき、人目の中で彼らに、奉仕しなければならぬ。そのあと奴隷どもは、醜く興奮した自らの処理を、自分の手で行なわなければならない。白昼、しかも多勢の見物人の前で、だ。何と、素晴らしいとは思わなにかね。これこそ、ユートピアというものだ」

「だが、ほんとうに君は、そうありたいと希っているのかね」

「ありたいと希ってるって？　ぼくは現実には奴隷だったんだぜ。もっとも、その頃ぼくはまだ十七歳の少年だったが一個分隊の黒人兵に奉仕させられたんだ。サムという、大男の一等兵が、ぼくの主人だった。その時から、ぼくの中に変化が起こったんだ」

彼は初めて自分の過去の一部を、私に話してくれた。以下にその内容を、なるべく忠実に要約して、彼を理解する、いわば決定的な裏づけとしたい。文中「おれ」とあるのは、言うまでもなく彼自身である。

◇

感化院で終戦を迎えて、進軍キャンプのボーイになったのが、先刻もいった十七の時だった。十七歳といっても、小柄で生白いおれは、アメリカ兵の眼からは十四、五にしか見られず、「ボーイ、ボーイ」と可愛がられた。感化院の生活に慣れたおれには、まさに天国だった。と同時に、このぬくぬくした環境の中で、再びおれの盗癖が頭をもたげた。

すべてが破壊され、焼き尽された瓦礫の街に喘ぎ喘ぎ生きる日本人にとって、戦勝国のキャンプは、いわば宝の山だ。手をちょっと伸ばせば、欲しいものは何でもある。おれでなくても、餓えきった敗戦国民には誘惑が強すぎた。

酒保からひんぴんとして缶詰や食料が失くなったが、誰もおれを疑うものはなかった。その代りに、何人かの日本人傭員が誅首された。そういった犯行と結びつけるには、おれは、あまりにも稚く見えたのだろう。

おれは自信たっぷりだった。得意だった。ざまあ見ろと思った。毛唐の大人どもが、みんな阿呆に見えた。おれは、しだいに大胆になり盗むという行為自体に情熱を注ぐようになった。人前では常に無邪気な少年を装うことを忘れず、その隠れ蓑の下で、べろりと赤



い舌を出していたんだ。

だが、ある晩とうとう化けの皮を剥がされた。気がついた時、おれの手首はがちりと押えられていた。まるで鉄環を嵌められたように、たちまち手首の血行が停まり無感覚になったが、それが針金みたいな毛に蔽われた巨大な黒い手であることに気がつくまでにはしばらく時間がかった。おれの全身は凍りついたように硬直していたが、眼だけが、おれの前にそばだった厚い壁に沿って、震えながら上って行った。と、びっくりするほど高いところに、ぎらぎら光る両つの眼がおれを見下ろしていた。おれは、もう声も出なかった。万力まんりきのような力がおれの手首を押えていなかったら、おれは多分、立っていることも覚束なかったろう。

いつも白い歯を覗かせ、ジョークばかり飛ばしている黒人兵サムに、こんな獣のような恐ろしい貌が出来るとは想像もしなかった。これが、あの好人物で、おれをいちばん可愛がっていたサムと同一人とは、とても信じられなかった。

物凄い力が、有無を言わずおれを引っ張った。絶望感が心臓を締めつけ、おれは殆ど失神状態で、彼に引きずられて行った。

われに返った時、おれは自分の予想とは全く別の場所に居た。人気のない兵舎裏の一角にサムと向かい合った恰好で立っている、おれの手首は、もちろんまだ掴まれたままだ。おれは、新しい不安に全身が顫えた。

ちらと見上げると、サムの黒い顔に、ほんのわずかに白い歯が覗いた。それは、含羞はにかんだような表情だった。

突然、サムがおれの手首を引き寄せた。おれはそれがどういふことか直ぐには判らなかつた。が熱い痺れが去るとともに、やっと感覚を取り戻したおれの手は、あるものをはつきりと意識した。それは初めのうち鞣革なめしのように柔軟だったが、次第にその量感を増し、ついに、おれの掌では半分も包み得ないほどの巨大な柱となった。それと同時に、驚くような硬さと、恐るべき熱が伝わって来た。おれは、怖るおそ怖るおそそれを見た。その頃すでにオナニーの常習者だったおれにも、それは想像に絶したものだった。おれは、恐ろしさも恥しさも忘れて、むしろ讃嘆する気持ちになっていた。

盗みの現場を見つけられた代償としてサムは、奉仕をおれに命じたのだ。おれは盗みの罪もまぬがれ、臍首くびにもなら

なかった代りに、二度とサムから逃げる事が出来なくなった。

しばらくすると、このサムの秘密の愉しみは、同じ部隊に属する黒人仲間知れわたりその口を塞ぐために、彼は何人もの黒人兵を仲間引き入れた。おれは彼ら一人一人に対して、公平に奉仕しなければならなかつた。その人数はだんだんに増えて、ついには黒人ばかりで編成された一個分隊全部を相手にすることになった。おれは黒人兵一個分隊の全部の者を、唇と舌だけで識別できるほどになった。

こうした毎日が一年余り続いたあと、おれは大病に罹り永い入院生活をしなければならなかつたが、その間に進駐軍キャンプは解散になり、おれはそのまま解雇となった。

どうやら健康を回復して病院を出た時、おれが何よりも先に恋しく思ったのは、自分の馴れ親しんだあの黒いものの群れだった。唇を空しくひらいて、おれは彷徨った。だがそれからのおれには、あの気の遠くなるような機会はなかつた。

どうだね。これで納得してもらえるかい。



彼の話は、大体以上のようなものである。



## ルポ

## △異

## 常▽

## 予世場良三

先日のことだ。自己を無にして、黙々と廻り続ける機械よろしく、明日の糧のためのノルマに追われる一日を終え、わが家でようやくホッと、ささやかな主人面を取り戻し、小学四年の坊主とチャンネル協議を始めようとした。会社を定時に退けて、小遣いの乏しい時には、坊主の就寝時間までの一時間余りが、往々にしてフンソウの種になる危険性があるからである。この時間帯は坊主の主権下に属する関係で、子供に還って傍視出来る番組ならよし、さなくば居眠り時間にする必要上、協議、否、お伺いをたてるのが常だ。実にささやかな主人面である。

ところがこの日は異変が起こった。いつも当然の顔付でチャンネル指定をする坊主が「テレビはみない」と、少年週刊誌を提げて自分の机に引揚げたのである。

何か肩すかしを喰った感じで、画面の漫画を視ているうちに、小瓶一本のビールの酔いにグーグー。まことにささやかな主人面をして眠っていたらしいが、眼醒めた時には、すでに坊主は寢床に入り、テレビはわが女房どのの管理下にあった。

彼女、私の眼醒めをチラッと横眼で確認し、持って来ておいたらしい少年週刊誌と婦人倶楽部を私の前に押しやって、「これ見て」といったなり、ブラウン管のドラマに釘付け。坊主のマネをしるということらしい。こうなればささやかな主人面もあったものではない情勢で、いささかカッときた。やたら、たばこを吹きつけてやったが一向に応えない。

画面につづくの字が出たとたん。パチリとスイッチが管理者の手で切られた。そして私をはじめ、まともに見た彼女の眼が笑って「見た？」というなり口許が眼に従って笑いを浮かべた。別々に笑い出すのは彼女の特技だ。器用なことをする。

「まだ見てないの？」と坊主の週刊誌をパラパラやり出す。私はブスッとささやかな主人面をふくらせていたことだろう。内心ムカッとしてるから間違いはない。

「ホントにあるらしいのネ。この間のテレビ相談でもやってたし……」といいながら彼女はパラパラやってたが、「これ見て。子供にこんなの見せていい？」と開いた週刊誌を突き出した。私の「ムカッ」は一瞬

そして、彼は言った。

「見てくれ。話をしただけで、ぼくはこんなになっちまうんだ」

彼の指さした滑稽なほどの兆候を私は目撃した。

彼の話を信ずるか信じないかは別として、私にはこれ以上書くことがなくなったような気がする。彼に関してもはや、くどくどしい説明をするまでもなく、理解し得るほどの人にとっては、とくに私の使命は終わっていたともいえる。

いささか蛇足をつけ加えるなら、要するに彼の黒人コンプレックスは、終戦直後の米軍キャンプという特殊な環境の中で固着した。しかし、それ以後は、満たされぬ欲望が陰火のように彼の中でうずまき、それは出口を失って奥へ奥へと向かう。フロイド流に言えば彼のリピドーは外へ向かう代りに自分の内なる安住の地を求めて退行を繰り返し、そのリピドーの集積がついに別の世界をつくり上げた。△黒い恍惚▽の世界である。

自分を取り巻く現実世界とは別に、彼の中では、何時の間にか黒い革命が成就し、新しい支配者による恍惚の世界が開花していたのである。彼は、自分が望みさえすれば、好き



影をひそめた。『世界の残酷刑100』の見出しがとびこんできたからである。ギロチンの写真……と思う間に彼女の指が次をめくった。『背すじがおおる、恐怖の処刑』……私はそれを取り上げて頁をくった。

『これがゴウモンだ！』『残酷刑罰道具』『日本にあったゴウモンと刑罰』『世界のびっくり刑罰記録』『20世紀の残酷大処刑』『今もある死のリンチ』……各項目毎に写真や挿絵満載の特集である。十三頁に亘るこの記事は、血なまぐさく陰気である。

事実のことだろうが、私の『少年向き』イメージとは隔世の感があった。改めて表紙を見る『週刊少年サンデー・4月20日号』△小学館△私はそれを投げ出した。「アイツ、これがあったからテレビを……」「そうよ、一生懸命読んでたわ。いいの？」と彼女の眼が「親の子ね」という。器用なヤツだ。「ベツにどうってことあなからう……が、変わったもんだな子供向きも」「大人向き……あなた向きねッ」「もってのほか」という顔付きである。私向きとはどういうつもりだ？一言いわざるを得ない。「バカいふな。俺の趣味は残酷じゃないんだぜ。これはたしかに子供にはショッキンダだろうが、これと一緒に……」「わかったわ、じゃこれね」と、皆までいうなと

ばかりに彼女が『婦人倶楽部』△五月号△を叩いた。「今日届いたばかりよ」と又パラパラ。？だった私の眼に突きつけられた頁『なぜこんな異常性愛か？』ときた。小見出しに『サディスト・夫婦交換・ホモセックス』その赤裸々な実態の記録。パリと繰られた頁には『恐怖と興奮のなかで過した私の結婚生活』夫はサディストだった！……残念ながら私は、無意識に取り上げて読み出した。

『二首をしめられて』はじめてのときは、ほんとうにびっくりしました。……』

から始まる約三頁の26才という妻の告白手記である。K誌の小説を圧縮したようなズバリそのもの。私は思わず唸った。私の頭に一昨年のK誌上にあった『憎縄の記』がよぎった。続いて『ある夫婦交換のドラマ』『私が生きるホモの世界』と『ドキュメント特集』が並んでいる。気がついたら彼女はテレビの『ナイトショウ』に見入っていた。女房相手のプレイでは酔えないと考えないことにしている私の眼に彼女が新鮮に映った。こんなものを見せるからには、ひょっとして……と思ったのだが、彼女とはことごと自分の寢床へ行ってしまった。ささやかな主人面は仲々眠れずに困った一夜であった。これこそ異常というべきか？

な時にその世界へ没入し、みずから黄色い奴隷として生まれかわることが出来た。誰も知らない彼だけのユートピアは彼がひとりだけになり、自室のドアに鍵をかけさえすればよかった。

陰湿な空気にとざされた薄汚い密室こそ、彼を薔薇色に包む恍惚の世界であった。

その夜も彼は、一個の黄色い奴隷として生まれたままの姿を後ろ手に緊縛され、二人の黒人に前後から同時に襲われた。彼のリビドもまた、それとともに嵐のように昂まって行った。

たっぷり時間をかけて、その忘我の一瞬、彼は、からだのバランスを崩した。と口の中を満たしていたものが咽喉の奥まで突き込まれ、呼吸器を塞いだ。一度奥まで達した巨大な内容物はびくとも動かず、両腕を背中に括られた彼には、たちまち迫る窒息から逃れるすべはなかった。

短い間、彼は全身を海老のように反転させて、声のない苦悶を続けた。彼だけのユートピアは、彼だけの焦躁の場となつた。そして——彼は、死んだ。

——(了)——





レンズの中の女

# 十 人 十 色

第二話 ゆかりの巻

泉 野 薫

ある男性向週刊誌の『女学生のエロチシズム』という特集に、野獣派と呼ばれている作家がいろんなことをしゃべっていた。

曰く『長い袖、厚ぼったいスカートのヒダ黒いストッキング——それら見せまいとする魅力がすなわちセーラー服の持つセックス・アピールなのだ』

曰く『セーラー服とは、犯してはならない絶対のイメージ。だが、それをあえて犯すとき、この上もない緊張と、征服の歓喜がおと

ずれる』

曰く『セーラー服のコが、もし「どうぞ、ご自由に」と自分から脱いだとしたら、きっと、オレは萎えるだろう。彼女は抵抗しなければならぬ。泣き叫ばなくては値うちがな

いのだ』  
曰く『女学生を犯したいという欲望は、年齢をとるにつれて強くなる』

等々……

いちいち私にも覚えのあることである。ピンク映画はもとより、ブルーフィルムやY写真に登場する女性に、セーラー服姿が多いの

は、おそらくこの作家の言に多くの真実が含まれているせいなのだろう。Y写真などでは素っ裸になっってしまうと元もコもなくなるのであるうか、下半身は裸でも、上の方だけは御丁寧にセーラー服を着ているのは、むしろイジマしい。

縛り写真でもセーラー服姿というのは可成り多いが、「これは」と思うものにぶつかったことは、ただの一度もない。たいていは、あきらかにトウの立った職業的モデルと思われる女が、セーラー服を着せられて、ふてくされたように縛られているというだけのシロ



モノである。

近頃はモデル募集なんかやると、はたち前の若い女の子がずいぶん集まってくる。中には、堂々とセーラー服でやってくるのさえいる。ところが、そんなのに限ってとんでもないくわせもので、我々の抱いている女学生というイメージからははるかに遠い、ズベ公が大部分なのである。そんなやつに、

「どう、あたし女学生なのよ。すばらしいでしょう。こんなモデルなんてめったに手に入らないわよ」

なんて、押しつけがましい面をされると、あの野獣派作家でなくても、たちまち萎えてしまう。

私はべつに「制服の処女」崇拜者ではないが、それでもセーラー服の陰にかくされている肉体を、一度思う存分に被写体にしてみたい、という気持ちは持っている。この気持ちは、春先の温かさにくくらとふくらんだ木の芽を見ると、ついむしりとして、中にかくされているものを見たくなる——という欲望に通じているのかも知れないが、これまでのヌード写真には見られない、新しい女体の美を発見することができのではないか、という期待があるからである。

さて、マクラはこのくらいにして、私が後にも先にもただ一度だけ、真正銘の女学生のヌードに接した時の話をしよう。

ここでただひとつ残念なのは、私の場合には、あの野獣派作家が無上の快樂としていたように、彼女を無理やり剥いだのではなくて彼女の方から、すすんで脱いでくれたことである。もっともそれだからといって、私の場合は彼と違って、いっこうに萎えはしなかったのだが……

## 二

先日、新宿地下のpromナードをボンヤリ歩いていたら

「あら、泉野さんじゃありませんか……」

突然に、和服姿のしつとりと似合う美人に声をかけられた。振り向いて私は、こんな美しい若奥様に知り合いはなかった筈だが——と一瞬ボカンとなった。

「お忘れになって？ あたし……」

彼女がみずから名乗りをあげようとした直前、私の記憶カードがパツと探していたものをさし出してくれた。

「あ、これは……ゆかりさん」

「思い出してくださった？」

「いやあ……結婚されたってことは先生からお聞きしていたけど、こんなに綺麗になっていらっしやるとは……」

いったん記憶の糸がほぐれると、後から後へと、いろんな事が私の、脳裏に浮かんでくる。目の前の本人が、私の記憶に残っていたイメージと大分違っていることが、更にいろいろな感慨を呼び起こして、私たちがとある喫茶店に向かい合って坐るまで、ちょっと宙を歩いているような感じだった。

「あたし、そんなに変わりました？」

私のぶしつけな視線に耐えかねたように、彼女は頬を染めながら、私の方をまぶしげに見た。

「その言葉づかいからして、もうレッキとした奥様じゃないですか」

「あら……」

彼女は、急いでティカップを置いて、口に手を当てた。

ゆかりは、第二話にちょっと話したT先生の愛嬢で、昨年、とある青年実業家と熱烈な恋愛の末に結ばれたのである。T先生の仕事柄、相手方ははじめ、かなり結婚には難色を示したらしいのであるが、本人同士の結び付きの深さが、そういった難関を切り崩したの



である。

今の彼女のしあわせそうな様子から推して結婚生活はうまくいっているらしい。私は心からその事を祝福した。

(それにしても……)

と、私は彼女のアップに結い上げて、すっきりと襟元から伸びているうなじのあたりの臍(へそ)つけた匂いに見とれながら、感慨を重ねていた。

(女とはこんなにも変わるものか……)

女が相手の男によって、どのようにでも変わるということを知らない私ではないが、ゆかりの場合は、特別な感慨がある。

「いやですわ、そんなに御覧なさっては」

「ごめんなさい。ついカメラマンの悪いクセが出てしまった」

「泉野さんは少しもお変わりになっっていないんじゃないのね。そのジロジロ人を御覧になるのだって……」

「ははは。これがなくなったら、カメラマンとしては一巻の終りですからね」

心の中を見すかされては——と、私はことさらに大きく笑って見せたが、彼女はすでに感づいていたらしい。

「わかっていましたよ。あの時のあたしと引

きくらべていらっしやるのでしょ？」

ゆかりの瞳に、羞じらうような、それでいて挑戦するような光が動いた。

「全然——と言えば嘘になるな。いや、正直言って、ぼくの脳裏にあるゆかりさんといえ、ほとんどあれだけですからね。そのイメージが、こうもみごとに打ち破られて、それで驚いたり戸惑ったり、ウロウロしているとこるなんですよ」

「あたしのいちばん羞ずかしい姿を、いちばん見られたくない人——女のベテランに見られちゃった、というわけね」

ちよっと、はすっぱな言い方をして、恨むように私を見る。

「でも、こうしてお会した以上は、逃げもかくれも致しません。どうぞ、縦からでも横からでも御覧になって」

羞恥を押しやって、シャンと体を起こしたところには、やはり人妻としての落着きと自信があふれている。

私は、心もち上気した頬に軽く揶揄するような微笑をたたえたゆかりの正面きった顔をあらためて眺めやりながら、アップの髪をお下げに、小紋の和服を紺のセーラー服にと置きかえていった……

### 三

もう何年前の事になるか、たしかゆかりが高校二年か三年の時の事だったと思う。夕方五時頃だしぬけにやって来た。学校帰りなのか、セーラー服に鞆を下げている。

「どうしたの？ 何か急用でも……？」

これまでにない事なので驚いた私は、前に立ちあがるようにした。応接間には女学生に見られては、都合の悪い写真がいっぱいにあるのだ。

ところが、ゆかりは私の質問にロクに返事もせず、

「入っていいでしょ？」

さっさと入ろうとする。

こうなっては仕方がない。私は度胸をきめた。

応接間に入ったゆかりは、来客の殆どの例にもれず、例のヌード写真にシゲシゲと見入っている。

(なるほど、さすがにT先生のお仕込みのことだけあるわい)

女学生らしからぬ、その物怖じしない度胸に安堵もし、やや物足りなく思いながら紅茶の仕度をした。



「やっぱり想像していた通りだったわ」

しばらくして、ゆかりが最初に口にした言葉がこれだった。

「何が？」

「パパの話から想像して、泉野さんの所へ行けば、こんな写真が沢山あるだろうと思っていたの」

「へエ、お父さんとそんな話をする事があ  
るの？」

「パパは何もかくさないわ」

「フーン……」

風俗研究家のT先生のお宅には、年頃の娘に最も見せたくないような種類のものがハンランしている。下手な隠し方をするより野放しにしておいた方がかえっていいのかもしれない。

「でも、さすがに泉野さんのとこの写真は、  
パパの所にあるのより美しいわ。ゲージュツ  
的なのね」

それはそうだろう。いくら歌麿の春画が芸術的にすぐれたものであっても、無垢な女学生の眼にはグロテスクなものにうつるに違いない。しかし、そうやって坐っているゆかりの様子を見ると、平気をよそおってはい  
るものの、やはり内心は落着かないらしい様

子である。先細の白い指を組み合わせたり解いたり。つややかな頬にも、心なしか血が昇っているようだ。

「ところで今日はとつぜんにどうしたの？」

「用事でも？」

急な訪問の意図を解しかねて、私はも一度きいた。

ゆかりは、ドキッとしたように体を硬くした。指を固く組み合わせて、何かを決心するように唇を噛みしめた。

「写真を撮ってほしい……」

さしうつつむいて、小さな声で言った。

私はしばらく声もなく、胸元でふるふるふるえているお下げの先を見つめていた。

「撮るのはいいが、まさかヌードを、ってえ  
のじゃないだろうね」

「ヌード……くくって……」

私は即座にことわるべきだったのだろう。

しかし、頬を燃えたたせてうなだれたまま、蚊の鳴くような声で言うその風情を見ているうちに、私は悪魔にとらえられてしまった。いた。

「なぜ？」

とバカな質問をしたのは、うしろめたさを見ずからに隠すためであった。

「聞かないで……おねがい。でも、パパには  
ないしょよ」

「勿論だけれど……でも、そんなことしてい  
いのかな？」

「いいんです。あたし、もう大人よ」

思いつめたようにあげた瞳には、意外にも涙の玉が光っていた。私の胸はだらしなくもその表情の美しさに更に燃えあがったのである。……

「さぞ、はすっぱでみだらな女だと思いに  
なったでしょう」

眼の前のゆかりは、白い陶器のように輝くなめらかな頬をこちらに向けたまま、小さく言った。

「いや。どっちかというところ、なにか崇高なもの  
のさえ感じましたよ。みだらなのはこちらの  
方だったかも知れません」

「泉野さんは御立派でしたわ。芸術家とはこ  
んなものなんだな……って……あんな事を軽々  
しく申し出たあたしが羞ずかしくなりました  
もの」

「それこそ買いかぶりというものですよ。で  
もわからないなあ、ナルシズムにしては度  
が過ぎているようだったし……」



「ナルシズム？……そうですね。そんな甘えた気持ちもたしかにあったようでしたわでも……」

私の方に向けられた眼には、当時の娘らしい心を静かになつかしむ光があった。

## 四

衝立の陰から、胸をかき抱くようにして、現れたゆかりの姿は、たしかにすばらしかった。女の裸を見なれてる私をさえ、ハッとさせる程度に美しかった。

女が処女かどうかを見分けることは、女性専科の写真家にとっては朝飯前の事で、これまでも処女のモデルには数多く接したことがある私だったが、ゆかりはそれらのモデルの誰とも違っていた。

年令の若さ、育ちの良さ、まったくの素人であること、女学生でセーラー服をたった今脱いだばかりという意識、お下げ、さすがに脱げなかったのか身につけている純白のシンプルなパンティ——これらのものがまじり合って、これまでに感じた事のない美しさを感じたのかも知れない。

しかし、なんといっても、子供と大人の中間にある肉体の持つ一種独特な美しさ、奥歯

がうずいてくるようなういしい羞じらいを全身で発散している肉体の美しさ——これが私を魅了してしまった。

何の前置きもしないで、私はその胸を抱いた彼女の、羞じらいのポーズを数枚撮った。「羞じらい」と題すれば、それだけで絵になるだろう。

「パンティは取らないの？」

「……」

真っ赤になった。

「取ったほうが、ずっと美しいヌードになるんだがな」

「でも……」

言われただけで、素っ裸にされたかのように、膝をこすり合わせて、今にもしゃがみ込まんばかりである。

「じゃ、そのままでもいいよ。ちょっとしろを向いて」

救われたように後ろ向きになった。小さなパンティが、さすがに女らしく横に張ったヒップをピッチリとおおっている。ウエストのくびれが素晴らしい。

お下げを結んだりボンと白い背中の対照をねらって、幾枚か撮る。

「本当に縛ってもいいんだね？」

いつもはやらない事なのだが、今度に限って、あらためて念を押した。

ややためらってから、ゆかりはコクリとうなずいた。

イエスを取った以上は、へんにためらってはかえってまずい。むしろ手荒にあつかうほうが、自分自身にフンギリをつけさせる意味でいいのだ。

私はロープを手にとると、背後からさっさと近寄って、ゆかりの二の腕を掴むなりグイと引き寄せた。

「来たまえ」

「あ、乱暴にしないで……」

たたらを踏むのもかまわずに、グイグイと引きずるようにして、ベッドの上に突き飛ばしてやった。

「いやよ、いや」

ころがって逃げそうになるのを膝でおさえつけ、腕を逆手にねじり上げた。ゆかりはおおげさな悲鳴をあげた。

「すすんで縛られようと言った以上は、我慢するんだな」

冷たく突き放しておいて、手早く縄をさばいて行った。

口ではそう言ったものの、私の内心はかな



り興奮していたのを、かくすわけにはいかな  
い。ロープをあつかう手が、ぶるぶるとふる  
えてこまった。若い肌の持つ温かな弾力がそ  
うさせるのだ。

後ろ手に交錯させた手首を縛り合わせてか  
ら、縄を胸にまわすために、ゆかりの体を仰  
向けにした。

「ああ……かんにんして……」

固く眼をつむって、ゆかりは真っ赤になっ  
た頬を振った。

かぶりつきたくなるほど美しい乳房であっ  
た。内からどうしようもなく盛り上がったく  
る青春の芽吹きが、そのまま形をとったよう  
なういういしさ。桜色の頂点の信じられない  
ほどの小ささにも胸を打たれた。

その固い盛り上がりの上と下に、型通り縄  
をかけ終って、私は額の汗を拭いた。ゆかり  
は体をねじるようにしてベッドの上に突っ伏  
している。たおやかな肩が喘ぎ、まるで慟哭  
しているように見える。

「顔をあげて」

「いやッ」

「撮れないじゃないか。さあ……」

しゃべりながら、私は長尺レリーズをセッ  
トした。

「強情を張るんなら、腕づくでもやるぞ」  
縄尻を掴んで引きずり起こす。

「いや、いやッ……やめてッ……」

引き起こした肩を抱きすくめるようにして  
カメラに向ける。

「やめてッたらァ……」

のけぞる。肩に頬を押しつけるようにして  
顔をそむける。お下げを引っ張ってそれを引  
きもどす。

まるで格闘であった。

しかし、その間にも、私はシャッターを押  
すことを忘れなかった。ゆかりの流す汗の匂  
いに包まれたようになりながら、なおもカメ  
ラマンとしての理性を保つことは、なかなか  
困難な作業ではあったが……

一段落つけて、私は再びゆかりを突き放し  
た。白いパンティに覆われた部分が私の眼の  
前でうねっていた。

「よーし」

我と我が心にフンギリをつけさせて、いつ  
きに剥ぎ降ろした。

「あッ、だめよ、いや、いやッ」

バタバタやってもおそかった。

「あんまりダダをこねるからさ」

顔をそむけ、俯伏せになって羞ずかしがっ

ているところを撮る。

「さあ、もうこうなったら逃げも隠れもでき  
ないんだよ」

仰向けにしようとして腕に力をこめたら、  
意外にもゆかりは、とたんに体から力を抜い  
て抵抗を見せなかった。

白い肌に、あるかなきかの陰を落とした翳  
りはいたいたしくさえあった。が、私を打っ  
たのはそれよりも、仰向けに向けられた瞳が  
何か遠くのを追うように光を失い、やが  
て眼尻から涙の玉がひとしずくこぼれ落ちた  
ことであった。

「どうしたの？」

私は思わずドキリとなって、ゆかりの顔を  
のぞき込んだ。

ゆかりは答えず、瞳さえ動かない。

あきらめて、私は離れた。氣にくわないポ  
ーズだったが、おいしいような気がして二、三  
枚撮った。

「終りにしようか」

死んでしまったゆかりの肌に、私は急速に  
興味を失っていたのだ。これはカメラマンの  
エゴイズムであった。

「ね、泉野さん」

天井を向いたまま、つぶやくようにゆかり



が声をかけた。

「え、なに？」

「あのう……ゆかりのおしり……ぶってくだ  
さらない？」

「ぶてだって？」

「ええ……ぶってぶって、おもいきり泣き叫  
ばして」

「正気なんだろうね」

「正気でなくなりたいの」

私はなにがなんだか、わけがわからなくな  
って来た。

（まさか、この娘、本当のマゾなんじゃある  
まいな）

そんなことさえ考えた。と同時に、なんだ  
かこちらがなぶられていいるような、いまいま  
しささえ覚えはじめた。

「よし、ぶってやる。後でカンニンしてな  
んて頼んでも知らないぞ」

「お、おねがい……」

## 五

ゆかりは後ろ手をしっかり握りしめ、から  
だを俯伏せにまっすぐ伸ばしていた。ぶたれ  
る体勢をとったと見えた。

私はその足首をロープで縛り合わせ、あま

った縄尻を巻き上げて、太腿のあたりまでし  
っかと閉じ合わせさせた。

「ぶって……」と言ってからは、ゆかりの肌  
に再び生気がよみがえっていたのだが、私は  
もはやカメラをのぞく心の余裕を持たなかつ  
た。足を縛り合わせたのは、鞭打ちの苦痛で  
彼女の脚が広がるのを防ぐためであった。も  
しそんな乱れたポーズを見せられたら、どん  
な心を起さないともし限らない。私は自信を  
失っていた。

固く引き締められた白い双丘が、誘うよう  
に眼の前にあった。まっすぐな背すじのくぼ  
みが消えるあたりに、ふたつのえくぼが軽い  
陰を作り、そこを横切ってパンティのゴム跡  
が薄紅に残っている。

引き締められた肉が、緊張に耐えかねたよ  
うに、ふとゆるみ、また引き締まる。

「ね、見てないで、はやくウ……」

呻くように、ゆかりはうながした。

ぶってと言われた瞬間から、私は平手で打  
つ気持ちはなかった。掌とはいえ肌と肌との  
接触は、どのような迷いを生じさせないとも  
限らないからだ。

いかにもたおやかではあるが、この若々し  
い弾力に満ちた肌には、革鞭のさわやかな響

きこそ、ふさわしい。

私はベルトを引き抜いて、右手にしっかりと  
握りしめた。

ピシッ

思い切り、たたきつけた。

「ヒューッ……」

ピクンと跳ねる丘へ向かって、第二撃をふ  
りかぶる。

ピシリ

「い、いたッ……」

ゆかりの背中中、お下げ髪が躍る。ピクン  
とのけぞったうつ伏せの体は、本能的に身を  
しごろうとするらしく腰をうごめかす。だが  
手足のいましめが、それをゆるさないの  
で、奇妙な芋虫を思わせる屈伸運動に終ってしま  
う。

ピシリッ

「ヒッ……」

ゆかりはシートをきりきり噛みしめる。固  
く握りしめられた双の手が、いましめの中で  
苦痛をこらえている。

ピシッ

ねらいがそれて太股にベルトがはじけた。  
最も敏感な個所だ。大きく呻いたゆかりは身  
をくの字に折り曲げた。



「どうだ、もうこりたろう」

「お、お尻ばかり、いや……」

「尻以外の所が、このベルトに耐えられると思うのか」

「痛くてもかまわない。なんでもいいの……」

「めちやくちゃにして」

かぼそい肩を喘がせながら、睫毛を伏せたまま、ゆかりは言い放った。

今日感じた三度目の驚きであった。

（めちやくちゃにしるだって？ このおれに奪われたいというのか？）

爆発しそうな激情をかううじておさえ得たのは、多分ゆかりがT先生の愛娘であるということと、ここでそんな行為に及んだら、完全に未成年婦女暴行罪になる、という分別からだった。

しかし、小娘にホンロウされているようなのが、またしてもシャクにさわった。

再び私は鞭を振りかぶった。ねじれた恰好で仰向けになっている腹へ、少し手心を加えて打ちおろす。

「い、痛いっ……」

白いのどを見せて、ゆかりは完全に仰向けにころがった。白く柔らかな腹に、みるみる赤い線が浮き上がる。

「どうだい。こんな調子で、おっぱいもぶたれたいのか？」

太腿の付け根にベルトを打ちおろして、更にのけぞりかえらせながらたずねる。

ゆかりはキリキリ唇を噛みしめたまま答えない。その幼い横顔は、どこか悲愴な殉教者を思わせる。

私はベルトを捨てた。そして、いきなりゆかりのからだに手をかけると、そのままごろりところがして、ベッドの端から床へ突き落としてやった。

「うッ」

呻くのもかまわず、背中に足を乗せて、踏みつける。グリグリもみしだく。可憐な乳房が床にひしゃげ、よほど苦しいのか、あごを突き出した恰好で、ゼイゼイのどを鳴らしている。

お下げを掴んで顔を引き起こす。起こしておいて、頬に平手打ちをくれる。

仰向けにして、汗ばんだ双のふくらみをねじ上げる。

「いやッ……いやッ……」

悲鳴をあげてのたうちながら、ゆかりは悶えぬいた。だが決してやめてくれとは言わなかった。

全身からあぶら汗が噴き出して、私の掌はヌルヌルすべった。かんばしい体臭が強くにおって、私を酔わせた。ゆかりの汗のにおいは、これまでの、どの女よりも甘く悩ましいようであった。

あぐら縛りのことを考えた。そんな恰好にからだを開かせることは、私がみずからに科したタブーを破ることになる。

が、今となっては、ゆかりにネをあげさせるためには、それ以外にはないように思えたのだ。

私は足のいましめを解き始めた。

「どうなさるの？」

さすがに不安げな瞳を向ける。

「御要望どうり、めちやくちゃにしてやるのさ」

ゆかりの瞳が、マジマジと私を見つめた。

それから、あきらめともふてくされとも思える動作で、頭をガクリとたおした。涙がまたあふれて来た。

「それだけは……ゆるして……」

ややあって、小さな声が、ほとんど、みずからにささやくように言った。

下肢の抵抗は全くなかったが、私の激情はゆかりの足首を手にしたところで、急速に後



退した。

「悪い子だ」

苦痛に似た名残りを感じながらも、私はその腿をピシヤリとやっただけで、突き放して立ち上がった。

いましめを解く間も、ゆかりはしのびやかに泣き続けていた。

再びセーラー服をキチンと身につけて、応接間の私の前にゆかりが現われたのは三十分後だった。その表情は美しく沈んでいた。丁度、今、眼の前にいるゆかりがそうであるように。

「ごめいわくを、おかけしました」

立ち上がった私に、ゆかりはていねいに頭を下げた。

「お茶でも飲んでから帰らない？」

「このまま帰ります」

そう言ってチラと上眼使いに私を見た。

その眼のうるんだ輝きが、最後の最後になって私の自制心を奪ったのだった。

自分でも信じられぬ動作で、私はゆかりを両腕の中に抱きしめていた。そして年甲斐もない情熱的なキスを、ゆかりの唇にくり返していたのである。

ゆかりの抵抗は全くなかった。いや、最後

には、私のうなじに腕をまわして、キスを返してくれさせたのだ。

キスを最後に、私とゆかりは、たったのひとこともかわさずにドアの向こうとこちらに分れたのであった。

## 六

先刻から、ゆかりは膝の上のバッグの口金をしきりにもてあそんでいる。

伏目になった睫毛がなめらかな頬に影を落とし、それが時折フルフルとゆらめく。

「写真は、結局おあげせずになってしまいましたね」

「夢からさめて見ますと、とても羞ずかしくて……」

睫毛の先端が、かすかなふるえを見せた。

「まだ大事にしまっておりすよ」

私はその一枚一枚をあらためて思い浮かべた。どのポーズも、ありありと記憶に残っている。

「お願いがあるのですけれど……」

ゆかりが、ふいと顔を起こした。

「なんですか？」

とっさのうちに、期待が盛り上がった。

「その写真を全部、ネガといっしょに、焼き

捨ててほしいんですの」

また縛ってくれと言うのではないかと、ひとりよがりの期待していた私は、完全に足をすくわれた形で、しばらくは返事もできなかった。

「そりゃあ、依頼主の要求とあれば、おっしゃる通りにしますけれど、おいしいなあ」

本音であった。

「本当ならネガともいただいて、あたしの方で処分しなければならいのでしようけれど処分する場所がないのです」

人妻となれば、そんな行為にさえ不自由をすることは理解できる。が、それだけではあるまい。おそらく現在の愛の巢へ、昔のいまわしい証拠物件を持ち込むことが、はばかれるのだろう。

「わかりました」

私は、あっさり承諾した。

「しかし……と言っては脅迫じみですが、是非お聞きしておきたいことがあるんです。いいですか？」

明敏なゆかりのことだから、私の質問の内容をとっさに推察したのだろう。ハッとしたようになったが、やがて

「はい」



決心したように、うなずいた。

「どうしてあんな気持ちになったんです？ 今でもあんな事が実際にあった事とは、信じられないくらいなんですよ」

ゆかりは、さしうつむいたまま、しばらく心の中を整理している様子だったが、やがてゆっくりと顔をあげた。その表情は崇高ともいえるほど清らかに澄んでいた。

「あの日は、あたし失恋した直後だったのです。学校の帰りに彼とデートして……そしてふられたのですわ。強情っ張りのあたしは、彼の前では涙も見せなかったのですけれど、つらくて……感情の整理がつかないままに、泉野さんのお宅に飛び込んだのです」

視線は私の方を向いているが、ゆかりは私よりずっと遠くの方を見つめていた。

「やはり父の娘だったのですわ。ふっと思いつかんのだのが、拷問されてのたうちまわっている女を描いた絵だったのです。あたしもあんなふうにめちゃくちゃにされて見たいと思いました。めちゃくちゃにされて、彼にさらわれたこのあたしを、捨ててしまいたかったのです……」

「そうでしたか」

私はやたらに煙草の煙を吹き上げていた。

今にして思い当る。

あの奇怪ともいえるゆかりの態度、涙、殉教者のような表情。そして最後の一線だけは守ろうとした心根……それは彼女を捨てた男に対する未練であったのだ。

「あんなに我儘で世間知らずの事をしていながら、泉野さんにその後何のおわびもせず、本当に申しわけございませんでした」

「いや、おわびなんて……カメラマンなんて常に役得でソンなんかすることのない人種なんですから」

軽々しく言ってしまったって、シマッタと口をおさえたがおそかった。しかし、ゆかりは寛大な微笑を返して、

「いいえ、泉野さんは御立派でしたわ。あたし、あの時……」

パツと紅が白磁の頬に散った。

「あの時……どうされてもいいと思っていました。泉野さんなら……」

「言っただけじゃありませんよ。こんな男ですからね。のぼせあがることは眼に見えています」

「泉野さんて、ほんとに優しい方なのね」

ああ、またゆかりになぶられているな……

と思いつながらも、私は鼻の下の伸びを引きしめることができなかった。

フィルムを焼くことを重ねて私に誓わせ、ゆかりは立ち去って行った。その表情にも後姿にも、私のつけ込むスキをみじんも見せず……

ゆかりはもはや、あの時の感情の振幅に従って揺れ動く「制服の処女」ではなかった。身も心も捧げつくした夫君に、しっかとつなぎ止められた人妻なのだ。

(しかし……)

と私は縛り愛好者の負けおしみて考えた。(夫婦生活のちょっとした心のスキに、あの時の激しい経験が、彼女の胸をかき乱すことはないだろうか？)

だが、たとえそんな事があつたにしても、彼女を縛る男は私ではあるまい。

今、私はいささかの心残り、多くの自己満足の気持ちをもって、この事件をふり返っている。

心残りというのは、もちろんあの時、制服の処女を犯さずに終ったためである。そして自己満足というのも、制服の処女を犯さずに終ったからにはかならない。

△第三話 了▽

カット・豪城二



蛇責の図



文並

## — 体 験 記 —

## 女責図絵の系譜

文並カット 南 彦 造

いての解答であった。

概要をもっと詳しく説明すると、

大変ドラマティックであって興味津

々なので、未だに印象が強い。

だと云う。

NET「奈良和モーニングショー」(前8  
・30)——『佐賀潜の女の学校』で、異常な夫  
の行為に泣く妻」と題する、法律相談があっ  
た。

愛人の出来た夫が妻と離婚するため、町医  
者をそそのかして妻を精神病患者にでっち上  
げ離婚を迫る——そんな事件の法的問題につ

静岡県浜松市に住む某中年の人妻からの  
訴えであるが、何時ものように被害者の姿は  
クモリ硝子を通して眺められる程度の正確さ  
なので、その美醜の度合、スタイルなどにつ  
いてはピンボケ写真よろしく、じかに見えな  
いが、想像するにかなかなの美人奥様——。  
かけた黒眼鏡が一層プロフィールを神秘的に  
していた。その人妻は恋愛結婚。2児の母親

その奥さんが2児を出産してから8カ月め  
のある日——何時もだったら昼間などめった  
に帰宅したことのない夫が、突然町医者と看  
護婦を伴い帰ると、いきなり奥さんに注射を  
打たせ、昏睡状態にして、そのまま精神病院  
へ運び込み、檻禁同様、独房に入れ、気がつ  
いた時には既に患者にされていた——という  
不思議な事件の真相を語った。  
そして佐賀先生の執拗な質問が奥さんと夫  
との私生活の内面を次第に浮き彫りにしてい  
った。



この夫婦は所謂——典型的なサドとマゾの愛好者で、最初のうちは嫌いだった夫の仕打ちにも、だんだん耐えられるようになり、いまでは苦痛とも思わなくなった——と奥さんは告白していた。

時には夫が妻を裸に剥いて縛り、手製の鞭で肌を打ち、その上で情欲を求めたこともあったと奥さんは恥かしげに答えた。

また近所や出入りの商店の人々とのインタビューがテープで録音されていたが……この奥さんは非常に泣き虫やで、おセンチ屋な処があり、ちょっとした刺激で涙をポロポロ流す性癖があった——とも語っていた。

隣近所の人々は、まさかこんなに酷いサディズム的行為が奥様に連日加えられていたとは夢にも知らず———そういえば、憐れみを乞うような悲鳴とか泣き声が時には聴こえていたようにも思うとか……隣人の無責任さを曝露した言葉なども収録されていた。

しかし、この奥さんは、どうしても別れたいと訴えた。佐賀先生は肉体がもたないから別れた方がよいのではないかと——と説いて居られた。

オブザーバーの飯田蝶子さんや辛馬師匠なども信じられないといった風情で、まじまじ

と奥様の姿を眺め、男の暴行に耐え抜いて来た中年女の意外に逞ましい肉付きのグラマー振りに魅入った感じであった。

○

中年の夫婦とか若くても夫婦が倦怠期に入ると、様々な趣向をこらした遊戯に耽らない限り性的欲望が遂げられないものである——とは識者の論だが、現実には生々しく実証させられた想いだった。

私の女責め図絵の系譜——も、ある種の欲求不満の爆発である……と嘲った友人もあつたが……確かに描写することによって爽快な気分になされた頃も何回かあった。確かにジエラシーの解消には役だつ——一種の自慰かも知れない。

最近の傾向として浮世絵ばかりだが、浮世絵の中でも陰画を摸写することによって、めきめき腕が上達していった(?)と云うある有名画家の若き日の想い出を……随筆で読んだことがあつたが、描写の消化法としての陰画の勉強などは、面白い逸話ではないだろうか。

思春の頃——誰でも体験することだが、性的な方向への欲望を、どう処理するか?——と云うと、ある者は運動へ。ある者は受験勉

強で……またある者は異性との直接交際で、理性的に処理したりしていったものであるが——そうした時代に於ては指導如何で悪くもなり良くもなっていた経験を考え合せると濫りに悪書追放などと叫ばずに、若者たちの理性の昂揚につとめることこそ肝要なのではないかと考える。

私たち大人にも、そうした危険な時代があったのだし、様々な体験を通じて現代に到った過程を振り返ってみれば、良導こそ大人の務めであると思うし、現実悪に眼を蔽い、遠避けようとすべきではないと思う。

○

さて、先程の奥さんの件であるが、奥さんは子供たちの将来もあり、ご自分としては最近は苦痛でもなく、むしろ耐えられる状態にあるので「離婚」はしたくないと云う。

こうした異常な夫婦生活も馴れれば倅せに変えることが出来るのか(?)と貴重な解答も知つたし、可能なる限り、こうした夫にかえるのも妻としての自覚次第ではないかとと思考する次第であった。私の遠い記憶にもこんな例があつた。

太平洋戦争の始まった頃であった。私は父母の郷里に近い筑波山麓のK中学校で最後の



学窓生活に励んでいた。

私の家の家主は土地切つての素封家。その離れを借りていたので、中庭続きの、その先に家主さんの本宅が見え、離れ——といっても私の家は8・6・5・4.5畳の4室と、湯殿勝手つきの相当広い建前であった。

家主さんの老夫婦には、家つき娘に養子をとった若夫婦があり、典型的な女系家族であった。

若奥さんは愛子さんと云い、女学校時代はテニスの選手だったとか——1メートル68センチの見事な体格に比例したヒップの厚みが青年期に入ろうとする当時の私の眼には眩しかった。

彼女は、夕暮になると本宅に隣接した湯殿に、井戸のポンプで水を汲み上げるのであるが、家の中にあるのではなく、独立した一戸だての贅沢な湯殿であったから、汲み上げが一仕事であった。

湯殿へひいた長いトイで井戸水を流し込むのであるが、私の勉強部屋からは、その姿がよく見えた。

ちょうど窓の先の中庭に庭木を距てて望み見ることが出来たからだった。

何時も100回から150回はポンプの柄を上下さ

せねば、風呂水が一杯にはならなかった。彼女は、私の見える場所で白い二の腕まで見えるタスキをかけ、着物の裾をはしよって白いネルの湯もじを覗かせ乍ら、両腕を上下させた。

背後から眺める私の眼には、いやがおうでも見事にくびれた彼女のヒップが、円々と盛り上り脹らんだり縮んだりして律動的な運動を繰り返し、前後に体を屈曲させるのであった。それは美容体操的な美しい運動であり、肉体の線が鮮かであった。

私は彼女の此のポーズが好きであった。そして楽しい日課となった。

○

夕刻、若旦那が勤めの小学校から帰ると、彼女は早速、湯加減を見に来る。熱さを調節して、若旦那を迎えるのであるが、そこはよくしたもので女系統の家だから女上位の生活だけに、何事も奥さんの指図どおりに従うのであった。

だが、一ツだけ不思議なのは、若旦那に続いて湯殿に入った奥さんが、なかなか姿を現わさないことであった。

暫くたってようやく彼女は、乱れた髪を掻き上げ掻き上げ、湯殿から出てきた。肌襦袢

姿で、再び井戸水を汲み上げ、湯加減を合せる。濡れた肌にピツタリと喰い入った襦袢が妙な曲線を露骨に見せて彼女のヒップを生まされた尽の姿同様にしていた。

彼女は再び湯殿に戻る。すると彼女独特の華やいだ嬌声がまた流れ始めたのであった。いったい何事が行われていたのか？ 当時の私は知る由もなかったが、今、想い出すに多分にアブストラクティックな行為が行われていたのは事実であっただろう。アブノーマルと云う言葉を知ったのも、終戦後の昭和二十一年頃であったから……。

○

そんな夏も終りの頃——私は昆虫採集の蟬とりで、湯殿の裏側に出た。足音を忍ばせ湯殿の軒を見上げると、居た居た、油蟬が一匹タル木の先にしがみつこうようにとまっているではないか？ 私が静かに近づくと蟬はピュッと小水を私の頬にかけて飛び去る。

もう一匹——と思い、裏戸に近づくと、意外に明るい湯殿の中から微かに喘ぐ女の吐息が洩れるのに気づいた。

私は好奇心に駆られ節穴をさがした。湯殿は羽目板が厳重で節穴一ツない無節の桧材だったから覗ける隙間など無かった。苦心する



うちに私は長いトイが湯殿に続く辺りに、わずかに空を見だし、吸いよるように眼を近づけた。

すると、どうであろう——午後の陽ざしの明るい流し場で若旦那が三助の風情よろしく若奥さんの背中を亀の子たわしで、ゴシゴシとマッサージしているではないか。

若奥さんの背中には真赤に染まり、血液が浮いて痛々しく感じられたが、それでも「もっと……もっと……強く……」と要求していた。

若旦那は命じられる俚に、二の腕から太腿の辺りまで一心になって擦り続ける。そのたびに若奥さんは眼を細め、痛々しい肌になっているのにもかかわらず、気持よげに吐息を洩らしているのである。若旦那さんは疲れた腕に力をこめ、それでも嬉しうであった。

お二人の仲は何時も円満で、隣近所でも羨むほどであったが、こうした秘密の楽しみがあるうとは……私も初めてかい間みた男女の遊戯に暫し呆然たる想いで、二人の美技に魅入ったのであった。

○

それからと云うものは、お二人が湯殿に消えると勉強も落着かなくなり、そっと部屋を抜け出しては、秘密の美技に耽るお二人の姿

を拝見した次第。

その中に若旦那は、召集で戦争に行ってしまった。

私は若旦那なき後の彼女の私生活に興味を持ったが、銃後の婦人らしく浮いた噂もなく老夫婦につかえ、交わる処はなかった。

その頃になると、二軒で別々にお風呂をわかしは勿体ないというので、お隣りへ貰い風呂をするようになった。何事も節約の時代になり、燃料も折半ですむわけで、お互いに好都合だったのである。

私は当時、絵が好きで美術学校を志望して居り、県の展覧会などにも数回、入選などでもしたが、いずれも風景画とか静物が多く、人体のデッサンなどには思いも及ばない若さであったが、何時しかルノアールやドガのように美しい色彩やタッチで女体の神秘を描きたい——と願うようになっていた。

幸い眼の前に、見事なモデルにもなりかねない御婦人が、独り身をかこっていたのだから、何とかして頼み込み、モデルになって貰おうと画策したものであった。

そう思いこんで狙っていると、チャンスは生まれるものである。私が庭先に画架を据え草花の描写に耽っていると「お上手ね！」と

いう優しい女性の声がした。隣の若奥さんである。若奥さんはじっと私のスチッチをみつめて居たが、細いしなやかな指先で「此処をもう少し青くしたら……どうかしら？」とか「この辺の葉の線が太すぎる」とか……微に入り細をうたがって熱心に指導してくれる。訊けば、やっぱり絵が好きで、日本画は東京のG画伯の本格的指導もうけたとか……なかなか造詣も深く、早速、意気投合して終わったのである。

私は、若奥さんの私室へ案内された。そこで見たのは、女性の部屋には、珍しい「裸婦像」の額入り油絵であった。出征した若旦那さんが、最後の名残りに若奥さんの絵姿を残して行ったとか。しかも若旦那様愛用の画道具一切がその俚である。若奥さんは夫の代りに私に使うて貰えたら……と云うのだった。

しかし私は、思いがけない高価な道具のプレゼントよりも、見事な裸婦像の女性的な線の魅力にとり憑かれていた。

「そんなに見つめては、いやよ！」

意外に恥らいを含んだ嬌声に、我に返った私は初めて彼女の機微にふれる想いがした。女の含羞ほど男心を引きつけるものはない。私は生々しい湯殿での印象的な痴態と照らし



合せ年はない恋情をおぼえたのだった。

○

「おばさん！お願いだからモデルになって下さい！」

「モデルに……？ いやよ！ 裸なんて！」

卒直な叱責の聲が、彼女の口から洩れた。

裸？——と云ふ言葉が、私の意馬心猿を大胆にした。

「ね……お願いします！」

私は必死で哀願した。

「いけない人……」

彼女は暫く悩む様子だったが、私は此処で弱気になってはいけないと思った。もうこんな良いチャンスは二度と来ないのではないかと思われた。

「お風呂の時間だわ！」

と彼女は立上って、「いらっしゃいよ」と促した。私は彼女の背後に従った。すると彼女は

「お風呂場で……待っていてね」

と優しく云った。私は急に恥かしくなり部屋から出ようとする、彼女は、私の耳に唇をよせて「困った人……」と囁き「たった……一回だけよ……」と念を押すのだった。私は彼女の意外に熱っぽい眼ざしに心の高鳴りを覚えた。

を覚えた。

「でも、私の云う通りに……するのよ……」

と彼女は命令口調で云った。

「私の主人は……奴隷よ……すべて……私の云う通りなの……わかって？」

私は素直に頷いた。この際は頷かない限り望みが達せられまい、と思ったからだ。のも確かだが、それよりも強い何かがあった。

「では……あなたも裸になるのよ。奴隷が裸の女王様の前で着たままでいるなんて、失礼よ。……ずるい！」

彼女は怨む眼ざしだった。私は蛇に見込まれた蛙——といったムードではなく、甘酸っぱい彼女の魅惑に引摺られて、おどおどしながらも裸になった。

「私を脱がせて！」

彼女は女上位の家系らしく、男の扱いは乱暴だった。私は馴れぬ手つきで、彼女の帯に手をかけた。

「此処から……解くのよ！」

彼女は帯止めをとり丸帯を落とし、しごきをほどきに掛かった。私は呆然として、その艶めかしい動作の鮮かさと、その雰囲気酔い痺れる想いだった。

最後のものが、するりと畳の上に落ちると

彼女は、さすがに身を縮めて蹲った。

私は「あッ」と呼吸を呑んだ。白光の塊りのような裸体が私の前にあった。それは、かつて湯殿でかい間みたものとは、凡そかけ離れた、素晴らしい女体であった。若旦那さんが出征してから十数カ月間——孤閨を守り続けてきた、これが銃後婦人の神聖なる女体であったのだ。——円やかな肢体のすべてが生々とした強さで、此方に挑み掛ってくる想いであった。

私は言葉が出なかった。まともに見るのさえ、何か眩しい気がした。

「いやよ！ 見てばかりいないで何とか……云って」

彼女は気まり悪そうに脱いだ物を集めた。

「あんまり……おばさんが美しいもんだから吃驚りしちゃったんですよ」

「いやな人。そんなこと云うなら……もう着物、着るわよ」

「駄目ですよ」

「どんな……ポーズをとれば……いいの？」

彼女は誘惑するような眼つきで親愛の情を示してくれた。

「そうだなア……おばさんはお腹の辺りの感じが……とてもチャームングだから——」



「まあ酷いッ」

彼女は大笑に笑った。年下の男に対する気楽さが、そうさせるのか？

私は何時しか記憶に生々しい、通州事件のあの白足袋の女の残酷図を想い出していた。あの死体の妙齡の日本婦人の面影に、私は彼女のプロフィールが似ているように想えた。あの被害者の写真を見た時は、ショックであった。二、三回は食事も咽喉を通らなかつたけれど……もしあの被害者が本当に彼女だった——としたら？ 想像するだけで胸の潰れる想いだった。

「ねエ……僕……凄い……写真を見たのさ」

「凄い写真って？」

「うん……戦地のおじさんだって……きっと……今頃……見ているかも知れないんだ」

私は昂奮を押えるため、わざと言葉尻を曲げて嘲笑するように云った。

「どんな……ポーズ……その写真？」

「縛っても……いい？」

彼女は私の言葉に驚いたらしいが、やや間をおいて、

「どうぞ！」

と頬を紅潮させて云った。

「支那事変が始まって間もなく、北支の通州

と云う街で、日本人が多勢殺されたんです。

男はともかく……女の人達は裸の儘、いろんな方法で支那人に殺されたんですよ！ なかでも酷かったのは……ねえ……こうして——」

と私は、おぼさんの二の腕を逆に折り、円い背中に押しつけ、左右の手首を合せて腰紐で強く縛った。

「それから、こう……なるんだ！」

と両方の足首も細引きで縛ると逆海老に背後で締め上げた。

「痛いッ！ 痛いじゃないの！」

とおぼさんは、のけ反った顔を苦しげに歪めて呻いた。

「我慢なさい。少しの……辛抱ですよ！」

私は屈曲の美を楽しむかのように、おぼさんの肥えた肉体を猶も執拗に締めつけた。

「分ったわよ。よく分ったから……もう……許して」

と、おぼさんは哀願した。

「駄目ですよ。我慢なさい！」

と私は自由にならないで藻掻いている、おぼさんの妙な形に昂奮し乍ら云った。

「駄目……駄目……もう……母さんが……帰ってくるわ！」

「だから……静かにして下さい！ すぐに……

……終るんですから……」

「じゃア早くしてね？」

「はいはい——」

私は生返事をして、次のポーズを考えた。やっと想いが叶った素晴らしいモデルを前にして、私は出来る限りの屈曲を試みた。ふだんだったら、どうしても見られない筋肉と筋肉との極端な引っぱり合いや、怒張の模様とか……骨格のある極限までの屈折度……開張の度合など——。

その一つ一つは私にとって、正に驚異に近いものであった。

私の想像をはるかに越える美がそこに現出したのだった。

いま迄、私が知りたくとも知り得なかつた女体の微妙な神秘を、この時初めて彼女のさまざまな姿態から学びとることが出来たのであった。その実験が、どれほど責め図絵の構想に役だったことか——。

彼女と私との秘密の交際は、やがて、私がK市を離れて上京するまで続けられた。サドとマゾ……それは人性の謎であり、古くて、常に新しい男女の悦楽であり、理性だけで解決出来ない命題でもあると思う。





店頭放談

政吉、栄子、善夫には、それぞれのお客がついていた。

若い工員やサラリーマンは、東京仕込みの善夫に最新流行の髪型に刈ってもらうのを楽しんだ。中年から老人達は政吉に時間をかけてゆっくりと世間話をしながらやってもらうのを好んだ。三十過ぎから中年の客は、栄子のお色気ムードを好んで、町にはまだ大きな理髪店があるにも拘わらず、遠くから足を運んでくるのだった。

「ほんとにおかみさんはきれいだよ。ポイン

連載 M 小説

ピエロ床屋

(5)

鬼<sup>き</sup>

山<sup>やま</sup>

絢<sup>けん</sup>

策<sup>さく</sup>

ポインとすごいグラマーだしさ。一生に一度でいいから、こういうひとと浮気してみたいな」

「浮気？ いいわね。いまはフリーセックスの時代だからね」

政吉と背中合わせに仕事をしながら、そういう冗談が平気で言えるムードを喜んでいる客もあった。

栄子は、たまに剃刀が滑って、客の顔にスーッと血がにじみ出ることがある。

「あらー」

と言って、指でちょっとおさえ、あとにメソタムをすりこんで、ごまかす。

「切った？」

——前号までのあらすじ——

斧田政吉(53) 栃木県大田原市で小さな理髪店を経営。48才で結婚し、家業に精出しているが、溺愛する妻の栄子の淫蕩と強圧に悩まされる。

斧田栄子(38) 30ぐらいにしか見えぬ美貌で57キロのグラマー。店の職人友市と関係したが喧嘩して追い出し、替りの職人を政吉の兄貴分、清太郎に身を委せて頼み、清太郎子飼いの職人富岡善夫を廻してもらい、何かと口説き落とそうと試みる。

富岡善夫(33) 好男子で腕がよく、しかも堅い男という評判。三カ月だけ政吉の店を手伝う約束で大田原へ来る。栄子の誘惑を、再三交しているが……。



「え？ いえ、ちょっとね。大丈夫ですよ」  
「もっと切ってもいいですよ。おかみさんみ  
たいな美人に切られるんだったら」

「あら、じゃザクツと切っちゃおうかな」

「いいですよ。その代り、そこを舐めて血を  
とめてよ」

「イヤだ。エッチ！ 妾、舐められるの好き  
だけど、舐めるのきらいよ」

「あ、舐められるの好き。さては、旦那さん  
舐めて可愛がってるな」

政吉は知らぬ顔で仕事を続けている。栄子  
の生まれた土地だけに、幼な友達もやってく  
る。そういう連中が、そばからひやかす。

「エイちゃんは、よくやらかすからな」

「あら、何を？」

「お客の顔へ、そそうするのさ」

「そそうって、なあに？ オシッコするの」

「冗談じゃねえ。顔へ、そんなそそうされち  
やたまらねえ。顔をよく切るってことさ」

「そんなこと、めったにないわよ」

「旦那と喧嘩をしたときなどに来たら、ひで  
えめにあうよ。客の顔に、あたり散らすんだ  
から。でも、いいんだよ。エイちゃんに一度  
や二度、切られなくちゃ、この店の常連とは  
言えねえからな」

「へエ、するてえと、ここのおかみさんはサ  
ジストなのかい」

「ばかやろ。女はサジストとは言わねえんだ  
よ。サジスチンと言うんだ」

「女のくせにサジスチンとは、これいかに」  
溜まりで待ってる客達と、かけ合いでワイ

ワイ騒いでいる。毎日聞いていると政吉は馴  
れっこになって何とも思わなくなっていた。

「だが、この善っちゃんをよく働くねえ。前  
の友さんと違ってまじめだねえ」

「ほんと。助かるんですよ」

その善夫の所だけが静かで、口もきかず、  
政吉夫婦二人分よりも早いスピードでお客を  
こなして行った。

## 密 通

その夜、政吉は組合に寄り合いがあって出  
かけて行った。

栄子にとっては絶好のチャンスだった。

二人で差し向いで食卓を囲み、栄子がすす  
める酒を、政吉のいない故か、善夫はいつも  
より楽な気分よく飲んだ。

「ねえ善っちゃん。旦那と約束した三カ月に  
もうあと幾日もないけど、帰るつもり？」

「サア……」

「こないなかにいるのはイヤなんでしょ」

「そうでもないです。のんきでいいから」

「ねえ、あんた。妾、嫌いな？」

膳をおしのけて、栄子は善夫の首に、あら  
わな二の腕を巻きつけた。前はこうすると、  
すぐ押しはなしたのだが、今夜は栄子の視線  
を避けて抱かれていた。

「ねえ、妾のこと好き？」

栄子は顔を近々ともって行き、ゆっくりと  
接吻した。善夫は身をふるわせて栄子を抱き  
口づけをかえしてきた。

「好きです。気が狂いそうになるほど好きで  
す！」

栄子は善夫を抱えたまま、仰向けに寝た。

「うれしい。妾も最初から好きで好きでたま  
らなかったのよ」

栄子は脚をからませながら、接吻を続けざ  
まにした。

「ね、妾を何とかして。ね」

「待って下さい、奥さん」

善夫は起き上って居ずまいを直した。  
「奥さん。これは単なる浮気ですか？」

栄子は返事に詰まって、善夫の顔を見上げ  
た。



「それとも、僕を引きとめるための策略ですか？」

「ひどいわ。善っちゃん、そんな風に思ってたの。妾はほんとに好きでたまらないのよ。妾、政吉と結婚したこと、いま後悔してるのよ。だって年が、あまり違いすぎるでしょ」

「でも旦那は心から奥さんを愛してますよ」「そりゃ分ってるけど、妾はいやなの。イヤでイヤでたまらないの」

「その不満を、僕で満たそうというわけですか？」

「そうじゃない、そうじゃないんだってば」  
栄子は狂わしく善夫にとびついて顔中にキスした。

「あんたが好きなの」

「僕も奥さんが好きです。しかし、道にはずれたことは、したくありません。東京の旦那と約束してきたし、申し訳が立ちません」

「そりゃ分ってるわ。でも、どうにもならないの、妾の気もち」

「僕もそうです。それで、いままで悩んできたんです、奥さん」

「奥さんと言うのやめてよ。栄子と呼んで」「栄子さん。僕と結婚してくれますか」

善夫の眼は燃えてひかった。栄子はそこま

で考えていなかったが、行きがかりであとにはひけなくなった。

「善夫さんは、そこまで真剣に妾を想ってくれてたのね。うれしわ。善夫さんがその気なら、妾、結婚するわよ」

「政吉さんと別れるんですね」

「別れるわ」

「栄子さん！」

その夜、二人は激しく結び合った。

情痴の嵐がすぎ去ったあと、善夫は

「僕、パチンコにでも行ってきます。しばらく旦那には、秘密にしておいた方がいいでしょう」

と、そそくさと出かけて行った。

政吉が酔っぱらって帰ったあとに、善夫は顔を見せた。

「五百円取られちゃいましたよ。ピース二つでね」

「ハハハ。高いピースだな」

政吉は、善夫が栄子と二人きりになるのを避けて外出したのだと思い、ほんとにいい男だと思った。

「ねえ、あんた。もうすぐ約束の三カ月が来るよ。善っちゃん、どうする気？」

「そうやなあ……」

「このまま黙ってたなら、清太郎さんは連れてっちゃうよ」

「替りをよこしてくれるだろう」

「だってインターン出たばかりの奴だろう。また友市みたいのだったら、どうするの。せ

つかく善っちゃんもなじんできたんだし、たとえ返すにしても、もう少し家で働いてもら

うように、東京へ行って清太郎さんに頼んでおいでよ」

「そうやなあ……」

政吉は何となく気が進まなかったが、栄子の言うことに正面きって反対する理由は何ひとつないから、栄子にしつこく言われると承知するよりなかった。

翌日は丁度、休みだったので政吉は、重い腰をあげて東京へ出かけて行った。善夫が釣りに行くと言って朝早くから出かけてしまっ

たのが、政吉を東京へ行きやすくした。

だが政吉が出かけてゆくとすぐ、善夫は戻ってきた。昼間から二人は、情痴の奔流に身を投じた。

閉めきった部屋が暑いので、いつしか二人

## 痛苦の分担



は動物となり、戯れ合っては休み、休んでは愛戯の限りをつくした。

「善っちゃん。あんた、妾と政吉といろんなことやったの見てたんだろ」

栄子は乳房を預けながら、思いきってすっぱぬいた。

「ウン、さんざ見せつけられたよ」

「ふ……イヤなひと！」

「だって、わざわざ見てくれと言わんばかりに戸を開けといたじゃないか」

「アハハ。じゃあ、あの妾のムダ毛を食べるところ見たの」

「ずいぶん、ひでえことするなあ。でも、あれだけ、あんたに惚れてるんだなあ、政吉さんは」

「へんたいなんだよ、あいつは」

「いや、そうじゃない。真底、惚れてるからなんだ」

「じゃああんた、妾の毛を食べると言ったら、食べてくれる？」

「ああ、食べるよ。僕だって栄子さんを好きな点では、政吉さんに負けない」

「じゃ、食べさせてやろうか」

善夫の眼が異様に鋭くなり、栄子がふと見ると、元気を急速に回復してきていた。

「冗談よ。好きなあんたに、あんなマネできやしないわ」

「イヤ、いいんだ。栄子さん、僕をいじめてくれ。僕は真剣な恋だと割りきったつもりだけど、やはり政吉さんに対して済まないという気が頭からはなれないんだ。その意味で、あなたが政吉さんに替って、僕を罰して下さい」

「あんな奴に、そんな気兼ねすることないじゃないの。どうせ別れるんだから」

「でも、それは政吉さんにとっては死ぬほど苦痛だ。僕もその苦痛の一半を担いたい」

「へんなひとねえ。どうすりゃいいの」

「僕を、栄子さんの美しい脚で踏みつけて下さい」

「頼まれりゃ越後から米つきにくるって言うからね。そうして欲しいならやってやるわ」

栄子はスツと立ち上った。善夫は腹這いになった。栄子の足がその背中を踏みつけた。

「もっと強く」

「こうなの……」

「もっと強く。もっと……ここも」

善夫は首筋を叩いた。栄子の足がその手を払いのけるように首筋へかかった。

「ああッ、ムッ」

「苦しい？」

栄子は、すぐ足をどかした。善夫はグルッと仰向けになった。疲れきったはずの善夫の肉体に、ムラムラと精気がみなぎっているのを栄子は目撃した。

そのまま栄子は善夫のその変化に我を忘れた。善夫は、いままでにない力を示したからだだった。

「あんた、ちょっと変わってんのね」

「変わってちゃ、悪い？」

「いいわよ。妾、そういうひと、好きなんだもん」

「それで安心した」

「あんた、妾が政吉にしていること、見たいんでしょ」

善夫はニヤリと笑ってうなずいた。

「あれが、あんたを刺戟したんじゃないの」

「女のくせに、そうズケズケと言うなよ」

「ふふ、図星をさされてテレてるわ。いいわ可愛い、あんたのためなら、何でもやってやるわよ」

## 女の智恵

栄子と善夫の肉体関係は急速に進んだ。



善夫は政吉に対しては、おくびにもその様子を見せないし、栄子との秘密のたのしみを非常に慎重に、政吉に気づかれぬように運んだ。だが栄子の方は、どうしても善夫に対する態度に変化が現われ、政吉は

「おかしい？」

と思ったが、栄子が前から善夫にモーションをかけていることは気づいていたし、それを石部金吉の善夫が受けつけないことも察していたから安心してたのだ。いや、安心というよりも政吉独特の性哲学で、それを疑い悩むことは自分を不幸にするものだ、善夫の道徳堅固な性格に信頼するのが一番よいのだという風に考えて、疑心がおきると我からそれを打ち消していた。

政吉が、善夫に絶対の信頼感をもたせるほど、それほど善夫の「演技」は巧妙だった。

政吉に対しては依然として「旦那々」と立てて、何でもハイハイと、よく言うことをきくし、政吉のいる前で不用意に見せる栄子の媚態は、明らかに拒否の態度を見せた。栄子も善夫から「気取られるな」と言われていたので、そのたびにハッと気がつくのだが、もともと栄子は政吉を見くびっていたし、

「分かるなら分かったっていい。こんな奴が

怒ったって、なにができるもんか！」

という気があるから、善夫の再三の注意も忘れがちだった。

二人の密通するチャンスは、きわめて少なかった。

一度、若い逞しい男の肉体を知った栄子はたえず思いきりそのエネルギーをむさぼりたかった。しかし政吉と善夫は朝から晩まで、寝るまで一緒なのだ。だが、そこは夫婦の間柄、栄子は政吉の盲点を発見した。

栄子と交わった夜は、さすがに年は争えず政吉は朝までグッスリ寝てしまい、朝もすぐ起きられぬくらいだった。

栄子はそのあと、ソツと二階に上って行った。それが政吉に気づかれぬ一番よい方法であると同時に、善夫がふたりの狂態を見たあとの昂奮が、栄子の身体に反応して二重の効果をもたらした。

「君っていう女は恐ろしい女だな」

「あら、どうして？」

「可哀想に、政吉クン半殺しの目にあわされて、息も絶え絶えじゃないか」

「アハハハ。情けない野郎さ。あのくらいでネをあげてやがるんだから。だから年よりはイヤなんだよ」

「僕だって、あれだけやられたらノビてるだろう。あんた、何キロぐらいある？」

「十五貫ぐらいかな。フフフ」

「たまらないよ。モロに乗っかられて、よくもちこたえてるなあ」

「何言ってるのさ。あんたが見て喜ぶだろうと思うから妾一生けんめいやってるんだよ」  
「嘘つけ。てめえでいい気持ちになって、結構、楽しんでるんだから」

「だってさ、クタクタになるまで責めつけてやらないと、こうしてここに来てるときに眼をさまされたら、まずいと思うからさ。そうだろう。妾は構わないんだけど、あんたが秘密にしろって言うから、妾はあんたに従ってやってるのよ」

「何でも恩に着せる女だな。まあまあ、そう思っときましょうよ」

「にくらしいッ！」

「痛ててッ。そんなにつねったら、あざになるじゃないか。実際、たまねえな。このひとにあつたら、野郎はみんな目茶苦茶にされるんだから。かまきりの牝だな」

「かまきりの牝で悪かったね。あんたも虐めてやろうか」

栄子は善夫の上にのしかかって身体を合わ



せたまま、両手で首を締めた。

「ウウッ、くる、しいッ」

こうすると、男の力がいつときいつとき強まってくることを、栄子は身体で感じとることができた。

「苦しい？ ごめんね」

「いいんだ。政吉さんだって苦しんでる。僕だって苦しい。その苦しみを同じように味わうのが僕の義務だ」

「でも、善っちゃん。それは、ひとりよがりだよ。妾は政吉の奴は本気になって虐めてやりたくなるから思いきり何でもできるけど、あんたには、ほんとはこんなことしたくないのよ。あんたがこうした方がいいから、仕方なくやってるんだよ」

「分かってるよ」

「あんな奴に何も義理立てすることなんかないのさ」

「君は、そう言える。それだけ彼につくしているからな。だが僕は、彼につくしてものは何もない。それで彼の一番大切なものを奪う結果になるんだからな」

「じゃ勝手に苦しむがいいわ。ホラ、こうしてやる」

焦れた栄子は善夫の首に血のにじむまで爪

をたてた。

## 悪夢

政吉は何とか逃がれ出ようと、手足を亀の子のようにもがいていた。

頭を巨大な足で踏みつけられ、もがいても暴れても、その足はずすことができない。

「あはははは……」

はるか上の方で、栄子が男のような太い声で笑う声がした。下を見下ろして得意になっている美しい顔が浮かんだ。

ふと見ると右手の傍に鉈が転がっていた。

政吉は、その鉈を握んだ。

すると別の足が、政吉の右手を踏みつけてきた。その足は頭を踏んでいる足とは全然、異質のものだった。

政吉は首を捻ってその足の持ち主を見上げた。友市だった。友市が、せせら笑いながら鉈を握んだ右手を、ギシギシと踏みにじっている。

政吉は怒った。

懸命に力をふり絞って足の下から右手を抜くと、その毛脛へザクリと斬りつけた。

足は、あっ気なくパッとちぎれた。斬られ

た足のまん中に骨が心棒の様に白く見えた。

驚愕する友市の顔！

そのまま友市の顔は闇に消えた。

「あははは、あははは」

それでも栄子は上でたのしそうに笑っている。政吉は起き上ろうとするが、どうしても起きられない。頭を踏んでいる足は、重いようでもあり、軽いようでもある。これほど強く踏まれているのに、苦しさを感じないのはどうしたことだろう。

また別の足が背中を踏みつけてきた。

これは重い、苦しい、誰の足だろう。

善夫の足だ。

栄子と善夫が政吉の上で何かささやき合っていて笑っている。

「畜生ッ！」

喉がかわいた。水が飲みたい。

顔ヘタラタラと何かたれてきた。

栄子と善夫がジョッキのビールをうまさうに飲み合っている。

「俺にも飲ましてくれ……」

だが、ふたりはビールを見せびらかして飲んでる。

「少しでいい。ひとたらしでもいい。飲ませてくれ」



善夫が何か下を見て罵っている。何を言っているのだから聞かぬ。

「そんなに飲みたきや飲ましてやらあ！」

やっと聞こえた、と思うと善夫が政吉の顔にビールをぶっつけた。政吉は頬を伝って流れるビールを舐めた。

にがい、しおからい。

政吉は喉の渇きに眼をさました。

反射的に隣の栄子の蒲団を見た。からだだった。そのとき、「あッ、ああ……」と悲鳴に似た栄子の声が、二階から聞こえた。

政吉は冷水を浴びたようにゾーッとした。手足がぶるぶるふるふるほどの憤怒が、こみあげてきた。

ガバッと飛び起きた。二階に駆けあがろうとする衝動を、辛うじて理性が抑えた。

「ああ、いまのは正夢だった。俺は裏切られた！」

ツンと鼻が高く、彫りの深い善夫の顔が浮かんだ。

「あんなまじめ面して、ヌケヌケとひとの女房を盗みやがって！」

善夫を信頼していただけに、政吉の怒りは爆発的だった。

「アハハハ……」

栄子の男のような笑い声が、あたり構わぬ声で政吉の耳をうった。それに続いて善夫の

「ウーム……」と、おし殺したような声。

「なにをやってるんだらう」

政吉は、ふたりのさまざまな痴態を想像して、これは今夜がはじめてではなく、もうかなり打ちとけたところまで進んでいるのだと直感した。

「畜生ッ。どうしてくれよう！」

政吉の怒りは善夫にばかり注がれ、嫉妬のほむらに身をもだえた。

ひとしきり、二階の声は聞こえなくなり、静かになった。静かになればなったで、またいらいらするほど気になった。

栄子に尻を突つかれて、東京の清太郎の所へ善夫をもう暫く置いてくれと頼みに行った自分が、世にも阿呆な男だと、自嘲が我が身をさいなんだ。

「あのとき、すでに栄子と善夫は、できていたんだ！」

間男の引きとめに、当の亭主がノコノコと東京くんだりまで出かけて、一生懸命頼んだとは、間抜けを絵にかいたようなものだ。姦夫姦婦にあやつられて、踊りを踊っている哀

れなピエロ！ しかも本人は自分がピエロであることさえ知らずに、心ならずも踊らされてきたのだ。

「よし！ 善夫は絶対に東京へ返さなければならぬ！ これだけは栄子が何と言おうと実行しよう。こうと分った以上、そうそうピエロには、されてはいないぞ」と肚をきめた。

ミシ、ミシ、ミシ……

階段のきしむ音がして栄子が下りてくる。

「どなりつけてやろうか？」

だが、それは政吉にはできなかった。

眠った振りをしていると、栄子は政吉の方へは一べつもくれずに便所へ行き、何事もなかったように蒲団の中へ入りこむと、すぐ寝息をたてはじめた。政吉は美しい妻の寝顔をじっとみつめた。どうして、こんな女に惚れてしまったんだらう……

満ち足りたようなその寝顔は、さっき自分の上に馬のりになって悪態をついた妻の顔とは全然、別人のような顔だった。若いときから女道楽はさんざしてきて、女ごころは知りつくしたと自負していた政吉にとって、栄子のような女は、はじめてだったし、自分の苦しみは栄子には、ちっとも解ってくれないことが情けなかった。

(続く)



# 妊婦ハントに寄せて



## 羽鳥水江

五月号のSMカメラ・ハント「イン・トーキョウ第二夜」の前半、飯田カオルの巻「肉塊の蠢き——妊娠七カ月の新妻を縛る——」は一息に読了しました。昨年十月号の「胎児の喘ぐとき」にひきつづいての妊婦登場。たしかに、わずか妊娠七カ月なのは物足りませんが、十数葉も掲載された写真に見る、明らかに子を孕んでいる女体の開陳——ぶっくりと太く、丸くなった妊娠腹部、十分なポリニームの乳房、大きく見事な、乳暈は素敵でした。

もう一つ楽しいことは、「編集部だより」に妊婦逆さ吊りの予告があることです。（ああ、とうとう……）という気持を禁じ得ません。辻村さんの「楽我記」では、五月号編集中的にあわただしい一ときに実現されたものらしく、そうだとすれば三月の何日頃だったろうか、と考えて見るのも、またたのしい思いです。

五月号で、西野正一さんも述べておられますように、△妊婦▽の登場するカメラ・ハントの、再三の実現は、まことに天下をアツと言わせる大胆な企画だと、言ってよいでしょう。それにつけても、児玉昌子さんから始まって、安原さゆりさん、田中美佐子さん。こ

こまでは読者の提供で、あと、例の双胎臨月の増田みゆきさん、中河恵子さん、そして木戸悦子さんと飯田カオルさん、まだ見ぬ金原奈加子さんを加えて、実に八人の妊婦のスードが奇クによって公開されたのです。ことに木戸悦子さんと飯田カオルさんは、辻村さんの△カメラ・ハント▽の名文で、詳しく紹介されました。相当の長文でありながら、息をもたかずに読ませるあの呼吸、抜群の面白さです。これからも妊婦写真が分譲されるときには、かならず長く詳しいハント記事を書いて下さい。読むだけでも非常に興味があります。

それと同時に、もちろん、印画紙に焼きつけられた鮮明な妊婦写真の分譲はどうしても必要です。ハダカの妊婦のありのままの姿を細部まで手にとって眺めることのたのしさ、女の私でもゾクゾクとして来るのです。とくに、金原さんの場合、妊婦逆さ吊りという、誰もが期待していた念願が達せられたようです。すから、その写真は是非キャビネ版位に引き伸して、欲しいと思います。

ところでまた、妊婦マニアにとって見逃がすことの出来ない資料があります。紹介しま



しょう。週刊誌『平凡パンチ』4月7日号、「狂気のエロティシズムを売る男」です。これはアメリカのハ高級Vエロ雑誌、ラルフ・ギンズバークの発行する「エロス」「ファクト」及び「アバンギャルド」を紹介したものです。これら三つのいわゆるリトル・マガジンは、すばらしい人気で飛ぶように売れたにもかかわらず、ワイセツということで次々に廃刊されては新しく出されたのだそうです。

「知的悦楽のための華麗なる未来派的」「アヴァンギャルド」が昨年発行されたのですが「……たとえば、出産そのもののズバリの写真を掲載したり、オナカの飛び出た妊婦のヌード写真を表紙に使ったり、日本ではとうてい考えられない内容だ」

とあります。アメリカのリトル・マガジンにくわしい植草甚一さんの批評は、

「ボクはギンズバークはあまり好きでない。ギンズバークの発行している雑誌を見ると、ギンズバークはややヘンタイ的人間だということがわかる」

というのですが、その「オナカの飛び出た妊婦のヌード写真」が「平凡パンチ」のそのページに「アヴァンギャルド」誌の表紙」として転載されています。ソフト・フォーカ

スの夢のようなムード写真のようですが、たしかに、とてつもない大きな腹を前方に突き出した妊婦のヌードです。

妊婦の裸体写真というものが、何も奇く専売のものでなければならぬという理由はありません。しかし、大胆にもハ妊婦Vものを開拓した奇くと、東西洋を離れていても、同じアイディアがあるのだという例を、是非紹介して見たかったまでのことです。

昨年十月号のカメラ・ハントで突然登場され、十一月号で早速分譲になった木戸悦子さんの、妊娠九カ月の妊婦フォト、その分譲フォト十組三十葉を遅ればせながら最近送って貰いました。過去すでに何人かの妊婦モデルがあらわれ、その多くについては、瀬沼四郎さんや高野原美さんがいち早く讚美の文を書かれて、それが巧まずして新しい妊婦嗜好に読者の眼を開かせるのに貢献したのだと思います。

ところがどういうわけか、ここしばらく、このお二人は沈黙しておられ、わずかに二月号の読者通信で名古屋の殿村さんが、瀬沼さんが用いられたハメロンのヴィーナスVという形容を踏襲して、感想を述べていらっしゃるだけです。

ただです。悦子さんが「妊娠したお腹をみせてあげてもいい」とか「一度是非妊娠中の出来れば臨月に会いたい」とまで言っておられるにもかかわらず、瀬沼さんはどうしていらっしゃるのでしょうか。

これまでの妊婦フォトの中で、辻村さん自身が撮影に乗り出されたのは増田みゆきさんがはじめてです。そしていくらかのハント記事がのりましたが、長文の、一気可成に書かれた妊婦ハント記事は、木戸悦子さんの場合が最初だと言っているでしょう。ハメロンのヴィーナスV田中美佐子さんの場合はご主人の撮影で、室内フラッシュによる照明です。増田みゆきさんの場合は臨月双胎という恵まれた条件で、枚数も非常に多いのですが、もっぱら腹部の造形が追求されています。中河恵子さんについては、余り記事もなく、詳しいことが分りませんから、ここでは飛ばしてしまします。そこで、悦子さんの妊娠九カ月の妊婦フォトについて私なりの感想を述べてみましょう。

第一に、この写真は、一年のうちでも一番太陽が高い季節に、明るい室内自然光で撮られたものだろうということです。白昼のモデルでサンサンと射し込む、自然な美しい採



光になっています。

第二に、みゆきさんの、まるで妊娠女体そのものを正確に再現するために撮ったかの感があるのにくらべて、ムードがあり、いわば妊婦のポートレートになっている点です。みゆきさんのものを学術写真とすれば、悦子さんのものは芸術写真だと思います。適当にデラックスなモータールの室内装飾をバックに入れ、ごく自然なポーズ。ことに縛りなしの九葉（のま）（のめ）（のや）のうちの、（のや）の下腹部までのもの二葉を除いた七葉は妊婦の全身ポートレートとして、写真屋さんのウィンドウに飾っておいてもちっともおかしくないような美しい写真だと思います。

第三に、モデルが、いかにもわざとらしいパンティやブリーフを一切身につけていないことです。浴衣を着ていても下着は着けていないのが、自然なムードのある作品になっている原因だと思います。縛りのものでも白い腹帯とか、ぐるぐる巻きにした縄はあってもパンティははいていないので自然なのでしょう。下腹部で切れていることは仕方のないことでしょうが……。

最後に、被写体になった妊娠九カ月の全裸女体そのもののすばらしさです。みゆきさん

の場合、臨月双胎のため、ほぼ完全な球状になり、はち切れそうなお腹をしていて感嘆しましたが、それにくらべて、悦子さんの方はまろやかな曲線で、西洋梨のように、かなりいびつな形をした妊婦腹です。その恰好に、天然のままのものが持つ不整形の特有な美しさが感じられました。白く柔らかい肉体の中に、ごろごろと嵩張る塊りが出来て前に突っばってる、という感じで、妊婦のせり出したお腹の面白い形に何とも言えない味があると思います。

さて、いよいよハメロンVの話に移りましょう。今度の悦子さんの妊婦フォトは、ほとんど立った姿勢のものばかりなのが残念ですが、次に撮られるときは、仰臥したものや、四つ這いになったところや、また、しゃがんだもの、椅子に腰かけたところなど、いろいろ撮って下さい。

——私はその悦子さんをマナイタの上に仰臥させて、大きな腹を庖丁で二つに断ち割りたい。ザックリと庖丁が入って、悦子さんの大きな腹はパツクリと二つに割れます。メロンを切るときと同じことです。そうすると柔らかく甘い果肉が目の前にあらわれます。そのおいしい香りのよい果肉を、メロンを食べる

ときのように、スプーンですくいます。舌の上でとろけるような味と香りを楽しみながらです。

——悦子さんのその美しい、とてもおいしいそうなお腹を見ていると、つい、そのような空想をしてしまうのです。おいしそうなメロン！ 食べてしまいたいような天然の果実！ 増田みゆきさんのときとはまた違った発見でした。

この悦子さんの妊婦フォト分譲から約半年ほどで、つづいて飯田カオルさん——妊娠六カ月なのが残念ですが——と、うまく行けば金原奈加子さんの妊婦フォトが予告されているのは、うれしいことです。もっとも、世間一般が、単なる女性のヌードだけでなく妊娠した女性のヌードに関心を持つようになってくれたら、と思うのです。

何ということぞ、と言われるかも知れませんが、しかし、必ずしも夢ではないような気がします。

悦子さんの妊婦フォトの美しさについて書いているうちに、こういう思いが私にはしてくるのです。

——（おわり）——





△夜と霧の群像▽

玩

具

花  
影

叢

マリヤ・ット・パンパーニはヴェネチの設備のよくととのった病院で生まれた。父は南国ネプチーン人の血の多いイスヤで、陽気な小肥りのホテルのオーナーだった。母はズーゾンの生まれで、繊細で少し冷たく見える美貌の持ち主だった。外見も性格も共通するところの少ないこの二人が結びついた、くわしいいきさつをマリヤはよく知らない。

という事は、彼女と母、そして父の間の距離を語っていた。

ほっておかれたわけではないが、通常の意

味での家庭とか近所づきあいをマリヤは知らないうち育ってしまった。

ズーゾンのドーチェ通りにあるホテルは、一流ではなかったがこじんまりとしたルームチャージは安くはない高級な格をもっていて、父の南欧の諸方にあるホテルとはっきり性格がちがっていた。つまりそこが母の家であり営業の方はどっちかといえば片手間になるので、そういう事になっているのだろう。

父は方々のホテルを廻るのが仕事で、どこが家かわからない生活をしていた。マリヤを

生んでからの母はいっそう弱くなり、心臓の持病で発作をおこしズーゾンから出られなくなった。幼いマリヤは母をおいて、父に連れられて旅行に日を送る事が多かった。

ズーゾンの学校に行くようになって旅行はズーゾンの休暇以外だめになった。

母は病気のせいかわりやをあまりかまわない。一日をほとんど部屋のベッドの上ですごし、食事時になってもめったにテーブルについたことがない。

幼時から少女期にかけて、学校とホテルと



たまの旅行がくり返された。

しかし、そうした日常をマリヤは特別に不満とも思っていなかった。物事がある程度わかって来て友人の親子関係や兄弟姉妹の妙にべったりと馴れあったようすなどを見ると、自分の父母の関りの薄さが気になることもあったが、考えてみると不足といっていない現在ののだった。

彼女の性格の物事にうちこめない、移り気で流行に流されやすい主体性の欠落などの欠点は、どうやら育ちのせいだった。しかし外見は、物にとらわれない自由な振舞いが素直にとれる明るい娘にマリヤ（マリヤット）は成長した。

見る人が見れば、どこかポイントが一点ぬけているマリヤも、年なりの輝きで魅力的であり、やがてズーズンの小さな社交界でも目だって華やいで見えた。

彼女に熱をあげる若い男も多かった。しかし、マリヤはどうしたわけか女の子どうしがさかんに噂するズーズンの良家の子弟にまるで感じるものがないのだった。ウエハースの菓子のような味と匂いを男の子に感じるだけで「恋」とか「愛」とかいわれてもピンとこない。

ウエハースがふいにニキビなど飛び出させ熱くなくてもおかしいだけで、「愛の告白」を聞いてマリヤは突然ケロケロ笑いだしてしまい、これは失敗で、相手は面目を失い、マリヤもちょっと評判をおとした。

そのマリヤが突然スキャンダルのヒロインになった。一時は司直の手も入った、平和なズーズンでは相当な話題に登った事件であった。社交界にも入れない、ホテルのボーイとかパーテンとか下町の職人の子だとかがジャークに抬頭しつつある右翼運動にかぶれて、揃いの皮ジャンパーなどを着こみオートバイを飛ばして有閑人種の集りなどへなぐりこみをかけるとか意気こんでいる連中が、行きがかりでそうなったのだろうがマリヤ達のグループをなかばからかいから本気になり、街外の山荘に監禁するという事態になった。あぐく軍資金をとるとかいって娘たちの親に脅迫状を送ったのでズーズン中、蜂の巣をつつついたような騒ぎになり、警官隊を中心に山狩りを行うところまで行った。さすがに若者達も騒ぎの大きさにあわてて山を降り、警察に首謀のジャンニジャックという若者がひとりで買って出て自首をした。

マリヤ達も警察に「保護」されて取調べに

「協力」させられた。警察としては若者たちのグループは不良団に過ぎず、この際、大きな灸をすえてやろうとかかったわけだ。

マリヤはどうして自分がそんな気になったのかわからない。とにかく気が付いてみると自分の顔は涙にくしゃくしゃになっていて、何事か警察の意図を頑強に否定し、「協力」をこばんでいるのだった。

つまり山荘に行ったのはマリヤ自身の意志で脅迫状を送ったりしたこととも了解ずみの遊びに過ぎない、とマリヤは主張しているのだった。被害者が一転して共犯という事になると警察もついに持てあまして、マリヤたちはとにかく釈放された。

翌日の夕刊が派手な事になった。つまり不良団と不良少女団が共謀して親たちをゆすった、というのだった。その他、山荘の桃色遊戯だの、上流階級の子女だのと、尾ひれがついている。マリヤ自身は首領ジャンニジャックの情婦というところを擬されている。

情婦！

とその活字をマリヤは見つめた。戦慄がゆっくり起こって、こまかい身ぶるいが行き過ぎていった。

母が青い顔を病間から見せて、マリヤに外



出禁止を申し渡した。いわれなくとも、いきなり外へとびだす気などはなかった。戦慄を腰に沈めて、しばらくじっとしていたかったのだ。父が旅行先から飛んできた。それから警察や新聞社をたずねて忙しくくるくる動きはじめた。一段落のあと、陽気で気のおけない父が妙に深刻な顔をしてマリヤにいった。

「お前、あの男に惚れているのか」

マリヤは、おかしくなった。ふきだしたいのを少しこらえて苦しかった。

「男に惚れるのはかまわん。どんな男でもお前が気に入ったのならそれでいい。しかし、あの男はいかん。あの男は『メーク』だ」

マリヤの初恋は「メーク」という不吉らしい言葉と「情婦」そして、皮ジャンパーに蒸れていた野獣の匂いを残して去った。

後になるとジャンリジャックという男の顔もよく思いだせない。

母が、死んだ。心臓がやはり命とりになった。父が結婚を用意した。イスヤ人のズースン名士、ストリックローゼン氏。

ウエハウスの匂いこそしないがマリヤは特別の感銘もうけなかった。

結婚式はイスヤ教会で盛大に行われ、スト

リックローゼン夫人となったマリヤ・アット・パーニーはズースン社交界に復帰した。

意地の悪いむきがかつてのスキャンダルをむし返して話題にした。

マリヤはこともなげに笑っていい捨てた。

「だって、その方が面白いじゃない」

そうだ、いたずらで捕われた被害者の少女より「情婦」の方が……。

不器用な幼い対峙より「桃色遊戯」の方が……

警察の「協力」より困らせる方が……

まともな話よりスキャンダルの方が……

面白い。

この言葉でマリヤはズースン社交界に以後君臨した。

○

平穏な十数年が過ぎた。

しかし、平穏であったのはマリヤとその二人の娘だけであつたかも知れない。

父パーニーが死んだ。その前後から彼の事業はうまく行かなくなっていた。前大戦中から彼は投機に手を出していて、本業のホテルも出物があつた買いこむ拡大策をとっていた。一時は日の出の勢いの景気の下さで

南欧の新しい「ホテル王」などといわれている

たのだが、戦後の景気後退、それからやって来た空前の経済恐慌にすっかり元手まではらってしまった。

「なに、平和になりや観光さ」

とかいっていたがその観光事業が経費だおれで、うしろから首を引く重荷になってしまった。手もちのホテルもほとんど手離し、しかしあまり落胆も見せず陽気なままケロッとしていった。

「やりたい事はやったし、お前にはストリックローゼンさんがついている。心配など馬鹿げた事さ」

といった父の生涯を考えて見ると、どうやら仕事師ではなく一生の遊び人だった。こうして今は頼るべき唯一の人になったストリックローゼン氏の事業も内実はあまり思わしくなかった。

田舎銀行の方は不況でつぶれかけていた。イスヤ系の銀行は、しかし軒並み不況で強くなえって地盤を固めたり抜け目なく立ち廻っている。余波で多少の信用があり、辛うじて持っていた。

織物工場は伝統的な装飾的なものと実用品が不況になってやはりぱたりと出足がとまった。ストリックローゼン氏の資質は技術家と



いうところにあり、この点では機械の改良などで家内工業に過ぎなかった工場を近代的な工場にしあげたが、商人的なセンスに欠け、この点は父パンパーニの資金援助とホテル内装で売り出したところに大いに負っていたのだが、パンパーニの没落にしたがって行きづまりを見せていた。

といった世俗の事をマリヤはまるで知らなかった。トマス・ストリックローゼンは気質的に妻に事業の事を語るタチではなかった。それをよいことにしているわけではないが、マリヤも夫の仕事に立ちいるすべは知らなかった。今までは、とにかくそれですんでしまっていた。

長く不況と失業者の大群に悩んでいた隣国ジャークにメーク党政権が誕生し、その強力指導のもとに不吉な影をとまっていたが軍需に刺戟された景気がもりあがってきた。

ストリックローゼン織物工場も実は高級軍服の大量輸出で息をついた。イスヤ排撃を叫ぶメーク党に助けられるという皮肉な事になったが、ストリックローゼン氏としてはこの需用が一時的なものとも見ても、今のテコ入れは何としてもありがたかった。

イスヤ狩りに荒れるジャーク国内を商用で

旅行し、トマスは技術家の目で現象を分析した。軍需や技術畑に結びつくイスヤ人はまだあまり動揺していない。狙われているのは情報部門のインテリ、地方に根を張る中小企業商人たちようだった。こういう小金持ちは平素貧乏人にうらまれているむきがある。

メーク党が政権を固めるための便宜的な政策のひとつ、とトマスは結論した。嵐もそのうちおさまるだろう。

大戦後誕生した古都ヴァーデンを首都とする共和国ウンヘルトにもメーク党の政権奪取の政争がおこり、勝利はメークに帰し、政権樹立後、両国の合邦があった。

ズーゼンはほぼジャークの海に囲まれ、ポーヘン共和国を守る巖頭の形だった。ズーゼンにもすでにジャーク人の間にポーヘンからの自治分離を叫ぶメークの運動が高まっていた。イスヤ人会は集会を重ね、おおかたの意向は逃散であった。トマスは、それを他に及ぼす考えはなかったが、現住地にとどまる決意を被露して政治的には孤立した。

トマスが代表を勤めていた銀行は本店閉鎖中立国にあった小さな支店に整理業務を移しトマスは辞任した。トマスはジャーク国内を見た自分の目に自信を持っていたが、念のた

め余裕の資金を父パンパーニからの遺産で口座を持っているマリヤの中立国銀行へ振りこんだ。大した金高ではないが、刻々せまりくる嵐の予感に安心を少し得たかった。

ズーゼンの帰属をきめる国際会議は、あっさりズーゼンのジャークに権力を渡した。

それからまる一日。たった一日の余裕であった。技術家としての心血をそそいだ工場も家も財産もなかった。メーク党の制服のSPの強力無双な腕力にグッとつかまれて、気がついたら木のブツツケ造りの強制収容所に毛布一枚の夜をむかえていた。

マリヤは腑抜けのように呆然としていた。

トマスは気の毒な気がして、自分の考えの甘さに責任を感じた。二人の娘はわりとしっかりしている。姉のエヴは普段からトマスに似ていて物事にキチンキチンとし、いかなる時も父に忠実な姿勢を持ちつづけている。妹のレーナは文学少女で、気分屋のところはママ似だが、感受性は鋭く頭は切れる。何か考え事をしている恰好だが、これもあまり心配はいらないだろう、とトマスは判断した。やはりどうも頼りなく目が離せないのはマリヤだった。といって閉じこめられて当面打つ手はない。毛布をかぶり少しまどろんだ。目がさ



めた。寒い。春だというのにどうしてこう寒いのであろうか。昨夜までの自家の暖房を考えに入れていないことに気づき、トマスは苦笑しかけた。声が近くでする。グスングスンと鼻をすする。ぼんやりしているマリヤには毛布をかけておいたが……

マリヤは泣いているのだった。鼻をすすりながら小肥りになって来た頬や小鼻のふちをグショグショと濡らしていた。トマスは、いささか呆れた。娘たちは寝ているのか静かである。その母親が女中見習いに来た小娘の初夜のように泣いている。見ているとしかし哀れになった。この女はこれくらいの苦勞も今までしたことはなかったし、これから万が一するはずもなかったのだ。中立国へ逃げていれば今ごろ先行き不安は同じだが、寒気など薬にしたくもないホテルのベッドである。トマスは改めて自責を感じた。しかし、それにしても呆れるほど少し滑稽で、またたとえようもなく哀れだ。

毛布を二枚ひとつにして、手で囲うようにしてトマスはマリヤを抱いた。マリヤは丸くなってトマスの腕のなかにおさまった。

泣き声はやんだ。少し、からだがぬくもってきた。と、

「あなた」

とマリヤが小さな声をくぐもらせて呼びかけた。

「あなたって、頼もしい」

媚びて悪戯をふくんだ声に気づいてトマスはとまどった。頼もしいものの上にマリヤのふっくらした肉が乗り、少しからかってくるように動く。フフフ……

マリヤは含み笑いだした。

今度こそトマスは本格的に呆れなければならなかった。なんという、女の現金な気分であろう。しかし、マリヤだからそれが自然なのかも知れない。トマスのものはトマスの意志をうらぎってついにマリヤと情感を通じあわせた。

ふいにトマスの心は溶けた。マリヤの女としての好きにトマスははじめて気づいた。純な子供の心を持ち、その心のままに生きることのできる女がマリヤだ。二人ともこんな夜に、まるで恋知ったはじめの若者のようで意識はテレるが、考えてみるとトマスはこれまで若者のように恋した事はなかった。いっばし完成された壮者の顔と態度こそしているが無力にされてしまえばほんとうのところ若者の経験者以下であるのかも知れない。マリヤ

は常に無力ゆえに、正直で純だった。

しばらく、おかげでストリックローゼン夫妻は明日からの不安を忘れた。

マリヤのとり戻した明るさは、その後一ト月ほどつづいた。極端に少ない食料とか、衣料とか困った問題にぶつかると、マリヤはすぐぼんやりしてしまい主婦としてまったくの無能無力をあらわす。そうした場合、トマスも余り頼りにならず父はもっぱら権威のみで存在するさまになってしまいが、この点で一番有能を発揮するのは姉嬢であった。妹は心配性で、だれよりも先んじて危険を予知したり逃げ道を見いだすことに優れていたが、実行能力に欠けていた。

未来はどうやら確実に灰色に想える。生活物資のまるで乏しい閉ざされた世界を強制された四人だったが、比較的家族的な親密感はあるなわれなかった。いや、今までになかったほど四人は溶けあっていた。

考えてみれば、ストロックローゼン家には家庭というものがこれまでなかった。父は仕事オンリーで母は社交、子供たちもまた別々に学校などの仲間の世界に棲んでいた。

姉のエヴは、女学校を卒業してから家業の



織布による室内装飾に興味を示し、アメリカの雑誌などを取り寄せて女性の職業人としてインテリア・デザイナーになりたいとか意気込んでいた。父の工場に出入りすることで、二人は比較的共通した話題を持ち得ていたし父は技術家的な見地からデザイナーといっても建築的な基礎知識が必要だ、などと助言して、具体的にヴァーデンの工科大学に遊学する話までまとまりかけていた矢先だった。

せめてこの娘だけでもヴァーデンはメークが乗ったので駄目になったとしてもパリか、思い切ってニューヨークにでも出してあげばよかったと悔まれるが、現実エヴがいなくなると世俗的知識皆無の女ふたりをかかえたトマスが途方に暮れるという事になり、やはりこれはこれで仕方がなかったとも思える。

いろいろ考えると暗い絶望感の重味にこたえるが、部屋に閉じこもっている限り、家族の蚕の吐いたまゆのような衣にかこまれて、とにかく安穩を保っていられる。

夜の妙に情感のこまやかな密月に、部屋の大きさは不都合だったが、娘たちに気を使いながら抑制した行動で営むのも、また別種のひそみやかな快楽があり、人間の面白さをト

マスは見つけ、思いだすと頬がゆるむ。

徴用制が通達され、あきらめていた外界に出られることになった。しかも自分の工場にもどって技術をふるえる事になり、トマスは将来に一抹の希望を感じた。

憲兵的なSPとちがうメーク党の私兵であるSCが責任者になり、事務所は占領されている感じだが製作実務はSCには手に負えずけっきょく任せられた結果だった。仕事の与えられたノルマは大きく、逃散したイスヤのヴェテラン工や図案係がいなければどうにもならない。それで実状をSCに見せて、まずマリヤと娘ふたり、収容所内の心あたりのイスヤを徴用してくれるよう申請した。申請がうけつけられたことでトマスの希望が胸の奥でふくらんだ。

逃げよう！

やはりメークは信用できない。メークのおえら方の服地作りなどは、まっぴらだ。

しかし絶対的な条件があった。家族四人で所は違っても同じ時に逃げて、一人としてSCやSPに捕まるようなことがあってはならない。ズーブン占領後に逃げて国境などで捕ったイスヤの風聞が伝って来ていた。その場で射殺されるのは幸運な方で、むごい

拷問でなぶり殺しにあうか、生き得ても強制収容所より一段と過酷な牢獄が待っているという。

四人のうち一人でも彼らの手に帰せば、恰好の人質にされてしまう。

申請したうち幾人かのイスヤ人工員と、姉娘のエヴだけが徴用されて工場に配置されたのにはトマスは気を落とした。どうも余り有能には見えそうにない地方の肉屋の店員ぐらいいにしか想えないSCやSPの現場員だが、組織だった調査網はしっかりし、逃亡を予防する原則もあってよく守られているらしい。それでも手もとに常にエヴを得て、トマスは逃亡計画をあきらめずに練った。

収容所や徴用先で悪質の伝染病が発生しかけていた。予防のために集団検診が実施されることになった。

トマスとエヴは工場でうける。週一回ということでSCの軍医が出張して来て、会議室が使われ、まず男たちが集められていっせいに裸にされた。裸の列がならぶ。そこまではトマスも我慢していた。集団を短時間で検るには、たしかにその方が能率的だ。

次に四ツ這いになり股をひろげてうしろを



見せろというにいたって、トマスは列から進み出て断固拒絶した。

何のためか長い木の棒を持ったSCの若者は号令の声を吞んで赤くなり、それから青くなった。

中年の太ったアルコールくさい息をしている不潔な白衣の軍医は、ひとつおかれた椅子にふんぞり返ったまま不気嫌そうにそっぽをむいたままだ。

SCは二人いた。一人は眼鏡をかけた青白い痩せ型の男で、事務所の経理責任者だ。若者の方としばらく睨みあった形になり、その男は少し形勢を見ていたが、やがて口をはさんだ。

「トマス氏には了解していただきたい。後で話しあいましょう。この場はお引き取り下さい」

普通のSCらしくない丁寧な口調が、かえって気味が悪い。

トマスひとり衣服をまとして会議室から出た。とたんに背後でけものような怒号のひびきと床の鳴る音、人間の叫びがおこった。短い間でそれはおさまった。

トマスは工場にもどると、自分の手が激しくふるえて機械的に仕事につこうとしたが不

可能なことをさとした。興奮しているだけではない。こわがっているのだ。恐怖にうちのめされ、体中の力がへなへなになってしまっているのだ。

暗い目で機械のかげの人影をさがした。エヴを求めた。エヴのみではなく、女子の工員もいない。男たちのあとの検診をうけるためすでに集まっているのだ。

エヴをさがして言わなければならない。恐らく女たちも容赦なくあの四ツ這いの姿勢をとらされるだろう。トマスはいくらか青いくらいに白く透きとおってよく伸びたエヴの、自分でさえまだはつきり全身を見たこともない、裸体がSCたちの視線にさらされて、やがて腰を高くぶざまな恰好をとることを想像した。頭のなかがカッと熱くなった。全身がわなわな震えた。

が、しかし、エヴに何といえはよいのか。そんな恰好をするな、そんな強制されるところへ行くな！ という事もむずかしい。SCの意志に対してそれはあまりにも危険な忠言である。

トマスは頭をかかえこんだ。ひとりの無力なイスヤが意気地なくそうしているだけのことであった。

男たちが職場にもどって来た。だれもトマスに声をかけない。仕事が始まったが重く、しい雰囲気はとけない。事務所のイスヤではない給仕の少年がトマスを呼びに来た。

「一二八名の者が準備も入れて二時間以内に検診をうけるのです。命じた姿勢をとる事は絶対に必要であり、この際自尊心は関係がありません。医療のためなのですから、必要の姿勢をとることを拒絶することは、まったく不可解です」

眼鏡のSCは冷静にいった。

若者のSCはいらだたっていて、例の棒で床をドスドス鳴らしながら歩きまわる。

トマスは反論しようと思いつながら頭が混乱してうまく言葉が口をついて出ない。医療の必要といわれれば、何か無理をいつているのはこちらの方とさえ受けとれる。

「あなたには絶対協力してもらいます。なんといっても実質上あなたはこの工場の代表者ですからね。——あなたの娘さんは協力しましたよ。なんなら、その協力ぶりをここで再現してもらいましょうか。それでもいけなければもう少し複雑な協力をしてもらいましょうか」

トマスは思いついて、衝撃がからだをは



しった。

「お連れなさい」

うう、と口のなかで呻いた。

応接室のドアから、白いものが飛び出すように現われて、床にころがった。

赤くなり青くなるのはトマスの番だった。

SCは本職の自信を見せて、冷静な顔に冷笑の線を刻んだ。

一糸のおおでもない肌の胸に黒ずんだロープが喰いこみ、ロープの先を引いて若者のSCがころがった肢態を意のままに転々とうごめかせた。

トマス・ストリックローゼンは、息子のようなSCに屈服した。

収容所への帰途、エヴは母マリヤのように安心してまばたきも見せない瞳から細い涙を流しつづけていた。肩を抱きかかえた父の手もほとんど感じないらしく、ほっておくとそのまま地面に崩れて行きそうに、足もとをゆらめかせて歩いた。

ストリックローゼン家のショックは、その日それで止まらなかった。

マリヤのようすがおかしい。聞くと、SPのセンターで検診をうけたという。それ以上、聞く必要はなかった。

妹娘は、ものをうらんでいるように瞳をキラめかせて片隅から家族を睨んでいる。もはや家庭も蜜月もなかった。

暗闇がおとずれた。わずかな救いである。闇を見ている事に疲れ果てた深夜とおぼしきころ、腕のなかのマリヤがもだえて、細く泣きはじめた。

「豚になっちゃったのよ。SPが縄でぐるぐるしばって、痛くって痛くって、泣くと、豚が泣くって笑うのよ」

しゃくりあげながら、子供がうったえるようにつづける。

「駄目なのよ、もう。あなたにあげられない——きたない豚なのよ、もうあたし」

昨夜までの哀感がよみがえりかけ、一点、熱した、じりじりこげてくるところがトマスにいらだたせた。妙な事にそれは今腕のなかにかかえているもの、それはマリヤではなくマリヤのいうきたない豚で、肉のかたまりで醜悪で、憎たらしい。憎悪と嫌悪感だった。

そんなことを考えるのはよくない。とトマスは一点の炎をあわてて消しにかかったが、ジリジリと執拗にもえ広がり、ついには腕にかかえていたくなくなった。そのくせ、醜い肉のいやな匂いと触感はトマスを刺戟し、こ

れまでにないほど、彼の血を猛らせていた。

矛盾と思いとまどったが、矛盾ではなくてむしろ、黒いにちやにちやした醜悪感と憎しみがこれまでになく、トマスをはやらせているのだった。トマスは少し乱暴になって、強くいった。

「マリヤ、いってみろ。SPが何をしたか、ちゃんといってみるんだ」

マリヤはビクと体を震わせておどろいた。「SPが何をやったんだ。裸にして四ツ這いにして、それから縛ったのか。どういう恰好に縛ったんだ」

トマスは激情にかられた。毛布もとばしてしまい、マリヤにSPに縛られた恰好をとらせた。おびえたマリヤは、鈍重にのろのろと姿を再現した。

窓からわずかにさす月光が丸くうずくまったマリヤの肢態を照らした。トマスは乱暴に寝巻になっている古ワイシャツをひきはぎ、青白くあらわれた腰部に、血走った視線をあてた。

「こわい。パパゆるして」

マリヤは震えていた。四ツ這いというより臀だけをうしろに高くあげて足を組み、胸のところへ引き寄せた姿だった。寝巻きの腰の



紐をとってその姿にトマスはマリヤをくくりあげた。ほとんど自分が何をやっているかわからなかった。

「これでどうしたんだ！」

「浣腸」と呟くようにマリヤはいった。

「それから、……しろってお尻をびびりしたたくのよ」

マリヤは、またすすり泣きはじめた。

憎らしい。実に憎い尻だ。トマスは臀部のいただきをわしづかみにして、引きちぎってしまいそうにその肌に指を喰いこませた。豊かな脂肪の丘は深く頼りがたいほどやわらかく、トマスの指をうけ入れた。手ごたえの柔らかなさにトマスは焦燥して憎しみをまた燃やし、ぐりぐりこじった。

「痛いパパ、かんにんして」

ひい、と笛を鳴らすように悲鳴が流れた。

トマスは、かんにんしなかった。

「これで」

喘いだ。

「これで、SPのやろう、お前の……やらかしたのだろう」

口にしたこともない言葉を喋っているのも不思議だったが、それで充分ではなく、もっと口ぎたなくのしりたい衝動が次々と湧き

あがって来て、ついに言葉の足らないところをトマスは力でものにいわせるように、つかみかかったものに挑んでいった。

不思議な気がする。激情はまったく明らかに不条理なものだった。不条理を無体に押しとおしてしまった自分をも今は信じがたい。

その上、トマスの激情に、最後にマリヤはこたえたのだ。あの圧迫され、おしひしがれたはずの肉の底に這いつくばった時の動きには微妙なものがあつた。それを想うと、女体も信じがたい。

この先を追ってみたい衝動があつた。がそこは地獄の入り口のように青黒い風を吹きあげて来て、トマスをためらわせ、無気味さに理性の側に戻って行くのだった。

しばらくトマスは摂生した。

次の週の同じ日に摂生は破れた。マリヤが今度は自分から同じ姿になり、トマスに要求するのだ。そして、信じられないくらい卑屈になり、トマスの赦しを乞い犬が尾をたれるように、あやまるのだった。

果、快楽にあたりかまわなくなり、嬶々とすすり泣く。

入り口ではなく、もうそこは地獄のなかだ

った。青黒い風に脂をたれ流し、ぬるぬるになって這いまわる前世の夫婦のふたつの肉があつた。

少し仕事もおろそかになり、強制されているとはいえ嫌いなことではないのでつい熱心になることが多かったのだが、そういう事はなくなり、ぼんやりと機械などをいじって、気がついて仕事を放ると、便所へ行く。腰かけて長い間、何も考えずにいる。便所へひんぱんに行き、過ぐす時間もだんだん長くなる。

ひよいと戸があいた。トマスは鍵をかけ忘れる事が多い。だいたい家、工場でもそういう所は専用で、旅行でもしなければ鍵に心がける必要はなかった。今は工員用のひとつがイスヤ人専用になっている。ちょうどズボンをおろしていた時だったので、トマスはあわてた。

あけた本人が飛びこんで来て、トマスにしがみついて来たのには二度驚いた。娘のエヴであった。いくら娘でもこんな時こんな姿でしがみつかれたのでは困る。

「パパ、パパ」

と、やたら首筋に腕をからましてくるのに辟易して、なだめながら立ちあがり、ズボン



をあげにかかると、腰に抱きついて来て、思わず、よろけかけた。

「馬鹿。いい年をして子供みたいに」

ぐいぐいと押しつけてくるからだ、熱っぽく、ころなし娘らしく固い肉感で、腰の無防備には、うろたえざるをえない。

「お願いよ、パパ。そのまま坐って。エヴの話聞いて下さい」

何かトンチンカンなエヴの口調だと判断し仕方なくそのままトマスは腰をおろした。何か急いでうったえなければならぬ異常事がおこったのだ、と思うと、変な恰好だが無理にもここは落ちついた方がよかった。

「パパ、エヴも豚よ、メス豚よ」

日ごろに似ない衝動的な話のはじまりだった。

「パパ。ママばかり可愛がらないで、私も愛して」

そうか、この娘は両親の狂態を見ていて、たまらなくなったのか、とトマスは暗澹とした。考えれば、見られていないと思う方がおかしい。むずかしい年ごろの娘心だ。

「愛しているよ。パパは、エヴもレナも、むろんママも。しかしママとパパは大人の男と女だ、エヴが見てずいぶん変なことも、

いやらしい事もあるだろう」

「じゃないのよ。パパとママはいやらしいなんて思わないわ。いやらしいのはエヴなのよ——わかって、パパ。あたし気が狂ってなんかいないのよ。考えに考えて、そうしたいと心から願うのよ——パパ。あたしを可愛がって。ママと同じようにいじめて。怒ってこらしめて」

この娘は何をいっているのだろう。従順な子にいきなり反抗された親のショックとまどいをトマスは覚えた。何か自分は聞き違いをしたのではないか。

「エヴ、妙なことをいいますんじゃないよ。お前らしくないじゃないか。冷静に。さあ何がおこったのか、お前がいきなり妙なところに飛びこんだ訳を話してごらん」

「特別なわけなどないわ。ここしかパパと二人切りで逢えないじゃないの。それにパパは戸の鍵を忘れる癖があるわ。機会をジッと待っていたのよ。そして来たわ、チャンスが。望みどおり二人きりよ、今は。わたしは冷静よ。パパ」

いきなり外の戸が開く音がひびいた。ひびき渡った。心臓を一瞬にちぢめて、二人は凍りついた。足音が入ってくる。小便をして、

さいわい出て行く。鍵をたしかめてみるとしまっていた。確かにエヴは冷静なようだ。

「妙なところだけれど、パパ、いやらしいエヴには、ここはふさわしいわ」

呪縛から先に解けたエヴは、トマスをすばやくつかんだ。空いた片手でエヴはトマスの手を自分の腰からうしろへいざなった。マリヤの、触れてくるものを溶けこまそうなやわらかさと違う、はっきり分れて感じる二つのやや固くつるつとしたふくらみをトマスはてのひらにうけた。

「いけないお尻。神も赦さないお尻」

巫女の呪文のようにエヴはとなえた。トマス自身、その呪いにかげられた自分がまるで無力になって行くのが異様だった。

果然と、古代の娼婦になった娘をトマスは赦した。彼の中の男は彼から独立し、そのみの権威によって働き、君臨していた。

呪いがやがて薄れ、おさない娘が苦痛をこらえて歯を喰いしぼり、子供に帰り父親の胸にしきりに頭をこすりつけてきた……

二つめの地獄であった。その後も、しばしば呪われた二人は四フィート四方の密室で、「密会」した。



春から夏、そして初夏にかかっていた。

トマスの逃亡計画はまるで進展しない。エヴには打ち明けていたのだが、エヴにもよい智恵はなかった。ただエヴには何か目算があるらしく

「パパ、時機をもう少し待ってちょうだい。ジッと動かないで待つよ。機会は、きっとくるわ。二度とは来ないかも知れないけど、一度はたしかに」

という。少し思わせぶりだが、トマスにも薄々その一度の機会というものの正体がわかるような気がした。

エヴのような若者たちの間に、何か画策が行なわれている。ただトマスは門外漢としておかれていた。

分別のつく大人はかえって臆病なもので、いざという大胆なことをためらう。ここはエヴにまかせておくほかはなかった。その点エヴは計画的で極めて用心深いすぐれた性格を持っていた。密会においても常にイニシアチブをとるのはエヴで、交渉は幼稚で彼女は子供にかえるが、その他の点では驚くほどカノンも鋭く、計算に狂いもない。親として、男

としても、こちらの無能にあきれているのはなかった。

西にボーヘン山系をひかえたズーゼンは、陽の暮れが早い。夏が終ると急にたそがれが短くなり、工場を出て収容所に帰るまでに、まだほの白く陽光の残る街路から風にさらわれるように光りが去り、またたく間に闇がただよい、とつぷりと暮れてしまう。ゲートにポツンと黄色くともる灯は、何か凄惨なほど身に迫ってさびしい。そのゲートの灯の影から現われたSPにトマス親娘は呼びとめられた。その以前に身分証は呈示しながら歩いてきたはずなのだが。

詰所にいた三四人のSPは、親娘の証書をとりあげて何か確認している。ようすがおかしい。

「トマス・ストリックローゼン及び同じくエヴだな」

SPにとり囲まれた。トマスは娘をかばってSPの方に胸を張った。しかし、そんな体勢は無駄だった。腕をすばやくとられた手錠の音が小さく冷たく、びしりときまった。

二人はセンターに連行され、コンクリートの階段を突き落とされそうにこづかれて地下へ降りた。親娘は別々にコンクリートの無愛

想にむきだした部屋に入れられ、衣裳をはがれ、乱暴な身体搜検をうけた。例の医学的な検身などと比較にならない暴力で、有無をいわさないものだ。特別な体術を心得ているらしいSPは、関節を逆にびしびし、きめてくる。

息も思う様にならないうち、丸裸にうしろ手錠のまま部屋の一方の壁側に荷物のように積み重ねられていた木箱に蹴こまれてしまった。

奥行きは四フィートあるが、無論、横にはなれない。天井と左右はほぼ二フィート。座高にも少し足らず、足もひろがらず、隙間があいていて休もうとするとどこかがつかえる意地の悪い造りの箱の檻であった。

そのまま放っておかれた。時間観念はなくなった。後手から痺れて来て、伸ばせない背肢が石のように固まってくる。ひたいから汗が滲みだし、やがて脂が毛穴という毛穴からしぼり出されてきて、目の前の、黄色い灯がぼわーぼわーと波渦をえがきはじめた。

壁の側に積まれた箱は十列五段ほど、SPの狂暴な処置に動転していたがチラリ見た瞳の底がおぼえていた。無人の箱のようだったが、入ってごそごそやっているうちにほかの箱の動きの気配が伝って来た。何か言葉を伝



えたいと思って、少しためらうともう声が出なかった。日ごろも声をかける必要のない者に話しかけた事もないし、最近ではイスヤ人間にスパイが多くいるらしいという事で滅多に口も利かないことが普通になっている。ここで捕われた者どうしがスパイを注意するのは無意味だし、何か、とにかくいい合ってみたいのだが、などと考えている間に痺れが這い寄って来て、他人どころではなくなった。それから消えたはずの時間が目盛りを失っただけで果てしもなく続いた。

父と離されて、エヴはSPの手のなかで狂いもだえて泣き叫んだ。気が動転すると、男は感情をとり落とすが、女は高揚するようである。

日ごろ冷静なエヴのようすはまったくなかった。父とあの最初の時でさえ、言葉こそ少し舌たらずになったが、エヴは冷静に、あらかじめ想像したとおりのことをやってのけたものだ。SCにひどいあしらいを受けた時も怒りこそ燃えたが悲しみに狂うことなどはなかった。

父を最後の心の拠りどころにしたかった。からだに傷つけることでおぼえていたかった

が、現実には女として男に頼ろうなどとは思ってもしなかった。むしろ、いざの時には自分が父を助けるぐらいの意気どみと、計算があった。

おしまいを覚った。若者たちの練った蜂起計画がもれた、と直感した。とたんエヴは幼い少女を女にかえて、父と男に無意識に頼ったのであろう。

駄々をこねるような女体をSPは、SPらしくなく少しも余した。関節をきめにかかっても妙にくねくねしてつぼはすり抜けてしまふ。おさえるSPの手にも何か力が入らないのだったが、けっきょくは衣裳ははぎとられ後ろ手錠に、声をおさえるくつわまでかまされて、蜂の巣状に口をあいた箱に投げこまれ、うまく入らないところをぐいぐいと押しこまれて、からだ一面が火のように熱くなった。

先にいれた頭はすぐ鉄棒につかえた。小さな檻はそこが頭になっているのか、むこうが見えた。六フィートほどおいて、蜂の巣がまた列を作っている。視野は限られていて三三の九個しか見えないが、まだ数は積まれ並べられているらしい。図書館の書庫のように檻がならべられたコンクリートの地下室であっ

た。完全に見える四個のうちの一個に白いポアンとしたものがつまっている。ヒステリー状態の時は何が何だかおぼえもなかったが、白い物がふいに女の臀とはっきり見えてエヴは醒めた。つまり前後に鉄柵をもった小さい一人用の檻にエヴはつめこまれてしまったのだ。同じ檻が目の前にあって、正面に近いひとつに女がエヴと同じような目にあっているのだ。あのむくむくした肉のかたまりはエヴを後ろから見る姿を写していた。エヴは思わず身もだえた。動く事はどうしても無駄なことだった。坐りこんで顔を前に突きだしその恰好を変えることはできない。よく見えない五箇の檻の二つはやはり白い肉がつまっている。それが足の裏であり、腰のふくらみの一部だった。

考えてみれば、母や妹もこの部屋のどこかにいそうだった。しかし後ろからでは選別はつかないし、どうにも確かめようもない。SPの足音が部屋に入ってきた。ドアのあく音としまる音、鉄とコンクリートがぶつかり、大きく鳴りひびく。足音もそれに負けない。いかにもかたそうな靴底を想わせる。SCもSPも例外なしに膝近くまでの皮の長靴をはいていて、それで人の尻を蹴る。背骨の末端



を蹴ってくるので、衝撃が頭のしんにピンと走る。靴音を聞くと反射的にまず頭が痺れてくる。

足音が近づき、ふいに広いうしろ姿の一部が視野をおおった。ちょうど目前にSPの軍服の腰が来た。しばらく立ち止まっている。何か物色しているようすだ。それから少し遠ざかる。よく見えないが、猿轡を伸ばして檻の中のものにつかみかかったようだ。動きのなかった腰の一部が、少しうごいた。ゆれてふるえる。ふるえつづく。SPがどこかを攻撃している。ふいにまたSPが消えた。ふるえていた腰がもとに戻って静止した。SPの靴音が十ほど鳴り止まった。今度は鉄の鎖の鳴る音がうるさくひびく。ひとしきり、木と鉄と鈍い音は何か、騒ぎがおこった。騒ぎが近づいた。白い実体が視野を横切った。とすぐもどって来た。鎖が引かれてピンと張った先に黒い鉄枷が鈍く光り、女の首をがっしりつかんでいた。くつわでくびれた頬が赤く、若い娘だった。栗毛を少年のようにボサボサに短く、恐らく無理に刈られたものだろう。後ろ手が引きしぼられ、突きでた胸に突起が突きでていた。腰はまるつきり無防備である。足の膝から上の全身が見えたのは、短い間だ

った。SPの長靴が飛んできて、臀部を蹴あげた。と、あんなに跳ねるものかと思議なほど娘は飛んでSPの引く鎖がまたピンと張り、力が入れられ、引かれ、娘のからだは立ち戻るようだった。それがSPの連中の常套手段であることをエヴはまだ知らなかったのだ、圧倒された。少しの間、体のきしみも忘れて身をちぢめていた。

お尻のところから管がついているゴム製の蛙のおもちゃ、管の一方の先の球をにぎると蛙がぴょんと跳ねる。おかしみのある玩具だったが、それそっくりの動きだった。

それから長い時間があって、エヴはほとんど気にもならなくなったSPの出現を眼前にむかえ、前のふたがあくと髪の毛をいきなりつかまれて、突き出た首にビシリ鉄枷をうちこまれるように嵌められ、鎖を引かれ、もがくうちに転落し、たいした高さではなかったがしたたかにこたえるほど床にたたきつけられ、目に火花が走った。目をまわしている暇もなく手錠をつかれ、しぼりあげて首につながり、娘の時はよく見ていなかったベルトを胸乳の上に引きしぼられて、いっぺんに息がせつなくなった。があん、と一撃がおそって来た。蛙のおもちゃの、蛙になってエヴは

はねた。ぴょんぴょんとはねつづけて、コンクリートの部屋にドアの鳴りひびく音がこだました。

○

マリアットはストリックローゼン家の屋敷の本屋の寝室のベッドで眼ざめた。すぐおかしい事に気づいた。ベッドはベッドだが、個人用の小さいもので寝室もちがう。化粧機、デスク、小椅子、窓の白いレースのカーテンと見てどうやらエヴの寝室であることに気がついた。エヴのベッドに、しかも裸で寝ているのが変だった。お酒でも飲み過ぎたのかしら、ええとゆうべのパーティは、と考えようとすると頭が痛い。

ふっと妙な光景が思いうかんだ。

夫と姉娘が裸でつながって床をごろごろ転げまわっているのだ。鉄枷や鎖などが二人を結びつけているのだった。マリヤはせつなくなって、身も世もあらず悲しみにうちひしがれて泣いた。その自分も丸裸で四ツ這いに木の椅子にくくられていて、身動きひとつできない。SPがいて、床の二人に長い鞭をふるう。皮の鳴るすごい音。

もう一人のSPがいう声が聞こえる。「へっ、上流階級だの有閑人種だのと笑わせ



やがら。豚だ！豚以下だ。てめえら、親娘で妙なことをやがって。もつとも、この親娘ってのもちよつと怪しいもんだな、そいつはこちとらの肥った雌豚さんに聞いてみりゃわかるけどな、結婚してエヴとかいうのが確か八カ月と、こいつは病院の調べがついているその前の身持ちは、ズーブンでも有名なお遊びぶりだったってからな、まあ信用できねえな。——それが、てめえらの正体だ。親も娘もありやしねえ、ごっちゃ混ぜの豚がご殿に住んでいやがる。てめえら三尺四方のブタ箱でたくさんだ。そいでこいつでも喰ってよがり鳴きでもしやがれ！」

マリヤは激痛に呻いた。棒が肌に突き立って容赦なくぐいぐいこじってくる。喚いた。

〔伝言板〕 ○分譲品総目録は作成が大変遅延しておりますが出来次第発送申し上げます。今暫くお待ち下さるようお願いいたします。尚 フォトのお申込みは、大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社内箕田京二宛願います。○御送金は、現金書留、小為替、定額小為替、切手代用、振替にてお願いいたします。普通郵便に現金の封入は違法です故、現金の場合は必ず現金書留（封筒は郵便局で売っています）にて御送金下さい。○既

口が裂けるほど叫んだ。

いやな夢。

頭の痛いのは夢のせいのようなのだ。裸に何かまとおう、と思う。しかし、からだ中がみしみし痛く、だるくて手足をひとつ動かす気になかなかなれない。

いやな男たちにちゃんと「SP」だとか名前がついている。いやにはつきり感じの残っている夢だ。

また眠くなった。とろとろまどろむ。寝足りてはいるらしい。眠りには落ちこみそうにないが、まどろんでいるだけで気持ちが悪くていい。こんな、ぼんやりした乳白につつまれたような朝が好きだ、とマリヤは思った。

刊の臨時増刊号「花と蛇」第一回分（前篇写真と絵画特集）第二回分（続篇小説絵画特集）第三回分（前篇続篇収録小説特集）のいずれも売切れにて在庫がありません。○旧号に広告してありましたも最近号に掲載してないものは在庫のないものがありますので一応在庫の有無を御照会下さい。○雑誌の予約とお申込は大阪住吉局私書箱第四十一号晚出版株式会社へ願います。

ドアのあく音がした。

人の気配が入ってきた。反射的にマリヤはとがめた。

「だれ！ いやよ、こっちへきちゃ」

気配の人間はこたえない。

次の間との仕切りはカーテンがおりていて人影は見えないが気配は、やはり動く。

「エヴ？ エヴなら、ちょっと来てちょうだい」

カーテンがめくれた。

SP！

ああ、夢のつづきに入ってしまった、とエヴは思った。眼をさまさなくちゃ。

SPが近づいて来た。ベッドのわきににゅーっと突っ立ち、無表情な目で見おろしてくる。マリヤは本能的におびえ、眉をきゅっとしかめた。SPの目に表情が走った。

おや！ という表情。

「マリアット・パンパーニ」と太い声でSPはいった。

「ではなかったな、マダム・ストリックローゼン、か？」

マリヤの方が、おやっと思った。どこかで見おぼえがある気がするSPの顔だ。



「どうやら少しわかるらしいな。——どうだ俺がわかるか」

「SP……」

「SPじゃねえ。俺はSCだ。SCのゴットフリッツ・ヘフナー様だ。といってもわかるめえ。教えてやろうか。ほら、ジャン・ジャック様、よ」

「ジャン、あの時の」

マリヤは思いだした。思い出しても、やっぱりまだはつきり両者は結びつかない。だいたいジャン・ジャックの顔をよく憶えていないのだ。

しかし、ジャン・ジャックにしても今の裸では困る。

「わかったわ。思いだした。とてもなつかしいわ。でも、今は困るわ。下でお待ちになって。後でお逢いしたいわ」

SPの瞳がかすんだ。

「待て、と？ 下で待ってる、と？ まだお前はおかしいらしいな。まあいいや。おかしくとも何でも俺の知ったこっちゃねえ。やい豚！ いつまで人間さまのベッドにいやがる降りろ！ 降りて豚らしく這いつくばれ！ はやくしねえかッ」

マリヤは悲鳴をあげた。髪をつかまれぐい

と起こされ、いきなり頬をなぐられた。ガンと一発、二発。目がさめた。ああ、SP！ 収容所。検身、逮捕、箱の檻……

しかし、ジャン・ジャックは？ こちらが今度は夢か？

這いつくばった。鼻をつまんでくる。と、鎖が伸びて来て、丸い環が割れ、ぱっくりして鼻へもぐってくる。

「いや、赦して。ジャン」

パチンと止められた。どう細工されているのか、それだけでも鼻輪になって鎖がぶら下った。

「ジャンだと。豚め。ゴットフリッツ様、と呼ぶんだ。豚に気やすくされる、ヘフナー様じゃねえぞ。ジャン・ジャックはな、てめえのお蔭でひでえ目にあった。何とかいったなおめえの有名なせりふ。そうそう、その方が面白いじゃないってったな。その方が面白い——か。ひとを馬鹿にしやがって！ まあいい。これからあこっちが面白くなってやらあ——てめえをおもちゃにしてやら。もっともおもちゃって柄じゃねえや。ぶくぶく肥えやがって。やっぱりてめえは豚だ。メス豚だ。豚は這いつくばって歩くんだ、いいか、素直にしねえと余計に泣かなきゃなんねえからな」

鼻輪の鎖をSPは引いた。鼻がちぎれる。

痛みにも引かれてマリヤは急いで這った。そして部屋中をしばらく這わせられた。SPは鞭を持ちだし、姿勢を命じた。

「床をなめる。足の方は、払げる。尻をもっとおったてろ、こら！ きたねえ豚のケツをさらけだせ。ヨシそのまま動くなよ。動きやがったら、ただじゃおかねえぞ。それ！」

鞭が空を切って襲いかかった。

マリヤは、ひいっとかん高く涕いた。「ゴットフリッツ様の持ちブタだ。ブタめ、わかったら、鳴け。豚らしく、ブーって鳴くんだ。コラ、鳴け！」

びびしお尻がぶたれた。

マリヤは鳴いた。

「ブー」

「もっとだ、鳴きつづけろ」

ぶたれながら

「ブーブー、ブー」

鳴きつづけた。

——(了)——

(カット・豪城二)



△ 告 白 △



## お風呂の

## 出来ごと

小 杉 千 恵

ある温泉地で、私は独り静かに湯舟につかり、私自身の成熟した体に、われながらうっとりときいてしまっていました。

突然、セットしたばかりの頭髮に、しこたまお湯をあびせられ、驚いて振り返ると、いつ入ってきたのか十七、八才の少女が湯舟のすぐそばで、立ったままかけ湯を使っているのです。可愛い顔立ちをした仲々の美少女です。けれど、私が振り返ってとがめるように見上げておられますのに、少女は謝りもしないばかりか、平然と見返して、つつ立っておりまして。

腹も立ちましたが、私はこの娘のあまりの美しい肢体に呆然と致しました。少女らしい

可愛い顔立ちに似合わず、グラマラスな白い体を持ち、そのウエストから腿にかけての曲線の美しいこと。

私の視線をどう感じているのか、少女は平気で脚をあげ、私の目の前に全貌を曝す奔放な姿態をとって、ゆうゆうと湯舟のかまちを跨ぎ、私の横の湯の中に立ったままではよかったのですが、そのまま再び胸元にお湯をかけるのに、タオルを濡らせて勢いよく浴びせかけるようにしたので、又も、私の大事な髪は、そのしぶきを受ける結果になったのです。呆然としていた私は、度重なるこの少女の無遠慮さに本当に立腹してしまいました。きっと見据える私の正面で、丸味を持った少

女の肢体が揺れたかと思うと、ざんぶりと首まで沈み、平然として私を無視した態度をとり続けるのでした。

私は彼女に対する報復のいたずらを決心しました。そして、すぐに調子を整えにかかりました。

私はタオルで前を押さえて静かに立ち上りうなじを直すふりをして、そのタオルの片端を長くたらし、その先端が彼女の肩の近くへ流れるようにしておいて、オシッコをしてやりました。それはきつとタオルを伝わって私の仕返し目的を果たしてくれる筈です。ずっと悪質なのはわかっていますが、しっぺ返しは何倍かが普通です。

気付かないのか少女はお湯をすくって顔を洗っておりました。でも少しは匂いがしたのか、変な表情で顔をあげましたが、まさかこの無遠慮な少女も、目の前に立っている二十才すぎの若いお姉さまが、お風呂の中で、こんなハレンチな仕返し行為をしたとは想像も出来なかったのでしょうか。そのまま、小さな声で流行歌をくちずさみ始めました。いい気味です。

私は湯舟の外からお湯の中でよくタオルを濯ぎ、充分にしぼっておいて、早々にあがり



ました。私の執念深さと、彼女の美しさに対する何かが、私に別のいたづらを考えつかせたからです。

思った通り、脱衣室には誰も居ません。少女の脱いだ着物がきちんと入ったかごの奥に美しい刺繍のあるナイロンパンティがかすかにその端を見せておりました。大事を期して私のカゴと彼女のカゴと並べて置き、万一、人が入って来ても、疑われないようにしておいて、私は、彼女のパンティを手にとりました。少女らしくそのパンティは、ほんの少しですがよれており、馥郁とした香りが匂っておりました。私はその一番汚れているところを口にくわえて、しばらく吸いました。少し塩からいような気がしましたが、私の目的は、この箇所私の唾液を浸み込ませて置くことにあったのでした。

あまり少女の余香を楽しんでも居れませんので、充分おしめりのついたパンティとお別れして、私は脱衣室を出ました。

私はその後、そのパンティを身につけた美少女の不審と冷たさにあわてる恥かしそうな顔と、私の唾液が彼女の肌に触れたであろうことを想像しながら、わくわくしましたが、いつしかその美少女が私の友人「さゆり」に似

ていることに気付きました。その上、立場は違いますが、私のしたいいたづらは、いつかさゆりから打明けられたことに似通っていると気がついて、一人で苦笑したのでした。それだけ、あの可愛いさゆりの受難は、私にとってショックだったとともに、私には一種の憧れとして心の中に根を下ろしているといえるのだと思います。

× × ×

さゆりは、私より五つ年下の未だ幼い感じを残した美少女です。彼女は家庭の事情からある大阪の大きなバーに勤めていましたが、とてもその支配人に可愛いがられ、優しくされたものですから、情にほだされて、若気のいたりと申しましようか、その支配人と深い仲になってしまったのです。さゆりはお店では二十才だと申ししておりましたが、実際は十八才でしたから、仕方のないことでしょうが、もう彼から離れることが出来ない程になってしまったのです。しかし、支配人の目的達成の日がやって来ました。これからのお話は、その日の彼女の打明話です。

支配人はさゆりに、その夜、バーの経営者である大金持の老人におつきあいをするよう

にと、いい出したのです。老人の申出を断ると支配人はクビになり、路頭に迷うと云うのです。

彼女は愛する彼のためになら自分は構わないが、彼がそのあと、汚れたといってさゆりを嫌がることをおそれて、そのことを何度も念を押したのですが、彼は決して彼女と離れないと云い、老人の家に一緒に行くと言います。捨てないどころか、彼女がいやなら断って、一緒に死のうとまで云いますので、とうとう彼女は老人の相手を勤める決心をしました。

老人の横には、老人の秘書役であり助手であると言ふ美しい二十一才の加代が坐っておりました。支配人はそのうしろに坐り、じつと、さゆりを見詰めていました。

さゆりは加代の存在に驚きました。女に見られているということは、最高の屈辱です。何が行なわれるのか、その時はまだ全然さゆりにはわからなかったのですが、それでも彼女の体が、老人にぎん味される状態にあるということだけは、うすうすわかっておりました。このため、この助手と称する若い女に、一緒に見られるということは耐え難いことでした。しかし支配人の目をみると拒否するこ



とが出来ずにおずおずとその前に立ったので  
す。

案の定、彼女のスカートは胸のあたりまで  
まくりあげられ、助手の加代が、その端をピ  
ンでセーターにとめてしまい、その上、両手  
をうしろにひっぱって、抑えつけてしまいま  
した。彼女はまっ白なパンティを露出させら  
れ、そのむっちりとした太腿まで赤く染め、  
恥かしがったことでしょう。

老人は、彼女のパンティに鼻をくつつけん  
ばかりにして嗅ぎまわりました。

パンティの匂いを満足するまで吸い込んだ  
老人は、加代に目配せすると、いきなり加代  
は、さゆりを後から押すようにしてお風呂の  
方へ引き立て、彼女に服を脱ぐように命じま  
した。

後からは老人と支配人のニヤニヤした視線  
がからみついている前で、彼女の着ていたも  
のが一枚ずつはぎとられ、加代は恥ずかしさ  
にすくむ彼女を縛ってしまったのでした。さ  
ゆりは美しい頬をまっかにして身悶えしたこ  
とでしょう。恥かしさにのたうつ彼女の心に  
反し、より一層その香気は、老人を愉しませ  
たに違いありません。

老人、支配人、加代それにさゆりと四人の

男女は、老人の家の大きい浴槽に、勿論、裸  
になって入っております。

老人と支配人は既に湯舟に首までつかって  
いました。さゆりは後手に縛られたまま、そ  
の縄尻を加代が持ち、お風呂のかまちに立っ  
ていました。加代の裸体もすばらしいもので  
したが、何よりもさゆりにとって救いは、裸  
が彼女一人ではないということでした。

加代に追われるようにして、さゆりは出来  
るだけ腿を拡げないように苦心してかまちを  
またぎました。加代は堂々と美しい曲線を屈  
めながら、かまちを越えました。

首までたっぷりとお湯の中につけて、小さ  
くなっているさゆりに対して老人は、立ちあ  
がることを命じました。

湯につかったまま見上げる三人の前に、さ  
ゆりは縛られたままの姿を晒さなければなり  
ませんでした。ふっくらとした肉付のいい彼  
女は上気して美しく、悶えていたことでは  
う。

「さゆり、そのままオシッコをきなさい」と  
支配人が湯に浸かったままで、さとすような  
口調で指示しました。おどろいて顔をみる彼  
女に支配人は、もう一度おごそかに「びっく  
りしないでもいい。さあ、やりなさい」

とくり返しました。「いや、いや、かんにん  
して」と云うさゆりに、老人はニヤニヤしな  
がら、支配人が困ってもよいのかと強迫した  
のです。

やがてあきらめたさゆりは、大きく顔をの  
けぞらせてこの変な命令に従ったのでした。  
するとどうでしょう、身も世もなく恥ずかし  
がっている彼女を、三人はにやにや笑って眺  
めるだけでなく、老人は両方の手のひらを合  
せて舟型を作り、掬うようにして彼女の足元  
のお湯とたわむれ出したのです。彼女の羞恥  
のシヨ―は彼女の美しい顔と肢体によって大  
成功だったことでしょう。

× × ×

お風呂から上った湯上りのすべすべしたさ  
ゆりの体は白いシーツをかけた布団の上に仰  
臥させられたそうです。

その後、当然、生ずるべき事柄はここにあ  
らわし得ないことですが、私はその話を聞い  
た時に感じたショックをまざまざと思い浮か  
べながら、あの美少女が今ごろどんな顔をし  
ているかと思うと、明日でももう一度会えな  
いものかと、しきりに胸がうずいて仕方がな  
かったのです。





## 四

おわかりと思いますが、彼には、フェチストとしての血が、彼の体内を流れているのです。後でわかると思いますが、彼は又、マゾヒストであることをここに記しておきます。

なお、第二章の文は、彼が変身する前に書き残したものです。彼の文は、まだ続いているので、もっと読み進んでみましょう。

I市<sup>あい</sup>。南は、東西に山がっらなり、北には広大な海が広がっている。市の中央を南北に

## フェチ小説

## この胸のときめき

(2)

文及カット 日本武士

川が走っている典型的な三角洲地帯である。

I駅<sup>あい</sup>は市の西にあり、デパート、商店街、映画館やその他の建築物<sup>たてももの</sup>が南の方にのびている。北の方には小高い丘がっらなっている。私の転校したF大学が建っている。市の左側に整美された緑地があり、市の建築物、図書館、病院、公園などと共に、B大学がある。

F大学とB大学は同じ時代に、F大学は女子大学、B大学は男子大学として建ったそうである。二人の初代は仲が良く、一杯飲みながらどちらがどちらを建てるかを決めたそうである。しかし、現在両方の代表は、仲が良くな

いらしい。これは、数年前、経営が苦しくなり、苦肉の策として、B大学を男女共学にしたのがきっかけである。これが又、意外と図に当り、入学試験の際には、F大学から多数の在学生徒の受験姿が見られたそうで、このため、生徒間の対立も目立ってふえてきているそうである。

F大学は、四・五年前までは、威厳をもって女子大を保ってきたが、これまた経営難で男女共学への転向をやむなくされたそうである。であるからして、私の転校したF大学は女子が八割位をしめている。父は大変な大



学を選んだもので、女の中に入っていればおとなしくなるとでも思ったのであろう。

○

三年生としての最初の一月は、何んとはなしに過ぎてしまった。この市には、例の店が四店もあり、毎日、それらの前を通りながら、アパートと学校の間をいききした。

六月に入り、鈴木という友人もでき、学校のことに関心がよってきた。私が前にいた大学で学校を相手に闘ってきた、ということを彼らに話すと、さっそく「実は、私たちは何んとか今のこの状態を改革しようと努めてきたのだが、良いリーダーにめぐまれなくて……」ときた。

話がこれ以上進展しないうちに、私はあわてて口をはさんだ。

「ま、まってくれ、私はリーダーにはならないよ。もうたくさんだ」

「でも、そこをなんとか……」

彼らは執拗に食い下がった。

「それに、幹部の女性の横暴さには、女性でさえきらっている連中がいるんですが、彼女達は良いリーダーがいけないという理由で、私たちに加わらないんです。ですから、瀬川君がリーダーになってくれさえすれば百人力な

んですが……」

私の顔色をうかがうように、じっと数人の視線が私に集まった。

「でも私は、ただそうだったというだけで、何もできませんよ。それに……」

「いいんです。ただ、我々は経験あるリーダーがほしいんです」

「名前だけですか」

「いや、そういう意味でいったのではないんです。我々がリーダーとして従えるのは、あなただけなんです」

「私だけ？」

「ええ、あなただけです」

「それほどまで私を信頼してくれるなら、しようがない、ひきうけましよう」

「ひきうけてくれるのですね」鈴木君は、イスから立ちあがり、「さっそく、みんなに知らせてきます」

「ま、まってくれ」私は、彼を呼び止めた。

「みんなにしらせる。じよ、冗談じゃない」

再び全員の強い視線を感じ、鈴木君がとまどった様子で私にたずねた。

「どうしてですか。皆に知らせることが、何かおかしいですか」

「こんなことは秘密のうちにするものだ」

初めからの、リーダーのこの意表をつくワシマンぶりに幹部のほとんどはとまどった様子だった。

しかし、驚いたのはそれから私の方で、彼らは毎日幹部会を開き討論会をした。幹部は、男性が私をのぞいて五人、女性は三人、全員三年生であった。

こうして、私がリーダーになってから初めての一週間は、討論会であけくれた。これでは、私が一月かかってこの大学について知ったことの十倍もを、たった一週間で知ることができた。

それによると、この大学のボス的存在は、おやまたまり小山田真理といって、この市のボス的存在で初代はF大創始者のパルプ工場の社長の娘で学生委員会の長だそうである。それに、真理の右腕である副委員長の赤尾さゆりも要注意人物だそうで、鈴木君に言わせると、赤尾は赤いしっぽのサソリだそうである。

五月も中旬になると、男子はほとんど加入し、毎日キャンパスで、学校側に対する抗議集会が開かれた。今度の闘争は、前のときと違って、男子の地位の向上を目標とする運動であった。我々の合言葉は、「J・S・ミルなんて糞食らえ！」であった。ミルは、墓



の中でくしゃみをしているだろう。今回は、幹部が先頭に立って指揮をする必要はなく、もっぱら、戦術会議にのみ出席すればよかった。これなら、自分の身は安全だろう、と思った。

ところが、五月も終りに近いある日、昼休みにキャンパスの東側で抗議集会を開いていたC班を、二・三十人の女生徒がとり囲み、いろいろと文句をならべ、昼休みの間中ずっともめていたそうだった。C班の男性闘士諸君二十名は、ただ相手の言うことに、うなずくだけだった。これではいけないと思って、すぐに全体集会を開き、戦術の変更を話し合おうと思ったが、この集会に集まったのは、全体の約半分程であった。何んともまあ、この大学の女子の権力の強いこと。

こうして、だんだんと我々に対する圧力が大きくなるのと反比例して、闘士は減る一途をたどった。六月になると、とうとう幹部九人だけになってしまった。へった理由には、六月末にB大学と対抗の競技会があるので、男子の約半数が運動部にひっぱられたせいもあった。

六月三日に、新たな事件が発生した。私たち幹部は、私がリーダーであることは知られ

ているが、他の幹部連中は、あまり知られていなかった。万一の場合に、そなえてであった。しかし、幹部の二人、宮本君と村田君が真理ら数人にリンチを加えられた、という知らせが入った。調べて見ると、リンチというのは大げさで、彼女達に囲まれておどかさされたということだけであった。おどかさされただけでリンチだなんて、それなら前の学校のときのなんては、彼らにとっては、戦争以上のものだろう。

しかし、こういってはおっておくわけにはいかなかった。さっそく幹部会が開かれ、競技会が終るまで学外での活動にしよう、という鈴木君の提案が取り入れられ、授業をボーコットすることになった。

四日、五日とみんなで喫茶店で討論会を開いていたが、六日になると、女性三人が、言いがあわせたように欠席した。男性同志となると、つい話の筋がはずれ、この時もとりめなくなつて解散となった。

帰りに新たな店「ユミ」を発見した。女性下着の専門店のような店であった。

九日、胸の中でさわいでいるものが何んであるか気づき、街へ出た。五店の前を通りすぎながら観察した。

十日。雨だ。雨は大嫌いだ。が昨日の観察地域へ出発した。最初の店は、駅の地下街にある「プティ」という店である。

月曜日のせいか、客はまばらであった。通路で帽子の雨水をはらい、コートをしずくを取り、ネクタイをなおし、呼吸を整えてから入った。通路側から、ヤングマンズ・コーナー、くつ屋、カバン店、そして、いよいよ次が目的の店「プティ」であった。ドアが開いてあり、人通りもまばらだったので、すぐ入っていった。今まで一人きりだった店員が、今日は二人になっていた。ついていない。しかも、私が二人のところまで行く間中ずっと私をみつめていた。

(ここに、前田という人がいると聞いてきたのですが、御存知ないですか)(男性のはありませんか)(あなたの名前は、武田というのではないですか)頭の中を、失敗の場合のセリフがかけめぐった。どれにしようか、まよっているうちに、二人の前にきてしまい、しょうがなく、一つ深呼吸して口を開いた。「あの、プレゼントをするのですが、リボンをかけていただけますか」

「はい」  
事務的な返答だった。



「何をさしあげましょうか」

別の店員が云った。

「あの、ネグ……」

私が云いかけた時、客が入ってきたらしく最初に返答した店員が「いらっしやいませ」と云った。

「いらっしやいませ？　ちくしょう。私には言わなかったじゃないか！　英敏<sup>ひでとし</sup>よ、気にするな。彼女はきつとレスピアンなのだから」私の心が懸命に私をなだめた。入ってきた客がどのような女か振り返って見てみると、四十代のやせた婦人であった。店員は私より趣味が悪い。

「ネグリジェですか」

別の店員が気をきかせて云ってくれた。すてきな人だ。

「ええ、そうです」

「サイズは」

と言いながら、このすてきな人はネグリジェのある方へ歩いていった。入ってきた客はスリッパの陳列してある所で、店員と愛をかついて？　いた。こちらに注意をはらっている様子はなかった。

「サイズは、と……一六五センチメートルぐらいの人なんですけど。それから、色はクリ

ーム色なんですけど、ありますか？」

「ええ、御座います」

彼女は奥の方へ行って、箱をもってきた。

私の前で、ふたを開けて中を見せた。

「これでよろしいですか」

「サイズはいいんですね」

「ええ、だいじょうぶです」

「あッ、それから、これと同じ色のパンティをくれませんか」

「クリーム色のパンティですね」そう云ってから、パンティの入っているガラスケースからクリーム色の二・三枚、取り出し、「どれがよろしいですか」と、私に示した。

私としては全部欲しかったのだが、自重してフリルのついた方を選んだ。まだ調子がでてこなかった。みんな嫌いな雨のせいだ。お金を払うときに、とんだヘマまでやらかしてしまった。これは店員のサービスのよさのせいもあった。とにかく、雨が悪いのだ。

次は、「ユミ」である。今の箱は、駅のコインロッカーにあずけ、手ぶらの状態で出発した。

コートの衿<sup>えり</sup>をたて、両手をポケットにつっこみ、帽子を深くかぶり、雨をのろいながら一度店の前を通りすぎた。店員が一人だけだ

だったので店へもどった。ドアの前で帽子の水をはらっている間に、ふとった、四十代の婦人が、すました顔で私より先に店へ入ってしまった。どうしようかと迷っていたが、気づいてみると店に入ってしまった。

店員は、私を見ると奥に向かつて、ちょっとなまりのある声で云った。

「奥さま、お客さんです」

そして今度は私に向かつて、

「いま、奥さまがまいりますから、おまちください」

こう事務的に云って、すましたデブのところへ行ってしまった。

どうも今日は、四十代の婦人にとりつかれる日のようだ。又今度も四十代の「奥さま」だろう。こうなると、かえってやりやすい。

「どうも、おまたせしてすみません」

メゾソプラノの声とともに、私の前に女主人が現われるまでの約一分間、私は、充分に店の中を楽しませてもらった。

店の奥には、ネグリジェが飾ってあり、店の左側にはブラジャーとガードル。右側にはスリッパ。店の中央には、三つの台があり、一つにはスリッパが、残りの二つにはパンティが山をなしていた。店の入口には、真白な



ネグリジェに身をつつんだマネキン人形がいて私にウイंकをしていたし、彼女の隣には、赤とピンクとクリームのパンティの花が咲いていた。私は、マネキン人形とともに、この花園を、散歩、いや、ここに住みたかった。

マネキン人形の方へ一歩近づいたときに声がしたのでふりかえった。そのとたん、ピンクの花園がそこにあって驚いた。しかもニヤニヤ笑っていた。また、頭の中で心臓が鳴りだした。

「この奥さまが四十代だって？」

私には、二十八才ぐらいにしか見えなかった。しかも、美しいという形容詞では、彼女を形容できなかった。詩人なら上手に形容できるだろうが、私には、すごい！が精一杯だった。それに、また、すばらしいグラマーで、赤いエナネルのミニスカートに、胸もとと袖にフリルのついた、ピンクのこれまたすごく薄いナイロンのブラウス、という装いの女性であった。

「あ、……い、いえ……べつに……」

彼女は、私が一生懸命に数を数えて、冷静さをとりもどそうと努力しているのを、どうとっただろうか？

「どうかなさいましたか？」

「奥さんというから、もっと年をとった、失礼、方を想像したものですから」

彼女のニヤニヤした顔が、何か心中を見透かされているようで気になった。

「わるかったかしら？ 瀬川さん」

この言葉は私の心臓をひっくり返す威力があった。

私は子供のころ、よく人を驚かせてよろこんだものだった。戸のかげにかくれたり、後からこっそり近づいて驚かしたりして笑いこけた覚えはある。だが、いまだかつて面とむかって驚かされたことは一度もなかった。それがこの時ばかりは「驚いた」なんてものではなかった。彼女が「どうかしましたか」とニヤニヤしながら云うまでの二十秒間、催眠術でもかけられたように身体が硬直し、呼吸することさえもできなかった。

一回、大きな深呼吸をして、空気を身体ですみずみまで行きわたらせてから、目をつぶって五まで数を数えた。目を開いてもまだそこに、顔にニヤニヤした様子を表わしている女がいた。又、目をつぶり、五まで数を数えてから目を開いた。僕の記憶の中には、一度も現われたことのない女だった。

「あ、あなたは、誰れ？」

「あらッ。どうして、私があなたの名前を知っているのか、という質問のほうが妥当な言葉じゃない？」

「両方が一番妥当さ」

私は、のどの奥からひっかかった声を無理にしぼりだした。

「私はF大学の出身者なのよ。それに、在学中は学生委員長をしていたのよ。だから今でも、誰がアンチ・フェミニスト運動をしているとか、どうとか、色々な情報が入ってくるのよ」

ニヤニヤした顔が急にひきしまり、まじめな顔に変わった。

「ところで今日は、男性のあなたが、どうしてまた、ご縁の薄い女性下着の専門店などにおこしのですの？」

私は、逃げ出したい気持ちを懸命にこらえて云った。

「ある女性への、誕生日のプレゼントを買い揃えるためさ」

「お母さまの？」

まさしくからかっている口調であった。こんちきしょうめ！

「お初にお目にかかりますが、あなたは、お



ふくろのお姉さんですか？」

私も負けてはいられない。

彼女はぐっときたらしく、しばらく私をにらんでいたが、

「それは、ききながすことにするわ」一つ深呼吸してから、「どなたですか」

「もちろん、女の人さ」

「ふうーん。まあそうでしょね。で、サイズはあるんでしょうね」

「もちろん」

私は、ジャケットの内ポケットから手帳を取り出した。

こんなときの用意ばかりではなく、私の趣味のために、身長が一六五―一六八センチメートルぐらいの女性四人のプロポーションがちゃんと書いてあった。これらは、あるカメラ雑誌で手に入れたものである。

①H・一六五、B・八三、W・五六、H・八三。

②H・一六六、B・九十、W・五六、H・九一。

③H・一六八、B・八五、W・五六、H・八七。

④H・一六八、B・八六、W・五四、H・八七。

彼女に見られないようにしながら、私は云った。

「身長が一六八センチメートルで、八六―五四―八七が、最後にあったときのサイズさ」

「ふん、ところで品物は？」

「スリップとブラジャーとパンティーがセットになったのがあればいいんだが……」

「ええ、あるわよ。無地のはないけど」

「えっ？」

私が訊きかえすと、がっかりしたような顔で云った。

「どんな色がおよろしい？」

「クリーム系統のを」

「サイズを、もう一度どうぞ」

彼女は品物のある方へ歩いてゆきながら私を見ずに云った。

「八六―五七―八七」

「あら、さっきは九十一―五六―九二と云わなかった？」

「友人は、残念ながら、あなたほどのグラマ―じゃないよ」

「ふうーん」と云ってから、箱を取り出し、「これで、いいかしら？」私を振り向きながら、白地に赤ではなく、オレンジ色の花をちりばめたセットをさし出した。

「ああ、これでいい。これにします」と云い彼女が何かを云い出そうとする前に、私はつけくわえた。「それから、これと同色のパンティをもう二枚」

彼女は黙って、うなずいた。

「こちらへどうぞ」

私は、パンティのある台のところへ案内された。

彼女は、たたんである、というより、まるめてあるパンティのうちから、同じ様な色のものを四・五枚取り出し、

「こんなところです。どれにしますか」

私は、ポケットの中で汗ばんでいる手を、ジャケットでふいて、パンティを一枚一枚、手にとって見た。手がふるえてきた。初めは心にそう感じていただけだったが、しだいはっきり、目で見えるほどになった。彼女の目も私の手に気づいただろう。

私は急いで、レースのフリルのついたものを選び、彼女に渡した。彼女は黙って受取ったが、目の奥で何かが光った。

見破られたかな。

彼女は、カウンターのところへ行き、包装をしようとして前かがみになった。九十センチメートルのバストが、深くきりこんだ衿の



フリルの間から、私の目の中に飛びこんできた。真赤なブラジャーしかつけてなかった。心臓を正常な位置にもどそうとしていると、いきなり彼女は顔を上げた。

「プレゼントの相手は、どんなご関係の女性ですの？」

「ずばりとききますね」

「興味をかきたてられるわ」

「どうしてですか」

「私の質問が先よ」

「えっ」

「相手の女性のことよ」

「ああ……身長が一六八で、八六一五四―八七さ」

「そうとうに、しん密な関係なのね」

いつまでも、このような頓知問答をしていたら、しっぽが出てしまう恐れがあるので、私は、どうでもいいような態度を装った。

「このプレゼントは、お別れの印さ」

彼女は、包装の手を休めた。

「あなたって、サディストなのね」何か、がっかりしたような口調のように響いた。

「どうして」私は、たずねた。

彼女は、リボンをかけながら言った。

「学校では、運動のリーダーをしているし、

女性をこのようにあつかったり……」

「と、とんでもない。ボクは、内気なマゾヒストさ」

彼女の目の奥で急にライトがついたが、すぐ消えた。

「はい、できましたわ。こちらで郵送しましょうか」

最後の演技の見せどころである。

「いいです。他にも送る物がありますから」

彼女は、私におつりを返ししながら訊いた。

「あなたは本当にマゾヒストなの？」

「そうですよ、どうして」

「私、証拠が見たいわ」

彼女の目の奥が、ギラギラ光っていた。

「こんなところで？」

私は、からかっているんだと思って調子をあわせた。早くここを出たかった。

「十二日は、お店が休みなのよ。アンチ・フェミニスト運動のリーダーと、前の学生委員

などではなく、男と女としてお話してみたいわ、マゾヒストさん」

どうやら、デートかなんかのさそいのつもりらしい、やはり女性上位の町だ。こんなセリフは、アル・ウィーラーか、ダニーボイド（カーター・ブラウンの小説の主人公）の使

うセリフだ。そうだ、幹部全員でおしかけてあつといわせてやろう。これはいい。しかし一応は拒否反応を示しておかなくては男としての名がすたる。

「十二日は、授業があるので……」

「あなた方は、ボイコット中でしょう」

私があっけにとられて、口をばくばくしている間に、彼女はつけくわえた。

「前にも言ったでしょう。何んでも情報が入ってくるのよ」

なんとということだ、CIAやFBI。はてはUNCLEをぎゅうじっているのが、彼女だったとは。

「何をするんですか、十二日に」

「私はすてきなコレクションを持っているのよ。それを人に見せたくてしょうがないの」

「もう十分、見ていますよ」

「えっ？……ああ、これはその一部よ」

彼女は、顔を上げ、店の中を見渡した。つられて私の目も、彼女の後を追った。さっきの婦人がまだいた。婦人の声が急に耳に入ってきた。私は、一つ、深呼吸をしてから云った。

「コレクションがどんなものか聞いても、教えてもらえそうもないので聞かないでおくけ



ど、どうしてまた、私に白羽の矢が当たったのですか」

彼女はそれに答えず私に箱を渡し、

「四時に駅前のスナック『ベル』で会いまし

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円(送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円(送共)
半年分	6冊	二一〇〇円(送共)
一年分	12冊	四二〇〇円(送共)

郵便番号  
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れた方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時に、お手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下されるには大阪住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお込みの上、何年何月号より何力月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円(切手可)の御負担を願います。

○本誌は十月号から定価三五〇円に値上げになりましたので、予約購読料は三月分三冊

よう」

ちくしょう、とぼけるのならこっちだって

得意中の得意だ。

「誰と?」

一〇五〇円、半年分六冊二一〇〇円、一年分十二冊四二〇〇円になります。今後当分の間誌代の改訂はしない予定です。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細表を雑誌に添布致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致しますから継続お申し込み願います。継続のお申し込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

「内気なマゾヒストさんとよ」

彼女は、マゾヒストをやけに強調した。また、さっきの婦人の声が聞こえなくなった。

彼女は、ニヤニヤしながら、ねっちりした口調でつけくわえた。

「十二日の四時、『ベル』よ」

「ああ、いけたらね」

私は、心臓を万力でしめつけられたようであり、胃の中で虫たちが、たき火をしているように感じた。とたん、身体中の力がぬけてしまった。しかたなく、足をまた、地面をとかそうと懸命になっている雨の中へ向けた。彼女が、後で陽気にさげんだ。

「雨にながされないでね、内気なマゾヒストさん」

さっきの婦人はまだ店の中にいた。あれも彼女のコレクションの一部かもしれない。

ずーっと彼女のペースであった。ちくしゅう。糞食らえた。私は、地面に当って飛びはねる雨をけりながら、E駅へ足を向けた。

他の店なんて糞食らえた。

雨なんて糞食らえた。

サディストなんて……。ちくしゅう、糞食らえた。

——(未完)——





## 愛と死の映像

## 大 奥 忠 臣 蔵

中 康 弘 通

—

この稿が活字になるころには、もう終了してしよう。関西テレビ・フジテレビがネットワークで、毎週土曜の夜おそく放映して来たドラマ「大奥」は、徳川歴代將軍の正室側室をめぐる、男子禁制の社会に特有の、陰湿な悲劇の数々を主にとりあげて、かなり娯楽性の勝ったとされている作品である。

ナレーター（岸田今日子さん）が重々しい口調で語り出すと、いかにも「大奥」にふさわしいムードがかもし出されるから面白い。

その「大奥」のうち、第32回から第34回に至る三回分は、十代將軍家治お世継ぎ家基の生母、お知保の方にまつわる悲劇を描いている。

放映日	回次	題 名
43・11・9	32回	刃傷お鈴廊下
43・11・16	33回	鮮血の誓い
43・11・23	34回	仇討ち神田祭

すなわち是である。その制作スタッフは、

制作 関西テレビ株式会社

東映株式会社

企画 芝田研三氏（関西テレビ）

岡田 茂氏（東映）

製作 加藤哲夫氏（関東テレビ）

翁長孝雄氏（東映）

三村敬三氏（東映）

脚本 高岩 肇氏（32回・34回）

高橋 稔氏（32回）

監督 倉田 準二氏 助監督 中島 信宏氏

録音 堀場 一朗氏 照明 長谷川武夫氏

美術	雨森 義允氏	編集	市田 勇市
音楽	渡辺 岳夫氏	記録	森村 幸子氏
装置	前川宗太郎氏	装飾	山田 久司氏
美術	久斗 敏厚氏	結髪	白鳥 里子氏
スチル	森 武司氏	宣伝	中川 卓広氏
演技	饗庭 益雄氏	進行	長岡 功氏
進行	上田 正直氏		

主な配役をストーリー解説の順に記事と、

大奥総取締り・藤岡 浪花千栄子さん

老中・田沼意次 河津清三郎氏

お世継ぎ・家基 太田 博之氏

その生母・お知保の方 小畑 絹子さん

お知保の方づき中藤・浦路

（のち御右筆・お端下） 久保菜穂子さん

同 中藤・環 清水まゆみさん



同	中藤・千絵	城野 ゆきさん
同	中藤・九重	白木 マリさん
同	部屋子・しのぶ	沢阿 由美さん
同	部屋子・静香	加納美栄子さん
同	部屋子・伊吹	松村 康世さん
同	部屋子・お琴	岡田 千代さん
同	部屋子・おちか	忠垣 雅子さん
同	部屋子・お美代	赤松 正子さん
二条の方(もと藤岡づき中藤玉江)		
同	藤岡づき中藤・芳野	桂 麻紀さん
同	中藤・瀬川	伊藤 幸子さん
同	特使・竹の宮順子	南風 夕子さん
同	老中・阿部備後守	堀 みどりさん
同	かもじ部屋仲居 楓	山岡 徹也氏
同	百合	水科 慶子さん
同		弥永 和子さん

そのほか、十朱久雄氏、赤木春恵さん、市川男女之助氏らが出演している。

ではストーリーは――

十代將軍家治が老境に入ったところ、大奥では総取締り老女の藤岡が、表では老中の田沼意次が権勢をほしいままにしていた。意次は反対派を陥れ、煙たいお世継ぎ家基をも毒殺した。家基は遠乗り先の東海寺で、意次の命を受けた池原雲伯が毒を投入した茶を喫し、

帰途の馬上に、十七才の若さで斃れたのである。雲伯もまた大川端で骸となっていた。

嘆き一と方ならぬお知保の方を、もはやお世継ぎ生母でもないものと、意次と結ぶ藤岡は狭いお局に移し、代りに二条の方を入れた。中藤・部屋子たちも半減された。

二条の方が鶴松を産むと、瀬川をやってお知保の方に、ご機嫌奉伺を藤岡は強いた。意次と藤岡を結ぶ線が家基毒害の犯人と知っている環らは口惜しがったが、お知保はおとなしく瀬川や、また浦路に代って中藤となった芳野に従って行った。

かつての自分の住居で藤岡に、お世継さまをあやせ、と迫られ、思わず落涙しそうになって逃げ帰るお知保の方を、藤岡は追った。

「お世継さまのお守りもよう出来ぬ役立ずは大奥におけぬ、尼寺へ行きやれ」

毒舌と共に突きつける剃刀を、環も千絵も受けなかった。裾踏みしだいて藤岡は剃刀を揮い、お知保の方の髻を切った。家基の位牌を踏み割った。髪を乱したお知保の方の眼に剃刀が映る。震える手が剃刀を執った。立ちあがった。走った。藤岡に迫った。あわてふためき、わアッと叫んで逃げる藤岡。芳野がお知保の方を抱きとめ、瀬川が藤岡をかばっ

て逃げた。芳野の「刃傷でございますッ」と叫ぶ声。藤岡の傷は浅かった。

環が走り寄る出会いがしらに浦路も御右筆部屋から出て来た。二人は顔を見合わせた。とり押えられたお知保の方は、阿部備後守邸にお預け、即日死罪となった。白衣に髪解き流した彼女を、庭上処刑の席へと武士が導くとき、廊下したの土には浦路と環が手をつかえていた。主従の別れははかない。二人の悲痛な叫びをあとに、彼女らの涙の視野をお知保の方は、幕張りの一隅に白布を敷き三方に載せた懐剣の待つ刑場へと歩み去る。浦路と環が相擁して泣くとき、カメラはロングで端座のお知保の方を捉えて終わる。

「鮮血の誓い」は浦路、環らの復讐の血盟を描くとともに、反面また藤岡の策旗を描く。

復讐を恐れる藤岡は、彼女らを一気に大奥から追放してしまう手段を練った。たまたま京からの特使、竹の宮順子の下向は、好個の機会であった。大切な接待役に、藤岡は浦路を指名し、その失敗を待ってまず浦路を追放しようと考えた。

浦路は、環、千絵を補佐に、鋭意接待饗応の大役ととり組んだ。勿論すべての準備は藤岡の認可を得てからでなければ運ばない。



そして、藤岡、瀬川は意地悪く浦路らに對応した。事前に内示を得、あるいは内諾を得ていたことが、すべて当日を控えて藤岡の舌端にくつがえされた。

たとえば襖である。何百枚という襖の図がらが、藤岡によって否認された。一夜での張り替えは不可能である。浦路までがさすがに顔いろを変えたとき、環の言葉が急場を救った。表具師である環の実家の力で、男子禁制の大奥ゆえ江戸中の女の表具師が集められ、夜明けには襖は張りあがった。

計画の失敗を知っても藤岡は

「以後、気をつけるのじゃ」

との捨てゼリフを忘れなかった。

そして、いよいよ特使饗応の膳が運ばれたとき、ご膳の白飯を見るなり、

「ご膳は餅と決まっていよう。その紙に何と書いてある」

藤岡は苦い顔で膳を見やっていった。浦路が目録を見ると、前日見たものとは違っていた。とうとう浦路は追いつめられた。

竹の宮順子が、明るくさりげなくその場をとりなして座を立ったあと、

「このままではすまぬぞ」

といいつつ膳を蹴立てて、藤岡と瀬川は長

廊下へと歩み去ろうとした。唇を噛む浦路を見かねて、千絵が藤岡にすがった。

「お膳部は、すべて私の責任でございます。一切の責任をこの私にとらせて下さいまし」

千絵は必死であった。

「うるさい。大口叩く前に見事一切の責任を果たして見い」

見くだされて言葉を呑む千絵へ、藤岡は

「とれまいが、お前には……」

蔑みの言葉とともに千絵を蹴放して、あとをも見ず藤岡は歩いた。

「藤岡さま！」

只ならぬ叫びに藤岡が振り向いたとき、その場に坐り直した千絵は、左手で着衣の衿をつかみ、ぐいと、縁が胸乳と肩に近づくまで左に引いた。露わになった胸もとへ、右手で握りしめた長箸を、千絵は一と思いに突き立て、挟った。さすがの藤岡も瞠目。千絵は、噴き出す血汐に胸もとを染めつつ、

「お願い……浦路さまをお許しに……」

文字どおり血を喀く言葉とともに、苦痛の瞳が動かなくなり、その場へ崩折れたとき、血にまみれた長箸が手を離れて落ちた。

「千絵さん！」

口々に呼びながら朋輩がかけ寄るとき、浦

路は、一心に何かに耐え、何かを念じ、探る眼であった。「鮮血の誓い」は、文字どおり血盟からはじまり、千絵の流した犠牲の血汐に終わった。

いよいよ「仇討神田祭」であるが、この回の導入部には、お知保の方の最期、それに千絵の自害を映し出す。後者は「鮮血の誓い」に描写されただけに今回は簡単で、胸もとを抑えるように体を前傾する千絵の姿が映るだけ。しかし前者が、カメラが、三宝を前に端坐した姿から、背後に大刀を振りかざした武士に移り、次いで三宝の懐剣へ差し伸べたお知保の方の手も半ばで、血汐がとび散り黒塗りの短刀が鞘に納まったまま転がる景のクローズアップで終わるのは、かえって無惨である。

さて、藤岡は浦路を叱責し、台所のおはしに格下げをいいわたす。しかし浦路は恥じもあわてもせずに屈辱を受容する。

「いさぎよう自害した千絵に、恥かしいとは思わぬか、お中臈まで勤めた者が……」

藤岡に嘲けられても浦路は面を伏せて耐える。そして出て来た彼女を、血盟した環、九重、伊吹、お琴、静香、おちか、お美代、し



のぶたち、百合、楓も加わって

「あんまりです」

口々にいきり立つのへ、浦路は酔って、

「もうよいのです。仇討ちなどと女の身では出来ませぬ」

とまで、いう。おちかとお美代は諦めた。

「それは本心ですか」

つめ寄る何人かの背後で、九重は浦路の様子を見守っていた。環は皆をなだめた。

伊吹とお琴は、九重の手引きで、お庭に野点<sup>だて</sup>を楽しんでいる藤岡を斬ろうとし、かえって伏せていた忍びに斬殺された。

日を経て、たまたま、お端下姿の浦路に

「私は信じています。浦路さまも私を信じて下さい。本心を、私に……」

直情型の環には、浦路の深慮とは思っても余りにも平静な浦路の勤めぶりを見ていられなくなっていた。しかし、浦路は巧く環をはぐらかす。眼に涙を溢れさせて去る環であった。その風情を物蔭から見た九重は、早速、藤岡に報告した。

環らが集まっているとき浦路が来た。裏庭であった。白い眼を向ける環らに浦路は、ここに裏切者がいると明言する。九重につめ寄る。特使饗応の目録をすり替え、千絵を自害

に追いやったのも、伊吹とお琴が伏兵に斬殺されたのも、すべて九重の内通だったと……いい逃がれようとした九重のふところから金包みが落ちた。殺気立った環たちに追いつめられ、九重は過って古井戸に落ちた。

女たちははじめて、裏切り者を恐れて本心を睨ましていた浦路を理解し、許しを乞うて手をつく。しかし浦路は静かに、

「わびるのは私です。もっと早く気づかねばならなかった。千絵さんも死なずにすんだのでした」

と制し、失くした同志の分だけ、結末は固くなった。一方、九重の交死から藤岡の恐怖が強まった。目に見えぬ鉄輪が締まって行くようであった。刀腰元を身辺に繞らせ、隙のない日常がはじまった。

大奥の内では仇討ちは不可能と知って、浦路は百合としのぶに暇をとらせた。外部で準備を進めるためである。しのぶは研師研ぎ源の娘、百合は呉服屋越前屋の娘であった。仇討ちのための刀と衣裳が二人の力で整えられた。

二条の方の産んだ鶴松が初誕生で、産土神の山王さまへ参拝の日、神田明神の祭礼で賑わう街で藤岡を討つ、それが浦路の作戦であ

った。密書は越前屋の番頭が運ぶ。いよいよその日、環らは次々とお宿さがりを願ひ出て外出した。しかし浦路は禁足を命じられた。五人の女は研ぎ源の二階に集まり手古舞い姿に身をやつし、刀を手に浦路を待った。

刻限は経ち、物見の百合も、また大奥に残る浦路をよそに、鶴松の急病で参拝は延ばされた。やがて鶴松は死んだ。鶴松を足がかりに栄達を狙う藤岡は、無念の齒がみとともに外出の支度を命じた。田沼邸へ行くためである。浦路は、危うく発見されそうになりながら、長持に潜んで大奥を出た。その間も、五人の女たちは立ちっ居つして、成否を疑いさえしていた。しかし、

「どうしましょう」  
と年若の娘たちが悲痛な声を挙げたとき、環は、祈りを籠めるように、

「待ちましょう」

ただ一言、きびしい放った。信ずる者のみの決断がそこにあった。

浦路が来た。計画の変更が告げられ、程なく手古舞い姿の六人は、祭礼の列に入って賑わう街へ出た。大奥からは藤岡の駕籠が近づいて来る。ついに二つの行列が行き遇った時六人は藤岡の駕籠に迫った。驚愕して田沼邸



に逃げ入った藤岡を追って、六人も邸内に入  
った。田沼邸の武士と斬り結びながら、六人  
は藤岡を探し求めた。ついに宝物庫に押し入  
った時、藤岡は、突きつけられた浦路の手の  
剃刃——お知保の方が髪を剃られ、恨みをこ  
めて藤岡に向けたそれ——におののいた。

やがてお知保の方の墓前に六人の女たちは  
坐った。浦路の手で、白紙に載せた剃刃が墓  
前に供えられた。藤岡の首級に代わる頭髮が  
添えられていた。報告が終わったとき、持参  
の刀を彼女たちは次々と引き抜いた。すべて  
は終わったのである。

浦路 二十八才

環 二十一才

しのぶ 二十才

楓 十八才

百合 十八才

静香 十五才

さすがに年弱の娘たちの頬は悲しみに震え  
る。袖を巻きつけた刀身を、浦路はおのが頸  
へ近づけた。切先が頸脈に触れようとした。

次の瞬間、ロングになったカメラは、朝霧  
の薄明の中で墓を取り巻いて、あるいは俯伏  
しあるいは伸びあがるようにして、それぞれ  
にみずから頸脈を断った女たちの白無垢姿を

ソフトに美しく映して終わる。

## 二

なるほどこうしてストーリーをハイライ  
ト式に綴って行くと、忠臣蔵の構成によく似て  
いる。それも歌舞伎の仮名手本忠臣蔵ではな  
く、赤穂義士をめぐる史実そのものに、ある  
いは、史実とわれわれの信じ込んでいるもの  
に、近似点が設定されているのである。

それはたとえば、朝日新聞(43・11・16)  
コラム「こんにちは」。「大奥」の久保菜穂  
子における、久保菜穂子さんの発言。

「物語は、一口でいえば、かの有名な忠臣  
蔵の舞台を女城・大奥に置きかえたもので  
大奥総取締り藤岡(浪花千栄子)を吉良上  
野介、お知保の方を浅野内匠頭、私を大石  
内蔵助に見たてたあだうちです」

とか、読売新聞(43・11・23)のコラム、  
「今晚の見どころ」で、倉田準二監督の「い  
わば「忠臣蔵」の女性版」という発言などに  
見られるように、関係スタッフのあいだでは  
この映画が最初から「忠臣蔵」のイメージで  
クランクインしたことを示している。

では劇中の役割りがいわゆる忠臣蔵の史実  
とどう近似しているのか、簡明に表解してみ

ると、

藤 岡 吉良上野介

お知保の方 浅野内匠頭

浦 路 大石内蔵助

環 片岡源五右衛門

千 絵 萱野三平

竹の宮順子 柳原大納言・高野大納言

多少、立脚点は違うけれども、ザッと、こ  
んな按配の図式が成立しはしまいか。

キャストの適否性からいうと、老練な浪花  
千栄子さんが藤岡役で、最初から大奥の実権  
を握る老練な策謀家として登場する。田沼意  
次と結んで、権勢と物質への欲望を露骨に示  
す藤岡の、いっそ鮮かなまでの、えげつなさ  
が、自己の利不利による人間への好悪の感情  
表現で、みごとに示された。

お知保の方をいじめ抜く辺り、また、抛り  
どころとする二条の方の和子鶴松が危篤、や  
がて死、となったときの狼狽から冷静な保身  
判断への転移などは、全く画に描いたように  
表情で示されていた。

その反面の、強がるものにあり勝ちな弱さ  
もまた、刀傷の際の周章ぶりや、九重の変死  
で浦路らの復讐を恐れお局に閉居する姿態な



どに表現され、終末近くもう断念されたものと信じていた復讐の刃が身に迫ったとき、日ごろの権威をかなぐり捨てて、起こり得べからざる事態の脅威と恐怖を表情する巧みさは、鎧うものを失った人間本来の弱さを示して、キャストから見れば当然ながら、巧緻といえよう。

つまりは、みずからが欲に憑かれているだけに、九重の弱味を衝いて買収に成功する老女には、一命を捨ててその権威に立ち向かって来るものの心は理解しがたい。それだけに生命の危機への恐怖と同時に、驚愕の念もまた強いのである。

人間はみずからを以って他を律してはならない。しかし往々にしてその過誤を犯す。みずから信ずるところ恃むところ多いものほど然りである。そうした人間の弱さ愚かさを、藤岡の姿で浪花千栄子さんは巧みに表現している。

お知保の方は、温良の性格で設定されている。無事ならばお腹様で、安穩な生涯を送れる人である。しかし、愛し子を毒殺され、元兇をそれと察しても恨みを秘め、彼女は藤岡の無理難題に耐える。しかし、耐えるのは彼

女の弱さであって、結局は彼女を大奥から抹殺するのが藤岡の狙いである。最初から破局は不可避である。そういう「人がらの良い女性の弱さ」を示すのにも、このキャストは成功している。

耐えに耐えて、ついには自滅に至る過程でただ一度の爆発、その結果である賜死を諦念で受容する悲愁の女人を、小畑絹子さんは無理なく演じている。

お知保の方の「女らしさ」と対象的に男まさりな気性を内面に持つ中蔵浦路の役割りはあくまで内面と外面の使い分けを要する。お知保の方との永訣の日から涙を忘れ、千絵を非命に死なせた日から怒りも忘れたかに彼女は生まれ変わる。あらゆる侮辱に耐え抜く。表情を動かさず自我を主張せず、さりとして鷹揚さを失わず、ありのままをありのままに受容する。むしろ無気力とも見えるような平静さで日常を生活する。お端下に身分を落とされ、藤岡に罵られても外柔の表情には変化を見せない冷静さは、たしかにキャストの久保菜穂子さんが、前掲の朝日新聞でも述べているような

「大きな目的を前に人を引張っていく立場にある人間の執念というものが少しでも出

せれば、懸命に取組みました」

とある努力の結果であって、やはり

「憎まれ役を論じられた浪花千栄子さんの迫力のある強烈な演技に終始リードされながら、かろうじてついていったというのが私のいつわらざる心境です」

と結ばれてはいても、この映画第二の好演といえよう。

指導者の資質的表現は浦路の場合、忍耐と信頼を以って終始する。最初はお知保の方を守るためのそれが、のちには彼女自身や同志の娘たちに向けられた迫害への楯になる。その故にこそ、しのぶや楓は最後まで誓いを守り抜くし、千絵は彼女をわなから救うために命を捨てる。そうした忍耐も信頼も何ひとつ計算づくでなく、彼女の信念から生まれている。裏切り者を突きとめるための仇討放棄宣言も、酒をあおっての言葉だけに効果を挙げが、反面、しらふではいえぬ言葉だったかも知れない。従って「私にだけは本心を」と迫って、なおはぐらかされた環の涙に彼女は危うく本心を明かそうとして思いとどまる。

しかしその不作為の苦悩は、やがて真相が明らかにされたとき環らの何十倍もの信頼と、許し



を乞うことの易しさと、許すことの難しさを知ったのではなかったか。かつて特使奉迎の前夜、襖張り替えの女表具師を集めて戻って来た環に、浦路は「あなたにわびねばなりません、もう帰って来ないと思っていました」と卒直にわびた。環が「許して下さい、浦路さま」と誤解をわびたとき、浦路は「わびるのはわたしです」と平静にいう。その言葉こそ、半減した同志の結束と生命を浦路に預ける決意を固めさす。

あくまで冷静な外貌が内面の憤怨と闘志をおおい尽くすとき、それは二重人格というよりも、真実を生きる二律背反の超克とさえいえる。そこにこのキャストの役づくりのむづかしさと、やり甲斐があろう。その意味で、大石内蔵助に相当する役がらという設定は、みごとに演じおおせられているといえよう。

それにしても、お知保の方と浦路、環が永訣する場面は、史実における浅野内匠頭と片岡源五右衛門の永訣に似た設定になってはいえるが、事実、お知保の方と浦路のあいだに通い合う心情は、浦路が大石内蔵助の役割りをあとあと果たすにしても、やはりこの場面に限っていえば、歌舞伎の忠臣蔵に見る塩治判官高定と大星由良之助の永訣とは、いささ

か異質とも思える。

それは多分に両者の対照的な性格設定によるものではあるまいか。内匠頭の寵童であったといわれる源五右衛門の位置に、優雅なお知保の方に対する、気性勝れた浦路を就けても不思議はあるまい。

この映画ではしかし、その相違を自覚して永訣の場面だけでなく身分的にも、片岡源五右衛門に近い位置として、環を設定している。

環もまた、どちらかといえば女性特有の陰湿さを持たぬ、外向的で明るく素直に割り切った性格に設定されている。それも単純ではなく、分別のある、勁烈な性格を伴う。

鷹揚さで闘志を包みかくした浦路の内剛性との、このコントラストこそが実は、この映画を最後まで成功させている秘鍵ともいえる。

何故なら、動きや役がらとしては軽く見える環の補佐が、実は、浦路との性格の対照調和において、劇的效果を盛りあげるからである。是は作劇術の常道かも知れない。多分そうなのであろう。小説の場合でも同様なのだから……。しかし「女ばかりの世界」という

特殊な社会でのこのコントラストは、いわゆる世俗的な愛や欲や闘争の人間ドラマでのコントラストとは、おのずから意味合いが違っているのである。

口をひらくと言葉少なく、しかしポキポキ勁い口調でものをいう環のイメージは、是また好個のキャストといえよう。この映画が成功とすれば——筆者は、娯楽性と同時に一種「哀傷の美」をイメージアップしているこの映画を、一応単なる娯楽作品とのみは見すべしがつたいのであるが——清水まゆみさんの演技を高く評価したい。

たとえばスラックスで逆立ちする女高生役とか、アクションドラマの軸になる勝気な美少女役なんていう過去の役がらからイメージチェンジして、御殿すがたに下町娘の心意気をもプラスした役づくりが、その評価の背景になっているとしても、なおさらである。

呆っ氣にとられて浦路の酔態を見る女たちの中でただ一人信じない環、浦路の本心を疑うまいとする環、浦路の真意を知ってわびる環、婚約者が待っている実家で母にそれとなく最後の別れを告げる環、あくまで信じて遅参の浦路を待つ環、そうしたカットカットでこの映画の中での環ほど、必ずしも第一の主



役でないのに鮮烈な印象を残している役割りは少ない。

それは短くても決定的なセリフ、

△浦路さま、それは本心ですか▽

△お願いです、私にだけは本当のことを  
いって下さい▽

△浦路さま、お許し下さい▽

△おっかさん、長生きしてね▽

△待ちましょう▽ ……

そうした短いセリフが、適確に、起伏を殺したイントネーションで話されるせいかも知れない。それは、かえって誇張以上の迫真力を生むからである。

千絵は、子供向きのTV映画「キャプテンウルトラ」以来、どんな役でも体当りのこなすファイトの持主といわれる、城野ゆきさん。

是も、ただ美しい女優さん、というだけでは動まらない難役である。筆者が萱野三平になぞらえたのは、本意ならず義理と人情の板挟みになり、仇討ちの日を待たず切腹した三平の心情を、ふと、藤岡が仕組んだわなの結果に対して、浦路を救うために一身に責めを

引き受け、詰腹同然の自害をとげる千絵の心境を、ごく短い時間に、表情と姿態の変化で表現して行く城野さんの演技の上に見出だしたからである。

責めを執ろうとするひたむきな懸命さ。いよいよ執るとなったらその責めの重大さへの苦悩と絶望、決断と諦念、精神的肉体的苦痛との闘い。そうした内面を千絵の表情はマザマザと写し出していた。そういう自責と詰腹という型から見れば、歌舞伎の忠臣蔵での勘平腹切とも、このシーンは通じるものがあるう。

ただ、何といっても箸で胸を突き貫いての自害は論理的に無理がある。むごさをさえ感じさせる。しかしそれは、自害とはいい条、刃ものを一切とりあげられたお知保の方派の女中たちが、死でしか応え得ない藤岡の難題に遭えば、こうするほか途がない、という追いつめられた極限を想像させることによって一層効果的であった。

ここで筆者はまた往年の松竹映画「切腹」における、若い浪人千岩求女（石浜朗さん演）の、竹光による切腹を思い出した。あの惨烈な情景の克明な描写は、公開当時内外で大きな波紋をまき起こした。このカットの要

否さえ論じられた。しかし、リハーサルに際して、小林正樹監督の石浜さんに対する要求はたまたま切腹場のセット作りの参考意見を述べに行っていた筆者が立会うところで、何度か石浜さんが竹光で腹を一文、次いで十字と掻き切る型のリハーサルののち「あと、宿で稽古しておくんだよ」という注意だけだった。それが、あれだけの凄絶な演技になった。石浜さんの役作りぶりは大変なものだったろうと思われた。

その点今度の、男なら竹光腹ともいうべき長箸での自害、を城野さんはどの程度の演技指導下に工夫されたものか。いずれにせよ、城野さんの演技は表情姿態ともに、このシリーズ中では、もっとも「悲痛」の印象を与えるカットの連続であった。

ちなみにシナリオによると、下書きは千絵、いきなり、かんざしを抜いて、胸に突き立てる

とある。それだけの指定で、長廊下に坐り直して左手で衿を左へ引く、という咄嗟の動作が流れるように自然に進んで行き、悲痛な自害の演技になって行く。かんざしの方がもっともらしいが、画面に千絵の右手から落ちたものは、明らかに血に塗れた長箸であった



と見たのは筆者だけではない。そして、その方が、前述のように効果的に「悲痛」を印象づけたともいえる。

こうした献身と犠牲の上に築きあげられた仇討ち精神は、根本的には主従関係という外面的な義理よりも、やはり、端麗で若い將軍継嗣家基や、美しく優しいお知保の方への、男まさりな浦路や環の追慕の情を超えた心の触れ合いがトーンになっている、とするのは必ずしも曲解ではないであろう。そのことを主なキャストの各論によって、筆者は明らかにしようと努めたつもりである。

なお、この他にも赤穂義士との対比性、また映画や歌舞伎を通観しての悲劇「忠臣蔵」との対比性においてみると、花（内匠頭の切腹）にはじまり雪（討入り）に終わる「忠臣蔵」に対して、雪（お知保の方処刑）にはじまり、祭（仇討ち）に終わるこのシリーズの日本の情緒性は、やはりその感動のスペクトルが、かなりアシューズメントに近い波長に終始するとしても、筆者にとっては見すごしがたい一つのエレメントであった。

設定からいえば、市井の職人商人たちが、わが娘の請いに応じて快く刀や装束をとり揃

える辺りは、講談調なら天野屋利兵衛の義侠に通じるであろうし、手古舞い姿の娘たちを田沼邸に乱入させる神田っ子たちは、俵屋玄蕃の心にも通じるかも知れない。

六人の女たちの手古舞い姿も、火事場装束同様の統一性と機動性を持ちながら、女にふさわしい艶をとどめているし、結末、泉岳寺に比すべきお知保の方の墓前の景では、恨みの九寸五分に代えて剃刃を供えての仇討ち報告、更には、義士ならばお預けの上でやがては切腹の断が下るところを、そこは女ゆえ打首になるが必定。その惨を避けてそのまま墓前での白無垢姿の自刃と、それぞれに対応させつつも、女らしさの「悲愁の美」を盛りあげるに効果的な大同小異は「大奥」版忠臣蔵といわれるには、ふさわしかった。

赤穂義士が、やがては柳沢吉保の専政擅權をくつがえす一つの予兆となったように、お知保の方のための六人の女たちが、やがては田沼意次没落の予兆となって行くことに、この映画では設定されているのも、一つの大きな救いではなかったらうか。

ここで更に付言して、お知保の方の史実を高柳金芳氏著「江戸城・大奥の生活」から摘

録させて頂くと――

十代將軍家治は、歴代將軍のうちでも稀に見るほど愛妾、側室が少なかった。お知保の方は、もと津田宇右衛門信成の娘。十三才で「お次」に上り、十五才で「お清の御中臈」になった。九代將軍家重の死で二十五才の八月家治つきの「御中臈」になった。家治とは同じ年令である。

三十六才の十月本丸で産んだ長子竹千代の養母には御台所倫子がなったので、お知保の方は「老女上臈」に就いた。竹千代が九才で世子となり西の丸に入ったとき、彼女も「御内証さま」として西の丸に移った。

三十五才の八月倫子の死で、お知保の方は晴れて家基の生母となり、三十八才の秋には「御部屋さま」と称され、ゆくゆく十一代將軍の生母となるべきところ、四十才の二月二十四日、家基は十八才で急逝。是には、弱年ながら聡明の家基が意次の權勢を憎み、意次に毒殺されたという説がある。

五十才のとき家治の死でお知保の方は落飾蓮光院と号して二の丸に移り、五年後に逝去している。

お品の方は倫子に付いて江戸から下向して



高柳金芳氏





## 第十回

## ポラリス

原子力潜水艦ネプチューン号は海中を素晴らしいスピードで突走っていた。

哀れな籠の鳥達には昼も夜もなかった。何かさせられているときが昼であり、わずかに与えられる自由時間を睡眠に当てるほかはないのだから、それが夜であるとも言えよう。しかし、この「夜」はきわめて不規則であり命令者の気まぐれで勝手に変更されることが多かった。又、懲罰が行なわれる場合には、わざと眠らせないこともあった。

セル（独房）の女囚たちをひとしく戦慄させた望月レイ子の脱走刑は、見事な見せしめ効果をあらわしたに違いない。それ以来、反抗を試みる者は皆無になってしまったし、無理を承知の様々な命令にも服従する傾向が多くなってきた。その傾向は同時に彼女等がこの異常な環境に、次第に適応しはじめた兆しでもあった。いずれにしてもこの眼に見えての変化は、征服者の目には好ましい現象と映っていたのである。

上半身を直射日光に焼爛され、下半身を海水に靡爛しつくされた望月レイ子は日本の映画界を席巻した美しさを完全に喪ってしまっ

前号まで——星恵美子は秘密に包まれた有明の腹心。原子力潜水艦ネプチューン号の司令でもある。同艦は世界各地を巡航して、各地で妙齡の美女多数を誘拐、監禁している。それをおぼろげながら感じていた日本の国際捜査官新津は、テヘランで追跡に失敗し、空しくニューデリーに飛んだ。そこでは日本とインドにまたがる麻薬関係の事件が待っていた。イーラは日印混血の美女だった。父が麻薬密売の嫌疑で東京で逮捕されたのと同後して、彼女もニューデリーの麻薬調査官事務所に行行された。こうした場合、警察の身体検査は徹底したものになる。イーラには生まれて始めての屈辱だった。



た。原爆のいたましい犠牲者を髣髴とさせるような惨めな有様だったのである。勿論、支配者は獲物の価値を落とすような気持など毛頭持っていなかったから、彼女だけは特別の設備を施した病室に収容され、一日も早く元の美肌をとりもどせる様に、必要な処置が与えられたのであった。幸か不幸か、レイ子はこれによって「セル」内での画一的飼育を免れ、若干ではあったが人間らしい日々を過ごすことになった。

三等囚、つまり男囚たちは最下層の三等房に雑然と投げ込まれていた。ここでは、「殿下」であろうが、全く区別はされなかった。揃って素裸に引剥かれ、後手錠、足鎖で四肢の自由を悉く拘束されている。手はあっても喰うことはできず、足があっても歩くことは不可能だった。従って、芋虫のようにゴロゴロして獣のように口だけで喰べる他はない。狭い房内には排泄物の臭いが満ち満ちていた。時々、海水の奔流が汚物を流し去ることはあってもしみ込んだ悪臭は決して抜けることがなかった。出入口といっては天井に空いた一メートル四方の穴だけであって、そこから食物

が投げ込まれるのだった。贅沢な生活をしてきた者ほど、この生活に馴れにくいのは寧ろ当然だといわなければならない。つまり、ここへ投げ込まれた男たちの中で、一番衝撃を受けたのは「殿下」だった。慎り狂うような段階、沈黙と拒否に終始する段階を通り越すと、痴呆のような状態が来た。こうして、彼は男囚の中で最も弱く、最も恥しらずな人間であることを、いみじくも露呈して行ったのである。

一日、又一日と経過して行くにつれて、適者生存の原理が、この房内でも実証されはじめた。ただでさえ十分には投与されない食糧を腹いっぱい喰うことの出来る者は、強者でなければならぬ。たとえそれらが腐った肉であろうと、残飯であろうと、平気でガツガツと胃の腑に送り込むことの出来る者が勝者である。ここでは誇り高き者は生きては行かない。

こうして、何人かの囚人の中から自然発生的に容認されたボスは、奴隷商人のカシムだった。そして、いち早く子分になったのがキヤロリーヌ二世号の水夫チャンである。この二人の連合には誰も勝てない。彼等は真先に自分たちの食糧を確保することが出来た。す

ると、あとの数名の男たちは、ひどい空腹に苦しまなければならない。戦って勝てる相手ではないだけに、結局は泣き寝入りになってしまう。さもないと、お互いに不自由な五体ではあっても、歯や頭を使つての物凄い暴力が襲ってくるからであった。

チャンの入る前からここに閉じ込められていた四人の青年たちが一番哀れだったかも知れない。揃いも揃ってアドニスのような北欧系の美男子だったのだが、あとから入ってきたカシムやチャンのような異邦人に主権を奪われてその下風に甘んじなければならない。その上カシムの旺盛な性欲は異性同性をえらばなかったから、これらの青年たちは最も屈辱的な奉仕まで強いられることになった。カシムはその青年にだけ余計に食物をわけてやった。見よう見真似で、チャンまでが稚児買いの仲間に加わったので、わずかに十畳ばかりの房内は男地獄を現出することになった。

鍛えぬいた星恵美子の肉体は疲れを知らないうちのものようだった。あれだけの仕事を単身でやり遂げたのに、もう翌日からは、いつものエミー司令に戻って艦の指揮権を回復したからである。



狭いが清潔な艦長室では、例によって三人の美女たちが、夫々に特徴のある全身を惜しみもなくあらわにしたまま、何か真剣に討議を繰返していた。いうまでもなく、星エミー司令を中心とする、ミセス・ウイリー、高橋副長の三スタッフだった。

「いけません。いくらマスターのご命令でも艦をあの様な危険水域に乗り入れるのは、みすみす秘密を暴露してしまうおそれがありますから、わたしは反対です」

キッパリした口調で高橋淑子がいった。「しかし」



と、考え深そうにエミー司令が口をはさんだ。強靱な意思と体力とを内包しながら、楚々としたその裸身は、あくまでも女性的だった。そして、何気なく頬に手を触れた姿は例の弥勒菩薩像さながらで、同性の高橋副長ですらハッとするような艶麗さだった。

「マスターのご命令には何事によらず私たちは従わなければならないでしょう」  
「もちろん」

もちまえの甲高い声を一層たかめるようにして高橋副長が肯定した。ほっと苦い記憶が蘇えってきた。ミス横浜として出船入船に振

袖姿の妍をきそった数年前から、捕獲されて以来の屈辱的な日々。そして洗脳されたように今の仕事に打込んでいる現在の自分。それは恐怖と拷問の苦しみに負けたからだったろうか。否、絶対に否。マスター有明のやさしいパーソナリティに惚れ込んだからこそだったに違いない。有明のためなら命も惜しくない。善

にもあれ悪にもあれ、彼の欲することなら全力を尽して奉仕しようと自ら誓ったではないか。

「勿論ですとも。だからこそマスターのご命令を完遂するためには、危険を犯すことに反対なのです」

「危険はいつでも、どこにでもあります。それを避けていたんでは仕事になりませんよ」と、今までだまっていたミセス・ウイリーが、

「エミー司令。あなたのように危険を何とも思わない勇気のある方は稀れなのです。副長は、エミー司令のお身体をも案じているんですよ」

「私のことなど心配していただく必要はありません」

星は、ニベもなく言い放った。

「私は全てをマスターに捧げています。もしそれがマスターの思し召しであつたら、喜んで死の危険を冒しましょう」

「マスターの思し召しは、あなたが必要以上の危険を冒さないということではないでしょうか」

ウイリーの鋭い逆襲に、さすがの星も一寸と、たじろいだ様子だったが、すぐに立ち



直って、

「よろしい。艦を危険水域に入れることは、やめましょう。その代り……」

「その代り？」

高橋淑恵は思わず顔色をこわばらせて繰返した。ミセス・ウィリーとても固唾を呑む思いだった。こんなときエミー司令が打出す対案はいつも、彼女自身に自己犠牲を強いる他の何者でもなかったからである。

二人が眼の色を変えているのを恰も気付かないような様子で星は淡々と言葉を続けた。

「改造ポラリスの弾頭に私が入って行きましょう。そうすれば、まだ時間に余裕が出てくるし、艦を危険に曝さないで済みます」

「無茶です」

「オオ、ノー」

二人が同時に叫んだ。

「少しも無茶ではありませんよ」

微笑を泛かべながら星が答えた。

「すでに試験済みのことです。高橋さん、あなたは回収のときに立会ったのでしょ」

「その通りです。が、しかし……」

高橋副長の声は、段々甲高くなった。

「あれは畜人を使った実験です。しかも、回収したとき、あの女は完全に発狂していたで

はありませんか。水中からの発射ショック、空中をとんで再び水中に陥込む衝撃に、人間の神経が耐え切れなかったのでしょうか」

「ですから弾道落下の直前に、私は脱出し、パラシュートで降下する積りです」

「発射時の衝撃は？」

「私は畜人とは違います」

断乎として星が答えた。

「使命感に燃え、自由の意思で飛び込んだ試験には、人間は想像も出来ない程の耐久力を示す動物なのです」

それから暫くは沈黙だった。ミセス・ウィリーにしても高橋副長にしても、エミー司令の決心をくつがえすことが出来ないのをはじめから覚ってはいたものの、何とかして翻意させたかったのである。

「そうと決まったら善は急げです」

沈黙をやぶったのはエミー司令だった。

「今夜0時、ジャストに発射できるよう準備させて下さい。これは命令です」

エミー司令の命令通り、その晩、真夜中になって潜航したままのネプチューン号から、彼女自身を乗せたミサイル、ポラリスA-3が発射された。長さ10メートル、自重13トン

の巨体は、青白い特殊燃料の尾をひきながらはるかベンガル湾の上空に消えて行った。

## 面 会

イーラは、きたならしい独房の中で涙が涸れ果ててしまうかと思う程、泣いた。東京であらぬ罰をきせられて苦しんでいる父と、その父を救うために日夜心をくだしている母の身の上を思うと、一刻も早く飛んで行きたいと思っているのに、降って湧いたようなこの災難である。

その上、身に覚えのない濡れぎぬをきせられて、その上、何よりも大事にしていた乙女の羞恥心さえ、ズタズタにされてしまった。二人の男のような女たちは、男よりも残忍だった。暗黒の世界というものを知らずに育ったイーラには、それが赤裸に剝かれたよりも恐ろしく、屈辱だった。

人格を無視され、自由を奪われるというところが、こんなにも苦痛だったのかと、はじめて思い知らされたことだった。無実なのに、と思うと慎りがカッと頭に昇ってくる。そして忽ち非情な鉄格子と未だ衣服を許されない裸か身の現実に引き戻され、爪先きまで凍っ



てしまいそんな絶望感が吹き抜けて行く。

イーラは、あの思い出すだけでもゾツとしてくる恥辱の身体検査のあと、アクセサリーから下着まで、身につけていたものの一切を持って行かれた後、代りの着物も与えられず此の独房に抛り込まれてしまったのである。しかも、自殺を予防するという名目で後手錠をガッチリとはめられていた。これでは澎沱と流れる涙を拭うことすら出来ぬ。部屋の隅にある小さな便器についても、あとを始末することも出来ない。汚れたまま乾くのを待つばかりではないのである。香しい花のように清潔なイーラだったのに、今では何やら獣めいた臭気が立ち昇って、自分でさえ嘔吐を催したくなる程だった。

ところどころ漆喰が剥げ落ちて、積みあげた切り石が無残に露出している壁面には、見るも嫌らしい図柄が彫りつけられていた。しかもそうした俗悪な性器模様さえ、年を経た垢と汚れのために消えかかりつつあった。そのことは、この牢獄が如何に陰惨で不潔であるかを物語っている。

ヒンヤリとした石畳みの上には、片隅みにヨレヨレの藁蒲団が直かに置いてあるきりだった。そして、それが蒲団と呼べるかどうか

は別問題だったが、垢でテラテラに光った布

地は、ほとんど繊維としての性質を喪ってしまっていたし、ところどころの破れ目からハミ出している藁はホコリのように干切れていた。全く、イーラの柔肌を横たえるには、あまりにも酷い寝床である。それでも石畳にねるよりはましなので、泣く泣く身をちぢめて眠ろうとした。もちろんシーツも、かけ蒲団もない。洗ったこともないし、干したこともない布目はザラザラとして冷く、イーラをふるえ上らせた。そしてその上、ぬくもって行くにつれてゾロゾロ動き出してくる嫌らしい虫の気配があった。事実、彼女は最初の晩は一睡もせずに痛痒さと斗わなければならなかった。二晩目には、さすがに疲れ果てて搔痒の苦しみを上廻る睡眠欲のために数時間をウトウトした。その結果、イーラの全身は蕁麻疹にかかったように腫れ上ってしまった。あまりの痒さに彼女は転げ廻って苦しまなければならなかった。しかも自由にならぬ後手縛りは、搔くことさえ不可能にしていたのである。

まる二日間も、食物はおろか水さえも与えられないとなると、はじめは何とか我慢してみたものの、やがて恥も外聞もなくなって行

った。

そんな錯乱状態になり始めたとき、ギョッと重い扉を開いて、例の女調査官シャヒが彼女をひき出して来た。

「み、水を……」

ものを言おうとしても喉につかえてしまいそんな渴きで思うように舌が動かなかった。ニヤツと嗤ってシャヒがいった。

「ああ、いいとも。主任さんが許して下さいたら美味しい水を腹いっぱい吞ましてやるよ」「ど、どうか早く、主任さんに会わせて下さい」

イーラは跪いて哀願するのだった。

当の主任の部屋には来客があった。日本の国際調査官、新津謙介である。日本で摘発された麻薬密輸事件にイーラの父親が関係していたことから、彼がイーラに会って必要な尋問をする様、指令を受けたばかりだった。「おたずねの混血娘は、思いのほかの、したたかものです」

主任は大げさな身振りをまじえながら、馬鹿にRをひびかせる英語でまくしたてた。「それで、特別の方法で素直に白状させるよう目下、特訓中なのです」



「と、申しますと？」

細巻きのシガーに火をつけながら、新津はさり気なくたずねた。

「それは一寸、簡単には申し上げられないのです。ただ、インドに古来から伝わる一種のつまりその……、ええ、一種の催眠術のようなものだとお考えいただければ……」

不得要領な、おしゃべりをさえぎるように新津が聞きかえす。

「それでは私が会って尋問することは、お許しいただけないとおっしゃるのですか」

「いいえ、いいえ。そんなことを申上げる積りはございません。わが国といたしましては、友好国の犯罪捜査には積極的に協力する方針なのですから。……ただ」

「ただ？」

新津は紫色の煙を細くはき出して、微かな笑いをうかべた。細くなった目がキラリと光って、妙



な威圧感を主任に与えた。主任としては、出来ることなら新津をイーラに会わせたくはなかったのだけれど、拒否する法的根拠もなく困惑そのものだったのである。仕方なく彼女はいった。

「イーラは婦人房の中で、衣服を与えておりません。それも前に申しました特訓の一つですから」

「さて、さて」

新津は両手をひろげた。

「それで新津さんのような男の方には、小さな窓越しにお話ししていただくことになりませんが、それでよろしかったら直ぐにでも面会できるようお取り計い申し上げます」

「結構です」

新津は承知する他なかった。

「み、水を……」

依然として、イーラは哀願し続けていた。

「わかったわかった。すぐあげるよ。でもその前に一つして貰いたいことがあるんだ」

イーラは、夢中で、うなずくのだった。実際のところ、今の彼女はコップ一杯の水の代償として貞操を提供することさえ、いとわなかったかも知れない。シャヒが大声でいった。

「今、日本の警官がおまえに面会を申し出ている。おまえはそれに会って何でも知っていることを答えなきゃならないんだよ」

「でも、でも、こんな姿じゃ、イヤ」



さすがに全身蒼白となるのに、  
「馬鹿だね。何も裸を見せろといってるんじゃないよ。ホラ、あそこの窓から顔だけ出せばいいんだから」

廊下の端に大きなドアがあって、婦人房の入口になっている。それは、頑丈な板扉で二メートル程の高さのところに30センチ角ばかりの窓が切っており、太い鉄棒が二本はまっていた。

イーラは扉の前に置いてあった空箱の上に追いつけられた。そうすると、丁度、窓のところに顔が出るようになった。勿論、縄尻はシャビがシッカリと握っているので逃げることは出来ない。

丁度、窓の向こうに主任が新津を案内してきたところだった。

一目みて、イーラはハッと顔を背けた。それは相手が日本の男性だったことではなかった。扉越しに自分の浅ましい姿を見透されはしないかと狼狽したというのでもない。

イーラは新津を知っていた。

それは二年程前の一月二十七日、レパブリック・デーを祝うレセプションが東京の大使館で盛大に開かれた夜のことだった。留守に

していたイーラ達のマンションに空き巣が入って、母の大事にしていた装身具を盗まされてしまったことがあった。その犯人が大使館員であったことから、新津が何度もイーラの家を訪れるキッカケと、なったのである。

新津にしても、そのとき調査をした立場だったから、イーラのこと、イーラの家、職業上、或程度は覚えていた。むしろ、彼の職業上の義務を別に考えれば、彼はイーラにすくなくからぬ好意を持っていたと言えるであろう。当時十七才だったイーラは、まだ幼なさの残っている顔付や言葉使いの間に、みずみずしい白桃のような円みを、つけはじめていた。

その時の印象を心に泛かべながら、格子越しに、それも小さな窓から瞥見したイーラの顔は、新津を驚倒させてしまった。——何という変わり方だろう。

一切を忘れさせる程の測隠の情が、新津の全身を吹き抜けて行った。

実際、わずか二日間のことだったが、イーラのやつれは凄まじかったのである。食物を与えられなかった故もあるが、それよりも彼女が、かつて経験したこともなかった屈辱に

憤り苦しんだ結果がその表情にあらわれていたのだ、と言った方が正しいであろう。

まだ十九だというのに、ひどく老い込んで見えた。それだけに、何かチグハグなショックを新津に与えずにはいかなかったのである。

そして、これだけは一層大きく燃えるような目が、はげしく新津に何かをうったえていくかのようだった。

「どうですか。大変に不幸な目にお会いになったようですね。役目は役目ですが、出来るだけお力になりますから……」

それだけ言っただけで、イーラの両眼からは、みるみる涙があふれ出てきた。

「ああ、あなたでしたか。たしか、新津さんでしたね。私は、私は何もしてないのに、どうしてこんなヒドイ目に会わなければならぬんです。どうか、力になって下さい。助けて下さい」

叫ぶように言うのに、主任が

「お黙りッ。日本語でしゃべっちゃ、いけない。新津さんも、英語で、尋問なすって下さい。それから、手短かに要点のみ、お願いします。プライベートなお話は、この際、遠慮していただきましょう」

と、きめつけた。新津も苦笑しながら、仕



方なく頷くのだった。

イーラの顔は、ベソをかくようにクシャクシャになった。扉のかげで、シャヒが思いきり彼女の臀をツネリ上げて、声をひそめ、「いいか、余計なことをいうんじゃないよ」と念を押したからである。

話は至極、簡単だった。イーラは無実をうったえて泣き叫んだけれど、主任は冷く突き放すばかりである。新津は何ら新事実を得ることも出来ず、悄然として面会を終った。それよりも、かつて見知ったイーラの、あまりに憔悴した顔付を見た新津は、心の底からショックを受けてしまった。この世で残酷というものを想像したら、それはそのままあの姿になるのではないかとさえ思う。宿舍へ帰ってから、イーラの特徴のある大きな目が脳裏に灼き付いて眠ることも出来なかった。

まんじりともしないで過ごしたその夜が、ようやく明けはじめようとする頃、けたたましい電話のベルが鳴りひびいた。忘れもしない主任の声で、イーラが脱走したことと、これについて何か心あたりはないかと尋ねてきたのである。

警察官として容疑者の脱走を歓迎すべきで

はないのだけれど、今回だけは何かホッとしたような気持がしたのも事実である。

主任の言葉から推測すると、新津が帰ってから、イーラは再び、ひどい折檻を受けたらしい。

おそらくは、新津に余計なことを言ったと言いがかりをつけられたのであろう。水も食事も、結局は与えてもらえなかった。極度の疲労と興奮の連続で、イーラは喪失状態になっていたという。そんなわけで、例の独房に投げ込まれても、死んだように倒れ伏して動かなかったそうである。

そんなイーラが、忽然として消えてしまった。発見したのはシャヒで、さすがに気になったと見えて、早朝、用足しに起きたついでに独房を覗きに行ったとき、扉が開いたままになっているので、驚いて飛び込んでみるとすでにイーラの姿はなかった。

それからが大騒ぎだった。帰宅していた主任も呼び出され、大勢の捜査官たちが続々と詰めかけてきて徹底的に調べたところ、何と早朝に仕事をして行った汲み取り人夫が、その肥桶にかくして連れ去ったらしいということがオボロゲながら浮かび上がったのである。

早速、一般警察も活動をはじめた。そして、

一時間とたたないうちに、近所の森の中で目的の馬車が発見された。

ソレツとばかりに桶をしらべる。臭気と糞尿にまみれて、グルグル巻きに縛られ、気を喪っている人間がいることはいた。だが、それはイーラではなくて馬車の持主である薄のろの農夫だった。

気付薬を打たれて正気づいた農夫を問いただしたところで、何の得るところもない。漸くわかったことは、彼が行きがけに、この森のそばを通りかかったところ、突然、何者かに襲いかかられ、たちまち睡り薬を嗅がされてしまったということだけだった。ということとは犯人がこの男になりすまして、麻薬取締官事務所に乗り込んで行ったことになる。ホシは男という判断が生まれ、その方向で四方に手配された。

そのころ、イーラは暖い毛布に包まれ、疾走する乗用車の後部座席に横になって、こんなと、ねむっていた。

運転するのは、まだ二十をいくらずきでもないと思われる日本人の女だった。

(未完)



濡れにぞ……

……濡れし

取

材

芳野眉美



「だめよ、そんなこと」

彼女がいった。いいながら、彼女のしなやかな指先は微妙に働いているのである。

「彼も期待しているんだよ。彼の好意を無駄にしないでくれないかな」

「そんなこといったって、無理だわ」

「お願い。彼のために、たのむ」

彼女が笑ったようであった。考えてみるとヘンなくどきかたをしているものである。

「ねえ、お願いだよ」

「だって、あなただけじゃないんですもの」  
彼女の眼はしきりに彼を気にしている。

「見てなんかいないじゃないか。彼、くたびれて眠っているよ」

「ウソ、起きているわ」

入口のドアの前の床にタオルを敷いて、彼は部屋に入るなり横になってしまったのである。マッサージ台に寝ている私からは、彼の

足だけしか見えない。

二人で一緒に彼女の部屋に入ってしまったのは、彼はすでにトルコに入ってきて来ていて、いわば、トルコのハシゴだったからである。湯あたりでもしたのかな。

従って、裸になったのは、私だけである。

湯舟でいい気持ちになっているとき、彼と彼女の間で、たのむよ、いいわ、なんていう話し声がしたから、こちらとしても早合点して



しまった。

彼女が、てっきり、彼に、飲ませたことがあると思った。

プレイをした(その真似事をした)女の子を、おたがいに、紹介する心理は、本当のところよくわからない。軽い気持でトルコサンを紹介するのは、商売だから適当にあしらってくれるだろうという、安心感があるからかもしれないが、『かならず飲まされてしまうからかなわないよ』ということにもなりかねないものであるらしい。

私への紹介だから、私の趣味と同じだと早合点してしまったのだが、性癖をわかり易く説明しないのが悪いので、彼女に罪はない。誌友にM派は多くても、それぞれ個性があって、遊び方はまったく違うのである。

「わかったわ」

彼女は親切に、すみからすみまで舐めるように洗い、マッサージ台では軽やかな指先が全身を這い廻った。

「待って」

これではたまらない。自分の趣味を少しでも彼女に加えてもらわなければ、いくらなんでももったいない。

「無理よ、急にそんなこといわれたって。で

ないもの」

「でますよ、その気になれば」

「そんな器用なこと出来ないわ」

二人の会話はかなり小声であった。というのは、彼を気にして、彼女の声がややもすると小さく消えてしまうからであった。

「今度、一人で来て。それならいいわ」

「だめです」

どうもいけない。もしかしたら、彼女の神妙な指先に彼は惚れたのかもしれないと思った。彼女の手をつかんで飛び起きた。

「待ってくれ」

私が、怒ったとでも思ったらしい。

「キスはしていいから、それだけはかんにんして」

ショートパンツに手をかけた。

「じゃ、お尻で踏んでよ。それぐらいならいいだろう」

「恥ずかしいわ」

寝ている彼が、そんなにも気になるのだろうか。

浴槽を背にしてタイルに腰をおろした。

その筋のお達しで、部屋のドアには大きなガラス窓がついている。彼女の部屋での死角は、浴槽の前しかなかったのである。

また、そこはドアの前に横になっている彼からも、死角になるのであった。条件はそろったわけである。

私の前に立ち、ショートパンツを下げようとしたから、

「うしろを向かなければ腰掛けられないじゃない」

「いやだなあ」

もじもじしているのを、強引にうしろを向かせ、タイルにのぼした足をまたがせる。

「早く脱げよ」

「知らない」

中腰になり、ショートパンツとパンティを胫のあたりまでずり上げた。

「これでいいでしょう」

「最高だよ。全部脱ぐよりいい」

中途から言葉にならなかった。

浴槽のふちで頭をおさえられ、彼女は、まるで洋式便器に腰掛けている恰好になっていた。顔がひしゃげる。

春川画伯の名作に、「人間ブランコ」とか

「人間サドル」「人間椅子」とかいった、そのものずばり、グラマーな女王様の、すばらしい臀部で押し潰されているイメージ画があるが、ソフトなM派にとっては、イージーゴ



ーイングで、かつ最高のお仕置と断言出来るのである。

浴槽のふちに、頭をごりごりと押しつけられた。重い。

それだけではなかった。彼女の繊細な指先が、二本三本と協力して、顔を押し潰す攻撃に加わり出したのである。

ふと彼女がお尻を浮かせた。

大きな二つの盛り上りはびったり緊って、糸でくびったように見えるほどに密着していた。

「豚めッ」

と彼女はいった。

「お前にはふさわしいよ」

「——」

「豚になるのが好きなんだろう、お前は」  
彼女の口から、こんなすばらしい言葉がでてくるとは思わなかった。

「さっきトイレに行つて来たばかりだから、少しは残りものにありつけるよ」

電気が流れたようなショックを感じたのと同時にあった。

「少しは取材の役に立ちましたか」  
と彼はいった。

「しかし、飲めなかったというのは、かえすがえすも残念でしたね」

「飲めなかったけど、滓をいただいたから、かえって有難かった」

「趣味が交ってきましたね」

「ほんのちょっと」

「彼女のマッサージは素晴らしいでしょう」

「それぞれ」

彼女の甘美な指先は身体中の精気を一気にかき立てる威力がある。

「あの子に全身を撫でられますとね、女の裸に飽きていても別だから不思議です」

トルコのハシゴをするひとだけあって、黄金の指先の持ち主をさがすことなど、いとも簡単なことなのかもしれない。

それはそれ、彼の趣味。彼が、

「たのむよ」

と彼女にいったのは、その黄金のマッサージのことで、神酒拝受ではなかったのに違いない。彼女はそう受け取った。

だから、私のオカシナ申し出に、彼女は弱り切ったのが本音と見受けた。が、親切なひとである。

私を上手に遊ばせてくれたのだから。

「寝ていたのですか？ 本当に」

「うつらうつらとね」

「でも、気になったでしょう？」

「話し声は少し聞いたよ。でも、起き上って見るわけにもいかない」

「見たら、彼女がなんというか、興味があったのに」

「彼女の困ったような顔が見たいか。それでもMかねえ」

「SMに関係なし」

三月二十一日の夜のことである。

小雨になったが、六本木にでて、アメリカの女性がホステスをしているクラブと、鬼六先生が常連にしている穴倉のバーに寄り、別れたのは午前二時をまわっていた。

翌日、彼は初顔のサディスチン連れて、再び登場している。タフだよ、まったく。

彼のイニシャルは、Hか、M。

駄足——高則成の『燈草禪師伝』に、二つの花心を持つ女の話がのっている。

△突然、女は……

「ねえ、貴方は南風が好きだって聞いたけどどういうわけ？」

と可白にきくのでした。南風というのは、南と男の音が同じところから、通人の間で男



# S.C.R. (性問題相談室) 案内

担当……弓削性科学研究所長 医学博士 弓削達人先生

## 他人に打ちあけ難い悩みなどについて

編集部の長年の懸案であり、近時急速にその必要に迫られていました性問題相談室 (Sex Counselling Room 略称 S.C.R.) を開設致しました。

この欄は無料相談であり、結婚生活一般から夫婦問題、さらにホモ、フェチ、サド、マゾなど性的倒錯に関する悩みの打ちあけ、市広いカウンセリングに応じます。また誌上公開をはばかれる方には、転送先を明記すれば仮名で解答して差支えないとの御好意あるお申出をいただいております。担当の医学博士、弓削達人先生については、公的な身分はさしひかえますが、某民間病院附属の性科学研究所々長であります。

○ 本誌の愛読者の方で、医学博士弓削達人先生に性問題に関しての解答をお求めの方は、御遠慮なくお便りをお寄せ下さい。

○ 個人の秘密については絶対御迷惑はお掛けいたしません故、御安心の上、何んなりとお尋ね下さい。

○ 誌上に掲載するものについてはすべて匿名とし、御希望によっては先生の御都合のつく限り、直接の解答も致して貰います。

○ 御相談についての診断及び回答についての費用は一切不要です。

○ 宛先は編集部気付、弓削達人先生として下さい。

## 御遠慮なく相談をお寄せ下さい

色の意味に使われる隠語なのでございます。

「いや、私はもと書斎で使った子供と、外で女と会えないときやっただけで、その頃は女の味を知らなかったからですよ」

「じゃあ、前とお尻とどっちがいい？」

「さあ、どっちでしょうかねえ」

「そんなら、ちょっと、試してごらんなさいよ。そうしたらはっきり判るわ」

女はこういうと、うつ伏せになって、まっ白なてらてらした滑っこいお尻を突き出しました。(中略) V

てなことになって、可白がどうも南風の風向きが変なので不思議に思っていると、

「ああよかったわ。わたくしね、実は前にも後にも、両方とも花心があるのよ」

と不思議なことを言うではありませんか。

「まさか。前に花心があるのは当たり前だけど屁眼の中に花心があるなんて、聞いたこともないよ。私もずいぶん女も知っているし、南風も経験しているけれど、そんなことは初めてだ。どれ、ちょっと探って調べて見よう」

果たしてその結果は如何になりますか、これをもって本稿上巻の終りであります。V



## 幻想と現実の断層

階

段

佐藤 額



十九才というのは、ある意味で危険な年令といわれている。広一もそんな年頃の少年だった。けれども彼の背丈や体つきは「危険」というにはあまりにもふつりあいのようにみえた。彼の年令はまた、性への関心の年令ともいわれる。

ちよつとした町なら、どこにでもみられるようなDPE店に職を持つ広一は、人の行き交う通りの方をぼんやりと眺めながら客を待っていた。彼の心がそこにはない時、その心をゆり動かすようにして湧き上ってくる想い出

がある。それはその度毎に強烈な生々しさを加えて、異常な迫力と甘美な憧れとなって広一の全身を包みこむのだった。

それは、彼がまだ中学生になったばかりの夏休みのことである。近くの林からせみの声だけが聞こえるお婆の家へ去年と同じように遊びに来ていたのだ。彼はそのお婆が大好きだった。小柄だったが美しく、訪ねていくといつも心から喜んで、やさしくしてくれたからだ。そういう時、彼は子供ながらも、彼女に子供がいなからだな、と考えたものだった。

た。だから毎年夏が近づくと、あのなつかしい林の見える景色や、せみの声がするお婆の家への思いが一杯になるのだった。

草いきれのする野や、林で遊びまわって、お婆の手料理を楽しむに彼がもどってきた時だった。彼は、ふといたずら気を起こして、お婆をびっくりさせてやろうとガラス戸のある縁側の方へ忍んでいった。あたりは、もう暮れようとしており、ぼんやりと電灯の色がみえた。その時彼は不審を覚えた。部屋の手前で医者が、すぐそばの洗面器で手を洗って



おり、一人の看護婦がだいじなおばの背後にかがんで何かしていた。病氣？ 彼はドキッとして、立ちすくんだ。そしてどういわけか、むしように怖い思いがして、物陰に姿を隠したまま、一部始終をながめてしまう結果になった。

まだ若い看護婦は何か笑い顔で話しながらふとんの上に恥ずかしそうに顔をおうって横になっているお婆の、ねまき代りのゆかたをめぐり、下着をひざのところまでずりさげると、片手に持っていた注射器のようなものを反対の手に持ちなおした。

彼には、なにもはいていないお婆のお尻がまぶしく映った。でも、あの看護婦は何をやっているのだろう。注射にしては変だ。そういえば、今朝がた「お腹の調子がおかしい」といっていたお婆の顔を思いだした。看護婦が、お婆から注射器をはなすと、やがてお婆は部屋を出て行き、しばらくするともどってきた。何かお婆に話していた医者が、看護婦を連れて帰ってゆくと、ふとんの上に坐っていた彼女は、何か気落ちでもしたような様子で庭の方をながめた。

彼は、お婆の顔に何かほっとしたものがあるのを見て、ひどい病氣ではないと直感して

安心したが、それと同時に、ここにいてさっきから見えていたことを悟られてはいけないように思えて、そっと玄関の方へ廻ったのだった。

彼はいまでもはっきりと覚えている。あれから家に入って、さっき何をしていたのかを聞きたかった気持を。……

けれども、それはついに口には出さなかった。その時は、病氣の心配よりも、それが何かお婆にとって恥ずかしい事をみてしまったような気がしたからだだった。医者の方診は普通ではないけれども、さっきお医者さんがいたでしょ、というと、それと同時に一部始終をながめていたことがわかってしまう。そればかりでなく、聞けば、お婆が返答に困る、という事に気がついたのは、夏休みが終りに近くなり、また町中の自分の家に帰ってきてからだった。

あれから数年経った。広一は、いまはもうあの時に看護婦がお婆にしていたことは何であるかを知っていた。

彼は、あれから二、三年、夏が来てもお婆の家に訪ねて行かなかった。行けばお婆の秘密をさぐりに来たと思われはしないか、と考え始めたからだだった。時々、東京の方にお婆

がやってくるついでに、彼の家へよることがあった。そういう時には、いつも彼女は彼の母にいうのだった。

「広一ちゃん、この頃、少しもうちへ遊びにこないかねえ。お婆さんが嫌いになったの？ いつでも、またいらっしゃいよ。今年の夏はどう？ 涼しいわよ」

すると、これもきまり文句のように母がいうのだった。

「広一も、いつまでも子供じゃないわよ。もう生意気になってね」

そういつて、二人共笑い声をあげるのが常だった。広一は、お婆さんの楽しみをじゃましたくないから、と云ってやりたかった。きつとお婆のあの秘密のために、お婆の家庭には何か変化が起るに違いないと思っていた。しかし、めざましい郊外への工場進出で、役所の仕事から、そういった工場へと勤めを変えたお婆の夫以外には、別に変わった事は起きていないらしかった。

そんな笑い声が聞えるたびに、いつかみた光景が彼の脳裡にまざまざとよみがえった。看護婦、ガラス製の器具、薬液、ふくよかな肉体、片隅で無表情で手を洗っている医者。それらが、彼の頭の中を、すごい浪を立てて



流れる奔流となつてめぐりめぐつていた。

彼は年月と共にだんだん異性に対してめざめてゆくに従つて、彼自身の手で、いつも空想でだけ終らせなければならぬ行為を一度確かめなければならぬと、決めていた。しかし、それには相手が必要なのだつた。そして物色する相手のタイプは、いつのまにか、あのおばに似た顔になっていた。そして気がついた時、彼の前にその被実験体が立っていた。

彼の勤めているDPE店には別にもう一人の、女店員がいた。彼女が主に客との応対を受け持っていて、彼女が受けた未現像のフィルムを彼が暗室にとじこもつて仕上げるという事になっていたので、この店の主人というのは、しよつ中、店をあけていた、というのは彼はいつも団体旅行を一手に引き受けていたからだつた。

彼女は、別に広一をきらっている風もみせなかったし、たいていは二人でせまい店にいるのが多かったので、その気にさえなれば、彼には自分の計画はきつと成功するだろうと思われた。

実験を決意した彼は、ズボンのポケットの中でイチジク型の浣腸をにぎつてみた。すこ

し離れた薬局の前を、何回かいったりきたりしたあげく、やっと手にした物だつた。くびれたかっこうをしているその浣腸は大きくてまぶしいような女の尻を連想させるに十分だつた。そして、彼女は心のどこかで、お婆のようにそれを待つてゐるに違ひないと思つていた。彼はいつものように暗室に入つて、ころあいをみて彼女を呼んだ。

「ちよと手があいていたら、手伝つてくれな

いか」  
すると、彼女はいそいそとカーテンをあけて入つてきた。いきなり広一は彼女を抱きしめた。彼女は一瞬驚いたようだったが、逃げる素振りはいふえなかつた。彼女はユリエといつた。今年十七で、妙に大人っぽい丸っこい体付きをしていた。彼は夢中でわけがわからなくなりそうになりながら、ユリエのふっくらとした胸元に手をかけた。さほど抵抗しない彼女の唇は弾力のあるものだつた。

ふと彼は、これから当然起きるだろう事柄について、彼女の思いとの違いに、気がついた。それは、ふつう愛し合う男女の大部分がとる自然な行為と、倒錯と呼ばれている行為との違いだつた。彼の手にふくらみと、はすみ息を感じさせ、彼の唇に微妙な感覚を与え

ている相手の、この場合に考えてゐるに違ひないことが自然なことであり、彼自身の考えが倒錯といわれる種類のことであらう。

彼の心配の第一はどこかへ消し飛んでしまつたようだつた。彼女は少しも大きな声をたてなかつたばかりでなく、むしろ待つてゐたかのような素直さがあつたからだつた。彼は思いきつて、片手を彼女のスカートの方へおぼし、パンティーを膝のところまでずりおろした。そのままユリエを暗室のせまい床におし倒して、スカートを引っぱつた。うすぼんやりと赤く光つてゐる安全灯に彼女の下半身の白さが浮き上つた。彼はすぐ使えるようにしておいた浣腸を持つと、じつとして次の行為を待ちうけてゐるその白い丘の傍らにかがみこんだ。彼のふるえる手が伸ばされた。その時、彼女はふいに上体を半ば起こした。彼の実験はあと一步で完遂、というところだつた。彼はほおに衝撃を感じた。ユリエが広一の顔を平手打ちしたのだつた。

「あんた、いったい何をしたの。へんなことしないでよッ、バカ！」

彼は失敗したとは思わなかつた。ただ、昔あのお景をみた時とは、状況が違つてゐることを思いだしただけだつた。



それから広一は、職は同じDPEだったけれど店を変えた。ユリエと気まづくならなかったとはいきれなかったが、どうしても満足する結果を得たいからだった。だがどの店でも思うようにはいかなかった。

彼は毎日を空想と妄想と一緒に過ごした。豊満な体の女がうごめく。つきだされた丸い臀部。そして、ガラス器の中の液体。目盛りのおどやかな器具。それらはみな、空想の産物に過ぎなかった。考えれば考えるほど、どうしてもそれらを現実へひきおろす必要があるように思われるのだった。こうして、彼の心はすっかりある何者かに支配されるようになってしまったのだ。

広一の自慢は写真の技術だった。時には思い直して、妄想にとりつかれないように、彼は意識して写真技術の専門書を読むことにしていた。しかし、次の頁をめくると、ヌード写真が載っていて、その顔がおぼのそれにいつのまにか変わっているようにもみえた。

その日、彼は仕上がったカラー写真がある家にとどけに行くことになっていた。帰りに団地を通りぬけたが、近道というだけで別に他意のあることからではなかった。ふとみると団地の三階の階段に女の姿がみえた。きれ

いな脚だなと感じただけで、そのままとおり過ぎようとした。この時、ふいに彼の心にある事が浮かんできた。そして半ば無意識にカメラのシャッターを、三階の女に向けてきった。

彼は商売柄、カメラをいつも持ち歩いていたことが、この場合には不幸といえた。

別段、女は気づいた様子もなく、曇り空を気掛かり気に見上げているだけだったことが広一には転落の速度を早めた結果になったのだった。

店へ帰るなり広一はさっきの写真を現像してみた。われながらの出来ばえだった。多少被写体は小さかったが、引きのばすと女の顔がくっきり浮かんできた。それから彼は、あの本にのっていたヌード写真を複写し、そのヌードの女の顔と、団地の女の顔とを入れ換え一枚の、新しい合成写真を作りあげた。思ったよりも見事に出来た。彼はそれをもう一度ながめてみた。そこにはあの団地の女のヌードにまちがいのない姿が写っていた。

あくる日、彼は再びその団地を訪れた。昼下りの、そこは、静かさそのものだった。時々、車がとおり過ぎるだけだった。広一は夢見る思いで、見当をつけておいた部屋をノックした。まさに、その扉は空想から現実への

入口に違いなかった。内からまぎれもないあの女が顔を出すと、ひまを持て余していたような様子の声がして、扉が、わずかに開かれた。

「どなた？」

広一は、鎖りのかかっているのをよいこにと強引に部屋に入り込んだ。

「写真屋ですけど。実は大事な話があって、うかがった訳ですが」

彼は、自分ながら落着いていられるのを奇妙に感じた。彼は、上着のポケットから例の写真を取りだすと、女の方へちらつかせながら言った。

「奥さん、これあなたの写真でしょ。これを御主人に見せたくなかったら、いう通りにしてもらえませんか」

広一には、女が写真を受け取るなり態度をこわばらせたのがわかった。

「だれよ、あんた。こんな写真知らないわ」  
彼にとっては、この目の前に柳眉をさかだてた女の答がなんでもよかった。無論認めるわけではないだろうが、とにかく、この苦心の末の写真の持つ力を広一は信じていたのだった。

彼は、シンダー錠がしまっているのをな



がめると、上にあがりこみいきなり女を押し倒した。女は叫び声をたてて、逃げようとしたが、若い広一の腕力には及ばなかった。彼女の口にハンケチをねじ込み、両腕を後に無理矢理まわすと、そのまま細ひもでしばりあげた。女は自由の残された両脚をばたつかせて彼をはらいのけようともがいた。これには広一も弱った。部屋は六畳で小ぎれいに整理されていた。片隅に一本の棒があるのが眼についた。それは、登山記念と焼印のある杖だった。彼はその棒に、女のあばれる脚をゆわえることを考えた。必死にころげて逃げようとする女に飛びかかると、片脚を押さえつけて杖の片端にしばりつける。余計に暴れる残った脚を押し広げて、同じようにしばりつけてしまうと、女は苦痛と無念の表情で天井をみていた。

広一は現実一步一步足をふみ入れたような気がした。自分の手にこの写真がある以上、この女は、彼に何も文句はいえないと考えていた。もしそうしたらあの、ヌード写真をばらまくぞ、といえば女は必ず云う通りになる。そう思っていた。

彼は、バッグの中身を大切そうに取り出した。何げない態度で薬店から手に入れた三百

CCのグリセリン。あれこれまよってついに手にしたガラスの浣腸器。それらの一つ一つを手にする度に、彼は歪んだ倒錯の度合を深めていったのだった。

不自由なかつこうをしている女を彼はやっとのことで、うつぶせにさせた。それから、ゆっくりとスカートをはずしにかかったが、脚を開いているので、脱がせられなかった。彼はスカートを切り裂いて取った。下着を上げまくり上げると、薄もののパンティーが、豊満な尻をつつみきれないように、びっちりとしについていた。

彼は上半身のものを全部切り取った。この場合の実験は、全裸でなければ嘘だと思えた。パンティーをずりおろしたが、これだけはそのままにしておいた。彼はその時、いつかのお婆の家での出来事を思いだしていたのだった。この女の体はお婆同様にすばらしいものだと思えた。やがてこの女に浣腸液を注ぎ込むと、このすばらしい体は、一つの芸術品のように身をくねらせ、汗をにじませるだろう。そして泣き、遂には喜び感謝するに違いない。

たとえ実験が思い通りの結果を生まなくてもこの女に逃げだせるすべがあるだろうか。

彼は写真をばらまくという方法の力を、よくしっていたかのようにだった。

両手を背にまわされ、脚を開かれている姿は、たしかに夢の実現ではあるが、彼は、それだけでは満足出来なかった。彼は部屋を物色して、座ぶとんを二、三枚もつてくると、伏せている女の腹の辺りへ二つに折って入れた。女の尻は何の守りもない、責められるべき場所となった。つきだされた彼女の臀部は彼の心をとらえて放さなかった。

広一は、浣腸器にグリセリンを吸い込ませ思わず会心の笑みを浮かべた。これこそ彼の念願の一瞬なのだ。いよいよ夢に見た実験が出来るのだ。ふるえる手を意識しながらも、彼は、ゆっくりと浣腸器を押した。

しばらくしないうちに、女の体に反応があった。彼は、たんねんにカメラのシャッターを切った。シャッターを切る指に力が感じられた。ファインダーに映る妖しくうごめく女の体が幻想中の女のようにみえた。

女がしきりに何か言っていたような様子だったが、無我夢中の彼の耳には入らず、いつの間にかフィルム三本を撮り終っていた。気付いた彼は、急いで彼女の後手にしばっていた細ひもだけを解き、そのままの姿勢ですすり



泣く女に声もかけずに団地を飛び出した。

彼が洗い皿から取り出すどの写真も、彼の納得のいくものだった。

やがて、その一枚一枚は再び、空想の中へ舞いもどっていつてしまうように感じられ始めた。そんなある日、通りをながめる広一の姿を見ている視線があった。

あの女だ、と彼の心は躍った。彼女は店に入ってきた。彼はとっさに、女が自分を誘いにきたと思った。是非もう一度と先日再現

を願いにきたに違いないと思った。

「あした来てよ。たのみたいことがあるの。カメラを持って来てね」

女は彼の想像通り、囁くような小声でいった。これは、全く広一の予想と、合致した。彼はニヤリとして肯いた。

やはり女は、あの時に悦びを表現していたんだ。女というものは、うれしい時には苦悶と同じような表情をするということがよくわかった。忘れられないんだな俺が……。

彼の頭の中を、あれこれと想像していたこ

との裏付けを求めて、あの時の状景が走馬灯のように浮かび、巡った。「たのみたいことがあるの」と囁やいた女の息が、彼の頬にいつまでも甘い温かさを残していた。

あくる日、彼は再び団地を訪れた。この前と同じように、のぼる階段はそのまま、彼の期待への道だった。ふくよかなつき出された肉体、開かれた脚、冷たく固いガラス器具、うごめく女。とらえてもとらえても、それらはとらえ尽しがたいもののように思えた。

三階にまであがると、あの部屋に急いだ。扉をノックすると、すぐにあの女が迎え入れた。部屋に入って扉が閉ると同時に、横手からすっと出て来た男が、彼と扉の間に立ちはだかった。男は警察の者だと言った。

「犯罪」

いままでも広一は、それを一度も考えてみたことはなかった。ハッとした彼の手首に手錠が音を立てた。

『少年A(十九)は、婦女に対するいたずらと、乱暴の疑いで本町署員に逮捕された』その日の夕刊に、小さい記事が出ていた。

終り

## 新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

### ☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	三千元

### ☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思えます。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。



## 連載時代伝奇小説

緋

ひ

縮

ぢり

緬

めん

地

じ

獄

ごく

(第十四回)

## 白鳥大蔵

## 色と欲

「お京。おめえ、まったくいい女だなあ。おらあ、たまげたぜ。からだつきから見ても、悪くねえはずだとは思っていたが、まさか、これほどの上物だったとはなあ……」

黒縄の五郎蔵が、腹の底からうなるようにいって、ふうッと大きな息をついた。

胸毛が、汗で濡れている。その汗を掌でぬぐいながら、たっぷりと満腹している顔つきになっている五郎蔵だった。

お京は、黒い縄でうしろ手に縛りあげられ

たまま、五郎蔵の手のとどく位置にころがされている。

ただうしろ手に縛られているだけではないのだ。左右の足をあぐらの形にされて両足首をひとつにくぐられ、その縄を首のうしろまですなげられて、海老のように背中を折りまげられている。白い尻が思いきりうしろに突き出されていて、その尻はちょうど五郎蔵の目の前に呼吸していた。

さるぐつわを噛まされているために、どのような屈辱を強いられても、声をあげることにはできない。お京は、声のかわりに、くやし涙を流していた。

黒い縄が、白いふっくらとした素肌のあちこちに噛みこんでいて、鮮烈な色彩の対照をみせている。

背中から肩のあたりにまで吊りあげられた左右の手首が、縄にしめつけられて、紫色になっている。

人間の女というよりも、人間以外のけもの牝といった感じだった。お京は、牝の姿をあらわにされて、ころがされているのだ。

「さて、そろそろ仕事にかかるとするかな」牝の欲望をとげてしまうと、つぎにこの目明しの脳裡によみがえったのは、大津屋彦兵衛からの依頼の件だった。



——立花屋久六に誘拐された女房と娘の行方を、世間には内緒で、こっそりと探しだしてくれ。礼はいくらでもするから……。

五郎蔵のような、色と欲には目のない十手持ちにとって、これは、またとない儲け仕事である。

彦兵衛から依頼を受けた五郎蔵は、目をギラギラさせ、餓えた野獣のような形相になって、盛り場をうろつきまわっていたのだ。

掏摸の親分の久六の行方を突きとめるにはその子分をつかまえて吐かせるのが、一番手っとり早い。

そう思って、まずしょっぱいたお京だったが、久六の隠れ場所を吐かせる前に、さっそく役得にありついた。お京のからだの味は、近来にない上物だった。五郎蔵は満足した。

まったく、こういう役得があるから、目明し稼業はやめられねえんだ。

五郎蔵は、歌でもうたいたいような気持ちで、艶々としたお京の、まるいからだをみつめた。まだ湯気のたっているような、なまなましい肌の色だった。

この男の胸中には、すでに成算がある。

ここまできたら、この女の口から、久六の居場所を吐かせるのはかんたんだ、ともう自

分の女にしたつもりでいる五郎蔵だった。

「なあ、おい、お京。おめえを番屋にしょっぴかねえで、こんな今戸八幡の小料理屋へつれこんだのには、じつは、わけがあるんだ」

五郎蔵の、いかにも目明しらしい陰険な目が、お京の肌の微妙な色彩をみせている縄目へ突きさすようにそそがれた。いくらそそがれても、お京はそれから逃げ隠れすることができない。

「おめえの親分の立花屋久六の居所を、おれは知りてえんだ」

いいながら、五郎蔵は十手をつかみ、お京の太腿の上を、ピタピタとたたいた。

あぐら縛りにされて、畳の上どころがされているお京の骨と筋肉が、そのおぞましい十手の感触に、おびえたようにふるえた。

「いくらシラを切ろうとしても、駄目だぜ。

おめえはもう、おれのものになっちまったんだ。ふふふ……おめえは、まだそのつもりじやなかろうが、おめえのからだはもう、おれとつながりが出来ちまったんだ。強情を張るだけ、無駄というもんだぜ」

お京の太腿の内側の肉が、こまかい波のようにはふるえた。お京のからだのなかでも最もやわらかい部分で、青い筋が透きとおってみ

えるほどの白さだった。

五郎蔵は、ほかのどんな部分よりも、この太腿の内側が好きだった。好きで好きでたまらなかった。

「おれはな、女を責めることにかけちゃ、我慢じゃねえが玄人なんだ。この江戸に御用聞きが何十人、何百人いようと、まずこの黒縄の五郎蔵ほどの責め上手は、二人といねえだろうなあ……ふふふふ」

手首を縛って吊りあげている縄のあいだへ五郎蔵の十手のさきもぐりこんだ。

たちまち、お京の両手首は肩の上まで引き絞られて、同時に首縄もいっそう強く咽喉をしめつけた。まるくなっている裸身が、いっそうまるく縮んで、

「ぐ、ぐ、ぐうッ」

という、腸のねじれるようなうめき声が、さるぐつわにふさがれたお京の歯のあいだから、にじみ出た。

あまりの苦しさに、お京の裸身が桃色になってふるえだす。女そのもののまるみを持つた二つの隆起が、奇怪な、だが一種美しい景観をみせてけいれんした。

満腹したはずの目明しの視線が、その二つの丘に飽きもせず、そそがれる。



「おれのこの黒い縄が、たくさん女の肌を知っているように、このおれの十手はな、それと同じくらいの数の女を知ってるんだぜ。へへ……この十手が、女の肌のどこを知ってるか、おめえにも見当はつくだろう、うふふふ……」

これ以上の愉悅はない、といった顔で、五郎蔵は齒をむきだして笑った。

笑うと、この男の上唇は鼻の下にくるりとまくれあがって、唇の裏の紫色がむきだしになる。ひどく女に嫌われる人相になるのだがこの男はそれに気がつかない。

## 十手の味

いくら立花屋久六の居所を吐けと責められても、お京の口には固いさるぐつわが噛まされてるのだ。返事のできるはずはない。

五郎蔵も、それは知っているのだ。

知っているくせに、わざとネチネチとそんなことを言ってお京の羞恥と苦痛にもだえくねる全身の表情を観察して楽しんでいるのだ。

どのように肩をひねろうと、腰をねじろうと、五郎蔵の目から逃げることでできないお

京だった。せめて、膝と膝とを閉じ合わせることでできたら……。しかし、あぐら縛りにくくりつけている縄は、膝を動かすと敏感に足首の骨に反応し、首の骨がへし折れるかと思うばかりの苦痛をあたえる。

「さあ、吐けよ、吐かねえのかい。ええ、おい。まだおれの言うことがきけねえって言うのかい」

ついに十手のさきが、救いをもとめてあえぎつづける肌に、微妙な音をたてた。

白い咽喉が、ひきつるようにのびあがってけいれんした。さるぐつわに封じこめられたはずの声が、金属的なひびきとなって、ほとばしりてた。左右の乳首の先端が、豆粒のように固くなる。十手は、縄と肌の間にめり込み非情にうごめきだしたのだ。

「まったく強情な女だな。おれのこの十手責めで、いまままで泣かなかった女は、一人もいなかったんだぜ。ええ、おい、これでもまだなんとか言わねえのかい」

ゆらり、ゆらりとこじりはじめる。

五郎蔵の右手の指さきは、十手の柄の部分で、軽くにぎっているだけである。五本の指で、指でもつまむように軽くつまみあげ、それを、そろり、そろりと動かすだけなのだ。

「言わなければ、言わねえでもいいんだぜ。それだけ、おれの楽しみが増えるっていう寸法だ。どうだい、十手の味は。だいぶ調子がでてきただろう、うふふふ……。まあ、今夜ひと晩じゅう、そうやって強情を張っているんだなあ。おれのほうは、ちっとも困らねえぜ」

お京の腰骨のあたりが、ぎくん、ぎくんと苦痛を表わす。声はもうでなかった。そのかわりに、咽喉のあたりから、あぶら汗がふつふつとふきだしてきた。

十手は生き物のように呼吸をはじめ、なおも柔肌を噛んで揺れ動いた。そして、巧妙に柄が回転しながら五郎蔵の手の中で浮き沈みした。

お京の苦鳴が、その浮き沈みにつれて激しくなった。縄に締めつけられた左右の乳房のあいだから、たらたらとあぶら汗が流れはじめた。

「おいおい、お京、いつまで黙っているつもりだい。しかし、さすがに江戸一番といわれる女巾着切りだなあ。我慢のほうも一番だよ。うし、てめえがその気なら、こっちも手加減はしねえぜ。……ほれ、ほれ、どうだ、どうだ。これでもか、これでも辛抱できるか。」



それ、それ、それ……」

いつのまにか、それは地獄とも極楽ともつかない責め苦になって、お京の縄目をこねくりまわしていた。

思わずうめきを洩らしたとき、お京はまた女として最も強烈な屈辱を感じた。

お京は、激しく顎を宙に突き上げて抵抗した。が、つぎの瞬間、その反動で、また畳の上に肩と顔を打ちつけ、衝撃に気が遠くなりかけた。

その抵抗によって、お京の縄目から、ようやく十手が離脱した。

「ふん……」

五郎蔵は、手に残った十手を、自分の顔の前にかざして、せせら笑った。十手のさきには汗がついていた。なめくじが粘りついているように、苦痛を表現して光っていた。

その光った部分に犬のように鼻を近づけ、五郎蔵は目を細めて、においをかいだ。

「えへへ……うふふふ……」

どぶ泥から泡のたつような声をあげて、五郎蔵は笑った。そして十手の先のところを、子どもが飴でもなめるように、舌をだして、べろべろとなめた。

それから、その十手を畳の上におくと、お

京の髪の毛を片手でつかみ、顔を自分の前にむけさせた。

「なるほど、こいつは気がつかなかった。おめえの口には、さるぐつわを噛ませてあるんだっけ。口をふさいでおいて、泥を吐けといっても、こいつは無理な話だ。おい、お京、悪かったなあ……」

やっと気がついたふりをして五郎蔵は、お京の頬にまでくいこんでいる手拭いのさるぐつわを解いてやる。

お京の顔の鼻から下には、さるぐつわの痕が、無残なほど赤くくつきりと刻みついていた。

ようやくひと息ついたお京は、くやしさに歯がみして、五郎蔵の顔を仰ぎみた。

せめて唾でも吐きかけてやりたい気持ちだが、さんざんに責められ、痛めつけられて、いまはその気力もなかった。憎しみと怨みをこめて、ただにらみつけるだけである。

## 女の嫉妬

「さあ、きかせてもらおうかい。おめえたちの親分、立花屋久六は、いま、どこにいるんだ。馬道の家にもいねえし、石浜神社裏の屋

敷にも姿を現わさねえ。まったく、けむりみてえに消えちまいやがった。じつはおれも、不思議に思ってるんだ」

五郎蔵は、真顔になっていった。

「それを教えたら、この縄を解いてくれますか、親分」

お京は、黒い縄がますますきびしくいこんでくる乳房をあえがせながら、きれぎれの声でいった。

「さあ、解いてやるとも。おめえを縛ったのは、なにも番所へしょっぱいていくためじゃねえんだ。久六の行方をなんとか知りてえと思ってるな」

「うそじゃないでしょうね。本当に、この縄を解いて、ゆるしてくれるんでしょうね。苦しくて苦しくて、背中の骨が折れてしまいうなんですよ」

お京の背中から腰にかけて、べっとりとおぼろ汗が浮かんでいる。

「くだいなあ、おめえも。おれも黒縄の五郎蔵だ。二枚舌は使わねえよ」

「せめて、この首と足とをつないでいる縄だけでも解いてくださいな。苦しくて、息もつけやしない」

嘘でない証拠に、お京の顔面は死人色にな



っている。唇は灰色になって、こまかくけいれんしているのだ。

「よし、待ってろ」

五郎蔵は、あぐらに組み合わせて縛った足首の縄を解いた。その縄は乳房のあいだを通って、首のうしろまでつながっている。

解かれたとたんに、まげられていたお京の背中が、まっすぐにのびた。それだけでも、お京にとっては、蘇生の思いだ。

半身を起こすと、はじかれたように膝と膝とをよじり合わせる。

さんざんにもてあそばれて、いまさらそうしたところで、どうにもならないが、お京にはまだ若い女の本能があった。

「久六の隠れている場所はどこだ、言え」

五郎蔵の声音が、別人のように鋭く、凄みを増した。

「そんなこわい顔をしなくたって、言いますよ。あたしゃもう、久六とは、親分子分の縁を切ったんですからね」

親分子分の縁を切ったところではない。お京にしてみれば、すんでのところ、久六に責め殺されるところだったのだ。

憎しみこそあれ、久六をかばったりする気持ちは、いまのお京には、小指のさきほども

ない。立花屋久六は、むしろ八ツ裂きにしたいほどの仇敵だ。

「あの男はね、いま深川扇橋の、見世物師のところにいるのさ」

「扇橋の見世物師？」

おうむ返しに、五郎蔵がいった。

「久六の弟分で、岩松っていう男の家にいるはずですよ」

「岩松だど？ ヤレツケの岩松か？」

「そうですよ、よくご存知で」

「扇橋もおれの縄張り内だ……そうか、岩松は久六の弟分だったのか。なるほど、立花屋久六は、おもてむきは香具師の元締ということになっているから、岩松が弟分だったとしても、不思議はねえわけだ。おれともあろう者が、どうしてそこに気がつかなかったのかなあ。くそッ、いまましい」

五郎蔵は舌打ちした。

「ところで、お京。おめえ、大津屋彦兵衛の女房でお静という女と、お雪という娘を知らねえか。たしか、久六と一緒にいるはずなんだが……」

「知ってますよ。だって、あたしはついさっきまで、その女たちと一緒に、岩松の家につかまっていたんですもの」

「なにッ、お京、それは本当か」

五郎蔵は、思わず声をあげた。五郎蔵にとっては、とびあがりしたいほどの吉報だったのだ。

やっぱり、お京をしょっぱいたのは成功だった。お京に出会ったのは、運がよかったのだ。

「そうか、お京、よく教えてくれた。礼をいうぜ。大津屋の女房と娘をかどわした久六はむろん重罪だが、それをかくまった岩松の野郎も同罪だ。これから踏みこんで行って、御用にしてやる」

五郎蔵は、十手を握りしめて勢いよく立ちあがった。その目から、もうみだらな光りは消えている。

「さあ、教えたんだから、約束どおり、この縄を解いてくださいな。ねえ、黒縄の親分。黒縄の痛さは、もう十分にわかりましたよ」

お京は、うしろ手に縛られた身を、すり寄せるようにして、五郎蔵にいった。

「ふざけるな。いまのおめえの話が嘘か本当か、それをたしかめねえうちは、その縄をうっかり解くことはできねえよ」

「ち、ちくしょう、だましたね！」

お京はさけび、身を揉んで中腰になった。



「だましたわけじゃねえ。あたりめえのことだ。餓鬼のところから拘摸だった女のいうことなんか、そうあっさり信用してたまるもんけえ」

「ちくしょう！」

いくら肩をふるわせてくやしがつても、縛られている身では、五郎蔵にむしゃぶりついていくこともできない。

「まあ、おとなしくこの部屋で待ってろ。おれはまた、ここへもどってくる。そして、もう一度、おめえを抱いてやる。それを楽しみに待っているんだな。おれはどうやら、おめえに惚れたらしい。おめえのからだに惚れたらしい。おれはもう、おめえのからだをほかの男に抱かせやしねえぜ。おれだけのものにして、もっともっと仕込んでやる。おれの黒縄の味を、もっともっと刻みつけてやる。わかったか。めったなことじゃ、もう、おめえを離しやしねえから、そう思え」

「ちくしょう、やい、五郎蔵！」

なおもわめこうとするお京の口のなかへ、五郎蔵はすかさず十手のさき突き入れた。

お京の罵声は、それであっさり封じられてしまう。

「この黒縄の五郎蔵にみこまれたら、どんな

にしたたかな女でも、蛇ににらまれたカエルさ。観念したほうがいいぜ、なあ、お京」  
五郎蔵は、お京を縛った縄目を、注意ぶかく調べた。

お京は、ずいぶく激しく身を揉んでいるはずだが、さすがは自慢の黒縄だけあって、寸分のゆるみも見せていない。

べつの縄をとりだすと、五郎蔵はお京の上半身を床柱にぐるぐる巻きに縛りつけた。

それから、さっきはずした汚れ手拭いで、念入りにさるぐつわを噛ませた。

これで逃げることも、声をだして助けを呼ぶこともできない。

もっとも、いくら声をだしたところで、今戸八幡に近い店の前通りはともかく、この離れの周囲は樹々にかこまれた閑静な場所ので、めったに人の近づく気配はない。

五郎蔵は身づくろいすると、縁側へ出た。敷き石を踏んで庭伝いに店へ歩いていく。

そして、この『花鳥』の女主人であり、めかけでもあるおりんを物かげへまねき寄せると、その耳もとにささやいた。

「離れにいる女を逃がすんじゃないぞ。ありや、重罪を犯した女で、わけあっておれが預っているが、もう二、三日はここへ隠してお

きてえんだ。なに、お前が嫉妬をやくような女じゃねえよ。わかったな、よく見張ってろよ。もし逃がしたりしたら、ただじゃおかねえからな」

おりんは、五郎蔵の顔をにらむようにして白い目で見あげ、無言でうなずいた。

嫉妬をやくなといわれても、五郎蔵がなぜ離れに女をとじこめておくのか、女の六感でピンときているおりんである。

「れいの黒い縄で、ちゃんと縛りつけてあるんだろ。お前さんの縄なら、なにもあたしが見張っていなくたって、めったに逃げられやしないよ」

おりんは、ふてくされて言った。  
妬くなと言われても、妬かすにはいられない。

## 燃える赤鼻

お仙は、あきれたように、赤黒くふくらんでいる岩松の巨大な鼻をみあげた。

「お前さんて、本当にしつっこいんだねえ。さすがのあたしもおどろいたよ。あたしゃこれまで、ずいぶん数多くの男を知ってるつもりだが、お前さんほどねちっこいのは初め



てだ。おそれいりました。久六もしつこいほうだけど、久六よりもお前さんのほうが、一枚も二枚もうわ手だ。あたしゃもう、ここいらあたりが綿みたいになっちまったよ。ヤレツケの岩松と呼ばれるだけあって、さすがに続くもんだねえ……」

岩松は、もう布団から這い出して、お仙の枕もとの煙草盆の前にあぐらをかき、ひと汗かいたあとの煙草を吸っている。

「おい、すこし黙らねえか。おれはいま、考えごとをしてるんだ」

お仙はあまえ声になり、むっちりと肥えた白い肩を夜具の襟からだして訴える。

「ねえ、これで、あたしの気持ちがわかったろう。だから、ねえ、縄をもうほどこいておくれよ。いくらなんだって、うしろ手に縛っておいて女を抱くなんてひどいよ。男のほうはいいかも知れないけど、女の身になったら、たまりやしない。ねえ、腕がしびれて、骨がはずれちゃうよ。もう、ゆるしてくれたっていいじゃないか。意地悪。あたしにも一服吸わせておくれよう」

お仙は夜具のなかで、もぞもぞとからだを動かした。

身には布きれ一枚もゆるされず、その上、

縄でうしろ手に縛られている。自分で起きようとしても、起きられるものではない。

「うるせえな。すこし静かにしてろ」

岩松は、煙草盆の端を、煙管の雁首でつよくたたいた。

「なにをそんなに考えているのさあ」

お仙は、顔をしかめて言った。乳房の上をしめつけている二本の縄が痛くて、口をきくのも楽ではない。

「久六が持っているはずの、オランダ歌留多の半片だ。野郎、どこへ隠しやがったのか」

すっ裸にして久六を調べたのだが、どこからも出てこなかったのだ。

この岩松の家にくるまでは、たしかに久六は歌留多の半片を持っていたという。

久六がお静を手ごめにしながら吐いた言葉の端からでも、それは信じられる。岩松は天井裏にしのびこんで、その言葉を、じかに自分の耳できいたのだ。

すると、この家に来て、土蔵のなかへ運びこまれる前に、久六は胴巻きにしまっておいたオランダ歌留多を、自分の肌身以外のどこかへ隠してしまったのだ。

「しぶとい野郎だ。一体、どこへ隠しやがったんだろう」

岩松は、あつい唇をねじまげながら、もう一度ひくくつぶやいた。

「そうだねえ。そう言われてみると不思議だねえ。隠すといっても、隠すところは、この家の中しか無いんだから……」

岩松の機嫌を損じないように、お仙は合槌をうった。

「うすっぺらな紙きれ一枚だ。隠そうと思えば、どこへでも隠せる。……くそッ、隠すのはかんたんだが、探すとなると、ちよつとやそつとの苦労じゃねえぞ」

岩松は、にがい顔になって庭のほうへ目をむけた。

「あたしも一緒にさがすから……だから、この縄をほどこいておくれよ、ねえ……」

お仙はまた肩と腰をゆすり、鼻声をだして訴えた。

そのお仙に、岩松はひややかな顔をむけていった。

「おれはな、お仙、まだお前さんを信用しちやいねえんだよ。どんなにおれに甘えていい声をあげて泣こうが、お前は長いあいだ久六のめかけだった女だ。いくら久六が息も絶えだえの化けもの野郎になったからといって、そうかんたんに、牛を馬に乗り替えられるも



のでもあるめえ。縄を解いたとたん、剃刀かなんかで、おれの脇腹をえぐり、久六をかついで逃げだすかもしれねえ。おれは生まれつき、うたぐり深い男なんだ。まあ、もうすこし、縛られたまんまで寝ているんだな」

ちくしょう、とお仙は胸のなかでののしつた。なんて嫌な男なんだろう。これじゃ、女にもてないのもあたり前だ。

しかし、口さきでは、

「なに言ってるんですよう、親分。あたしゃもう、心もからだも、このとおり親分のものなんですよ。あたしゃ親分みたいな、たくましくて、しつこい男が大好きなんです。お願いですよ、信じてくださいよう……」

と、なおも鼻にかかったあまえ声をだすお仙である。

岩松の脳裡に、ふとこのとき、裏庭の土蔵に押しこめてあるお静とお雪の白い裸身が浮かんだ。

子分の定と政が、見張りについているはずである。その定と政が、縛られて身動きできないお静とお雪に襲いかかっている光景を、岩松は思いうかべた。

おとなしく見張っていると言うほうが無理だろう……まあ、仕方なえことだ、と岩松

はつぶやき、苦笑した。

いま岩松が最も気になることは、やはり、オランダ歌留多の行方なのだ。大津屋彦兵衛の抜け荷の割り符だという、オランダ歌留多の半片なのである。

立花屋久六が、あんなに必死になって守りぬこうとしている半片だ。よっぽど、どれくらい儲け口にちげえねえ。

こいつはどうしても横奪りしなけりゃ、ヤレツケの岩松の名がすたる……。

岩松は、煙管を煙草盆の上におくと、立ちあがった。

「お前さん、どこへ行くんだい。出かけるんだったら、あたしの縄をほどこいて行っておくれよ！」

お仙が、あわててまた布団のなかから首をのばした。

「うるせえ！」

岩松はもうふりむきもせず、廊下へ出るための障子をあげた。

この儲け口は、どうしても、おれのものにしなけりゃならねえ。久六をもうひと責めしてやる。残っているほうの目をえぐり、片腕を切り落としても、久六の口から、歌留多の隠し場所を吐かせてやるのだ。

岩松の決意は、その巨大な赤鼻のように、むくむくとふくれあがった。

赤い鼻に血が凝結していいよ赤くなり、顔のまん中だけが、まるで燃えているようだった。

## うまい話

「もし、定さん、定さん。おねがいです、ちよっと目をさましてくださいな。もし、定さん……」

女の声が、定の耳にひびいた。それは、雲の上から天女が呼びかけているような、美しい声音だった。

定は、返事をしようとした。が、咽喉がなかでふさがれているような感じで、どうしても声がでない。

「もし、おねがいです。定さん、起きてくださいな」

天女の声が、またひびいた。

そうだ、おれは眠っているのだ。いつのまにか、疲れて眠ってしまったのだ。

しかし、おれは寝てはいけけないのだ。おれには、お静とお雪の母娘を見張っていなければいけない大切な役目があるのだ。



定は、意識の底で、そう思った。目をひらこうとしたが、どうにも、まぶたが重い。またうとうとと、こころよい睡魔にひきずりこまれていく。

「もし、定さん、起きてくださいな」

三度目に声をかけられたとき、定はようやく目をあけた。

うす暗い、かびくさい土蔵の中である。

大の字になって、湿っぽい床の上に寝ていた定は、胸もとをぼりぼりかきながら、やっと半身を起こした。

すると、すぐ前の柱に縛りつけられている

お静の姿が、自然に目にはいる。

「いま、おれを呼んだのは、お前かい？」

定は、目をしょぼしょぼさせ、唇の端の、よだれを手の甲でふきながらいった。

「そうですよ。まあまあ、大きなイビキをかいて……」

お静は、美しい微笑をみせた。

妙だな、とまだはつきりしない頭で、定は思った。

この女が、おれに笑顔なんか見せるはずはない。柱に縛りつけられているお静を、おれは無理やりに抱きすくめ、いたぶりまわし、思いきりの辱ずかしめを加えたのだ。

お静は哀顔し、さるぐつわの口でせつない

悲鳴をあげ、涙を流して抵抗した。だが、縛りつけられている身では、どうにも避けることはできずに、定の思うがままになってしまった。憎みこそすれ、お静がおれに、愛想の

いい笑顔をみせるはずはないのだ。

おれはお静を頂き、政は……そうだ、政はそのとなりの柱に縛りつけられているお雪にしがみついていたやがったつけ。

その政も、定と同じように、床板の上に大の字になってひっくり返り、眠りこけているのだった。

お雪は、黒光りする大黒柱に、うしろ手にぎりぎり縛りつけられたまま、痴呆のような目を宙にむけていた。つぎからつぎへとくり返される汚辱の裸身だった。いっそ、白痴になってしまったほうが、この娘にとっては、しあわせかも知れない。

「ねえ、定さん。折りいって相談があるんだけど、きいておくれでないかね」

お静は、縛られたまま腰をくねらせ、媚態をみせていった。

「なんでえ、相談とは？」

定は、縄のかかった白い裸体を、いまさらのように、まぶしいものでも見るような目つ

きで眺めた。

「岩松がもどって来るといけないから、手っ取り早くいうけどね、ねえ、定さん、あたしたち母娘を、助けておくれでないか」

「なんだって？」

定はお静を改めて凝視し唇をねじまげた。

「あたしたちをこの土蔵の中から、いえ、この岩松の家から助けだして、日本橋伊勢町の大津屋まで送りとどけてくれれば、お礼に百両、いえ、一人百両ずつとして、二百両差しあげようじゃありませんか、ねえ」

「一人、ひゃ、百両ずつだとう？」

「嘘じゃありませんよ。あたしが彦兵衛に話せば、そのくらいのお金は、すぐに出してもらえるはずです。いえ、あたしたちの無事な顔をみたら、彦兵衛はよろこんで、一人二百両ずつ、都合四百両は、お前さんがたに差しあげることでしょうよ」

「一人、二百両か……」

定は、うなづいた。

信じられねえ、といった顔で、お静の瞳の奥をのぞきこんだが、お静は真剣だ。

真剣なのは、あたり前である。お静にとっては、死ぬか生きるかの瀬戸際なのだ。

定は、腕組みをして、考えこんだ。



「二百両か……ううむ……」

岩松の子分として一生働いたとしても、とても二百両の大金はつかめそうもない。岩松は人使いが荒いくせに、人一倍ケチな男だ。

この母娘を助けて大津屋へつれていけば、一人二百両ずつの礼金がでるというのは、けっして理屈に合わない話ではない。大津屋彦兵衛は、たしかに大よろこびで、助けてやった自分たちに感謝するだろう。大津屋の身代からすれば、四百両なんて、鼻クソみたいな金額だろう。定は、足のさきで、寝ている政の頭を蹴りつけた。

「おい、政、起きろ。相談がある」

顔をしかめて半身を起こした政に、定は話してきかせた。

ねぼけまなこをこすりながらも、政は用心ぶかい目の色になってこたえた。

「うめえ話だが、まさか、冗談じゃねえだろうなあ……。この二人を大津屋まで送りとどけたとたんに、役人がとび出してきて、御用だ、なんていうのは、まっぴらだぜ」

「それは大丈夫です。わけがあって、彦兵衛はこのことをお上へ届け出たはいいはずです。彦兵衛としては、なるべく穩便におさめたいんです。お金であたしたちが無事にもど

ってくるんだったら、彦兵衛はよろこんで出してくれます」

お静も、いまは必死だった。

なんとかして、この二人の子分を説き伏せなければならぬ。それよりほかに、助かる道はないのだ。自分たち母娘のからだを、けだものよりも悪辣に踏みにじった憎い男だが、いま、自分がこの土蔵から脱出する方法は、これだけしかない。

「兄貴、どうしよう？」

政は、乗り気になって、定にいった。

定は、チラリとお静の表情をうかがいながらいった。

「おれは、悪くねえ話だと思ふんだ」

「そうだなあ。うちの親分は、世間に隠れてこの通りのあぶねえ仕事ばかりに精をだしている。おれたちも折りをみて、そろそろ足を洗わねえと、いまにとんだ巻き添えを食らうかもしれない。このへんが、どうやら見切りどきかなあ……」

ここが一番考えどころだとばかりに、政も腕を組んで、口をへの字にむすんだ。

「いい思いをするのは親分だけで、おれたちはいつもお余り頂戴か、せいぜい盗み食いくらいが関の山だ」

その盗み食いを、今やったばかりである。

「だけどう、二百両ずつもらっても、親分にとっつかまったら、まず殺されることは、たしかだぜ、兄貴」

政は、また不安そうに首をすくめた。この男は、もともと臆病な性質だ。

「金をふとろにしたら、その足ですぐに上方へでも高飛びするんだ。うちの親分がいくら執念ぶかい男でも、京大坂までは追ってはこめえ」

「なるほど」

「おい、政、おれは決心したぜ。おめえ、そっちの娘の縄を切れ。おれは、こっちのお静のほうの縄を切る」

「兄貴がやるんだったら、おれもやる」

「こうときまったら、イチかパチだ。命がけだが、二百両ずつになるんだ。ぬかるなよ」

二人の子分は、ついに岩松を裏切る決意をして、ふところからあいくちを取りだすと、お静とお雪の縄を切りはじめた。

岩松は、オランダ歌留多の半片を手にいれることに夢中で、久六をしめあげることばかりに気をとられている。ふたりの人質にまで注意がまわらなかったことは、定と政の裏切り行為を容易にしたのだった。(つづく)





フォト・ストーリー

## 私の『S M 日記』

小 竹 一 浩

### 前文 S M 雑記

『次の(……)内に適当な言葉を入れよ』  
学生のテストのようだが、誰方が想像を逞しゅうして、S M 的魅惑に富んだ会話を完成してみませんか？

Xマスも近い師走二十一日(土)の夜のこと。東横線自由が丘駅附近で飲んでの帰途、友人に電話を掛けていた私の隣りに、ゾクリとするような美女が来た。腰までも垂れた見事な黒髪が和服に映え、抜けるように白い襟足の美しかったこと!!

しかも、聞くとはなしに(?)聞いてしまった彼女の言葉は、とても信じられない程S M 的なものだった。私の連想の為だけではない、ということを読んで戴ければわかると思う。テープに収めたわけではないから、全くのノンフィクションだとは言わぬが、主要な彼女の麗しの唇から発したものであることを強調して置く。

× × ×  
「もしもし……先程はどうも……」  
(……)  
「今、自由が丘です」

(……)  
「ええ。大丈夫です」  
(……)  
「いいえ、そんなこと……。でも着物で良かったですわ」  
(……)  
「ええ。びっくりしましたワ。だってエ、きょうのはあんな……」  
(……)  
「それはそうですけど、やっぱりこわいワ。それに……」  
(……)



「いいえ、そうじゃないんです。ちがいますわ、本当に。ただ……」

(……………)

「ううん、いじわるネ」

(……………)

「ええ、わかるような気がしてきましたわ。なんとなく体が締まるような……」

(……………)

「そんなことおっしゃっても、思いがけなかったし、それにあんなことなさるんですものとても……」

(……………)

「ひどいわ。そんな……。嫌いじゃないって言っただけですのに」

(……………)

「ええ、いいわ」

(……………)

「これから買いに行くわ。でもどの位のを買ったら良いかしら？」

(……………)

「えッ？ とてもそんなこと……」

(……………)

「ハイッ。わかりました、そうします」

(……………)

「は、はいッ。ごめんなさい」

(……………)

「あのう……それじゃ明日は、あの服を着て行かなきゃいけませんの？」

(……………)

「いいですワ。でもなるべくお手柔らかに、お願いします」

(……………)

「はい。必ず参ります」

(……………)

「ええ。着けてますワ。言われた通り明日まで」

(……………)

「きょうはもうこれで許して下さい。今度からは、きっと人のいない電話ボックスから掛けますから……」

(……………)

「はい。そうなんです。いえ、かまいませんわ、お願いします。それじゃまた……」

× × ×

二月十二日の夕刊に、(ピンクはんらん・もう許せない)と大きな活字が載っていた。

昨年度に『有害映画』と指定されたものなんと五千三百六十七本という多数にのぼり警察庁から目をつけられてる雑誌が、週刊誌

二十五種、月刊誌七種もあるという。どうも奇クが入っていきそうな気配である。もしもの事があつては大変である。この際、ある程度の自粛が必要かも知れぬが、なんと云つてもこれは映画の煽りの為であろう。そこで残念乍ら辻村氏の映画界での活躍が、その導火線になりはせぬかという危惧を覚え、ても不思議はあるまい。

先日「女狩り<sup>スケ</sup>」という日活作品を見たが、確かにひどい。ピンク映画以上のシーンがある。その上





その映画館の入り口には、映画で実際に女優が身につけたという金属製の貞操帯が飾られていた。

「これ、なんだろう？」と通り掛りの子供達が、珍しそうに覗き込んで騒いでいる。全く困ったものだ。こんなことをするから監視を強化されてしまうのだ。特定の書店に限っての販売法その他種々の自粛法を採り、マニヤ誌としてひっそり生き伸びている奇クが、映画のとばかりを喰ったのでは泣いても泣き切れない。

こんな時だから、『セックス全般にわたって』という広幅論には絶対反対を唱えざるを得ないし、もう一つ、時折掲載される団氏のシナリオ紹介も暫く様子を見ては如何がなのだろうか？ 誠に残念だが――。

× × ×

## 外出プレイ

今回は先達って行なった外出プレイを一つ書いてみようと思う。大変他愛のないプレイなのだが、吾が家でのプレイに比べ、何をやっても結構スリルもあり楽しめるので、我が夫婦は時折行なうものである。

『春一番の訪れも間近』という新聞の活字に

目をやり乍ら、フトむしようにプレイがしたくなりユキを呼んだ。

「おい、ユキ、一杯飲みたくなったよ」

「はい、すぐ仕度をします」

「いや。外へ行って飲みたいんだ。お前も従いて来い」

「あのう……」

「さあ行くぞ。すぐ火の元と戸締りをみてこい。ぐずぐずするな」

ユキは、早くも私の真意を見抜いたようだったが、それ以上、何も聞かず素直に肯くと部屋を出て行った。

さて今夜はどんなプレイをしようかな？

近所の商店街を避けて、いつもの様にタクシーを利用するのだから、タクシー内でも何かしなきゃもったいない。等とケチな事を考えていると、

「ごめんなさい。遅くなって……」

セーターを脱ぎ乍ら飛んできたユキは、私は何も命じないうちに丸裸になって、ストープの前に身を踞めるのだった。

「お願いします、余り強く締めないで……」

菱縄型に組んである細い綿ロープの上端にある輪を両肩に掛け前面に当てがい、ウエストから背面を締め上げてゆく。

「よしッ」

「あのう、こっちはいいんですか？」

ヴィナス（なんて書くとヴィナスに怒られそうなスタイルだが……）のポーズをとっていたユキは、片手をピクリと離してみせた。「そこは許してやろう。だけど……それだけじゃ少し物足りないかな？」

「いいえ、これで……」

「それに、それだけだと寒いぞ、きつと」

「……」

「もし少し縛ってやるよ。そこにあるロープをよこしなさい」

「あのう、本当にもうこれで……」

「コラッ、遠慮するナ」

「……」

ピシッ！ 思いきり力を入れて、左乳房に平手打ちを見舞ってやった。

「アウッ、ごめんなさい。カンニンして……」

と尻込みしながらも、頭まで痛みの走りそうなその一発でユキの目は、輝きを増したようにみえた。そして、

「予定変更だ。雁字搦目にしてやるぞ」

と言われると、

「はい。お願いします」

と豹変するユキだった。



アルゴラグニア（疼痛嗜好）が強くなってきたのか、それとも十余年の慣性からか。

菱縄型ロープの上に更に酷しくロープを走らせてから、ウエストを締めたロープで腹部を亀甲型に縛り上げたが、時間も長いし、外出するのだからと多少、手加減した。ところが数歩あるいたユキは、

「あとう……」

「どうした？」

「中途半端に括られると却って痛いし……擦れて……思いきり締められた方が」

「よし、わかった。縛り直してやる」

ウエストから力一杯、締め直してゆく。

「アッ。そんなに強く……これじゃ屈めませんワ」

「文句を云うな、自分で云い出したくせに。」

その代り下は自分で加減していいよ」

ユキは恥し気に後ろを向くと、覗きみるような恰好で手渡されたロープを往復させた。

「こっちを向いて見せな」

二往復した四本のロープは、こんなに緊く大丈夫かなとさすがの私も心配になる程、その縄肌を僅かに見せて肌に埋没していた。（無理と思うがとに角試してみるか。辛抱できなかつたら外で解くことにしよう）等と考

え乍らユキを促す。

「下着は肌着だけでジューミーズは着るなよ、捲り難いからな。下はプレイパンティと赤のショーツを重ね穿きして、靴下は黒の長い奴をな。さあ早くしろッ」

流石のユキもコートを着終るまでに、何度か「アウッ」と小さな呻きを洩らしていた。

「歩けるか？」

「……………」

「どうした、無理か？……だけど自分で締めたんだからな」

「……………」

「こらッ、返事は？」

言いさま、またもや一発、今度はユキの右頬へ平手を飛ばす。

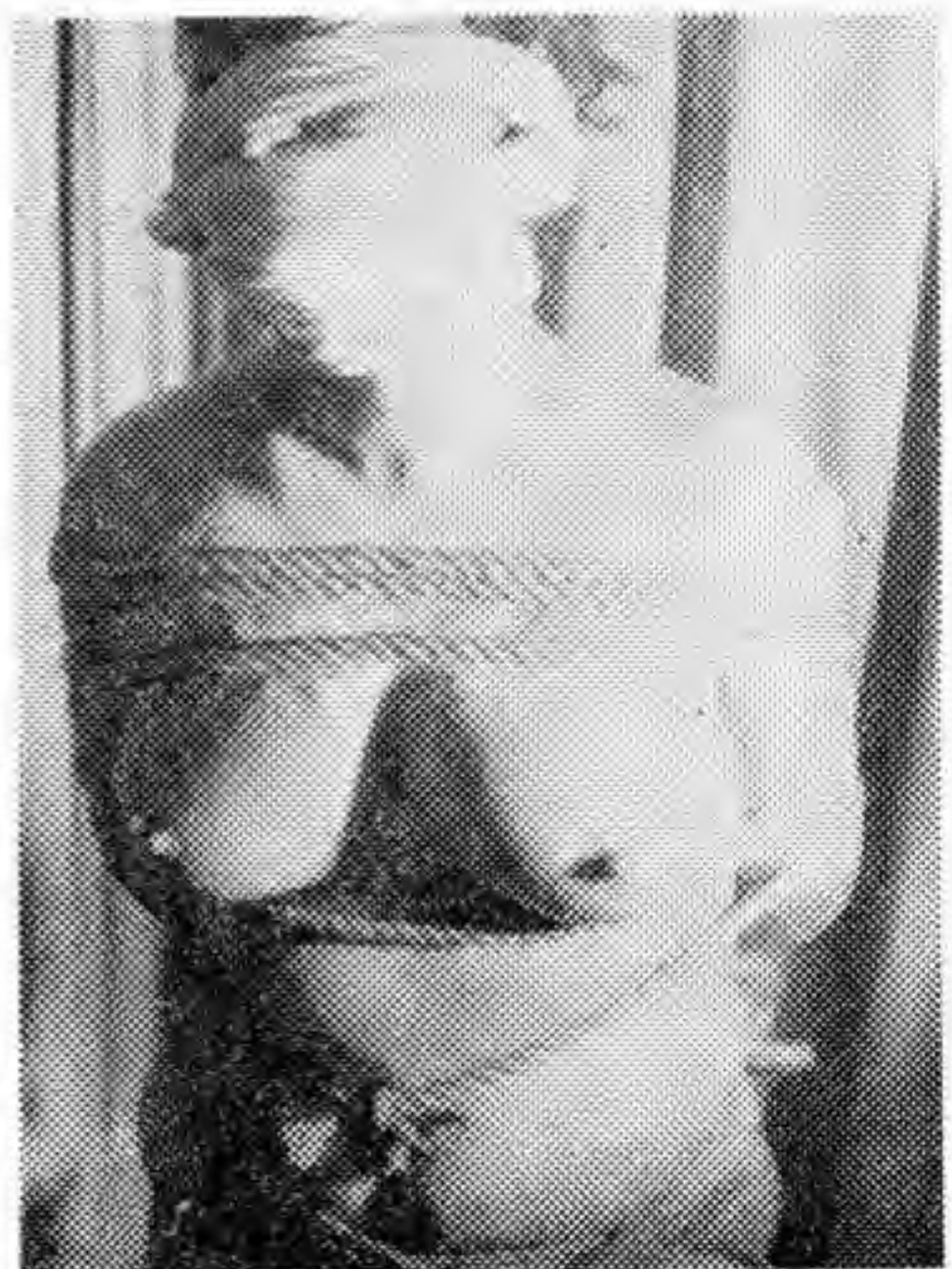
「アウッ、すみません。なんとか我慢しますから、アッアッ、お許し下さい。アウッ」

叩いたのは一発なのに、ユキは激しく喘ぎ数度も続けて悲鳴をあげた。

「さあ出掛けるぞ。戸締りは大丈夫だな？」

「はい」

まだ九時だというのに、人通りは殆どなかった。大通りに出る角でユキを止めると、汚



れたガーゼをユキの口中に詰め込み、大きなマスクをさせる。

「タクシーに乗ったら、すぐパンツを一枚脱ぐんだ」

「ウウウ」

ユキは、無理ですと云わんばかりに首を振る。しかし「ユキ」と呼んでる時は奴隷タイムであるから牝豚の意志は一切無視する。

「いいな？ 時間は短いぞ、降りるまでに必ず脱ぐんだ。そら空車が来たぞ」

眉をしかめ乍らシートに坐ったユキは、ドライバーのバックミラーから目をそらさずにそっとスカートを捲り上げる。



腰に手をまわすと臀部へ這わすようにして  
ショーツをずり下げて行く。

「おい、もうすぐ着くぞ。急げッ」

私の声を耳許で聞いたユキは、反射的に腰  
を浮かすと一気に膝頭までショーツを下げた  
のだが、そのショーツがロープに伝わったの  
だろう、大きく呻いてしまった。

「お客さん、如何かしましたか？」

「いや、なんでもないよ」

怪訝の目付をバックミラーに向けた運転手  
は、ユキのどこまで見たか知らぬが、それ以  
上、何も云わなかった。

タクシーを降りると、ユキはもう一步も歩  
けないという様に、マスクの下で呻き乍ら立  
ちすくんでしまった。

「例の飲み屋へ行くんだ。さあもう少し辛抱  
して歩きな」

ユキは、あひるのように尻を引きそつと歩  
を進ませていった。人の気配が無かったから  
良い様なものの、とても見られた恰好ではな  
かった。

商店街からはずれた横丁にあるその飲み屋  
に、よちよちと辿り着いた。

「口の中を出しな」

ベツトリ濡れたガーゼを吐き出すと、先程

から握っていたショーツに、マスクも一緒に  
くるみこんだ。

「あのう、もう……とても痛くて……」

「中に入ってから解きな」

「そんなことできませんワ」

「大丈夫さ、さあ入れッ」

建て付けの悪い戸を開けて入ると、案の定

客は一人も居なかった。

「おばさん、二、三本つけてよ」

「はい。いらっしゃい、お揃いですね。そっ  
ちの奥の方が暖かいですよ」

奥なぞと言うと大きい店のように聞こえる

が、鍵の手になっっているカウンターは、五、

六人も坐ったら満員というところ。曲った所

に私が、ユキは奥に坐らせた。

「おばさん、鱈ちりを二つ頼みます」

火を使うものを頼めば、おばさんは此方に  
背を向けて作ることになる。

「ユキ、今のうちだ。早く解けッ」

「でも……」

「大丈夫だったら。痛いんだろう？」

「ええ、とても……」

「だから早くしろッ」

「でも……」

「ウエストの結び目を解けば全部とれるよう

にしてあるんだ」

ユキは坐った儘、スカートのホックをはず  
して手を突っ込み、結び目をまさぐろうとす  
る。これではスリルも半減してしまうし面白  
くない。

「スカートは脱いで下半身、裸になりなッ」

「そんな……」

おばさんの前では、頬を叩くわけにもいか  
ないし、小声での押し問答も面倒臭くなった  
ので、いきなりスカートのチャックを下げ、  
お尻を突ついて腰を浮かさせると一気に引き  
下ろしてしまった。

「さあ、パンティを脱ってロープを解きな」

ユキの指に従いてずり下りるプレイパンテ  
イから、独特の臭気が微かに鼻を衝く。

足首からパンティを抜いている時、

「お待ち遠さま」

「えッ？ あっ、どうも……」

徳利を受け取りながら、左手でユキの下半  
身をコートで隠す。吾々ら呆れ返った狼狽振  
りだった。

「今度はおばさんの方をみていてやるから、  
早く解いてしまいな」

ロープの痛みに耐え切れず、腹部へ手をや  
る。固い結び目が解かれると、今まで肌を痛





めつけてきた四本のロープへその解放感が伝わって行く。「フーッ」小さい安堵の吐息がユキの唇から洩れた。

「ロープをきちんと束ねておけ」

足許にトグロを巻いたロープを束ねて、コートの下に隠したユキは、スカートを指さし（穿いていいかどうか？）目顔で、尋ねてきた。

「もう暫らくその儘にし……」

おばさんが鱈チリをもって来た。

「はい、どうぞ。おや何か落しましたか？」

「煙草を落したんだよ。ところでおばさんも」

「杯やりませんか？」

「すみませんね」

いんです。下が……」

「よし、穿いていいよ。寒いのか？」

「はい」

モソモソとずり上げてスカートを穿きおわったユキは、やっと落着いたように盃に手を伸ばした。

「さあ、熱いのを飲みな」

「でも……」

「でも、なんだ？ 徳利一本なら飲める筈だろう？」

おばさんに聞こえたらしく振り返った。声を高くしたり低くしたり全く忙しい。つい調子が高かったようだ。

「後のプレイは寒いから、飲めるだけ飲んで」

ユキは前踞みになっ

て、足許を隠すようにして鱈チリを口に運んでいた。

「おばさん、もう一本下さい」

「あのう……もう……」

「なんだ？ まだ三本だぞ」

「いいえ、そうじゃな

おきな」

ユキのうらめし気な視線が返ってきた。

結局、空徳利が私の前に四本、ユキの前に一本立ち並んだ時には二つの鱈チリも空になり、ユキの頬に紅がかすかに浮かんでいた。

「パンツと縄を忘れるなよ」

外の冷え込みは一段と増していた。

例によって人通りの無い住宅の道へ歩を進ませる。

「ユキ。ネクトしたくないか？」

「ええ。さっきから……」

「じゃ何故、今の店でしなかった？」

「言おうと思ったのですけど、おトイレが見えなかったの……」

「そうじゃないだろう、外でしたかったんだ

な？」

「いいえ……」

「まあいい。兎に角、この前の材木置場へ行こう」

夏場だと先客が居やしないかと気になる所だが、此の時分には全く心配ない。

「いつかやったことがあるネクトプレイをして、当たったらそれで今日は帰ることにする」

「えッ、またですか？」

「さあ、スカートとコートをとってそこに上



がりな」

グングン這い上ってくる寒さに、早く済ませようとも思ったのか、ユキはさっさと半身を剥き出しにして古角材の上に登った。高さは一米位だろう。その下から一・五米程離れた所に丸い小石を置く。

「さあ、これに当てたら許してやる」

簡単に当りそうだが、積んであるのは角材なので余り端には乗れないし、普通の前踏みポーズでは届かない。ユキは右手を背後に突いて体を支えると、腰をつき出す羞恥的なポーズをとった。

寒さに震えていたのが瞬時静止した。弧を描いて蛇行した着下点は、すぐ鋒先を目標へ向かって移動直進したが小石のすぐ脇を走り抜けてしまった。そして鋭角を作ってバックしたが遂に当らなかった。距離を考えた為か一気にと氣負ったらしくアッと言う間に終ってしまった。

「残念でした。一寸はずれたな。さあ全部脱いで貰おうか」

「えッ、もうカンニンして下さい。とても寒くてエ」

「あと二、三分だ。早くしろッ」

ユキは肌着と一緒にセーターを脱ぐ。鳥肌

立ち寒さに打ち震える上半身にロープは深く食い込んでいた。

「ロープは何処だ？」

「そこに脱いだコートの下です」

「手をまわせッ」

乳房を抱いてしゃがみ込んだユキは軽い抗らいをみせたが、すぐ立ち上って両手を背後に組んだ。手慣れた型で縛りあげ、コートを羽織らせて道路へ引っぱり出した。三十米程抱くようにして歩ませ電柱の陰に立たせる。だらだら坂のその道路の両側は大邸宅の石垣で、全く身を隠す所もない。

「いいかユキ。私が材木置場の入り口まで行って手を上げたら歩き出すんだぞ。駆け出しではだめだ。いいな？」

「そんなこと……アッ、ひどい」

私はさっとコートを剥ぎとって一気に駆け出した。そして入り口で手を上げたが、ユキは雁字搦目にされた裸身を電柱に寄せて立ちすくんでいる。私は何度か手招きしたが、ユキは太い電柱にへばりついた俤だった。とその時、大分先だが闇然たる中に、ボウッと自動車ヘッドライトが浮かんだ。癪にさわったがコートを持って駆け出した。

「ユキッ、早く来いッ」

ユキもライトに気付いたのだろう、慌てて後手に括られた上半身をゆすり乍ら駆けつける。激しい息使いのユキをコートにくるんだ時には、二人の姿はヘッドライトの輪に入りつつあった。(見られたかな?) 顔を見られるのも嫌なので、咄嗟にユキを抱きしめ、柄にもなく唇を寄せた。車が何事もなかった様に通り過ぎた後、また材木置場へ入った。

「さっきは何故すぐ来なかった？」

「だって……」

「今度から言う通りにしろよ」

「アウッ……はい」

両の乳房をねじり上げられ、呻き乍らも素直に返事をした。

「まあいい。止めよう。全部着な」

後手の縄を解かれたユキは、寒さを思い出したように小刻みに震え乍らすっかり着終ると、フーッと大きな吐息を吐いて寄り掛かってきた。寒空にもたった一つ、小さな星が震えていた。

帰宅後のプレイフォートを添えて、きりのない駄筆を置くことにする。

—(終)—





# 一 舌 つ づ み

私の通勤する小田急線向ヶ丘駅でその女性に初めて逢ったのは、昨年十月のはじめだった。

極めてシックな、それでいて清楚なダイヤ柄のツーピースというごくプレーンなスタイルを牛皮のトリミングで優雅に引き締めたまことに小粋でさわやかな彼女のいでたちである。しかも外観からではあるが全体にバランスの取れた伸やかで美しい肢体と、きめ細やかでしっとりとした潤いある明るい顔の肌。そして、やさしい眉と長い睫毛にふちどられた女らしい眼。サクランボの様な可愛い唇。

実に繊細で個性的な美人である。これはまさに、日頃、私が夢にまで描く私好みの最高のフェースである。そしてその後しばしばその女性に駅頭で出会う。そのたびに私の持

## M的飲食物考現学

つマゾヒズムの血が騒ぐ。

ああ、もしその素晴らしい女性に思いのままだぶってもらえたら。足下にひれ伏し、もしその便器にしてもらえるのなら、すぐその場で殺されても本望なり、と心から念願するのだけれど……。しかしそうは言っても、現実にはそう簡単に、その女性の奴隷になるなんてことが出来るものではないのだ。あくまでも空想の世界での夢物語であって、到底叶えられる筈のものではない。

いつぞやの『M的飲食物考現学』の中でこの向ヶ丘駅のトイレの話を書いた事がある。この駅のトイレは、我々M党にとってはまだここに都合よく設計されている。しかも今は二月。殊に朝方の冷えこみは格別であって、駅のトイレの水洗は凍りついて完全に役に立たなくなる。問題は、その女性が果たして『トイレ』に入るか否かにある。私は根気よく毎

朝彼女の挙動に注意の眼を向けた。

彼女が駅に姿を見せるのは、いつも七時二十七分頃、そして四十分発の箱根湯本行の通勤急行に乗る。その間の十分少々を、彼女はたいていは読書をしている。オーバーの襟をたて、心持ちうつ俯き加減のそのプロポーズンは、実に神々しく美しい。そして、どうも彼女は自分の家ですませてくるらしく、何日待っても駅のトイレを利用してくれないのだ。しかし、チャンスは偶然に訪れるものであるということを知られた。

それは忘れもしない先月の日曜日の朝だ。会社は休みなのだが、友人と釣りの約束をして駅で待合せていた。時刻は丁度七時だった。あっ。私は思わず眼を瞠った。向うから、足早にブルー地のオーバーの裾をヒラヒラさせながら憧れの彼女が来たのである。はて。今日は日曜なのに、彼女出勤かしら？ そんな

津 川 博



ことをふと考えながら様子を見ていたら、改札口を抜けて右に折れ、なんとトイレに足が向いているではないか。

日夜、夢にまで想像していた彼女のトイレ行き。私の心は躍り上った。震える足どりで私が後を追ったことはいうまでもない。

男性用トイレに飛び込んで、例の如く反対側の女性用がよく伺えるのを、最大限に利用する。

彼女の入ったのは、左側の二番目のトイレだった。音が聞える。どうやら下痢をしているらしい、そうか、わかったぞ、だから今朝に限って駅の利用したのだ。しかし、私にとって下痢も赤痢も問題ではなかった。あの女神の様なたぐいなき美貌の彼女の身体から排泄されるもの。それは崇高なるハニーである。なによりもの宝である。息をこらし、生唾をのみこんで彼女が出るのを待った。

女神の去った後のその問題のトイレに、私が躊躇することなく入ったのは無論のことである。白い陶器の底に、今、女神が残っていた崇高なる!!物!!がまるで流し込んだ如く静かに鎮座ましまして。甘美なる芳香がぷーんと鼻にしみ通る。ああ、憧れのもの。素晴らしいチョコレート。今ここに、わが眼の下に、待望のあのめうるわしき女神の残せし宝が横たわっている。汚いなんていささかも思わない。この気持、この喜びこそ知

人ぞ知ることであろう。

## 二 よき時代をふり返る

矢張同じくいつぞやの作品『スカタロジ』に憑かれて『の中で劇団東童時代のことを書いたことがある。戦時態勢下の黒い時代だが私にとってはよき頃であった。私が除々にマゾヒズムに目醒めたのもその頃である。

昭和十七年のはじめ私たち劇団の稽古場が渋谷に移った、まだわが日本帝国陸海軍が勝利に次ぐ勝利に酔いしれていた頃である。この稽古場は青山にあって、童話作家で有名な久留島武彦氏の私邸である。当時は、軍国映画が大いに巾を利かしていた為か、劇団東童は案外と映画界から引く張風だった。今、民芸にいる星野和正君などは当時のスターで、その頃よく稽古場に遊びに来た。片山明彦、小高まさる、小藤田正一君等も映画の中では主役だった。

私にとって忘れられないのは、角田富江と云う女優である。団長宮津博氏の奥さんの妹で、気品のある鼻、情熱を持った瞳、真珠の様な清潔な歯並び、スタイルもよく、まるで若鹿を思わせる様な美人だった。戦時中だったので、劇団の活躍は地方に点在する疎開児童の慰問のみに限られていたし、その演し物についても制限があったが、私は幸運にも、その角田富江さんとよく稽古場で共演した。

セリフをはく度に、彼女のほのぼのと暖かい息吹が私の頬をうつ。そしてある日の午后ちよっとしたふざけ合いの遊びの中で、私はその富江さんに馬乗られたことがあったのである。稽古場にはだれもいなかったし、私の方がいくつも年下だから、弟の様なつもりでいたのかも知れない。

私の仰向いた腹部の上に、どっしりと馬乗りに跨った富江さんは、私をにんまりと見下している。私の胸は高鳴った、このままいつ迄もいつ迄も馬乗りになっていて欲しい。その時、本当にそう思った。でも残念なことにほんのちよっとした間だけだった。

この久留島さんの邸のトイレは二カ所あった。私達が利用したのは稽古場の裏手にある風呂場の隣の方だったが、当時のことだから無論水洗ではない、その憧れの富江さんが生理中の時(それは偶然に彼女のすぐあとで入ったから知ったのだ)だったが、便器のふちが赤く染まっているのを見た。私の指先はまるで魔物にひき寄せられるが如く、自然に動いたように覚えてる。

そして嫌悪感はいささかも感じられず、変な味であったことも忘れてはいない。

## 三 目覚める妖精

国電池袋駅近くに小じんまりとしたトルコ



風呂がある。

この店に、小百合ちゃんなる名前の可愛いトルコ嬢がいる。小柄でわずか一米四十センチ、ウエイトも三十八キロとかで、実にトランジスター型であるが、顔立ちがまことによい。出身地が秋田なので言葉はズーズー弁だから話すと実に色気がないが、素直でハキハキとしていて明るい娘である。

私がこの娘の客になった時はマツサージもぎこちなく荒々しかったが、私の変わった要求を実に気安く受け入れてくれたのがうれしかった。もっとも、その時は唯お腹の上に坐って呉れと云うだけの要望だったから、まあその程度ならと云うことで応えてくれたのかも知れない。

その後度々この店を訪れる様になってから私は奇クを必ず持参することにした、私の作品も見せた。始めのうちは唯々びっくりしているだけだったが、私がこの小百合ちゃんのきめ細やかで、白く美しい足の指を丹念にしゃぶるプレイを行なうてからは、ちよっぴり変化を表わしてきた。男に奉仕されることに快感を覚え始めたらしいのだ。

東北の女性は、どっちかと云うと性的には案外無知なのが多いとか聞く。貞操観念が薄いともいう。嘘かまことか知らないが、赤線華やかなりし頃は、いずくの赤線でも東北出身が多かったようにも覚えている。しかし無

知とは云っても、嫌いと云う意味ではないらしい。この小百合ちゃんにしてもそうだ。リード如何によっては素晴らしい反応を示すのだ。すくなくとも私のちよっぴとしたいたずらにも、すぐ恍惚とした表情で「ああ、よステ！ よステ！」とくる。

秋田弁丸出しで、小柄な身体をくねらせるところが実に可憐で愛らしい。そして二カ月程過ぎてから、ようやく顔に坐ってくれる様になった。焦らず時間をかけて頼みこみ、私の変った性癖を良く理解してくれてからであった。

私が彼女のネクタールを要求したのは、ついこの間である。彼女を初めて知ってから、実に六カ月かかっている。

最初はすんなもの飲んだら、すんずまう！なんていってイヤイヤしていたが、私独特の説得力が遂に実を結んで、彼女到々OKをしてくれた。

しかしいざその段になったら、これがまた大変。タイルの上に仰向けにねた私のリード通りにしゃがんだまではよかったが、そんな異常な行為に緊張するものとみえて、躊躇の方が先に立つのか、一向に滝の出現はないのだ。

「どうしたの？」

「だめだあ、此処トイレじゃないもん」

「力むんじゃないよ、俺を人間と思うな。オ

トイレのつもりと考えるんだ」

「でんも！ ずっさいはつがうから、なかなか思うようになんねえす」

純情なる彼女、しきりと努力の態でモジモジ。仕様がねえから、またジュースを飲ましたり、コーラを無理やり口へそそいだり。

「どう？ できるか！」

「うん」

身体は小さいくせに量は非常に多かった。苦勞した甲斐あって実に素晴らしいものであった。果物とか、塩っぱさとか、いくらかアンモニアをふくんだ、口では云い表わせない複雑極まる甘美さに私は充分堪能した。それから小百合ちゃんは、もうすっかり平気になって、妖精の様な燃える瞳を私に向けながら、

「今日も要るんでしょう？」

「もちろん」

「だと思ったもんで、わたし、ずうっと我慢すてたのよ」

などと、うれしいことを云ってくれる。

トルコ嬢小百合は、私に取って近來まれなる可愛い妖精ちゃん存在だと思っている。

そして、終局の目的はいわずともわかって戴けると思うが、今までの範に従いじっくりと時間をかけて、嫌われない様ゆっくり馴らしてゆくつもりである。——（おわり）——





男性虐待快樂術（第六話）

## 脚線美ブルジョア時代

馬 族 保

### （1）チンピラ生捕り

一月十日。——その日、大阪は風はなかったが、いやに底冷えがした。

一月十日は、今宮のエビス祭りである。南川緑子は、『大阪歳事記』に挿入する2ページ分の写真を、カメラマンの一期崎潤とともに、ようやく出盛って来た群像を前面にし、または背景に置きながら、もう十数カットを撮影し終っていた。

たいへんな人混みである。その群衆の中を一期崎は、忠実な猟犬のように敏捷にかけ抜

け、走り廻り、片っ端から、シャッターを切って歩いた。緑子は、このびたりと合った呼吸のたのしさに、思わず上気し、うっすらと汗ばみ、血色のいい頬が輝きを帯びて、はっとするほど艶めいてみえた。

南の宗右衛門町の綺麗どころの乗ったほえ駕籠が繰り出し、「ほえ駕籠ホイホイ」とにぎやかに練り歩くころには、人の波も最高潮に達する。

緑子は、一期崎に望遠レンズを使うように命じ、一期崎が高台を求めて走り去ると、半オーバーのかくしから、たばこを取り出して一服つけた。

参詣を終った人混みは、これから参詣する群とは逆の方向に動くので、潮騒の渦巻のようになり、人の波が交流した。

南川緑子が、一服喫い終ったところである。

「馬鹿野郎！ 氣イつけんかい」

背の低い、若い男であった。

一見して、そこいらのチンピラであることがわかった。商売繁盛の竹笹きつちよを襟首につき差し、

「商売繁盛、笹もってこい」と、わめきながら、泳ぐように人混みを掻きわけて、右に左に体をゆさぶり、前からくる人波に、ドシンドシンとぶっつかる。



「おい。ぶつつかったら、すんまへんぐらい  
いったら、どうや。阿呆！」

酒気がいっているともえて、顔は真赤で  
ある。

こんな鼻つまみには、誰もが近寄らないと  
みえて、適当に道を開いて、難を避ける。チ  
ンピラは、風に張られた奴隷のように、肩を  
いからし、眼を吊りあげて、わめきちらすの  
である。

「どけ、どけ、どけっ」

ヒヨロ、ヒヨロと歩道の横にはみ出して来  
た。均衡を失った体はよろける度に増す勢い  
で、何が何でも、目の前の人間に、あたって  
くだけの必要があった。相手は、かるがると  
身を躲した。

機<sup>はす</sup>みをくって、足がもつれ、チンピラは、  
ドシンと音をたてて地面に転がった。鼻つま  
み者のぶざまさを見た小気味よさに、周囲か  
ら、冷笑する声がおこった。

「こん畜生！」

首だけ抬げて、にらみつけると、相手は若  
い女であった。

「へーエ。ようも、転ばせて貰いまして。お  
うきに」

嘲笑だけが、男——德利克平の耳の奥で、

ガーンとひびく音をたてて、いつまでも消え  
なかった。

南川緑子と德利克平の最初の出会いだ。徳  
利は、周囲の情勢から、どうしても虚勢をは  
る必要があった。緑子の半オーバーに手をか  
けて、手許に引き寄せ、威嚇するつもりだっ  
た。しかし、彼女は悠然と克平の顔を凝視し  
眼の色一つかえない。するりと半オーバーを  
脱ぎ捨てた。

オーバーを克平の手に残したまま、スタス  
タあるき出した。

「おい。ねえちゃんよ。これ、どないするち  
ゆうんや。おい」

あわてたのは德利であった。

緑子はおかまいなしに歩いてゆく。カメラ  
を首からぶら下げた男が、両手に撮影機具を  
持つてくるのに出会うと、

「八つ切にたのむわよ」

それだけいい残すと、わき目もふらずに、  
さっさと歩いてゆく。

「おねえちゃんよ。これ、いったいどないす  
るんやね。困るやないか」

前になり、うしろになり、克平はうろうろ  
しながら悲鳴をあげる。つんと恰好のよい鼻  
を横から、見上げるように覗きこむのだが、

緑子は、平然とした表情で姿勢ひとつ崩さな  
い。

御堂筋に出ると、手をあげて、タクシーに  
合図した。緑子がドアをあけると同時に、克  
平も、運転台の助手席にとび乗るように坐っ  
た。

「寝屋川」

運転手に行先を告げると、それっきり口を  
噤んだまま緑子は一ことも、しゃべらなかつ  
た。運転台のバック・ミラーに、白と黒のチ  
エックの毛糸のハンチングをかむった緑子の  
綺麗な顔が、真つすぐ前方を向いて、話しか  
けるスキも与えないのである。

サクラ・マンションの階段を登って、左へ  
折れると三〇号室が緑子の部屋だ。鍵を使っ  
てドアをあける。半開きにして、緑子は部屋  
に這入る。

「ドアを閉めて」

始めて緑子が命令口調でいった。

「へエ」

德利克平は、彼とはまるで住む世界のこと  
なる女性の部屋に来て、とまどいながら、素  
直にドアを閉め、半オーバーを手に持った姿  
勢で、緑子と対い合って立った。

ピシリと緑子の平手打ちが、はじけた。



「すんまへん」

一撃をくつて、克平がよろけるところを、もう一つピシリと緑子はきめつけた。

「おい。わたしをどなただと思いいだい。指一本つめて貰おうじゃないか。このままスーッと帰れるとでも、思ったら、そうはいかないよ。まあ、そのスリッパと履き替えて、こちらにおいで」

「へエ」

克平はチンピラである。とにかく、この女の背後には、きっと大物がいるに違いない。そうでもなければ、こうも落ちつき払っているわけがない。たいへんなことになった。今日という日は、さんりんぼうと仏滅が重なり合っていたのだ。ああ、知らなんだ。

徳利克平は、真っ青になった。

「その椅子におすわり」

「へエ」

克平は、眼をうつろにして、しょんぼりと腰をおとした。

「指をつめるの、許して貰いたかったら、わたしのいうとおりにしなさい。立って。両腕を、ちゃんとうしろに回すの」

緑子は、ナイロンの細紐をもち出して、克平の両手首をうしろに縛りあげる。それから

両足首もぐるぐる巻きに結えた。

足をあげて、克平の弱腰をドンと蹴とばすと、チンピラは、真紅の絨緞の上にだらしく、あむ向けに仆れる。

「ふん。そうやって寝ときなさい。これから、わたしが面倒みてやるから、わたしの家来になるのよ。あとで、食事も拵えてあげるから、お食べ」

洋服ダンスから、湯上りの衣裳をもって、区切られたカーテンの向こう側に緑子の姿は消えた。

やがて湯水を出す音がして、緑子はバスを使っているらしい。ゆっくり一時間もかけてバスを上るとネグリジェの姿で、鏡台の前の座椅子に腰をおろし、化粧はじめた。

## (2) 足舐め第一課

化粧にも小一時間を要した。

緑子が、ようやく鏡台を離れ、克平のそばの長椅子に凭れ、足許を視おろすと彼は軽いいびきをかいて眠っていた。

緑子は、サンダルで、鼻の上を押えつけた。

克平は、眼をあけた。眼をパチクリと見ひ

らき、びっくりした表情で緑子を見上げた。

化粧した緑子の湯上りの顔は、匂うばかりの妖しい美しさであった。ナイロン・ブルーの二枚仕立てのネグリジェを着て、髪を長く肩まで垂らし、くさ色のヘアバンドを締めている。

「名前は何？」

「徳利克平だす」

「年令は何？」

「二十二歳」

「今日からは、わたしの家来になったのだから、克平と呼び捨てにするわよ。いいわね」

「——」

「わたしは、南川緑子。これから、わたしのことを女王さまとおよび。克平は、わたしの奴隷。女王の身体をマッサージしたり、足を舐めるの」

「足を舐めるのですか」

「そう。ちよっと匂いをかいでごらんほら」

サンダルを脱いで、ペディキュアの施された雪のように白い足を、克平の鼻の先に翳し「どう。いい匂いでしょ。ミツコという名の香水よ。匂うの」

近づけられた足の匂いを、深呼吸するように吸いこみ、吐き出した。



「ほんまに、ええ匂いだす」

「わたしの足なら、汚なくはないと思うだろう。お前とは人種がちがうんだから。さあ、

舌の先で舐めてごらん」

南川緑子のテクニックが、徐々に德利克平を誘導してゆく。

克平は舌を出して、差出された彼女の足の裏にそっと触ってみた。

「甘い」

舌を軸にして、足の裏をゆっくり廻しながら、その感覚を愉しむ。緑子は、克平の歯を全部抜いて、スベスベと柔かくした歯齦と舌と唇で、原稿を書く時間を、彼女のために足を頬張らせ、しゃぶらせたいとおもった。

足をしゃぶらせると緑子の頭はシャキッと冴えてくるのである。

「足指を二本ずつ咥え、指の間に舌を差入れて、しゃぶってごらん」

不思議であった。徳村克平の脳髓を侮辱される快感が搔きむしるように走った。すこしも汚ない感じがしないのである。

「つばきは飲みこむのよ」

この驕慢な美女の足の味が、何かしら栄養の高い強壮剤に思われた。

「四つんばいになって、わたしを騎せて、ぐ

るぐる走り廻るんだよ。十五周廻れたら、今日は許してあげる。ご褒美に、ご馳走もわたしが拵らえてあげるわ」

「十周ですか。よろしうおま」

結えている細紐を解いて自由にしてやると若い身体は、エネルギーで逞しい。もうシャンと立ちあがった。

「四つんばい」

ピシリと平手打ち。

「テーブルと椅子を片づけて」

克平は緑子を騎せてぐるぐる這い廻りはじめた。

十周目あたりで、徳利の黒のワイシャツが汗ビッシヨリに濡れ、緑子は一度降りて、座布団を馬の背中に置いた。小兵の克平は必死であった。一六四センチ、五七キロのグラマ―を騎せ、スピードがおちると、ヘアブラシで頬を搏たれ、尻を叩かれて、死にもの狂いに這いまわる。

呼吸使いはあらく、ヒイヒイ咽喉を鳴らしての苦行である。

十五周を終ったとき、緑子はご機嫌であった。

「バスに這入って汗を流しておいで。シャワーを使うんだよ。タオルは、トイレのをおつ

かい。わたしは、夕食の仕度にかかるから」

その食事は、殆ど冷蔵庫のものを間に合わせた料理であったが、食卓に德利を招じ、対等に坐って晚餐を摂りはじめる。

「克平にわたしの職業を覚えておくわ。相互企業報道社の編集取材記者。実話や小説も書くわ。そこで、お前の仕事は、芸能人のスキャンダル、色恋の裏話、産業会社のスパイ合戦、新商品名、トップクラスの実業家の私生活など、雑誌の記事になると思うネタを、細大もらさず、わたしに提供すること。ネタを採す要領はその都度数えてあげる。お前の敏捷さとあつかましさを最大限に発揮すれば、訳はないわ」

「僕に出来ますやろか。僕はよう文章も書けよりませんしなあ。心配だすワ」

「お前なら出来るわ。そのコツは教えてあげるわよ。——それとも、わたしのいうことが諾けないとでもいうの」

「め、めっそうな。緑子はんの命令なら、どんななことでもやりまっせ。……よっしゃ。」

とにかく、緑子はんの仕事に協力すれば、それでよろしいんでっしゃろ」

「そう。ご褒美には、女王さまのおみ足を舐めさせてあげるわ」



「へ、へ、へ」

何かが褒美なものかとガツカリし、うれしいような羞かしいような感情で頬を赭らめたものだが、緑子のこの暗示は、後になって、克平の脳裏につよく生きつづけ、育っていったのである。

### (3) うつくしい魔術師

南川緑子が原稿用紙を拡げて、今日の取材記事の下書を書いていると、ボン、ボンとチャイムが鳴った。

二つの信号は竹中健郎に違いない。緑子が合図の声をおくと果たして竹中であつた。

「先生、口述して下さい。書きますから」

「たのむわ」

緑子は長椅子に寝そべり、たばこをくゆらせながら、口述しはじめる。口述をもとに竹中が文章を書き、それを緑子が目をとおり、もう一度、筆を入れるという仕組であつた。

つい最近の話だが、編集長の財津がからかうようにいったものだ。

「ドミちゃん、ずばりいって、君には誰か助手がいるな。それも若い男らしい。文章にも色気が出て来たし、恋人でも出来たのかい。」

とにかく、最近のドミちゃんのはり切りかたは、量質ともに拔群だな。それに写真の上達には、北海道以来、目をみはるばかりだ。まったく脱帽するよ」

たのもしそうな眼をして、二十二歳の緑子を見た。しかし、緑子は謎めいた微笑を泛かべただけであつた。

竹中は、サクラ・マンションの右隣りにある、表現社という看板店の二階を間借している。器用な男で、絵も描くし、商業デザインもやる。自動車やテレビの修理も出来るし、小説も書く。——芸術大学に籍を置いたこともある。——という多芸家であつた。ひととおり何でもこなせるかわりに、どれも本物にならないという種類の男である。

一年ばかり前、緑子がレストランで夕食を摂っていると、たまたま看板の集金に来た竹中と顔を合せた。二、三回、彼からのラブレターを貰い、からかってやろうかな、と悪戯心を出しかけていた頃である。

竹中は臆することなく、緑子のテーブルに近づいて一礼し、

「南川緑子さんでしょう。僕、竹中です」

「——」

緑子は使っていたフォークの手を休めて、

眼で笑ってみせた。

「僕、小説を書いているんです。手紙にも書いたように貴女をヒロインにしたものです。一度読んでいただけないでしょうか。——それから、お願いですから、貴女の弟子にして頂きたいのです。先生の実話小説、全部読みました。実に面白いと思いました。あんな面白さは、とても僕には書けない。ぜひ弟子にして下さい」

緑子は、あやうく噴き出すところであつたが、辛うじて辛抱した。彼女より六つも年上の男が、弟子にしてくれもないものだと思うのだった。

竹中のいう実話小説とは、月刊誌・地平線に、緑子が伊勢禎子のペンネームで書いている小説風の実話のことだ。

社会の底辺に発生する男女の色と欲の犯罪をテーマにしたもので、読者賞を獲ったほどの好評を博していた。

こうして、竹中健郎は、強引に緑子の弟子になった。緑子はそれを拒まなかった。というのは、竹中の弟子志願を、逆に利用してやる計画を立てていたから、竹中の持ち込む小説に眼をとおしては、さんざん酷評する。こんなもの小説ではないと、せっかく苦勞して



書きあげた原稿を床に投げつけたりした。

彼の才能を徹底的に認めない主義である。

「こんなもの書くよりわたしの助手になりなさい」

「先生、おみ足を揉みましょう。肩が凝っていませんか」

それでも、竹中はまめまめしく仕えた。胸に一物の緑子は、氣位を高くもち、スキを見せなかった。

ブラジャーとパンティをつけ、ネグリジェを着て、かならず湯上りの化粧を終り、ミツコをふきつけたあとでないと、マツサージを許さなかった。

いちど、たまらなくなつて、竹中が理性を忘れ、緑子の唇に接吻しようとし、激しい平手打ちをくったことがある。

「弟子の分際で、わたしの唇を盗もうなんて料簡が悪いわ。すぐ帰って頂戴。君の顔なんかみたくもない。とっととお帰り」

烈しい語勢だった。竹中はすくみあがり、床に両手をついて謝った。

「それほど謝るのなら、許してあげるわ。そのかわり、今後はわたしの家来になるのよ。わたしの命令は、何でも諾くの。いいわね」「はい。諾きます」

「ようし。じゃ、わたしの足に接吻するの。」

うやうやしくするのよ」

竹中健郎の身分は、そのときから——表面は師弟関係であつたけれど、実際は弟子から転落して、緑子の奴隷になった。

緑子の入浴に侍ることは勿論、全身マッサージ、さては踵を齒で削る役まで、竹中の仕事になった。

実話小説の原稿が進まないときなど、電話一本で竹中を呼びつけ、緑子の足を舐めさせた。

緑子は、足舐めの好きな女だった。足を舐めさせながら、執筆すると、頭が冴えてくるのである。

「先生、書きました。読んでみて下さい」

エビス祭りの記事を、緑子の口述をもとに書きあげると、長椅子の下に膝をついて、竹中は原稿を差出した。

「ご苦労さま。その万年筆、貸して」

手慣れたものだ。サラサラと、流れるように、ペンの運びをみせながら、手を入れてゆく。

「はい、出来上り。君はもう帰っていいわ」

「お寝みなさい」

「あ、お待ち。台所の食器、全部洗ってお帰

り。明日は、トイレとバスの掃除を念入りにしといて。それから、靴を磨いといて。もっとピカピカ光るまで磨くのよ。これ、渡しとくわ」

緑子は、ドアの合鍵の一つを、竹中に手渡した。

#### (4) 脚線美専科

竹中が帰ると、緑子は、クラブ・優雅に電話して、支配人の保科邦衛を呼び出し、今からゆくから、と告げた。

黒とこげ茶のチェックの、ナポレオンカラーのスーツと着替え、茶いろの、つやけしの皮靴を履き、マンションの階段を軽快な足どりで、駆け降りるように表に出るとタクシーをよんだ。

クラブ・優雅のボックスに案内されると、緑子は、いつも飲んでいるカクテルを注文したばこに火をつけた。

水いろの、海底の青さに似たムードが好きであった。

「ようこそ、お嬢さま」

支配人の保科邦衛が、ダブル・ボタンの洋服の胸をキチンと行儀正しく張り、緑子に挨



撈した。

「今晚は」

「本月分のマンションの家賃、一昨日支払っておきましたから」

「そう」

緑子は、ありがとうともいわない。当りまえだという表情だった。

「お嬢さま、今晚如何でしょう」

「そうね、——いいわ。でも、一時間半ぐらいにしといて」

「はい。かしこまりました。じゃ、あとで」

保科は去った。

彼は緑子の脚線美に憑かれた男である。爪切り、ヤスリ、甘皮押し、ブラシ、足の化粧品など、緑子の足を手入れするための七つ道具を、全部揃えていた。彼の生甲斐は、緑子の足一つにかかっていたといっても過言ではない。永いあいだ探し求めたすえ、ようやく尋ねあてた、日本一の美しい足であった。あとで、という意味は、ホテルにゆくことであつた。

ふたりきりでホテルに落ちつき、宝石を磨くように、緑子の脚のすべてを磨きあげる。磨きあげた足を頬におしあてて、恍惚境にさまよう保科を眺めていると、緑子は、いつの

間にか、慈悲深い観世音菩薩に化身してゆくのであった。

始め気味悪がり、疑っていた緑子も、保科の一端な献身ぶりに、次第にかたくななころがほぐれた。

マンション生活ができるようにしたものも、保科である。むかしの外国の海賊船の軸の形をした寝椅子に、ゆったりと仰向けに身体を凭せながら、原稿の書ける仕掛を考案し、その寝椅子の端と寝台の端とがピタッとくっつく、特別製寝台を贈ったのも、彼であった。

保科邦衛は、踵のたかい黄色の靴をもっていた。

脚の手入れが終ったあとで、緑子はその黄金の靴を履いて、腹匍いになった邦衛の背中の上に乗る、壁に腕を支えながら、雲の上の太陽のような気高さを輝やかせて、首筋からお臀へ、お臀から首筋へと渡りあるくのである。

「支配人を呼んで頂戴」

緑子は、彼女のボックスの番に当たったホステスにいいつけた。

保科邦衛が現われると彼女の財布をポンと投げつけるようにわたし、

「財布に、おこづかい入れといて」

「はい。かしこまりました」

「十一時、いつもの場所にいますわ」

「はい」

「車で迎えにくるのよ。一分でも遅れたら、帰るわよ」

緑子は、もう用はない、というようにグラスを朱唇につけて、グツと飲み乾した。

## (5) 実話小説発酵機

「緑子はん、ネタだっせ、ネタだっせ」

四日目の夕刻、午後六時過ぎである。徳利克平が、ウキウキと声を弾ませながら、サクラ・マンションの緑子の部屋に駆けこむように這入って来た。

実話小説の原稿を執筆中であった緑子は、思わず眉根を寄せ、彼女の御意を得たくて参上した男の頬に、いきなりピシリと平手打ちをくれた。

「緑子はん、はおよし。緑子さまとお呼び。」

——突っ立っていないで、跪ずくのよ。わたしの前に出たときは、いつも、そうするの」

「へエ」

「はい、というのよ」

「はい」



「聞くわ。報告しなさい」

芸能人のスキャンダル三つ、財界人の愛人の名前と住所を二つ、克平にしては、大手柄のつもりだろう。緑子に褒めて貰いたくて、期待する眼差しであった。

「始めてにしては、まあまあね。その要領を忘れないように。これからは、わたしが指図するから、そのとおり動くのよ。——克平、夕食とバスの支度をおし」

バスの支度が出来ると、緑子は、服を脱ぎすて浴室に姿を消した。四日前の克平なら、チャンスとばかりコソコソ家探してもしかねないところだが、いまは違う。厨のステンレスのガス台に、ゴマ油を敷いたフライパンを載せ、炒めものをつくり出した。

「克平」

「へエ。……ではない。はい」

「流しておくれ。裸になってお這入り」

「裸ですか。そら、あきまへん。羞かしうて——」

「ばか。お前はわたしの奴隷だろう。奴隷が女王さまの躰をお流しするのは、当り前じゃないか。すぐ、おいで」

「へエ」

克平は、天に昇るこちだった。

浴槽いっぱいに盛り上った泡の中に、横たえていた緑子の裸身が、すうっと立って湯槽を跨いだ。洗し台に腰をおろすと、

「隅々を念入りに洗うんだよ。今晚中に、小説を書きあげたいの。お前、眠れないよ。いわね」

「へエ。……ではない。はい」

バス・ルームから出ると、緑子は鏡台の前に坐って、化粧にとりかかる。

その間に、克平は、フランスパン、豚肉の野菜炒め、生野菜、かん詰、うで卵、牛乳、果物など食卓に用意する。

くさ色のヘアバンドも、ナイロン・ブルーのネグリジェも、緑子のあでやかな肢態は、この前のときとかわらない。

食事をおわると、緑子は、もういちど化粧をなおし、海賊船の舳の形をした寝椅子に、あお向けに身体を倒した。

「克平、ご褒美をあげるわ。わたしの足許に寝て、小説が書きあがるまで足を舐めるの。眠ったら、蹴とばすわよ。緑子女王のおみ足を舐めさせて頂くなんて、光栄だとおもえ。さあ、おやり」

徳利克平が、彼の顔の上におかれたミツコの匂う足を、乳房をふくむ乳児のようにしや

ぶり始めると、緑子はうっとり眼をほそめ、実話のストーリーをあたまで組立て、原稿用紙のマス目をうめてゆく。宇都宮市で起こった情痴犯罪の小説化である。

南川緑子は、一と休みし、たばこに火をつける。

透きとおるように白い、つややかな緑子の足を顔の上にのせ、足の指の一本、一本を丹念に、しゃぶっている克平の姿を見たが、作業をつづけている男の恰好は、いかにも自然で、彼女のために最もふさわしい風景のようにおもわれた。とくに彼女の気分を落ちつかせるのは、ゴクゴク咽喉を鳴らして、つばきを飲みこむときのリズムであった。

緑子はいう。

「克平、歯科に行つて、お前の歯を全部ぬいてお貰い。わたしのおみ足をしゃぶるのに、その歯は邪魔だよ。歯齦でわたしを喜ばせるようにおし」

一ぶくすると、あたまが冴えた。

女流作家、伊勢禎子は執筆をつづける。脱稿したのは、翌朝の五時過ぎになっていた。

克平に原稿の端を綴じるように命じ、「わたしは眠るから、お前は、寝台の下に膝



をついて、わたしの足を舐めるのよ。女王さまを、ぐっすり眠らせるのが、お前の役目だろう。よく覚えておくのよ」

ほんとうに疲れたとみえて、緑子はもう軽い寝息を立てながら、深い眠りに落ちた。

すると、旋風に巻き込まれたように、徳利克平の全身にも、睡魔がどっと襲いかかって来た。ムニヤ、ムニヤと二こと三こと言葉にならぬ寝言をつぶやいたが、そのまま絨緞の上にごったり身体をのぼしたなり大きないびきをかき始めた。

## (6) 脚接吻料一万円

「君、君、ビールを注いでくれないか」

そのテーブルには、ホステスが席を外しているらしく、四十四、五年配の客が一人、坐っているきりだった。

まだ、八時を過ぎたばかりで、クラブ・優雅の客数は少ない。

南川緑子が、化粧室から出て、いつも坐りつけの彼女のボックスに帰りかけたときであった。おそらく、その客は、緑子をホステスと間違えたのだろう。

緑子のところに、ふと芝居気がわいた。

「いらっしやいませ」

ホステスになりすまし、客のテーブルに坐って、ビールを注いだ。

「君、新顔だな。それにしても、こんなすばらしい美人が、優雅にお目みえしたとは、うれしいね。源氏名、何ていうの」

「美由希といひますの。よろしく」

「平仮名の、みゆき？」

「いいえ。美しいの美、自由の由、希望の希です」

「珍しい名だね。しかし、モダンでいい名だよ」

「そうかしら」

「一つ如何」

「ビールは頂きませんか」

「ほう。じゃ、日本酒？ それとも洋酒？」

「洋酒なら頂きますわ」

客は、ボーイを呼んで緑子の希望するカクテルを注文した。

「僕は、こういうものです。今後は必ず美由希ちゃんを指名するから、よろしく」

名刺入れから一まいを引出して、緑子に渡した。

——長谷川建設社長・長谷川東洋。

「あら、あなた社長さん。お金持でしょう」

長谷川は、やや、どぎもをぬかれた形であったが、まんざらでもない表情だ。彼の哲学では、美人に小判——は不可欠である。長谷川は思わず膝を乗り出すように、語気をつよめた。

「君、あとでつき合ってくれないか。君の好きなものをご馳走するから。ね、いいだろう？」

緑子は肚のなかで、くすくすと笑った。だが、それをおくびにも出さない。

「そうね、何をご馳走して頂こうかしら」

海底の青い水色のムードを表現した照明の中を、よく光る黒靴を履いた支配人の保科邦衛が、東洋のテーブルに近づいて一揖した。

「ここでございましたか。お嬢さま、お電話でございます」

「そう。——社長さん、ちょっと失礼しますわ」

軽く会釈して、席を立った。

電話はカメラマンの一期崎からであった。明後日、緑子は九州の観光地取材のため出発する。カメラは勿論、一期崎である。その打合せを明日おこないたいから、都合のよい時間と場所を指定してほしいというのだった。

一期崎も、緑子ファンの一人だ。



いつか財津編集長が認めてくれた札幌の雪祭りのスナップも、実は彼の作品である。緑子のカメラ・アングルに、たまたま一期崎が邪魔をしたということから、彼女の逆鱗を買い、雪祭りのフィルムの一部を提供したのがきっかけであった。

彼はフリーである。

たいへんな売れっ子であるばかりでなく、実は新進写真家としても、最近めきめき頭角を現わしているカメラマンであった。とにかく忙しい男だ。一分間もじっとしておれない性分である。

## ☆奇クサロン☆原稿募集

一、大好評の「奇クサロン」の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム（筆名）を添記して下さい。

一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします。

その一期崎が、緑子に対し異常なまでの好意を抱いていることは、たしかだった。自尊心の強い彼女は、それを当然のことに理解していたから、つねに指図する側に立って、潤を酷使したが、一度も不快な顔をしたことはない。

一期崎の電話が切れると、緑子は彼女のボックスに帰り、たばこに火をつけた。

「お嬢さん、貴女もおひとが悪い。ホステスになりすましたりして。支配人に貴女のことを聞いて、冷汗が流れました。勘弁して下さいよ。そのかわり、ぜひ償いさせて頂きます

す。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に對しましては枚数に應じて稿料又は謝礼を呈します。

一、奇クサロンに掲載可能な絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに対ししても応募者全員に編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。

一、編集参考資料の提供に對しましては、出来るだけ高価に購入したいと思しますので、お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下されば、折返しお返事差し上げます。

から。——お嬢さんが、今ほしいと考えているものをおっしゃって下さい」

長谷川東洋が、あたまを掻き掻き緑子にあやまった。

「うーん、ちっとも。面白かったわ」

「ひやかさないで、おっしゃって下さい。洋服とか靴とか」

「そうね、わたくしのは高いわよ。社長さん破産するかもしれないわよ」

「えっ！ そんなに高いものって、何でしょう」

「わたくし、社長さんが欲しいの。今夜の罰に、わたくしのマンションに日参して、わたくしの足に接吻してほしいの。おいや？」

「おや、おや。足接吻ですか」

「ごま化さないで、社長さん！ 短い時間だけど、わたくし、もうちゃんと見ぬいてるわよ」

「——」

長谷川東洋の顔に、みるみる血の色が昇った。

長谷川は、目の前に高々と組まれた緑子で自慢の脚線美を見た。それは肉付きのよい、優美に伸びた、長いみごとな脚であった。

「正直って、ほっとしました。貴女は、と



「つくに僕の脚好みを見破っていたんですね。その脚になら、僕の四十六歳の寿命を縮めても、いいと思います。いいですとも。本当は、僕の方でお願いしたかったのです」

「わかっていたわ。これからは長谷川って、呼びすてにするわよ。いいわね。一回の接吻料は、一時間で一万円」

「一万円？」

「そう。この日本一の脚線美に親しく接吻できるなんて、光栄に思いなさい。誰も見ていないわ。長谷川、その床に跪ずいて、わたくしの靴に接吻しなさい」

長谷川のワンマン経営は、業者間でも有名だ。今日、新興実業家の十指にまでのしあがったのもその賜である。このワンマン社長に誰にも知られたくない一つの秘密があった。

——脚線美崇拜。

二本の円柱の下に平伏し、恍惚と甘美の世界に酔い痴れる弱点を、彼は少女のように胸のおくふかく秘め、表面はひた隠しにかくして来た。

巨財に埋れた長谷川の脳裏を、時として空転するものは現実に充たされぬ幻影だった。

——脚。

太腿から真っ直ぐに、肉付きよく伸びた脚

——足首の締った甲高の、味覚をそそるほどの足。宝石を鏤めたような、手入れのゆきとどいたよく磨かれた爪。口中にふくむと濃厚なあつものの味が舌の上いっぱいにひろがり、そう、足指の一本一本。

ああ、……長谷川は一人切りになると、腹の底から洩れる孤独の溜息をつくのだ。

南川緑子との出会いは、長谷川東洋の四十六歳の人生を変えてしまうにちがいない。宝石、金銭、贅沢品を緑子は遠慮会釈なくむしり取るだろう。

しかし後悔はしない。

長谷川は、ほぞを固めていた。彼の巨大な財産からみれば、たかだか知れている。南川緑子という現代の美女に、いのちを縮められるよろこびの方がまだしも強いのである。

しかも、当の緑子自身、彼の秘密である弱点を看破し、奴隷にしてやるという。長谷川にとって、晴天のへきれきであった。

長谷川は、テーブルの下にもぐり込むと四つ這いになった。紫色のエナメル靴が、目の前に聳えたつように脚を組んでいた。

顔を近づけると、香水ミツコの匂いで全身がしびれた。意識が遠のき、狂気の獣と化して、靴の甲に接吻の雨を降らせた。

「わたくしの靴で踏まれてみたいと思うでしょう。ごもっともだわ。わたくしは、慈悲深い。よ。じっと身動きしないで、ふまれなさい」

緑子は、長谷川の首筋を靴の下にふみ敷いた。

凱歌のグラスを唇にはこび、ふと前面に視線をやると、支配人の保科邦衛が燃えるような眸をして、緑子を見ていた。もう一人の脚への投資家が、熱い思いをしてそこに立ちつくしていた。

緑子は、ふいに、彼女自身が、燦然とした金色の光彩の輪の中にいる気がした。雲に乗った太陽のような気がした。おごそかな神々の声を聞いたとおもった。

「社長さん！ わたくしの脚の重みをお買いなさいな。高いわよ。わたくしの足にふまれて死にたいときは、おっしゃってね。そんな贅沢な望みも、わたくし、かならず叶えて差しあげますわ。ほ、ほ、ほ」

南川緑子は、皓い歯をほころばせて、その朱い唇に、黄金の液体をゆっくり運ぶのだった。

(第六話おわり)





有田久美子さんへ

## 『甘い空想』

に応える

幸崎健治

有田久美子君

五月号で君の投稿された『甘い空想』をくり返し読ませてもらった。

素晴らしい女性があらわれたものだと思嘆すると共に、君が競売にかけられる際には何としても、他のライバルに先んじて落札の榮譽をかちとりたいと斗志を燃やしている次第である。このところ事業の方も実に多忙を極めているが、もし君を落札出来れば、最低三日間は完全に俺の『実験物』として、その人権剝奪は云うに及ばず、実験中には総ての自由を束縛し責め抜く労をおしまないつもりである。又その為には、君の充分満足出来る価格

で取引する事を約束しよう。

君の奉仕許容範囲が一週間から十日だと云うのに対し、最低三日と云う短期間の拘束を打ち出したからといって、俺が財力に乏しくケチであるからだと思ってもらっては困る。具体的に説明すれば、女体を羞恥のどん底まで引きずり込む術を、充分心得ている俺であっても、君に対して、総ての責めの技法を駆使して、充分満足を得さしめる事は正直なところ困難である。敢えてそれを行なうとすれば、アブハチトラズ的な責めに終るかもしれない。

しかし『競売参加者』には、それぞれ彼等

の最も得意とする責め方があるに違いない。したがって君を、只一人の人物によって長期間所有するより、競売参加者を『縛り』、『浣腸』などの各部門に区別して、契約期間を最高五日間程に限定し、『競売』を行う事を提案する。だが俺の場合は、三日間の所有で終るとしても、契約金以外にそれ相当のプレミアは惜しまない事をつけ加えて置きたい。その方が君自身も、只一人の変態男から長期間なぶられるより、充実した羞恥責めの醍醐味を色々な角度から甘受出来るものと信ずる。

これから少し、お前（以後お前と呼ぶ）を落札出来たものとして、実況的に想案を綴ってみる事にするが、先ず極く簡単に自己紹介をして置き度い。お前は年令がどうの、容貌がどうのと勝手な事をほざいているが、財力と腕力にものを云わせてお前を落札した以上文句を云う資格はどこにもないはずだ。

お前は、四〇〜五〇才以上の、みにくい容貌の男から責められたい、と云うが、俺は四〇才には幾分間があり、又、一応ハンサムで通っている。大学時代には、空手、水泳、フエンシングと、色々なスポーツをこなして来ただけに腕力にかけては自信がある。

一見紳士風には見えるが、どうしてどうして、表面とはうらはらに、一度獲物をくわえ込んで、浣腸責を行う時の形相は、実に好色であり又、変態的で、文字通り『浣腸魔』の



イメージにぴったりと、自分でも思っている。しかし長期間に亘ってお前を独占する事なく、浣腸以外の羞恥責めは、他の落札者にまかせようなどと云うのは、やはり俺の中に多少フェミニスト的要素があるのかもしれない。

前置きが長くなったが、いよいよお前を羞恥のどん底に引きずり込むために、出発する事にしよう。

朝九時。俺は今日の「生贄」の事をあれこれと想像しながら、奴隷市場へと向かう。到着した時にはすでに「せり」は始まって居りやがて、有田久美子二十三才の競売が開始される。お前はブラジャーと、申し訳のような小さなビキニパンティをつけただけの姿で、競売台の上へと追いつてられる。

お前の色白で丸顔、それにグラマーな体つきが、俺の購意欲を刺激する。しかし思いの他、お前を買おうとするライバルが多い。競売参加者達は、次々と台の上へあがり、入念にお前の身体を吟味している。だが俺の検査目標は只一つである。

お前が、いくらグラマーで俺の好みの顔であつても、責めの対象となる部分に「ヘモ」があつたりしたのでは、何の役にもたちはない。俺はお前の検査としてヘモの有無を調べる。お前は驚きと恥かしさの為に「あっ」と声を立ててさけようとするだろうが、ムチ

を持った、奴隷仲買人に、にらまれて、ムチ打ちのきらいなお前はすぐにおとなしくなるに違いない。検査の結果、充分、浣腸責めに耐える事が可能であると判定した俺は何としても、お前を買う決意をする。

やがて入札が始まり、思い切つて巨額の金を投入した甲斐あつて、お前を落札する事に成功する。他の入札者の羨望をしりぬき、さつそくお前をメルセデス・ベンツの後部座席につめこみ、別荘へと向かう。念の為、お前に対して「私は只今より、少なくとも共三日間はこの人の奴隷である」という事を自覚させる為に手錠をかけてやる。

葉巻をくゆらせながら、ベンツのハンドルを握る心も軽い。それに引き換え、バックミラーで後部座席へうずくまっているお前の姿を見ると、これから加えられる責めへの羞恥とおののきの為に、顔面は心もち青く、かすかにふるえている様に見える。

いよいよ車は別荘へ到着し、その時から三日間は俺とお前の奇妙な生活が始まる訳だ。「さあおりるんだ」と、お前を部屋の中に引き入れ、総てのドアをロックし、カーテンを引くと外部からは誰も浸入出来ないし、むろんお前も一步として外へ出る事は不可能である。俺は応接室のスプリングのいいソファに腰をおろし、ゆったりとした気分ジョニーウォーカーの黒ラベルをグラスに満たす。

むろんお前にはすわる事は許さない。

「名前は！」俺は鋭く訊問する。

「有：有田久美子です」

「年令は！」

「二十三才です」

「今日より、最低三日間、俺の奴隷として、いかなる命令にも従う事を誓うか！……誓うか、ときいてるんだ！」

「ち、ちかいます」

「よし、ではこれをつけるのだ」

俺は抽出しから二枚のパンティと、生ゴムパンティを出し、お前の目の前に投げる、お前は、手錠をかけられた不自由な手でそれをはく。合計四枚のパンティをはかされたお前は、グラマーなだけに幾分苦しうである。今日のところは、直接お前の体に対する責めは行なわない。

「昼食にしようぜ」

俺はあらかじめ用意しておいた、大どんぶりにもった御飯をお前に強制的にとらせる。若い娘が大どんぶりで飯を食う様子は、何とも奇妙な恰好だ。

食事の後は、定量の二倍の腸収れん剤を服用させる。それに排尿は許すが大便は許可しない。又排尿は許可しても、事後ティッシュペーパーの使用は駄目だ。それだけを守れば、夕食の時間までは寝ていようと坐っていようとお前の自由だ。



夕食は再び、大どんぶりに山盛りの飯を食べさせ、再び収れん剤の服用をさせる。

夕食後は面白いものを聞かせてやる。前回の奴隷を流腸責めにした時の実況を収録した録音テープだ。女のすすり泣きがきこえる。

「ああ、許して下さい。トイレへ行かして、御願いです。ああッ……」高圧流腸を施されて、もたえる女の声だ。お前は、明日受けなければならぬ責めを想像して耳をふさぐとする。

「聞くんだ！」

俺は激しく叱責する。お前はおどろいて身をふるわせながらテープを聞いている。

「明日はお前にもたっぷりはずかしい思いをさせてやるからな」

「でもどうか、血を流したり、ムチで打ったりはしないで下さい」

お前はおどおどしながら哀願する。

「それもお前の心が次第だ。素直に命令に従えばよし、さもなくば痛い目にあう事は覚悟するんだな。今夜はこれでやすんでも良いが、寝る前にこれを全部飲む事だな」

俺はビールをお前の前に置く。

「おなががいっぱいで、もう何も入りそうにありません」

「そんな事は百も承知だ。昼食と夕食に大どんぶりで飯を食ったんだからな。しかしこれは、どうしても飲まねばならぬ。命令だ。飲

めないと云うなら、無理にでも飲ましてやるさ」

俺はしなやかな皮ムチを取り出す。

「許して。飲みます、飲みますから」

お前は、あわててビールを飲みはじめ。口びるからあふれたビールがあごを通って、乳房へ流れる。お前の表情に苦悶の色がうかがう。三十分程かかって、どうにか一本のビールを飲み干した時には、苦しみで目からは大粒の涙があふれている。

「まあいいだろう、今夜はこれくらいにしておこう。だが暑いからと云ってパンティをぬいだり、勝手にトイレへ行けない様に手錠ははずさないからな」

俺はベッドの支柱に手錠を接続する。

「おとなしくねむるんだぞ」

俺はやがておこる現象を想像してニヤリと笑って、俺のベッドルームへ向かう。

「お願い。トイレだけは行かして下さい」

「明日の朝までは駄目だ！」

「お願いです、それだけは……」

哀願するお前をふり切って出て行く。

一夜あけて、今日はいよいよお前を、思う存分責め抜く日だ。起床は八時。俺はお前を犬の様にしないだベッドへ様子を見に行く。お前は強烈に迫って来る尿意に身もだえている。

「お願い、早くトイレへ行かせて下さい」

俺はわざとゆっくりと手錠をはずす。お前はもどかしげにトイレへ。……だが、あらかじめ鍵をかけているので、押せども引けどもドアは開きはしない。

尿意は極限に達している為、お前は小刻みにふるえている。

「どうか、ドアをあけて下さい。ああ……」

俺は只ニヤニヤ笑ってとりあわない。

「もうだ……め……」

俺は部屋のすみから尿瓶を取り出して

「それ程我慢出来ないのなら、これでやるんだな」

お前は恥ずかしさと、尿意で今にも泣きだしそうな顔をしている。

「どうかそれだけはかんにんして」

「俺は、お前がこれを使おうが、そのままでもいいが、どっちだっていいんだぜ。ただしお前が粗相をして、この高価な絨毯を汚す様な事があったら、お前の最も怖がっている罰を、充分受けてもらおう事になるがな」

遂に我まん出来なくなったお前は、仕方なく、俺の手から尿瓶を受け取り排尿を行なうとするが、この部屋には、あわれな姿態を隠蔽出来る物は何一つない。お前は一部始終を俺の目前にさらさなければならぬ。しかしお前は極限に達している為、これ以上躊躇しているひまはない。俺は、お前の四枚のパンティに苦勞しながらのそのあわれな姿を、



いろいろな角度から狙ってミノルタのシャッターを切る。

若い娘のお前にとって、他人にそんな場面を、しかも尿瓶を使つての羞恥図を見られる事が、どれ程にこたえる事か。

やっこの思いで人心地に戻ったお前は、虚ろな瞳を天井にむけ、呆然としている。しかし、安堵の息をつくひまもなく、お前は次の恥ずかしめを受けねばならない。

俺は、実験室へとお前を引き立てる。実験室の中央にアメ色の生ゴムをはった、特別注文の検診台があり、その横には、色々な器具を納めた棚がある。お前をその台の上に身動き出来ない様に固定し、施術者の俺は白衣を着け、薄いゴム手袋をはめる。

棚の中からキラキラ光るメスを取り出し、お前の目の前に誇示する。お前は驚きの為声も出ない程だ。俺はなおもお前の恐怖心をあおる様に、メスの背の部分で、内腿のあたりをなでてやる。

「ああ……切らないで……」

お前は狂った様に叫ぶ。

「ふふふ……心配する事はない。お前の肌にメスを入れはしない。これから、お前好みの下着裂きを行なつてやる」

俺は一番上にはいている生ゴムパンティにメスを入れると、抵抗もなくすつとさける。次に二枚のパンティにもメスを入れる。お

前のグラマーなヒップの圧力でのびきつていくパンティは、ピピピッと快い音を立ててさける。お前は、ほんとに腹部にメスを立てられている様に、身をかたくし目を閉じている。俺自身も、お前の美しい肌にメスを入れている様な錯覚にとらわれる。

四枚の重ねばきを三枚迄、次々に切りさいて行くと、最後のビキニパンティがあらわれそれはすっかり汚れきつて、ムツとする程鼻をつく。わざわざ重ねばきさせたのは、この恥ずかしめを充分お前に味あわす為に他ならない。初夏の暖かさに、四枚のパンティをはかされたのでは、そして排尿後の後始末を許されなかったのだから、汚れ、むれて異臭を放つのは当然である。

「何と云うだらしない女だ。お前のパンティは臭くてやり切れん」

汚れたパンティを、かりに変態者であつても男の前にさらす事が、お前にとってどれ程恥ずかしいものか。お前は、何とかしてそのパンティを隠そうと身もだえるが実験台に固定されている為、どうする事も出来ない。俺はゆっくりと、その汚れたビキニパンティにもメスを入れてヒップからはぎとてしまふ。

俺はその汚れきつた小さな布ぎれをつまんで大きなゼスチャーで臭いをかぐ。

「何とまあ汚いパンティだ。臭くて鼻が曲り

そうだ」

「ああやめて。……早くすてて下さい」

「どんな臭いか、自分でも嗅いでみる」

俺はそれをお前の顔の上へ落とす。お前は耐え難い屈辱に只泣くばかりだ。

「さて次は、検診を行うとするか」

俺が検診台のボタンを操作すると、産婦人科の検診台の様に足のせがせり上り、むしろお前の最も恥ずかしい姿勢になる。

「お願い、こんな恥ずかしい恰好にする事だけは許して……」

「やかましい。お前は俺に買われた奴隷のくせに、ああもしないで呉れ、こうもしないで呉れと文句が多い。おとなしく出来ないのなら、お前の大好きなムチをお見舞してもいいんだぜ」

俺はゴム手袋をはめた右手の人差指にワセリンをぬる。大量の食事を強いられ、規定量以上の収れん剤をのまされているお前の腹部は膨脹し便秘して、相当ガスが発生している事はまちがいない。いよいよ検診開始。

お前は「あっ」と叫び、身を固くする。

「痛いのがいやなら、腹の力を抜く事だ。フム、相当たまっている様だ」

長時間に亘つて入念な検診を行った後、

「浣腸しなければならぬな」

お前のもっとも恥ずかしがる浣腸宣言をすると遂にお前は泣き出してしまふが、おかま



いなしに俺は、いそいそと、浣腸の用意をする。

五〇CCガラス製シリンジと、エネマシリンジをお前に示し、「どちらを選ぶ？」と選択権を与えるが、お前は首を横に振るだけだ。

「そうかい、では両方とも使う事にしよう」

「な、なんと云う事を」

そう云いながらもお前は観念したのか、しっかりと目を閉じて抵抗をやめる。俺はゆっくりと浣腸器を操作するのだが、その間にカメラにセルフタイマーをセットし、その様子を記録する。

見る見る内に一〇〇〇CCの湯を送り込まれたお前の顔には、水圧による苦痛の表情が走る。

注入後十五分を経過したが、グリセリンは全然混入されていない為、まだ便意はおそつてこない。しかし、時折グルグルと腸が音を

発するのは蠕動を開始している証拠である。

三〇分後、ようやくお前は腹痛と便意をうったえる。そこで再び検診を行う。お前は更に便意を促進させられる結果となる。

「お腹が痛い。トイレへ行かして下さい」

「まだ駄目だ」

俺は五〇CCガラス製浣腸器に、グリセリンを吸入し、一気に注入する。その結果、三分後にはお前は狂気のように許可を求める。

「ほんとにもう我まん出来ないわ。行かして下さい。ああ……」

俺は固定した足だけをほどこき、生理バンドをはかせ、さらにその上から、アメ色の生ゴムパンティを、はかせる。特製の生ゴムパンティは、ぴったりとお前の肌に吸着する。その間に便意は頂点に達し、お前の足の指は、強く内側にまげられ、全身をふるわせながら耐えるのだ。

## 天星社刊

### 《限定版グラビア写真集》

### 在庫案内

山原清子『刺青の魅力を探ぐる』一部一〇〇〇円（送共）略号「美7」

◎刺青の女王の魅力を抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した緊縛フォト結集版。

M写真集『女王様に飼育される日々』一部一〇五〇円（送共）略号「M特」

◎M男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生態のかずかずを網羅した写真資料。

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。

しかし、お前の苦しみの表情の中に、時折

悦楽の表情がうかんでいる様に思えるのは、俺の身勝手な、想像によるものだろうか。

「ほんとに、もうがまんできない」

「どうぞ、勝手にもらすがいいさ。その生ゴムパンティは防水の役目をする。不ぎまな恰好を良く俺に見せるんだ」

俺はいきなり、お前の膨脹した腹部を強く圧迫する。とたんに「ぎえー」という絶叫と共にお前は屈伏するのだ。俺は何回もカメラのシャッターを切る。

「御苦労だったな」夜八時、俺はお前と夕食を共にしながら、一応、労をねぎらう。

「三日間お前を買ったが一応お前に対する責めは終わった。明日は自由の身にしてやろう。ゆっくり休息する事だな」

俺は、ふくらんだ封筒を差し出す。お前の瞳に、うっすらと涙がうかんでいる。

「またいつか、私を買って下さいますか」

「ああ、また買ってやろう。その代り、この次はもっと苦しく、恥かしい責めを受ける事を覚悟しておく事だ」

「はい」

久美子にとって嵐の様な、一日は過ぎた。次に自分を買う男がどんな男であるか、不安と期待のうちに静かに夜は更けるだろう。

(終)



## 鬼六談義

れんげそう  
蓮華草の話

## 鬼六団

桜の花も散りつくし、繁茂する若葉の季節となった。日はうららかに空青く二階の窓より陽炎の立ちのぼる近くの雑木林を見詰めていると、ふと甘ずっぱい情欲的な樹の花の匂いが感じられてくる。どうやら自然も人間も全力をあげて活躍する時季となったようだ。といっても相も変わらずこっちは無政府的な生き方、一陽来復の春が来たとはいえ、生々潑刺の様相を帯びて来たという事はない。ただ、花の咲く時期が、何となく嬉しいのである。海の見えるこの土地に移り住んでもう五年になるだろうか。そんなに忙しいのかと人に聞かれて、東京には青い空がないからだ、智恵子抄みたいな事をいって来たが、花の季節になるとしみじみこの地に愛着を覚え出すのである。それほど花の多い所で、野や山の花咲く場所を東京の不健康な消費面に耽溺した後では、きまって子供を連れて歩き廻り、そんな姿は人眼には三文エロ作家には見えず、少くとも三文詩人ぐらいには見えるのではないかと勝手な事を考えているのだが、山路に咲く雑草も精妙な小花を咲かせて、その一つ一つに微妙な美しさがあり、そんな事に感心する事など、私もいい加減、年をとってきたのかと思ったりしている。

こうした季節になると、自宅の方は、訪問客で毎年の事ながら忙しくなる。東京の仲間達が土曜日日曜日などを利用して、入れかわり、立ちかわり遊びにやってくるのだ。魚釣りを希望して来る者、花見を希望して来る者私の猥談を酒の肴に希望して来る者、そんな人達で賑うのだが、私の所へ遊びに来るからといっても、何も皆が皆、助平な人達ばかりとは限らない。ついこの間は、昔の私の仲間で、現在、テレビ局の第一線で活躍しているディレクターやライターなどが数人連れだつて魚釣りに押しかけて来たものだ。何年か前までは私の家の二階で居候していたK君も今ではすっかり一人前のシナリオライターになって、刑事もののシリーズの番組で活躍している。そういう第一線で活躍している若い人達の来訪は私にとっても嬉しいものだ。彼等は魚釣りにやって来て、大抵、魚を釣らずに帰ってしまう。新宿の酒場あたりに集合して大型車にぎっしり乗りこみ、二時間もかかって私の家に着くのだが、到着する時刻は夜中の一時か二時。何故、夜を選ぶかというと魚つりは明け方に限るので、それからしばらく私の家でくつろぎ、夜明けの五時頃、舟を出す予定にしているのだが、そのくつろいでいる



時間に酒を飲みながら彼等は奇妙な議論を始めた。もう魚釣りはめんどくさいという事になり、そのまま酔寝してしまう場合が多いのだ。そのグループの中に、いつも几帳面に魚つりの完全武装して、釣具一切をたずさえ、豪華な竿を肩に結び、まるで佐々木小次郎みたいなスタイルでやってくるのがいるけれど、もう何度も来ているのに一度も魚を釣った事がない。仲間の議論に巻きこまれて、何だかんだとほざいてる内、しまいに酔泣きまで始めるといふ有様。竿も糸も、買ってからかなりの日がたっているのに、持主がこんな調子だから、何時、海へ出かけられるかわからないのである。全く呑気な連中だと思ふのだが、彼等は、たまには新鮮な空気を呼吸し、浩然の気を養うべきだと私の所へ押しかけて来るのは真に殊勝な心掛けだけれど哀れにも、東京の仕事でくたくたに疲れ切っている。実際は魚つりなんかより、静かな場所、充分な睡眠を欲しているようなのだ。それは私もわかっていて、別に文句もいわず、結局、次の日も、昼頃になってようやく起き出し、ぼそとした顔つきで庭の草花を見詰めている連中を相手に麻雀でもしようかという事になってしまうのだ。

こちらでも東京へ行ったり戻ったりで忙しい身だが、こういう昔の仲間ととりとめのない時間を過ごすという事は別に苦にならない。彼等は自分達の仕事の上の不満を関係のない私に対して愚痴ったりするだけで少しは気分がおさまるようでもあった。この間やって来た連中の中にR君といって、私が以前、アテレコ台本を作っていた時、そのディレクターをやっていた男、現在は東映の助監督をしているのが混っていて、私は久しぶりに彼の顔を見たわけだが、面白い事をいい出した。

石井輝雄が東映（京都）で盛んにエログロ映画を作り出したので、我々助監督連は結束し、連判状を作って今後、彼の仕事には協力しない運動を行っているというのであった。徳川女系図、女刑罰史、更に今度は責め地獄などピンク映画顔負けのハレンチ路線を打ち立てるなど全くもってなげかわしいと石井監督の総攻撃を始めるのであった。まだしも、ピンク映画の方がましだと、一宿一飯の義理がある故か私の心証を害さないように気を使いたい方をするのだったが、助監督がすべて手をひくとな事になれば東映もさぞかし困るだろう。緊縛指導で石井監督に協力されている辻村氏が急拠、助監督に起用されるかも知

れぬなど思ったりしたが、こっちも天尾プロジューサーの企画に協力している手前、ふと他人事にも思えない。R君は、そんな事は知らないから盛んに東映のエログロナンセンスを慨嘆するのだった。だが石井氏も何も好き好んでエログロばかり狙っているのであるまい。会社の企画に協力しているだけの事で、文句があるならこうした企画者に、いや、罪があるとするれば、それはこの種の映画に押しかける観客にあるという事になる。

いくら醜悪で、歪な映画界をなげいてみたところで、また、それに反撥してみたところで、所詮、映画は客商売だ。お客が入らぬ芸術作品を連判状に署名した助監督連中が制作したとすれば、やはり、それは企画の失敗、彼等の烈しい、そして純粋な芸術精神は一層歪なものになり、精神的にも肉体的にもグロッキーになってしまいかも知れない。いや、もし興業的に失敗という事がはっきりすれば彼等は清い精神とはうらはらに仲間同志責任のなすり合いをして、自分だけは企業の中で生きのびようと必死な努力をするだろう。それが当世の企業内で働く者の人間気質だと私は思っている。

今いった魚つりに来た昔の仲間達も私に向



かつて、そろそろそうしたくならないピンクの仕事の打切って、これこれのテレビ映画の企画があるから一緒にやらないかと相談を持ちかけてくれるのだが、一つの企業の中での仕事のくだらなさというものを私は知り尽しているから、責任のある仕事は、もう体力が受けつけない、とか、俺は汚く稼いできれいに使う方だから、などと、断わりつづけている。そうでなければ、俺は現在、出家の身だとすましてこんでいるのだ。出家というのは、何も坊主になる事ではない。世の無常を知り山に籠って写経三昧にふけるという場合もあるが、自発的に自由を求め、現世を大いに楽しもうという場合からもあるのだ。女色を慎しみ、写経するのも得度なら、女色に溺れてエロ本書いて暮すのも得度である。いや、昔から、女色に溺れ、男色に耽り、閑があったら博打していたという坊主が数多くいたようだ。ついこの間は、保険金詐欺までした坊主が新聞にのっていた。

自分の将来にバラ色の夢が描けるのも二十代ぐらいのものだ。三十代になって、その夢が段々心細いものになり出すと、矢鱈に自惚れだけが強くなり、四十代になって夢の色がいよいよあせてしまうと、こんな事ならせめ

てもう少し遊んでおけばよかったと後悔する事になる。残念ながらその頃には、一物もぼちぼち凋落し始めて、三度に一度は必ず恥をかいたりし、前技が馬鹿にしつこくなつて女に叱られ、つまり、自分の体調が一番いい時代に遊んでおかねば損であるという事を思い知るのである。立身出世の夢も破れ、女色放蕩の夢も破れては、何のために生きてきたかわけがわからない。徒然草の中に、身を養いて何事を待つ。期する所、ただ老と死とにあり」という一節があるが、当り前のような事でもなかなか含蓄のある言葉だ。人間、あきらめが肝心である。大金を儲ける器でない人間が黄金色の夢ばかり描いて金儲けに浮気をやつし、へまばかりやっているのはみっともないし、大して文才のない人間が、何々賞というのを夢みてコッペパンを噛りつつ文学に噛りついていっているのも見ていて哀れな気分になってくる。自分を誤解する程、滑稽なものはない。一時的にうまくいっても、それは最初買った馬券が図に当たって、ズルズル競馬の深みに入っていく、身動きがとれなくなってしまうようなものである。私が昔、相場でどれくらい目にあつたのも、文学に柄にもなくとり憑かれたというのも、この最初買った

馬券が当たった故だと思うのだ。それで今もって、何が本業なのかさっぱりわけがわからないが、わかつていっているのは現世を精一杯、享樂しなくては損だという事である。

そんな話を彼等相手にしてしゃべり、俺は出家して、ピンク坊主になったのだとヤニ下がっていたが、彼等は、未だにバラ色の夢を求めているようであった。いい仕事を、やり甲斐のある仕事をと、そればかりをくり返している。しかし、今のうちにはそれでいいとしても、企業のシステムにますます失望してくと次第に人間がお粗末になり出し、くだらない仕事をやっていても自分は有意義な仕事をしていると人に虚勢をはるようになってくる。だが、そのうちには、好きな人達にエロ映画を提供する石井監督の仕事も有意義だとわかるようになるだろう。若いうちの反撥精神というのも大事である。

二日酔いの頭では麻雀もする気にならず連中は庭へ出てブラブラ歩き、草花などいじっている。下駄ばきで柔い土を踏み、すみれやたんぽぽを覗めていると、彼等もふと、故郷へ帰ったような懐かしさを覚えるのだろう。「あの花のきれいな旅館は、その後、行きましかね」



シナリオライターのE君が、ふと首を上げて私に尋ねてくる。彼のいう花のきれいな旅館というのは、私の家から、そんなに遠くない湯河原と熱海の間にある目だたない小さな旅館の事なのだ。少し、さしさわりがあるので旅館の名は、仮にすみれ旅館という事にしておこう。その旅館は、これらのライターやディレクターと少なからず因縁のある所で最初、その旅館を私達に紹介したのは、テレビ俳優のT君であった。

T君は、かなり売れている俳優で、それはいいのだが、残念な事には都内の温泉マークへうかつに入って行けない悩みがあるとよく私にこぼしていたものだ。好色な事は、かけ出し時代も現在も少しも変わっていないのでついでで酒場のホステスを口説き落とすのだが、さて、とどめを刺す段になると、何時もまごついてしまうのだ。誰かに見られはせぬかという恐怖は、売れっ子の役者だけに察しがつく。三流週刊誌にでも、すっぱ抜かれたらそれだけで、人気に影響するかも知れない。うかつにホステス一人口説けないほど、人気商売というのも辛いものだが、そこで彼は、かなり手数がかかるが土曜日に口説いたホステスを自家用車に乗せて、湯河原へ運び

日曜日一杯楽しんで月曜日の朝、東京へ戻るというデラックスなお遊びに専一するようになった。そんな時私はよく夜中の一時か二時頃、彼にたたき起こされる。彼は途中、私の家で小休止をとるのだ。峠の茶店がわりに、彼は私の家を利用し、車の運転の疲れを癒すのである。全く迷惑な話だが、こっちも今度はどうな女を彼がものにしたか、それを見るのに興味がある。歌手の荒木一郎は、一寸、女の子に手を触れただけで、物凄く気の毒な目に合ってしまったが、T君みたいな俳優を見てみると、要領のいいのと悪いのとでは、こうも違うものなのかと奇妙な気分になってくる。大体、今の二十才以下の女性なんてのは、一種の分裂症患者が多いのだから、手を出すのは危険で、その点、荒木一郎は、迂闊であった。T君みたいに二十二三のホステス専門にしておけば、まず問題はなかったのである。そんなT君であったが、一度、湯河原まで来て、車中で些細な事からホステスと口論を始め、「阿呆んだら」の一言を残して、ホステスは車から降り、湯河原の駅へかけこんでしまったという事件があった。余程、柄の悪いホステスをT君は口説いて連れ出して来たらしい。プライドが許さず、T君は彼女

の後を追わなかったそうだが、あとで私に話をした所によると、頭にきたのなんのって、話にならなかったそうで、何のために、東京から長時間、ここまで車を運転して来たのかわけがわからず、その夜は、駅近くの屋台店で自棄酒を飲み、再び、車を運転して行きあたりばったりに眼に触れた旅館に泊りこんだのだ。それが問題のすみれ旅館であった。

温泉場にありながら温泉のない質素な旅館で、おまけに古道具屋だの炭屋など日常品を売る店がごたごた並んだ界限を突き抜けた所の妙にうら淋しい高台にあり、どうしてこんな所にまぎれこんでしまったのか、自分でもさっぱりわからなかったが、神が自分を哀れみ、導いて下さったのだろう、とT君はその翌日、私の家へ来た時、話すのであった。

そんな場所にあるのだから、繁昌する筈はなく、連れこみ旅館として経営しているつもりらしいが、土地柄、若いアベック客でも温泉つきのホテルを選ぶにきまっている。ただ庭のあたりが藪垣のようなもので囲まれ、立関には石を置き、小笹が植えられていて、何となく露に濡れたようなしっとり落ちついた旅館であったそう。

T君は、その時、かなり酩酊していて、



部屋に上れば、すぐに布団にもぐるつもりであつたらしいが、若い女中に案内されて部屋に入り、ぺたりと畳に坐つて、しばらくプカプカ煙草をふかせながら、逃げたホステスの事を腹立たしく思っていると、この旅館の女将が、盆に茶を載せて入つて来、「あら、お一人なんですか」と口元に微笑を浮かべ膝を折つて卓に茶を置くと、それから色々T君の話し相手になつたのである。木暮実千代に似た美人で全く気さくな女将だとT君は私に語つたが、その後、私も何度もこの女将と逢つたけれど、T君のいう通り、年はもう四十の半ばを過ぎてゐるが、若い頃は、さぞ美人であつたろうと想像出来る中年婦人で、非常に話好きな女将であつた。

その夜、T君が転がりこんで来た事で、女将は、単調と寂寥から救われたという風に喜び、持前の話好きを發揮したのだらうけれどT君がテレビによく出演する俳優である事に気づくと、女中まで呼び寄せて、はしゃぎ出し、ビールなど御馳走してくれて、色紙にサインを求めたそうである。連れこみ旅館の女将にサインしたのはT君も始めてだらうが、立関などにこの色紙を張りつけてくれては困ると念を押すと、女将は、そんな馬鹿な

真似は致しません、と笑い、これは私一人のコレクションと嬉しがらのだつた。

T君も、この女将が気がゆるせ、話のわかる婦人である事を知つて、包み隠さず、東京より連れて来たホステスと駅前で喧嘩別れしたという今度の不慮の災難について語ると、それは本当にお気の毒な、と女将はまるでお悔みみたいに云い、このままでは、おさまりがつかないでしょう、と実際、心配した顔つきになるのだつた。

「よろしかったら、今夜、どなたか、お世話致しましょうか」

女将のこの言葉にT君は驚いたのである。また、この場合、これ程、胸にしみ入る慰めの言葉はないだらう。つまり、T君は、女と寝る目的のため、わざわざ東京よりこの温泉場へやって来たのである。それが馬鹿げた口論から手違いが生じ、その憤懣はやる方ないだらうと女将は察し、いうなれば素朴な気持ちから、彼を慰める氣になつたらしい。

「世話して下さるといふのは芸者ですか」

「いえ、私のお友達で、素人のお嬢さんなんですよ」

T君は、思わず体が慄えた事だらう。

「五千円ばかり、お小遣をあげて下さればい

いと思うんですけど」

T君は、ますます気分がうわずつて来るのだった。女将は、一旦、外へ出て、アルバムを取つて戻つて来た。何枚かめくつて、

「この庭で去年、写したものですわ」

花の咲いた桃の木をバックにして、真中に女将、その周りに四人ぐらゐの若い娘が立ったり坐つたりで写っている。洋装の娘もいたし、和装の娘もいた。この中の三人は近所に住む娘さんだという。

「このお嬢さんなら、連絡はすぐにつくと思ふんですが」

と、写真の中の一人を指さし、如何が？

というふうなT君の顔を見たのである。

——その翌日、T君は私の所へ来て、随分と、すみれ旅館のその一夜を、のろけるのであつた。

「東京のホステスなんかとは違つて、何しろ初心で野菊のように可憐な素人娘だからね。久しぶりで、こっちはハッスルしたよ」

怪我の功名とはこの事だとT君は、いやらしく思い出し笑いなどしてゐるのである。

そんなうまい話つて、滅多にあるもんじゃない。しかし、それは、やっぱり嘘ではないようであつた。T君は、私に、一度、その旅



館へ行ってみる、というのである。

その温泉場とは眼と鼻の先に住んでいる私が、東京の友達にその穴場を教えられるなど、みっともない話だが、T君は、すみれ旅館の女将に、すぐこの近くに大変有名な小説の先生が住んでいるので、一度、彼をここへ寄こすから、よろしく頼むと、御丁寧な女性に段どりを頼んで来てくれたそうである。

T君の話によると、その女将は、近所の娘連中に頼まれた形で、そうした肉のアルバイトをさせている、という事であった。娘達に頼まれているというはおかしいが、女将は若い娘達から相談し甲斐のあるおば様というように慕われているようで、最初、女将と知り合いになった喫茶店のウェイトレスが、すみれ旅館へ遊びに来るうち、自分の友達、それはその土地の煙草屋の娘であったり、みやげ物店で働く娘であったり、そうした連中を女将に紹介し、休みの日などランプなど楽しみすみれ旅館へ揃って遊びに来たりするようにになったらしい。若い彼女達も単調の毎日のくり返しに倦怠し、何らかの刺激を求めている。それに小遣も欲しい。小遣といっても、彼女達の場合は、すべて、親がかりの娘達だから、化粧品代とか、時たま皆で遊びに

行くゴーゴー喫茶のチケット代とか、そうした他愛のないものだが、彼女達の今の安い給料では、そうした欲求を満たすのもむづかしい。という愚痴を、すっかり自分達グループの相談役にしてしまったすみれ旅館の女将に彼女達はこぼすようになったのである。芸者の真似してアルバイト出来ないものか、と彼女達の一人が冗談めかして口にした。

それで、女将は芸者とはどういうものであるか、また女性がもっとも簡単に男性から金品を受けるにはどういう事をすればいいかという事を芸者時代、妾時代の自分の体験談と一緒に、彼女達へ教え出したのである。決して彼女達を悪の道へ誘いこむためのものではなく、彼女達に金銭面における男と女の関係といったものを説明し出したのだ。おしるこを食べたりせんべいを噛<sup>か</sup>ったりの楽しいムードの中で、精神年齢の低い女将は、完全に若い女性達と解け合っていたのである。結婚前に何人かの男性を知っておくという事は、女にとつては必要だという思想を女将は持ち、しかし、それを彼女達に押しつけたのではない。そんな事に抵抗を感じる女性も勿論いるわけだから、つまり、各自の好みによるというわけである。嫌なタイプの男と寝るのは嫌

だが、少しは好感の持てる男となれば、そういう行為を演ずる事に別段、悲劇的な弱りを感じないというのが彼女達のいつわらざる気持であった。結婚前に男性を勉強し、しかもそれがいくらかの小遣になるというのは、損な話ではない。素人娘のこうした急進的な考え方は、最近の流行とは思われるが、別にそれは都会の娘達ばかりとは限らない。田舎にも、結構、こんな分子はいるし、家庭的な環境といったものも大して関係はないようである。未知に対する憧れなのだ。

「いい人を紹介してよ、ママ」と、彼女達は冒険心からられて女将に相談したのである。

男と遊んで、いくらかの小遣を受取る事を若い娘達に教えた旅館の女将は、人間性の冒瀆といったような大袈裟な罪を犯したのではなく、単調な日々閉口した彼女達に同情し未知なものに対する憧れを、満たしてやるため、一肌脱ぐ気になったようなもので、それは素朴な心情から発したものである。

不自然といえは不自然だが、「誰かい人を紹介して」「ああ、いいわよ、まかせておきなさい」といった無邪気なもので、女将は無知で無節操だという非難は免れないが、現代的な概念の持主だとか、頹廢主義者だとい



うむつかしいものではなく、どの種の人間にも素手の心で接してくる、愛すべき女性だと感じとれるのである。親切で、頼まれれば嫌といえず、自分が損しても無理をするといったむしろ古風な感じのする女性がこの女将なのだ、それは私が、その後、女将と逢った時、受けた印象であった。

私はT君からその話を聞いた一カ月後、すみれ旅館へふと出かけてみる気になった。小説のえらい先生であるなどとT君が出鱈目を云って来ているので、あんまり、不細工な恰好は出来ぬと、珍しく私は和服など着こみ、それにしてもえらい小説の先生が、友達に聞いたんだが女を世話して下さいなどと云って行くのもおかしい故、考えて、原稿用紙を風呂敷にくるみ、すみれ旅館へ泊りこんで仕事をする気が出かけたのである。旅館へ泊って仕事はよくするので、いそいそと出かけて行く私を家人は大して怪しまなかった。仕事はピンク映画の脚本だが、向こうに着けば、芸術文学を執筆しているような顔つきを女将に見せるつもりであった。

すみれ旅館の女将は、T君の云ったように年に似合わず、若々しく、無邪気そのもので大変な話好きであった。

T君にこの旅館の事を聞いていたが、今日は偶然、この近くを通りかかったので、といった調子で私は女将に話し、二日ばかり、ここで仕事をさせて欲しい、と云った。最初から素人娘と寝る事が目的で来たと云っては、はしたないと思ったからだ。

勿論、仕事などは手につかない。陽の光がまだ白々しいうちから、女中に頼んで部屋へ銚子を運んでもらう事になる。全く呑気な話だが、女将もまた呑気な女であった。そんな私の話し相手になり出し、自分もまた日の暮れ切らない内から酒を飲み、私を名のある作家と思いこんでしまつて、小説は読まなかったけれど、石原裕次郎主演の「花と竜」は熱海で見たなどと云うのだった。「花と竜」を書いた作家だとT君が悪質な嘘を女将についたらしい。「花と竜」と「花と蛇」とでは、月とスッポン、いや、正に竜と蛇の差などと洒落にもなりはしない。こっちはうろたえるだけで、口から出まかせを云うにしても程があると、T君を恨めしく思ったが、そんな出鱈目を信ずる程、女将は知能程度が低く、それが何とはなく私には頼もしく思えた。

女将は、このすみれ旅館は、旦那と切れた時の手切金——彼女は最近まで二号であった

——として貰ったもので、だから自分は旅館経営に関しては全くの素人であると私に話した。そんな私なんですから、どうかこれから御最良に、そして、色々力になって欲しい、という意味の事をふと媚態めいた微笑を口元に浮かべて云うのであった。来る客、来る客に、そんな調子で相談を持ちかけるのだろうと思つたが、別に不快な感じはしない。

私は自分で出来る範囲の事なら何でも相談に乗ると彼女に云い、それから、我々は原稿を書くのが商売なんだが、よく途中で頭がぼやけ、仕事がかどらなくなると女が欲しくなる、そんな時の相談に乗ってもらえるかと、わざと生真面目な顔つきして女将に云った。Tさんから聞きになったでしょう、と女将はその事は承知しているとばかりにうなずき、でも、それは信用のある人達に限りであちこちで口外されては困ると、女将は念を押すのであった。つまり、確実な人の紹介状がいるといった調子である。

その夜、女将に紹介されたのは、みやげ物店の売り子をしている小柄な娘であった。色はあさ黒く、美人とは云えないが、愛くるしい顔立ちで健康そうな匂いに包まれている。しばらく彼女と女将を混えての三人、部屋の



中でスシなどつまみながら雑談したが、二十才になったかならぬかのこの小娘は、五十近い女将に、まるで友達みたいな口をきいていた。それから、頃を見て女将は、部屋から引揚げ、私は彼女と一時間ばかりプレイ——彼女は十時前に旅館から帰って行った。

こりこりとよく肉は緊まり、さすがに若さの魅力はあったが、動きは不器用で、終始、無感動な顔つき、義理でこちらのいうままになっっているといった感がする。だが、それはそれでこっちとしては満足であった。むしろ彼女がとってつけたような狂態を演じ出せば幻滅したかも知れない。自然であった方が、私なりの空想をかり立てられ、これからの可能性に期待という事になる。すねて、もがくようにしながら、ブルブル唇を慄わせて、ひっそりと極めるものは極めてしまう所など、思い出しても新鮮な感がするのだ。

そんな事があってから、間もなく、私は、そのすみれ旅館の一件をさっきいった魚釣り仲間のシナリオ青年、K君やE君に話したのである。こんな事は絶対黙ってられない性分です、すぐ仲間にはしゃべってしまう事など私の悪い癖だ。K君やE君は、仕事は割と真面目な事やっているが、私の話を聞いて、へえ、

そうか、とただ感心するだけでおさまるような連中ではない。「俺も、その旅館で仕事をする」と、眼の色を変えるのだった。

女将は私に、この事は他言してくれるな、と頼む一方、信用のある人だけを紹介してくれ、と云っている。いわば、私に旅館の客引きを頼んでいるのだ。また、そんな風にでもして客を呼ばないと経営が成り立っていきそうでない旅館であった。

入れかわり、立ちかわり、K君とE君は仕事をかかえてすみれ旅館へ出向くようになった。といっても、東京からは二三時間はかかる場所だけに、月のうち、二度ぐらいずつの割だったが、すっかりすみれ旅館となじみになり、アマチュアのコールガール達と個人的にも親しくなっていた。女将は、K君やE君に対しても、自分は素人故、これから色々御指導願いたいという事を云っていたそうである。

何時か、K君とE君に東京の酒場で逢った時、すみれ旅館の話が出て、女将が旅館の経営について色々相談するが、何か商売になるいい手はないものかと雑談になった事がある。静岡のやくざか神奈川のやくざに話をつけて、月に何度か賭場として使用させるとい

う方法など面白いといい出したのはE君で、彼は、勉強のために最近、やくざの賭場などに出入りし、暴力団の生態を調べている。賭場のテラ銭のあがり、如何に大きいかを彼は知って、すみれ旅館は目だたない温泉場の一部にあるだけに、やくざが賭場をはるにはうってつけだというのだが、テラ銭が旅館の収入になるわけじゃないのだから、それはつまらんと私が云った。

鬼の会の会場にするには、もってこいの場所だと私は私なりに提案してみたのである。鬼の会というのは、私がマニヤ紳士達と酒の席などで何時かその内作ってみたいものだと話していた一つの団体グループである。鬼の会という名称がいいとか幻の会という名称がいいとか、恐らくは実現しないだろうが、色々な空想を立てて楽しんでいたものだ。全国にいる紳士的なマニヤの会合といったもので年に一回か二回、旅行会などを開き、静かな温泉宿で親睦会を行なおうというものだ。その会員になるためには、男女一組になって申込まねばならず、勿論、男女ともにマニヤとしての資格を有していなければならない。その温泉宿におけるパーティでは、会員の作った新作8ミリの発表会をするのもいいし、男



会員、女会員の実演ショーをするのもいい。また会員が全部登場するSM映画を撮影するのも面白いではないか。何しろ、異常な会合だけに一杯飲みながらえへらえへらとやっていたのではつまらない。厳肅なムードが必要でアフリカの一部の土人達が信仰している何とかいう悪魔教のミサミミたいな異様さで会を進行し、今日はSMの神に生贄を捧げるとかいう名目で、食人種の祈禱師みたいな恰好した進行係がずらりと円座を組んだ男女会員達の間を呪文をとえながら歩き廻り、お前が今日の生贄だ、と持っていた搗粉木すりこぎで頭をたたく。男女一名ずつたたくのである。頭をたたかれた会員は、それが女であるならば、当番になっている男の会員達がヤホーと掛声して立上り、彼女を寄ってたかって素っ裸にし、磔台に縛りつけるような事をする。男の会員が生贄になれば、女会員の当番が、これも歓声をあげて彼を丸裸にし、縛り上げるなり、馬にするなり、無茶苦茶にしたあげく、選ばれた男女の会員を満座でからませるというのも愉快だ——と、これは私の空想であるが、一度、いささかSMに興味を持つ好色な俳優のT君に話した所、彼は、よほどこの話が気に入ったらしく、もうすでにその会が結成さ

れたような錯覚に陥ったのか、彼の親友である三流週刊誌の記者に私の話を聞かせたらし、その記者が婦人記者と一緒に私の入り浸っている穴倉酒場へ来て、鬼の会の事をくわしく聞かせてくれ、と、私に頼み、こっちを面喰らわせた事がある。

「全くTの奴の悪ふざけには困ったものだ」と、私はすみれ旅館の事についてK君達と話し合った時、Tの、悪趣味を愚痴ったものだ。その記者が最近もうるさく電話をかけて来て自分も鬼の会に入会させてほしいというのである。勿論、記事にするため、間者として会に潜入するつもりらしい。そんな会なんて出鱈目だ、と云っても、「いや、Tさんは出席されたそうじゃありませんか。あんなすごいものはない、と云ってましたよ」と、Tの出鱈目を本当の話だと信じきっている記者は喰い下がってくるのだ。こんな会があるとルポ記事にするだけで、主催者が誰であるとか、それはどこで行われているかという事は一切発表しないから、何卒、協力して欲しいと云ってくる。入会するには、アベックで申込まなければならぬんだぜ、とこっちも頭がややこしくなってきた云々と、この間、酒場へ連れて行った婦人記者とコンビを組むつ

もりだと答えるのだった。

「そりゃ面白いじゃないか」と、私の話を聞いたK君は笑うのだった。我々で臨時に鬼の会を作ったらどうだと云うのである。会場はすみれ旅館。そして、K君、E君、それに私が可愛いコールガールの彼女達と一応コンビを組んで、その記者のペアを招待する。それから旅館の女将を呪師に仕立てて、我々の周りをノソノソ歩かせ、まず、婦人記者の頭を搗粉木でコツンとやるべきだというのだ。八百長で生贄を選出するわけである。そこで我々がさっと立上り、有無を云わず、婦人記者を素っ裸にし、磔台に縛りつける。泣くうがわめこうが、自業自得だとやつつけて、それは計算に入っていない、と恐らくうろたえるであろう男の記者も、搗粉木でぶんなぐり、これをコールガール達に痛めつけさせれば面白い。雑誌記者の彼と彼女がそこで実演てな事になれば一層楽しいではないか——とK君やE君の空想もシナリオ・ライターだけになかなか愉快であった。ここだけの話ではなく、実際にそれを考えてみるよ、協力するぜ、と、彼等は笑うのだ。

——草花をいじり、紺碧の空を流れていく春の雲を見つめたりしながら、K君達と私は



その頃の空想を懐かしげに語り合うのだ。

「あの花のきれいな旅館は、その後、行きま  
すかね」と、E君は聞くのだったが、可愛い  
いコールガール達、消息がわからなくなっ  
てから、別にそれが原因というわけではないが  
あの人懐っこい女将は旅館を処分し、自分も  
また、消息を断ってしまった。うわさによ  
ると、その街の料理屋の板前と関係が出来、板  
前には女房がいて、何だかややこしい事にな  
ったらしく、土地から逃げ出し、旅館を売っ  
た金で郷里に小さなアパートを立てて暮し  
ているという事だ。

愛すべきコールガール達が姿を消した理由  
は、考えれば私に責任があったと云える。自  
分達のグループだけでこっそり遊んでいれ  
ばよかったのに、つい悪い癖で以前から親し  
くしている会社の重役をすみれ旅館へ紹介し  
たのだ。芸者遊びなんかより、この方がど  
だけ楽しいか知れぬと、会社の接待に何時  
も熱海ばかりを利用して重役は喜び、取引  
先の重役に熱海の二次会か三次会に利用す  
ればよろしかろうとまたすみれ旅館の事を  
教えよう。教えられた重役が、また他の会  
社の友人に穴場としてここを教える。す  
ると、我々の仲間は遊んでもせいぜい彼女達

に与える小遣は五六千円だったが、重役連中  
は何時も二万円から三万、時には近くのゴルフ場へ遠出に連れて出て、小遣いの他にしこ  
たまみやげものを買って与えたりする。女達  
も次第に自分の価値はこんなにあるものかと  
自惚れ出し、本格的なコールガールの道を歩  
み始めたのである。けちなシナリオライター  
なんか相手にするより、自分を高く（金銭的  
に）評価してくれる人の方が頼もしいのにき  
まっている。喫茶店もやめ、みやげもの店も  
やめ、彼女達は絢爛とした匂いが感じられる  
東京の生活に憧れを持ち始めた。そこには、  
まだまだ自分を高く評価してくれる人がいる  
ように思われるのである。そして、肉体の技  
巧というものを wield すれば、男はモリモリ喜ぶ  
という事を知り、また、中年過ぎの重役連に  
愛撫されている内に、体の中に眠っていた新  
しい自分の能力を見つけたような気分になっ  
たのである。そして、彼女達は重役連中に相  
談し、東京へ勤めに出たのだ。

彼女達は、東京の喫茶店や食堂などに勤め  
ながら、重役級の男を相手に現在稼いでいる  
ようだ。最初、すみれ旅館へ紹介した重役の  
一人と一緒に私は喫茶店で彼女の一人と逢っ  
たが、すみれ旅館では、まず十人並に見えて

いた彼女も東京銀座のデラックスな喫茶店で  
逢ってみれば誠に貧弱に思われた。今の所、  
スポンサーになっているらしい重役も、その  
点、辟易しているようで、もてあましてい  
るのがあきらかに感じられる。

——そんな事を私は、K君やE君に話して聞  
かせている。彼等も、彼女達が現在、東京へ  
出ている事を知っていたが、計算高くなって  
来た彼女達に嫌気がさし、その後、逢ってい  
ないそうだ。だが、すみれ旅館までがもう人  
手に渡り、女将は故郷へ帰った、と私に知ら  
されると彼等は、なんともいえず寂しげな表  
情になる。

あの女将がアパートの経営なんかやってい  
ても、妙にそぐわないような気がするのだ。  
やはり、すみれ旅館で、あの無邪気だった若  
いコールガール達に囲まれ、賑やかに大声で  
談笑し合っていた方が彼女に似合っているよ  
うに思われる。

K君は、ふと蓮華草を摘取って、ポツンと  
云った。

「やはり、野に置き、蓮華草——だね」

——（おわり）——





(一)

有名な島原の乱に於て、幕府方の総大将板倉重昌が、原城の総攻撃を行って戦死した寛永十五年一月一日から数日たった夜のことである。重昌に代る総大将、松平信綱の旗本に属していた須永小兵衛が、陣中の見廻りを終って濠端を漫步していると、パチャ、パチャとわずかながら水音が聞える。「キツ」となつて籠燈をかざしてみた、と何やら黒い影が彼方の堀縁にしがみついている様子。

(怪しい奴!) 用心はしながらも、小兵衛は

## 女武者討死シリーズ

# 女天草四郎

川 上 米 子

ツカツカとその方へ寄っていった。

「何者だ! 名乗れっ!」

と低い、力のある声でとがめる。

「風…」

合言葉を返して来たのは、意外に涼しい女

声だ。小兵衛は忍者とも交りがあった。

「草…、甲賀者じゃな。安心せい、松平の手

の者だ。いかが致した?」

「う、うれしい。恥ずかしながら、自らも手

傷を負うた上、人一人抱えて居りまする」

生還の喜びに声をはずませながらも、俄か

に水からは上り得ぬ様子。

「よし、わしが手を貸す。まず負うている者をおし上げてみい」

小兵衛が救い上げた二人は、一人は甲賀の女忍者の伊吹。今一人は城内の人足であった伴作と呼ぶ若い男。

小兵衛は直ちに介抱してやったが、二人の話を聞いて耳を疑わんばかりに驚いた。

伴作は島原城下の旅籠屋の一人息子であったが、島原の一揆が起こるや、その一団に捕えられて原城に連れ込まれ、人足として使役されていたのだが、もともと良家の出で蒲柳の質のため激しい労働には向かない上、その



美貌を城内のある姫に見初められ、彼女の部屋の小間使をさせられるようになった。

それはよいのだが、その姫——沙羅姫といつて人の噂では小西行長の孫娘という——は大へんな変りもので、姿の妙なるに似ず非常に武勇すぐれ、戦となれば鎧具足に身を固めて戦場を馳駆するし、さらに戦が烈しくなつてからは、敵の捕虜の生き肝をとつて、味方の負傷者の創を癒す秘薬を作り出す始末。伴作はその手伝いをやらせられるのである。しかし、虫も殺さぬ風情でそれこそ女神もかきやと思われような気高い顔立ちに加え、事実、深い切支丹信者を称しておりながら、心はことのほかの淫乱。伴作は夜な夜な痴戯の相手をさせられるのであった。

苦役からこそ逃れたが、もともと小心の伴作のこととて、身も心もくたくたになった上、姫の残虐な生肝取りの手伝いをさせられることに堪えかねて、何度も城外に逃れようとしては失敗し、ますます苛酷に姫の慰みものになっていたのである。

しかし城内には、幕府方の忍者が何人も潜入している。伊吹もその一人で、うすうす沙羅姫の所業を知って憎んでいた、伴作のように城内のことに詳しい者を脱出させたら幕府

の為にもなろうと、同僚の寺村新伍と謀つて逃走の手引きをした。しかし、それと氣附いた沙羅姫配下の少女軍に追跡され、三人とも危かつたところを、さらに現われた伊賀者の手で助けられたのだが、重傷を負うた寺村新伍は城内を出られず、わずかに伊吹のみが伴作を負うて水中をくぐり生還したのである。

生肝を取るばかりではなく、地下牢に放り込まれている捕虜達は、はりつけ、火焙り、水責め等、昼夜を問わずあらゆる地獄の責苦をうけて、沙羅姫および少女軍の者たちに弄れているのだと伴作は云う。

「おそらくは新伍様も、かれらの餌食となられたことでありましょう」

伊吹は暗然と涙ぐむ。

「……して、その捕虜の中に、須永善兵衛という武士はいなかったか？」

驚きと不安に、今まで押し殺していたものを一度に吐き出すように訊く小兵衛。

「須永善兵衛……。おう。もしや、あのおさむらいでは……？」

「存じて居るか？」

「ハ、ハイ、たしか、あのおさむらいはそう名乗られたと思います、しかし、あの方とは……、どういう御関係で……？」

「いや、生きているのか、殺されたか、まず聞きたい」

「お、お気の毒に……。あのお方は沙羅姫の手にかかつて——」

「げえっ。や、やはり、なぶり殺しにあったのか？」

「正直に申します。あのお方は、私が最初に、沙羅姫に手伝わされた最初のおさむらいで、それだけによく覚えて居ります。……沙羅姫には、少女軍の頭で阿蘭というすこし年上の女とその配下の中で特別に気に入りの乙女が、いつも付きそっているのをごぞいます。が、沙羅姫はこの四人に、吹矢で善兵衛様を射させ、半殺しにした上、生き肝を抜いたのをごぞります。」

「むむむっ、おのれ姦婦！」

小兵衛の、膝に乗せた両手の拳がぶるぶると震えてものすごい形相でハッタと城の方を睨んだので、伴作はおそろおそろ、

「して、あなたさまは、その善兵衛様と……」

「わしは須永善兵衛と血を別けた弟じゃ」

思わず息をのむ伴作と伊吹。

「兄はいかに無念の最期であつたか、わしは何としてでも、沙羅姫を討ちとり、この思いを辯してくれたい。そち達をこうして救った



のも何かの縁。落城まで待っては居れぬ、何とか城内に忍び入って、沙羅姫を討つ手段はないものか？」

「ないことはござりませぬ」

三人は暗い小屋の中で、何時までも協議をこらすのであった。

## (二)

木版に線彫りで浮き出しにした礎柱に架かった像と、木の面にはりつけた艶のある石版画の女神の、二つの像が正面の壁に掛っている。左右の玉子色の壁には、刀、錐、針、鞭太い蠟燭等大小さまざまの責道具が架けられそして後ろの壁一杯には、すさまじい戦いの模様を克明に描いた南蛮絵。ここは原城内の拷問場なのである。

部屋は煌々と明るかった。真中に長方形の台がある。台の両端に立てた太い絵蠟燭の灯がゆらゆらとゆらめいて、如何にも鬼気迫るものが感じられる。台を覆う純白の布、その上に仰向けに横たえられた若い女の裸体。

あられもなく大の字にされた上、むざんやその手足は銀色の金具で台木に釘づけにされている。おそらく舌を噛むのを恐れてのことであろうが、さるぐつわをはめられているが

何と、それはかの女忍者伊吹ではないか。

伊吹はあの夜、須永小兵衛の切ない願いをいれて、再び原城にとって返し、沙羅姫の動静をうかがっていたのだが、武運つたなく見露わされて、捕えられ、今沙羅姫の手で処刑されようとしているのである。

台のまわりには、いろいろな形のギヤマンの盆、桶が置かれ、白磁の水盤一杯に水が湛えてある。その傍の脚の長い和蘭机の上には大小の刃物が並べられ、その周りにはきっちり身につく和蘭着物を着た四人の美少女が控えている。およそこの陰惨な部屋とは不釣合な清々しい姿だが、その表情は冷く、むしろ凄艶な気を漂わせている。

帷をはらってそこへ現われた人は、額に天冠の光る鉢巻、豊かな黒髪にくっきり映える銀盆のような面、つぶらな瞳、丹花の唇、凄惨の美貌。背丈はスラリと高く、同じく和蘭着物に身をつつんでいる。

沙羅姫は台上に横たわっている女人の裸体をしばし満足そうに眺めていたが、

「ホホホ、しぶとい女忍者奴、伴作を逃がしたのもそちの仕業であろう。しかし神の御心にそむくものは天罰觀面。妾が料理してくれる程に覚悟しや。百合亜、刀を」

百合亜と呼ばれた少女が一尺余の刃を姫の手に渡す。阿蘭が傍へ寄って、姫の右手の袖をまくる。左手の白い細い指が、伊吹のふくら盛り上った両の乳房の間にふれて、スーッと肘先をまさぐったので、その女体がピクンとふるえた。

「ホホホ……。忍者にもやはり血が通っている」とみえる、真裸で殺されるのは流石に愧ずかしいかや。そちの臨終の言葉を聞きたくもあるが、舌でも噛まれては、折角の生肝の価値がなくなるといふもの。成程忍者の鍛え方は特別とみえて、女とは思えぬ固さじゃ。しかし天佑といおうか、女人の捕虜は珍しい。男の生肝を練り合わせれば、よりよい秘薬が得られることは必定。皆の者も、男の肝と女の肝とはどう違うものか、後学のためによく見ておきや」

サッと姫の白い右手がふり上げられ、刃が灯にきらめく。それを眺める四人の少女の目は、男性の処刑を見る時以上に、嫉妬を交えた惨忍さにギラギラと輝いている。

「うむ！」

含み気合と共に姫の右手に光る刃は、あわれ、伊吹のふくよかな双丘の間へグサリと刺し込まれ、そのままスーッと腹へ一文字に走



った。

「グ……ッ」

おそらく絶叫をあげたのであろうが、さるぐつわのために声にならない、生身を刺し貫かれた激痛と驚愕に、その両眼が大きく身開かれ、白玉五尺二寸の裸身をよじって悶えたがどうすることも出来ない。

しかし沙羅姫は顔色も変えず、苦しげに波打つ伊吹の腹部を更に力一杯に切り下げる。

腹部はパツクリと見るも無惨に大きく口を開けてしまった。

「茉莉亜、肝を取れ」

「ハイ」

茉莉亜と呼ばれた丸顔の愛らしい少女が、慣れた手付きで小刀を上下させる。いかに生命力の強い女忍者も、これでは何でうたまろう、石の様に動かなくなったのを、冷やかに見下した沙羅姫は、

「阿蘭、せめて首だけは丁寧に、寄手の陣に返しておやり。外の者どもへの見せしめにもなる。ホホホ」

甲高い声を立てて去ってゆくその後姿を見送る阿蘭の目が、異様に憎しみに燃え上っていた。

### (三)

二月二十八日、原城は落ちた。松平信綱の兵糧攻めが功を奏し、一揆側はすでに十日以上も米を口にして居らず、ほとんど防戦の力もないはずであった。しかるに昨二十七日からの寄手の力攻にかかわらず、城中の死物狂いの抵抗は意外に激しく、日が沈む頃になってもそれは衰えず、徳川方の死傷もおびただしい数に上った。実に信仰は死線を越えさすおそろしいものである。

しかもこの時、その信徒達の中からどーっと一際高い歓声が起った。

二の丸の附近に当って、鎧、兜も美々しい少年武者が馬上豊かに現われたのである。

それは城将天草四郎であった。彼の美少年振りには夙に敵味方に知れわたっている。馬上の人は遠目にも顔立ち凛々しく、色白く、女とも紛うばかりの美しさであった。しかもその紅い唇から

「天草四郎これにあり。皆の者、神の御名の下に、力の限り戦えや」

涼しい声が四方に響き渡ったので

「ソレ、四郎様も戦われるぞ」

「生神様のおでましじゃ」

「われらが神の敵を叩き潰せ」

「四郎様とともに死なん」

異常な興奮とともに勇気百倍、猛然と反撃を開始したので、そうでなくてさえ、もてあまし気味であった寄手は、たちまちにして浮き足立った。その時である。今度は徳川方の騎馬武者の中から、鎧をふんばって立ち上った若い武士が大音声を挙げた。

「寄せ手の衆、騙され召さるな。今、天草四郎の身代りになった紗羅姫と申す女子でござる。本物の四郎は、とくに裏口から逃げ出したが、待ちかまえていたわれ等の手の者に捕えられたはず。サア方々、この小兵衛が紗羅姫を搦め取って、偽の皮をひんむいてくれる故、方々も功名に遅れ給うな」

それは須永小兵衛であった。その声はよく透り、形勢は逆転した。徳川勢は勢いを盛り返し、一揆側は落胆にうちひしがれた。こうなると多勢に無勢、さすがの信徒達も四離滅裂となつて、紗羅姫の周りには、徳川勢が群がり寄ってきた。

「エイ、口惜しや。あの若侍奴。それにしても、近くに寄りもせず、どうして妾を偽四郎様と見破ったのか？ 阿蘭、百合亜、あの者を引っ捕えてまいれ」



柳眉を逆立てて猛る女将の言葉に、

「ハイッ」

と左右の美少女が駆け出して行つたが、この時奇妙なことが起こった。先頭を走る百合亜に、すこし遅れていた阿蘭が矢庭に刀を掉つて後からその背を斬り下げたのである。

「キャアッ」

肩先を五六寸も割られては、何でたまろう虚空をつかんでのけ反る百合亜、その上へのしかかった阿蘭は短刀を抜いて素早くその細首を掻き落とし、スックと立ち上って、

「紗羅姫、よう聞きや。そなたが城内で行なつた悪虐の数々。それを憎んで妾は寝返ることとにきめたのじゃ。徳川の方々、妾の真情のしるしはこの通り」

と高々と百合亜の首を掲げてみせる。

「げえっ!! 裏切者は阿蘭?」

今まで片腕と頼んでいた女の裏切、さしもの紗羅姫も総身の血がスーッと引いてゆくような虚無感を覚えた。

「おのれ、百合亜様の仇!」

無我夢中にとび出して阿蘭に向かってゆく茉莉亜。それと入れ違いに馬を飛ばしてきた須永小兵衛が、

「紗羅姫、覚悟!」

と槍を走らせる。

「何の、青二才——」

紗羅姫も太刀を抜いて打ち合ったが、天草四郎の影武者と見破られた気落ちに、日頃の半分の力もない。しかも周りという周りはすべて徳川方の兵である。

(ええい、もはやこれまで。ただあの憎い阿蘭奴だけは討ちたい)

その方に氣をとられて、遂に小兵衛の槍先を受け損じ、右手の上膊部をしたたか突き刺されて太刀を取り落とした。

「組まん」

投げ場を求めるつもりで、両手を拡げて小兵衛に武者ぶりについて行つたが、小兵衛の部下達がその足をとって引き摺りおろすのだからたまらない。たちまち小兵衛に組み伏せられてしまった。無念とは思ひながらも、すでに戦う氣力を失っている姫は、

「無念ながら武運の尽き。早う首打て」

と観念の態。小兵衛は、短刀の切尖をその雪白の咽喉元にあてて、用心しながらもせせら笑って、

「紗羅姫、よう聞け。わしは、そなたの手でなぶり殺しにおうた徳川の同心須永善兵衛の弟じゃ。汝の悪業は伴作からすべて聞いたし

阿蘭も伴作に恋してから汝の悪行を憎んでいた。それ以来、女忍者伊吹を通して、城内の情報は逐一わしの手に流れていたのだ。その伊吹をも汝は惨殺しこざしくも首を送ってきたが、その口の中にも阿蘭からの密書が入っていて、城をおとす方法も、汝が天草四郎の身代りになることもみな教えてくれたのじゃ、神の名にかくれた悪業の報い知ったであらうが。その首はそうやすやすと、刎ねられぬ。兄はじめ汝の手にかかったものが、どのようなに苦しみながら死んでいったか、汝にも存分に味あわせてくれる。それっ!!」

あっという間もなかった。左右からとびかかってきた雑兵のために、さるぐつわをはめられ、高手小手に縛り上げられてしまった。

「阿蘭、処刑場に案内してくれ」

「ハイ」

と答えた彼方では、同じくとりこにした茉莉亜を阿蘭が引き立てていた。寿里亜だけが何所に逃げたか姿をくらましていた。

#### (四)

壁にある石版画の女神を引き出し、そのまます十字架に梟けたような形で、紗羅姫は磔にされていた。例の処刑部屋である。



小兵衛は城内の情報を入手した功を認められて、松平信綱から沙羅姫の処刑一切を任せられていたのである。それは善兵衛の仇討ちということでもあった。しかしその復讐は残忍であった。「目には目を、齒には齒を」の言葉通り、沙羅姫が行なった手口そのままを使って、沙羅姫と茉莉亜を処刑しようというのであった。

部屋の中には阿蘭と伴作のほか、数人の武士が入ることを許されただけであったが、扉は開け放されて外を固めている部下達も中を見ることが出来た。

その衆人環視の中に、沙羅姫は、舌を噛み切らぬために、手拭でさるぐつわけだけはめられていたが、一糸もまとわぬ姿で十字の木柱に縛りつけられていた。勇婦というから、そのグラマー振りを想像していた男達には意外なほど、それは細っそりとして白魚の様に清らかな裸身であった。小兵衛ですら一瞥した時には、あまりのまぶしさに度胆を抜かれ憎悪の炎も一瞬冷却したかのように立ちつくしたのであった。しかも細いといっても乳房や臀部や太腿など、つくべき所にはムッチリと豊かな肉がついていて、男の色情をそそるのに充分であった。

(こんな美しい女を殺すなんて勿体ない)  
誰もが心の中ではそう思ったのだが、しかし一方には、この高貴な姫の肢体が切り刻まれる無惨絵を期待する好奇心も抑え切れなかった。

すでに姫の前には、例の白布を掛けた台の上で、あの茉莉がまだ成熟し切らぬ乙女の裸身を、阿蘭の執刀で胸先から腹まで斬り割られて、苦悶にのた打っていた、その顔のそばには、すでに冷たくなった百合亜の死首が置かれていた。

「見よ沙羅姫、この女の苦しみを。因果応報人の肝を取ったものは、自らも生きながら肝を取られるのじゃ。汝もすぐにこのようにしてやる。いやいや、もつと長く息を止めずになぶり殺しにしてくれねば兄も浮かばれぬ。阿蘭、肝を抜け」

「ハイ」

阿蘭は馴れた手付きで、刃を逆手に腹の中につき込む。

「キヤアツ——」

耳をつんざく絶叫を上げて身をよじる茉莉亜。とび出さん許りに両眼を大きく見開き、黒髪はべっとり脂汗がにじんで、すんなりと伸びた四肢をはち切れん程に突張ったが、

生き肝を切り取られると、カーッと目をむいたまま、ぐったりとなっていました。

「伊吹殿の仇、思い知ったか」

小兵衛は自ら脇差を抜いて茉莉亜の黒髪を掴みその細首をズバリと斬り落とすと、血したたる生首を沙羅姫の顔の前につきつけた。

「茉莉亜もこの通り片附いた。今度その方の番だ。阿蘭、吹矢の用意を——」

「はい」

「汝が兄善兵衛に与えた苦しみと同じ苦しみを味わせてくれる。覚悟せよ」

沙羅姫は目を瞑ったままだった。小兵衛は阿蘭を真中に、その左右に二人ずつの武士を立て、紅白だんだら塗りの吹矢筒を持たせて命じた。

「阿蘭の真似をして吹くのじゃ。ただし、なるべく腹を狙え。わしがよしというまで連続してやるのじゃ、はじめっ!!」

武士達も面白半分一斉に吹きつけたが、はじめは仲々当たらない。ただ阿蘭の吹矢は狂いなく、最初の一本は右の太腿に、次のは形の良い臍のすぐ上に突き刺さって、沙羅姫の白い裸身がピクピクと動いた。見えるか見えないうぐらいの細い血の糸がスーッと流れる。

「これは観物だ」



部屋の外の部下も一斉に覗き込む。

「うわっ、当った！ 当った！」

そのうち武士達の吹矢も当り出したので、たちまち姫の女体には、あちらにもこちらにもきらきら光る短く太い針が打ちこまれて、さしもの姫も苦痛に身をよじる。

「ははは……痛いかな、苦しいかな、魔女め！ もっと苦しめ、苦しめ」

悪魔のような小兵衛の笑い声。見る見る姫の裸身は紅に染まって、艶やかな咽喉をのけぞらせて呻いた。

「フフ……、一寸待て、さるぐつわを外せ。

魔女の苦しむ顔を存分に見てやりたい」

言下に二、三人の部下が走り寄って、さるぐつわをとりにかかった時である。何時の間に部屋に近附いていたのか、外を固めていた武士達が、中の処刑に気を取られている隙をついて、一人の女人が脱兎の如く飛び込んでくるや、阿蘭の後ろ姿にとびついた。

「裏切者！」

紫電一閃！ 右手の懐剣で力まかせにその脇腹をつき刺した。

「キャアッ」

不意を打たれてのけ反り倒れる阿蘭。その身体を押し倒すようにして、さらに一振り、

二振り、刃を揮っている美少女は、外ならぬ寿里亜であつた。

「アッ…… 卑怯！」

狭い部屋の中とて、さしも武術に長けた阿蘭も起き上れないでいるうちに、致命傷を受けてぐったりとなつてしまった。

「曲者」

武士達はあわてて槍を取り直したが、狭い上にお互いの槍が邪魔になって、さばきように困り、ただ混乱するばかり。

その時、礫にかかっている美女の唇から甲高い笑い声が起こった。

「ホホホ……。デウス様の神罰で、裏切者の阿蘭は殺された。神に背く者の末路はすべてがこの通り。小兵衛とやら、そして徳川の武士達。お前達も早く悔い改めねば、長い命ではないぞよ。ホホ……」

「うぬ、よさぬか、曳かれ者の小唄——」

その声の方に小兵衛が走り寄ろうとしたのと同時に、

「姫様！」

縛しめを解こうとでもしたのか、寿里亜も走り寄って来た。

「こいつ！」

小兵衛の脇差が、寿里亜の背を、頸のつけ

根から後ろ袈裟に割りつけた。

「ア——」

そのまま縋りつくような形で、沙羅姫の足許に崩れ倒れる寿里亜。

「よくも阿蘭を。この上は、わし自ら引導を渡してくれる。兄の仇、思い知れ！」

番卒の槍をとった小兵衛は、一しごきするやいなや、その鋭い穂先を、ふくよかな沙羅姫の脇腹目がけて突き出した。

「ウ、うわっ！」

絶叫と共に身をよじらせた沙羅姫の形がちようどその後ろの壁にかかった画像の姿そっくりに見えて、思わず慄然と目をそむけながらも、

「くそう——」

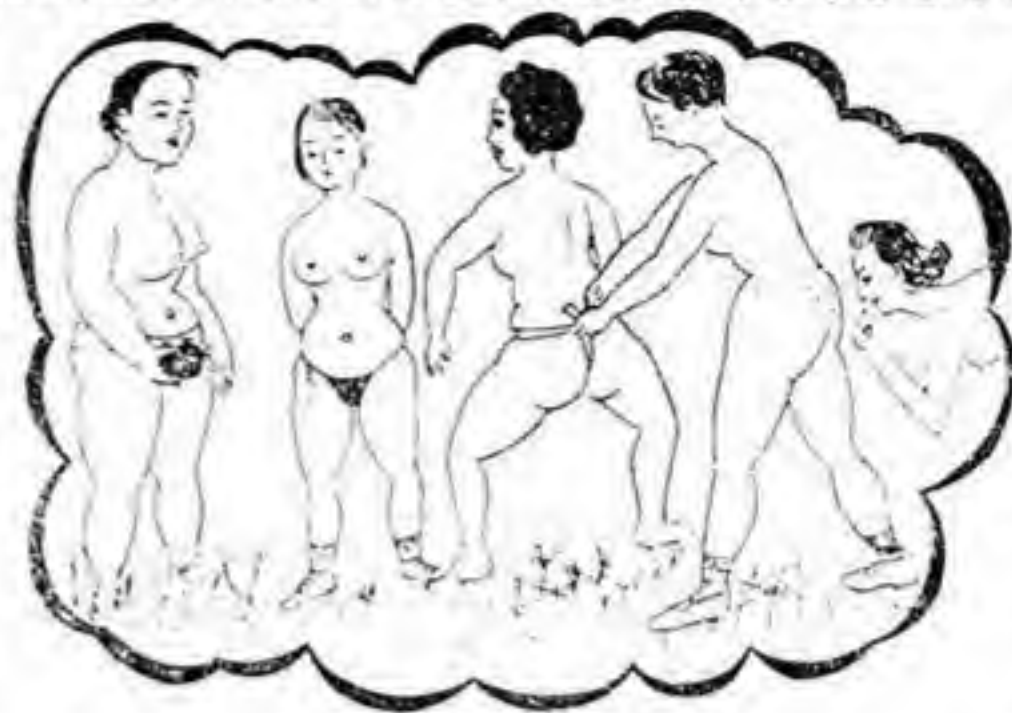
次の一突きは、腋の下に、そして

「エイ、エイ」

と狂気のように突いて突いて突きまくるのであった。

かくてその翌日、一揆の首領達の首がズラリと梟けられ、その中には沙羅姫はじめ百合亜、茉莉亜、寿里亜の四人の美女の生首もあったが驚くべきことは、その下には三十余創の槍傷をうけた沙羅姫の胴体と、腹を割かれたままの茉莉亜の屍が曝されていたという。





## 一度いよ夢

# ふんどしハプニング

鈴木 ゆり子

四月十三日は真夏のように暖い日曜日であったことはご存知のことでしょう。夫が出張で留守でしたので、私はこの日、おべんとうを持って郊外の山へでかけました。久し振りに山の空気が吸いたくなったのです。

松林、雑木林を抜けて、すみれやるり草が咲く丘の斜面へ出たところには、じっとりと汗ばんでいました。思わぬ暑さに閉口しましたが、見わたすと、誰もいませんので、思いきってブラウスをぬぎ、ストラックスもぬいでしまいました。

以前からの読者のかたはごぞんじかと思いますが、私はふんどし以外の下着を用いませんで、登山帽子、ズック靴に六尺ふんどしというスタイルになってしまったわけです。山の澄んだ空気に晒す素肌は、とても気持ちよくさわやかです。

年期をかけて栗色にやきあげたおしりを遠慮なくつき出して、夫のために精力剤になるという「いかり草」など摘んでいる内に、尾根の方に人声がしてきました。さすがにハッとなって茂みに体を隠しましたが、稜線に姿を見せたのは、はたち前後かと思われる娘さんばかりの五人連れでした。男でないので安心すると共に、ある期待が頭をもたげ、私はそのまま草つみを続け始めたのでした。

私に気がつくか？ つかないか？ 気がついたら「エッチ」というか、「ハレンチ」というか。山の中とはいえ、白昼のこの私の姿

に何というかしら？ と思う不安と期待で心待ちしていますと、私の斜下五十メートルぐらゐのところで、まず、中のひとりが気がついたようです。けれどその声は意外でした。

「アッ！ あんた、ちょっと見て！」

「ワッ、ニューギニアみたい」

「健康的で、良いじゃない？」

次の声は、更に意外でした。

「どう？ 何なら私たちも、ひとつ……」

私のところまで、かなり距離があり、私は歩くコースからそれた所にいるので、安心してさわいでいるのでしよう。

私は、ふといたずら心を出しました。サツと腰をのびし、クルリと向きなおって両手をひろげ、タイミングよく、

「どう？ あなたたちも？」

と呼びかけたのです。五人は驚いたように棒立ちになりました。



「あらッ、女の人よ。ねえ、女の人よ！」  
「カッコいい！」

私は、五人が好奇心を働かし出したのを、直感的に感じました。そしてのばらで、ひっかき傷を作りながら駆けおりて、五人のところへ行きました。

よくやけたコッペパンのような肌、自信のある強じんなおなか、深くくぼんだたて型のおへそ、我れながら見事だと思ふ褐色の乳房きゅっとくびれたような腰。小柄ではありますが、私のふんどし姿は、ちょっと堂々としたものだと思っています。

まさか私が行くとは思わなかったらしい五人は、固くより添って不安な顔つきをしていましたが、私は胸を張ってニコニコと近づいて行ったのです。

「こんにちわ。おどろかしてごめんなさい。でも気狂いじゃなくなつてよ」

私の笑顔に五人はクスッと笑ってくれました。

「そのビキニ、どうなってるの？」

「バカ、ふんどしよ。ねーえ」

「アラはずかしい。ふんどしだなんて」

「どうやってしめるのかしら？」

一人が口を利くと、次々と問いかけてきま

す。これで緊張がほぐれました。あとは青空の下、同年輩の気安さです。

「教えてあげましょうか？ だれも来やしないわよ。見通しが良いでしょう。人影が見えてから、ゆっくり服を着ても、かくれても、じゅうぶん間に合つてよ。さっきだって、私の方があなた達より十五分も先に気がついていたのよ」

「だってねえ、ねええ」

とか言っていました。が、さっきから、だまって伏目がちに私のおへその下のあたりを見つめていた、いちばんかわいらしい子が、静かにジッパを下げはじめました。

「アラッ、みどりちゃんたら、この人！」

その子となりになっていた唇の厚いグラマー娘が、驚いて反対がわの友だちにしがみつきました。私もひっくりかえらんばかりにおどろきました。その子のピンクのワンピースの下は、なんと黒い小さな三角ふんどしだったのです。

みどりちゃんというその子が、はじめて口を開きました。

「どう？ 気持ちいいわよ。みんなもぬいだら？ 私たちの前でゾロゾロしたなりで、みっともないわよ。この人、教えてくださるんで

すって。私も、こういうの教わりたいわ」

一対五でも私の方が気を呑んでいたのが、二対四になったので、勝負は決まりました。オドオドしたはだかは、それこそみじめなものです。が、堂々としたはだかには威厳があります。ミニスカートの脚にさえ威力があるのですから、それは当然でしょう。

ブツブツ言いながら例のグラマーさんと、どちらかと言えばやせたインテリふうのひと色白で大柄な人と、三人がブラジャーとパンティ姿になりました。背が低くて頬骨の出た子がひとり残りましたが、この人は、  
「とつてもつきあい切れないわ。先にバス停へ行ってるからね」

と丘をおりて行ってしまいました。

六尺ふんどしは、もちろん私のが一本あるきりです。それをはずしてパタパタと打ち振りました。私の肌にはクッキリとふんどしのあとがやき込まれています。だから、はずしても象牙色のふんどしをピッチリとめているのと変わりません。

みんなの感嘆を気分よく聞きながら、私はひとりずつ順に、しめかたを教えるて行きました。はじめの内は、くすぐったいとか、はずかしいとかいろいろ言っていました。が、その



内に慣れて形よくしめ上がると、照れかくしでしょうか、それぞれに

「どう？ この魅力。似合うでしょう？」

「わがふんどしの、りりしさよ」

「うるわしき妙子姫の切腹を見よ！」

とか、思い思いのセリフを入れてポーズをとり、中のひとりが、交替に写真をとりました。それにしても、カメラマンの方が本当のはだかだから、ふき出しました。

私がグッとふんばって他の子にしめてやっている、先にすんだ一見インテリの子が後へまわって、私の腰のふんどしあとにさわってみました。

「あなたって、ほんと白いのねえ。茶色い体にまっ白い線がTの字にちゃんと入ってるわ。日にやけてない所は、私よりずっと白いわ。ゆで卵みたい」

「よしよ。くすぐったいじゃない。ぶつとばすわよ」

ポンとお尻をつき出してやると、グシャッと彼女の鼻がつぶれます。そんなことで、五人は、すっかり打ちとけました。

まっ青な空の下、若草萌える山の中腹で、からだじゅうをそよ風になびかせて、五人の若い女がふんどしの練習をし、話題もふんど

しに集中するのは、私にしては胸をしめつけられるような悦びでした。

「次は私……アラ、悪いわねえ。あなたのだいいなふんどしを、私達が借りっぱなしになっちゃって」

「良いのよ」

そのとき例のみどりちゃんが、また思いがけないことを言いだしました。

「ねえ、悪いけど、ふんどし、とりかえっこしてくださいませんか？」

私はよろこんで賛成しました。そして、乙女たちの見守る中で、もういちど、みどりちゃんに説明しながらキュウツと締めあげました。

私はみどりちゃんを信用しています。ふだん、ふんどしをしている人のお尻はいつも清潔なものです。みどりちゃんと交換した黒いかわいいふんどしを顔に当てて、布目をくぐってきた春の空気を胸いっぱい吸い込みました。そして、ふんどしに頬ずりしてから、私の腰にしめ込みました。

見守る乙女たちのため息が聞こえたように思いました。

人が来ないうちに、みんな服を着て、丘をおり始めます。

「まだ、ふんどしを締めてる感じ」

「ふんどし、ふんどしかあ」

とか、しゃべっていましたが、その内、私が結婚していることがわかって、みんなびっくりしました。

「ねえ、あなた、いくつ？ いやだなあ。私より若いんじゃないのさあ。ちょっと、でもねえ、ふんどしなんかしてるのがバレたら、御主人に何か言われない？」

「バツカねえ、バレるところの話じゃないと思うな。御主人は、この人のふんどしがお気に入りなのよ。そうでしょう。やけるわ。キッ！」

皆の哄笑は羨しそうです。

私たちは、バスの中でもえんりもなく、ふんどしの話をつづけました。そして再会の約束をして別れました。みどりちゃんは、目をうるませて手を振っていました。

眼が醒めた時、私は涼しい木陰に坐って、木の幹にもたれておりました。拡げたままのおべんとうの残りに、一ぱい蟻がたかっています。

(おわり)







小夜子は、注射器のポンプを静かに押しながら、声を震わせて泣いた。

「いいのよ、いいのよ、小夜子さん」

静子夫人は、慰めるようにひっそりと小夜子に云ったが、唇は小さく痙攣し、高々と吊り上げられている二肢は、ブルブルと小刻みに揺れるのだった。

先程までの甘い拷問のため、その筋肉は柔らかに収縮し注射器は小夜子自身が驚く程深々と、溶液を送りこんだのである。

五〇CCを送って、小夜子がやっと嘴管を引くと、見物人達は、ほっと息をつき、思い出したように嘲笑と哄笑、そして、卑猥な揶揄を始め出した。

静子夫人は、美しい額にべったり指汗を滲ませたまま、眼を閉ざし、そんな周囲の揶揄に耐えている。というより、揶揄される事を一種の快感として受け入れているというようにも感じられた。

「ホホホ、ね、若奥様。浣腸って一体どんな気持ちをするものなの。黙っていずにはつきりおっしゃってよ」

千代は、いたずらっぽく笑いながら、葉子や和枝達と酒を飲んでゐる。

小夜子は、夫人に浣腸をすませるやもう押

さえがきかなくなったように両手で顔を覆い泣きくずれていたが、川田に叱咤されて、そのあとを脱脂綿で柔らかに揉み始める。

「ああ、小夜子さん」

静子夫人は、さも羞ずかしげに身をよじったり、顔をそむけたりなどの甘い消極的な姿態をとりながら、しかし、小夜子が夫人の上半身の方へ身を寄せて、額の汗を布で優しく拭き始めると、

「静子、とうとう貴女にこんな事をさせてしまったのね」

と、ねっとりとした妖艶な眼差しで小夜子を見上げ、諦めとはじらいのこもった微笑をふと口元に浮かべるのだった。

「許して、おねえ様」

「許してほしいのは静子の方ですわ。でも、お願い、静子を笑わないで」

何ともいぬ羞恥の色を顔一杯に浮かべて夫人は囁くように云った。

「おねえ様っ」

小夜子は、衝動的に夫人の両頬を両手で押さえると、ぴたりと夫人に唇を合わす。二人は、狂ったように激しく舌を吸い合うのだった。

やがて、長い接吻から唇を離した小夜子は

再び川田に指示されて、夫人の滑らかな乳色の腹部を両手でさすり始めた。縦形の夫人の臍のあたりが次第に息づき始める。

夫人の便意をたかめるため、そんな事を小夜子に強制した男達は、ゲラゲラ笑って、盃を口へ運んでいる。

千代にすすめられた酒で、いい気分に酔った春太郎がフラフラ立上り、一座を見廻していった。

「さて、かつての日本舞踊の美しい愛弟子に浣腸された美貌の令夫人は、間もなくこの場において羞ずかしい排泄行為を演じる事になります。如何に美人であっても、こればかりはかなり見苦しいもの。御覧になりたくない方は、今のうちにこの場よりお引きとり下さいませよう——」

いい気分になって春太郎はそんな事をいい出したが、

「毒喰らわば皿までというじゃないか。こうなりや最後まで立合ってやるぜ」

と、見物人達は高笑いするのだった。「ほんとに美人は得だね。皆さんは一人残らず、奥様の排泄をごらんになって下さるぞうよ」

夏次郎が、次第にこみ上って来る生理の苦



痛にカチカチ白い歯を噛み鳴らし始めた夫人の顔をのぞきこむようにして笑った。

「そら、もっと力を入れて、お腹の筋肉を揉んであげな。うんとお通じがよくなるようにな」

川田が小夜子の白い肩を指で突く。

「それから、御気分はどうか、よく聞いてみな。この奥様の後始末もみんなお前さんの仕事だからな」

更にそういった川田は、楽しそうに煙草を口に咥えるのだ。

「ねえ、おねえ様」

小夜子はすすり上げながら、ほぐすように夫人の腹部を撫でさすり、

「後の始末もみんな小夜子が致しますわ。ですから、ね、おねえ様」

小夜子は、川田に指示されるまま掌で夫人の腹部を強く押し始めたが、急激に昂まって来た生理の苦痛に夫人は、うっと唇を噛みしめる。

「小、小夜子さん。静子を、静子を笑わないでっ」

夫人は、吊り上げられた優美な二肢を憐れせ、切なげな啼泣を口から発して、限界が近づいた事を示すのだった。

千代と川田は顔を見合わせてせせら笑った。

「ホホホ、こういうのはお医者ごっこじゃないくて、赤ちゃんごっこでもいうのかしら」

千代は、そんな事をいって、美しい眉を寄せて苦痛にあえいでいる夫人の顔をしげしげと見つめ、

「静子夫人が赤ちゃんで、小夜子嬢がお母様ってところね。やがて、貴女方もそのうち、赤ちゃんを生む事になるんだし、今日は、おしめ取りかえの練習をさせてあげるわ」

そうした千代の揶揄も、もう耳に入らぬ静子夫人であった。小夜子にさすられる下腹部がゴロゴロ音をたて始めたのだ。

「そろそろ始まりそうね」

夏次郎と春太郎が、バラの模様が描かれた小児用の便器を夫人の双臀の下に配置し始め小夜子の背を突く。

「さ、お嬢さん。これを奥様のお尻へびったりと当ててあげるのよ」

小夜子は、もうすっかり魂の抜け殻みたいになり、空虚な眼を物悲しげにしばたたきながら身をずらせ、小さな便器を手にとった。

かつての美しい踊りの師匠が、美しい愛弟子の手で——そう思うと千代も川田も、おかしくてたまらない。

小夜子の持つピンク色の便器が夫人の肌に触れると、夫人は、反射的に身を慄かせ、

「嫌っ、ああ、嫌よ」

と、拒否的に双臀をよじらせた。

覚悟したとはいえ、小夜子の眼前にそんな醜惡な姿をさらすという羞恥に夫人は、一瞬体を硬化させ、声をあげて泣き出したのである。だが、それと同時に、生理の欲求は情容捨なく夫人の身を揺さぶり始める。

「小、小夜子さん、お願い。あっちを向いてっ、見ちゃ嫌、見ないと約束してっ」

静子夫人は、双臀に便器を当てられると、全身を顫わせて、激しい声をあげるのだ。

「へへへ、そういうわけにはいかねえぜ」

川田が、夫人の顔の傍にあぐらを組んでいた。

「奥さんの健康状態を調べるため、どれ位出したか、どんな色をしているか、小夜子に調べさせるのだからな」

ざまを見ろ、といわんばかりにそういった

川田は、急にニヤリとして、

「そうだ。二人は愛し合っているんだったけな。そんなら何も汚いものはねえ筈だ。小夜子嬢に手で受け取らせろ」

まあ、と春太郎と夏次郎は笑いこけた。



静子夫人を醜惡無残な姿に追いこみ、夫人を長い間敬愛し、師事して来た小夜子に嫌惡の情と幻滅感を与えてやるというのが千代の目的である。

夫人が排泄するそれを小夜子に手で受け取らせて、便器の中へ運ばせるといふ川田の着想に見物人達も吹き出すのだ。

「いいわね、こぼさないようにしっかりと手で掬い取るのよ。こういう風に」

春太郎は、小夜子の手から便器を取上げると、小夜子の両手を揃えさせて、夫人のその部分の下方へ持っていくのだった。

小夜子は、涙も涸れ果てたといった悲痛な表情のまま、男達に強制されるままとなっている。便器にかわって、今度は、小夜子の繊細な掌が夫人に触れたのだ。

「ひ、ひどいわ。あ、あんまりです」

夫人は、声をひきつらせて、泣きじゃくった。いいようなない戦慄と屈辱が夫人の胸をかきむしったのである。

「何もひどい事じゃねえよ。お互に愛し合っているなら、こんな事何でもねえ筈だ。小夜子に掬い上げたその匂いを嗅がせて、一層二人を離れられないものにしてやるからな」川田がそういつて笑うと、千代もそれに調

子を合わせて、

「でもね、奥様、小夜子嬢は、白魚のようにおしとやかなお手々をなさってるんですから派手に流し出せば溢れ出てしまいますわ。ですから、むつかしいでしょうけど、わずかずつ、間をおいて——」

そういった千代は、もう押さえがきかなくなったように隣の和枝の肩をたたいて笑いこけるのである。

もう限界に到達していながら、夫人は、小夜子の柔らかい掌をその部分に感じると、うっと体を硬化させ、開放をキリキリ踏みこたえている。

「お、お願い、便器を、便器を当ててっ」

静子夫人は、狂おしく首を振り、ヒステリックな声をはり上げた。

甲高い声で笑い出す千代や和枝。

「まだわかんないの。便器は小夜子嬢のお手々なよ。そら、お嬢さんが両手を開いて、待ってるじゃないの。今日は、一切、小夜子嬢に任せておけばいいのよ」

「そ、そんな、嫌、嫌ですっ」

川田の着想は功を奏して、静子夫人はかなりの狼狽を示した。夫人が取り乱せば取り乱す程千代は痛快なのである。

そんな形で、排泄する事が如何に辛くてももう限界に達している身、時間の問題だと川田達は、盛んに弥次りながら、酒をくみかわしている。

実際、静子夫人も、切れ切れに喘ぎつつ、熱い呻きを洩らして、耐えつづけてはみたものの、もうどうにもならなくなった自分をはっきり感じると、

「小、小夜子さん——」

と、光を失った瞳を細目に見開き、むせび泣きつつ、両手をその下へ当てている小夜子に溜息をはきかけるような、気弱な声を出したのだ。

「ゆ、許して、小夜子さん。静子を恨まないで——」

夫人はそういつて、凄惨なばかりに美しい容貌を歪め、静かに眼を閉じ合わせた。

もはや、耐え抜く気力もなく、羞恥も屈辱も忘れ果てて夫人が放出すると見てとった川田は、ふと、ある事を思いついて、千代に耳うちした。

「成程、それは面白いわ。がまん出来れば、千原美沙江の誘拐は、中止するといつてやるのね」

「そういう事さ。がまん出来ず放出するなら



千原美沙江は予定通り誘拐する。フフフ、もうここに至れば耐え切れる筈はねえからな。これが最後の難題ってやつさ」

その千原美沙江は、折原珠江と共にすでに田代の手中に陥っているのだ。勿論、そんな事とは夢にも知らず、静子夫人は、千原美沙江誘拐計画を思いとどまらせるため、川田や鬼源達に加えられる淫虐の責めを、身を犠牲にした思いで甘受してきたのである。

千代と川田は、すでに美沙江が罠にかかった事をどのようにして夫人に知らすか、それがまた一つの興味にもなっていた。

夫人の熱演の代償として、美沙江には手を出さぬと一旦約束してあるから、最初から甘言を弄して騙したとあってはこっちも後味が悪い。だから、静子に難題を吹きかけ、それを彼女が果たし得なかった時の罰として、改めて美沙江の誘拐計画を立てるという形にすれば面白い、と川田は千代にホクホクした思いで悪辣な計略を授けたのだった。

「もうこうなりや、止めようにも止めようがねえからな」

たれ流さぬ内に早くこの条件をつけなければ、と川田にせかされて、千代は夫人の顔の傍に膝を折った。

「まだ、始めちゃ駄目よ、奥様。その前に、一つ条件をつけておくわ」

汗みどろになって懊悩の極致に追いこまれている静子夫人は、間一髪、ぐっとこらえて千代の方へ息もたえだえといった凄惨な表情を向けるのだった。

「奥様が排泄なさるのでしたら、予定通り、千原美沙江は誘拐される事になるのよ」

「な、なんですってっ」

静子夫人は一瞬、ひきつった顔になり、憎悪のこもった瞳をキラリと千代に注ぐのだ。

「まあ、こわい顔。でも、美人が怒ると、ふるいつきたい程、色っぽくなるものなのね」と千代は笑い、

「あと二時間ばかりがまんし通せれば、家元のお嬢さんには手を出さない。こういう約束にしましょうよ、ね、奥様」

と、千代は川田の顔をチラと見て、楽しそうにいうのだった。

恨みとも呪いともつかぬものが、屈辱にあえぐ夫人の胸元に熱っぽくこみ上ってくる。

もう限界点に到達している身、どうして二時間も持ちこたえられようか。それは千代と川田の悪辣な計略だと知った夫人は、上気した身を振り、昂ぶった声で号泣し始めた。

「千原美沙江の身をそんなに思うなら、二時間ぐらい辛抱出来ねえ筈はないだろう。どうだい」

川田は、苦しそうに息づいている滑らかな夫人の腹部のあたりに足を乗せ、ゆるやかに揺さぶった。

夫人は、悲鳴をあげて、首を振った。

「卑、卑怯だわっ。貴方達は、最初から、最初から、家元のお嬢さんを——」

罠にかける気で、自分はただ面白半分、翻弄されただけに過ぎないのだ、と、それはもう口には出せぬ程、静子夫人は、突き上げて来るばかりの便意を耐えるのに必死だったのである。

すると、春太郎と夏次郎が、汗みどろになつて苦悶する夫人の熱い頬を左右から指でつついて、

「もういい加減、その美沙江とかいうお嬢さんの事、諦めたらどうなの。いくら意地をはったって、結局、ここにいる人達には勝てっこないのだから」

「そういう事よ。そのお嬢さんがここへ誘拐されて来れば、仲間がまた一人増えて、賑やかになって楽しいじゃないの。さ、強情をはずさず、小夜子さんの手の中へ——」



二人のシスターボーイはそんな事をいって夫人をからかったのだが、

「嫌っ、後生です。家元のお嬢さんだけは、助けて、助けて下さいっ」

静子夫人は、煮えたぎるような下腹の苦しみを必死にこらえながら、わめくようにいうのだった。

「じゃ、二時間辛抱してみせるというのね。ま、それも結構だわ」

あと、数分も保たない事を知っているシスターボーイ達は、鼻をほじりながら腕時計に眼をやった。

「全く強情な女ね」

と千代は鼻に小皺を寄せて、  
「じゃ、せいぜい我慢するがいいわ。そのかわり、きめた時間内に粗相したら承知しないからね。千原美沙江だけじゃなく、奥様とは古いお友達の折原博士の奥様も誘拐される事になるのよ」

静子夫人は、それを聞くと血の氣を失い、一層、激しく泣きじゃくるのだった。

必死に耐える夫人の身悶えを酒の肴にして岩崎を中心に酒盛りが始まった。

形のいい豊かな乳房、量感のある見事な双臀、そして柔らかく優美な太腿などが、夫人

の舌足らずのうめきと一緒にうねり舞っているのだ。

「ああ、も、もう、駄目」

静子夫人は、キリキリ齒を噛み鳴らすと、もうどうにも我慢がしきれなくなったようにぐっと顔をのけぞらせ、艶やかなうなじを、くっきりと見せたのである。

「何さ、あれから、まだ十分もたっていないじゃないの」

春太郎と夏次郎は、笑いながら盃を置いて立上った。

「それ、ごらんさない。いくら強情はったって無駄だといったでしょう」

床に顔を伏せて泣きじゃくっている小夜子の陶器のように白い肩に手をかけて引き起こした春太郎は、小夜子の両手を元通りに添えさせて、

「さ、いいわよ、奥様。お始めになって」

静子夫人は、濡れ濡れと光った気弱な眼をぼんやり天井に向けた。それは、あきらかに断末魔に近づいた事を示し、一種の悲壯感を帯びていた。

千代は、そんな夫人の横顔を勝ち誇ったような気分で見つめて、

「ホホホ、とうとう辛抱し切れなくなったよ

うね。では約束通り、千原美沙江及び折原珠江の二人は、こっちの思い通りにするわよ。いいわね」

静子夫人の切長の美しい瞳からは幾筋もの涙が溢れ出て、ふっくらした白い頬を濡らしつづける。

「排泄したら早速、家元のお嬢さんも折原夫人も、素っ裸にして、徹底した調教をほどこすつもりよ。静子奥様にも、その事で色々相談に乗って頂くわ」

気持よさそうにそんな事をいった千代は、  
「そうと話がきまれば、さ、早く、始めて頂戴。こっちは、二人を誘拐するために色々忙しいんだから」

静子夫人は、千代に乳房を指ではじかれると、

「口、口惜しいっ」

と、一声、大きくうめき、全身にはりつめていた力を一気に引き抜いた。もう抗する術もなく、敵の軍門に降り、羞恥も屈辱も吹き飛ばした思いで、我が身を落花微塵に打砕いたのである。

どっと見物人達からどよめきが起る。

ズベ公達は、キャツキャツと笑いこける。

それは、小夜子の開けた両手の上へどっと



溢れ出たのだ。つづいて、もう押さえもきかず、すさまじい水しぶきが――。

「あれあれ、あんな事まで」

和枝と葉子は、悲鳴をあげ、次大声で笑いこけた。小夜子の狼狽ぶりが面白かったのだろう。

夫人は、火のように熱い頬を狂おしげに右へ左へすりつけつつ、吊り上げられた二肢を激しく掻き立て、狂気じみた啼泣を洩らしている。

「許してっ、ああ、許してっ」

それは、小夜子に云ってるのか、千原美沙江と珠江夫人に対して云ってるのかわからなかったが、静子夫人は、一種の錯乱状態に陥ったように大声で泣きわめき、次から次と小夜子の掌の上へ盛り上げていくのだった。

「如何が、小夜子さん。これが貴女の長い間尊敬していた静子夫人の姿なのよ」

小夜子は、小刻みに慄えながら、便器へ移し再び夫人の発作を手で受け止めている。その小夜子の膝のあたりから腰にかけては夫人の放水でぐっしり濡れているのだ。千代にそんな風にかかわれても、小夜子は、仮面をかぶったような虚しい表情で顔色は変えず号泣する夫人を慰めるようにいうのだ。

「おねえ様、泣かないで。泣いちゃ嫌。小夜子は、ちっとも苦痛じゃなくてよ」

「ああ、小夜子さん。静子、死にたい。一そ死んでしまいたいわっ」

「そんな事いわないで。お願い、おねえ様」

小夜子は、夫人の発作がおさまると、用意されている布やチリ紙を使って丹念に後の始末をつけるのだった。

「まあ、みっともないわね。見ちゃいられないわ」

和枝や葉子は、ハンカチで鼻を押さえ、クスクス肩を動かせる。

川田は、してやったりとばかりに北叟笑んで、小夜子の始末を受けながら、さも羞ずかしげに顔をねじり、身も世もあらず身悶えしてすすり上げる夫人の頬を指ではじいた。

「へへへ、この勝負は、はっきりお前の負けだぜ。可哀そうだが、千原美沙江と折原珠江の二人は、こっちの好きなようにさせてもらうからな。これだけ派手にやらかしたんだ。もう文句は云わせねえぜ」

そして、川田は、夫人の後頭部に手をかけて、やや首を持上げると、春太郎に命じて、便器を持って来させる。

「そら、よく見るんだ。はっきりわからせてやる」

顔の近くへ押しつけられて来たそれから、

夫人がハツとして眼をそらせようとすると、川田は、夫人の耳を引っ張って、

「眼をそらさず、よく見る。自分の体から出たものじゃねえか」

と、激しい声を出すのであった。

抗し切れず、夫人が大粒の涙を浮かべた美しい瞳をそれに向けると、今度は千代が

「ホホホ、わかったわね、奥様。この賭けは私達の勝ちよ。二度と千原美沙江を助けてくれなんていわないで頂戴。家元のお嬢さんを私達に誘拐させたのは奥様なんですからね」

と、吐き出すように云い、口惜しげな身悶えと一緒に、シクシクすすり上げている静子夫人の柔媚で雪白の横顔を、楽しそうに見つめるのであった。

つづいて千代は、呆然自失した表情の小夜子に向かつて、

「奥様の浣腸から排泄の始末まで、ほんとに御苦労だったわね。さ、手をきれいに洗って一息するがいいわ」

千代の眼くばせを受けて、竹田と堀川が近づいて来ると、背後から、小夜子の肩に手をかけて引き起こす。



「御苦労だったな。さ、部屋へ戻るんだ。お前の仕事はすんだぜ」

「お願い。おねえ様を、いえ、奥様を、もうこれで解放してあげて下さい。早く縄を解いてあげて」

小夜子は、身をよじって、川田と千代に哀願した。

「そうはいかないのよ。これから奥様は、約束通り、春太郎さん達の手で高等技術を身につける事になってるの」

千代にそう云われた小夜子は、がっくり肩を落とし、堀川達に背を押されて、よろよろと歩き出すのだ。

「これから奥様は、当分、特別調教で忙しくなるからな。お前もしばらくは逢えねえぜ。奥様が恋しくなったら、この中身でも眺めて見る事だ」

川田は、便器を取上げて小夜子の手へ押しつけるのだ。どっと一座の哄笑が起る。

便器を持ち、屈辱の口惜し涙にむせびながら小夜子は歩いたが、飽く事を知らず、なおも続く悪魔達の責めに、夫人の生命は断たれるのではないかとぞっとし、たまらなくなつて振り返るのだった。

「おねえ様、嫌っ、死んじゃ嫌よ。おねえ様

が死ねば小夜子だって生きちゃいないわっ」

衝動的に走り出そうとする小夜子を竹田と堀川は抱きかかえた。

「小夜子さん。静子は、神様のお許しが出るまで決して死なないわ」

静子夫人は、暗く沈んだ表情をそよがせ、悲痛な陰影を湛えた瞳を天井に向けながら、小夜子を慰めるつもりで小さく囁くように云ったのである。

小夜子がチンピラ二人に連れ去られて行く

と、

「さて、バトンタッチにしようか」

と、川田は、春太郎の方を見て云った。いいわよ、と二人のシスターボーイは、待ち兼ねていたように枕に乗った夫人の双臀の傍へ腰を据えた。

川田は、すっかり観念したように瞑目している夫人の表情を見下ろしながら

「それじゃ、俺達は早速、家元のお嬢さんと珠江夫人の方の仕事へ取りかかるからな。奥さんは、ここですっかりこの二人から中国の秘法を教わるんだぜ」

川田は、そう云い捨てると、一座の中で客と一緒に酒を飲み、何か大声ではしゃいでいる鬼源と田代の方を見、ニヤリと口元を歪め

た。

「よし、俺も手伝ってやるぜ」

と、珍しく大酔した鬼源が、客の間をかきわけて、フラフラ近づいて来る。そして、暖かい乳色にねっとり潤んでいる吊り上げられた夫人の、優美な二肢を眼を細めて見つめるのだった。

「じゃ、頼んだぜ」

と、川田は、吉沢と順子をうながし、一緒に外へ出て行った。

「じゃ、いいわね、奥様。それじゃ、いよいよ調教に入るわよ」

夏次郎と春太郎は、傍の紙袋を引寄せ、長いガラス棒を取り出し、蠟燭に火をつけて、その先端をあぶり始める。

「へえ、そいつを呑みこませるのかい」

鬼源が、眼を丸くして、春太郎の手元を見ながら云った。

「そうよ。そら、この棒の真中あたりに赤印がついてるでしょ。ここまで呑みこめるまでまず修業をさせるのよ」

春太郎はニコリともせず鬼源に云うのだ。

夫人は、哀愁の色を顔一杯に浮かべ、一切を断念した悲痛な眼差しでぼんやり一点を見詰め始めた。



そんな静子夫人の沈みきった悲痛な横顔を夏次郎は、ふと、哀れむ気分で見ていたが、また、ざまをみるといった気分にもなつて、「フフフ、家元のお嬢さんを救うため、随分と努力なさったようだけど、結局、何にもならなかったわね。ほんとにお気の毒な話ね」と、云つて指先にクリームを掬いと、夫人にたっぷり塗り始めた。

夫人は、ポーと頬を再びバラ色に染めて、静かに顔を横に伏せる。

鬼源が、ニヤニヤしながら云つた。

「こっちが誘拐しようとしても、千原美沙江の方でうまく虎口を逃がれてくれるかも知れねえとお前が希望をつないでるなら、この際はつきり教えてやるぜ。家元の娘も、折原夫人も、もうとくにこっちの網にかかつているんだ。どうだ。これで安心がいったらう」それを耳にした夫人は、不意に火でも押しつけられたように激しい泣声をあげ始めた。

「ああ、折原家の奥様までが——。お、おそろしいわ。そんな怖しい事が——」

「へへへ、今更、何とほざいたって、あとの祭りだよ。今頃、そのお嬢様と折原夫人は、川田兄さんの手で、素っ裸に剝がれちまつてるかも知れねえな」

一きわ、激しく哀泣し始めた夫人を鬼源は楽しそうに眺めている。

「さ、奥様、用意が出来たわ。始めましょうね」

春太郎が炎で温めたガラス棒を手にし、夏次郎と二人、ぴったり寄り添うように身をかめると、交互にゆるやかに指で……を加え始めた。

夫人の哀泣は次第に弱まって、やがて、甘い身悶えと一緒に、さも、切なげなシクシクというすすり泣きの声が、半開きに開いた夫人の唇から洩れ始める。

春太郎は夏次郎と一緒に熟練した技巧で微妙な……を加えながら、優しい声音で諭すように夫人に云うのだった。

「ね、奥様、もうこれで何もかも一切諦めるのよ。何を哀願したって結局は無駄だという事がわかったでしょう。家元のお嬢様の事も折原夫人の事も、川田さん達に任せておけばいいのよ。ね、おわかりになつて」

つづいて、夏次郎が、

「お春の云う通り、奥様は、ただ調教をおとなしく受けていればいいのよ。一生懸命に励んで早く芸を身につけることだわ」

静子夫人は、ただ切なげに眉を寄せ、熱い

吐息と一緒に絹糸を震わせるようなすすり泣きをくり返しているだけであった。

充分に刺戟を加えたあと、二人のシスターボーイはガラス棒を使用し始めた。そうした彼等の手さばきは、腕のいい板前が包丁を振るつてするような仕草であった。

夫人は、嫌つ、とあるかなきかの甘くすねるような声を出し、吊られている二肢をなよなよとわずかに揺さぶったが、すっぽりと彼等の術中にはまりこんでしまったのである。

「思ったよりうまくいきそうね」

春太郎と夏次郎は、顔を見合わせてニヤリと笑った。そして、夫人のそのからみつくような粘着力と、奥深い吸引力に舌を巻いたのである。二人のシスターボーイは、必死な思いになった。こうなれば、こっちのものだとはかり更に残忍な気持をふるい起こし、なおも押し進めて行く。

「まあ、凄いいじゃない」

和枝達と酒を飲んで談笑していた千代がふとそれをのぞきに來て、口を手で押さえながら笑った。

春太郎は額の汗を手ではらいながら千代を見上げ

「どうやら、この奥様、ものになりそうです」



わ。約束の三日以内には必ず、密輸品を隠せる体に仕上げてみせますから」

「頼んだわよ。そうすりゃ、こちらも約束通り、五十万からする宝石をお礼に差上げますからね。といつても、その宝石は、元はといえば、その奥様の持物だったのだけどね」

と千代は、高い声をはり上げて笑うのだった。

静子夫人は、涙を滲ませた長い睫をかたく閉じ合わせ、唇を噛みしめ、この苦痛と必死に戦っている。美しい富士額には、ねっとり脂汗が滲んでいるのだ。身を犠牲にして汚辱にまみれたのにもかかわらず千原美沙江と珠江夫人は彼等の罠にかかり、その懊悩の極致にある我が身に加えられるこの淫虐の責め、その口惜しさは何に譬えればいいだろう。

「ホホホ、奥様、そんなに口惜しそうな顔をなさるもんじゃありませんわ。すばらしい技術を身につけようとなさってるのじゃありませんか」

千代は、ハンカチを出して夫人の額の汗を拭いてやる。

「今、丁度、五糎ってところね。目標は十糎よ。さ、もう少し、がんばって」

春太郎と夏次郎は、陰湿な攻撃を更にじわ

じわと夫人に加えていく。

彼等の力が加わり始めると、夫人は、飽かずに眺めている見物人達の官能に泌み入るような啼泣を洩らしながら、双臀をなよなよとよじらせた。そして、名状のしがたい陰密で陰惨な痛感が全身を慄わせ、夫人は気が遠くなりかけていくのであった。

## 捨身の脱走

千原美沙江と折原珠江は、田代が時折、秘密会員達を集めてショーを開催する事になっている土蔵の地下に檻禁されていた。その土蔵は、かつて、静子夫人や京子が、満座の中で罵りぬかれ、また、美津子や文夫が血を吐く思いで実演を強制された場所である。

田代は、この土蔵の地下にショーに出演する奴隷のための楽屋という意味で、二つの牢舎を新築させていたのである。二つとも、五坪ぐらいの広さ、床は板の間になっているが頑丈な鉄格子で外とは隔離されていた。

その一つの牢舎に美沙江と珠江夫人とは一緒に檻禁されている。ここへ押しこめられてから、もう二、三時間はたったようだ。二人とも、縄は解かれていたが、生きた心地もな

く美沙江は、珠江夫人の膝に顔を埋めて、恐怖に肩を慄わせているのだった。

「おば様、私達、無事にここから帰れるのでしょうか。ね、おば様」

美沙江は悲痛な表情で、珠江夫人の膝を揺さぶるのだ。

「今日一日の辛抱ですわ。お嬢様。あの連中は千原流の今日の会を妨害するのが目的なんです。お嬢様の身に危害を加えるような事はありませんわ」

珠江夫人は、おびえ切っている美沙江にそんな風に云ってなだめたが、珠江夫人も恐怖と不安でじっとしていられない気持だった。

「遠山の奥様がここにおいでになるといふのは本当なのでしょうか」

美沙江は、美しい睫を慄わせながら、珠江夫人を見上げる。

「さあ、それは――」

珠江夫人は、深い憂愁の色を白い繊細な眉のあたりに浮かべて、苦しそうな表情を見せた。

急に誰かが地下の揚戸を音を軋ませて持ち上げ始める。

珠江夫人と美沙江は、ハッとして、手をとり合った。心臓の音が早鐘のように二人の胸



を打つのだ。

地下の階段を何人かの足音が降りて来る。

珠江夫人と美沙江は、体を寄せ合うようにし牢舎の隅へ後ずさり始めた。

降りて来たのは、大塚順子で、そのあとに川田と吉沢が用人棒のようにについている。

珠江夫人は、順子を見ると、憤怒の色を燐光のように瞳の底に滲ませ、弱身を見せては負けだとはかり、落ちついた口調で云った。

「何時、私達をここから解放して下さるのです。はっきりおっしゃって下さい」

さあ、どうしようかねえ、といたげに順子はおかしそうに川田と吉沢の方を見て

「おとなしくして下さるなら、決して悪いようにはしないわ」

順子は、そう云って、煙草を取出して口にする。

「ただし、俺達が解放するまでに下手にあがいて、ここから逃げ出そうってな事しやがりゃ、只じゃおかねえからな。二人とも、二度とそんな気が起こらねえよう素っ裸にするぜ。よく覚えておきな」

吉沢が、腰をかがめて、牢舎の中をのぞきこみながら云った。

吉沢のそのおぞましい言葉に、珠江夫人と

美沙江の顔から血の気がひく。

順子は、小気味良さそうに二人の美女をしばらく見つめていたが、川田達に

「じゃ、しばらくこのお二人のおもりを頼むわ。お二人とも退屈で、体をもてあましていると思うから、何かお話し相手にでもなっあけてよ」

順子は、そう云って、地下から出て行くとする。

「待って下さい」

美沙江が気弱そうに睫をふるわせながら、順子に声をかけた。

「何なの？ お嬢さん」

「遠山家の奥様は、本当にここにおいでになるのですか。ね、事実を教えて下さい」

「いらっしゃるさ」

と川田と吉沢は顔を見合わせて笑った。

「すっかりここが気に入っちゃって、もう外へは出たくないとおっしゃるんだよ。俺達の待遇が余程お気に召したようだぜ」

「嘘ですっ」

珠江夫人が柳眉を逆立て、急に激しい声を出した。

「どうして遠山家の女中であつた千代さんがここにいます。それだけじゃないわ。遠

山家の運転手であつた川田さんまでが、どうしてここへ——」

川田は、自分の事をはっきり記憶していた珠江夫人に冷ややかな視線を向けた。

「俺の事を覚えていたのかい。奥さん」

「貴方と千代さんが、共謀して、遠山家の奥様をここへ檻禁したのね。きっと、そうに違いありません」

珠江夫人は、怒りに美しい眉を神経質にぴりぴり震わせ、顔色は青かった。

「そこまで読まれちゃ仕様がないな」

川田は苦笑した。

じゃ、あとはよろしく、と順子が意味ありげな微笑を残して地下から出て行くと、川田は、ふと口元に凄味を浮かべて、鉄格子から珠江夫人を見つめた。

「こうなりや奥歯にもののはさまったいい方をしたって仕方がねえ。はっきりと教えてやるぜ」

川田は、ポケットから、何枚かの写真を取り出し、せせら笑うとそれを無難作に鉄格子の中へ投げこんだ。

「よく見な。それが遠山家の奥様の近況だ」

珠江夫人は投げこまれたその一枚に手を触れたが、瞬間、あっと声をあげ、さっと首を



横へそむけた。珠江夫人の顔も頸も、みるみるうちに真っ赤に燃え上る。そしてそれを美沙江の眼に触れさせてはならぬとばかり、あわてて拾い集めると珠江夫人は、憤怒に眼をつり上げ、川田めがけて投げつけたのだ。

「何をしやがる」

と、吉沢が凄んだが、川田は、自分の顔に当って散乱した写真をつくりと拾い集めながら、ニヤリとして

「どうだい。これで大体、遠山夫人の日常がわかったと思うぜ」

と、その一枚を手にし、「これなんか、仲々よく写れてるじゃねえか。そら、お嬢さんよく見てみな」

と、鉄格子の間から、それをもう一度差し入れようとする。

「見ちゃいけませんっ、お嬢様」

珠江夫人は、美沙江の顔を袂で覆うようにして牢舎の隅へ身をかがませるのだった。

「一体、何の恨みがあって、このようなひどい事を——」

珠江夫人は、あまりの怖ろしさに全身の慄えは止まらず、しかし、精一杯の憎悪をこめた瞳を川田に注いで云った。

「へへへ、ひどいと云ったって、遠山家の奥

様は案外、こういう風な事が好きなのだよ。万更でもねえ顔つきしてるじゃねえか」

川田はそう云って、手の中の写真に眼を向ける。それは、三階の広間で、満座の中で捨太郎と実演を演じた静子夫人のみじめな姿であった。均整のとれた優美な裸身を緊縛されしかも一本のロープにつながれて立ち、うしろより捨太郎の攻撃をまともに受けている。夫人の豊満な両乳房には、背後にまとりつく捨太郎の毛むじらな両手が襲いかかり、その上、夫人の姿は背後の捨太郎を見事に受入れた事を示しているのだ。それだけではなく夫人は、首を仰向かせるようにねじって、背後の捨太郎の醜惡な唇にびったり紅唇を押しつけている。

「こうした写真は、この道の立人も舌を巻いたぜ。何しろ、縛り上げた女とのからみってのも珍しいが、これだけの美人スターは、何百万、積んだって手に入る代物じゃねえからな。大変なプレミアがついて飛ぶような売れ行きさ」

川田は得意な調子で、そんな事を云って愉快そうに笑った。

珠江夫人と美沙江は、身を寄せ合い、深く首を垂れて、もう一言も発せず、恐怖と屈辱

に全身を硬化させているようだった。

立人好みの渋い和服を着た珠江夫人の襟元の艶めかしさ、眼もさめるような振袖姿の美沙江の見事な黒髪。そして、妖しいまでに高貴な感じに満たされた白蛾のように色白の二人の横顔を見つめている内、川田の全身に兇暴なものがわき上って来た。珠江夫人の悪を徹底して憎む気性の激しさといったものに、ムラムラと闘志のようなものがこみ上ってきたのかも知れない。

「吉沢兄貴は、お嬢さんの方がいいだろう。俺は人妻が気に入った」

川田は吉沢の方を見て片眼をつぶると、ポケットから鍵を取出し、鉄格子の錠前に差しこんだ。

珠江夫人と美沙江は、ハッとして顔を上げる。

「どうせお前達は森田組の商品になるんだ。ちっとばかり、俺達にいい思いさせてくれたって、大した事はねえじゃねえか」

吉沢は扉を開けて、中へ入って来ると、淫靡な笑いを口元に浮かべて、美沙江に迫る。

美沙江の絹を裂くような悲鳴。

「な、なにをなさろうというのです」

珠江は、美沙江をうしろにかばって、吉沢



と川田に必死な眼を向けながら、ジリジリ後退して行く。

「奥さんの方は俺が可愛がってやるぜ。さ、来な」

川田は、珠江の手を取ろうとする。

「け、けだものっ」

珠江は、川田の手を払いのけ、美沙江の手をつかむと、牢舎の外へ逃げ出そうとした。

「そうはいかねえぜ」

吉沢がうしろから、美沙江の振袖の袂をつかむ。

「あっ、嫌っ」

吉沢にからみつかれて美沙江が再び悲鳴をあげた。振袖の裾前が大きく割れて、淡い緋色の蹴出しがさっとひるがえる。美沙江の襟をとってその場へ引据えようとした吉沢の鼻を伽羅の甘い香りがくすぐり、それで一層、狂暴さを発揮した吉沢は、亀甲くずしの帯地に手をかけた。

珠江夫人は、美沙江をかばおうとしてその中に割って入り、吉沢に体を当てる。

「この阿女」

吉沢は、はずみを食って、うしろにいる川田の足にけつまずき、尻もちをついたが、その時、ジャンパーのポケットへ押しこんでい

た拳銃が床の上へ転がり落ちたのである。

ハッと珠江夫人は、息をのんだが、すばやくその拳銃を拾い上げた。

「あっ」と、吉沢も川田も顔色を変えた。

珠江夫人がいきなりこちらへ拳銃の銃口を向けたからだ。

「動かないで。私だって、命がけになればこの引金ぐらいひけますわ」

珠江夫人は、大きく肩で息づきながら、両手で拳銃を握りしめ、川田と吉沢に銃口を向けている。出ようによっては、本当に引金をひきかねない珠江夫人の凄惨なばかりの表情に川田も吉沢も、慄えて、ジリジリ後退するのだった。

しかし、身を守るため、必死な思いで武器を手にしたものの珠江夫人の手はブルブル小刻みに震えている。

それを見てとった川田が、口元を歪めて

「俺達に楯つきゃあ、あとで大変な目に合うぜ。さ、そんな物騒なものはこっちへ寄こしな。その方が身のためだ」

「近寄らないでっ」

珠江夫人は、二人の男に銃口を向けながら美沙江の手をとって、牢舎の扉をくぐり外へ走り出た。

「お嬢様、さ、早く」

珠江夫人は、恐怖にわなわな慄えている美沙江を叱咤するようにして地下の階段を駆け上って行くのだ。

「くそっ、ここから逃げられるとでも思っただやがるのか」

川田と吉沢も、必死な形相になって、二人の後を追って行く。

土蔵の外へ走り出た珠江夫人と美沙江は、石につまずき、つんのめりそうになりながら竹藪の中へ走りこんだのだ。

「ああ、お嬢様。もう、私、走れないわ」

美沙江は、苦しげに息をはずませ、うずくまってしまう。

「駄目ですわ。ね、お嬢様、元気を出して」

珠江夫人は、がっくりくずれてしまった美沙江の肩を揺さぶった。

「畜生、あんな所にいやがったぜ」

すぐ眼と鼻の先へ現われた川田を見た珠江夫人は、ドキンとして、銃口を向けた。しかし川田は、せせら笑って、突き進んで来る。

珠江夫人は、ハッとして反射的に引金を引いた。

轟音一発。川田は、手の甲を押さえて、その場へ跳ね飛ぶようにひっくり返った。



「あっ」と声を出したのは、川田より珠江夫人の方であった。恐怖のあまり思わず引金をひいてしまったのだが、拳銃の発射音に驚きその場に、脆ずいてしまう。眼がつり上って口がきけなくなってしまった。

「畜生、よ、よくもやりやがったな」

運よく弾丸は、手の甲の表皮をかすっただけであったが、それでもかなりの血が流れ、川田は大仰な悲鳴をあげて、その辺をのたうち廻るのだった。

吉沢がかけつけて来て、そんな川田を助け起こす。

「しっかりしねえか、大した傷じゃねえ」

と、川田の手を首にかけて、一旦、竹藪の外へ運び出す。

「女でも死者狂いになりやがると恐ろしいからな。ここは皆んなに応援を頼もうぜ。この竹藪を取囲むんだ」

と吉沢はいつて、川田の手に血止めの手拭をかたく結びつけると、「よく見張ってるんだぜ」と云い捨て、屋敷の方へ走って行く。

川田は、いまいまいげに舌打ちして、竹藪の中に向かって云った。

「覚えてろよ。今度とっ捕まえたら最後、只じゃおかねえからな。覚悟している」

そんな川田の声を竹藪の中程で珠江夫人と美沙江は、互にひしと抱き合っただま虚脱した表情で聞いていた。

人を殺さずにすんだという事に珠江夫人の心は救われたものの、傷を負わされた川田はどのような報復手段に出るかも知れない。それを思うと珠江夫人も美沙江も生きた心地はなかった。

「おば様、美沙江を生きたままあの恐ろしい人達の手に渡さないで。一そ、一そ、美沙江をここで——」

美沙江は、泣きじゃくりながら、珠江夫人の手を握るのだった。

「何をおっしゃるの。お嬢様の身は、私が命にかえてもお守りしますわ。そんな弱気な事をおっしゃっちゃいけません。それより、何とかしてここから逃げなければ——」

珠江夫人は、美沙江の肩に手を添えて立上らせようとする。美沙江も歯を噛しめて体を起こしたが、先程つまずいた時に足をくじいたらしく、三、四歩、土の上を白足袋で踏みしめ歩いたが、耐え切れなくなったように再びかがみこんでしまうのだった。

## 地獄の接吻

七糎ぐらいに達すると、静子夫人は、急に激しく痛みを訴え出し、そこで二人のシスターボーイは、矛先を一旦、引揚げて、念入りに二度目の浣腸を夫人にほどこした。心身ともに疲労し切ってしまったのか、夫人は、ぐったりと顔を横に伏せたまま、ただわずかに眉を寄せただけで、ほとんど無感動にそれを受け入れ、やがて、その下へ便器を当てられると、絞り尽したように二度目の排泄をやったのける。もう何をされようと、責め手の意のままに従っているという感であった。

「随分と手数のかかるものなのね。見ている方も楽じゃないわ」

と、千代が岩崎の盃に酒を注ぎながら笑う

「そうですよ。何しろ、この芸当を覚えるにや相当な修業の期間がいるんですよ。それを三日で一応やってのけるってんですからね」

鬼源が黄色い歯をむき出して答える。

「でも、この奥様が、こうしてがんばって下さるので大助りだわ。大抵の者なら、大声をあげて泣きわめくところだけど、その点、やはり育ちのいい大家の令夫人は違うわね」

夏次郎は、そんな事をいいながら、二度目の後始末を終え、再び、コールドを塗り始め



る。その部分は、もう静子夫人の意志とは全く関係のないように貝類のような柔らかい吸引力を持つに至っていた。

薄く血の滲んだガラス棒を布で拭いていた春太郎が、再び、腰をかがめて

「さ、奥様、今度はうまくいくと思うわ」

と、云い、そっと触れさせた時、突然、襖が開いて、吉沢が走りこんで来た。

「め、めんどろな事になっちまったんだよ。親分」

吉沢は、ハアハア息を切らせながら森田の顔を見た。

「あの人妻と家元の娘が、俺のピストルを奪って逃げ出しやがったんです」

「な、なんだと」

一瞬にして森田も田代も啞然とした顔つきになったが、それを耳にした静子夫人は、大理石のように冷たくなっている表情にふと生氣が蘇って来た。

——ああ、神様、どうか千原流のお嬢様と折原家の奥様をお救い下さい。この地獄屋敷から無事逃亡させて下さいませ——と、夫人は、涙に潤んだ睫毛をフルフル慄わせて必死に胸の中で祈るのだった。

「それだけじゃねえんです。あの人妻は、追

いかけた川田に一発、発砲しやがった」

「えっ」

吉沢の報告に森田と田代は、あわてて立上った。

幸いにして、その一発は川田の手の甲をかすただけにとどまったと吉沢に聞き、一座の者はほっとしたが

「くそ、とんでもねえ事をしやがる。よし、皆んな手をかせ」

森田は、いきり立って、身内の者達を見廻した。

岩崎が盃を置いて、森田の方を見た。

「ピストルを奪って、発砲するとは、どれくらい事する女やないか。わしとこの身内も貸したる。そいつを早く捕えて来い」

岩崎は、大阪からボディガードとして連れて来ている谷村と江原の顔を見て眼くばせした。すると、津村の弟の清次も仲間の五郎、三郎と一緒に立上り、

「俺達も助っ人するぜ。全く太え女だ」

と、口をとがらせる。

静子夫人は、おろおろして陰影を湛えた瞳を見開いた。

これだけの人数が動き出せば、いくら珠江夫人が武器を持っているとはいえ、囲みをか

いくぐって逃げる事は出来ない、そう感じた静子夫人は、血走った思いになり、何とかしてこの人数の足を少しでもここへとどめ置こうと精一杯の媚態を演じ始めたのである。

「ひどいわ。静子をこんな思いのままにして皆んな行っておしまいになるなんて」

ええ？ と男達は、さもじれったそうに双腎を悶えさせて、甘くすねかかるような声を出す夫人の方を凝視する。

「ねえ、お願い。せつかく気分が乗って来たのに、水をさすような事なさないで。最後までごらんになって下さらなきゃ嫌」

鼻にかかった甘え声を夫人は意識的に出して、身をよじって見せるのだ。

眼を細めて、ニヤニヤし始めた岩崎の顔を見た田代は、

「ま、客人衆はこのまま宴会をつづけて下さい。たかが女二人、何も皆さん方の手をわずらわせる事はないと思います」

田代は、部屋の隅で酒を注ぎ合っている銀子と朱美の方を見て

「客人達の事はよろしく頼むぜ」と云い残し、森田、井上、鬼源達を連れて部屋を出て行くのだった。

「さ、皆さん、どうぞ、お坐りになって」



銀子は、清次や五郎達を元の位置に坐らせて酒を注いで廻る。

「御心配は無用ですわ。このお屋敷は周囲は高い壁がはりめぐらされていますから、鼠一匹だって逃げられやしませんよ」

何となく不安な表情になっている大塚順子に千代は云い、珠江夫人と美沙江が逃亡を計った事の憤懣を静子夫人にぶつけるような調子で、

「全く千原流の娘も世話をやかせるじゃないの。そのかわり、捕まえたら最後、只じゃおかないからね」

そして、千代は、春太郎に調教を続行するように目くばせする。

「ねえ、千、千代さん」

静子夫人は、上気した美しい顔を千代の方に向け、哀切的に眼をしばたたかせる。

「うるさいわね。個人的なおしゃべりは調教がすんでからにして頂くわ」

「待って。お願いです、一言、聞かせて下さい。もし、千原家のお嬢様が捕まれば——」

静子夫人は、綺麗に揃った柔らかない睫に涙を光らせながら

「まさか、お嬢様まで、静子と同じような運命には——」

あとは恐ろしくて声にならず、柔かい夫人の頬に大粒の涙が伝わり流れた。

「何云ってんのよ。当然、お嬢さんも折原夫人も、森田組の奴隷、そして商品になるわけよ。特に家元のお嬢さんには、特別の調教を予定しているのよ」

千代は、そう云って、順子の方を見、何か意味ありげに笑って見せるのだった。

「一体、家元の娘に、どんな調教を予定しているんです」

と、銀子がふと興味を覚えて、千代に聞くのだ。

「云わぬが花という事にしておこうと思ったんだけど、奥様が気になって仕方がないようだから、ここだけの話、教えてあげるわ」

千代は、物悲しげな色を湛えている静子夫人の美しい瞳をのぞきこむようにして

「千原流生花が幅をきかせたため、湖月流は弟子を奪われたりして随分これまで腹立たしい思いをしてきたのよ。その復讐をするの。」

つまりね、千原流家元の令嬢を湖月流生花の花壺に仕立て上げようというわけ。フフフ、

前衛華道の面白さってものをお嬢さんに嫌という程、教えてやろうってわけなの」

その意味がはつきりわからず、夫人は、た

だ白い頬を慄わせているだけだったが、「そりゃ面白いわ。ね、こういう事をするんでしょ」

朱美がマットレスの両側に配置されてある花瓶から二、三輪のバラの花を抜きとると銀子と一緒に夫人の双臀の傍へ身をかがめる。

「そのままじゃ無理よ。一寸、かしてごらんなさい」

順子が含ま笑いしながら、ズベ公二人の手からバラを受けとり、適当な長さにハサミで枝を切り落とす。

「あっ、そ、そんな」

夫人は、銀子と朱美の手が、事もあるうにそんな所に花を飾り立てようとして動き始めると、綿のように疲労し切った肉体を思わずブルツと慄わせ、吊られている優美な二肢を揺さぶった。

「ガタガタするんじゃないよ。家元のお嬢さんがどんな目に合うか、教えてやってるんじゃないか。奥さんだって知りたいんだろ」

紅いバラと白いバラを差し入れようとして銀子と朱美は懸命になっている。

「ああ、こ、こんな事を、本気で貴女達は、お嬢様に……」

静子夫人は、全身をひきつ攣らせて、のたうちな



がら、大粒の涙を流し始めた。我が身が受ける苦痛で泣くのではなく、こんな仕打を美沙江が受けるという恐ろしさに、夫人は氣持が顛倒してしまったのである。

「ホホホ、どうやらうまくいったわ。御氣分は如何が、奥様」

銀子と朱美は、花を咲かせた夫人を見て周囲の見物人と一緒に笑いこける。

「じゃ、ついでに、ここにも咲かせましょうね、奥様」

朱美は、更に一本のバラの枝を切り、仕事にかかり始めた。

「そ、そんな——ああ、嫌、ねえ、嫌っ」

静子夫人は、上ずった声をはり上げて、双腎をくねらせた。

「家元のお嬢さんだって、こういう風にされるのよ。さ、おとなしくするのよ。今更、奥様がうろたえるなんておかしいわよ」

銀子と朱美はそんな事を云いながら、深々と花を飾り立てていく。

——お嬢様、逃げて。絶対に捕まっちゃいけない。お願い、お嬢様。——

静子夫人は、周囲を取巻く野卑な男女の哄笑の中で、熱に冒されたように胸の中で祈りつづけるのだった。

「まあ、傑作ね。これが人間花瓶というものかしら」

千代は、和枝や葉子達と一緒に、花を咲かせた夫人を見て笑いながら、夫人の顔の傍に身をかがめて

「わかった？ 奥様。千原美沙江は、こういう風に前衛華道の花瓶にされて、順子さんの部屋の床の間へ飾られる事になるのよ。どう面白いと思わない？」

更に千代は、夫人の高貴な感じの鼻を指でつまみ上げ、

「それにこの鼻の穴、口、皆んなに花を飾り立てる。そうすりゃ、もっとすばらしくなるわね」

静子夫人は、ひきつった顔つきになって、固く眼を閉ざした。

世の汚れを知らない純心で清楚な美しい美沙江が、千代のいう人間花瓶に——想像するだけで夫人は氣が狂いそうになる。今、自分が受けているこの屈辱は、やがて、美沙江の身にふりかかるのだ。そんな恐ろしい事があるっていいものだろうか——

何時の間にか酔った男や女達が、面白そうにカメラをかまえて、夫人の咲かせた花を色々な角度から撮影し始めている。しかし、夫

人は、そんな事に狼狽したりする氣力はもう完全に喪失し、されるがままになっている。

そこへ、急に襖が開いて、鬼源が、風邪で寝ていた筈の捨太郎を伴って、のっそり入って来た。

「竹藪の捕物はどうなったの」

銀子が聞き、一座の者は一せいに鬼源の顔を見つめる。固く眼を閉ざして囁きものになつていた静子夫人も、うろたえ氣味に眼を開き、祈るような眼差しを鬼源に向けるのだった。美沙江と珠江夫人が逃亡に成功したのなれば自分はどう死んでもいい、そんな氣持の静子夫人だった——

「捕物はおわったよ。二人は捕まったぜ」

それを聞いた悪魔達は、ほっとした表情になったが、反対に静子夫人は、悲鳴に似た声を上げ、緊縛された身をのけ反らせるようにし、肩を慄わせて号泣し始めた。

——ああ、神様。とうとう私達をお見捨てになったのね——夫人の眼尻からは、とめどなく熱い涙がしたたり落ちる。

鬼源は、そんな静子夫人をチラと見たが、すぐに一座の者を見廻して、得意げにうしろに立つ捨太郎の肩をたたくのだった。

「殊勲者はこの野郎ですよ。ほめてやって下



せえ」

風邪で寝ていた所を鬼源に叩き起こされた捨太郎は、後方から竹藪にもぐりこみ、足をくじいてうずくまっていた美沙江と、それを介抱していた珠江夫人を、簡単に取り押さえってしまったというのだ。

「相手が拳銃を持ってるだけに、こっちも下手に手出し出来なかったんだが、そこへ行く」と馬鹿ほど強い者はねえ」

鬼源の話に一座はゲラゲラ笑い出した。

夫人は、珠江夫人と美沙江が悪魔の手中へ再び落ちたという悲しさと、云いようのない恐怖とで齒を噛み鳴らしつつ泣きじゃくっているのだ。

千代は、ふと、いまましい顔つきになって、

「そんなに美沙江が捕まった事が悲しいの。いい加減になさいよ」

春太郎と夏次郎は、千代の眼くばせで、ガラス棒を手にして再び、身を沈ませて行く。「さ、これで奥様も安心して調教が受けられるってものじゃない。それじゃ、続きを始めるわ。いいわね」

春太郎は、そっと花を取り捨て、ゆっくりと責具を当て始めた。

「今度は、さっき約束した通り全部呑みこまなくちゃ駄目よ」

「もう、もう、何もかも駄目なのね」

静子夫人はすすり上げながら、ふと凍りつくような表情になって、かすれた声を出すのであった。それは一切の望みを失った悲壮なばかりに哀しげな表情でもあった。

「そうさ。もう何もかも駄目だ。お前はただ自分の身体を調教して実演スターの貫禄を身につける。それだけ考えてりゃいいんだ」

と鬼源は口元を歪め、これから珠江夫人と美沙江は川田や吉沢達の手で、二度と逃亡など計れないように一切の衣類を剥がれて牢舎へつながられる事になっていると夫人に教えるのだった。

夫人は、哀しさを、しいんと浮かべた頬に一筋二筋の涙を流しながら、決意したようにはっきりとした声音で、

「何もかも静子に忘れさせて。お願い、静子はどうも何も考えたくないの」

実際、静子夫人は、美沙江の事も珠江夫人の事も、もう考えるまい、と悲痛な気持になった。鬼源の云うように自分の身体を調教する事、そして、調教される事によって一切を忘却しようと思ったのである。嗚咽を止めた

静子夫人は、涙のうるんだ綺麗な睫をそよとも動かさずにじっと一点を見詰めている。

「そういう気持になってくれなきゃ駄目よ。じゃ、始めるわよ」

春太郎が力を入れて行くと、夫人もそれに協力を示して、枕の上の美臀をゆるやかに動かせ始める。

「そうそう。そういう具合にしてくれなきゃあ。ほんとに奥様はいい子になったわ」

春太郎と夏次郎は、ゆるやかでしっとりした夫人の甘い身悶えを眼を細めて見つめつつ再び、調教を押し進めていくのだ。

じっと凝視している見物人達の表情を見廻した鬼源は、ただそれだけのショーでは芸がなさ過ぎると感じとり、優雅な身悶えをくり返している夫人の熱い耳たぶに口を寄せて小声で何か囁き始めた。

「いいわ。おっしゃる通りに致します」

夫人は、固く眼を閉ざしたまま、小さくうなずいて見せた。

「俺の云った通り、捨太郎を甘くひきこむんだぜ。いいな」

静子夫人は、顔面一杯に憂愁の色を深々と湛えながらも、  
「わかってますわ」



と、ひっそりと口に出して云った。

鬼源は次に捨太郎に耳打ちする。捨太郎はニタニタと顔をくずして着物を脱ぎ始めた。毛むじらのゴツゴツした体軀の捨太郎は赤禪一本で夫人の頭元に立つのである。

「汚ねえ禪だな。たまには洗濯しろ」

と鬼源が顔をしかめ、見物人達はどっと哄笑し始めた。捨太郎は相変わらず、えへらえへら笑いながらその禪も解き始めるのだ。

静子夫人は、そんな捨太郎には無関心を装い、次第にピッチを上げ始めた二人のシスターボーイと呼吸を合わせて豊かな双臀をうねらせている。

「あと、ほんの少しよ。がまんしてね奥様」

春太郎は、汗ばんだ額の汗を拭きながら攻撃の手はゆるめようとしなかった。

静子夫人は、もどかしげな身悶えを次第にあらわなものにしながら、この苦痛を味あう事で美沙江の事も珠江の事も、そして、現在の自分の苛酷な運命も忘却する事が出来るのだと必死な気持だった。

捨太郎は夫人の頭元にあぐらを組み、そつと夫人の頭を自分の膝の上へ乗せ上げた。

「あなた、ごめんなさいね。静子、今、特別な調教を受けているので、三日間、あなたの

お相手が出来ないんです」

夫人は、頬を捨太郎の膝にすりつけるようにして、さも、もどかしげに云うのだった。「ですから、ね、あの方法で。いいでしょうそれで我慢なさって」

夫人は、それは鬼源に強要されたショーとして演じるというより、自分もそうした事によって自分を無茶苦茶に傷つけ、一切を忘却し、没我の境地に浸りたいといったせっぱつまった欲求にかられ出したのである。

捨太郎は、ニタニタしながら、夫人の頬へ触れる。夫人は、激しい身悶えと一緒に首をねじ曲げるようにして唇を触れさせて行く。

千代は、悪戯っぽく笑うとカメラを持ってそんな夫人の傍へ近づくのだ。

「ホホホ、今日は奥様のフレンチキスを、しっかりカメラに収めさせて頂くわ」

静子夫人は、春太郎の淫靡な攻撃を今はすっかり甘受し、苦痛と官能の火花の間を漂いながら、むせ返るように熱い柔媚な口吻を捨太郎に注ぐのだった。

「ねえ、こんなに、こんなに静子、あなたを愛しているのよ」

夫人は、しっとり濡れた舌の先で熱気を帯びた……幾度となく……し、美しく緊まった

高貴な鼻先を甘えかかるように摺りつける。

捨太郎は全身が痺れたようにポカンとした表情になって、夫人の両頬を軽く手で押さええているだけだった。

「ホホホ、随分とお上手になったわね」

と、千代は浮き立つような思いになって、色々な角度より、熱演する夫人をカメラに写していたが、

「捨太郎さんも、こんなに素直になった奥様に御褒美として、今日は、うんと御馳走してあげて頂戴ね」

と、金歯をむき出して笑い出すのだった。

静子夫人は、うっとり眼を閉ざしたまま熱い鼻息と一緒に唇と舌とを押しつけていたが、鬼源に催促されると、びったり吸いつけた唇を静かに押し開いていく。

その時、春太郎が「やっと、目標に達したわ」と仕上げた仕事を見物人達に得意になって示し始めた。それは信じられない程に、ひっそりと羞しげに息づいている。

「まあ、ほんと。よくがんばったわね」

千代は和枝達と一緒に凝視し、驚嘆し合ったが、静子夫人は、もうそんな騒ぎには無関係に、甘い切なげな鼻息を洩らしつつけるだけであった。





生あるならば、いかなる石部金吉氏といえども、心浮きたつ思いはするであろう春風。桜の花に誘われて、その美しさを賞でる時、私はつい、自分の筆で咲かせた紙面の花を思い出してしまふのです。

「わが手で咲かした花」……もちろん、これは絵として欠点だらけのものであることは、残念ながら全面的に認めざるを得ません。しかし、モデルも時間もない私の咲かしたこの花には、私だけに通じる美と、何よりも深い愛着があるのです。とても誇らし気に咲き盛る桜の花などの及ぶところではない、特別な「美」を私に感じさせてくれるのです。

どんなものでも、ただ観るといふことは簡

## 告白

# ケント紙の彼女

文及カット 葉月由紀夫

単なことです。そしてそれを観流してしまうことも、批評することも、ごくたやすいことなのです。ただ自分の好みと、自分の受感に従うだけでいいのですから。

「プレイ」……これまた簡単なことです。実在のものに、実在の縄を以て、自分だけの感じる「上塗りされた美」を得るだけで満足なのでしようから。

しかし、これをそのまま写真にしてみたらどうだろうか。おそらく、自分が感じとった「美」を第三者にそのまま伝えることは至難事に近いことだろうと思うのです。主観と客観の違いでしょう。

女性とは、マカ不思議な生物だと思いますが、私だけの感じでしうか。美しいものとされている「女体」も、ただ立っているなり横たわっているだけでは、私としては「そ

こにただブヨブヨした白い肉の塊りがあるに過ぎない」感じなのです。そして、その顔がとり澄ましていようものなら、私の受感はいちじるしく反撥してしまいます。

「どう？ 美しいでしょう。男たちは、わたしのこのハダカを見ただけでマイツチャウのよ。あんたもそうでしょう」……といわんばかりの高慢チキな顔付に見えてしまふのを、どうしようもないのです。

「ただ、男性のもち合せていない豊かな曲線を生まれながらにして与えられているというだけではないか」……私の反撥は、そういうリクツを見つけ出していきます。

だが、その彼女が、たった五十センチか、一メートルの縄で、両手を後に縛られるだけで、たちまちにしてその反撥は霧散してしまいます。なりゆきの体を誇示されることに、



憎悪に似た「美感拒否」をかき立てられていた気持が、ダラシなくも一瞬にして百八十度転換をしてしまい、「見ただけでマイッチャウ」仲間入りをすることになるのです。

だが、私は「ダラシなく」豹変するのではなく、たったそれだけの縛りだけで、私の感じ得る「美」が現出するからだと思っています。たとえその顔付きが、縛られるまえの、あの「わたし、ハダカには馴れているのよ」といわんばかりの高慢チキそのままに、「わたし、縛られるのは馴れているのよ」というのであっても、その「上塗りされた美」を姿態の上で感じとってマイッチャウのです。

同じ女体から受ける美感が、たった一メートルの縄一本で、こんなにまで左右されて私の心を変えてしまうことに、私自身が不思議な気持になりますが、どうしようもないことなのです。

元来「縛り」とか「責め」とかは、残酷な手段として、アメリカにおんぶしてのものであれ、平和国家日本にはそぐわない行為とされていきます。けれども「縛られた女体」に美を感じる私は、この現代に生き、この現代に人生の悦びを得たいと思うがため、時代に合流出来るプレイをしたいと念願しています。

島国日本は、何かにつけてスケールが小さく、因習にとらわれ過ぎるということをよく聞きます。事実、そのように思います。とくにSMプレイ、SM小説に、その封建性がいちじるしく現われているようです。そのほうが恰好がつき易いからでしょうか。しかし私は、陰湿すぎるように思います。貴誌から例をとれば「読むためのシナリオ・お静、及お長受縛譜」などには「酷」を感じ「醜」を覚えた……といえは失礼ですが、正直なところ私にはヘキエキ以外の何者でもなかったのです。同じ「女体緊縛」でも、私のそれとは大変に違うようです。

私は「縛り」から、「残酷」とか「残虐」のイメージを捨てられないものかと思い、そうしたいと願います。「責め」とか「残虐」だけが、SMの世界とは思えません。

一人二役で、密室の中での独りプレイなら別ですが。プレイは一人では出来ません。少くとも、S役とM役の二人は必要でしょう。その二人が楽しく過ごせる縛りプレイが明るい雰囲気で行われることは決して不可能なことではないでしょう。現在でも、恵まれたご夫婦や、気の合ったカップルでも実行されていられるようですが、割りきっての朗らかな

気分でのプレイの場には、形は同じでも、じめじめした陰湿さや残酷さはないのではないのでしょうか。

「あなたの婚約者の方、車の運転がとても好きだそうね。素敵だわ」

「あなたのご主人、ゴルフはプロ級ですってね。お羨しいわ」

というような会話がされるように、「車の運転」や「ゴルフ」を「縛り」に置きかえて話しが出来る……などはちょっとオーバーなことですが、そのくらいの気分になれるプレイの持ち方というのを、私はなんとか出来るような気がするのです。

同じ性本能につながることで、ずいぶん開放的になった「セックス」という言葉を、まだ素直に口に出し難い人であっても「キッス」となると割合に気易いというようです。そして、体は許さないが、キスぐらいなら大したことはないというような風潮にあるらしい現代です。

私は、プレイまでは許せないが、縛るだけぐらいなら……という程度のことは、その女性の考え方次第ですが、ごく近い将来に実現しそうな気がします。そんな気分になれるような、明るく朗らかなイメージを持てる「縛



り”は望めないものでしょうか。

自分ながら拙劣と思い、なっていないとは認めながらも、僅かな時間に描いた「女体美」の絵を前にして「おれは他人に観賞して貰って感心させるつもりで描いているんじゃないんだ。おれの一番好きな女体美を求めるためのイメージ創りなんだ」……と私自身を慰めるリクツを考え出します。

そして、その一枚を眺めつづけている内には、そこに縛られた女性が朗らかに笑いかけってくる夢幻が呼び出せるようなのです。

ケント紙から抜け出して来た彼女は、見違える程の美女で、艶やかな柔肌を誇るグラマ―で、しかも縛られるということに少しも変

## 女性写真モデル募集

### 分譲写真撮影のため

奮て御応募下さい

○本誌では、代理部分譲品用の写真を撮影するため、女性モデルを募集しています。  
○本誌愛読者の方でしたら、年令、遠近は問いません。分譲品用ですから誌上に発表いたしません。誌上発表可能でしたら尚結構です。又、助手介添え或はプレイのみ出演御希望の方は御照会下さい。

○出演又は参加御希望の方は、年令略歴記

な偏見を持っていません。縛られることに依って、自らの持つ女体美を更に何倍かにすることが出来ると自覚しているのです。

そして彼女は、私に対して、より美しさを発揮出来るプレイを求めるのです。それはもちろんマゾ的な要素はあるのでしょう。しかしその態度は、ちょうど夏の海水浴場でみられるように、沖に浮かぶ浮輪に身を托し大きく奔弄されるまま、浪任せにして青空を眺めて遊ぶ女性のような、ちょっとした不安を楽しむ健康的な態度と変わりないのです。

同じ縛られるにしても、逃げようとする気持を奪うための縛りと、自らの隠れている美を誇示するための縛りとは、気持の上で天と

載の上編集部宛お申込み下されば、報酬その他詳細につき、お返事いたします。

○応募されました方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚お好みの傾向を附記下されば好都合です。

○本誌の内容充実のため、並に皆様の文献研究資料作成のため、奮って御応募御参加下さるよう、お待ちいたします。余暇を利用しての御参加も大いに歓迎いたします。  
○特に妊婦資料の作成に御協力下さる婦人を求めています。撮影可能の方は、遠近に拘らず御一報下さるようお願いいたします。

△奇々編集部▽

地の違いで、縛られる彼女も、コルセットで体の線を整える時のような気分、縄を受けられることでしょう。

「縛られて笑っている」姿を、私は少しも不自然とは思いません。ふくみ笑いしながら虐められている彼女の、朗かにふざけているような身悶えは素晴らしいと思います。

こんな明るい気持のプレイというものは、いわゆるSMマニアには通用しないものでしょうか。一方的にギョウギウと相手を苛責して、苦悶せしめるのでなければSMプレイとはいえないのだったら、私はSMの世界に絶縁します。

そうして、私だけの楽しい「縛り」の世界を創り出したいと思えます。さらりとした美しい「縛り遊び」によって、女性の日頃隠してしまっている「美」の、孤独な探究者……なんて気取るわけではありませんが……となつて、理解ある彼女と共に過ごしたいと希うだけなのです。

その「理解ある彼女」は、残念ながら今のところケント紙上の彼女だけなのです。

「夢」……人間には必要なものです。だが、やはり、絵を描いても、プレイ方法をいくら考えても、夢だけでは寂しいものです。





—スタッフ—

(敬称略)

企画 岡田 茂・天尾完次

脚本 石井輝男・掛札昌裕

監督 石井輝男

緊縛指導 辻村 隆

—登場人物及び主なる出演者—

刺青師 彫秀

彫辰

彫秀恋人 お鈴

刺青女郎 由美

大黒屋 お竜

吉田 輝雄

小池 朝雄

橘 ますみ

片山由美子

(由美てる子)

藤本三重子

緊縛師 弦造

弦造の妹 ゆき

与力 鮫島

彫秀師彫五郎

領事クレイトン

クレイトン娘ハニー

長崎女術 鬼吉

女牢名主

女囚 おとき

お絹

A

B

林 真一郎

尾花 ミキ

田中 春男

矢奈木邦二郎

ユセフオスマン

ハニーレイヌ

芦屋雁之助

賀川 雪絵

牧 淳子

葵 三津子

由利 徹

大泉 滉

C

刺青女郎

A

B

C

D

E

F

A

B

検査役

(製作意図) 大ヒットを続ける性愛路線第

映画カメラ・ハント(東映京都作品)

徳川いれずみ師 責め地獄

## 残酷美の集大成

辻村 隆

人見きよし

木山 佳

三笠れい子

黒田のり子

高木 恵子

美笹 ゆき

英 美枝

若杉 英二

上田吉二郎

清水正二郎

岡田 千代



六弾!! 刺青に命を賭けるか、恋に身を灼くか、復讐に死ぬか——。

多彩な男女の愛憎の激しさと、手に汗にぎる見せ場を描いて、ゴールデンウィークに放つ衝撃大作。

——ものがたり——

磔柱に縛りつけられた五人の女囚。槍を構えた非人が、女囚の股倉から一気に槍を突き上げる。身体を貫通する槍。槍の穂先は女囚の口から突き出る凄絶シーン。(タイトル)

女囚が牛の尻尾に足をくくりつけられる。牛の背に打たれる鞭。猛然と娘をくくりつけた俣、石段を駆け降りる牛。粉碎される頭蓋骨、散乱した四肢——。(タイトル)

首だけ出して土中に埋められた女囚たち。巨大な鋸で、首を左右に挽き始める非人達。恐怖と絶叫! 凄惨な鋸引きで、斬り裂かれた首が、ゴロゴロと地上に転る(タイトル)

× × ×

月光に蒼白く浮かび上った墓石の列の向こうに黒い影ひとつ。月の光をたよりに近寄ってきたのは刺青女郎の由美である。彼女は手にした鋸で、一つの墓石を押し倒した。蒼白い光にてらし出された墓石の銘に弦造という名。墓石の下を掘り起こすと、やがて真新しい

い柩が現われる。その柩をみつめる由美の双眸は妖しく光っていた。憑かれたように柩を打ちくぐると、経帷子の男の姿——。由美は懐剣をとり出すと憎しみをこめて男の腹を引き裂いていった。男の臓腑を掻き乱していたが、掴み出した彼女の手には、一つの鍵が握られていた。

「あった! これだ。この小さい鍵ひとつが私を女でなくしてしまった——」

目を光らせた由美は、震える手で着物の裾をまくり上げ、白い太股のつけ根に深々と冷たく喰い込んでいる金色の貞操帯の鍵穴に、

血にまみれた鍵を差し込んだ。カチンと冷たい響きと共に鍵は折れてしまった。

「ああ、どうすればいいの、どうすれば……」

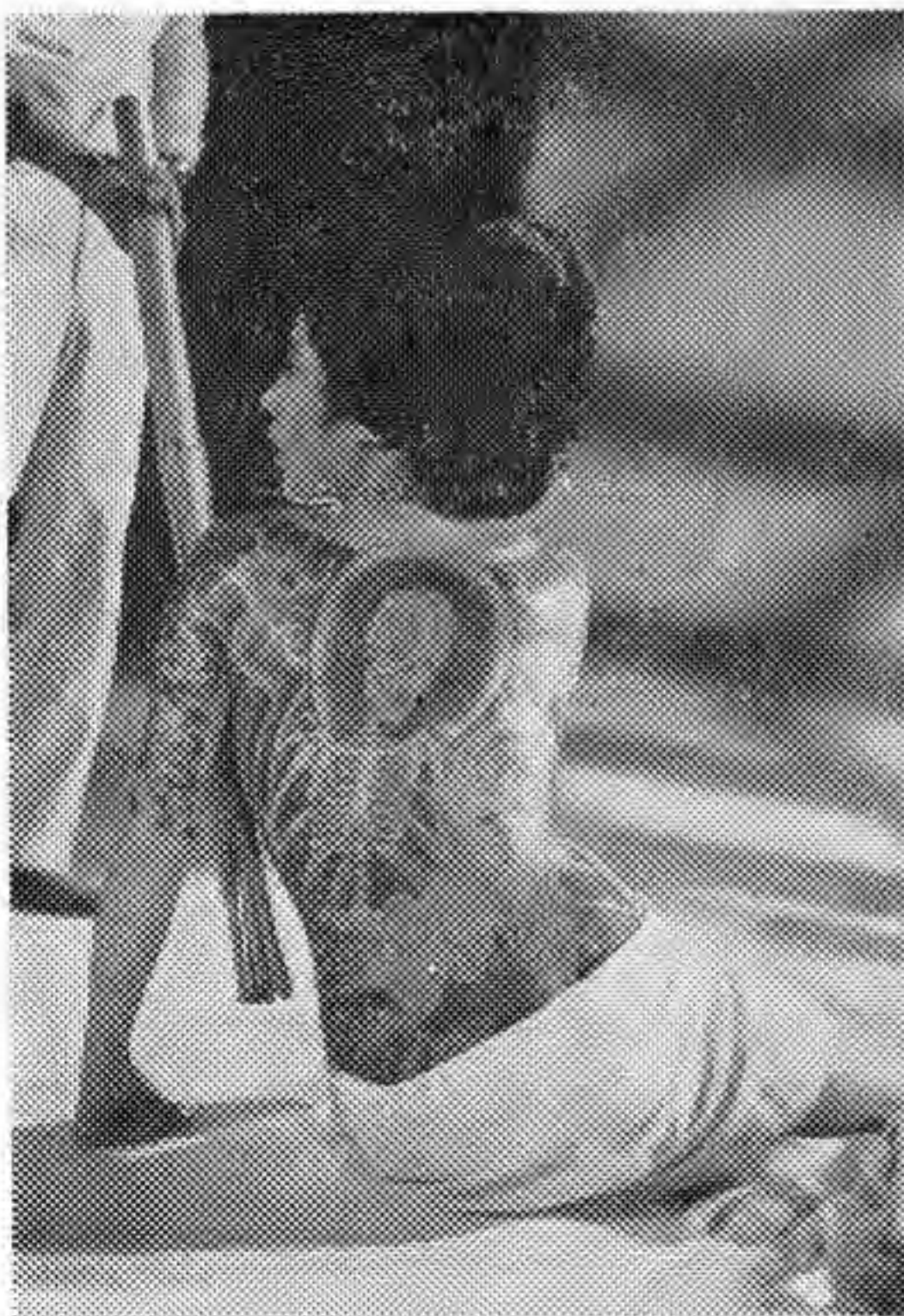
由美は愕然として、

血腥い風の吹き抜ける墓列の前で凝然と佇んでいた。由美の脳裡には、まざまざと在りし日の大黒屋の八角広場の責部屋で、逆さ吊り

にされて、全裸の肌を激しく鞭打つ緊縛師弦造の、あの恐ろしい姿が浮かんでくるのであった。苦悶の叫びをあげてのけぞる由美の身体はコマのように宙天に舞い、豊かな臀部、盛り上る乳房が万華鏡の様に、天井も床も硝子張りの、この責部屋でぐるぐると回転していた。

由美の連想は、ぐるぐる廻る逆吊りの我が身から、おもちゃの風車の内職に精を出す我が身へと回想の糸は遡って行く。

ぐるぐる廻る風車の中で、内職に励む由美の傍らに、弟の新吉が病いで臥していた。







貧乏長屋の表の戸が開いて与力の鮫島と金貸しの手先権十がヌーツと入ってくる。貸した金のとりたてであった。類型的な「返せ」「待って下さい」のやりとりのあと、権十は与力の鮫島に、由美を巧みに引渡してしまった。借金のかたで、由美は与力鮫島の口ききで、大黒屋に奉公させられることになったのである。ここでの勤めは果たして何をするのだろうか？ いぶかる由美に、鮫島はその部屋の一角にある戸棚の戸を引き、覗き戸から隣室を覗かせたのであった。垣間みた由美は愕然として覗き戸から身を引いた。その部屋に展開されていたのは、両腕を縛られて坐禅ころがしをさせられた若い娘の背後から、身分ありげな武士が、娘を犯そうとしている光景であったのだった。鮫島の顔は残忍に歪ん

だ。この娘は未だ男を知らない。いずれ誰かに散らされる花と、由美を引寄せた。その手を掻いくぐって部屋を飛出して逃げ出したが廊下はどこも堅く両戸が閉ざされ、うろうろ逃げまどった彼女は、鮫島に追いつめられてとある一室に逃げ込んだのであった。

その部屋は刺青女郎の溜り場であった。十二、三人の女達が、或いは双肌ぬぎで化粧し或る女は全裸で身体を揉ませていた。飛び込んできた由美に、さっと女達の視線が集中していった。女達は由美をとり巻くと、よき獲物とばかり、寄ってたかっていびり始め、果ては、逃げまどう由美の着物を剥ぎとって、裸にむいてしまうのであった。若い女達のムンムンする体臭と、妖艶な刺青が撩乱と咲き乱れ、乱舞する光景を、階上の床をえぐった

覗き穴から、探奇の客が押しあいへしあいして、この滅多にみられないハプニングなシーンを覗いているのであった。

別室の大黒屋女主人お竜の部屋では与力鮫島に多額の礼金が手渡されていた。すべてはこの惨忍な与力鮫

島のたくらみで、わざと女達のたむろする部屋へと追い込んだのであった。

女達によって裸にむかれた由美は、なぶりものにされていた。女主人お竜が入ってきて一喝すると、女達はさっと四散する。お竜は由美の髪を掴んでぐいと顔を上向かせ、そのみつめる眼に異様な光が漂ってきた。お竜はこの由美をレスボスの対象にしようと考えていたのである。彼女は恐るべきサジスチックなレスビアンであった。

この世にも怖ろしい大黒屋の八角の責部屋で、由美への責めは続いた。くるくる廻る逆さ吊りの由美に、嗜虐の悦楽を泛かべて激しく鞭を振るう緊縛師弦造——。そのありさまを、天井と地底のガラスばりの部屋から、好奇の眼の客や女達が、回転する由美の四肢を振り仰ぎ、見下ろしていた。

やっと許されて、ふらつく足どりで風呂場に入って来た由美を、女主人お竜が待っていた。彼女は優しく由美の体をまさぐり、女同志のひめごとに濡れてゆく。激しい息づかいで由美を抱き、妖しい愛撫をつづけるお竜の清熱に、由美は拒みながらもいつしか巻き込まれて濡れていった。

×

×

×



白い柔肌に突き刺さる針。ウーッと苦悶の呻きをあげながら由美の裸身はくねる。彼女の肌に針を打ち込んでいる刺青師は江戸一番といわれた、彫五郎の愛弟子の彫秀である。彫も冥加に尽きる素晴らしい柔肌だと、彼はまるで憑かれた様に彫り続けていた。汚されてゆく白磁の肌の激痛に由美はのたうち、涙の眼はかすんでゆく。

将軍上覧の刺青大会で、この由美の刺青が一位になれば師匠の二代目は約されていた。と、共に師匠の娘お鈴との二人の仲も許されるのであった。兄弟子の彫辰が、お鈴に恋慕し、病いの床に臥す彫五郎をうるさく攻めていたため、苦しまぎれの逃口上で、上覧一位の者にやると、お鈴の父の彫五郎は約束をしたのであった。

お鈴は悲しかった。彫五郎にしても、昔から育てた彫辰だけに無下に断れなかった。御前試合で勝負をつけなくても、どちらに軍配が上るか、彫五郎の心には判っきり分っているものであった。彫辰の刺青はすさまじい殺気が籠っていたが、例えば陰であった。清らかな品格のある彫秀のほりものは陽性であった。

父と娘のこの会話を、彫辰はじっと部屋の

外で立聞きしていた。彫秀には意地でも負けられねえと、彼の頬に歪んだ不気味な笑いが浮かび上るのであった。

土蔵の中では、そうしたいきさつを回想しながら彫秀は懸命に由美を彫り続けていた。彼は祈りをこめるように一針、一針、旦念にスミをさしてゆく。お竜が茶道具をもって入って来ても、仕事の邪魔だとばかり、出ていってくれという不機嫌さであった。既にこの薄暗い蔵の中で、何カ月か経過してゆくうちに、由美の心に微妙な変化が現われ始めていた。この刺青に憑かれたような男に、彼女はいつしか肌に針をまかせることに喜びすら感じるようになっていたのであった。



この狂気じみた彫秀の様子を、お竜と弦造は噂していた。世間では師匠以上といわれる彫秀に、由美がいつしか惹かれていることを彼女は敏感に感じとった。お竜にとって、由美は激しいレスボスの対象の愛しい娘なのであった。弦造から、彫秀にはきまった惚れた娘のあることをきかされても、割り切れぬ気持で、お竜は、やけにキセルを叩いた。その時、いきなり襖が開くと、鮫島の白い顔が覗いた。又しても悪辣なことを考えているらしい。この話がまとまれば女はいくらいても足りなくなるぞと、鮫島の気味悪い笑いに、お竜の目は獲物を狙う女豹のようにキラリと光った。

鮫島は領事のクレイトンを案内してくると床の秘密の覗き窓より彼に階下をみせた。そこでは弦造が鞭をふるって、女達を追い込んできたところであった。彼の鞭に責め立てられて、女達の衣服は剥がれてゆき、ありありと妖しい、さまざまな女の刺青が責められる体へのたうっていた。領事クレイトンにとって、このボディペッティングは面白かった。高価を承知で女達の売買は成立した。鮫島とお竜の二人に会心の笑みが漂っていた。

× × ×



与力鮫島は、女牢を見廻っていた。取調べにかこつけて、女牢名主を引き出すと、調べ室で二人きりの密談がつづく。職権を嵩にきて鮫島は牢名主を脅迫して、数名の女を連れ出して破牢する事を煽動した。

八番、十番、廿四番と鮫島が、めぼしい女を読み上げた。その番号の女達が、牢名主を囲んでいた。今、女牢名主から破牢の密談を持ちかけられたのであった。選に洩れた女達が騒ぎ出さないよう、味噌汁桶にタップリと白い粉薬を放り込む様お絹という女が命じられた。ひとり年かさの、おときという女だけが、破牢の密談をひそかに感じていた。

女囚達に食事が配られる。牢名主に選ばれた女達は右側——。選に洩れた女達は左側に並んでいる。お絹は左側の汁桶に、粉薬を放り込むが誰も気付かない。がつがつ喰べ始めた女達の中で、ひとり、おときだけは手をつけなかった。選ばれた女達が顔を見合わせるなかで、牢名主は、おときに食べない理由をきいたが、生憎の腹下しという言葉に、牢名主の眼は冷たく光った。

その深夜——、折重なるようにして、いぎたなく寝込んでいる女囚達。牢名主が半身を起こすと、待ち兼ねたように、次々と身を起こ

こす選ばれた女囚達。

眠り薬をのまなかった、おときは、恐怖に臉を震わせて眠りを装おったが女囚達の手がおときの体をがちりと押え込み、彼女の口が手拭によって塞がれて行く。別の一人が濡手拭を鼻にのせる。ピクピク動いていた鼻孔の濡手拭は、やがて反応を止めて静止した。合鍵がさし込まれ、息をのむ女囚達は、やがて開いた牢の錠前を外すと、次々と、シーンと更けた牢獄の道をかけぬけていった。

その頃——大黒屋の蔵の中では、彫秀がついに由美の体に、入魂の刺青を彫り上げ終つ

た。彼にとって、この出来栄を見せるのは將軍への上覧しかなかった。彫秀の目の動き息使い一つで、仕事の進み具合まで判るようになっていた由美は、全裸の白い肌をじっと沈め独り湯につかっていた。彫秀は傍らで由美の上るのを待ちかねていた。彫秀の促す声に彼女はすつと立ち上る。薄桃色に上気した由美の肌に、白粉彫りの見事な彫物が浮かび上っていた。彼は感にたえぬように、由美の体に手をかけると、右に左にと、ためつすがめつ、この素晴らしい彫りものを観察していた。彼にとって、もう将来もこれ以上のものは二度と再び彫れぬかも知れなかった。しかし由美は悲しかった。彼ともう会えないということと、刺青を彫る材料としてしか自分を見ない彼が恨めしかった。針が肌に喰いこむことすら嬉しく、二人きりでいるのが楽しかったのだ。由美は彼に裸身をたたきつけるようにして縋りつくと、



は二度と再び彫れぬかも知れなかった。しかし由美は悲しかった。彼ともう会えないということと、刺青を彫る材料としてしか自分を見ない彼が恨めしかった。針が肌に喰いこむことすら嬉しく、二人きりでいるのが楽しかったのだ。由美は彼に裸身をたたきつけるようにして縋りつくと、





一緒に逃げてくれと懇願するのであった。

その時、浴槽の戸がガラリと開き、蛇のような冷たい眼のお竜が、ジロリと二人をにらんだ。もう見せてもらっていいんだろといいながら、お竜の妖しく光る眸が、なめずるように由美の裸身を這っていった。恐れと絶望が由美の心を凍えさせてゆく。

激しく唸るムチ——。床を駆け廻る由美。お竜は今、わが部屋で狂ったように鞭を振って由美を責めさいなんでいた。それは由美の心に忍び込んだ男のイメージをとことんまで叩き出してしまいたかったからであった。由美に対して倒錯した愛情が、嗜虐となって現われ、尚ものけぞる由美にお竜の鞭が容赦なく飛び交った。遂に由美は抵抗を失い、その

場にぐったりと失神してしまった。

お竜はギヤマンのグラスから赤い酒を口に含むと、由美をかかえ起こし、二人の唇がびったりと吸いついて、口移しの甘い酒が由美ののどの奥に流れ込んでいった。うつろな瞳を開く由美の瞼の底に、ぼーっとお竜の顔がかすんでいた。

どの位の刻が流れたのか？ フト気がついた由美は華やかな絹布団の上に横たわり、傍らに全裸のお竜が添い寝していた。妖しい愛咬の秘戯をつくして、お竜の体がのしかかってくる。

「いくらキラってもダメ。今にお前は私の愛撫なしでは一日も一刻もいられないようになる。今迄の私の可愛がった女達がみんなそうだった」

だった」

魔女は自信に満ちた哄笑をあげて、いきなりかぶりつくように、由美の乳房に歯を立てた。のけぞる由美の太股に、お竜のくねる白指がじわじわと這っていった。

昼も夜も、密室での

狂ったような女同志の愛撫の強要がつづいていた。

そして或る日、お竜は全裸の由美を床柱に鎖手錠でくくりつけて、珍しく由美一人切りにして何処かへ出ていった。

閉じられた雨戸のこぼれ日が、薄暗いお竜の部屋に、鋭い縞模様を描いていた。

のっそりと弦造が入ってくると、なぐさめる様な口吻の下から、野獣の本性が剥き出しにされてくる。ガバといきなり挑みかかられ鎖手錠で自由の利かぬ由美は、果敢ない抵抗をつづけたが、緊縛師弦造の体が由美におおに蔽さっていった。苦痛の叫びが洩れ、歯を喰い縛って、由美はのけぞった。あえなくも花の蕾は無慚に踏みにじられ、由美の頬に涙が尾を曳いて流れた。

外出したと思っていたお竜が、いきなり襖を開いて、この様相をみた。彼女の大切な宝物を、男の獣性で蹂躪された怒りに、お竜は狂ったような目で弦造を睨みつけた。由美から飛び離れて、平伏して詫びる弦造に、お竜の残忍な笑いが不気味に頭上で響いた。この復讐は、弦造の一番大切なものでお返しするよといったお竜の言葉通り、弦造の妹ゆきが海老吊りにされて土蔵の中で喘いでいた。



蔵の片隅には、縛られた弦造と由美が背中合せに蠢いていた。

お竜は手にした燭台の尖端で、ゆきの白い肌をズタズタに傷つけて裂いていった。乳房の谷間を流れる鮮血——。苦悶にのたうち乍ら、ゆきは吊られて悲しく絶叫した。兄の弦造は、妹の代りに自分が仕置をうけるからと懇願するがききいれぬお竜は、益々残忍になつていった。二度と兄貴のこの浅ましい姿を見なくて済むようにしてやるよと、お竜は宙に浮いたゆきの顔を抱えると、燭台を近づけた。お竜の真意を知った弦造は愕然として、必死に哀願するのだった。

「フフ、いつも女達を平気な顔で責めているくせに、随分みっともない声を出すんだね」

「そ、そんな男に俺を仕立てたのは誰だッ、死んだお前の亭主じゃねえかッ」

「首吊り寸前の処を助けて貰って妹まで一緒に養ってくれた大恩人のね」

「畜生ッ、人でなしッ」

パツとはきかけた唾を平手で拭ったお竜。悪女の不気味な笑いをすつと消すと、燭台をさつとゆきの片目に突立てて引き抜いた。噴き上る鮮血——。返す手で更にもう一眼——両眼から噴き出る血潮。

弦造は号泣して、凭れていた長持に自分の頭をぐつぐつと叩きつけていた。恐怖の余り失神寸前の由美は、うつろな瞳で、この眼を蔽う凄惨きわまるリンチの有様をみつめていた。その由美に向かって、

「私に逆う者は皆こうなるのよ。由美、お前も一生男に触れられないようにしてやるよ」

お竜は黄金製の貞操帯をとり上げると、縛られた僂逃げまどう由美を壁際に追いつめ、そのむき出しの下腹部に硬い金属の金具をしつかりと締め込んだのであった。貞操帯の中心にある鍵穴に鍵をさし込むと、カチリと錠の落ちる音——。お竜の狂ったような嗜虐の哄笑。

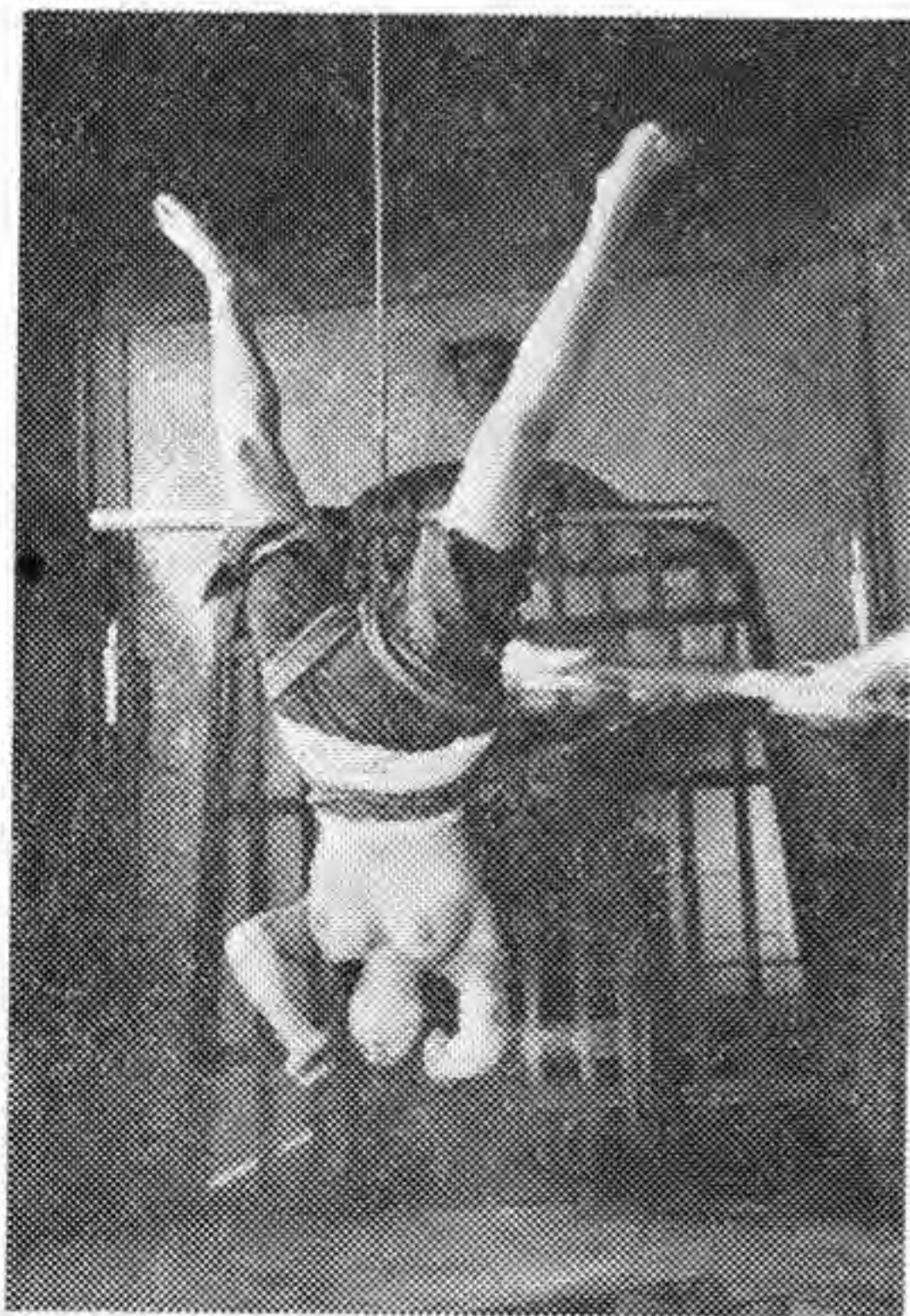
「フフフ、男だけじゃない、例え女でも、お前の一番大切な処には触れられないんだよ。この鍵を開けない以上もうお前は女じゃない……女のシルシはもう使えないんだよ」

由美の顔の前で、鍵を振り、凄絶に笑うお

竜に、矢庭に弦造は体当りをくれた。あつとよろめいて倒れ鍵が床にカチンと落ちる。その鍵目掛けて、ガブと口で飛びつこうとする弦造——。そうはさせじと手を伸ばしたお竜の指先に弦造の歯が喰い込む。あつと痛みにたじろいた隙に、弦造の口が床を這って、鍵をくわえると、ゴクリとのみ込んでしまう。一瞬の出来事であった。

「フフフ、ざまあみろ。手前もこれで、由美の最後のものを愛したりは出来ないんだ。ハハハ」

弦造は虚ろに錯乱した声で笑った。怒り狂





ったお竜は、縛られた弦造を燭台で滅多矢鱈に叩きのめし、突きまくって、遂に兄妹二人をいけにえにしてしまったのであった。

× × ×

その夜、お竜の部屋に来た鮫島に、彼女は善後策を相談していた。病死ということ、立派に葬式さえ出せば、墓をほじくりかえしたりしない以上闇から闇さ、と万事引受けた鮫島は、集めた女囚の刺青について、刺青師の手配を案じていた。江戸で目ぼしい刺青師は、明日の晩あらかた集るように、この凄女お竜はちゃんと整えていた。



脱走した女囚たちは、大黒屋の座敷牢へ軟禁されていた。鮫島の顔を見て彼女達は口々に挨拶をする。その牢名主の二の腕を鮫島はぐいとまくり上げた。手首に前科のいれずみ——。女囚のそれぞれに、各藩のものと分るいれずみが施されてあった。この刺青を消すために、前科のしるしにかぶせて、軀一杯のいれずみを彫れとすすめる鮫島であった。単純な女達は彼のその刺青を好意にとって喜びあっていた。ほくそ笑むのはお竜と鮫島の二人であった。

奥の間で、牢名主が彫られている。

つづいて、お絹が彫られている。

更に、とめが彫られている——。次々と破牢した女囚の軀一杯に、意表をつくような奇妙な刺青が出来上って行く——。

離れの一室では彫辰が女を彫っている。彼にとって、どの女も不足であったようだ。將軍の上覧では、彫辰はどうしても負けられなかった。お鈴

が賭かっているからである。彼はお竜の肌を請うた。両手をついて頼む彫辰に、お竜は自分よりもっと気に入って貰える女を世話しようというのであった。

その頃、彫五郎の家では彫秀とお鈴が、気に入った肌の見つからぬ彫辰の、噂をしていた。お鈴は彫秀の勝つ事を信じていた。

江戸城——。城門へと大勢の刺青師が入ってゆく。広場に張りめぐらされた幔幕。ここで將軍上覧の刺青競演会が間もなく始まるうとしている。大らかに打ちならす太鼓の音と共に、刺青の妍は競われた。控えの間から次々に現われる趣向を凝らした刺青の女の群。競技は進んで、最後に彫秀と彫辰が残った。

検査役の声で、

「次、彫辰作になる水門破り」

という呼声と共に、由美が広場の中央へ進み出た。上半身を露わにする由美。その胸から首にかけて、作、彫辰と刻みこまれた水門破りの鮮かな刺青——。愕然として息をのむ彫秀、せせら笑う彫辰。折角、練り抜いた彫ものを汚されたかと、彫秀と由美の視線が、激しく交叉して火花を散らした。由美は彼の針をうけてから、妙に血が騒いでならなかった。それを見透すかのように、お竜は彫辰が



自分の肌を求めた日、由美の両手足を縛って彼女の肌を彫辰に見せたのである。彫りものの上に、更に又異った彫りものをほらせようとするとお竜の心は、残忍さに燃えていた。彫辰の射るような眼が、由美の肌を凝視した。凝視する彫秀の夢を破るように、検査役の声が流れる。

「次、彫秀作、吉祥天女」

しかし、もう控えの女たちは誰もいない。いぶかる検査役に、彫秀は由美に視線を送って、進み出た。一人の女に二人の刺青師が彫り上げるという、世にも奇怪な出来事に、一同は固唾をのんだ。一杯の盃をあてがわれた由美は、なみなみと注いだ酒を一気にのみほした。ほんのりと桜色に染まる由美の背に次第に浮き上ってくる吉祥天女の白粉彫り。場内はどっとどよめく。口惜しげな彫辰の顔にもつれて、由美の白い肌で、激しい葛藤を演じている水門破りと吉祥天女――。

綱吉將軍のお声がかかりで、この勝負に引分けの合図の扇子が投げられた。虚空をみつめて呆然と立ちつくしている由美を挟んで、彫辰と彫秀の視線が火花をちらしてぶつかり合っていた。

×

×

×



奇怪な噂が噂をよんで、大黒屋には名ある覆面の武士が、ひっきりなしに門を潜り始めた。由美を刺青大会に出したのがマンマと成功したのであった。

その由美は今日も、快楽の責め部屋で裸身を逆吊りされてコマの様に廻っていた。緊縛

師が人間独楽を廻すように鞭を振っている。広間の下からそれを見上げる重臣たち――広間の上から俯瞰して悦にいる客の目、目。

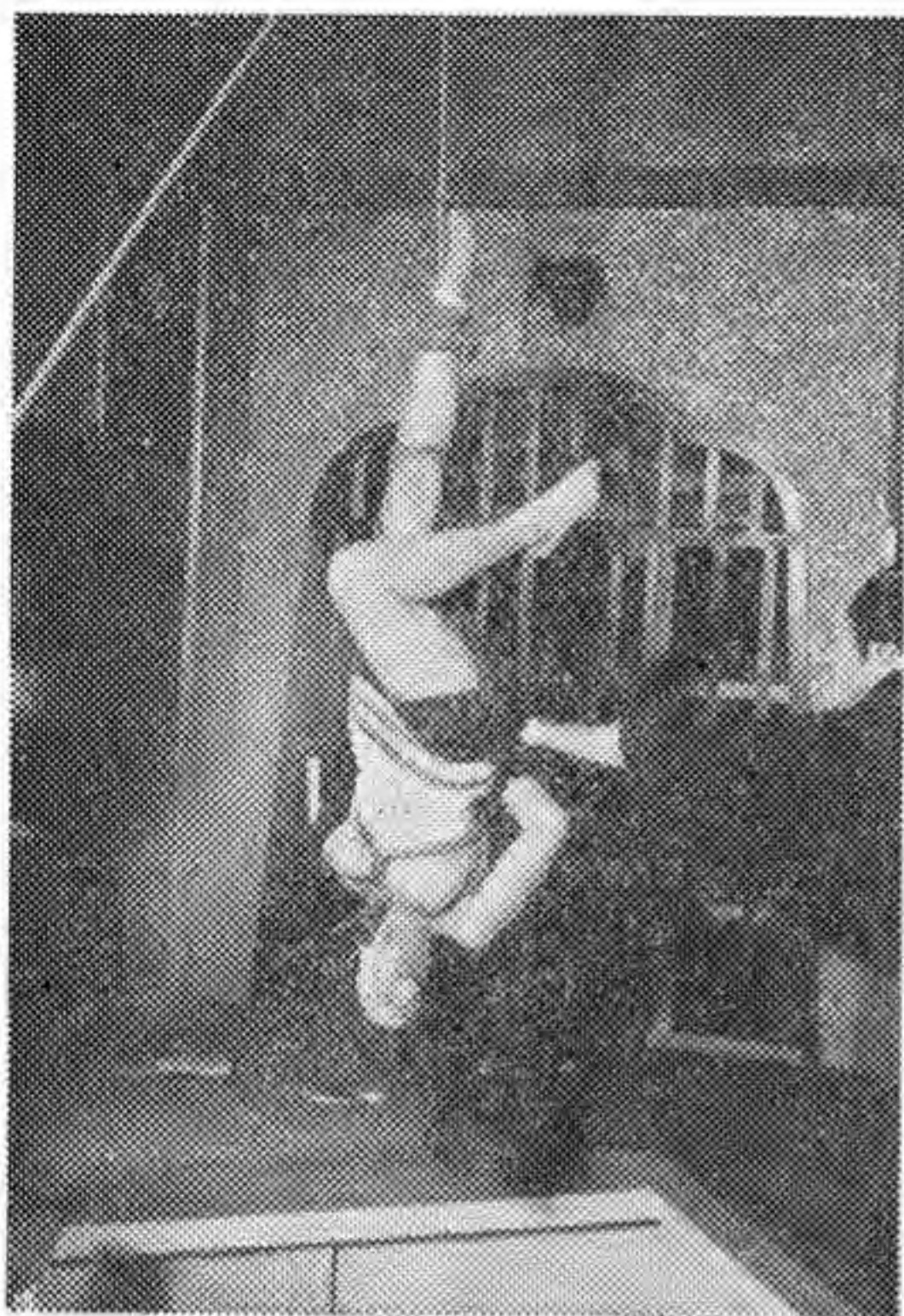
逆吊りの由美の顔は、絶望の激しい苦痛に歪み、悲鳴と絶叫が部屋の空気を掻き乱してゆく。由美は心ならずも弦造の子種を宿して孕んでいたのであった。

それを知ってお竜の憤りは更に燃え上っていた。蔵の中で吊られた由美はお竜に責め立てられていた。由美の股に深々と喰い込む貞操帯。泣こうが喚こうが、弦造によって飲みこまれた鍵のない限り、外れることはなかった。絶対絶命、口からでも出さない限り、子供はうまれて出てこないさと、お竜はののしり猛り狂うのだった。己れの猥らな情念の捌け口を失って、お竜は荒れに荒れていた。

失神した由美に意識が戻ってくる。腹部に伝わる胎内の芽ばえに、たとえ父親がどのような男であったにしても、母性本能の発露から、由美はその幼い命を守ろうと決心したのであった――。

今、月光に蒼白く浮き上った墓石の列の中で、折れた鍵を手にして、由美は呆然と絶望に身をさいなまれながら立ちつくしていた。鯨島の手配で、与力に指揮された捕手たち





が、ひしひしと由美をとりかこみ始めた。

礫柱にくくりつけられた由美が、小舟で溪流を下ってゆく。

——これでいいのだ。毎日の地獄の責苦の中で、苦しみ喘いでいた可愛い命……それを思えばこそ、神をも恐れぬ所業をしてしまった私——。

小舟は夕暮れの湖水に出ると、由美のくくりつけられた礫柱が、湖水に浮かべられる。柱の周囲に大量の油が投げこまれ、それが夕陽に反映して照り輝いている。たいまつが油に点火される。めらめらと燃え上る湖面が、

急激に紅蓮の炎の中に包まれてゆく。

もうすぐ総ての苦しみから解放されて、由美は永遠の母の俤消えてゆくことだろう。彼女の表情から、驚愕も恐怖もすべて消え、諦観の祈るようなまなざしが清らかに濡れていた。波しぶきを浴び乍ら、全身を炎で灼かれてゆく由美の姿は、やがて湖水に沈み、夕景の湖面は、つきることなく燃え続けていた。

× × ×

絶海の孤島——、その断崖で、彫秀は海を睨んで、じっと立っていた。その腕に前科の刺青が彫られてあった。

彫五郎師匠を殺したという冤罪！これを仕組んだ奴等に彼はどうしても復讐したかった。島を脱け出すより仕方なかった。

すべては悪辣きわまらない鯨島の仕組んだことであつた。彫五郎を刺青針でさし殺し、傍らに果然と立ちすくむ彫辰に、悪魔の囁きを投げかける悪与力であつた。

鯨島は長崎の領事クレイトンの要請で、今数多の刺青女を船にのせて、一路長崎へと船旅をつづけていた。

鯨島、お竜、彫辰、刺青女郎、刺青女囚、そして最後に、甘言で欺されたお鈴が乗込んでいた。

その船の中の一室で、半裸になったお鈴の肌に、彫辰の針がさし込まれていた。苦悶の表情で、憎悪に燃えて彫辰をにらむお鈴。その眼を避けるようにして、彼は一心に彫りつづけていた。お鈴にとって恋しい彫秀に彫って貰えたらどんなに嬉しかったであろう——

彫秀が無実でひかれて行く時、そっと手渡したカタミの品をしっかりと握りしめて、お鈴は涙ぐんでいた。彫秀以外の男に肌を見られ刺青で汚されてゆくのが、純情なお鈴にとっては悲しいことであつた。

その時、甲板の方から激しい物音が響いてきた。

車座になって酒をのんでいた刺青女囚たちを、バラバラと刺青女郎たちがとりかこむ。女囚と女郎のむきだしの敵愾心が、やがて凄まじい大乱斗を甲板上に展開する。あわてて乱斗の中へ割って入る鯨島とお竜。彼等達にとっては、執れもが商品なのであつた。騒ぎ



が納まって女達が引揚げたあとに、唯一人ポツンと盲目のゆきが、見えぬ大海原をみつめて坐っていた。

領事館の一室で、妖しいまでに照り映えるステインドグラスの下で、彫辰の針がお鈴の肌につきささっていった。完成の暁には、お鈴を自分のものにする約束が、お竜との間に交されているだけに、彫辰の眼は血走っていた。

領事館の広間では、黒人緊縛師の鉄鎖をつかった凄まじい責めに、ゆきが絶叫し苦悶にのたうっていた。それを見守る異国人の探奇



の目、目——と湧き上る拍手。

クレイトンの部屋の地球儀の要所要所に、彼の投げた矢が突きささる、香港、マカオ、ポルトガル：etc.

日本の刺青女性の注文が殺到しているときかされて、テーブルに坐る鮫島とお竜の眼が輝く。クレイトンの本国では、ハレムにおくバージンの刺青女を求めていると、きかされ期せずして二人の心にお鈴の姿が浮かび上るのであった。

全身傷だらけの盲目のゆきを、お鈴は優しく介抱していた。お互いに薄倅同志。お鈴はゆきを慰めることで精一杯であった。

領事館の地下牢に刺青女たちが監禁されていた。異国人に売られることを知って女達は激昂し、数名の部下を連れて入ってきたクレイトンをのしり、牢名主は彼にパツと唾をはきかけた。冷酷に嘲笑したこの外人は、合図すると、傍らの壁の紐をひく。壁が上り、現われたのはみるも恐ろし

い西洋拷問器具のかずかず——。引き出された牢名主、とめ、きぬの三人に、阿鼻叫喚の拷問ショーが開始された。悲鳴と絶叫の中でクレイトンはじつと興深げに、このショーをひやかなまなざしで見守っていたが、やがて次々犯し始める。

お竜と鮫島は、クレイトンにお鈴を差出すべく、しきりに密談をこらしている。一生懸命彫り上げたお鈴が、異国人のいけにえにされることを、物蔭できいていた彫辰は唇をかみしめ、悔痕と共に激しい怒りの色が浮かんできた。どうせ犯されるお鈴なら、わが手だと、仕事場に引き返した彼は、お鈴に激しく挑みかかって行く。彼等の魂胆を知った以上生娘のお鈴をムザムザと渡したくなかったからであった。逃がれようとするお鈴。執拗に挑む彫辰——。折しもガラリと戸が開いて、入ってきた鮫島とお竜、続いてクレイトン。鮫島の剣が、じりじりと彫辰に迫ってゆく。彫辰の告白で、父の彫五郎を殺したのが鮫島であることをお鈴は始めて知った。

剣の尖端がのど首にあてられ、彫辰はじりじりと壁に押しつけられてゆく。お竜の手に麻薬を仕込んだ注射針が握られ、彼女は彫辰の腕をぐいとまくり上げた。プスリと今度は



彫辰が二の腕に針をさされる番であった。毒婦と残忍な与力はニヤリと顔を見合せて笑った。

三人が彫辰に麻薬を打っている頃、高窓が開かれ、するすると命綱が落下すると必死のお鈴とゆきが脱出しようと、命綱に縋りついていた。

逃げるお鈴とゆき。それを追う足音と人声みきの手を握りしめたお鈴は、思わず狭い路地に飛び込んでいった。

長崎の新開地の路地はあぶれた人間の吹溜り——。密航者、密輸商人、黒人、白系露人など、各国の人種がひしめいている。

数間後に迫る追手の声、二人は人波をかきわけて必死に逃げた。行手は迷路になって、うねりくねった薄暗い路地が交錯し、階段の道がつづき、蜘蛛の巣をはったように入り組んでいる。

盲目のゆきの手をひいて走るお鈴——。迷路を曲がる、更に曲って走る。いきなり鶏の首が吹っ飛び、したたる鮮血。二人の眼前にぶら下る蛇。太刀でその首が斬り裂かれる。料理店の裏口から路地の奥へ二人は逃げ込んでゆくのであった。

唐人たちがきらびやかな衣裳で踊り狂って

いる。怪奇な祈祷所である。その雑踏の中を迫る男たちから巧みに身をかわし、次の路地へと抜けてゆく。

その二人の眼前に腐蝕した屍——。ギョッと振り向く視界に白骨の顔。前方は行きづまりの死体安置所の中に、慄然と立ちすくむ二人——。

ゆきはもう歩けなかった。今は足手纏いになって追手に迫られるだけであった。お鈴は覚悟をきめて、彫秀のかたみの品の入った布袋をゆきに握らせると、江戸へ着いたら深川八幡の祭礼の夜、彫秀が島を脱出したらその

夜必ず会おうと、島送りの日誓い合った約束の一件を告げて、彼女は脱兎の如く、もと来た迷路へと走り出ていった。

お鈴が男達によって取り押えられた様子を恐怖に身を硬ばらせながら、ゆきは男達の罵声で感じた。

ゆきはあたりを必死で手探る。その手に触れる棺桶の蓋を、盲目のゆきは何も知らずに開くとそこへ身を隠した。そこには身の毛もよだつ黒死病の女の屍骸が横たわっていた。泣き女を先頭に遺族たちが入ってくると、棺は一同によってかかえ上げられた。

火葬場の祭壇に安置された棺桶は、泣き女の号泣と共に点火されやがて激しい熱気が棺の中に伝わってきた。恐怖におののくゆきは夢中で傍らの屍骸に抱きつき、絶叫しながら起き上った。

泣き女と号泣する遺族の眼前で、突然に棺の蓋が開き、黒死病の屍体が、持ち上ってく







る。恐怖の叫びを挙げてひれ伏す人々の間を縫いながら、ゆきは這いながら表へと脱出するのであった。

× × ×

馬小屋さながらに、ワラを敷きつめた簡易売春宿——。半裸の女達が客をとる傍らを這ってゆくのは、ゆき。

その手がいきなり握られた。握った男は長崎の女衞で鬼吉という悪どい男であった。見馴れぬ女に、鬼吉は襟首を掴んで引寄せようとした。その手を払いのけて、ゆきは必死に逃がれようとした。

眼前で逆吊りにされた豚の腹が斬り裂かれ

ている。ドクドク流れる血があぶくを立てて水槽にあふれている。盲目のゆきは足をふみすべらして血の水槽に落下した。

彼女は全身をからくれないに染めて、鮮血の溜りの中で必死にもがいていた。

鬼吉によって救上げられたゆきは、血ま

みれのゆきを安宿の風呂場へと連れて行き、数人の女達が入浴している前でゆきを洗い始めるのであった。

安宿の二階。女の肌を彫っている男の前に

鬼吉は、ゆきをつれてきた。鬼吉の声で振向いた男の右頬の傷跡、鋭い眼光、荒んだ風貌に、姿かたちこそ変っていたが、この男まぎれもなく島を脱出した彫秀の変わり果てた姿。

女衞の鬼吉は、女を次々かどわしてきては、彫秀に刺青を頼み込み、クレイトンに売りつけていたのであった。あくどいやり方に彫秀は彫りたくなかった。悪態をついて、鬼吉は盲目のゆきをその場に残して姿を消して

いった。

酒をのんでいた彫秀が立上る。土間にじっとゆきはうずくまっている。あんな男のいいなりにならず帰れと、激しくゆきの背を押した拍子に、盲目のゆきは倒れ、はずみで、懷から、お鈴より預かった布袋がコロコロと落ちて転る。必死に手探るゆきを抱き起こした彫秀は、布袋を手にして、激しい驚きが顔をよぎって走った。布袋の口が開いて、彫秀のカタミの品がのぞいていた。どこで手に入れたのだと、彼はゆきを激しく詰問するのであった。

その頃、脂汗をにじませながら針をさしていた彫辰の手がハタと止まる。傍らで見守っていたお竜と鮫島の目が輝く。遂にお鈴の背の見事な刺青が完成したのであった。

しかしお鈴は悲しかった。明日は異国人のところへ売られてゆく身を思い、肌を汚された哀しさから、思いつめたように、彼女はグラスに毒薬を注ぐと、ぐっと一氣にのみ乾してしまった。

お鈴が領事館に誘拐されていることを知った彫秀は、ひたすらに急ぐ。お鈴の寿命は刻々と迫ってゆく。

領事館近くの、鉄蓋をあけ、地下水道に身



をひるがえす彫秀——。

ドアのきしむ物音に気付いて振り向いたお鈴の顔が、一瞬驚愕にかわる。そこに泥まみれの彫秀の姿があったからであった。

夢にも忘れ得ぬ愛しい人との邂逅に、激しく二人は抱擁した。お鈴の背がヒクヒクと苦しく呻き始め、やがて激しい息づかいのなかから、彫秀の顔をじっと見つめ乍ら、父の仇が鮫島とお竜であること、彫辰も騙されていたことなど、苦しい息の下から告白し終り、ガクツとことされるお鈴——。血の気を失ったその死顔は、透き通るように美しかった。ひとしと抱きしめる彫秀の顔に、憤怒の青白い怒りが燃え上ってくる。

復讐を誓って彼は、部屋をぬけ出していった。鮫島と乗馬スタイルの洋装のお竜が入れ違いにお鈴の部屋に入ってきて、傍らのコップをみて、毒をおった事を知った。刺青が出来るまで散々じらしておいて、いざという時死んじまうなんてと、お竜はお鈴の屍体を口惜しそうに足蹴にするのであった。クレイトンが近々この邸で刺青大会を催すので、彫辰に趣好を凝らした刺青を彫らせ、領事の御気嫌をとることを二人は相談した。その様子を戸口の蔭できき乍ら、彫秀の憎悪に燃えた

眼が光っていた。お竜、鮫島、彫辰、クレイトンと、この四人に、お鈴の怨みはきつと果たすからと、彫秀は深く心に誓った。

× × ×

出島近く——停っている馬車にそっと近づいた子供が、飼馬桶に

薬草を入れる。店先から出てきた領事クレイトンの娘ハニーが馬車にのり込んだ途端、嘶きと共に、馬は竿立ちになり、いきなり馭者を振り落として疾走を始めた。暴走する馬車の中で、必死に救いを求めるハニー。その時風の様に現われた人影が馬車に飛び移った。見事な手綱捌きで荒れ狂う馬を制するのは彫秀であった。

海岸通りを馬車は静かに走る。片言で礼をいうハニーに、彫秀は無言で激しく鞭をくれた。方向転換して馬車は疾走する。道が違うというハニーの言葉も聞こえぬ振りで、彫秀は、隠れ家の酒場へ向かってぐんぐんと突走っていった。

半裸にされたハニーが縛られてうつ伏せに



なっているその腕のあたりへ、彫秀は意味のない斑点のような刺青をいれていた。クレイトンの娘ハニーに刺青して、人面獣のこの外人に、可愛い娘の刺青をみせてやったら、どんな気持になるか——、そんな復讐の念に燃えて彫秀は一心に針を運んでいた。

その頃——、洋装のお竜が、出島の迷路の石段を曲り、暗い路々の奥の、石造りの地下室へと降りていった。黒ずんだ皮膚、濁りきった眼、麻薬患者特有の男達が、壁に凭れてジュウジュウと阿片を吸う群に交って彫辰の姿が蠢いていた。例の刺青大会での、彫りものをさせるべく呼びに来たのであった。お竜は懐から書状を出すと彫辰に渡した。震える手で開いたそこに、彫秀の挑戦状があった。





引分けの上覧試合の決着を、領事館の競演会で勝負をつけようという手紙であった。意地でも彫辰は負けられなかった。全裸で縛ったハニーに斑点のような無気味な刺青をほってゆく彫秀——。お竜の用意した白人女に、次々と奇怪な刺青をしてゆく彫辰——。そして遂に運命の刺青競演会の日が訪れたのであった。

かな照明の中に浮かびあがる白人女の人間屏風——。それは六人の刺青女によって一對の絵を構成しているものであった。クレイトンは讃嘆の声を放った。と、その時であった。会場のバルコニーにハニーを縛り上げた彫秀の姿が現われた。一同の驚く前で、彼はハニーをギリギリと縛り上げてゆく。凄絶な羅漢足の刺青がまじり合って、ひとつの絵柄を構成し、それはやがて形をととのえて、一匹の怪奇な鼠と化していった。彫辰と彫秀の激しい挑戦が、刺青合戦がつづく。

彫辰は手燭を握りしめるや、人間屏風をじりじりと焦がしてゆく。狂気のように悶える人間屏風——。彫秀は針の束を手にとると、刺青の部分につき立てていった。人間ハリネズミであった。クレイトンは可愛い娘の無惨な姿に狂気の如くになり立て、鮫島に捕えるように命じた。

じりじり迫ってきた鮫島が白刃をふりかざした寸前、身をかわして彫秀は壁飾りのフェ

ツシングを引き抜いて、ピタリとハニーの体に突き立てていた。百刃ローソクが倒れ、パッと室内は燃え上る。彫秀は復讐に酔っていた。今こそお鈴の仇を一気に討つ気で、彫秀はジリジリとハニーの体に尖端をつき立ててゆく。めらめら燃え上る室内の熱気にたえられず、走り出ようとするお竜を引止め、誰が動いても、ハニーは一突きだと、彫秀は脅して、この人質を抱えた。

鮫島の頭上に降り注ぐ火の粉。その火が、彼の衣服に燃えうつり、叫びと共に斬りかかってくる。クレイトンの制止もきかず、彫秀に迫る鮫島。白刃が一閃した刹那、クレイトンの投げた短剣が鮫島の右目にぐさりと突きささった。溢れる鮮血、どうとのけぞって倒れる悪党与力——。

渦巻く煙の中で、彫秀は狂気のような笑いを泛かべて、ハニーを炎の中へと追い込んでゆくのであった。パパッ、パパッと悲鳴をあげ、苦痛に喘ぐハニー。尚も復讐鬼と化して追い込んでゆく彫秀の耳に、お鈴の声が反響音となってきこえてくる。幻想の声は、彫秀の残虐をたしなめていた。フッと人間の気持を取戻した彫秀は、苦痛に身をよじるハニーにかけよると、この罪なき少女を救け出した



のであった。

ハニーを抱き起こす彫秀の背後に、クレイトンの振りかざす太い丸太が、正に彫秀の頭を叩き割ろうと迫っていた。駆けよった彫辰が一瞬、匕首でこの外人の胸を抉っていた。凄惨な格闘、苦しさをこらえて胸から匕首を引き抜いたクレイトンは、その刃で彫辰の腹を突き刺していた。危うく難を遁れて、彫辰にかけよる彫秀。みんなを不幸のどん底に叩き込んで、すまなかったと詫びて、彫辰はガクッと息絶えていった。瞑目して、ハニーを抱き、火炎の中を彼は脱出していった。

這うように逃げ出したお竜を役人達がかこんだ。非人道の罪悪のかずかずが、やっ和白日の許に曝されて、出島でこの私を捕える気かとうそぶくお竜に、捕手達がどっと襲いかかっていった。

× × ×

ここは刑場——。竹林が、ざわざわとさわぎ、鬼哭啾々となりわたっている。

太縄で引張られた二本の竹が撓い、お竜の両足はしなった竹に縛りつけられて真逆様に吊り下げられている。

役人の合図につれて、斬罪役が抜刀する。恐怖にひきつるお竜の狂気の叫び！ 一閃



——左右の太縄が切断されると見るや、凄まじい勢いで、しなっていた二本の太竹がピューンと撥ね上り、ギヤツという悪女の絶叫が空にこだまして、首、胴、両手と、バラバラに引き千切られた魔女の肉片が、空中に舞いあがる。激しく降りそそぐ血——。それは血

の雨！ ざわざわとさわぐ竹林の中の、二本の断罪の太竹には、ざくろのように、ポカッと赤く割れたお竜の足が、ブラブラと震動していた——。

(完)

× × ×

あらすじのつもりで紹介しても、ざつと以上のような長篇で、これを一時間半少しでどう纏めるのかと、私は半ば感心してこのシナリオを読破した。

企画の天尾氏から連絡があつて、東映京都撮影所を訪問したのが三月二十六日で、映画は既にその前日よりクランクインしていた。「性愛路線も第六弾になりますが、もうあと一作ぐらいでそろそろ打止めにしたいと思っています。それだけにこれは辻村さんの独断場ですよ。この種の責めや、サドマゾの集大成ともいうべきものなんですよ」

天尾氏の仰有る通りシナリオ通りやると、これは相当日参しなければならなくなりそうである。全篇これ責めと緊縛の連続で、加うるに刺青オンパレード。残酷とレスボスという実に盛り沢山の内容で、私が最も苦笑を禁じ得なかったのは、『緊縛師』と称する人物の登場である。逞ましい商魂といえばそれまでだが、まるで私に与えられた様な名称で、



そのうち緊縛師という職業が現代で罷り通るかも知れないと思うと、揶揄したい気がしてならなかった。それだけに、緊縛師の登場で、今回は責めや緊縛を、判っきりプレイやショウとして扱っているところに、性愛路線のゆきつくところを感じさせた。これ程徹底したSM映画は恐らく前代未聞であろう。

朝日新聞の(どこへ行く邦画五社)というキャンペーンで、売れっ子監督として石井輝男監督をとり上げているが、その中で、彼をボイコットするという声のある助監督の言葉で「うちのエログロ映画は単なる合理化攻勢から生まれた、安上り作品ではない。普通の作品以上に金をかけ、より愚劣なものをつくらうという会社の意思があって出来たのだ。台所が苦しくて生まれたのではなく、もうけるという目的でつくられたのだ。だからその罪は大きく深いのだ」といわしめている。

暴力否定の時代につくるやくざ映画と、性愛路線のエログロ映画と、社会に与える毒はどちらが大きい——それは私の関与しないところである。しかし私はこの言葉の中に、「目糞、鼻糞を笑う」という感を、受取ったことは確かである。

カンクト自身が、自分はアーティスト(芸術

家)であり、アルチザン(職人)であると割り切っている。芸術性ばかり唱えていては一将功成って万骨枯る——というのだ。

五月号の漫画読本の映画欄に(五社の人気監督として、今年上半期の日本映画界で最大の話題となっている映画監督は誰か? 「トラ・トラ・トラ」事件

の黒沢明? ノー。「橋のない川」で大ヒットの今井正? ノー。クロウト衆が一致して推すのは、なんと石井輝男監督)とその内容まことに毀譽褒貶さまざまである。そのカンクトに見込まれて呼んでいただいた、となると、私たるものその好意に酬い、ひとつこのカンクトさんの為に片肌ぬこうという気持ちにまかり立てられるのであった。

前作「ハレンチ」が宣伝不足もあって、少しオチたので、天尾氏としてもこの映画のPRには、かなり奇抜な着想をもってしている。

「辻村さん、実は宣伝で『東西緊縛くらべ』



をやろうと思うのですがね。西の辻村緊縛師に対して、関東でこうしたプロカセミプロの人を御存知ありませんかねえ」

と仰有る。咄嗟にそう聞かれると、寡聞にして私は、緊縛師は知らない。好きでやっている人は日本国中にいやという程存在すると思うが、さて私は緊縛師で御座いと名乗り出る様な人は、恐らくいないのではないだろうか。正直にそう返事すると、

「それじゃ東京本社へも連絡して、何とか探し出しますから、その節はよろしくお願いしますよ」





「一体どんな企画なんです」

「東西のランクをつけましてね、実際にスターさんを縛ってもらって、その早縛りや、種々の緊縛のやり方などを大々的に宣伝するんですよ」

と、いやはや大変なことであった。

その日は恰度、宣伝スチールを撮るので、今回、刺青女郎由美の役に抜擢された、ズブのシロウト、由美てる子の刺青と縛りのスチールを撮ることになっていた。

数カ月振りに門を潜った撮影所は私にとっても、何となく懐かしい。スタッフのあの人

この人とゆきずりに挨拶して、石井組の部屋をのぞく。サングラスのカントクさんはニヤリと笑って手を振った。撮影も「刑罰史」のわし尾さんで都合よく、大半はなじみの顔ぶれであった。

カントクさんは、日活で扇ひろ子を主人公にした『昇り竜鉄火肌』を、僅か二週間の早撮りですまして、京都へ駆けつけ、直ちにこの映画のクランクインに入ったのであった。以前から聞いていた腹案が今現実の段階にきて、カントクさんもすぐ張り切っておられる。私の協力した前二作がどちらもオムニバス形式の三話からなっていたのに対して、今度の映画は一本筋を通してしている。しかしよくシナリオを考察してみると、刺青女郎由美の物語と、お鈴の物語の二つに分れている。

緊縛シーンは、この「責め地獄」が最も多いようであるし、前二作の模倣であつてもいけないので、私の独断

で緊縛シーンは趣向を凝らして、種々バラエティのあるものにしてほしい、との事であった。前述のあらすじは、すべて台本から忠実に紹介したものであるが、そうした事情で、緊縛シーンや重複カットなど、上映に当たっては、かなりの改編になるかも知れなかった。

午後より、由美てる子のスチール撮影があるので、セットを覗きに行く。

彼女は今年の三月、東京都立高校を卒業したホヤホヤの十八才。在学中既に自動車メーカーや、カメラの宣伝写真のモデルをしていたそうであるが、男性週刊誌のセミヌードをやったこともあるそうである。モデル斡旋の某小プロが、彼女が去年の夏、泳いでいるところをみつめて、その姿態に惚れこみ、コネをつけておいて、今春、東映へ売込んだというところだった。バスト86、ウエスト58ヒップ85で、さしてグラマーでもなく、身長も1メートル59とさして高くない。

背中一面に描いたドクロのいれずみ――。

これが白粉彫りで、ドクロにカンノン様が浮かび上る仕掛けになっているのである。

映画はズブのシロウトの由美てる子は、カメラマンの放列を敷くなかで、案外脱ぎつづりがよかった。意外だったのは、バスト86と



きかされていたのに、小柄な体に比して、そのボインの見事さである。余りの豊かさに、私はしばし盛り上ったその隆起に眼を奪われてしまった。

スタッフの顔見知りの一人が、私の存在に気付くと、いいところに来たといわん許りに早速、彼女の緊縛を依頼してきた。来る勿々たちまち使われる羽目になる。そこは好きな道、由美てる子の肌を否応なく触る助平根性の役得さから、あっさり引受けて、宣伝マンが差出した下絵通り、二本胸縄の後手縛りを手軽くやつてのけた。私も早速持参したカメラを構えてカラーで撮る。

「責め地獄」はこの由美てる子をニューフェイスとして大いに売り出すハラで、宣伝マン一同、大張り切りであった。

名実共に緊縛指導の私の仕事は、こうして打ち合せの日から既に始まったのであった。克蘭クアップは四月二十二日の予定で、今回は映画上映より紹介の方が少しおくれそうであった。

× × ×  
三月三十一日が緊縛指導初仕事。私の家は支払いがすべて月末だから、相当数の掛取りが押しかけるので、過去殆んど在宅するのだ

が、そうもいってられない。支払い方法を精しく家内に伝えて午前九時過、東映撮影所に到着――。

第10スタジオに、大黒屋の責めの八角部屋の大がかりなセットが組まれてある。広間の責の間を中心に、八角の家組の各小部屋は三角形である。どの小部屋にも趣向を凝らした

覗き窓がついている。広間の床は大硝子が張りつめてあって、地下の部屋から仰ぎみるように出来ていて、天井は鏡張りにして中央が地下と同じように大硝子をはめ込んで、責めの模様を俯かん出来るようになっていて。いわば、セットは、三段に組んであるのだった。由美の逆吊り責めを見る。武家風の人や刺青女郎の大部屋の人は既に揃っていた。

今日一日、由美の逆吊りのかため撮りである。由美てる子の大いなる試練の受難の日でもあった。由美を売り出そうとするだけに、撮影は彼女のシーンを優先してスケジュール



が立てられているようであった。

「由美――、このオジサンが君を縛るコワイ人だよ、辻村さんだ」

カントクさんは由美てる子に私をそんな調子で紹介する。私は彼女を先刻御存知だが、彼女は私を知らない。ペコリと頭を下げてきた。

「センセ――、やはり私を本当に縛るの?」

「ああ、縛るよ。辻村さんに任してあるからね。シナリオ通りゆくよ」

「縛られたことなんか一度もないのよ。痛くないかしら――」





この高校出のニューフェイスは、ビックリした様な目付で、私とカントクさんを半々にみつめて呟く。

「大丈夫——、加減してやりますよ。凄そうにみせて、痛くないよう縛りますから……」

と、いたわり顔の私。

「午前中は、既に刺青を彫られた由美が、將軍上覧で人気が出て、名ある武士が由美の責めを觀賞にくるシーンなんです。逆吊りの方は任しときますから」

声を潜めて、カントクさん

「存分にやって下さい。すぐ馴れますよ」

「手足に竹棒をしばりつけて、大の字開股逆吊りなんてどうでしょう」

「面白いですね、やって下さいよ」

気持がわるいほど私の意見通りで、これでもいいのかしらと任されただけに、むしろ責任を感じて、内心いい加減なことは出来ないぞと、カ

ントクさんの信頼ぶりに応えたくなる。縛りやその構成は、すべて私に一任する口吻であった。これはエライことだ。SMの同好者が

見て、緊縛に迫力がなければ、すべては私の責任である。

縄は「女系図」で橋ますみに使った、青に染めた太縄である。この縄を使うと、染色が剥げ落ちて両手が真蒼になるので閉口する。

いつも固い縄許りなので、今回は使い馴れた私個人の太縄を二本持参したが、これではとても足りそうにない。やはり青縄を使うより仕方ないだろう。

由美の柔肌に、始めて縄を当てた時、彼女はビクとして、硬い表情になった。かつらをつけず、長く垂れた由美自身の黒髪がかすかに震えていた。

「おじさん、お手柔らかくしてね。私本当にこんなこと生まれて始めてなの」

「あら、大丈夫すぐ馴れるさ。怖くないよ、痛くないように吊るからね。私の考えをいつておこう。両手、両足を竹の棒で縛って、逆さに竹の棒の中心から吊るのだけど、それでは長い時間我慢出来ないだろうから、お腹に吊具をつけて、そこから吊るようにするよ。今迄これで撮った人は皆我慢したからね、大丈夫だよ」

「何だか怖いわ」

由美はやはり脅えた眼になっていた。ズブのシロウトがスターにのし上る道は険しかった。シナリオでは全裸になっていたが、これは許されない。上半身はむき出しの、赤い腰巻で下半身を蔽うことでケリがつく。装飾のエーちゃんが、ツンパ一枚で全裸の由美に吊具を装填する。由美の顔は緊張に硬ばってゆく——。吊具を隠すため太縄を腰にぐるぐる、と巻きつけてゆく私。長いのでそれを股縄に何重にも巻きつけて、赤い腰巻きを固着させ





た。両脚を開かせて、足首に竹棒を縛りつけると、由美は顔をしかめて苦痛の表情になった。

「痛いのか？」

「ええ、足と竹との間がすごく痛い」

仕方ないから、スポンジを剪って狭む。ハント女性なら、こうした吊具やスポンジを使わなくても結構それに耐え、しかも悦虐の境地に陶醉するのに、そこはM気のない娘の悲しさ、一寸のことでも痛がる厄介さである。どうやら足首に竹棒をしばりつけ終る。

撮影のカメラ位置の加減で、地下への覗き

硝子棒がとり外され、あとは両手を一文字に開いて縛る態勢になって私とエーちゃんは待機した。万端の準備が整い、私に、声がかかる。両手を広げさす為に、それ迄羽織っていた絆天を脱ぐと、スタッフの眼前に、豊満なおっぱいが見事な盛り上りを見せて展開された。由美の瞳に、一瞬

が、その絶叫にあわてて引縄をゆるめ、エーちゃんと私はあわてて体を抱き止める。あわただしく縄を解いた刹那、由美はパツと身を跳えして、呆然とするスタッフを尻目に、裸足のまま、セットをかけ降りると、ワアワア泣き乍ら、スタジオを飛び出していった。啞然とする私——。一同の視線が、心なしか冷めたく私をみつめている。十数秒のポイントマイム——。

「どうしたのです。彼女痛かったのでしょうか——」とカントクさんは笑みをたやさず私に問いかけた。

「さあ、経験からして、痛い筈ないんですがね……」

私も咄嗟にスタジオを逃げ出した、由美の心理の判断がつかない。エーちゃんが傍らからいった。

「逆吊りになって、地下との距離がかなり高いから、怖かったんですよ、キツと」

生まれて始めての逆さ吊りで下を見降ろした時、余りにも高い位置に度胆を抜かれ、急に恐怖心が湧き上ってきたのであろうか。それしか理解出来なかった。

「仕方ないですね、じゃあ早メシにしましょう」とカントクさんの声。



午前十一時。かくてフィルムは一コマも廻らず、由美の脱走で午前はパーになった。

### —— 開股逆吊り責 ——

十二時半、きまり悪そうな笑顔を泛かべて由美てる子がスタジオ入りする。

「御免なさい、御迷惑かけちゃって……怖かったのです」

彼女は素直に私に頭を下げた。一時は乙女心から逃げ出したものの、逃げきれぬ役柄とスター意識に目覚めたのか、それともスタッフの説得の結果か、意外にケロッとした表情で現われた。兎も角も、こうして私は由美てる子を泣かせてしまった。尾花ミキを泣かせ橘ますみを泣かせ、由美てる子を泣かせた私に、そのうち「泣かせの辻村」という異名がつくかも知れない。

「両手の自由がきかないから、怖いのでしょう。いっそ脚だけで吊って、両手は自由にしておいたらどうです」

エーちゃんは、こんなアドバイスをしてくれる。一作毎にエスカレートして行く緊縛の構成に、より以上のものを求めても、縛られることすら始めてという由美に、いきなり強烈な緊縛は無理だったのかも知れない。私はそのアドバイスを素直に受けて、手段を変え

ることにした。脚首の竹棒も、もう少し上げて太腿で結び、上半身は縛らないということに妥協する。私としては大いに不満であったが、由美の立場も考えて妥協せざるを得なかった。覚悟が出来てきたのか、彼女は今度は冷静であった。カントクさんに変更の旨伝え

「じゃあ、それでゆきましよう。両手で空を掴んでのたうち廻るのも、変っているでしょう。緊縛師に鞭の打ち方を連絡しておいて下さいよ」

と、何かにつけて、無理を通さない。スタッフにしても、私の職権が分ってきているから、「刑罰史」の時のような、あてつけの言葉や、きこえよがしのいや味は何もない。それだけ、映画自体エスカレートしている証拠だし、私という人間を認めているのかも知れなかった。大の字開股にしる、これからやる開股逆吊りにしろ、すべては由美の背中の刺



青をよく見えるようにと考えての配慮の緊縛方法であった。

人目につかぬ場所でエーちゃんが、由美に吊具を装填してくる。由美はもう覚悟をきめて、むしろ私に、

「ゆるく縛って外れたら大変なもの、きつく縛って頂戴ね」

という変りようである。腰から股へかけての太縄は午前の通りかけて、別の白いロープで彼女の腿の内側へ竹棒を結びつける。吊縄は竹の中心で、別の短い縄で竹棒に結び合わせた。見物の客や女達が、天井、地下とそれ





ぞれ位置につく。じっと見下ろす位置をきめて、天井でうごめく人々を、由美は黙って見上げていた。いよいよ準備O・Kで開始。由美を引揚げ、又体を抱えるのはスタッフに任せ、私はカラーとモノクロの二台のカメラをぶら下げて、専ら撮る方に回る。硝子張りの

枠に背を向けて、合図と共に由美の体は数人によって抱きあげられ、徐々に頭が下ってゆく。さっと吊り下った瞬間、私はあっと思った。吊縄が竹棒の中心からずれて太腿近くより、由美の体が大きく傾いたからであった。由美の両手が空を掴んで、傾いて、吊縄が太腿をしめつけてゆくのを必死に、こらえている。あわてて降ろすと、急拠、竹棒の中心に吊縄が、通るぐらいの穴をあけることになった。その間休憩――。

数十分後、再び同じポーズが作られる。太腿へ縛りつける縄も歪まないよう、その左右の位置に凹みがつくられてある。縛り終るまで、由美はもう上半身を蔽おうとせず、平然とたゆたうオッパイを放り出していた。

テストは吊らず、吊った状態で位置をきめ、緊縛師のKさんには、割れ竹でかなり強く叩くよう指示して、カントクさんはカメラ位置に戻った。

抱えられて、吊縄が引かれると、由美の体は竹棒を水平にして、見事に垂直に逆さに吊り下った。いよいよ本番、カメラが廻る。パシリパシリと、緊縛師の振う割れ竹が、由美の臀部や腰を打ち、体はぐるぐると回転した。のけぞって空を掴み、呻き喘ぐ由美の声

は実感がこもっていた。恐らくそれは演技以前の呻きであったに違いない。下からと平行と二台のカメラが同時に廻っている。

私は夢中でこの責めのショウをフィルムに納めると、慌しく駆け上り、天井からのぞく人達の背後から、由美の俯瞰を撮った。芝居気を離れて、これらの見物の客は、由美の逆吊り責めを固唾をのんで見守っている。SMの同好者なら、金を払ってもなってみたいチヨイ役であった。唯じっと見守っているだけでいいのだから――。あるいは愉しんでいる人があるかも知れなかった。

由美の喘ぎが徐々に切迫してくる。空を掴む指先がそり返って、苦しげであった。じっと見守る私の心は、嗜虐の悦楽にすっかり酔い痴れていた。緊縛師の割れ竹はなおも容赦なく飛び交う。

「あッ、く、くるしい。もうダメです……ああ、もうおろしてェ」

叩きのめされて、前後左右に大きく揺れる由美の、弱々しい、遠慮勝ちの声が流れた。屹立する十八才の無垢のオッパイが、ブルブルと激しく波打って震えている。

カントクの声がないので、皆黙殺して、息をつめて、この光景を凝視している。



「ああ、ゆるしてエ、もうダメ、く、くるしいわ……」

「よしッ、カット」

ホッと溜息が流れ、ざわめきが起った。忽ちかけつけたスタッフが、ブラブラと揺れる由美の体を抱えて、ジワジワと降ろしてゆく。

「御免、御免——本番だから、つい力が入っちゃって」

緊縛師のKさんが、いたわる様にあやまっている。大きく頭を数度振って、由美はパツチリと眼を見開いた。かなり、長い逆さ吊りで、カッと血が下って、頭がボーッとしたに違いなかった。由美の最初の逆吊りは兎も角も迫力があって成功であった。

### ——片脚逆吊り責——

由美てる子の刺青を消すためと、緊縛師弦造に扮する林真一郎さんが、TV映画「ああ忠臣蔵」とかけ持ちの時間調整のため、午後は、この逆吊りのシーンだけで早いに終わった。なおも追い込み撮影で、薄暮から夜間にかけて撮影がつづく。

夜の逆吊りは冒頭のシーンで、由美が鮫島にあざむかれて、大黒屋に連れこまれ、責めのショウとして、逆吊りされるシーン。この

時は未だ由美の体に刺青は彫られていない。そうした設定の下に撮影は始まる。逆吊りの変った趣向をカントクさんから求められて、私は、かねて一度は試みてみたかった、片脚での逆さ吊りを提案したのである。

「出来るでしょうかね、由美に？」

「さあ、やってみなくては分かりません。若し不可能でしたら、新手を考えていますから」

「大分、度胸ができた来たようですよ」

「飼育はむつかしいですからね。ハントでも私も未だやったことはないんです。トリックなしなら到底無理でしょう。例え吊具を使っ

たにしろ、かなり強烈な苦しい構図ですが、

こんな機会に試してみ

たいんです」

「朝逃げた罰にやりま

すかね、ハハ」

カントクさんはうな

ずいて笑った。早速こ

のシーンの構成、片脚

吊りについて、エーち

やんと打合せをする。

「出来るでしょう、お

昼と同じ理窟だから。



脚を伸ばしているだけなんです」

と、いとも割り切っている。

「実際には、とても無理なんです。吊具に頼っているんです。うまくつけてやって下さい」

「ああ、任しといて下さい」

それで、片脚吊りはきまった。あとは由美がそれに耐えられるかどうかである。このあと、吊りがもうひとつ残っているのだから、正にこの日、由美てる子にとっては、大厄日であったかも知れない。

緊縛師の林真一郎さんが入ってくる。彼と



は既に「刑罰史」でおなじみである。苦味走った惚れ惚れする美男子振りだ。

「辻村さんに教えて貰わないといけませんね私の役柄が役柄だから」

「興味がありますか——」

「ああ、大いにありますね。嗜虐の美しさ愉しさというものが、どうやら分り出しましたよ」

白い美しい歯をほころばせて笑った。

「一度、そのうち是非、辻村さんを訪問して参考資料を見せていただきますよ」

明朗潤達な好青年であった。由美てる子が刺青を落としてスタジオ入りする。もう殆どのスタッフは揃って、準備が始まっていた。

「又、逆さに吊られるのですか」

「ああ、気の毒ですが……。同じポーズじゃなんだから、吊具をつけて、片脚だけで吊り下げたように見せます。昼は手をブラブラさせていましたが今度は後手に縛ってみます。いれずみがありませんからね」

私はつとめて、事もなげにさりげなくいった。彼女は片脚ぶりの強烈さを知らないからいいのだ。やってみて駄目なら、新手にするつもりで、私とエーちゃんは彼女を縛る準備にかかる。



吊具を例によって腰に装着し、上からぐるぐる腰縄をまく。別の縄でオッパイを強調して8の字に胸縄をかけて二巻きし、後手で本格的に縛り上げた。堅い縄なので由美は、かなり痛そうに眉をしかめたが黙っていた。

片脚に縄をかけ、足首にスポンジを挟んで

幾重にも巻き上げ腰の吊具に吊縄を結ぶ。これで一応形は整ったが、人間のことだから考えだけで、痛みを伴うかどうかは吊り下げてみないと分らない。覗き客の顔が揃い、ブツつけ本番の気で吊り始める。片脚が自由で遊んでいるが、果たしてどんなポーズになるかこれは私にも分らなかった。鞭打ち用具は、昼が割り竹であったので今度は苧殻を束ねたものを使うことになった。緊縛師の林さんもさっと緊縛する。吊り上げは裏方さんに任し私はこの千載一遇のチャンスに、カラーのカメラを構えた。

カントクさんの本番の声と共に、逆吊りの女体がぐいぐい昇り、自由の片脚が宙を蹴った。

「由美、大丈夫か——」

カントクさんの声に、

「ええ、我慢出来そうです」

健気な由美てる子の返事がかえる。さっと緊縛師弦造が位置につくと、この片脚逆吊りの由美に激しく苧殻を叩きつけた。ぐんと体を押す。のけぞって由美は、大きく揺れる。カメラが廻る、二台で正面と下から……。

私はこの凄惨なシーンを忽ち数枚とって、跣足で下へ走ると、地下から俯瞰するように





して、このシーンをカメラに納めた。ピーンと伸びた吊った片脚と、自由に空を蹴る片脚は、これが吊具で吊ってあるようには更々みえなかった。朝泣いたカラスが、夜には一生懸命にこらえて緊縛シーンに協力していた。これは正に悦虐の真髄であった。力をこめて

体を押す緊縛師によって、由美の体はさながらブランコのように、前後に大きく揺れに揺れ、手許に戻る体に、鞭がうなりを生じて飛んでいった。

降ろされた時、彼女は、ヨロヨロとよろめき、軽い貧血を起こしたようにうずくまってしまった。じっと吊られているだけでなく、この激しいゆさぶりに、彼女はめまいを感じたに違いなかった。

「よくやったよ、由美」

彼女の肩を叩くカントクさんに久々に会心の笑みが浮かんでいた。

#### ——後手緊縛吊り責——

数十分後、更に責め場がつづいた。二度の逆吊りで、シーンが同巧異曲になるので、これはオーソドックスに、長襦袢をつけて腕で吊るという設定を提案すると、すぐきまる。

胸にかなり多いめに縄を巻きつけて、これでナマで吊ってみたらどうなるだろう。もしたえられなかったら変更するまでと、長襦袢の下にぐるりとスポンジを挟み込み、犇々と青縄で縛り上げる。別の縄で後手にしっかりと縛り、両腕をしめ上げて胸縄につなぐ。「もし、我慢出来なかったらすぐ降ろすよ。でも逆吊りよりは、うんとラクだからね」

私は彼女にリラックスな気持でやるよう、痛ければ、いつでも降ろすからとなくさめてやった。

「吊具なしで、私もつかしら」

「一度試しに吊ってみよう。本番は短い時間だから、その間だけ出来たら我慢してほしいんだけど」

「じゃあ吊って」

数人掛かりで縄を引揚げ、私と助監さんが体を抱えるようにして、上に押しあげる。

「どうだい？」

「エエ、胸が少し苦しいけど僅かな時間なら持ちそうです」

「よし、じゃあ早くやろう」

カントクさんはキビキビと命じる。一切の準備が整う間、私はしめつけた両腕、手首の縄を解いて待った。すぐ始まるようにいっても準備に二十分や三十分はかかるので、その待時間の合間に、つよくしめた由美の両腕がしびれるおそれがあったからである。シーンが代っているのに林さんは割り竹で責めることになる。彼はしきりに竹のあて方や、振り上げ方などを研究している。まともにバシリと叩きのめしては、由美とて生身の体、本番ともなれば夢中で、かなり強く当るにしろ、



やはり強く打つように見せかける工夫が必要であった。

「先程ぶたれたところがズキズキするわ。かなり本気でぶったのね」

由美は長襦袢の上から、しきりにおしりや腰を撫でていた。ニューフェイスの登竜門もラクじゃないと、私はこのM気のない彼女の苦痛を思いやって、同情する気分になった。

いよいよ万端整い、カメラ位置もきまって緊縛だけが残った。おもむろに私は縛り始める。先程は手首と脛の下で縛っただけであったが、更に二の腕にかけても強烈に縛りあげた。由美は私のなすが俚に、黙って縛られていた。吊縄を胸の縄につなぎ、カントクさんにOKのサインを送る。

「始めましょう。じゃあ本番」

エーチャンと柴田さんが抱き上げ、私はカメラを構えた。数人の人がヨイサと掛声をかけて引揚げる。揚げた刹那、由美は眉をしかめたが、昂然と顔をあげた。二の腕まで縛り上げた後手の緊縛が、吊られて平行にのけぞっている。ゆるく由美の体は回転した。

林さんの割り竹が飛ぶ。

「由美、うんと悲鳴をあげろッ」

カントクさんの叱咤で、由美は始めて、呻

きと悲鳴を挙げた。しかし、その悲鳴は割り竹が腰やシリを打つ、その痛さからくる真実の叫びであったようだ。くるくる廻る――。

割り竹が飛ぶたびに由美は宙に両脚をちぢこめ、顎を突き出して喚いて叫んだ。演技をつける必要もなく、ナマの吊りは、犇々と由美に苦痛を与えていた。それは演技以上の迫力をもって、シーンと息をつめて見守る人々に、強烈な責めの印象を植えつけていった。

「く、くるしい……もうやめてエ」

「もう少しだ。林さん、もっとぶつんです」

「あッ、あッ、やめてエー」

おどろに黒髪を乱して、叫ぶ由美に、カメラは非情に廻りつづける。まぎれもない迫真の責めがそこに演じられている。私は固唾をのんで、このシーンを臉の奥に灼きつけていた。

「よしッ、カット」

ずるずると引き降ろされて、由美はぐったりと床に打伏した。ハ

ッハッと熱い息吹きが、にじみ出た脂汗と共に吐き出され、見事な隆起が、縄の下で波打っていた。

「御免――痛かったでしょう」

林さんが駆けよっていたわ。かなり力強く打撃した本番を反芻している様であった。

「いいんです。でも苦しかったわ」

「でしょうね。だけど凄い迫力だったよ」

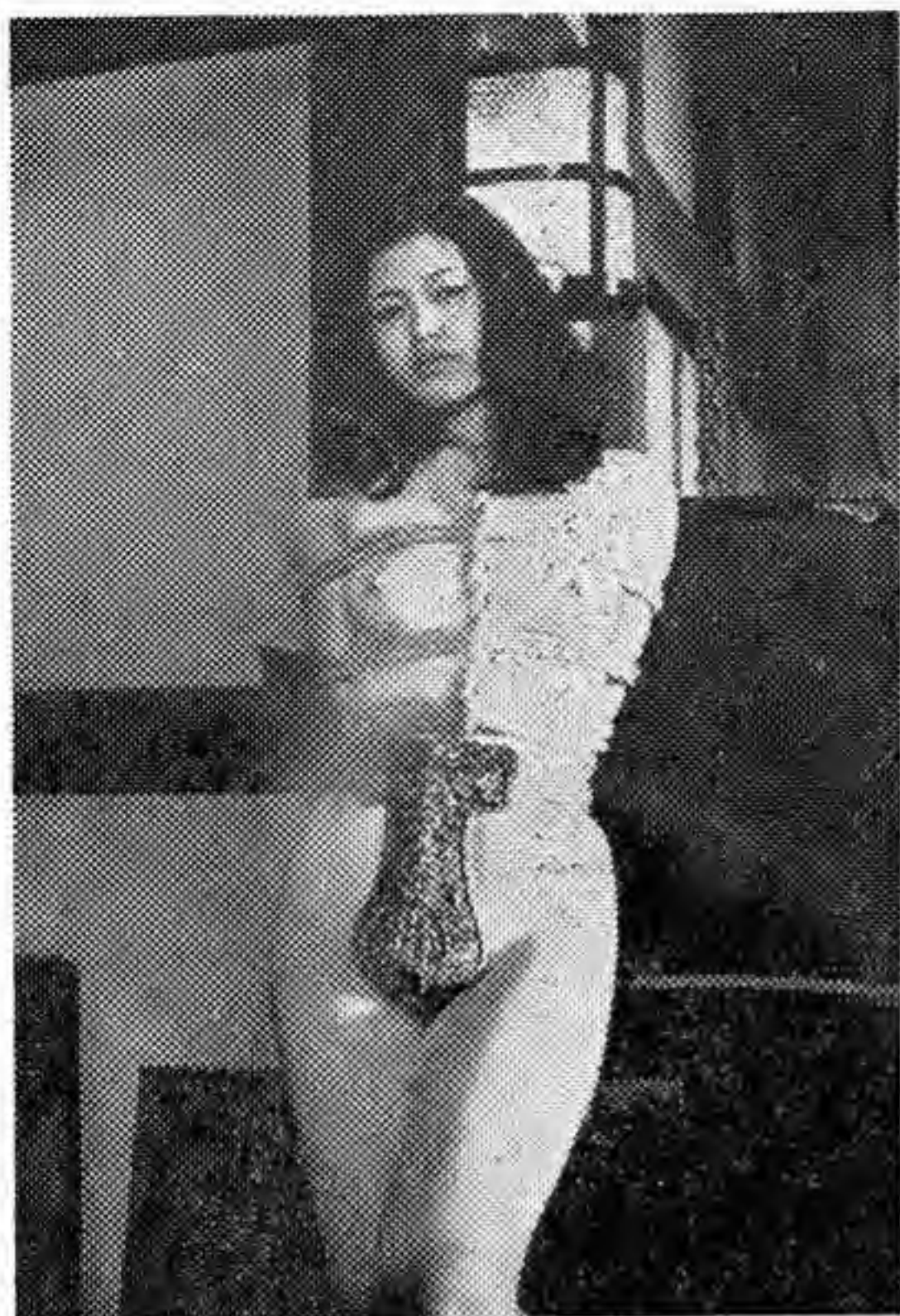
由美てる子は、林真一郎に向かって、始めてニッと乾いた笑いを泛かべたのであった。

――集団リンチと坐禪ころかし――

四月一日が東映の創立記念日の休日で、中







一日休んだ四月二日、再び、東映の門をくぐる。今日の責めは、「坐禅ころがし」であった。

由美が始めて大黒屋に連れ込まれ、秘密の覗き穴から一人の女が「坐禅ころがし」されて、武士から犯されるシーンを覗きみるところであった。鮫島与力に扮する田中春男さんに紹介される。悪役であるが、悪の典型のようなどぎついメーキャップをするより白塗りにして赤い唇という顔が、反って凄味のある冷酷な「悪」を表現出来るものであることを私はその日感じた。石油缶の炭火に当り乍ら

雑談を交した田中さんは、悪とは凡そ縁の遠い温厚な人であった。

「坐禅ころがし」の責めに、白羽の矢の立った人は、三笠れい子さんや木山佳さんと一緒に、東京から来た黒田のり子さんという人であった。刺青女郎になって出演している。

映画出演は始めてであるが、劇団に入って三年間近く地方巡業をしたというだけあってどこか、シンのしっかりした感じの人であった。

午前中は、刺青女郎のたむろする部屋へ、鮫島に追われた由美が、思わず逃げ込み、女郎達に裸にひんむかれ

て、リンチを受けるシーンである。刺青女郎のリーダー格は三笠れい子で、思い切りよくバスト一〇三を誇る隆起を、惜しげもなくほり出して、尻まくりする勇ましきである。彼女、維新の頃有名だった、紋ぢらしのお蝶のような、紋ずくしの刺青で威勢がいい。何

分にも集団演技なので仲々思うように行かず女郎、一人一人の動きにも細かい配慮があつて、午前中はテストで終ってしまい、午後にのびる。

由美は何度も揉みくちにされて、裸にされるが、カメラ位置や集団演技が思うように行かず、時間はどんどん経って行くばかりであった。この調子だとナイトーになりかねぬ有様であった。

黒田のり子は、集団演技から外されて「坐禅ころがし」に出るので、独り離れて待っていた。私が近づくと、彼女の方から声をかけてきた。

「あのう、坐禅ころがし」って、どういうことをするんですか。私何も知らないんです」「時間があるからこれを読んで御覧なさい。五年前、私がこの本に書いたものなんです」私は昭和三十九年の八月号の、奇譚三十九夜物語、第八十九話「坐禅ころがし」の個所を開いて、彼女に手渡した。黒田のり子は熟読していた。

御存知の方もあろうが「坐禅ころがし」なる方法は、女牢などで役人が、女囚を後手に縛り、坐禅を組ませておいて、前方へ突っ転がすのである。坐禅を組んだ両脚は外れず、



女囚は両膝と頭部で体を支えて、自然臀部が上を向く恰好になる。こうしたポーズをとらせて、犯したなども云われているが、私には余り信じられなかった。又緊縛という点からみると誠にあつけないやり方である。かつて五年前、三十九夜物語にこれを書いた頃、或るモデルにこれを試みたが、坐禅の組み方が完全でないのか、幾度やっても脚は外れるし、直立する筈の臀部は下り、又すぐ横倒しになるのであった。犯す方法なら、こんな無理な方法をとらなくても、いくらでもある筈である。所詮は誰かがフト考えついた思い付きが後世に伝わったのではないだろうか。

読み終って、黒田のり子はポツと顔を赤らめて私に奇クを返した。偶然にもこの三十九夜物語の第一話には宇治さゆりのフォト、第二話には某氏と某女の曝し責めフォトが掲載されていたし、グラビアにもかなり多くの緊縛フォトが納められていたのであった。

「私、坐禅なんて組んだことないんです」

「何なら一度試してみましようか。若しうまくゆかない様でしたら、変更しましうよ」立上ると、つられて彼女も立上った。ロープを一本握って私と彼女は、組まれたセットの、空部屋に入る。スタッフ一同彼方で、集

団暴行シーンに集まっているので、辺りには誰もいなかった。薄暗い部屋で、私は黒田のり子の両手を軽く一本の縄で後手に縛ると、坐禅を組まそうとした。あぐらは組めても、一方の足が股の合間へ挟まらない。足首をどう引張っても上らない。坐禅の修業をしていない者に、急に組めといってもこれは無理な相談であった。私自身試して見ても出来なかった。黒田のり子はかなり真剣に坐禅を組もうと努めていたがどうしても出来ない。ベソをかいて、

「どうしても出来ませんわ、私の体かたいのかしら」

と、後手に縛られた俤私を見上げる。

「坐禅ころがし」を象徴して、彼女の背の刺青はダルマに蛇が絡んでいる図であるが、これでは如何とも致し方がない。カントクさんとも相談して、これは急拠変更することにした。刺青女郎の集団演技は、尚も延々として続いている模様である。

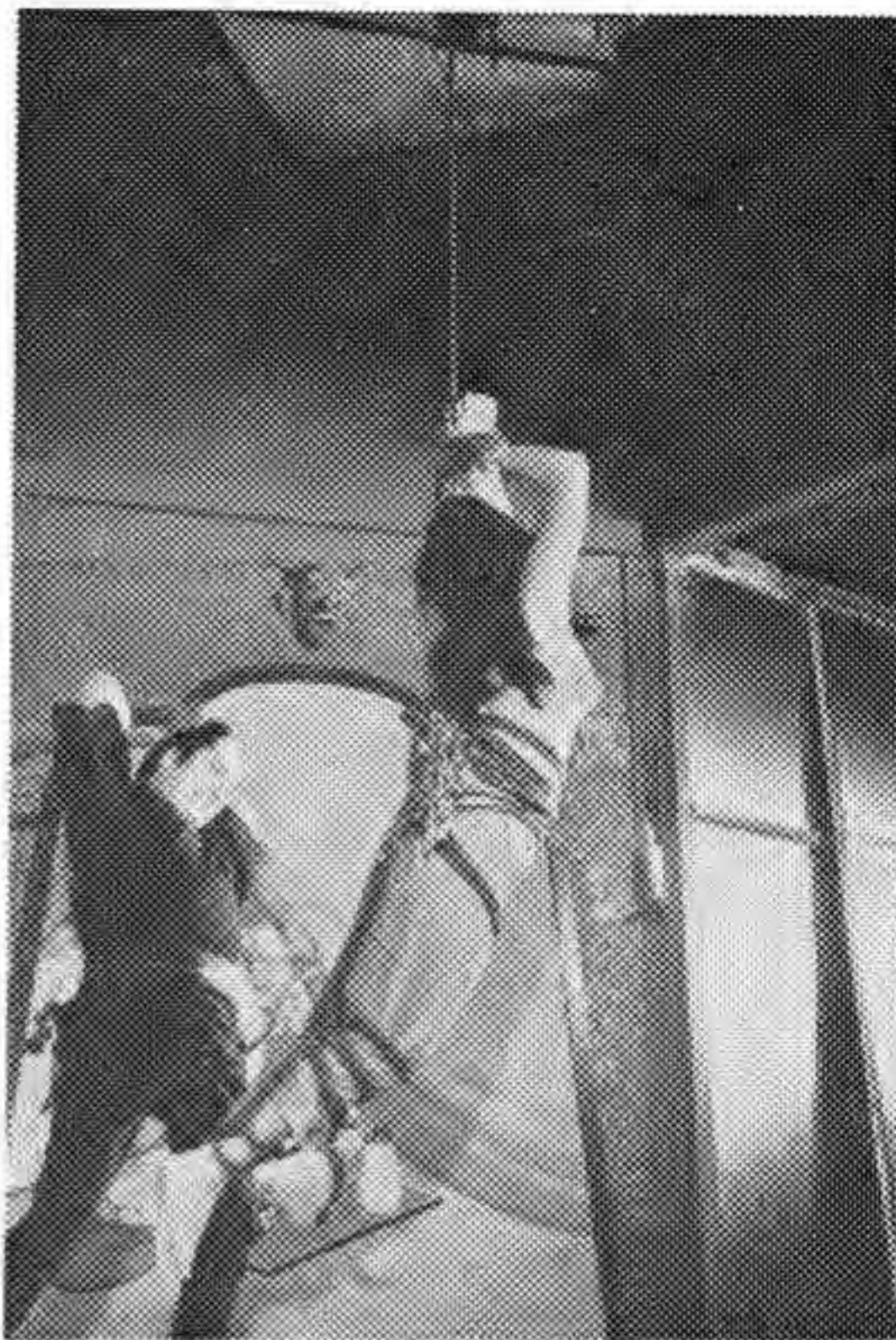
### ——猪 吊 り 責——

集団演技は、夜に入っても尚続き、やっと終わったのは午前八時を過ぎた頃であった。私と黒田のり子は、このワンカットの為に、朝の九時から夜の八時まで、十時間以上も待っ



たことになる。きれぎれ話の間にきき出したことは、彼女がドサ廻りをやっていた頃、舞台で逆さに吊られたということであった。トリックなしで、両脚首のみ縛られて、約五分間以上、吊り下げられていて責められるのだが、その芝居が十日間続いたということであった。最初はすごく苦しかったが、毎日吊り





下げられるうち、いつしか馴れてきたなどと羞じらい乍ら、ポツリポツリ喋った。  
「こんな映画が当るのは、世の中にサジストの人が多いですね。辻村さんもサジストなんでしょう」

といわれて、この娘は何もかも知っているわいと急に頼もしく感じられてくる。カントクさんは、やはり眼がある。沢山いる刺青女郎衆の中で選りによってSMの心を分る人を選んできたのは、もつけの幸いであった。  
「じゃあ『坐禅ころがし』の代りに、両手足を一緒に縛って吊るす、猪吊りをやりましょ

うか。あんたなら、吊具なしでナマで我慢出来るでしょう」

「やりますわ。芸術のためですもの」

この映画が、まさか芸術映画とも思われないうが、芸術という言葉でカムフラージュして役者根性の強さをみせた処に、三年間のドサ廻りの苦勞の跡が感じられて、正直いって私は、始めて数多い女優連中の中で、この人にSM的な好意を持った。

「よかったら、一度奇巧の緊縛モデルに協力してくれないかなあ」

「構いませんわ」

「有難う、早速、編集長に連絡してみるよ」

私の心は、既に黒田のり子をハントする夢に、緊縛の構想は次々拡がっていった。連絡先などきいて、一応彼女とコネをつけておいたのである。映画に協力する事三度びにして始めて掴んだハント女性であった。いつか機会があれば、改めて彼女の全貌を紹介する機

会があるかも知れないと、夢は大きく膨れていった。

田中春男さんの鮫島と由美が覗き穴から覗く位置につき、私は小部屋で黒田のり子を赤いしごきで縛る。縄でもよかったが、トリックなしだから、いたわりの気持もあって、柔らかいしごきにしたのであった。大部屋さんが一人、この女を、犯す武士になってつき合う。台詞なしのシーンだから、さしてむつかしくない。二度許りテストに吊り上げ、武士が吊られた女を抱くというシーン。私としてはむしろ、武士がもう少し離れて、吊られた女をいたぶる様にして欲しかったが、そこまでのいうのは越権なので黙っていた。しかし何だか吊られた女を抱き上げているようで、折角本式に吊っているのに迫力が乏しかった。テストでも本番でも、黒田のり子はかなり激しく悲鳴をあげ、声を立てた。第一回のテストで、

「いやーッ、いたい、おろして……」

という声に、スタッフがあわてて引き降ろしたら、ケロッとしている。身についた被虐の演技に、スタッフはすっかり毒気を抜かれてしまった。本当にMの心を解し、サジストという言葉の意味の分る、彼女の様なSM女





優を、こうした嗜虐映画に重用したらと、私は内心ひそかに思うのであった。既に黒田のり子の妖しい魅力に惹かれていたヒキ目であらうか――。

十時間待って、今日の私の仕事は三十分そこそこで終わった。しかし私に悔いはない。黒田のり子という一人の被虐女優を知ることが出来たのだから――。

### ――責めを伴うレスボス――

引続き翌三日も東映行き。藤本三重子さん扮する悪女お竜が、由美を責め虐たげながらレスビアンの対象にしてゆくシーンである。

強烈な緊縛はないが、なまめいた女同志の嗜虐シーンであった。

この日始めて藤本さんにお目にかかる。本職はキングレコードの艶歌ブルースの歌手。

「余りテレビではお目にかかりませんね」と失礼な質問をしたら、

「これといったヒット曲がないんです。東京のクラブなんぞでは唄っているんですが」と仰有る。傍らからカントクさんがニヤニヤしながら、

「この人便秘で困っていて、浣腸して欲しいといってるんですよ。辻村さんどうです」と真顔になっていわれて、ドキリとする。

実は何を隠そう、四月一日の東映の創立記念日の休みに、一日抜けたのを幸いに、私は出産後の金原奈加子と会って、かなりの浣腸シーンのフォトを撮ったのであった。縄や浣腸器具を詰めた袋が、未だその俥車のトランクに積み込んだ俥であった。

「それならいい具合に五〇CCの浣腸ポンプもエネマシリンジも車につんであるのです。よかったらして差上げましょうか」

真剣になっていったら、この艶な女性は、「アラ、冗談からコマですのネエ。私やっていたかどうかしら。以前、イチジク浣腸を使ったこと、あるんですけど、後味が厭でしたわ。でも、もう一日だけ我慢して、果物などたべてみますわ。御好意、嬉しいけど……」危うくサラリとかわした。仲々見上げたものである。

演技は十時半頃より始まった。嗜虐からレズへ移行するシーンを、カントクさんは自由に考えて下さいと仰有る。女性同志のレズの方は少々苦手であるが、引受けてしまった。咄嗟にいろいろと思案をめぐらせて、艶冶な情景に、縄も無粋と、赤い長襦袢の反対色の水色のしごきで、肩肌脱ぎにした由美を後手に縛る。シナリオでは鞭だが、昔の時代にムチも可笑しいと長煙管の折檻にして、倒れた由美の黒髪を荒々しく掴みながら、キセルで、腰やおしりを発止々と打擲し、裾をまくって、剥き出しになったおしりに噛みついて、ギリギリと歯型を立て乍ら、徐々に肩へ愛咬の歯を立て、頬や乳房へ愛撫の手をの



ばしてゆくといったものを考えた。

カントクさんに説明すると、それでいいでしょうと仰有る。この辻村ハブニング監督はスタッフの眼を気にし乍らも、精一杯、藤本三重子と由美てる子に、演技の順序を説明する。テストが始まった時、私はオヤツと眼を瞞った。女将お竜は忽ちに変貌して、虐めるのがさも愉しくてたまらぬ様子で、真に迫って嗜虐をたのしんでいるのである。まともに打たれて由美は悲鳴をあげてのけぞる。私はその刹那、藤本三重子に判っきり女性のSを発見した。由美を虐める演技は、正に演技以上に激しく、その時の彼女の表情は、いきいきと光り輝いて、こよなく美しかった。Mの男性が見たら、垂涎一丈、等しくこの魔性を帯びた女人に虐めてもらいたくなるに違いない妖艶さであった。

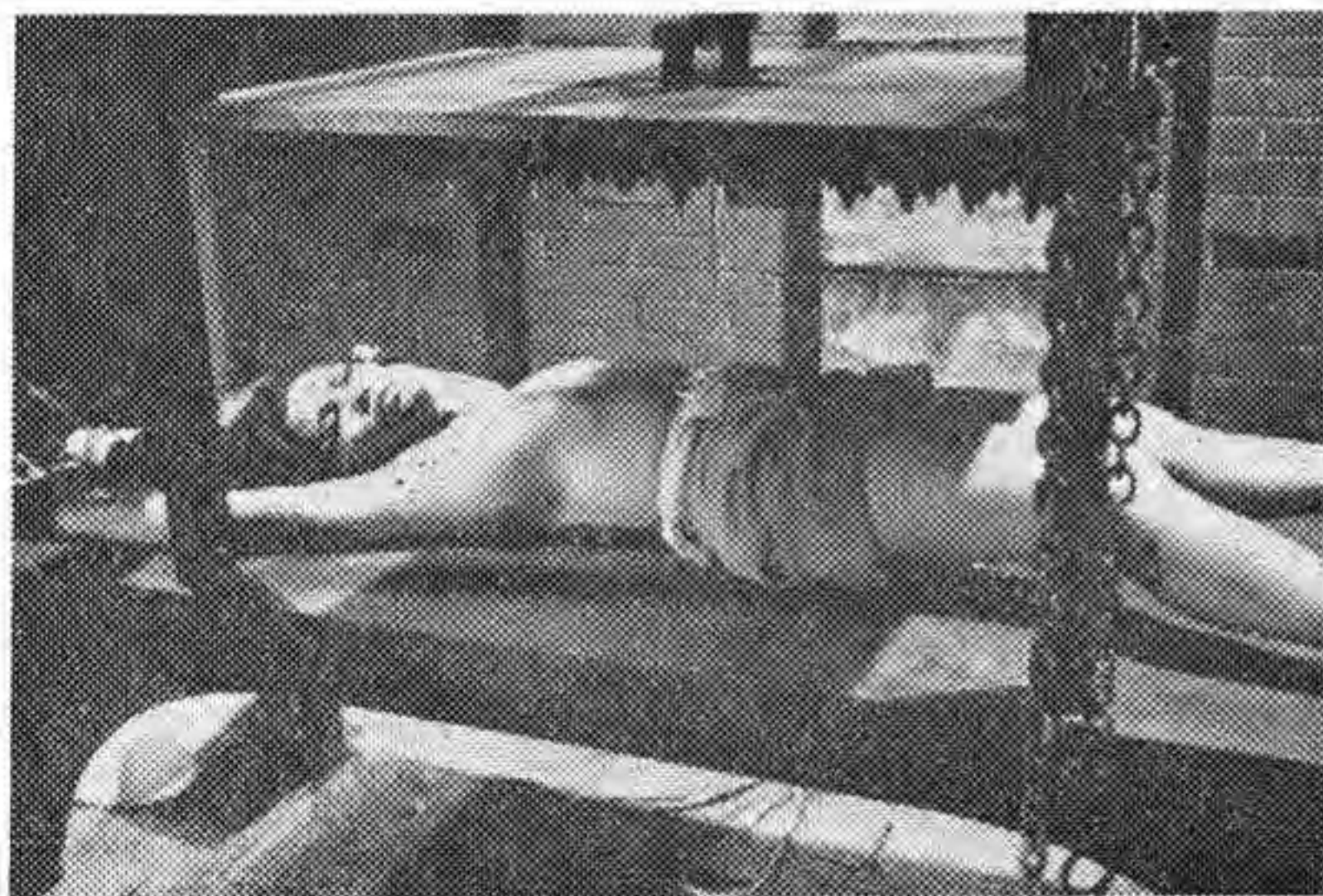
本番——。丁々発止と長煙管が、由美の肌に飛び、臀部に音を立てた。めくり上げた双丘にバチバチと平手が飛び交い、じっと妖しく由美の肌をみつめる眸が艶にうるむと、お竜はガバと由美の体にのしかかって、豊かな白い丘に歯を立てて噛みついた。そろそろとお竜の手が由美の上半身を撫でて行く。演技に脂ののり切った時、カントクさんは急にカ

ットを叫んだ。

「おひるにしましょう」

「続けてやらせて下さい」

お竜は思わず口走っていた。盛り上った感興に水をさされた感であった。それは私も同感であった。何故だろう？ この不審を抱い



た俚、已むなく私も昼食に立たざるを得なかった。十一時半——少し早過ぎる時間であった。スタッフの誰しもが不審に思っていた。その不審は食後、氷解した。石井組の部屋でカントクさんはいった。

「藤本三重子の襦袢姿をみて御覧なさい。襟もくずさないじゃありませんか。レスポスに耽溺する女同志——あんな端然たる姿で愉しみますか。せめて片肌ぐらい、脱がなくちゃね。午後はそのつもりで藤本ももう少し脱がして下さい。辻村さんらしくもないですよ」成程うかつであった。由美許り脱がして、お竜を脱がさないのは片手落ちである。

午後セットに入ると、既に言い含められたのか、やや羞恥の翳を頬に浮かべて、藤本三重子は片肌脱ぎになった。しかし乳房は隠されている。それが彼女の精一杯の妥協であろうか。由美の股にお竜の脚が分けいってのしかかって行く。妖しい女同志の耽美の世界が展開していった。顧みてこのシーン、オーソドックスであったかも知れないが、これ以上のどぎつい構成は映画という枠の中では無理なのではなからうか。

続いて、由美に早縄をかけて、小池朝雄さんの彫辰に由美の肌を見せるシーンが続く。



カット代りで、女性二人は衣裳を変えて、演技は続いた。彫辰に扮する小池さんは、「刑罰史」について、又しても彫もの師である。よくよく刺青師に御縁があるらしい。

片手を縛られた由美が逃げ込んでくる。お竜がしごきを引っ張ると、その力で由美の体にしごきが巻きつき、後手に縛られて、うつ伏せに蹴倒されて、両脚を残るしごきで縛るという早業で、数回のテストでO・K。

由美てる子はどうやら生理らしかった。しきりにかかわれているのが面白い。女にメンスある如く男にオンスがあるのだと男連中口を揃えて真顔でいうものだから、半信半疑の彼女、何となく本当かしら、という顔付になってくる。高校出たてのこの十八才の娘にとって、映画界は未知のことが多かった。連日自分の主役のシーンが続くものだから、かなり甘えだしたことは確かであった。

レスボスのシーンで、由美がちっとも芝居の心を掴まないものだから、カントクさんが「由美、君はホン（脚本）を読んだかい？」といわれて、

「ハイ、読みましたけど……」

そういい乍ら、提げ籠からとり出した台本は、折目もない真新しさであった。

「少し不勉強だぞ。遊んでおらずに、夜は少しホンをよく読むんだよ」

カントクさんは優しい顔を崩さず、言葉はきびしくたしなめていた。確かにこの若いズブのシロウトの俄かスターは、行き当りばつたりの、その折々の演技（という程のものもなかったが……）を、唯、いわれる尽にやっているに過ぎない感じであった。

その夜、八時に終わった時点では、まさかこの由美てる子に、スタッフ六十人と数多の俳優さんがキリキリ舞いさせられようとは夢想だにしなかった。明日はいよいよ貞操帯装着のみせ場と、尾花ミキの吊り責であった。

——由美てる子、

一日失踪事件の

真相——

私も連日の出勤である。四月一日は休日であったが、金原奈加子をとっているので、この五日間、ドッポリと猟奇と耽美の世界に沈み込んでいる。少しやつれた感じなのは、糖

尿病のくせに過労と不摂生のせいであろう。自らの命を縮めているとは分かっていてもやめられない処に、私の宿命の業（ごう）があった。

午前九時半、少し遅れて出てきたが、その尽スタジオに走ったら、スタッフは誰もいない。変に思って石井組の部屋を覗くと、一同ボンヤリしている。

聞けば、肝心の主役、由美てる子が未だ来ないという。

東映の定宿になっている、近くの菊香荘に進行さんが走ったが、帰ってきての報告は、昨夜寝る時には、宿の女中さんに朝八時に起







こしてくるよう告げて様子も普段と変わりなかったのに、夜明け方、荷物も纏めてこの宿を失踪していたのであった。

時は刻々経ってゆく。出番の尾花ミキさんも、林真一郎さんも扮装して待ち、忙しい小池朝雄さんも彫辰に扮して現われる。しかし由美は未だ行方不明である。

午後になっても、依然、消息は掴めなかった。由美がこの菊香荘を抜け出したあと、東京から来た友達（男性？）と京都の某ホテルに泊ったらしいが午前七時半には出ている。それ以後、沓として足どりが掴めなかった。

彼女が高校時代から既にセミヌードで男性週

刊誌にのり、カメラ雑誌の宣伝モデル等やっていて、年令に似ず、かなり早熟で六本木あたりにもしばしば出入りしていて、いわばフリーテンジミたところのある少女であったことも、続々ニュースとして流れ込んでくる。何も知らないネンネと思っただのはスタッフの眼鏡違いで、相当のカマトトであったことも分ってきた。

昨日は生理とかいっていたから、情事で唐突的にハプニングな行動をしたとも考えられない。或いは生理が彼女を突発的に衝動にかりたて、一時的な異常心理でフラリと姿を消したとも考えられなくはなかった。性医学的に、そうした症状はしばしば報告されている事であった。生理中の虚言症、不安な躁鬱症といった例も私はよく聞いている。

しかし、何といってもスタッフ数十名に迷惑をかけ、限られた日数のセットを一日無駄にした損

害は大きい。いくらズブの新人にしろ、女優と名のつく限り、これはマナーを逸脱した行為であった。そうでなくとも連日夜間撮影で強行しているのに、この一日の無為はスタッフ一同は勿論、東映にしても痛かったに違いない。かくいう私も、こうして遂に半日を、なすことなく無駄に過ごしてしまった被害者の一人であった。

午後二時、カントクさんは遂に東映首脳と相談の上、断を下した。

急転、由美てる子の代役を立てることに決定したのであった。シナリオは当然改編されるだろう。

製作スケジュールがつまっているため、すでに撮影済みの由美てる子のシーンは一刺青女郎の責め場として、使えるところは残し、脚本上どうしても必要な、他の俳優さんとの絡みシーンは振り直すことにきめた。

代役として浮かび上ったのは東映京都の第十期のニューフェイス、片山由美子である。今年十九才のお嬢さんで、彼女もこの映画の刺青女郎の一人として端役で出演していたのが、一躍抜擢されることになった。

「責め地獄」の、映画中の主人公の名前が由美。そして新人由美てる子で、代役が片山由



美子と、どこまでも由美という名に因縁のつき廻る、奇しき名であった。苗字の由美（てる子）が名前の（片山）由美に代って、緊急会議である。シナリオの改編で、ここ二、三日は日があきそうであった。既に現在の大黒屋セットは十日限りで、それ以後は再開された『トラ・トラ・トラ』の貸スタジオに決定されていた。それ迄に、どうしても大黒屋のシーンは撮り終らねばならなかった。

追いつめられたカントクさんの表情は、流石に日頃の柔和な笑顔が消えて、苦渋にみちてきびしかった。

十八才の小娘に振廻された口惜しさは、口には出さねど、カントクさんの腹は煮えくりかえっているだろうと察せられた。

四月三日附の、スポーツニッポンの芸能欄に、『裸身買われた由美てる子』という表題で、新人放れのいい度胸と、宣伝スチールと共にPRしたのに、その翌日、失踪されてはこの新聞もたまらない。

早速四月七日附の同紙に『由美てる子おろされる——エロに過ぎると「一日失跡」』と再び書き出された。代役の片山由美子のこと書き出してあって、その記事はかなり正確であったが（裸で責められる由美てる子、残



酷シーンの連続に「ついてゆけなくなった」という）傍題で載せたフォトが、いけない。このフォト、由美てる子に非ず、私が期待をかけている黒田のり子の、猪吊りシーンのフォトである。何かむしろ、エロ過ぎると書き立て、こうして黒田のり子の猪吊りなどのせ

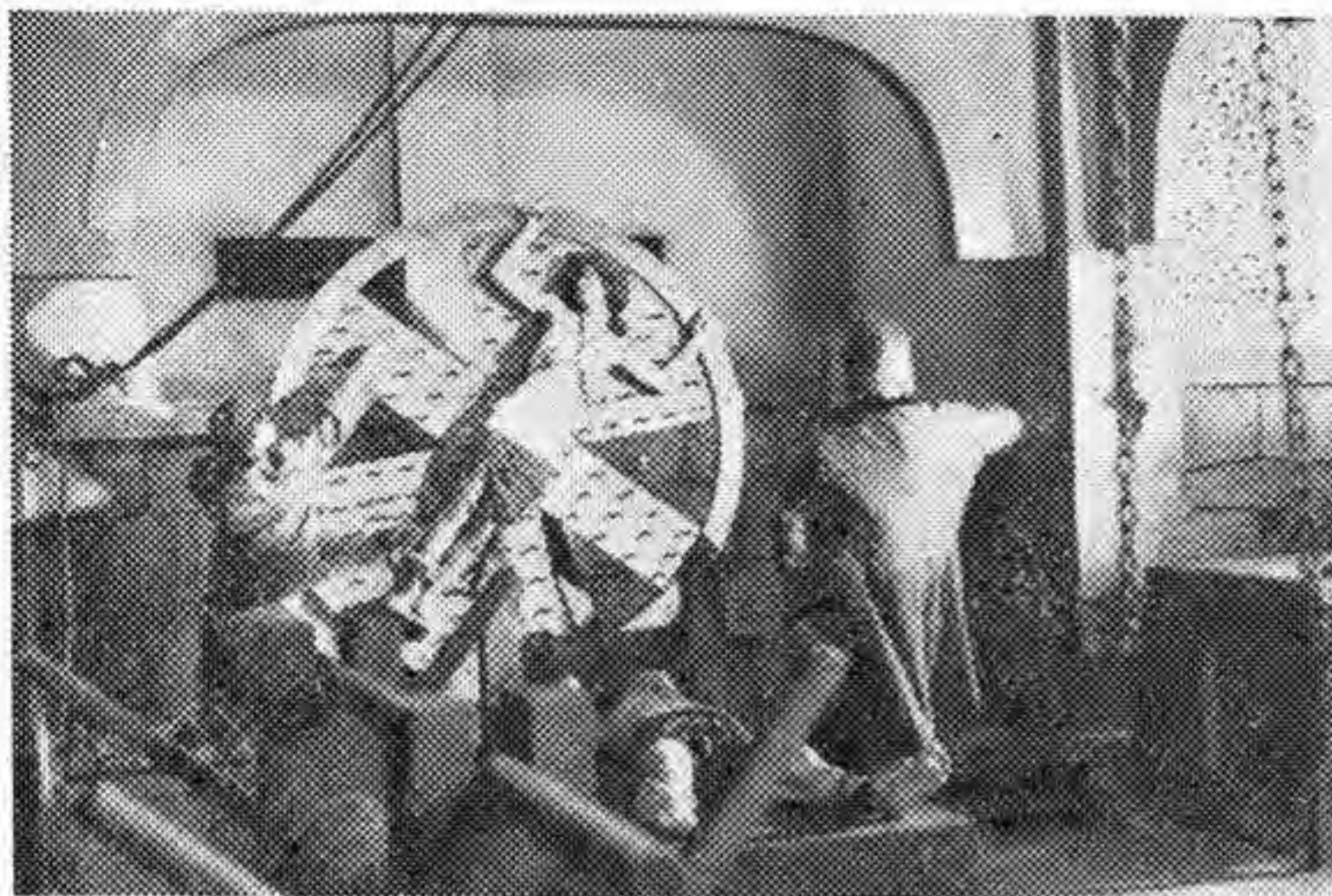
ると、何も知らぬ大衆は、反って興味をもつもので、逆も又真のPRの様であった。

記事、スタッフの声として「ズブのシロウトの彼女が、怖じけづく気もわかる」と書いてあったが、こうした声も囁かれていることは私も薄々知っていた。スタッフの中には（エロ映画を追放しよう）というスローガンを刷り込んだ、黄色の布ぎれをズボンやシャツにピンで止めて、微妙な複雑な気持で、この『責め地獄』を製作している人がいるのである。それは冒頭にも書いた、朝日新聞での助監の言葉を裏書する行動であった。その可否は私は関知しない。私は緊縛指導として、与えられた職種を、自分のギャラに応じて忠実に実行すればよかったからである。

しかし翌日、東映へ現われた由美てる子の言葉の記事には、かなり抵抗を感じた。記者はそれをその修正直にとったのであろうが、私には、そうは思われないフシが多かった。

次に新聞記事の彼女の言葉を収録しよう。『謝罪のため、撮影所に現われた由美は蒼ざめた表情。「とんでもないことを起こしちゃって……ご迷惑をかけました。御免なさい」と消えいりそう。「でも裸で天井からつるされ、ガラス張りの下から写されるなんて、あ





んまりひどい。エロ映画みたいなシーンが多すぎて、こんなことをやっている自分がいやになった」と昂奮気味。その日は「旅館を飛び出したあと、京都の古寺を廻ったり、大阪まで足をのばして、イヤな気分をまぎらわしました」という。そして最後には「おろされ

てなにかホツとした気持です」と語った」とある。

恐らく、スポーツニッポン紙の記者は由美のその言葉通りを忠実にのせただけで、私も表面上、そう云わないと恰好のつかない彼女の気持も分るのである。

そこで私の反論と真相で、これは私自身の考えであるが――。

第一、裸で天井から吊るされた撮影は三月三十一日である。翌二日、三日とは、前述の通りの演技で、由美は気持よく協力していたことである。失踪するなら、何故その次の撮影の二日にやらないか。でないと辻褄が合わない。

第二、例えばズブのしろうとにせよ、台本を渡されて引受けた以上、その内容と、自分の役柄は知っていなければならない。過去数日撮ったシーンは、すべて台本に忠実で、ハプニングは何もなかった。いみじくも失踪の前日、カントクが、不勉強だ――もっとよくホンをよめといった時、彼女の出した台本は真新しく、読んだにしろ、さっと眼を通したに過ぎないものであった事は間違いない。いかに高校卒はやはやの小娘にしろ、それぐらいの義務と責任と、自分の役柄ぐらいは知って

いて当然である。

ちなみに、裸で天井から吊るされたシーンのシナリオを掲げてみよう。

#5 大黒屋・広間（由美の回想）

逆さ吊りにされた全裸の由美。その由美を激しく鞭打する緊縛師の弦造。

由美、苦悶の叫びをあげ、のけぞる。弦造、由美の身体をコマのように廻す。

ぐるぐる回転する乳房。

豊かな臀部――

ひきつった目――

#18 もとの大黒屋の広間

くるくる廻る逆さ吊りの由美

ツバを飲み、見守っている客たち

鞭を振るう弦造。

由美の声「ここは世にも怖ろしい地獄のような邸でした」

#19 その階下

天井がガラス張りになっている。

責められる由美の四肢を仰ぎ見る。

客達の異様に光る目、目、目。

#57 大黒屋・広間

彩色をほどこされコマの様に廻るさかさぶりの由美。

#58 同・広間の下



見上げる重役風の客たち。

#59 同・天井の覗き穴

由美の裸身に視線を注ぐ目！目！目！

#60 同・広間

さかさぶりの由美、激しい苦痛にゆがんでいる。

由美「あッ…あ、苦しい…あッ…」  
その絶叫がズリさがって――

と、責め部屋の逆吊りシーンの部分を収録してみても分る通りカントクさんは、シナリオ通り実行したに過ぎないのだ。

シナリオもろくろく読まず、唯、スターに憧れて、闇雲に飛び込んで来た彼女の方に重大な落度があったといえないだろうか――。  
在学中でも、彼女は試験になっても、何も勉強せず、本も読まず、研究もせず、テストにのぞんだというのか。

由美の役を承知した以上、こうなることはすべて既定の事実であるとすれば、スタッフの「ズブのしろうとの彼女が、怖気づく気も分る」という言葉は、余りにも甘い彼女への慰めではなかったであろうか――。

彼女をハプニングな一日失踪へ走らせた原因を、好意に解釈するならば、それは生理が

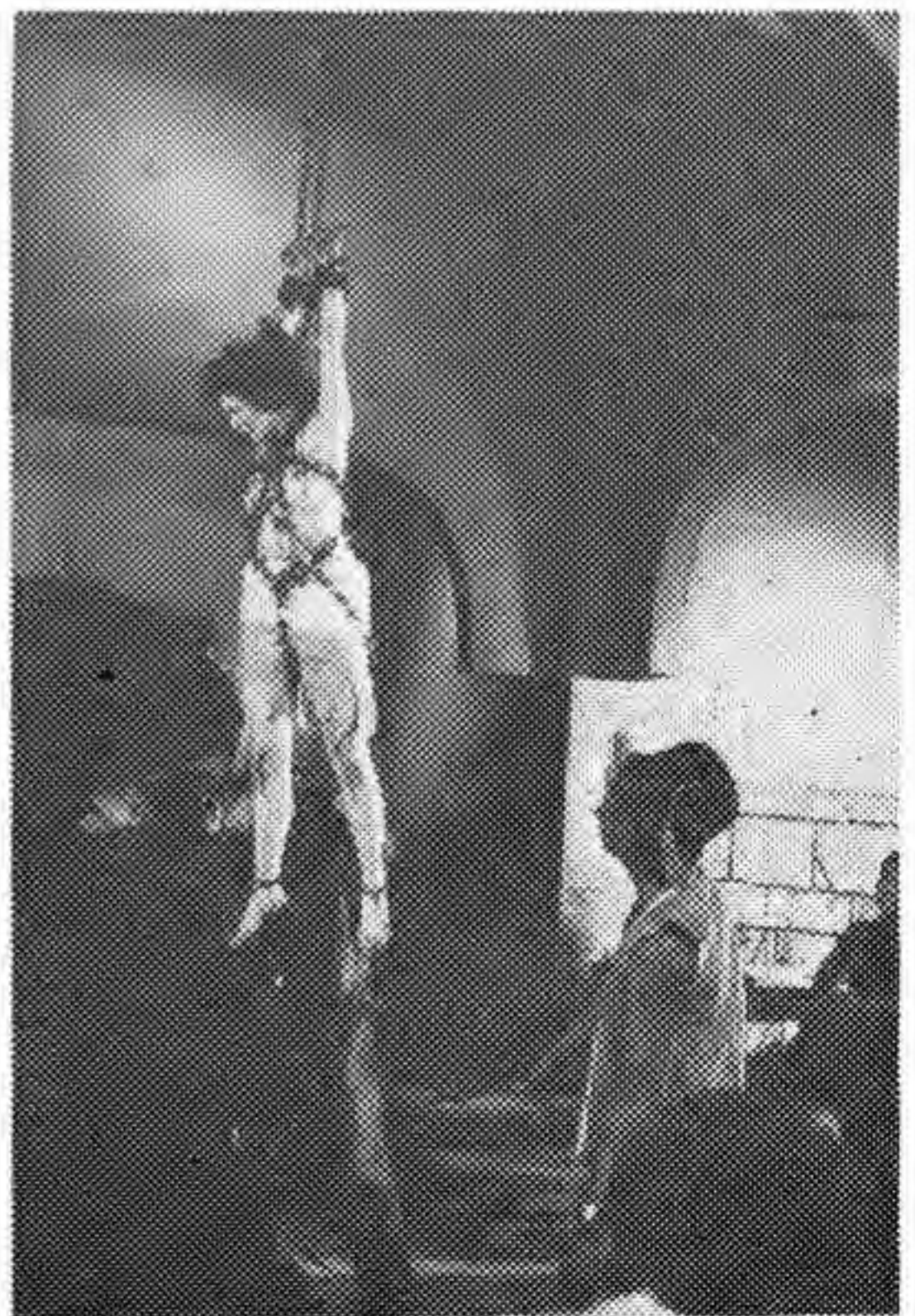
彼女の精神を不安定のストレスにせしめたのではなからうか。連日続くショックなシーンの連続の日にたまたま生理――。それがはしなくも、彼女を自己嫌悪と羞恥と屈辱と不安の世界にひきこんでいったというのが、最も好意的な解釈である。

しかし、もっと穿つ

た見方をする、この生理云々も何か割り切れないのである。誰一人、彼女の生理の実際を見たわけでないから、衝撃的な演技から忌避しようとして、生理だと偽ったようにも思えるフシがあった。

その日、ギャラの前借をした彼女は、スタッフのある若い女性と、夜の十一時過ぎまでビールをのみかわし、何か吹き込まれた様な疑問が多々あるのである。それに東京の恋人を京都へ呼びよせるのに、わざわざ生理時期を選ぶ筈もない様に思われるのである。

あとで分ったことであるが、由美てる子を



東映に紹介したプロのマネージャーが、彼女のギャラの半分をピンハネしようとした事実から、あるいは契約に不満を感じた彼女が、浅はかな女心から、一日失踪を画して、ギャラを吊り上げようとして、ものの見事に当てが外れた様にも思われるのである。或いは由美の相手の男が、彼女のそうした演技を嫌ってやめるようにそののかしたのか――。かなりの謎に包まれた彼女の姿は、恐らくもう二度と見る機会もないだろうが、数々の吊り責めに協力した彼女だけに、刹那の悪い夢と、過去を忘れて、幸せを掴んで欲しいと希うの



みである。

—— 開股吊り責め、貞操帯 ——

シナリオの改編、片山由美子での撮り直しなどで、数日間日があいて、私が東映へ出掛けたのは四月九日であった。

お竜の留守を狙って由美を犯した弦造に、



その報復手段として、弦造の妹ゆきが責められた挙句、両眼を潰され、由美も亦貞操帯をはめられて、弦造もお竜に罵り殺しになって行くという残酷シーンである。

片山由美子はその日始めて判っきり顔をみて紹介された。刺青女郎の一人として端役で出演していたが、関係のない私には、どれが彼女か気がつかなかったのである。

彼女を一見した時、私は増田みゆきを思い出した。体つきといい、容貌といい、どこか似かよったところがあった。

彼女は流石に自分の役柄を心得ているのか私に会釈して、

「よろしくお願いします。出来るだけお手柔らかに縛って下さいね」

と笑った。昨夜、私が是非ない用件で出なかったのも、やむなくエーちゃん等が彼女を縛って、責め部屋での逆吊りのとり直しをしたといっていた。やはり泣いたそうだった。

午前中は、由美が土蔵の中で、お竜に責められるシーンである。相手代れど主代らずとはこの事か。責め方について、藤本三重子さんは艶然と微笑みながら、あれこれと私にきく。

私の一案として、胴体で仰向けにして吊り

上げ、垂れ下った両手足を一緒に縛って、桶か何かぶら下げるという案であったが、背が弓なりに彎曲するので、一度やってみたが、由美は到底たえられず、泣きべそをかいたのでこの案は中止した。

しからば海老吊りはどうであろうかと、彼女に直ちに試してみる。行儀よく膝を揃えて正座させ、後手にして脚から背へZ形に彎曲させて縛って吊るのである。痛くない様赤いしごきを使ってみた。締め方がゆるいと反ってポーズが崩れて痛いので、かなりぐっときつく縛り上げる。最初なので吊具を使って腰巻で隠し、吊り下げてみる。この吊り方なれば、片山由美子の背のドクロの刺青は、はっきりと見える。

お竜がローソクで由美の肌を灼き、果ては蠟涙を垂らしてゆく。ぐるぐる振り廻されて懸命にこらえていた彼女も、遂に悲鳴をあげた。緊縛に飼育されていない彼女にとって、これは精一杯の忍耐ではなかったろうか——虐める時のお竜に扮した藤本三重子さんは、実にいきいきと生きていて、愉しそうである。藤本さんの、その悦虐の表情の中に、何度もうかが私は、はっきりとSを感じた。

午後より尾花ミキの、開股吊り責めが始ま



る。蔵の中のセットの四人のスターのうち、藤本さん以外の三人までが縛られているという嗜虐、緊縛シーンである。

奇クの存在を知ってから、すっかりこの本のファンになった林真一郎さんは、

「私の顔も大写しして、縛られたところを是非のせて下さいよ」と頼まれる始末。林さんには、先日の由美てる子失踪の日に、尾花さんと私が昼食を奢ってもらっているの、その手前でも協力せざるを得ない。それに役柄が、緊縛師という、前代未聞のヘンな役である。昔、そんな職業があったのですかと真顔できかれたり、キン・テン・シと呼ぶスタッフがいたり、いっそ辻村さん、緊縛師のプロになったらどうですと冷やかす人あり、いやもうテンヤワンヤである。

由美にはめた貞操帯の鍵をのみ込むシーンなので、已むを得ず、林さんには前手縛りの両脚縛りという構図をとってもらった。

背中合せに縛られる由美には、オーソドックスな、奇ク向きの緊縛を、この日始めて用いた。私の縄を使って乳房の上下に胸縄をかけ、両手を背後で縛って、首から回した縄を振って垂直に降ろし、腰で止めたのである。

過去の映画で、緊縛に馴らされた尾花ミキ

は、強烈な開股吊り責めを、長い時間に亘って、殆ど不平もいわず耐えてくれた。どの映画にも彼女には、まるで宿命のように縛られるシーンが付き纏っている。

このシーンは残酷そのもので、燭台の尖端で吊り下った俤、両眼を突き潰されてしまう



のである。彼女の両眼は鮮血の紅に蔽われ、すっかり見えなくなっていた。しかも林真一郎と片山由美子、藤本三重子の三人の演技の間、ずっと頭を逆さにして吊り続けられていた。この尾花ミキの被虐の超忍耐性はどこから生まれたのであろうか。かつて『刑罰史』で初めて縛った時、ごく初歩の縛りにもかかわらず、泣いた彼女が、今一滴の涙すらこぼさず、じっと逆さ吊りに耐えている姿に、私はミキの被虐の成長をまざまざと感じたのであった。苦しいポーズに違いないのに、じっと耐えているミキに、私は激しい根性のスターを見る思いであった。

腰巻を外された片山由美子が、全裸をむき出しにして、貞操帯を嵌められるシーン——流石に代役に抜擢されただけあって、彼女はいさぎよく、度胸もよかった。後手も完全な緊縛で、縄もかなり深く喰い込んでいる。この日の為に、林さんと片山さんの縛り縄は、私が持参した、日頃使い馴れた縄であった。

「痛くないでしょ？」  
ときいたら、

「ええ、我慢出来そうです。痛くはないけど羞ずかしいわ」

と、ポツと顔を赤らめる十九才の純情さで



ある。髪の毛も彼女自身のもので、かつらはつけていないので、そのクローズアップは、その俚現代の奇クグラビアにも通ずる縛りの構成であった。はしなくも今日私は始めて辻村流の縛りを誰に気兼ねすることなく出来て、私自身本望であった。このシーンにカラーモノクロ合わせて、百枚近いフィルムを費消していた。

三人の男女を代るがわる責める藤本三重子さんの表情は、いよいよ愉しげに輝き、演技は迫真的に躍動していた。

緊縛師、貞操帯と、時代を超越したSM的なものをつくり出して、ハレンチ映画は快調に進んでゆく。

午前、午後、そして、垂直吊り責めの夜間と、終日この日一日、私は監督のSMコンサルタントとして活躍し、しかも私自身の嗜虐の想念も十分に満足しきった一日であった。

### ——垂直吊り責め——

三月末、由美てる子で撮ったシーンの再度撮り直しである。彼女に実施した、開股逆吊り、片脚逆吊りのシーンが迫力があるので、これはこれで、一刺青女郎が責められているシーンとして残すことになったので、片山由美子に対しては、未だ実施していない吊責め

ということになった。てっきり同様の緊縛で撮り直しと思い込んでいた私は、大いに慌てる。由美てる子に、強烈な逆吊りを使用済である。これ以上どんな吊りがあるだろう。カントクさんから言われて、しばし沈思黙考、結局、逆吊りではなく、垂直に吊り下げるところを提案したのである。これはこの八角の拷問広場で、未だ実施していない吊り責めであった。

手首から足首まで全身を棒と緊縛して、両手で吊り下げる。

大黒屋使用の青い縄なので、これはかなり痛い。一度試みにそっと吊ってみたら、忽ち彼女は魂切る悲鳴をあげた。両手首に深々とかたい縄が喰い込んで、到底辛抱出来ないものであった。已むを得ず、吊具を使用して、手首に通して、それらしく見せかけることにする。これなら少しの時間なら持ちこたえられるようであった。

片山由美子は声も出さず、臉に一杯涙をためて、恨めしそうに、このアイデアを提供した私をみつめていた。すべては私の案ひとつにかかっているだけに、その眸には哀願の色が漂っている。

「どうしましょう」と私は、カントクさんに



うかがいを立てる。

「いいですよ、やりましょうよ」

「長時間は無理と思いますが……」

「いいですよ、思い切ってやっちゃいましょう」

カントクさんはニヤニヤしながら平然と応





える。

「私はどうしましょう。本当にぶっていいんですか？」

傍から、林真一郎さんが聞く。黒装束の、颯爽たる二枚目タイプだ。

「ああ、本番で強烈にやって下さい。迫力が

出ませんからね、本気でぶたなきや」

「少し気の毒だなあ——」

元来がフェミニストの林さんの表情は、やや困惑顔であった。

「吊りますよ、いいですね」

私は片山由美子に念を押す。うるむ瞳で彼女は詮方なく、うなずいた。

いよいよ本番——。高々と吊り下った彼女の体が、林さんの押す力で、大きく前後左右に旋回し、激しく揺れる。苧殻の叩き棒を打ち振る林さんの手許が、正確に由美の尻を、腰を打ち、ビュンビュンと空を切って、苧殻は由美の肌で碎けて、パシリ、パシリと容赦なく音を立てた。必死に苦痛をこらえる由美の、苦悶の顔が揺れて廻る。グツと思わず息をのむ激しい嗜虐の責めシーンであった。

シーンと固唾をのむスタッフの面前で、ジジとカメラだけが、非情に廻りつづけていた。

「く、くるしい、おろして……」

「我慢——、もう少しだ——」

カントクさんの叱咤がとび、由美の体は寸分の休みもなく、呻きを洩らして空に躍ってはねて揺れていた。思い切り力をこめて緊縛師は、由美の体を突き放す。肉体のブランコ

は一入大きく左右に、振子のように振幅をくり返す。林さんの叩き棒が弾みのついた尻をねらったのに、手許が狂って、由美の脇腹をしたたかに打ちのめした。

「グエーッ、い、いたい……おろして……由美、死にそう……」

切れぎれに叫ぶ、由美の頬に、どっと溢れる涙が、押さえようもなく滂沱と流れる。

「カット——」

やっとかかる蘇生の掛け声——。

ずるずると降ろされて、由美は見栄も外聞もなく、その場に崩れるようにヘタヘタと、へたり込んでしまったのであった。

#### ——舶来拷問部屋の

#### 責めのかずかず——

連日つづく責めの数々——。翌日も私は既に朝の十時過ぎから、私の今日のシーンを待ち兼ねていた。

小池朝雄さんの彫辰が、お鈴（橘ますみ）

に刺青を彫るシーン。つづいて、お竜から麻薬をうたれるシーンなど、ひるを過ぎて夕方につづき、遂に夜八時過ぎまで、かかってしまふ。もっと早く終る予定であったのが東京——大阪を連日トンボ返りの、田中春男さん（与力鯨島）の時間の調整に合している為、



田中さんの出番を、撮り溜めしていたからであつた。

このステージには領事館の凝ったセットがあちこち一杯に組まれてあつて、一番奥まつた片隅が、西洋拷問場になっていた。時間待ちの間、私はこの無気味な拷問場に独り佇んで、責めの構図の思索を凝らしていた。

緊縛、責め場となると、カントクさんは、その構図の殆どを私に任せていた。期待に応えるべく私も又存分に、自分の考えを駆使出来たが、それなりに責任も重大である。

性愛路線第六作となると、この映画に対する風当たりも相当にきびしく、チーフ助監督の藤原さんが病気を理由にオリたと思うと、エログロ映画批判の声明を出し、各新聞でも大々的に報道されていた。助監督二十四人が集まって公式声明を出し、スタッフの中にも、ぼつぼつ脱ける人もあつてセカンド助監督の俵坂さんも、これは本当のムチ打ち症で休んでいて、残るは経験浅いサード助監一人という心細さである。四面楚歌の中で、主役交替の一幕もあつて、かなり遅れているにもかかわらず、東映のゴールデンウィーク封切の意向は変わらなかった。それだけに連日夜間撮影の強行軍である。自粛のつもりかポスターも

スチール写真なしのものと、ごくおとなしい後手緊縛の片山由美子の文身ポーズのみのポスターの二手をつくりそのどちらにも、緊縛指導という私の名は省かれていた。

それだけに、カントクさんの私にかけける期待も大きかった。何かカントクさんのSM面でのコンサルタントでもあり、時には助監督めいた仕事まで私に廻ってくる始末である。

連日の夜間撮影で、レギュラースタッフは夕方の定刻に止め、夜は、TVや社外契約の人などかき集めて撮る悪戦苦斗ぶりである。

奇クの世界に生きていた、SM的なプレイが、大衆の前に、その神秘のヴェールを剥いで、堂々と罷り通るところに、種々の批判もあるわけで、その可否については、SM面を担当する私自身すら、時には途惑い、ノーマルな女優さんが、SM的演技をすることに抵抗を感じる気持ちもよく分り、女優さんを縛っ



ている折ふし、フト気恥かしく思う事すらあるのだから、スタッフの眼から見れば、確かに異常に映ったに違いないと思うのである。所詮こうしたSMプレイは、四帖半的な神秘の中に閉された行為であると思うのは、あに私独りの想念にとどまらないのではなからうか。

そのくせ次々と変わったSMプレイの手のうちを見せてゆく私の構成に対し、スタッフは割り切れぬ抵抗と同時に、未知への興味をそこはかたなく覚え乍ら、誰一人一言も口を挟まず、唯私の行為を、ひたすらに見守って



いるのみであった。

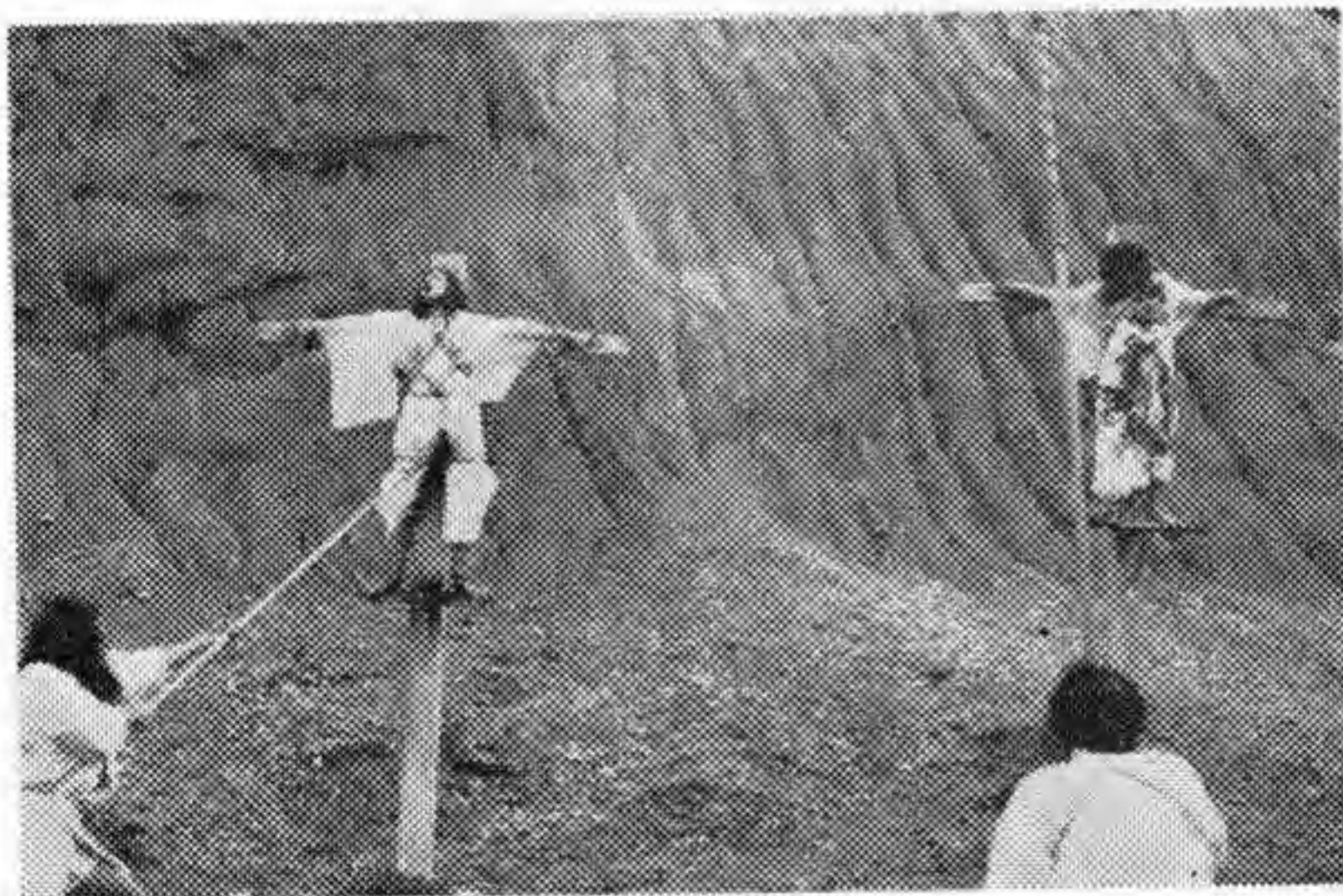
拷問場には、なつかしい「刑罰史」の外人に使用した拷問具も羅列してあって、目新しいのは、針の植えた鉄板がおりて、ジリジリと体を突き刺してゆく、人間圧迫器。無数にとげの出た円板に、体をくくりつけて、ぐるぐる回転させる、棘付回転板。両手を手枷にはめて車台にのせ、両脚首に縄を結んで、ギリギリと引張る、伸張器など、すべては魔女裁判当時の絵図を参考にして作製した、怪奇な拷問具ばかりである。しかも手鎖、足鎖、答、割れ竹、重し分銅などが到る処に転がっている。

今夜のシーンは、領事クレイトンに楯ついた女囚三人が、ここで手下のものに散々責めさいなまれ、果ては次々とクレイトンに犯されてゆくシーンであった。

牢名主に賀川雪絵、女囚に葵三津子ともう一人大部屋の人U子が扮して、やがてこの三人の、夜の哀れないけにえになる女優さんが入ってくる。カントクさんはすべて私に任しているのです、この三人の女優さんをどの様に料理しようと、それは私の自由であった。

カメラ、ライトの準備の間、私の構成が始まる。一番目立つ、晴れがましい場所に、賀

川さんを据えたかったので、棘付回転板に彼女を縛ることにする。勿論、映画のトリックであるから、この棘を身体にじかに受けては命がいくつあっても足りない。早速彼女の体の当る部分の棘がとり除かれてゆく。木片をとがらして打ちつけてあるから、さわるとか



なり痛い。強烈にみせるため、雪絵さんには鎖を使って縛る。大柄な彼女の、腕や脛のあたりが棘に触れて、赤くなっている。これを回転してみると、六十度ぐらいまでなら、何とか持ちこたえられそうであった。メーカーさんが血糊をつける間に、葵三津子さんを伸張器にねかしつける。両手首を手枷にはめ、伸張では面白くないので、両足首に足輪をはめ、鎖をぐいと手枷の方へ持ち上げる。頭上のあたりに両足が上って、開股になり、屈辱の羞恥のポーズが出来上る。馴れていないU子さんは圧迫器に大の字に手鎖、足鎖で縛りつけて仰向けにねかせ、尖った針の植えた鉄板を徐々に体に降下させてゆき、忍耐の限界を調べて、やっと私の構成は終る。

すぐ大柄な外人のクレイトンに、責めて犯してゆく順序を片言で喋る。大体日本語が判るから要領をのみ込んでくれる。中国人に扮した手下が数人配置につき、数度テストしたあと、いよいよ本番。悲鳴と絶叫がワンワンとこだまする拷問場で、すさまじい責めが始まった。私は息をつめて、この責め場を次々カメラに納めていった。クレイトンの演技も堂に入って迫力があり、この拷問シーンを息をつめて見守るスタッフの眼は異様にギラ



っている。賀川さんも葵さんも真実苦しげで、その呻きと悲鳴は、もう演技以上のものであった。長いシーンの間、咳をするものもない。カントクさんのカットの声で、一様にホーッと深い溜息が洩れて出た。

### 鎖吊責めシヨウ

昨夜に引続き、領事館の拷問部屋にての、黒人緊縛師による、責めのシヨウのシーンである。この映画に於て、責めそのものを、判つきりシヨウとして見せるところに、いろいろ批判の声もあって、助監造反の件も、そのあたりに大分起因している様であるが、私と

してはベストを尽すより仕方がない。

盲目のゆきに扮した尾花ミキの責め方は、すべて私に一任されていた。

私という人間をかなり理解し、石井学校の優等生の彼女だけに、やる方の私もラクである。数多の外人や中国人、高級武家の眼前で責めのシヨウをお目にかけるのだから、拍手を戴くようなアイデアでないと、一同の拍手が白けたものになってしまう。

装飾のエーちゃんに相談し、色々と小道具を検討しに走って、やっと一つの想案が纏まってくる。鎖による吊責めをし、裸身を有棘

考えを話すと、流石に驚いた様子であったが辛抱出来るならやりますという、けなげな返事であった。

熱気に溢れた拷問部屋に、ライトが煌煌と眩く輝く。見物の連中一同、石だたみの責め場を中心にして配置につく。

腰に吊具を装着し、両手首を鎖で締め上げて、腰より吊る鎖を、手首の間に通す。

有棘鉄線は装飾苦心の作品で、とげは硬いゴムで巧みにつくられてあるが、裸の肌にじかに触れると矢張りチクチクとかなり痛い。尾花ミキは少し顔をしかめたが、私は委細構わず、首から胸、腰から肢へと巻きつけてゆく。こうしておいて、足首に分銅をぶらさげテストに、いよいよ吊ることになる。

縛られた両手で、ミキは吊鎖をしっかり握った。手下の中国人三人掛りでガラガラガラと鎖を引き揚げられ、彼女の体は忽ち宙にうく。こらえようとする忍耐の限界を越えて、ミキの形相は苦痛に歪み引きつっていた、あわてて下降させて、

「痛いのか？ どこか？」

そうきくと、可哀想に無理に笑顔をつくりながら、

「少しなら我慢出来そうなんです。でも両手



鉄線で縛って、両脚に重い分銅をぶら下げ、高々と吊り上げて、革鞭で打擲するという、聞いただけでも卒倒しそうな責め図である。早速カントクさんにこの構成を話すと、出来る可能性があれば大いに結構と仰有る。支度の出来た尾花ミキをつかまえて、今夜の責めは、斯々如々と



で握った鎖の手が痛くて。それに体が前屈みになるから、体に巻きつけた鎖が首をしめつけて、とても痛いのです。でもいいんです」

謙虚な彼女は、遠慮し勝ちに、そっと私に小声で訴えるのであった。もう以前の様に、お手柔らかにとか、ゆるく縛ってくれとかいう様な泣言は云わなかった。自分の役柄の立場を理解し、見ためにはどんなにひどくても、無理な苦痛を与えない私の性格を知ってか、唯、長時間に耐える様な状態であれば、相当な責め苦はたえ忍ぶ覚悟であった。

傍らのエーちゃんが、いい智恵を出してくれた。鉄鎖の合間へ、長いかすがいを差し込み、それを握ってぶら下ってみたらどうかと提案したのである。

いわれる俚に、尾花ミキはそれを力強く握って、もう一度テストしてみる。体が垂直にたれて、これならしばらくの時間持てると彼女は空間から私達を見下ろして微笑んだ。

「いかがでしょう。このポーズで——」

カントクさんに伺いを立てると、ニコニコし乍ら、お気にいった様子で

「いいでしょう。迫力もありますし、じゃあ準備出来たら本番とゆきましょう」

これで私の任務は終わった。演技の細かい打

合せと共にメーカーシップさんが、有棘鉄線に沿って、丹念に血を流し、その血が腿から脚下へシトシトと尾を曳いて流れて行く。

さっとスタッフが緊張し、カメラ位置は、クレイトンの部屋の、ステイント硝子の窓に据えられ、場内が鎮まるとカチンコになる。



三人の中国人がガラガラとミキを引揚げて、高々と宙吊りにする。黒人の緊縛師が、革鞭を振って、ミキの腰や腿を打つ。魂切る絶叫が部屋にワンワンと飴し、鞭ふる緊縛師の手にも力が籠って、ピシリ、ピシリと数度、革鞭がするどく、ミキの皮肉に炸裂していた。

一斉にどよめく拍手——。その拍手の音のひとつに、思わず叩いた私の手の響きもまじっていた。その惨絶なるシーンは、私自身考案しておきながら、本番の凄まじさに、胆に灼きつくように、強烈な印象を植えつけたのであった。

フィルムが静止し、下降したミキの呼吸は流石に荒かった。剥き出しの胸のふくらみが激しく波打っている。

「よく頑張ったね、すごかったよ——」

鎖を解きながらいたわりの言葉をかける。既に私の手は、血糊で真赤に染まっている。

「テストが少なくてラクでしたわ。辻村さんの縛り方がよかったのか、それほどでもなかったの、私の演技、本当によかった？」

「よかったとも、最高だよ」

お世辞でなくそう言って、冷たくなった両手首を撫でさすっていた。

「もう、私達の責め場、今夜で上りなんです」



よう」

「そうだね、又、いつ会えるか。元気でね」

既にライトの落ちた、寒々としたスタジオで、二、三人跡始末しているスタッフを除いては、ミキと私だけが残っているだけであった。血まみれの彼女の体を拭いてやり、そつと背からハンテンを着せかけると、近頃急に色っぽくなった彼女の眼が、私に感謝の秋波を送ってきた。

夜の十時——第一スタジオを出た私達二人はそこで軽い握手を交して別れた。小柄なミキの背が心なしか、やつれていた。

### 磔刑・鋸引・竹裂き——

日程が煮つまっているから、雨でも好天でもロケに決行。場所は京都郊外、国道九号線沿いの、花の寺に近い、大原野の未開拓地。

一行のバスの尻を追って、十時過ぎ車でロケ地に到着する。

夜来の雨で、切り立った崖の山肌は、亀裂やひだを無数に赤茶くさらして、大きな山壁が、まるで小川のようになって、出水が奔流となって流れている。

四月の中旬というのに、風は強く空気はひえびえとして、まるで三月初めのような肌寒さであった。

午前中は、鋸引きのシーンで終わってしまった。

山肌の下に、人間一人すっぽり這入れる穴が掘られ、三人の大部屋の女優さんが、下半身を厚いゴム衣でくるんで、穴に入る。

検分役、非人の位置もきまり、いよいよこの映画のタイトルの刑罰のシーンが始まる。

三人の女優さんのうち、二人はもう相当の年輩で、右端の人は子供連れでロケ地に来たらしく、幼い澄んだ子供の眼が、穴に埋められた母親の、無惨な姿をジーンとみつめているのが、私の心をチクリと突き刺した。幼な心に残る、この母親の姿を、子供はどんな心でみつめていることであろうか——。

幅広い竹鋸で、首を引き千切られるのは、カメラに近い若い人であった。カメラの位置はぐっと低く、地上すれすれに、この惨劇を捉えようとしていた。ここに私の出る幕はない。シナリオ通り

のことが、スタッフによって準備されていたからである。

刑罰のもの本では、飾りものに過ぎない竹鋸が、この映画のタイトルシーンでは、実際に首を斬り落とすのである。

合図と共に鋸が女囚の首に当てられる。女の絶叫——。そしてカット。生首は人形に入れ交わって撮影するため土をかきわけられて震えながらこの人は這い昇ってくる。血しびきがすべて穴中へ落下したため、彼女の全身はからくれないに真赤に染まっている。ガタガタ震え乍ら、女囚は役目を終ってバスに駆





けていった。人形の生首がコロリと倒れ、どつと噴き出す鮮血——。そして鋸引きは終わった。

午後は山襲近くに立てられた十字架に、五人の女囚が開股で縛りつけられ、股から突刺した不浄の槍が、体を貫通して口中より突出



るといふ、残酷シーンのタイトルのトップシーンである。

五人の女囚は、大阪のKスタジオのモデルさん達であった。小柄な色白のマネージャーが付き添って、あれこれ彼女達に説明している。女のような優男だと思って、エーちゃんと喋っていたら、

「女のようなって、そのものズバリの女ですよ」

「へーえ、あれが女」

背広にネクタイ、ズボンも勿論男ズボン。私はあきれて、改めてマジマジと？ 彼をみた。性の倒錯もここに到るか。男装の麗人というのはあるがこれは男装のみである。

その傍らに、もう一人、彼？ の兄貴らしい、顔立ちそっくりの男性に、

「あれも女？」

とエーちゃんにきくと

「いや、あれは男らしい」

と笑っている。らしい……という処が微妙であった。誰もシンボルをみていないから、らしいというより仕方ない。兄妹まったく良く似た顔付きである。

三尺高い磔柱に、薄い乳房の透けてみえる白い囚衣一枚で、開股で荒縄縛りにされて、

五人のモデル達は、唇を白くし、ガタガタと吹き荒ぶ風の冷たさに震え上っていた。

五人の女を、私は次々縛り、磔柱に追いつて、やっと一息つく。皆一様に同じ縛り方であるから、一人縛ればそれを真似て進行や装飾の人々が手伝ってくれた。

右手側三人は、既に股倉から貫通されて、ことごとく死んでいる状態で、殺陣師の三好さんが、遠慮会釈なく叩きつけるように血糊を白衣に染め上げてゆく。

四人目のモデルが受難の日であった。この娘の股間に、血糊の入ったビニール袋が挿入され、万一槍の手許が狂ってとはと、股間にジュラルミンの遮蔽板が、あてがわれる。突き損ないは許されないから、テストは慎重である。

竹矢来の彼方から、二台のカメラが女囚をねらい、いよいよ本番——。

非人の槍がしごかれ、さっと一突き、見事に股間の血袋を破裂させる。ドクドクと溢れる血しぶき——見ていて凄惨この上もない。

ついで、口中から槍が突き出るトリックで他の四人の女囚は磔柱を降りても、この娘一人に、スタッフはかかりきりになって、口辺りに血のりをしたたかに塗りつけ、槍の穂先



を啣えさせていた。

それを横目に、私は進行の俵坂さんに貸した車の方へ走っていた。遠目にも私の車が、泥沼に転落したのが見えたからである。

東映撮影所との連絡のために、気軽に貸した私のコロナが、戻って来て、運転手の不注意で、一見水溜りのようにみえた泥沼に、ズブズブと前車輪をのめり込ませ、トラックにつみ込んだワイヤーで、懸命に引揚げているところであった。運転手の努力でエンジンはかかるようになったものの、ブレーキが水浸し、私はその帰途、ブレーキを踏んで、しばしば半効きの制動にヒヤツとした。私の車にとっても、思い掛けぬ受難の日であった。

不測の車の事故でもたついている間に、ラストシーン、お竜竹裂きの刑の準備が出来ていた。二本の太竹が左右からしなり、その太竹の尖端に縄で逆吊りに高々と吊り下げる。役人が合図と共に縄を斬ると、竹はビュッと反動で反り返って、女体は真二つに引き裂かれ、宙に舞うという、世にも凄絶なシーンである。

背景を竹藪に、その場所は崖の上にしつらえられた。

女体が、両手を縛られて、逆さに高々と吊

り下げられる。吹き荒ぶ寒風に、ゆらゆらと女体は揺れる。

役人、捕方の配置もきまり、崖下から二台のカメラが、刹那のシーンを追う。

いよいよ本番——。合図と共に、さっと斬罪役が、真剣で縄をきる。

呀ッと思いをのんだ瞬間、女体は裂けず、竹

は戻らず、やや開き気味になった両脚が空間でブラブラと揺れていた。

藤本三重子さんとそっくりの犠牲の人形は注文通り股裂きにならなかったのであった。

半日以上、竹をしなわせておいたので反動力がなくなったのが原因であったが、我が身の仮身を、じっと見上げていた藤本さんは何故ともなく、ホツとして、安堵の表情が泛んだ。我が身の肉体の炸裂を見るに忍びなかったのであろうか。

夕陽は沈みかけ、ロケは中止。股裂きの刑は次回、別班で、このシーンのみとすることに



決定した。

——緊縛強犯・S的レスボス——

夜を日につぐ強行撮影で夜間のスタッフは全部非組合の応援人員に変わっていた。進行の俵坂、長岡のお二人と、装飾のエーちゃん、柴田さんが見るにみかねて、無報酬で内緒で協力しているに過ぎない状態で、それだけにカントクさんの、私に対するお呼びも連日で、本職の方は放ったらかした筈、乗りかかった船で、大詰に近いこの映画に、私も連日参である。助監督連の造反問題は、新聞や週刊誌でもとりあげられ、数多の批判の中で



石井監督のアルチザン精神はいよいよ昂揚していった。クランクアップの日は一日と迫るのに、思うに任せぬ進捗振りに、流石に笑みを絶やさぬカントクさんの表情もこの処きびしく、私に対する口吻も何となくとげとげしく感じられ、心の動揺が汲みとれるのであった。

レスビアンシーンを撮るといので、夜より、急拠呼びよせられたのに遂に十時を過ぎ、その日はそのシーンにかかれず、將軍上覧の刺青競演の広場で終始してしまいう有様。多忙を割いて走った私の時間は空しく浪費さ



れていった。カントクの気持も分らぬでもないが、無駄足を踏まされた鬱憤のやり場もなく、帰宅しての私の深夜の酒はつい度が過ぎるのであった。こんなことなら、映画一本いくらで契約するんじゃないかった。一日いくらでギャラをきめたらよかったと悔んだがあと祭り——。趣味と実益を兼ねた筈の私も、既に実益以上にこき使われては、少々不気嫌にならざるを得なかった。

レスボスのシーンとて、由美てる子失踪の崇りで、もう一度構想を変えて撮るのであって、謂わば二重手間なのである。

翌夜も進行から電話があつて、重い腰をあげる。進行日程も、スケジュールも滅茶苦茶で、進行主任もお手あげの状態であつた。

その夜のシーンは、お竜の留守の間に緊縛師弦造（林真由一郎）が由美（片山美子）を犯すシーンであつた。

由美てる子で撮ったこのシーンのラッシュ

をみたが、柱に縛りつけられた由美が、弦造に徐々に犯されてゆく構成は、ピンク映画の強姦シーンの踏襲で、林さんの唇が矢鱈に由美の乳首を吸い、唾液のあとが生々しく、乳首や乳房を濡らしていたのが印象的で、仄暗い試写室で、スタッフの面々から野卑な弥次や、ややあきれた嘆声が洩れていた。

このシーンも一刺青女郎として使うというので変わった構成を考えねばならなかった。前回のこのシーンは、私が不在の僥倖だったので、緊縛には重点をおいていなかった。私は緊縛指導の立前上、やはり強姦シーンにしても、お呼びの以上、緊縛を考えた。

かなりの手法を使って来たので、目新しいのも大分少なくなっている。

セットの部屋の中央に、チャブ台が置かれてあつたのに目をつけて、私はこれだと考えた。机上に仰向けにして、両脚首を机の足に縛りつけ、両手は縛って吊り上げたらどうであらうか。これなら、犯すにしても可能なポーズである。私の構想は纏り、カントクさんにそれを提案する。易々諾々として忽ちOK。スタッフはどんなシーンが始まるのか誰も知らない。この種のハプニングは毎度のことであつて、一同は、じっと私の一挙手一投



足を見つめているに過ぎなかった。

両手吊り、両脚首机下縛りのポーズから始まり、弦造は、声を立てる由美に縄の猿轡をかませ、顔をぐるぐる縛って、遂に犯してゆく。そんな過程でテストが始まった。片山由美子は、最初顔を縛ることになり難色を示したが、カントクさんのじんわりとした、そのくせ有無をいわせぬ説得に渋々納得した。カメラ・ハントのモデルなら、もっと強烈に顔縛りをやるが、嫌がるニューフェイスの抵抗を慮んばかりで、軽く二、三巻きで済ませる。私の想念の顔面緊縛とは凡そ程遠いが、この辺りで妥協せざるを得なかった。

本番が始まる。ヌツと入って来て弦造が、手を吊られて机上に仰向けに倒れている由美に、いたわる様な言葉を吐き乍ら、動作はウラハラに、女の肌に唇を近づけてゆく。

悲鳴を挙げる由美に、弦造の縄鞭が飛び、その縄が、女の唇に喰い込み顔をしめ上げてゆく。のりかかって、吊られた両手の間から顔を覗かせて、弦造は由美を犯してゆく。その時、出掛けたと思ったお竜が、この様子を見る。その復讐は弦造の妹ゆきに襲いかかってくるというシーンであった。

生々しい、セックスのシーンがないという

だけで、そのギリギリの線まで演技は行なわれ、若い血の気の多いスタッフは、それぞれの想いをこめて、血走ったような真剣な目付でこの強姦のシーンを凝々と見守っていた。冷静なのは、私とカントクさんの二人ぐらいだったのではなからうか。

カットされるされないは、出来上りを待つとして、この刺激的なシーンはこうして撮り終ったのであった。

前夜につづいて、翌二十二日にレスボスの構成が待っていた。

到着した時に、恰度、由美が歟をふるって弦造の屍骸を掘り出す無気味なシーンが撮られていた。この映画の最初の部分である。

みるともなく見つめ乍ら、私はこの次に始まる、お竜と由美のレスボスの絡みを色々と頭に描いていた。由美てる子との部分は一部使用するので、全然異なった、お竜をS的に描いたものを考えていた。

私の緊縛指導も、もうこのあたりでそろそろ終りである。その為にも嗜虐的で、奇クめいたものを構成してみたい。そんな想念も家を出る時あって、私は日頃、緊縛のモデルによく好んで使う、ダンダラ縄を何かの折にと持参して来ていた。

ハントで使う縄を、映画に使ってやろう。さりげなく――。これは、秘かな愉しみである。残された唯一の機会に、私はその考えを実行に移すことにきめた。奇クファンなら、とっくにおなじみのあの縄が、全国のスクリーンに登場する、これぞ緊縛師辻村隆の、プ







レイの足跡を映画にのこす、何よりのシルシではなからうか。いつも縄が硬いので、スターさんから苦情をいわれているので、柔らかい縄をもって来たからとカントクさんに告げると、文句なくどうぞと行って呉れた。

さあ、いよいよ私のダンダラ縄の登場であ

る。

私の構成は、両手足を正方形に縛って四ツ這いにさせた由美に、サジスチックなお竜が飼育の目的で、足の爪先から、足の裏、指と舐めさせてゆき、徐々に由美の唇がお竜の太腿へと這い上ってくる。もだえ始めたお竜はガバと由美の顔を股に挟み込むと、腰をくねらせ乍ら陶酔に溺れてゆく——といったものを考えていた。カントクさんは黙って私の考えを聞いていたが、

「じゃあ、そこへもう一人からませて既に飼育された刺青女にお竜が赤い酒をのませ、どの渴きを訴える由美を刺青女の股の間へ寝かせて、唇から溢れた酒が、胸の隆起の谷間を伝い、臍から股へとしずくが垂れて流れるのを、由美の口で受けさせましょう」

という。面白い突飛な提案であった。急遽待機中の刺青女性の中から、白羽の矢が立ったのは英美枝である。彼女とは「刑罰史」と11PMでお顔なじみ。尼のはりつけになった一人である。ポリウムもあるし、それにカントクさんの命令には、素直ないい子であった。

セット入りした英美枝は、自分の役柄がどんなものか全然知らなかった。呼ばれて来た

というだけで、私からその説明をきき、まあといった顔になって

「じゃあ、私も縛られるの？」

ときく。

「ああ、縛りたいね」

というと、魅力溢れる眸をキラキラ輝かせて、

「私、縛られるの久し振り。どんな縛り方するの。ねえ、ねえ」

と、この娘、如何にも縛られるのが愉しうである。

縛り柱でもあればいいのだが、生憎とこの赤い部屋のセットにそれらしきものもない。已むなく床の間の、天井からとりつけた飾り柱に、両手を後ろにして、体をやや反り気味に縛りつけることにした。この縄も私のダンダラ縄である。

時間は刻々経ってゆく。早速、私の緊縛構成は始まる。恥かしがってモジモジしている片山由美子を四ツ這いにさせて、両手足を正方形に順番に縛ってゆく。脚は膝を縛ったので、直立すると、体は前踞みにかがんだポーズになる。

「どう、この縄なら痛くないだろう。私の愛用の縄だからね」



由美にいうと、

「痛くないわ。でも辻村さん、愛用の縄って  
いうからには、この縄で随分沢山の女の人を  
ゆわえてきたのでしょう」

彼女はチラッと私を瞥見して、そんな皮肉  
めいた言葉を投げてよこした。

「ああ、女泣かせのダンダラ縄だ」

皮肉に応えて、私はかなり強く縛りあげて  
ゆく。

想案通りの本番が始まる。藤本三重子さん  
は本番になると、俄然妖しい魅力を出して、  
さも愉しくて堪らぬように、迫真の演技をつ  
づけた。唯、由美が早く、水、水といったの  
で、藤本さんが相手の首を挟んでのグライ  
ンドが、少し短い。時間は既に十時を廻って、  
進行の長岡さんがスタッフ一同に、時間の延  
長を頼む有様なので、度々のテストも撮り直  
す時間もなく、本番はつづけられていった。

水という由美の声に、お竜は立上り、ニタ  
リと妖しく笑うと由美を引摺って、床柱に縛  
りつけられた美枝ちゃんの開いた両脚の下へ  
顔を持ってこさせる。見上げる由美の前で、  
お竜とレスに飼育ずみの刺青女郎との女同士  
の愛撫が続く、矢庭に襦袢をひきむしって、  
腰巻一枚にしたこの対象の女に、お竜は無理

矢理、赤い酒をのませてゆく。（これは赤玉  
ポートワインでホンモノ）

唇からこぼれる酒がのどから胸の中心へ、  
そして腰へと流れてゆき、腰巻きを薄桃色に  
濡らして染めてゆく、お竜の手が、パツと英  
美枝の腰巻にかかると、むしりとるように剥



がす——（カット）両脚の間から、ポトポト  
と赤い酒が、由美の顔面にしたたり落ちてく  
る。サジスチックな中に、エロチズムをフン  
ダンに盛ったシーンである。腰巻があつては  
股間から垂れないから、腰巻を剥くが、ここ  
はカット。一糸纏わぬ全裸はとれない。ツン  
パ一枚の全裸になった美枝が、由美の顔面に  
ジリジリとワインを注いでいったというのが  
このシーンの実際——。

ムラムラと妖気が立ちのぼりそうな、女三  
人のサジスチックなレスシーンである。

午後十一時、一同くたくたになつて撮影が  
終わった時、手を挙げて縛りつけられていた  
英美枝の左手が、完全に痺痺して、感覚を失  
って、しびれきっていた。

——外人女三人の鼎立吊り責め——

クランクアップの、最後の最後まで私は呼  
び出された。四月二十三日、四日と両日、領  
事館に於ける。彫辰、彫秀のいれずみくらべ  
のシーンである。数日前、クレイトンの娘に  
扮するハニーを試しに縛ってみて、刺青の位  
置をきめたが、十六、七才の可愛い娘であ  
る。

彫秀のハニーに対し、彫辰は外人女三人で  
対抗する。





部屋中の灯りが、瞬間一斉に暗くなると、暗闇にまざまざと浮き上る螢光刺青——。それは人間の動脈、静脈を、赤と青で巧みに全身に書き込んであった。

夜光塗料によって光る女体は、妖しくくねり、猥らに反って、ここには美への探求が、

ありありと前面に押し出されていた。

二十三日には外人の三人の右脚首を、天井より下る滑車付の鎖の鉄鉤に結びつけて、かなり高くかかげさせる。さながら夢は夜ひらくかのように、妖花は五彩に光ってこよなく美しい耽美の世界を現出していた。

クランクアップ前夜の二十四日は、このシーンを尚も追求するカントクが、吊って万華鏡のようにくるくる廻るシーンをとることになった。真暗闇の中に、夜光の刺青のみが、空宙に乱舞するのだから。緊縛はさして要らず、唯奇抜なアイデアだけが、私という人間を評価する大詰の段階に来ていた。

メリーゴーランドのように、吊り下った三匹の牝豹が暗闇で、或いは赤に、黄に緑に青にと、五彩に輝いて空に躍って跳ねていた。長い長い、私の緊縛指導は、こうしてこの夜やっと終りを告げる。

私の撮ったフィルムはカラー、白黒合せて四百枚近くもあるうか。この稿の膨大な枚数に、後半は駄足となったが、どうやら最終日まで漕ぎつけた。この夜の暗黒フォト、カメラには相当無理な様であるが、一応は撮ったものの締切には間に合わなかった。

由美てる子の失踪——



シナリオの改訂——

片山由美子代役抜擢——

助監督造反のレジスタンス——

ハプニングシーンの連続——

と、こうした難関の末に、予定通り『徳川いれずみ師、責め地獄』は、五月のゴールデンウィーク目指して、徹夜の完成がつづいていく。この東映ハント、いささかでも映画鑑賞の一助ともなれば幸いである。

——(おわり)——





昭和二十七年頃からの御誌の読者である小生の目から見れば、昨今は正にSM時代と呼ぶにふさわしいような世の移り変わりようである。テレビや週刊誌が世の移り変りを益々激しくし更にその加速度を増してくるような気がする。その上、ピンク映画は勿論のこと五社の映画すら、競って変格物を手がけるようになってきたので、ファンにとっては、まことに此の世の春といったところである。

小生が御誌をはじめて手にした頃は、ささやかな楽しみを秘かに探し求めては、はかない性のエリート意識を慰めていたものだったが、昨今のSMの氾濫ぶりはどうだろう。徒らに興味本位に走って奇をてらうといった書きぶりの週刊誌の記事に出あったりすると、如何にSMのファンとはいえ、否熱心なマニアであるだけに、不快

な気持ちにさせられてしまうことがある。ひどいものになると、SMを反対に誤解して一知半解の文章をとくとくと書きなぐった一夜漬けの記事があったりして、思わず苦笑させられてしまう。

その点御誌なんかは、終始一貫して真摯にSMの問題をとり挙げているので、決してブームに乗って場当りの書きなぐるといったところが、いささかもない。そこが小生のようなオールド・ファンにとって、たまらない魅力となっているのだ。地道に十年一日の如く同じ問題を追求してゆくといった立場と、興味本位で思いつきばったりの即席をでっち上げるといった立場とは、自らその出来が違うのも当然であろう。

私事になって恐縮だが、私がはじめて御誌を手にした頃は、二十代の前半で独身でもあった関係で只胸をわくわくさせて御誌の妖しい魅力に取りつかれたようになっていたものだが、何故このように魅力を感じたのかということからはわからなかった。それが二十代後半になって妻帯してから、新婚の甘い生活のひととき、一時的に中断したことはあったが、夫婦生活が落着いてからは、前にも増して熱心に愛読するようになった。

新婚の夢さめやらぬ妻も私の影響を受けて熱心に読むようになり私の好きな縛りについての記事が載っている雑誌があったりすると切り抜いてスクラップブックに貼ってくれたりした。私が直接口に出して何にも言わなかったのに以心伝心、夫である私の好みを観破っていたのには驚いた。

お蔭で私は自分の性癖をわざわざ新妻の前に告白することなく、御誌を媒介として完全に意志が伝達できたばかりでなく、妻もまた同じように興味を示しはじめたのであった。結婚以来五年、第一児

が出産するまでの数年は、私達二人にとっては、二人だけの秘密ともいふべき薔薇色の生活が続き、その間、御誌は私達二人のバイブルとして羅針盤的な役割りを十二分に果たしてくれた。従って私達はSMについての智識は勿論のこと体験も十分持つことが出来た。

その間特筆大書すべきは、同好の一組の夫婦の方と交歓することが出来たことだ。偶然の機会に知り合ったこの若い夫婦とは約一年間、文通や写真の交換をした上、或る温泉旅館の一室に落ち合ったのであった。この日が始めての顔合わせであったが、それまで度々プレイ写真の交換をしていたので十年の旧知の如く解けあうことが出来た。しかし流石に若妻二人は恥らしい顔を赤らめていた。

それが愈々プレイの開始となつて大胆に振舞い男性側をびっくりさせたのは若妻側二人であった。既にあからさまなプレイ写真を相互に見せ合っているという安心感からか、恥らしいの中にも競争心を抱くのだろうか、或は視覚的聴覚的に挑発されるのだろうか、今までの味わうことの出来なかったSMプレイの醍醐味を味わうことが出来たのであった。

## 世は正にSM時代

菅田不及





(第六十一回)

辻村 隆

妊娠九カ月の金原奈加子のフオ  
トを撮った時、別れ際、臨月にも  
う一度撮らしてくる様、頼んで  
おいたのだが、四月中旬の末、電  
話がかかってきたので、約束通り  
掛けてきたのかと、急いで電話口  
に出たら、意外にも一昨日、出産  
したという病院からの電話。体が  
小さいので臨月半ばで幾分早産気  
味らしいが、出生の男児が、なん  
と三二〇〇グラムもあるというの  
で二度びっくり。あの小さい腹か  
ら想像して、恐らくは月足らずの  
未熟児ではないかと思っていたの  
に、八〇〇奴以上もあるとは正に  
驚きである。

それにしても、臨月の彼女を撮  
っている最中に産気づいたら、そ  
れこそこの話、後世に残る周章狼  
狽ぶりの一幕になったであろう。  
九カ月の逆吊りにもかかわらず、  
母子共、至って健全で、出産で又

大分出費が重なったから、元気に  
なったら早速、お願いしますとの  
事であった。

東京の夜にハントした、船乗り  
を夫にもつ滑川幾代さんから、ヒ  
ョッコリ電話があつて、今、京都  
からかけているというので、突然  
のことにはびっくりした。(五月号  
カメラ・ハント「乱倫の生態」参  
照)

わけをきくと、クラブの客が、  
なじみの女性をドライブに誘い、  
その彼女に誘われて、友達のホス  
テスも一緒の計四人で、東名、名  
神と高速道路を走りついで、夜の  
八時頃、京都に到着したというこ  
とであった。少しでも会いたいとい  
うので、私も懐かしく、ひよっ  
としてという気持ちもあって例の黒  
革のバッグ引提げて、東映撮影  
所の仕事からの帰り道、指定の岡

崎公園近くの喫茶に車を飛ばす。  
仲間と別れて独り、友達と会うと  
いって岡崎ホテルを抜け出してき  
たということであった。

三カ月振りに再会した彼女は、  
持ちまえの妖艶さに益々磨きがか  
かり、私をみつめる眸は既にしっ  
とりと濡れていた。京都へ誘われ  
てきたのも、ひとつには私に逢え  
るかも知れぬという、果敢ない願  
いをかけていたのだと綿々と口説  
かれ、ホテルへ入るなりいきなり  
ハナから抱きつかれてしまった。  
結局カメラは上の空で、最初緊縛  
のプレイのつもりで全裸で縛って  
撮った数枚のみで、あとはだらし  
なくもすっかり乱れに乱れて夜が  
更けてしまった。

しきりにとまってゆくようと縫  
りつかれたが、彼女には連れの仲  
間が待っていることだし、私も亦  
黙って家をあけもならず、心なら  
ずも追いつがる手を振切つて、先  
にホテルを飛出すと、くらやみの  
中で熱いくちづけ交して、夜更け  
の午前二時、国道一号線を飛ばし  
て帰った。

クラブの客から、三人の女性と  
雑魚寝したいと、車中さかんに口  
説かれたということを彼女からき  
き、金と暇のある人種は、果てし

なき慾望の夢を追って、甘い生活  
に耽溺しているわいと、自分のひ  
とときのプレイの甘さを棚にあげ  
て、今頃どうしているやらと、し  
きりにその男を羨望しながら走っ  
ていた。

或いはこの稿を彼の夫が読んだ  
時を考えて、彼女の行末を案じて  
不安にかられたが、男のSは更に  
昂揚し、女のMはより以上の強烈  
な責苦をうけて、悦虐に悶絶する  
かも知れないと、そんな気になっ  
て書いてみた。SMに徹した者の  
みが味あう奇妙な露出癖であるか  
も知れない。

徳川いれずみ師・責め地獄が  
三月二十六日の第一日から、クラ  
ンクアップの四月二十五日の丸一  
カ月間に恰度、半分の十五日間、  
呼ばれて、本職の私の仕事ですっ  
かりお留守になつてしまい、今や  
正にテンヤワンヤである。主役に  
抜擢されたニューフェイス由美て  
る子の失踪、助監督二十四人の拒  
否声明など、ハプニングな事件の  
連続で、石井輝男監督ひとり、四  
面楚歌の中で孤軍奮闘。つい情に  
負けて、お呼びの俤に、損得離れ  
てのアドバイスの数々――。それ  
かあらぬか、緊縛シーンや残酷シ



ーの連続で、お蔭で少々食傷気味ぐらいいに、すっかり堪能してしまった。

五月のゴールデンウィークの封切りには何とか間に合いそうであるが、助監督連の声明にもめげず東映では五月中旬より、引続き石井さんの性愛路線第七作として、『やくざ刑罰史』を撮る予定である。

商魂の逞しさもさることながら次々、同好者の喜びそうな企画にこの所、映画も奇巧の領域を大いに、荒すようになってきた。はっきり確定してはいないが、明治・大正・昭和三代の刑罰史といったような内容で、スターは勿論、石井学校の優等生諸氏になる筈である。

或いは又ぞろ私にお呼びがかかるかも知れないが、何分にも溜りに溜った本職の仕事、放っておきもならず、五月中旬一杯は恐らく本職に没頭せざるを得ないので、この面白い企画、己むなくオリねばならないかと考えている。いっそ本職を緊縛指導と作家の方にしたらどうかと、ヒヤカシ半分に好事家連中が奨めてくれるが、十数年続けて来た本職も捨てはならず、そこまではフンギリのつかない私

である。

東映のハントの方、余りにも書く事多すぎて、最後の方は駈足にになってしまったが、丁寧にエピソードなど挿入して書きこんでいたら、二百枚書いても、追いつかない。編集部には締切間際ギリギリまで待ってもらって、やっとなにか脱稿に漕ぎつけた次第である。フォト無慮三百枚、ぐっと惹きつけるフォトも数々あるが、誌面の都合で一部しか発表出来ないのは残念である。

先に書いて送った、金原奈加子の『童女受胎譜』九カ月の逆吊りシーンが、又しても、東映の『責め地獄』のハントのおかげで、掲載が一カ月先に延びた。この二篇を掲載すると、奇巧のぐらいい、私の拙稿で埋める事になるので、斯くは金原嬢、八月号に延期となった。

映画の方はキワモノ。封切りと並行して発表しないと興味も乏しいので、金原さんに遠慮してもらったわけであるが、考えてみるとよくよく彼女のハント、延期する運命にあるわいと、我々苦笑を禁じ得ない。

× × ×

東京の賀山氏との『東西緊縛くらべ』は、東映のクランクアップのびて封切りぎりぎり間際になったのでお流れになった。折角張り切って、腕を撫でていた賀山氏には誠に気の毒である。

彼はいままで一筆だに奇巧に便りをよこさぬのに、私なり、鬼六さんが、しきりに賀山氏を文の着にしている。考えてみれば私や鬼六さんより、こうした賀山社長のような人が、本当のSプレイヤーではなからうかと、昨今しみじみ思うのである。

× × ×

先月号のこの欄で触れた、岐阜の水野弘夫人香代さんの自動車事故の症状は、その後徐々に回復されて、四月中旬退院し、現在自宅で静養中とのことであるが、経過はいいらしい様子である。他人事ながらホッとすると共に、肥満好みの同好者諸氏に、一寸御報告まで……。

肥満タイプといえば、東映へ日参の折、肥満型の中村万里さんを撮り、いずれ改めて再会を約したが、機会があればハントに書いてみたいと思っている。

先月号に一寸書いておいた、小池美喜という理容院に勤務する若

い娘も、東映の撮影見学後、ほんのひとときプレイして、いずれ日を改めてハント用のフォトを撮る約束をした。

心は三つ、身は一つで、本職、緊縛指導、ハントと、こうも多忙になると、喜んでいていいものかどうか。結局、三兎を追うものは一兎をも得ずになりかねない慌しい身辺である。

結婚間近い左近麻里子より、ハントで会って以来、二度許り電話があったが、私は今ひとたびの意馬心猿の逸る心を押えて、冷静になるよう努めた。

この尽、ずるずるベツタリに忍び逢いしては、彼女との交渉がどこまで進むかと考えこんでしまっ、空怖ろしいのである。ましてや結婚を控えての彼女に会うことは、余りにも残酷すぎる効果を生みはしないかと、中年の私はひたすらに懼れた。

誘いは彼女からにしても、それを断ちきるかどうかは私の一存であるとするれば、彼女の将来の幸福を希う意味からも、この際きっぱりと断ちきることが、私にとって残された、唯一の良心ではなからうか――。



私のプレイ「甘いメロディーの流れるとき」

みなみ 洋



とゆわえ、高手小手に縛りあげて  
ゆく。

.....

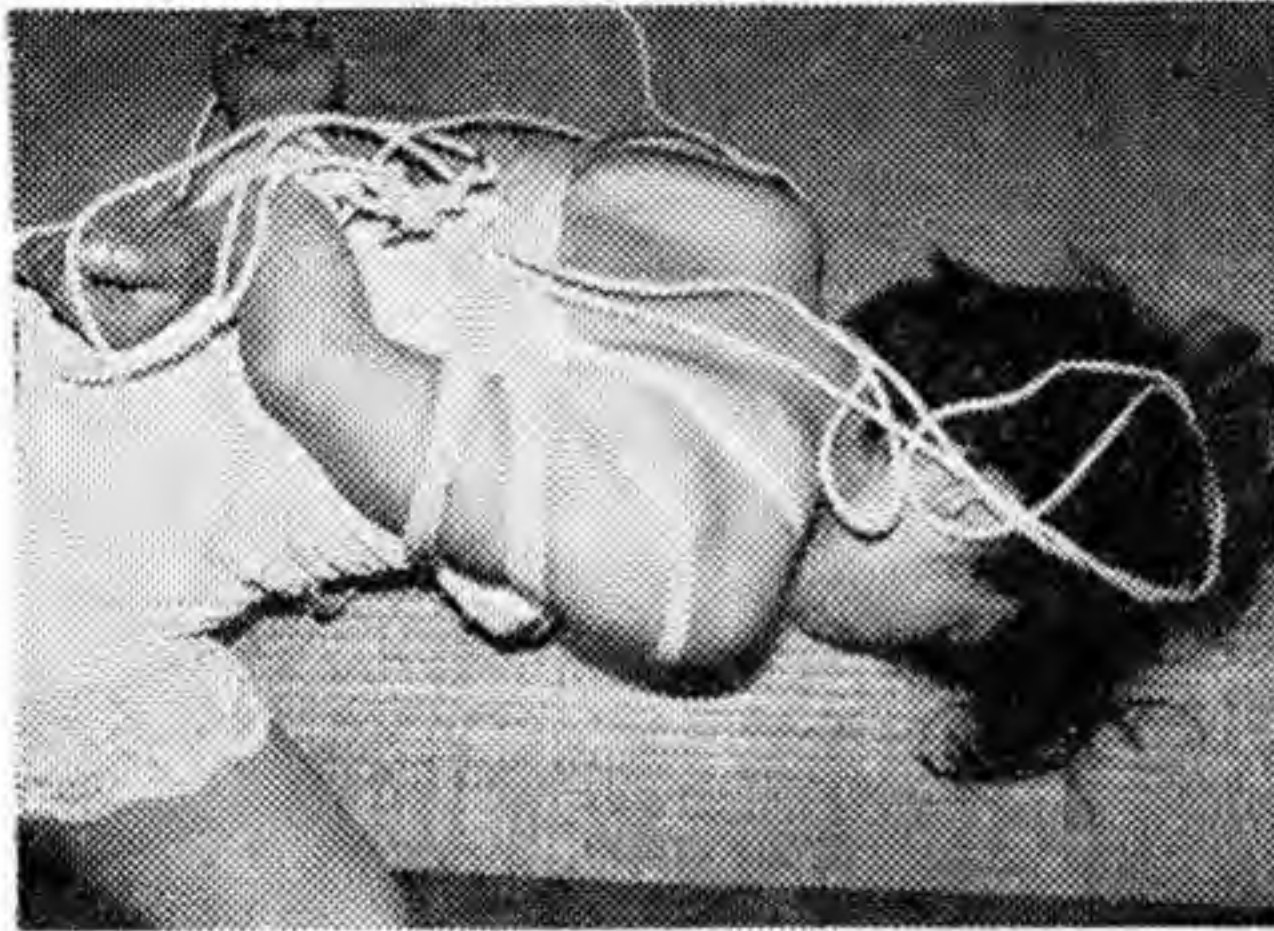
高手小手がなじがらめ、海老縛り、逆海老縛り、ETCといったいわゆる責めの縛りからプレイのための縛りまでいろいろと縛ったが、いまだ吊りに類するものはやったことはない。いつかそれを、

そんな陽子を見ると、いてもたってもいられなくなる。縛りあげた陽子があまりにもかわいくみえるからだ。  
「陽子オ」  
「アナタ……」  
「愛してるよ」  
「いつまでもいつまでも、愛してね」

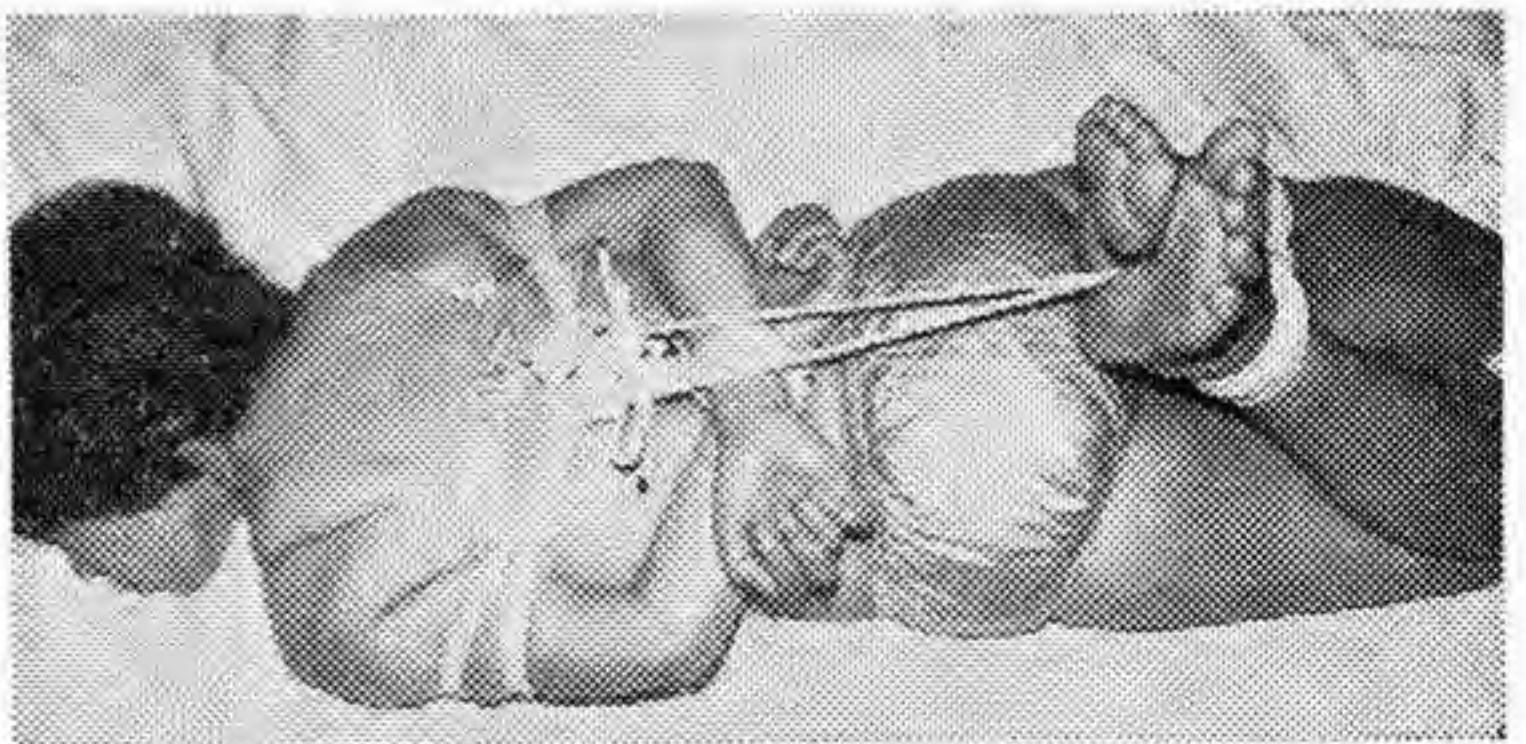
「たとえ死んだって、はなしやしないよ」

寝室に備えつけのラジオから、青江三奈の長崎ブルースのメロディーが流れていた。そんなメロディーが流れてくるとき、陽子は決まって縄を要求する。  
「そろそろはじめようか？ じゃあおテをうしろへ回して。そうそう、もうチョット上へあげて……」  
いつも枕元に用意してあるロープを取り寄せて、手首をガッチリ

一度やってみたいと夢想しているのだが……  
閑話休題。  
縛られてゆく過程において、陽子はその痛さに思わず悲鳴をあげるが、その表情には、そろそろ陽子の心を占めはじめた陶酔感がある。ぼくは



「たえ死んだって、はなしやしないよ」  
ぼくは縛りあげた陽子と、そのまま夜が明けるまで寝てしまうこともある。  
しかし、きょうはくすり責めをやってやろうと思っていたから、そんな悠長にはやって



いられない。大きな悲鳴をあげられたらたいへんだから、まず、陽子の口の中へ、陽子が日ごろつけているナイロンパンティをつっ込み、その上から手ぬぐいでしっかりとサルグツワをした。  
「ウッ、ウ、ウ……」  
と陽子は何かをしきりに訴えているようだが、そんなことにはお





『あら、ありがとうね』 菊池淳子

私達夫婦は結婚して間もないのですが、夫が或る日「こんなことも、知っておくことはよいことだよ」といって、奇譚クラブを買ってきてくれました。

読んでゆくうちに、私が今まで一番なやまされていた浣腸の記事があり、これを解決するのにイルリガートルのお浣腸が一番よい方法らしいと思いつき、決心いたし

## イルリの知識を教えてください

かまいなし。ぼくは洋服ブラシで乳房のあたりから、おヘソのあたりまで、ゆっくりとていねいになでつけていった。陽子はさかんに声にならぬうめき声をだしつつづけていた。ぼくはつかれたように、陽子の柔肌をくすぐりつつづけた。しばらくすると陽子はのけぞる

ように失神してしまった。それまでぼくは陽子がうめけばうめくほど興奮し、そのプレイに度を加えていた。しかし、失神してしまったのでは仕方ない。今晩はここまでだな、と思いついて、陽子の身体にまつわりついている縄を解きはじめた。えもい

われぬ満足感を覚えながら……。そして、陽子のほおを平手でたたいて気を戻した。うっすらと目をあけた陽子はまだ夢を見ているような表情をしていた。ラジオの音楽は終わっていた。「もう遅いから、そろそろ寝ようね」

## 小宮 たづ子

ました。

今まではイチジク浣腸をしてもしなくても、いつも残っている感じで、なんだか気持が悪く、一度スカッとした気分になりたいと思っていましたので、思い切って夫に相談したところ、夫もころよく賛成して「僕も君と同じように月に一回でいいど、お腹をきれいにするために、君にイルリをしてもらうよ」といいました。

イルリを買わなければなりません、次の点を是非とも教えてください。

- 一、ゴムの長さ、ベッドの場合と畳敷の場合と何米がよいでしょうか。
- 二、お腹に残っている残滓を、毎月一回か二月に一回洗腸する場合、一週間以上便秘の場合、

ローズピンクのネグリジェをまとった陽子は首をたてにふって、ぼくの胸にとびこんできた。プレイのときに撮った写真を同封しておきます。引伸技術などが未熟なため、みにくいものもありますが、よろしかったらご発表ください。

薬液の配合はどのようにしたらよいでしょうか。

- 三、お浣腸したら、どの位がまんすべきでしょうか。やはり十分位でしょうか。

- 四、イルリは、一〇〇CC五〇〇CCなどあるようですが、何CCが手頃でしょうか。

- 五、嘴管から薬液が絶対に洩れないようにするためには、なんと云う器具を使用すればよいのでしょうか。

- 六、イルリを立て掛けるのはなんというのか名称は知りませんがなくてもうまくお浣腸出来るでしょうか。

イルリを使って、一日も早くすがすがしい気分になり、楽しい毎日を送りたいものと思っていますので、何卒一刻も早くイルリの用法を教えてください。きつと他のお方にもご参考になると思います。



妊 娠 裸 婦 礼 讃

西 野 正 一

久し振りに羽鳥水江さんの妊婦礼讃を拝見し、大変懐かしくなりました。

古い話になりますが、京都の安原さゆりさんが妊婦資料を提供されて間もなく羽鳥さんが安原さゆりさんに臨月腹という敬称を奉げられた筈ですね。

安原さんの妊娠ヌードは覆面で顔がわからないようにして発表された筈ですが、最近「カメラ・ハント」に迄妊婦が登場して、堂々と妊娠腹と美しいフェイスが晒されているのを見ると、まさに隔世の感がします。

最近では、木戸悦子さんの新鮮な妊娠ヌードに接して強烈な印象を受け、その衝撃の醒めやらぬ裡に、飯野カオルさんの豊満な妊娠腹に接し、ショックを受けたところへ、次号では、おなじみの金原奈加子さんの臨月腹の逆さ吊りにお目にかかれるらしい。

妊婦オンパレードである。羽鳥水江さんならずとも快哉を叫ばずには居られないところであろう。五月号の飯田カオルさんの豊満

な乳房は、妊婦の特徴を如実に示している読者に迫るものがある。出来ることなら臨月のはちきれんばかりの豊かな乳房を拝見したい気持ちで一杯である。ことに仰向いてなお豊かに盛り上がった乳房は見事としか云いようがない。

金原奈加子さんの妊娠ヌードでは、どんな新発見をさせてくれるのかと、今から首を長くして待っています。それにつけても、辻村氏は全く御苦労さまですね。大きなお腹をした他人の女房を、ああでもない、こうでもないと思戦苦闘してハントしておられる。好きな道とは云え、御苦労の程を察して御同情申し上げます。

羽鳥水江さんが、美しい妊婦ヌードが、写真雑誌のグラビアに大きく出ないものかと思えますとの願望を述べられておられますが、少し古い話で恐縮ですが、写真雑誌で妊婦ヌードを見たことがあります。

一昨年の写真雑誌「カメラ・コンテスト」一月号に妊婦ヌードが掲載されていたと記憶しております。



『不安の時間』 志 羽 利 也

大分古いことなので記憶があいまいなのですが、確か大分の甲斐氏が「妊婦像」というタイトルで臨月腹の若い女性のヌードを発表しておられ、それが「銀賞」を受賞していたと思います。一般のカメラ雑誌のこととて、緊縛はしてありませんでしたが、横向きに立って、豊かな乳房と太鼓腹を晒し、手は太鼓腹を抱えるようにして前で組み合わせて下腹部を上手に覆っているポーズ。モデルは目のきれいな美しい若い女性で、強烈な印象を受けたことを覚えております。

このように一般カメラ雑誌にも

すでに妊婦ヌードの発表された先例があるので、奇巧においても、妊婦特集号の発刊など考慮して頂き度いと思うし、一般読者の方も愛する妻の妊婦像を一般カメラ雑誌へ応募されてみては如何でしょうか。

もっとも、前述したフォトコンテストの選者は、ヌードもここまですると全く御苦労というの外はないとあきれてはありました。しかし、美しいものは美しいのであるから、妊婦ヌードも十分に芸術性を有するし、その芸術性を理解する人も多いことと思います。

(以上)



## 週刊誌にみる「浣腸」

伊里賀 透

最近の週刊誌は、奇クも顔負けする位のSM傾向の連載小説が掲載されていて、私達マニヤを喜ばせてくれている。例えば、梶山季之氏の最近の作品。週刊サンケイ掲載の『濡れた銭』第十七回には、アベック旅館での不思議な性行為として「浣腸」が登場して……「お互いに浣腸しあってさどちらがどれだけ長く我慢できるか、抱きあいながら辛抱しあうのだった」「辛抱しあう?」「え

え、相手が苦しみ、悶えるのを見て、喜ぶんだってさ」「ふーん」「あの二人も、そうじゃない?」「沢子は、眼をキラッと光らせた。……などという場面があり、その第二十回には……萩の間は、別名珍具の間である。沢子の意見を入れて、この部屋には、女性を喜ばす器具を、いろいろと飾っておいた。——略——携帯用ビデオ、浣腸薬二個、などである。箱の上には但し書がしてあった。「他人様の

『脱ぎなッ!』 山内 毅



使用のご迷惑にならぬようにご使用下さい。ビデオ、刷毛などは恐れ入りますが、使用後は湯で洗って置いて下さい。クリーム、浣腸薬などは奉仕品となっております……というのが出てくる。

この作品には香織という浣腸マニヤの令嬢が登場していて、次回が楽しみ。梶山氏の作品「苦い旋律」「男を飼う」にも強烈な浣腸場面が書かれている。この他、同氏の作品「一匹狼の唄」「ミスタ・エロチスト」にも浣腸がとりあつかわれていて、私にはすこぶ面白かった。

また「週刊女性」掲載「異常な性の世界からの脱出記」青山てい子、元モデル、BG24歳の手記第一回では……行季の中を見ると、目隠し、猿ぐつわ、ロープなど、各種の責め道具が詰まっていた。浣腸器まであった。それを見ると夫が思い出されゾーッとなった。……そして三回、四回に浣腸プレイが登場してくるのだが、この手記には、あらゆるSMの体験が書かれていて、実に興味深かった。女性週刊誌だけに、同誌を読まれる若い女性は、どのような感想を持つのだろうかと思像すると、更に楽しくなる。

週刊文春三月十七日号、「……まで来たか『身の上相談』」に、……飯田蝶子さんが、「いまの結婚とか男女関係って、ケツペキさが無いわね。わたしや、亡くなったけど主人以外はほかの男性の匂いもイヤだけどね。だれにも見せない女のダイジなトコロを簡単に他人に見せるとはなにぞですか。そら、カンチョウ(浣腸)だってさ、わたしなんか親、きょうだいにやられるのは、イヤだったね。亭主ならやらせる、そういうもんだよ、夫婦ってのは」といったって、いまはだれかれとかまわずカンチョウさせる時代らしいのだ……とある。

記事ばかりではなく、漫画にも浣腸が登場してきている。「プレイコミック」三月十日号小沢さとるの「シーサイドウルフ」車の中で少女が、イチジク浣腸される絵が十四コマにわたって描かれている。少女の直腸にかくされているダイヤを横取りするのに浣腸するのだが、「やああ、やめてエいやあ」のセリフに少女の恐怖にの顔や、「ああーん、あ、あ、あ、だ、だめエ」のセリフに横臥位のヒップの絵、となかなか楽しい。



マゾフォト便り

## 『私の願望』

犬畜生

かつて、本誌の数少ないマゾ派写真に、美枷輪生氏のMフォトが異彩を放って、この欄を飾ったことがあります。

私は強い感動と衝撃を受け、憧憬を禁じ得ませんでした。最近になってようやく、米国製の高級カメラ入手によって念願の、Mプレイのわが身を収めることが出来ました。

美青年の美枷輪生氏と違って、頗るつきの醜女ならぬ醜男の私のことですから、顔をさらけ出すことはごかんべん願いますが、首輪をはめられ、くさり輝、後手錠、足錠に拘束された、このドレイ犬の姿こそ、私の偽りない願望の具現なのです。といっても、これで満足という訳ではありません。

以前からずっと頭の中に描いている夢は、雑踏する街の一角に、鉄の檻が据えつけられていて、その中に入れられていて私なのです。その姿は、頭髪をはじめとして毛という毛は全部剃りとられ、犬の首輪に鎖輝、両手両足は鎖つ



きの枷にガッシリと拘束され、四つ這いのまま動けない状態のうえに、天井から下っている鼻ぐさりによって繋がれているという、あわれな姿なのです。

さらにその檻には、白地に黒ペンキで書かれた札がかかっています。『この者、強度のマゾ性を有す。』



する犬畜生につき、玩弄用、またはドレイ用に最適。飼育、もしくは責め殺したい方に無料進呈。ご自由にお引連れ下さい。』

行き交う人々は、軽蔑に満ちた眼つきで、この不思議な動物を眺めることでしよう。さも汚ならしいものを見たように、ペッペッと痰や唾を吐きかけて行く人。喰べ残りのパン屑や、ミカンの皮、チューインガムの噛み滓などを投げつける人。檻の間から木切れや棒でいたずらして嘲笑する人など、いろいろでしょう。

中には、深夜の人通りも絶えた頃にやってきて、試験的にジックリといたぶってみるヨッパライや彼氏にだまされた腹立ちを紛わせるための二号さん、ホステスさんなどがあるかも知れません。こんな夢を描きながらの独りプレイ。それがこの写真です。

## 映画通信

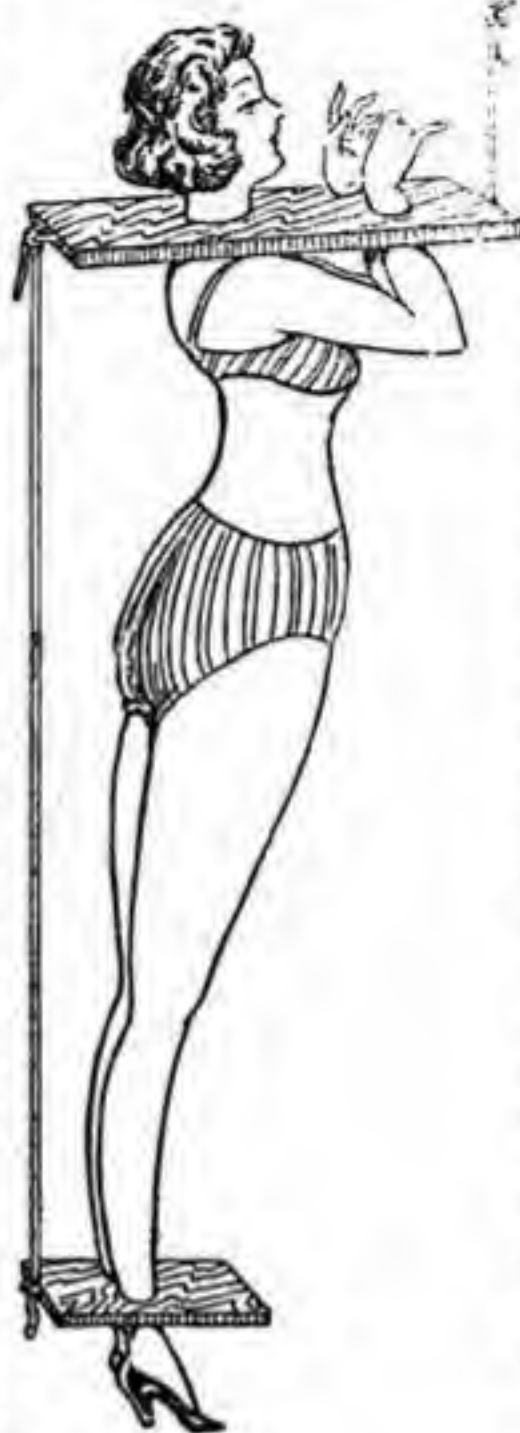
嵯峨美也子

桃色プロの緊縛女優の三羽ガラスといえは、谷ナオミ、辰巳典子、美矢かほる、というところだったが、最近ニューフェイスが登場。

新東宝の専属、二条朱美で、高峰三枝子ばりの美貌、若鹿のような肢体、豊満ではないが乳房はこもりと盛り上り、水々しさい。「性の女獣」では、テレビタレントとして有名になった女として出演するが、かつての使用人、昔自分の家の運転手であった里見孝二に誘拐され、後手に縛られて犯される。ベッドの上で、どちらを選ぶかと縄と手錠を示され、後手錠でうつぶせにされると自分が乗馬のときに振ったムチで打たれる。うらめしそうな権高い顔。そして乳房丸出しのような羞しい服を着せられ、犬のように四つん這いにされて飼育される。スクリーン一杯の役は、彼女のソックリショーで当選した女店員で彼女に身代りのため買収されるが、それがバレて手足を縛られて転がされる。また「女色の悦楽」では、義母



## =映画評=



## 最近のS M映画

## 西 魔 造

最近のS・Mの氾濫は、昔を知るものにとっては、時代の移り変りの激しさを感じさせるに十分なものがある。女性週刊誌にさえ、梶山のS・M小説がのるありさまである。

ピンク映画に於ても、以前は団氏の関係する作品以外のS Mものはみられたものではなかった。しかし最近、グンと向上したのも、団氏の先鞭のお蔭であろうか、小生の如きS・M映画ファンにとっては、まことよろこばしい限りである。最近見た作品を紹介、並に評を記してみたい。

「肉体のよころび」残念乍らお目当ての谷ナオミの縛られシーンは見られない。僅かに谷ナオミ扮するバーのマダムの下で働くホステ

スが二人、ヤクザに縛られて股裂きを受ける位である。祝真理の情婦は黙って見ているだけは、淋しい。手伝え、色どりを添えただろうに。

「女が満たされる時」Ⅱ谷ナオミ扮する若妻が、夫の性的不能による欲求不満と変態的性向に嫌気がさし、家出してしまふ。行きずりの男と旅館に行ったところ、コルガール達にショバ荒しと誤解されリンチを受ける。

以上二作共、谷の名コンビの作品であるが、何れも迫力は以前よりグッと落ちていっているのはどうしたわけだろうか。マンネリズムに陥ったような気がして残念でならない。それに比べ他の作品によいのが目立つようになってきた。

「むしろれた若草」Ⅱ母親が昼間から男を引っぱりこんでいるのを見た女高生が、家出して不良グループに入る。その中で、純情な男

子高校生に愛を感じた彼女は、二人でぬけようとしたが捕まって、仲間の女からリンチを受ける。女達によって、裸にむかれ縛られて全身をくすぐられ、ライターで火で焼かれる。仲々迫力があつた。「処女、性の目覚め」Ⅱこれは素晴しかった。二条朱実扮する女性が上役に料亭で犯されるシーンでは、洋服の上から縛られ、サマザマにいたずらされ乍ら次々とぬがされていく。全裸にされた時鞭打たれて、そのあと四つんばいになって、部屋の中をはい廻る。

結局、男の二号になったが、妾宅の女中と見えたのが実は男の愛人で、二人の間に嫉妬められて責められる。二人はサディストクラブで知りあった仲で、獲物を探していたところだった。

二人の見ている前で裸にされ、足首に電線を巻きつけられて電流責めにあい、身を悶える。男の操作する変圧器のダイヤルは、十、二十、三十と上昇する度に悲鳴は大きくなる。女はブラシで全身をくすぐり、トロロ芋を使って責める。油汗を全身に流して苦悶する女体をカメラは追う。

仲々の熱演であつた。これから、見ごたえのある作品が登場す

の美矢かほると一緒に誘拐され、復讐のために大の字や立ち縛りにされて責められる。このニューフェイスの将来が楽しみである。

最近の縛り映画では「好色一代無法松」で、乱孝寿らヤミのパンマが、荒縄で手足を縛られムチ打たれ、ついで片足吊りで股裂きにされて責められる場面がある。

「炎の関係」では、自動車運送会社々長夫人の林美樹が、夫にあきたらず、港の売春バーに行き、網元の冬木京二に後手に緊縛されてムチ打たれ、悦楽を感じる。

小森白監督の「日本裸女絵巻では嵯波美知子、大月麗子、清水世津子の三人の芸者が、悪ボスの冬木京三に捕えられ、地下室で拷問にあうが、長襦袢一枚で緊縛されムチ打たれるシーンは、さすがに小森監督だけにすさまじかった。

と思うと楽しみだ。それと同時に、団、谷コンビも又気分一新、他社のものに負けない作品を発表して欲しいと思っている。特に小生は、女が女を責めるシーンを多く入れて貰いたいと思う。そう言う意味で、古い「縄と乳房」はいまだに眼底に残る程素晴らしい作品だった。



## プレイの幻『悦虐願望』

小杉千恵

奥まった箇所には置かれた文献誌を手にとってページをくる私を、じろじろと男達は眺める。まるでその視線は私の脚もとから短いスカートを這い登って来る様に私には感じられる。でも、誰も私に声をかける勇氣はないようだ。本を購入し、店を出る私のうしろ姿を熱ばい目で追うだけである。時には数人の男達に囲まれるようにして、一緒に同系統のマニヤ誌を選ぶ状態になってしまう。背広姿の男も、男臭い労働者風の男も、私の手許の雑誌を覗きこみ、私の火照った顔と見較べるだけで、物欲しそうな表情はするが、声をかける決心はつかないらしい。そうかと云って二十四才の私にはまだ、その勇氣はない。

私は今、一生懸命に小杉千恵の名を売り込んでいる。本屋の主人にも憶えて貰おう。

○ ○ ○ 私の本屋に入ると、主人は大きな声で「小杉さん、新刊が出ましたよ」と知らせてくれる。その名を耳にした中年の立派な紳士が、本屋を出て帰ろうとする私に追

すがり、小声でささやく「失礼ですが小杉千恵さんではございませんか、私は同好のマニヤであなただのファンです」と。

岡沢夫妻は主人の剛さんが三十五才、寿美子夫人が二十六才。夫人はどちらかと云えば私と反対の小麦色の肌の持主で、堂々とした太い腿の持主である。ご夫婦が全裸で私の前に立たれた時は、あまりの美しさに私は目が眩む思い。私はお二人の夫婦プレイに参加させて頂けた。寿美子夫人は少しも悪びれず、その見事な裸身をくねらせてプレイに没入される。さすがの寿美子夫人も私の前での浣腸は嫌やがっていられたが、結局はイチジクを施され、四つん這いにならされた上、ご主人の前に羞恥の悦びを露呈され、私に数々の未知の事柄を教えて下さる。

○ ○ ○ 私は布団を何枚か斜めになるように積み重ねた上にパンティ一枚の姿を仰臥させられ、腰に布団を丸めて当てがわれ、更にお尻の下に座布団を二つ折りにして差し込まれている。私の周囲にはへしや



『呻き止め』 辻 梟太郎

げたイチジク浣腸がニコ、意味有りげに丸められた数箇のティッシュペーパー、新聞につつまれた上、ビニール風呂敷にしっかりと包装されたもの、それから若い女性特有の甘酸っぱいような尿の匂いをただよわせている二本の牛乳ビン等が取り散らかされて乱雑に置かれて

いる。哀訴哀願してやっと許された花模様のビキニパンティ、でもそれは私の豊かな肢体にはあまりにも小さすぎる。乳白色の生々しい腿を一杯に左右に広げられると、せいでい繩の太いものぐらいにしか

役に立っていない。上手に座布団を差しこまれているので私の腰はそり気味に浮き上がっている。寿美子夫人がプレイの仕上にかかろうとする。我が身にひき比べての夫人の責めぶりは確実、後光の射す様なナルチシズムの恍惚の中に私は失神する。夫人は失神した私を指さしながら笑顔で主人を招く、私の最後の布切れが主人の手で除去される。

○ ○ ○ 私は汗臭い労働者と並んで文献誌を開いていた。恥ずかしい幻想だった。



## 乗馬の女神像 佐野 寿



乗馬愛好のスイスのフォト・モデル

拝啓佐野寿様

麻生 保

佐藤寿様、いつもながらの御健筆をおよるこび申上げます。特に昨年十二月号の「新女性乗馬考」本年四月号の「クリテリオン」は貴方の豊かな学識と、数多い体験から生まれた貴重な文献であり、麻生は心から敬意と感謝を表する次第です。

それに比し、一月号の「女神アイリーン」六月号の「ロッタ」の中の「水中馬」のくだりなどは、

作為がありすぎるように思われました。また昨年十一月号の「ルポルタージュ」のようなものは、やや材料がナマすぎて、いらぬ誤解を招きはしないかとも思われますがいかがでしょうか。麻生もまた筆をとりたい衝動にかられています、何かと多忙のためつい果たせません。貴方の一層の御活躍を期待しております。





## 「カメラ・ハント」

ばんざい

御木本三郎

マンネリとかすばらしいとか、多くの意見を受けながらファンを夢の世界に遊ばせる「花と蛇」はたしかに、四号の増刊にも価いする読物だと思う。現実には不可能な白日夢に酔うということも、人間にとってはある意味で必要なことだ。ましてSM愛好者には、なおさら大きな慰めになっていることだろう。

よく云われているように、現在の奇クを支える柱であろうが、この辺りで、更にもう一本の柱、辻村氏の「カメラ・ハント」の総合篇発刊ということは望めないだろうか。

最近、ますます円熟味を増し、厚みを加えてきた文章にマッチするかの如く、ハント女性もまた素人から映画女優、舞台人、更に妊婦と、間口がぐっと広まり、毎月二十五日が待ち遠しく、今回はどんな女性がどういうしぼりで登場するかと胸がときめく。読み、眺めているうちに、その

## 団先生への

お願い

結城志運

私は東京に住む一セールスマンです。どうしても一言いいたくてペンをとりました。

私は、団鬼六先生の「花と蛇」こそ、羞恥責小説の傑作と思っています。そして「花と蛇」のSM小説としての優位性は、その責めの多様性と表現力の豊かさにあると思います。特に浣腸、排尿、悦虐を中心として、美女を精神的に責める点は特徴的です。

私は「花と蛇」の作品中の登場人物の中で、美人探偵の京子に、最も関心を持っています。なぜなら、京子はとらえられている美女の中で最も気が強く、近代的なジャジャ馬娘だからです。そしてそのうしたジャジャ馬娘がいやがるのをなぶり、羞恥責めをする事にこそ、SMの本質（現象的な）があると思うからです。

そこで私は次の事を団鬼六先生にお願ひしたいと思います。気が強いジャジャ馬である京子の特色をいつまでも失わせずに、いつも

抵抗する娘にしておいて下さい。そして、そうした京子への最高の責め「浣腸をあらゆる型で、エネマやイルリなどやって下さい。浣腸に代表される羞恥責めを京子に加える事こそ、私の最大の願ひなのです。（今まで京子への浣腸が一回きりとは余りにも少なすぎて強く抗議したい気持です）ただ二人のシスターボーイによる京子のいたぶり調教は、私の願ひを少しみたしてくれました。

又、最近京子がマゾ的になってきているようです（責めの要求など）が、私は京子が、男達に身も心も屈服してしまうのは全く反対です。京子の特色は、静子と異ってあくまでも気の強い娘であるはずで、それでこそ、とらえられている美女のそれぞれの個性が出てくるのだと思います。たとえば同じ浣腸責めにしても、静子には自分から要求させて、ジワジワ責めるようにしむける。そして京子は、必死に抵抗するのを押さえつけて、大勢で大量に実験動物的にやる、などのちがいです。

更に静子は屈服した後のマゾの教育を、そして京子には、抵抗するのを屈服させる為（決して屈服しないが）、ありとあらゆる実

## 編集部だより

○東映京都作品の「徳川いれずみ師へ責め地獄」の緊縛指導にかりだされている辻村隆氏は、このところ大忙しである。本号のカメラ・ハントは既に文選も終っていた「金原奈加子の巻」を急遽入れ替えて東映の分を掲載した。ゴールデンウィークに間に合わすようにに封切を急いでいるようなので本誌の発売と少々ズレるかもしれないが味読をお願いする。

○性問題相談室は弓削達人博士のお仕事の都合で休載になったが、いずれ大幅にスペースを取るつもりなので相談は、どしどし遠慮なくお寄せ下さるよう待っている。

○サスペンス・マガジン誌の編集長からの通信に依ると同誌の六月号は休刊になったとのこと。毎月贈呈された同誌のユニークな誌面を楽しみに愛読していただけない、休刊の報は一入淋しく感じた。捲土重来再び盛況に向かわれることを切に祈るものである。

○本誌に掲載した原稿に対する原稿料は努めて早く送金するように心掛けているのであるが、中には仮



## 『たのしきかなレジャー』

春川 ナミ オ



ハント女性とのプレイを、辻村氏に代って自分がやっているような気持ちになれる。  
望みながらも実行至難を嘆く大方のSM愛好者の、これが手軽に許される範囲の桃源境といえるのではなからうか。  
今までのカメラ・ハントの集録が出来たら……その上に未発表のものを加えた特集が出来たら、誠にすばらしいと思う。  
カメラ・ハントばんざい。辻村氏バンザイ。

験動物的責め（大量浣腸、同時責めによる女体の研究、食物は全て液状にして浣腸で投与など）を行なう必要があると思います。  
つまり、静子には美的マゾ的技術教育（観賞するショー的存在）を、そして京子にはサディスティックな責めを（観賞するための責めではなく、京子を泣かせ責めるための責め。しかし決して体にキズをつけたり痛みを与えるものではない）と、おたがいの個性を出してみてもどうでしょうか。

私は、先生にどうしても京子への責めをもっと加えてもらいたいとお願ひしたいのです。京子に加えられる責めこそ、私の最大の楽しみです。  
最後に、京子には時々、服を着せて、それを大勢の前でなぶるようにはぎとっては、京子に新しい羞恥心を維持させる方法をとってほしいと言う事と、浣腸を中心とする実験動物的責めを加えてもらいたいという事を、強く強く先生にお願いしたいと思います。

名の人や住所を明記していない人があるので稿料未収の方は編集部宛御一報頂きたい。

○懸賞応募作品は必ず原稿用紙を使用して御送稿願いたい。尚いずれの原稿でも横書きのものは、処理に困るので、お断りする。

○最近、SM画やSM写真の投稿が増えつつあるが、鉛筆でばかりのような絵は製版効果が悪いので黒インキか墨汁を用いて描いてほしい。それから用紙は必ず純白の厚手のものを（例えばケント紙）使ってほしいものだ。写真には撮影時のデータを附記して下さいれば幸いである。

○いよいよ緊縛ヌード撮影のシーンを迎え新人モデルに依る傑作の準備に大忙しである。順次誌上に紹介してゆきたい考えである。尚モデル志願の方には相当の謝礼をお支払いする故、勇気を出して応募下さるよう、お待ちする。

○従来、通信に依って編集者に面会を申込まれた方々には、事情の許す限り努めてお会いするようにしてきたが、最近は大忙しのため応じきれなくなってきた故、残念ながらお断りするより外致し方なき次第になった。御用件は書面にて頂ければ大いに幸いである。



## 淋しいM

## SMと金銭

村崎達彦

私が、今でいう「SM」に関心を持ち始めたのは、別に動機があったわけではありませんが、小学校の2年生頃だったと思います。あることを実行した覚えがあるので、その頃からのことだと思えるのですが、もちろん、当時SMなんてことを知っていたわけはなかった、美しい女性に、顔や腹を踏み潰されたり、馬にされたいと、想像して、胸おどらせていたようです。私のクラスに、自分で美しいと思える女の子がいたセイもあったのでしようが、想像しては何とかしたいと思いつめ、ついに幼いながらも計画を樹て、実行を試みた思い出があるのです。

それは、まことにたわいのないことですので、わざわざ書きませんが、私は幼い時から今のマゾの芽があったと思います。

現在、女性向週刊誌などにもSM小説が載っている時代になり、正に「女性上位時代」で、私の欲求びったりで、かえってまごついて

ている状態ですが、子供向けの漫画もゾクツとさせられるものにつかります。TV漫画に「妖怪人間ベム」というのがありますが、私は偶然に視たこの漫画に出てくる「ベラ」(牝の妖怪人間)に、サディスティックな女王を感じて、年甲斐もなくすっかりファンになってしまったのです。私の好みに通じる要素がこの「ベラ」にこもっているらしいのです。

こんな私が、現実にSMプレイと思えることが出来るのは、背中を踏んづけたり、ストッキングで縛ってくれたりする女性マッサージ師。ようやく私の好みを理解してくれたトルコ風呂のオネエちゃんぐらいのものです。

しかし、このような僅かな気分を味った後で、近頃感じることがあります。それは、空しさと淋しさです。空しさは、ただその場限りのSMゴッコだから仕方がないかも知れませんが、淋しさはどうしようもない。私のいいたいのは、このことです。

この淋しさの原因は、そういう職業女性が相手でない、この僅かなSM的気分も味あわせてくれないし、金銭がついて廻るということにあるのです。

『治療に必要なのよ』



東京・赤ちゃん

本当のSMプレイとは、相手を虐待的に扱って自らも欲望を満たすというところにあるのであって、金銭を代償とするものではないと思います。職業女性の場合、無理はないとはいえ、本来、プレイであるべきSMが、ビジネス的になってしまうのです。

私の場合は、ガールフレンドにサジスティックな居ないので、仕方なくこの種の職業女性に求める以外にないのですが、悲しいことにこれらの女性は図々しいもので、どんどん金額を上げて、あくまでビジネス的になってしまうので、

予算の方が心配でおちおちSMプレイだなんて納っている訳にいかないので。楽しかるべき苦悶が本当の苦悶になってはプレイとはいえません。全く淋しく、寂しい限りです。

金銭の力を借りないと出来ないようなSMプレイならやらない方がいい……とは思いますが、現在の私ではそうもいきません。サディスティックの出現を待ち望みながら、日本中、いな世界中がSMで埋め尽されたらどんなに素晴らしいだろうかなどと、果てしない夢を見ている昨今の私なのです。



## ひとりしばり

早木夢二

子供の頃からだから、自分で自分を縛るのにはかなり自信があるつもりである。勿論、菱縄なのであるが、ただ、後手縛りにだけは出来ない。両手を後で組んでせいぜい気分を出すのが関の山。慶子を縛ることが出来るようになったのは、勿論、大きな喜びだったが、同時に、私も彼女に縛って貰えるようになったことは、大変な収穫である。

夫婦プレイで覚えた縄の味は、私のそれまで独り秘め続けてきた忍従と汚辱の歳月を、いっぺんに吹きとばす喜びだった。しかし、その後も、慶子の眼をしのんでは独り縛りを楽しむ癖が抜けず、彼女とのプレイとは別に機会を狙ってはあれこれと、わが身に縄がけしては楽しんでいたものだった。大分、縄になじんできたと思わ



僕のイメージ画集 『日曜日』 室井亜砂路

おたかな日曜日  
亜砂路

れる頃だったが、私は彼女に、独りで縛ってみることを命じたことがあった。勿論初めてのことで、慶子はちょっとためらったが、鏡に映しながら自縛を始め、それでも割合にうまく縄掛けした裸身を私の前に示したとき、私は意外に彼女が縛りに浸りきれぬ女だと知って、こおどろきたい気持ちにかられたものだった。菱縄の締め具合を直し、彼女の二の腕に縄をかけて後手に縛ってやりながら、ある発見をして妙な感心をしたことも楽しい思い出になっている。これは現在もそうなのだが、私の縛り方は、首から降りる二本の縄を、首のちよつと下でまとめて一括りし、すぐに左右に分けて二の腕へ廻すのだ。だが、彼女の縛り方は、一括りしたあと、ちよつと降りた処で、もう一度結んで左右に分けるのである。私が気付いてそういうと、慶子は「あら、そうね」と照れくさそうに笑っただけだったが、以後、気をつけていると、私を縛ってくれる時も、きつとそういう縛り方をするのである。この縄さばきが好きなのだろうかとあまり問題にしなかったのだが

先日、コレクションを出して見返しているうちに、ふと、ああ成程と気付くものに出喰わした。慶子と結婚した当初、縛り趣味を理解させるために見せたこれらの物の中に、ある雑誌からのスクラップで、木俣清史筆の「花鳥の石抱き拷問」の挿絵があったのだ。この花鳥のかけられられている菱縄が、彼女のかける縄と同じ縛り方に描かれているのだ。私はひそかに納得し、微笑したが、彼女は私には云わないが、この花鳥の美しい縛られ姿に、あの当時から魅了されていたに違いないと思う。そういえば、独り縛りの競争をしようと、二人並んでそれぞれが自分を自分で縛った際、鏡に写した自分と私を見較べて、「やはりこうした方がいい恰好よ」と、例の少し間隔を置いた二つの結び目を、胸を突き出して眺めていたこともあった。「なにをニヤニヤしてるの?」と慶子がやって来てのぞきこむと、「あら、これね」と、しげしげと眺めていた。私はこの上ない幸せを感じたことであつた。



## 春を惜しむ

高柳 浩

「節子」と初めて逢ったのは、ジャズ喫茶であった。髪が長く、スラックスがよく似合い、大きなペーパーバッグを抱えていた。

心に通じ合う何かがあったのは数回の出逢いの後、公園を歩いたり、ドライブに行くようになってからである。

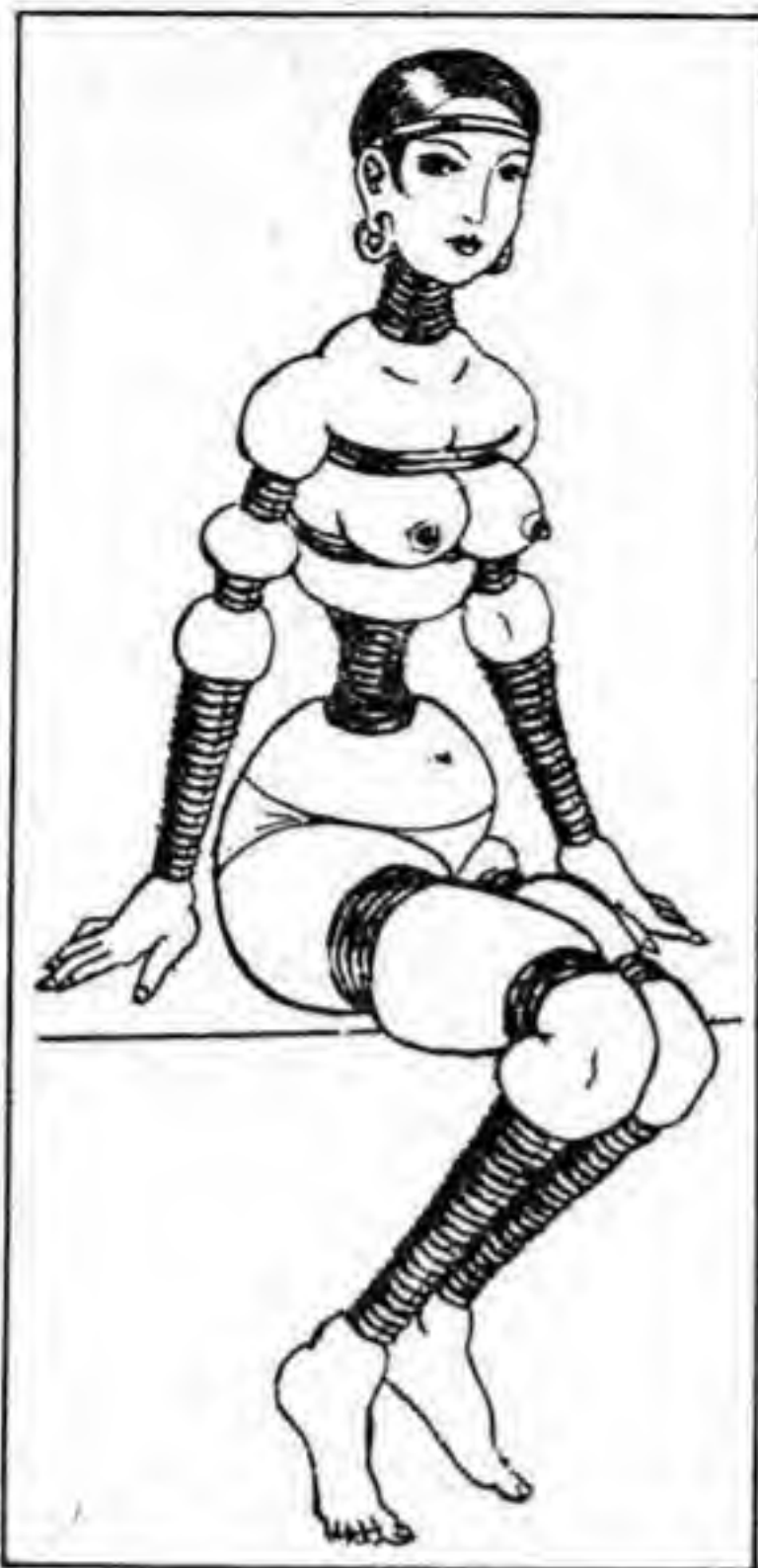
ハイキングや観劇の度数が重なり、やがて僕のアパートへも来るようになった。僕の心に彼女はいつも住みつき、夜叉神峠のふもと、の鉱泉宿が、初めての二人の夜となり、節子が旅行に名を借りて、僕のアパートで朝を迎えるように

なつてからは、いよいよ僕の心は節子に占められるようになった。

柔順で一寸ヤキモチやきだったが、ある夜、かなり遅く帰った僕を、僕のアパートで待っていた節子は、その夜、初めてロープの洗礼を受けたのだった。布団袋のロープと荷造用の綿ロープであった。

恥ずかしげな微笑はいつの時も変らないが、脱ぐことはもはや、二人の間では当然のこととなっていた。

「手を後に組んで」という、酔の助けを借りての命令口調に、節子は素直に従ったが、「縛るよ」と



私のイメージ 『ミス・リガーチユアー』 古留節人

ロープを示すと、驚いたように手を胸に戻し、小さく体を振って拒みの態度に変わった。

その節子を背後から抱きすくめたまま、「縛りたいんだがなあ」と耳許で呟くと、コックリして胸を抱いた手を再び背に回した。

その夜以来、二人の気持はより強く結びついた。誰にも云えない二人だけの秘密感が、そうさせたのか。僕の愛着は更に増大した。

節子はプレイを拒まなかった。ロープが増え、パイプや竹の棒も用意された。縛り方もだんだんと

念が入り、僕の知識と創意の総てを動員したが、節子は、喘ぐように切なげな呻きは洩らしても、拒否の言葉を口にはしなかった。そして縄に対する感応は、眼にみえて昂まっていった。

日中、もちろん洋服も着け、全然、プレイの雰囲気でない時に、いきなり縄を見せてやると、パツと頬を染め、羞恥の風情を無意識に示してしまふらしく、必要以上にあわてる様子が可愛く面白いことを知った僕は、時を見計っては

何回かやってやった。その効果は殆どの場合、変らなかった。

何か新しい試みをしようとする時には、やはりびくくりしたよう

にして、いつの時にもかなり抵抗した。だが、それは僕にとって一種の楽しみであった。征服する楽しみといえはそうともいえるのだが、泣き出さんばかりの抵抗も、命令することによって、最後には必ず受入れるからだった。

提案は拒否しても、命令には、羞恥に身をよじりながらも服従する。それが節子だった。

瘦身ではあったが、バストは豊かであった。自ら「Bカップ」と誇らしげに語っていた。埋まるようなまだ小さな乳首を、木綿糸で括るのは苦勞が要ったが、節子自身はひっぱり出すようにして縛り吊るようにして首の後で糸を結び

合わせ、細手のロープでウエストを締めあげ、縦縄にした上にスラックスをはかせて、夜の新宿を歩き廻らせたのが、縄つき外出の最初でそして文字通りの最後のプレイとなつてしまった。

翌日、家族と共に奥日光に遊んだ帰途、自動車事故で、助手席の彼女だけが逝くという不運が、僕から幸福を奪ってしまった。信じられない思いの僕は、ロープを見ては涙を涸らし、責め道具を手には

もうそろそろ一年になる。



「最近版」粒選り麗美女体緊縛力作写真

Z組百態 大手札型印画紙(9×13) 極鮮明焼付

各組 一組一枚(送料共)

四組四枚 五〇〇円  
十組十枚 一〇〇〇円  
二十組二十枚 一八〇〇円  
五十組五十枚 四〇〇〇円  
百組百枚 七〇〇〇円

(郵便番号 545-91)

大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号  
天星社宛お申込み下さい。

一枚一枚、いずれも一粒選りの素晴らしい緊縛フォトばかりを集めました。お好みのモデルの、好きなポーズをお選び下さい。

☆

1 鞭打条痕の臀部(関谷富佐子)  
2 後手は高く縛る(佐々木真弓)  
3 八の字の開股縛(左近麻里子)  
4 狂う女体の表情(ローズ秋山)  
5 縄に苦しむ長身(川越美佐子)  
6 弄ばれる全裸縛(長井葉津子)  
7 ゴム衣縛りの極(木村 洋子)  
8 白肌輝く股間責(山原 清子)  
9 全身縛りを吊る(大塚 啓子)  
10 悦虐に悲泣する(関谷富佐子)  
11 亀甲股間縛り晒(山原 清子)

12 開股強烈羞恥責(木村 洋子)  
13 妊婦の太鼓腹縛(中河 恵子)  
14 縛りの好きな顔(一宮百合子)  
15 美貌の妊婦緊縛(中河 恵子)  
16 縛りの全裸を見て(金原奈加子)  
17 憂愁の佳人縛り(左近麻里子)  
18 前面を晒す裸像(長井葉津子)  
19 亀甲縛りの正面(左近麻里子)  
20 後手縛りを見せる(川越美佐子)  
21 鞭は女体に炸裂(ローズ秋山)  
22 逞ましき臀部晒(左近麻里子)  
23 真白の柔肌責め(左近麻里子)  
24 ムチ責めの果て(安井喜久子)  
25 鉄砲逆海老縛り(関谷富佐子)  
26 湯責めにあう女(山原 清子)  
27 変型高手小手縛(川越美佐子)  
28 洋子をいじめて(木村 洋子)  
29 緊縛のホステス(佐々木真弓)  
30 柔肌に喰込む縄(長井葉津子)  
31 均斉のとれた体(佐々木真弓)  
32 涙責めの熱演(ローズ秋山)  
33 脚吊りで責める(ローズ秋山)  
34 片足吊りの狂態(大塚 啓子)  
35 猿轡の開股縛り(木村 洋子)  
36 股間縛の縄掛け(ローズ秋山)  
37 妊婦仰臥猿轡責(中河 恵子)

38 二つ重ねの裸女(佐々木真弓)  
39 縛られた洋裁生(長井葉津子)  
40 椅子開股羞恥責(左近麻里子)  
41 責め抜いた挙句(安井喜久子)  
42 黒髪をいたぶる(大塚 啓子)  
43 全裸の股間縛り(山原 清子)  
44 黒総ゴム衣縛り(木村 洋子)  
45 パンティを剥く(大塚 啓子)  
46 緊縛に頬赤らむ(一宮百合子)  
47 猿轡の妊婦縛り(中河 恵子)  
48 全裸高手小手縛(長井葉津子)  
49 黒髪をいたぶる(ローズ秋山)  
50 後手の嚴重縛り(左近麻里子)  
51 麗わしの妊婦縛(中河 恵子)  
52 炸裂する革ムチ(安井喜久子)  
53 剥がされた布片(金原奈加子)  
54 浴槽と荒縄の責(山原 清子)  
55 髪吊りの操り責(ローズ秋山)  
56 高手小手の裸女(左近麻里子)  
57 海老縛りに泣く(関谷富佐子)  
58 恐怖の滑車吊り(大塚 啓子)  
59 悶える全身縛り(一宮百合子)  
60 伸びやかな素足(一宮百合子)  
61 卓上の人身御供(左近麻里子)  
62 皮紐の柔肌責め(中河 恵子)  
63 股間縛を羞らう(金原奈加子)  
64 宙吊りにもがく(木村 洋子)  
65 裸身を晒す表情(金原奈加子)  
66 輝く全裸の悶え(関谷富佐子)  
67 全裸をもがく女(ローズ秋山)  
68 豊満な臀部晒し(佐々木真弓)

69 乳房強調縛猿轡(左近麻里子)  
70 媚を撒く縛り女(佐々木真弓)  
71 縄のブラジャー(左近麻里子)  
72 逆手吊りの鞭打(関谷富佐子)  
73 逆エビで責める(ローズ秋山)  
74 美しき緊縛立像(関谷富佐子)  
75 悶える緊縛全裸(金原奈加子)  
76 鞭で責める女体(ローズ秋山)  
77 両手吊りで晒す(金原奈加子)  
78 豆絞りの猿轡縛(川越美佐子)  
79 あどけなき表情(金原奈加子)  
80 激しい縄目の肌(金原奈加子)  
81 白肌にむぎき縄(左近麻里子)  
82 両手大の字吊り(関谷富佐子)  
83 首縄縛りの裸女(佐々木真弓)  
84 美しき全裸肢体(佐々木真弓)  
85 柱に繋がれた女(長井葉津子)  
86 尻挙げ海老縛り(安井喜久子)  
87 鑑賞用全裸緊縛(川越美佐子)  
88 荒縄縛りの刺青(山原 清子)  
89 股裂きで責める(ローズ秋山)  
90 ドレイ洋子の姿(木村 洋子)  
91 後手に縛上げる(ローズ秋山)  
92 滑車吊りの裸女(大塚 啓子)  
93 若々しき緊縛美(佐々木真弓)  
94 S男がいたぶる(佐々木真弓)  
95 強烈縛りに喘ぐ(山原 清子)  
96 正面全裸柱晒し(長井葉津子)  
97 開股縛りに羞う(左近麻里子)  
98 白肌に喰込む縄(大塚 啓子)  
99 尻立て股間縛り(木村 洋子)  
100 悦虐に泣く美女(安井喜久子)



〔優秀緊縛写真特選集〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

緊縛女体撮影風景

- 足挙げ開股責め 大手札三枚一組 四〇〇円  
 足挙げ開股責め 大塚 啓子 略号(むら) 五〇〇円  
 猪 吊り三態 大手札三枚一組 四〇〇円  
 猪 吊り三態 梨花悠紀子 略号(あけ) 四〇〇円  
 責め衣縛り 大手札三枚一組 四〇〇円  
 責め衣縛り 大塚 啓子 略号(いの) 四〇〇円  
 強烈エビ責め 大手札三枚一組 四〇〇円  
 強烈エビ責め 大塚 啓子 略号(せめ) 四〇〇円  
 後手首の高縛り 玉田美佐子 略号(ねむ) 四〇〇円  
 椅子またぎの責め 大手札三枚一組 四〇〇円  
 椅子またぎの責め 玉田美佐子 略号(ねへ) 四〇〇円  
 全裸脚挙げ縛り 大手札三枚一組 四〇〇円  
 全裸脚挙げ縛り 玉田美佐子 略号(ぬと) 四〇〇円  
 全裸アグラ縛り 大手札三枚一組 四〇〇円  
 全裸アグラ縛り 長野 良子 略号(てい) 四〇〇円  
 全裸屈伸縛り 大手札三枚一組 四〇〇円  
 全裸屈伸縛り 長野 良子 異号(てへ) 四〇〇円  
 強烈エビ責め 大手札三枚一組 四〇〇円  
 強烈エビ責め 松本アサ子 略号(てほ) 四〇〇円  
 松本アサ子 略号(まと) 四〇〇円

吊り打ち

- 股間縛り法悦境 大手札三枚一組 四〇〇円  
 股間縛り法悦境 大塚 啓子 略号(やり) 四〇〇円  
 踊り子緊縛 大手札三枚一組 四〇〇円  
 踊り子緊縛 絹川 文子 略号(ぬこ) 四〇〇円  
 月経帯のまま縛り 大手札三枚一組 四〇〇円  
 月経帯のまま縛り 絹川 文子 略号(りこ) 四〇〇円  
 遠藤百合子 略号(ゆす) 四〇〇円  
 縄目に悶える夫人 大手札三枚一組 四〇〇円  
 縄目に悶える夫人 大塚 啓子 略号(ほく) 四〇〇円  
 髪を引き回される夫人 大手札三枚一組 四〇〇円  
 髪を引き回される夫人 大塚 啓子 略号(ほむ) 四〇〇円  
 膨満正面縛り 大手札三枚一組 四〇〇円  
 膨満正面縛り 長野 良子 略号(へな) 四〇〇円  
 マニヤ全裸緊縛フット 大手札三枚一組 四〇〇円  
 マニヤ全裸緊縛フット 栗本ミチ子 略号(いな) 四〇〇円  
 強烈エビ縛り 大手札三枚一組 四〇〇円  
 強烈エビ縛り 大塚 啓子 略号(もい) 四〇〇円  
 乳房責の苦悶 大手札二枚一組 三〇〇円  
 乳房責の苦悶 大塚 啓子 略号(もろ) 三〇〇円  
 全裸ムチ打ち 大手札四枚一組 五〇〇円  
 全裸ムチ打ち 大塚 啓子 略号(もた) 五〇〇円  
 強打に泣く裸身 大手札四枚一組 五〇〇円  
 強打に泣く裸身 大塚 啓子 略号(むち) 五〇〇円

裸身の晒し

- 全裸股間縛 大手札三枚一組 四〇〇円  
 全裸股間縛 大塚 啓子 略号(わあ) 四〇〇円  
 双胸の強調縛り 大手札四枚一組 五〇〇円  
 双胸の強調縛り 大塚 啓子 略号(せら) 五〇〇円  
 動感海老責地獄 大手札三枚一組 四〇〇円  
 動感海老責地獄 長野 良子 略号(そう) 四〇〇円  
 色禪の開股縛り 大手札三枚一組 四〇〇円  
 色禪の開股縛り 大塚 啓子 略号(とう) 四〇〇円  
 鼻責めのアップ 大手札三枚一組 四〇〇円  
 鼻責めのアップ 長野 良子 略号(いふ) 四〇〇円  
 乳房しばり 大手札三枚一組 四〇〇円  
 乳房しばり 大塚 啓子 略号(はす) 四〇〇円  
 鼻責めと緊縛 大手札五枚一組 六〇〇円  
 鼻責めと緊縛 長野 良子 略号(うは) 六〇〇円  
 木馬責三態 大手札三枚一組 四〇〇円  
 木馬責三態 大塚 啓子 略号(うい) 四〇〇円  
 椅子責めの果て 大手札二枚一組 四〇〇円  
 椅子責めの果て 大塚 啓子 略号(いす) 四〇〇円  
 檻に入れられた女 大手札三枚一組 三〇〇円  
 檻に入れられた女 山原 清子 略号(もの) 三〇〇円  
 浴室の全裸刺青 大手札三枚一組 六〇〇円  
 浴室の全裸刺青 山原 清子 略号(よな) 六〇〇円

鼻いじめ三態

- 鼻責め万華鏡 大手札八枚一組 一二〇〇円  
 鼻責め万華鏡 山原 清子 略号(はね) 一二〇〇円  
 碧玉裸身緊縛 大手札三枚一組 四〇〇円  
 碧玉裸身緊縛 大塚 啓子 略号(のん) 四〇〇円  
 くすぐり責め地獄 大手札三枚一組 四〇〇円  
 くすぐり責め地獄 大塚 啓子 略号(きす) 四〇〇円  
 灼熱の蠟涙責め 大手札四枚一組 五〇〇円  
 灼熱の蠟涙責め 大塚 啓子 略号(きせ) 五〇〇円  
 豊満な乳房を責める 大手札五枚一組 七〇〇円  
 豊満な乳房を責める 大塚 啓子 略号(きそ) 七〇〇円  
 女奴隷を飼育する 大手札五枚一組 七〇〇円  
 女奴隷を飼育する 大塚 啓子 略号(きて) 七〇〇円  
 凌辱されるマソ女 大手札五枚一組 七〇〇円  
 凌辱されるマソ女 大塚 啓子 略号(きと) 七〇〇円  
 鼻責め悦楽 大手札二枚一組 三〇〇円  
 鼻責め悦楽 大塚 啓子 略号(きな) 三〇〇円  
 全裸強烈羞恥縛り 大手札三枚一組 四〇〇円  
 全裸強烈羞恥縛り 東浦 ひとる 略号(なの) 四〇〇円  
 猿ぐつわにあえぐ裸女 大手札三枚一組 四〇〇円  
 猿ぐつわにあえぐ裸女 東浦 ひとる 略号(なむ) 四〇〇円  
 全裸の緊縛姿態開陳 大手札四枚一組 五〇〇円  
 全裸の緊縛姿態開陳 遠藤百合子 略号(ゆり) 五〇〇円



## ☆浣腸関連資料の部☆

## 只今浣腸実施中

大手札三枚一組 略号(るは) 四〇〇円  
東浦ひかる 略号(かみ) 四〇〇円

## 強制空気浣腸

大手札三枚一組 略号(かは) 四〇〇円  
東浦ひかる 略号(かく) 四〇〇円

## 百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 略号(かな) 四〇〇円  
東浦ひかる 略号(かな) 四〇〇円

## 浣腸責の極致

大手札三枚一組 略号(かむ) 四〇〇円  
東浦ひかる 略号(かむ) 四〇〇円

## 女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 略号(れち) 一五〇〇円  
梨花悠紀子 略号(れち) 一五〇〇円

## 強制女体浣腸三態

大手札三枚一組 略号(きか) 四〇〇円  
絹川 文代 略号(きか) 四〇〇円

## イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 略号(いるり) 一五〇〇円  
梨花悠紀子 略号(いるり) 一五〇〇円

## 太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 略号(かふ) 四〇〇円  
東浦ひかる 略号(かふ) 四〇〇円

## 自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 略号(ゆか) 四〇〇円  
遠藤百合子 略号(ゆか) 四〇〇円

## 浣腸器と女

大手札三枚一組 略号(ほの) 四〇〇円  
絹川 文代 略号(ほの) 四〇〇円

## エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 略号(るい) 五〇〇円  
大塚 啓子 略号(るい) 五〇〇円

## イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 略号(るは) 六〇〇円  
大塚 啓子 略号(るは) 六〇〇円

## 女体浣腸ブレイ

大手札三枚一組 略号(ほは) 四〇〇円  
大塚 啓子 略号(ほは) 四〇〇円

## 逆ばしる浣腸液

大手札三枚一組 略号(ほい) 四〇〇円  
大塚 啓子 略号(ほい) 四〇〇円

## 浣腸後の排便

大手札五枚一組 略号(へき) 六〇〇円  
大塚 啓子 略号(へき) 六〇〇円

## 便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 略号(へか) 六〇〇円  
大塚 啓子 略号(へか) 六〇〇円

## 浣腸される清子

大手札三枚一組 略号(かる) 四〇〇円  
山原 清子 略号(かる) 四〇〇円

## 浣腸に興ずる女

大手札八枚一組 略号(かへ) 一三〇〇円  
山原 清子 略号(かへ) 一三〇〇円

## 浣腸に悶える女

大手札七枚一組 略号(かに) 一二〇〇円  
山原 清子 略号(かに) 一二〇〇円

## イルリガートルの浣腸

大手札五枚一組 略号(けか) 七〇〇円  
大塚 啓子 略号(けか) 七〇〇円

## いちじく浣腸の実施

大手札五枚一組 略号(けき) 七〇〇円  
大塚 啓子 略号(けき) 七〇〇円

## 百CCのポンプ浣腸

大手札五枚一組 略号(けく) 七〇〇円  
大塚 啓子 略号(けく) 七〇〇円

## オマルに排便の姿態

大手札五枚一組 略号(けし) 七〇〇円  
大塚 啓子 略号(けし) 七〇〇円

## 浣腸後オシメ着用

大手札四枚一組 略号(けこ) 五〇〇円  
大塚 啓子 略号(けこ) 五〇〇円

## 浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 略号(のけ) 四〇〇円  
遠藤百合子 略号(のけ) 四〇〇円

## 高圧空気浣腸

大手札三枚一組 略号(むい) 四〇〇円  
大塚 啓子 略号(むい) 四〇〇円

## 浣腸場面大写真

大手札三枚一組 略号(むは) 四〇〇円  
大塚 啓子 略号(むは) 四〇〇円

## 施される浣腸

大手札三枚一組 略号(むろ) 四〇〇円  
大塚 啓子 略号(むろ) 四〇〇円

## 浣腸をする女

大手札三枚一組 略号(ゆか) 四〇〇円  
遠藤百合子 略号(ゆか) 四〇〇円

## 自ら施す浣腸

大手札三枚一組 略号(ちぬ) 四〇〇円  
大塚 啓子 略号(ちぬ) 四〇〇円

## 浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号(ちり) 四〇〇円  
大塚 啓子 略号(ちり) 四〇〇円

## 浣腸を施される女

大手札三枚一組 略号(ちら) 四〇〇円  
大塚 啓子 略号(ちら) 四〇〇円

## 浣腸後介添排便

大手札六枚一組 略号(かね) 一〇〇〇円  
山原・東浦 略号(かね) 一〇〇〇円

## グリセリン溶液注腸

大手札六枚一組 略号(かて) 一〇〇〇円  
山原・東浦 略号(かて) 一〇〇〇円

## シリンドーにて浣腸

大手札六枚一組 略号(かた) 一〇〇〇円  
山原・東浦 略号(かた) 一〇〇〇円

## イルリガートル嘴管挿入

大手札六枚一組 略号(かち) 一〇〇〇円  
山原・東浦 略号(かち) 一〇〇〇円

## アーヌス浣腸補助

大手札四枚一組 略号(かの) 七〇〇円  
山原・東浦 略号(かの) 七〇〇円

## 浣腸に興ずる清子

大手札四枚一組 略号(うも) 五〇〇円  
山原・東浦 略号(うも) 五〇〇円

## 浣腸される浣腸マニア

大手札四枚一組 略号(うわ) 五〇〇円  
山原 清子 略号(うわ) 五〇〇円

## 浣腸悦楽独りプレイ

大手札五枚一組 略号(ぬる) 六〇〇円  
美木乃々子 略号(ぬる) 六〇〇円

## 施される浣腸の美味

大手札五枚一組 略号(ぬか) 六〇〇円  
美木乃々子 略号(ぬか) 六〇〇円

## 捜入された嘴管

大手札四枚一組 略号(るて) 五〇〇円  
大塚 啓子 略号(るて) 五〇〇円

## 襲いくる浣腸器

大手札二枚一組 略号(るち) 三〇〇円  
大塚 啓子 略号(るち) 三〇〇円

## 女体浣腸独り遊び

大手札三枚一組 略号(ると) 四〇〇円  
大塚 啓子 略号(ると) 四〇〇円





初めておたよりします。女の方の投稿も多いので、思いきっておたよりしました二十二才のOLです。『花と蛇』を読んでファンになり毎月の発行を楽しみにしています。六月号がもうすぐ出る頃なのですが、静子夫人が夏次郎に、この次はどんな羞しいことをされるのかと思うと、胸がわくわくします。このように、毎月楽しみにしているのです。ぜひ排尿ショーや排便ショーをどしどし載せて下さいませ。お願いします。導尿カテ

ーテルをぶらぶらさせて踊る静子夫人や神酒を飲まされる美女の事などを書いてほしいと望んでいます。(神戸市灘区・大西えり子)

私は昼は賢婦、夜は夫を奴隷にして絶対的な権力を持つ女王様。夫は生れながらのマゾヒストで縛り、ムチ打ち等強烈な責めに至るまで、私の命令通りやれるように飼育しております。でも今では毎日毎日同じことの繰り返しで何にかマンネリ化して物足りません。同好の女性の方でSMに興味をお持ちの方、特に御夫婦の方でSMプレイにハッスルしておられる方お便り下さい。お互いに体験を話し合い、コンビでプレイ出来たら楽しいと思います。又私は素直で肉感的な女奴隷がほしい。年令は問いません。十分に女主人に奉仕できる自信のあるメス犬を望みます。(東京都北区・田端美代子)

「全身の剃毛」これは素敵なお日本語です。鋭利な剃刀で全身を剃られてゆく芙美子。少しでも動けばたちまち剃刀が肌に喰込んでゆくとわかってても、強烈に縛られた痛さと剃刀の冷たいしびれるような感触で、じっとしていることがで

きず、全身に点々と小さな傷をつけてゆく。剃り終った芙美子は、丁度、鱗をとられた魚を水洗するように、温い塩水を満たした桶につけられてスポンジで洗われる。水に濡れた髪は肌に喰い込み、塩水は傷口にしみ、思わず声を出そうとしても喉がつかえ、かまされているので声にならない。身体を洗い終った芙美子は、犬の首輪をはめられ、背中両手首を縛った縄は、首輪につけたリングを通して高々と肩先までねじ上げられる。リングはダブルになっており、縄を引きしめると、ゆるめても止まるようになっており、手首は、いくらでも高々と肩先まで上ってゆく。私の今までの経験では、いく

らきつく縄をひいても、多少息が苦しくなるだけで絶対窒息はしません。今まで行なったT嬢など、私が力一杯ひいても何ともなく、いつも私の方が根負けしてしまいました。これはM嬢にも同じで彼女らは手首が首輪のところまでくるので、他の方法で手首を上げておきました。ただ芙美子のように三十才にもなると、なかなか手首は肩まで上らないし、初めは脇の肉が突っぱり痛いと思われませんが、何度も繰り返せば痛みは感じな

くなります。言いおくれましたが私は四十四才の会社員で一応一流会社の課長をしております。今までは、緊縛の経験は、T嬢、M嬢、E嬢と三名ですが、もしよろしければ芙美子のいうようにどこかでプレイしたいと思います。新幹線でどちらにも相寄って名古屋あたりで会っても良いし、また環境の良い神戸で会っても良く、当方から横浜方面へ出向いても良いと思います。(神戸・森本真一)

宮城みち子様。私は二十才の某大学生です。今まで二十五、六才の女性の通信が多い中で、貴女のように私と同年で同好の人がいることを、とても嬉しく思います。今まで私のような若年の者が、このような方法の愛を持つということとは間違っているのかと思っただ矢先、貴女の通信を拝見し、ぜひ交際をおねがいしたくペンをとった次第です。私は誠実さ、まじめさにかけては人に負けないつもりです。もし交際していただけたら、この上なく幸せだと思います。では誌上での連絡をお待ちいたします。(東京・佐藤男)

私は芦屋に住む四十二才の市民



です。マゾ女性の方で身心ともに牝犬として教育してほしい人、誌上にてご返事下さい。牝犬教育の場所として平屋一軒を用意いたしております。牝犬希望の女性との契約は六月一日より九月三十日まで四カ月の期間で四十万円が如何でしょうか。この場合、内金として十万円を先払いいたしました、残金は九月末日までお支払いいたします。なお契約の期間中は絶対に人間として認めません。あくまで一匹の牝犬として犬小屋にて寝起きしていただきます。また一切世間とのつき合いは許しません。首には、牝犬として首輪を、はめます。ムチ打ちはしません、牝犬がムチ打ちを求めればムチ打ちもいたします。なお人妻の場合はご主人の同意書を求めます。その期間はご主人、あるいは家族との交信も許しません。契約と同時に私は牝犬の主人になるのです。が主人として牝犬には絶対、肉體関係は求めません。なぜなら相手は畜生犬だからです。その点は信用下さい。なお畜生犬として毎日、感じたことを日記にして、後日必ず奇巧に投稿することを約束して下さい。牝犬教育の場所は絶対に秘密です。連絡方法は貴女の指定

する喫茶店にして下さい。必ずお伺いいたします。吉報をお待ちいたしております。(小田信正)

神戸の小杉千恵さん、お便り拝見しました。花と蛇に出てくる美女のように羞恥責めに会いたいとおっしゃっておられますが、ぜひ私にプレイさせて下さい。あなたのお望みのようなことは、十分してあげられると思います。両足を大きく開いて竹の棒にくくり、あなたの姿を詳細に観察し、浣腸も行いましょう。そして私の目の前で羞恥にもだえながら粗そうしなければなりません。これほど恥かしいことはないと思います。その他、色々な恥かしいことをやりま。おたよりお待ちいたします。

(東大阪市・北野弘)

小生は時代調、日本髪的美女が猿ぐつわをはめられた姿態に強いあこがれを持っております。手近な雑誌、週刊誌等に掲載された、日本を代表する美女の写真に、墨や白紙を切り抜いて、下手な猿ぐつわをはめて一人静かに楽しんだのが合成フォトの始まりでした。もちろん生身の人間をそのようにできれば最高ですが、先ずそのよ

うな機会に出合うことはないと思います。写真及び絵画は、一人で楽しむのには捨てがたい魅力を持っています。吉永小百合でも藤純子でも気に入った写真がみつければ早速、合成写真で「猿ぐつわの緊縛姿態」を創ることが出来、洋髪を日本髪に背景など考えて、好みのイメージ写真を、創作するのはたのしいものです。刈谷市の金岡直行さん。吉永小百合と園まりの猿ぐつわと縛り写真をお望みのようですね。小生なれば直ぐにで

きますが、スターの縛り写真ともなれば誌上発表は困難です。五月号の奇クサロンに小生の作品が採用になりましたが、モデルは北条きく子と酒井和歌子です。顔の部分は修正して、本人にみえないように注意しました。仕上りについて皆様の感想をお聞きたいと思っています。読者の中で「女と猿ぐつわ」を主題に、色々変わった面白いアイデアを持ってもらえる方との文通を希望しております。

(桐葉功生)

### 木戸悦子妊婦写真

本誌十月号のSMカメラハント「胎児の喘ぐとき」八妊婦九カ月の妊婦を縛るVでその便々たる太鼓腹をカメラの前に晒した木戸悦子夫人のフォトを特に同好者の方に左記の通り分譲します。

九カ月妊婦全裸立像正面 四〇〇〇円

大手札三枚一組 略号「のま」 四〇〇〇円

羞らう妊婦の裸身前向立像 四〇〇〇円

大手札三枚一組 略号「のめ」 四〇〇〇円

木戸悦子 略号「のめ」 四〇〇〇円

九カ月の妊婦腹を晒す 四〇〇〇円

大手札三枚一組 略号「のや」 四〇〇〇円

木戸悦子 略号「のや」 四〇〇〇円

九カ月の妊婦腹を縛る 四〇〇〇円

大手札三枚一組 略号「のこ」 四〇〇〇円

木戸悦子 略号「のこ」 四〇〇〇円

便々たる太鼓腹に縄掛け 四〇〇〇円

大手札三枚一組 略号「のし」 四〇〇〇円

木戸悦子 略号「のし」 四〇〇〇円

膨満腹も露わな両手挙げ縛り 四〇〇〇円

大手札三枚一組 略号「のろ」 四〇〇〇円

木戸悦子 略号「のろ」 四〇〇〇円

竹棒責めに喘ぐ九カ月妊婦 四〇〇〇円

大手札三枚一組 略号「のは」 四〇〇〇円

木戸悦子 略号「のは」 四〇〇〇円

十文字縛りの妊婦腹 四〇〇〇円

大手札三枚一組 略号「のに」 四〇〇〇円

木戸悦子 略号「のに」 四〇〇〇円

柱縛りに苦しむ九カ月の妊婦 四〇〇〇円

大手札三枚一組 略号「のほ」 四〇〇〇円

木戸悦子 略号「のほ」 四〇〇〇円

開股責めと椅子縛りの妊婦 四〇〇〇円

大手札三枚一組 略号「のへ」 四〇〇〇円

木戸悦子 略号「のへ」 四〇〇〇円



○

玉田静江さんのお灸いじめを読  
んで、ほんとうに久しぶりに灸責  
めの小説が出て、嬉しさの余り筆  
をとりました。灸責めは肌に跡が  
残るので、多くの人々がプレーと  
しては嫌われることだろうと思ひ  
ます。しかし、お灸に魅せられて  
しまうと、身を焼く熱さがたまら  
ないのです。小生も終戦後、玉田  
さんの小説に似たように、飲み屋  
の女将から始めてお仕置としての  
お灸をすえられたのです。そのと  
きの余りにもすばらしい気分、  
灸責めのマニヤとなっていました。  
のです。若いときは、やはり入浴  
のときが恥かしかったのです。で  
も刺青と異って病氣のためと知人  
には言っておりました。その後、  
出張のときや旅行のときに、赤線  
の女、旅館の女中、バーの女、マ  
ッサージの女と、四、五十人の女  
性から灸責めにあってきました。  
灸責めも馴れるにしたがって、縛  
りつけられて、そうして相手がお  
仕置するが如くに荒い口調で叱り  
ながら、すえられるのがよくなり  
ました。玉田さん、または女性の  
方でプレーをして下さる方の連絡  
を待っております。小生は鞭打ち  
の強いのは好みませんが、浣腸責

め、ローソク責めにはかなりの自  
信があります。

(小田原市・保田徹)

○

横浜の寺岡美子さん。拝見し  
ました。これは、ぼくの貴女に対  
しての呼びかけではないんです。  
とうてい、そんな男ではないので  
どうぞご安心を。考えてみると、  
女性に幸せですな。鐘や太鼓を打  
ちならす男どもと違って、引き手  
あまたですから。モテないぼく  
には喜んでいいのかどうかかわら  
ないが、近頃、女性の進出はめざ  
ましい限りです。それだけに読者  
欄は楽しみの一つにしているの  
ですが、女性のそれがレスであれ  
SであれMであれ、世の情けない、  
いや不幸にも運の悪い男どもをし  
て「ほほう」「うーむ」と感嘆驚  
愕、頭カッカ、胸ドキドキ。よー  
し、プロに先を越されてたまるも  
のか。やったるで、やられたるで  
と、あと先考えず猪突猛進、一歩  
手前で危くテメエを見出した頃  
は、せっかくの意気込みもウォー  
ミングアップも、たちまちにして  
しなえて意気消沈。「あほらしい  
止めた」となるのですぞ。ぼくが  
止めた止めたを繰り返してきたの  
は他でもない。やっぱりテメエに

安井・中河・金原緊縛写真

大手札印画紙極鮮明焼付フोट

開股羞恥責めの姿態

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
髪吊りで強烈ムチ打ち 略号 八しうV

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
片足首引きつけ縛り 略号 八したV

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
尻立て鞭打ち艶姿 略号 八しちV

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
柔肌に炸裂するムチ 略号 八しつV

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
エビ縛りの鞭打ち 略号 八してV

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
貞操帯着用鞭打ち 略号 八しとV

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
痛打にもかく美女体 略号 八しやV

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
あぐら縛りの羞恥責 略号 八しゆV

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
片脚挙げで晒す裸身 略号 八しよV

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
略号 八とはV

強烈エビ縛りで苦悶

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
略号 八とにV

膝頭縛り開股竹棒責め

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
略号 八とほV

竹棒開股足首縛り

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
略号 八とへV

股間縛りの裸身表情

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
略号 八とちV

菱縄縛り猿ぐつわの表情

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
略号 八とりV

乱痴戯騒ぎの結末

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
略号 八とぬV

菱縄縛りで床に喘ぐ

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
略号 八とるV

浣腸責めの甘い恐怖

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
略号 八とかV

浣腸液の注入直後

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
略号 八とまV

強制浣腸の各姿態

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
略号 八とみV

浣腸責め的美態開陳

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
略号 八とめV

浣腸を待つポーズ

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
略号 八ともV



信用がおけないし、ぼくには頭にくるコトバの社会的地位などムロシ一かけらもありませんですな。四十一才まで、ずっと独り者。シガネエ地方の公務員の下っ端のオッサンであれば、ああと天を仰ぐじゃありませんか。愛してるとか信じてるとか、口や態度で示し、また示されたって所詮、神様じゃないんで、悲しい人間のスルこと言うこと。そりゃ鞭があるから、不信があるからと考えたり、天びんに計ってたんじゃ、こりあもうどうしようもなく、死んだ方がましというもの。世の中の男と女という一対は、ぼくのような独り者から見ると、よくも、あんな状態で、いがみ合い、憎しみ合いながらでも、生活しているもんだと思うケースがある。人に聞いてみると、いろんな組合せがあつて、イヤだなと思う。夫婦とは、愛情が主流となるんだろうか。愛情とは許容と信頼の蓄積なのか。ガマンする、し合う。並たいていではないよね。性格の不一致、これほど無責任で訳けの判らない言葉はあるまいと思う。貴女がどういう理由で別れたか知る由もない。また知る必要は無いけれども、莫然で無責任で申し訳けないが貴女

も人の子、それぞれ至らぬこと、もろもろあつたのではないかと、(叱られるかも知れませんが) 思います。しかし、しっかりと生きた生きた生活に一生懸命であるう貴女には、よく離婚後の暗いイメージがなく、大いに安心をし、好感がもてるようです。すばらしいパートナーを得られんことを関西の街の一角から祈っています。(尼崎・島内晋一郎)

花と蛇特集号誕生を慶ぶ。自肅方針に依つて口絵八葉に止まってしまうが、四馬孝画伯の麗筆はすべてを補うのに充分で、八葉の画は、どれもこれも羞恥責めを美しく描いている。排泄を強要される美女の丸い尻が、ビニール風呂敷の上に悶え、開股の柔らかな太腿の間より、今にも羞恥のかたまりが落花しように思える。品定めをされる令嬢のストッキングの上の悩ましい太腿に、ふっくらと白いブロースがずり下ろされ、股間縛りの絶世の美女の縦縄が中心部を圧して、恥かしそうに目を閉じた女の表情が、倒錯の興奮を呼ぶ。剃毛に悶える口唇がせつなくふっくらとした腹部のおへそが可愛い。足吊りで強制浣腸を施さ

可憐表情の全裸縛り 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆめ	立縛り正面裸晒し 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆえ	両手吊り全裸晒し 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆひ	雁字搦目後手縛り 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆあ	股間縛り柔肌責め 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆも	猿ぐつわ開股責め 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆに	豊満な臀部強烈責め 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆほ	強制全裸開股責め 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆみ	股間縛りで悶える 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆろ	全裸縛りに羞らう 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆへ	私の妊娠腹を見てね 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河恵子 略号 八ゆわ	縛られた妊婦横臥す 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河恵子 略号 八ゆよ
被虐に燃える全裸妊婦 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河恵子 略号 八ゆぬ	尚も見せたい妊婦腹 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河恵子 略号 八ゆる	股間縛り首縄正面 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よれ	両手吊り正面晒し 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よそ	全裸高手小手の麗身 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よの	全裸股間縛りの媚態 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よや	強烈な変型エビ縛り 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よい	正座猿ぐつわの仕置 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よふ	凄絶海老責め地獄 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よえ	女体二つ折り縛り 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よぬ	あぐら縛り全裸晒し 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よあ	イルリの浣腸責め 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よた



れる女は、静子夫人の凄まじくも妖しい裸身の菊花の舞いと見た。本文も絵画に負けず劣らず、耽美の世界を実に快美に描いた。静子の生々しい白いすべすべした太腿に太筆をはさんで踊り、秘中の秘技である生卵割りの演出のためにむっちりとした太腿を密着させてすっぱり飲みこんだ卵を押しつぶそうと下腹部の筋肉を硬直さす、夫人の甘美な肢態。全編にわたって美囚たちの体臭がムンムンと匂うような秀作である。一冊にまとめて読む味は格別で陶酔を誘う。特集号の発刊に際し、更に向上を願う。(花と蛇ファン・三木生)

宮城みち子様。四月号で貴女の通信を拝見しました。私は四十二才の温和な男性です。貴女が恐がっているような男ではございません。私も貴女と同様に若い時に東京に親類もないのに出てきて苦労をしました。安心して私を信用して下さい。私にとっても貴女にとっても、今このチャンス逃がすことは大変に大きい損失です。私が貴女の思っているように、どんな願いでも喜んで叶えて上げます。私となら恥かしくも、遠慮もありません。気軽な気持ちで接して下さい。

い。浣腸もして上げます。貴女が思っている願いは、どんなことでも喜んで聞いて上げます。そしてすごい快感による喜びと満足を得て下さい。いや必ず得られます。私は、前に一人の女性の希望により、浣腸と縛り、その他のプレイを行ない、大変に喜ばれ満足されました。今は大阪に移転されました。淋しく思っているところへこれが本当に神のめぐり合わせとでもいいます。どうか私とピッタリの貴女を知ることができました。私にプレイをしてもらい、よかった、と喜んでいてる貴女の姿が目に見えます。貴女の心温かい、お便りを首を長くして、お待ちしております。おります。(東京都・杉本一男)

奇クの愛読者の中には、よき相手に恵まれない方も、ずい分いらっしゃるのではないのでしょうか。小生も一度に数多くのM好みの女性を知ったのではないのですが、それでも十年ほど前より適当にプレイを楽しませてくれる女性に次々とめぐり会え、奇クを参考に、またそれ以上のプレイを楽しんでおります。今まで小生一人の秘かな楽しみであったのですが、最近複数で責めたり、違った相手に責

〔緊縛女体美のシリーズ〕

- 大手札印画紙焼付 四〇〇円
- 関谷富佐子 略号△もえ▽
- 両手吊りに悶える女体
- 強烈なる甘いムチの洗礼
- 大手札三枚一組 四〇〇円
- 関谷富佐子 略号△もゆ▽
- ムチに狂い哭く美貌の夫人
- 大手札三枚一組 四〇〇円
- 関谷富佐子 略号△もよ▽
- 半吊りでムチ打つ
- 大手札三枚一組 四〇〇円
- 関谷富佐子 略号△もす▽
- 逆エビの味に感泣する
- 大手札三枚一組 四〇〇円
- 関谷富佐子 略号△もせ▽
- ムチの一打に反りかえる
- 大手札三枚一組 四〇〇円
- 関谷富佐子 略号△もれ▽
- 関谷夫人の女体陳列
- 大手札三枚一組 四〇〇円
- 関谷富佐子 略号△もる▽
- 尻立ての鞭撻ポーズ
- 大手札三枚一組 四〇〇円
- 関谷富佐子 略号△もて▽
- 片足吊り挙げて喘ぐ
- 大手札三枚一組 四〇〇円
- 関谷富佐子 略号△もな▽
- 私をムチ打って頂戴ネ
- 大手札三枚一組 四〇〇円
- 関谷富佐子 略号△もね▽

- 脂ぎった女体を縛る
- 大手札三枚一組 四〇〇円
- 関谷富佐子 略号△もむ▽
- 鞭は柔肌に炸烈する
- 大手札三枚一組 四〇〇円
- 関谷富佐子 略号△もう▽
- 滑車吊りに甘い鞭
- 大手札三枚一組 四〇〇円
- 関谷富佐子 略号△もき▽
- 両手万才吊りに鞭打ち
- 大手札三枚一組 四〇〇円
- 関谷富佐子 略号△もこ▽
- 狂う鞭に哀切表情の夫人
- 大手札三枚一組 四〇〇円
- 関谷富佐子 略号△もみ▽
- 浴後の剃玉子縛り
- 大手札三枚一組 四〇〇円
- 中河 恵子 略号△はゆ▽
- 投げたす白い緊縛裸身
- 大手札四枚一組 五〇〇円
- 中河 恵子 略号△はよ▽
- 待望の脚挙げ緊縛姿態
- 大手札四枚一組 五〇〇円
- 中河 恵子 略号△はて▽
- 二つ折り女体エビ責め
- 大手札三枚一組 四〇〇円
- 中河 恵子 略号△はお▽
- 柱の前に緊縛された全裸
- 大手札四枚一組 五〇〇円
- 中河 恵子 略号△はの▽
- 神妙なプレイ寸前の女身
- 大手札三枚一組 四〇〇円
- 中河 恵子 略号△はひ▽



められている様子を想像し、小生とのプレイの途中に「さんげ」さすといったことに、また別の興味が生まれてきました。と言うのも三カ月ほど前に知った女性が私のイメージにピッタリで、もともと小生は傷つけたりすることは好まず、羞恥責めと屈辱責めを一番たのしみにいたしております。知って日も浅く、また本当に私がはじめてのプレイの相手だというだけにM好みとはいえませんが、傷つけたり痛いことは嫌、そのほかのことならと了解した女性で、誰でもというわけには行かぬと思いますが、信頼できる方で私と同様のプレイに興味のある方がいらつしやったらご紹介いたし、また私と一緒にプレイを楽しみたいと思います。(寝屋川市・塚原信夫)

○ 昨年、私の手記を早速、掲載して頂き、感激しております。なんべんも読み返して満足しております。皆さんに紹介されたことに、少し気羞しい気持です。私が細引を見てゾクゾクと興奮を覚えることは先に発表しました。女性に縛られたい願望は益々つのるばかりです。もちろん後手に縛り上げられたいのです。前縛りなど感じが

半減します。私の症状は過度でしょうか。二重人格となるわけでしょうか。女性の方に後手に縛ってもらって多少セツカンされたいことも、一つの願望です。こんな気持を持てはいけませんか。その欲望不満のために、酒に酔って気が高ぶってくると、家へ帰ってエビ縛りや跨間縛りを、独りで考えながら色々、縛り続けております。余り人の考えてみないことを大胆にやることは、いけないことでしょうか。今まで恥かしい性へきを発表することは躊躇したのですが、今回思いきってペンを走らせました。(長崎・本山正美)

○ 荒川区の宮城みち子さん。貴女の通信を拝見しました。結論から言いますと、ぼくとプレイをしてほしいのです。貴女を緊縛し、その上で浣腸するわけです。これはぼくが貴女と知りあった挨拶がわりです。浣腸が終ると、つぎは本格的な縛りです。もちろん貴女は全裸です。ぼくの好む縛りは、強い鞭打ちなどの肉体的苦痛を味あわせるものではなく、股間縛り、開股縛り、あぐら縛りやパイプレターによる責めや浣腸などの羞恥責めです。また貴女に乳房縛り

## 開股縛りに喜ぶする女

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八はわV

## 全裸の女体立ち縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八はふV

## 黒縄は白肌を酷に彩る

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八はほV

## 悦虐に身もたえる美女

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八はあV

## 菱縄は白肌をくびる

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八はうV

## 柱に立縛りでさらす

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八はさV

## 卓上の開股羞恥責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八はめV

## 無防備の女体を開陳

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八はしV

## 遠山静子夫人の立縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八はもV

## 若妻の魅力を発散する

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
関谷富佐子 略号 八はむV

## 後手縛り全裸身の魅力

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
関谷富佐子 略号 八はめV

## 悶える猿轡の裸身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
関谷富佐子 略号 八はもV

## ムチ打ちの陶酔境

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
関谷富佐子 略号 八はさV

## 両手吊りで痛める女身

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
大島 照代 略号 八はしV

## 後手縛りの竹棒責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
大島 照代 略号 八はすV

## 強烈開股強制縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
大島 照代 略号 八はせV

## 両手吊りであえぐ女体

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
大島 照代 略号 八はゆV

## 竹棒強烈開股責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
大島 照代 略号 八はたV

## 厳しき緊縛の正坐責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
大島 照代 略号 八はちV

## 責めの魔手に屈伏する

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
大島 照代 略号 八はつV

## 竹棒の胴絞め責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
大島 照代 略号 八はてV

## 竹棒開股胴絞め縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
大島 照代 略号 八はとV







を鑑賞してもらおう恥かしい想像を  
してしまいますの。想像すること  
は望んでいるということなのでし  
ょう。恥かしいけれど同好の方も  
いらっしゃると思いますから言っ  
てしまいますわ。私の神酒を飲ん  
で下さる方がおられないでしょう  
か。お飲みになって頂くためには  
自分のお味を自分で知っていなけ  
ればいけないと思いますので、  
お風呂に入ったときに片手に受け  
とめて手のひらに溜った分を飲ん  
でみましたの。臭いは全くなくな  
外、抵抗なしに飲めましたわ。む  
しろ丁度よいお塩かげんでおいし  
いと思いました。私のむっちりし  
た白い内股から放出される、それ  
を両手で直かに受けとめてお飲み  
下さってもよろしくございます。  
私の神酒は味の点では自信を持っ  
て安心しておすすめできると思  
いますから、万一にも私のような  
もののそれでもご希望下さるマニヤ  
がいらっしゃいましたら、私なら  
このような羞恥責めごっこをする  
と具体的に貴方の奥技を発表して  
下されば意見が一致する方もいら  
っしゃるのではないのでしょうか。

(神戸・小杉千恵)

前略、久しく貴誌にも御無沙汰

していましたが、実は度重なる責  
め折檻もあって妻が重い内臓の病  
にかかり、その間、色々な事情も  
あって、一時、別居したりしてい  
ましたが、最近ようやく本復し、  
再び昔日のように甘美なゴム責め  
プレイを楽しめる見込みがたちま  
した(この間、もちろん、ずっと  
貴誌は愛読させてもらっていまし  
たが)最近では、またゴム・フェチ  
関係の記事もぼつぼつとみられ、  
なかなかうれしいかぎりです。小  
生らのプレイその他も、おいおい  
紹介させてもらいたいと思ってい  
ます。三日前に、なつかしいピン  
クのゴム引レインコートに白のゴ  
ムハイブーツの姿で、郊外を半日  
ほど引回した上、夜には色んなゴ  
ム雨具を沢山使って、妻を思う存  
分、責めさいなみました興奮がま  
ださめやらぬところです。ゴム・  
マニア、ファンの方々の投稿を切  
望しつつ、とりあえず、ご挨拶ま  
で。

(芦原温泉にて・森中雨奇男)

横浜市の寺岡美美子様。SMP  
レイの空想ほど楽しくもまた佗し  
いものはありませんね。私は当年  
三十三才になり、貴女のご希望の  
四十才には未だ数年不足ですが、

### 双胎臨月蛙腹鮮烈写真

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円  
増田みゆき 略号八れやV

### 双胎臨月腹強烈縛り

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円  
増田みゆき 略号八れゆV

### 臨月腹裸身の媚態

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円  
増田みゆき 略号八れえV

### 黒縄縛りの媚態

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
中河恵子 略号八れぬV

### 立縛りにあうの裸女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
木村洋子 略号八れねV

### 開股された股間縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
木村洋子 略号八れのV

### 豆絞りの猿ぐつわ縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
木村洋子 略号八れむV

### 柱宙縛りに喘ぐ刺青女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
山原清子 略号八やかV

### 高手小手に悶える全裸

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
山原清子 略号八やきV

### 緊縛に映える入墨の肌

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
山原清子 略号八やくV

### 脱がされた緊縛刺青女体

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
山原清子 略号八やもV

### 縄にのたうつ入墨裸身

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
山原清子 略号八やしV

### 腰巻一つで縛られる刺青女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
山原清子 略号八やみV

### 女相撲迫力投業連続動作

大手札十二枚一組 略号五〇〇〇円  
大塚・東浦 略号八なるV

### 恵子の妊孕美観賞

大手札四枚一組 略号一〇〇〇円  
中河恵子 略号八ぬめV

### 孕み若妻の羞らい

大手札四枚一組 略号一〇〇〇円  
中河恵子 略号八ぬねV

### 八の字の開股責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しいV

### 足枷強制開股責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しみV

### 全裸強烈逆エビ責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しけV

### 両手吊り足枷責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しこV

### 両腕逆手吊り責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しらV

### 豊満なる臀部責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しれV

### 大の字縛りと足挙げ責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しわV

お申込みは大阪阿倍野局私書箱  
第14号箕田京二宛へ願います。



ある程度の社会的な地位と一般的な家庭を持っており貴女には一抹の不信感を抱かせない自信があります。私は五、六年前より奇クを愛読しておりますが、SMプレイについては未だ本格的なプレイを行なったことがありません。もちろん、どのようなことが本格的なプレイかは存じませんが……。それ故、私自身S性なのかM性なのかどちらに恍惚の快感を味わうことがあるのか、はっきりと言えませんが、どちらにしても先輩の経験手記のような強烈な鞭打ち、または体に傷が残るような責めは好みませんが、緊縛をとまなう羞恥責めは、もっとも好むところです。たとえば大の字に縛り、全身検査の後、色々な器具を使っての責めなど、お互いにある一定の規約を作り先輩に負けずSMプレイの喜びを味わいたく思っております。貴女の呼び出しがあれば、いつでも上京いたします故、貴女の方で指示下さい。心よい返事を待っております。(神戸・土肥実)

宮城みち子様。私は二十九才になる平凡なサラリーマンです。ある小さな出版社に勤めています。二年ほど前から奇クを愛読してい

ます。もっとも、その存在をしり古本屋などで、こわごわ立読みをしていたのは十年以上も昔のことになります。私のやりたいことは女性に苦痛を与えることではなく女性を思いきり恥かしい目にあわせてやりたいのです。肌にきずつけたりは全く興味ありません。ただ女性の体を思いのままに折り曲げ、開き、そして羞恥心をかきたててみたいのです。そんな私でよければ、あなたとのプレイのパートナーにして下さい。(東京都・東好男)

私は、その後、体の状態が急変して、これ以上は無理だからと言われ、ついに入院し流産いたしました。死ぬほどひどい思いをしました。死が、何とか無事に終り、数日前に退院し只今、自宅で静養しております。五カ月の胎児にしては小さかったそうですが、羊水が多すぎてどうしようもなかったそうです。入院する頃は全くひどく、お腹が大きく破れそうにまで出っぱってましたので、歩くのもひどくお腹にひびいて、あのままでもって経過していたら、私は死んでいたかもしれない。今はもう、お腹も小さくなりましたが、妊娠

全裸後手柔肌縛り 大手札三枚一組 略号△こよ▽ 四〇〇円	乳房強烈膨隆責め 大手札三枚一組 略号△こわ▽ 四〇〇円	海老責めに苦悶する 大手札三枚一組 略号△こお▽ 四〇〇円	全裸の緊縛全身晒し 大手札三枚一組 略号△こぬ▽ 四〇〇円	煙草責めに喘ぐ女 大手札二枚一組 略号△こぬ▽ 三〇〇円	緊縛麗姿に映えるライト 大手札三枚一組 略号△こほ▽ 四〇〇円	腎部強調後手縛り 大手札三枚一組 略号△こほ▽ 四〇〇円	羞恥に悶える全裸緊縛 大手札三枚一組 略号△こほ▽ 四〇〇円	ホステスの緊縛姿態 大手札三枚一組 略号△こほ▽ 四〇〇円	二つ折りで責める女体 大手札三枚一組 略号△こほ▽ 四〇〇円	佐々木真弓 大手札三枚一組 略号△こほ▽ 四〇〇円
脈打つ全裸の臨月腹 大手札三枚一組 略号△こふ▽ 四〇〇円	臨月腹の革紐股間縛り 大手札三枚一組 略号△こふ▽ 四〇〇円	猿轡の臨月妊婦腹縛り 大手札三枚一組 略号△こふ▽ 四〇〇円	卓上の股間縛り狂態 大手札三枚一組 略号△こふ▽ 四〇〇円	羞恥の足挙げ責め 大手札三枚一組 略号△こふ▽ 四〇〇円	悦虐責めの女体終着駅 大手札三枚一組 略号△こふ▽ 四〇〇円	片足挙げの鞭打ち責め 大手札三枚一組 略号△こふ▽ 四〇〇円	柔肌に弾ける惨酷な答 大手札三枚一組 略号△こふ▽ 四〇〇円	あぐら縛りの女体鑑賞 大手札三枚一組 略号△こふ▽ 四〇〇円	対談用に縛られた女 大手札三枚一組 略号△こふ▽ 四〇〇円	左近麻里子 大手札三枚一組 略号△こふ▽ 四〇〇円

以前よりは、やっぱり相当、大きいようです。お腹が少しダブついたようで、以前のパンと張った大きさはなくなりましたが、日数がたてば以前の太鼓腹になることと

思います。ただ乳房は全くすくなく大きく張り、中絶して三日目からお乳が、ダラダラ出ております。一寸、手で押してもすぐ出てきますし着ているものがグチャグチャ



ヤにぬれて困っております。私はお乳にガーゼを厚くたたんであてておりますが、張ってくると辛くて辛くて夜は痛くてねむれないほどです。それで吸乳器を買って時々しぼっておりますが、なかなか止まりません。私は、お乳が張ってねむれない夜、胸をはだけて大きなお乳を出し、美少年にお乳を吸ってもらっていることを想像しながら、吸乳器でしぼっております。中絶する数日前、映画に行きました。日曜日で凄くこんでましたので席がなく立って見ると、高校生のグループが私のまわりにおり、おされるたびに前の高校生の体に、私のマリののように張り切ったお腹が圧迫され、苦しいような嬉しいような思いをしました。休けい時間に、私は廊下のベンチに腰かけて休んでおりますと、さっきの高校生の一人がトイレから出てきて、私の向かいのベンチに恥かしそうに坐りました。私は、ニットのスーツが破れそうにまで丸々と大きくなっているお腹を、苦しそうにさすりながら向かいの高校生に聞こえるようにため息をつきました。その高校生は興味を持ったらしく、上目使いに私の方をじっと見ていました。映画館の

外へ出ると、もう夕方で薄暗くなっております。私はタクシーを拾おうとしておりますと、さっきの高校生が私の後におりました。私は「おばさんのアパートに来てみない」と言うのと、恥かしそうにうなずきました。私のアパートにつくと、部屋に入れ、ストープをつけコーヒを入れてやり、ゆっくりして行くように言いました。私は、その高校生が可愛いくて、いじわるしたくなり、その子の前でスーツを脱ぎ、腹帯とパンティだけの姿になり、お腹を突き出し「苦しいから腹帯取って」と腹帯をほどかせました。丸々とした固いお腹と、とび出しているおへそを見て「すごいお腹だね」と驚いていました。私は、これが妊娠最後のプレーになるかと思うと益々大たんになり、汗だらけになり、その子とプレーしました。

(仙台・美川美美子)

寺岡美美子さん。あなたと手をとっての小旅行を夢みています。昼間は、あたかも満ち足りた夫婦のように睦み語らいながら旅し、そして夜――。私は、あなたを全裸に剥き、あなたの燃える女体を舐めるようにいたぶる。後手に猿

ぐつわ、剃毛の洗礼にはじまってあなたの全身に墨で、みだらな落書きをしてやる。どんなに拒もうが逃げ出せないよう、下着類は小箱に納めて錠前をおろして、鍵は帳場に預けてしまう。乳首にクリップをさげて（もちろんパネは調節します。傷をつけたりするのはいやだから……）ろう涙で悶えを見せたいだけ。あなたは泣く、後手のまま。女の涙は美しいと思う。そして美しいものは私は好きだ。許されるなら燭台になってもらって、その光であなたの隅々まで鑑賞させていただく。ローソクの光の下で女体は、いっそう美しいから、そうしたあなたをカメラに納める。小生は五十才の公務員です。

(前橋市・松葉隆晴)

東京の宮城みち子様。私は二十八才の男性です。奇クを愛読して半年になります。私も日に一回ぐらいイチジクを使用しています。ぜひ私の手で貴女にやらせて下さい。楽しい一ときを過ごしたいと思ひますが如何でしょうか。近しい中に実現できたら幸せです。

(栃木・伊藤進)

○ 渋谷童彦が「女子大生のオシッ

コ飲みたくて、ある女子大生と牛乳一本分、二千円で契約。毎日、愛飲している紳士がいる」と週刊誌に書いていたが、私もスカタロジイにつかれた男である。奇クだから共感を得ると思って告白できる。だから奇クはストレス解消薬だ。現代の圧迫から無気力になり果てた自らを、美しい快美倒錯の世界に没入せしめる。洋子のそれは甘酸っぱく、塩加減も丁度、よかった。淳子は大胆に立位開脚全裸でコップに溢れさせたが、少し臭くて塩辛かった。二十四才のホステスは嫌がってトイレにかがんで排尿するのを神酒拝受した。女学生は案外に素直に放出した。ウエイトレスはスカートの中でコップを当てがった。ゴーゴーで知り合った娘は、さっさとミニを捲って直接、頂いた。要するに近代娘は裸になると同時に平気で神酒を作ってくれる。味の素を多量に混入し、塩味をきかした神酒は美味である。反対給付は私の大切な神酒、女には造り得ない神酒を与える。彼女等は無味だと言った。どうやら美女のオシッコの方が有味が良しということか。この欄に投書のマニヤの神酒が頂きたい。笑子さん、みち子さん、東区の女



## 次号(八月号)は六月二十五日に発売いたします

王様の呼びかけを待つ。

(神戸・国川栄一)

毎号たのしく拝見させていただいております。九美淳先生のマンガは、いつも面白く奇巧向きに画かれており、微笑が自然と湧いてきます。最近号には、いろいろ夫婦プレイの記事や写真が載せられていますので、小生には羨ましくねたましくさえ思われます。小生はなかなか皆様のようなプレイを思いきって妻に要求することができず、ひとり悩んでおります。しかし、時期を見て夫婦プレイを行なおうと思っています。美川美生子さん、いつもお便りを拝見しています。小生は、あなたのような肥満体の方にあこがれています。小生の家内はやせすぎて魅力がありません。やはり、あなたのようにボリュームのある、お腹の出た女の人とプレイできたら……と、はかない望みを抱いております。もし会って頂けるのでしたら仙台までお伺いいたします。どうかご返事下さい。(大阪・古田辰夫)

○

神戸の小杉千恵様。私は阪神間に居住する中年の男性で、会社役員をしております。五、六月号に寄稿されました、あなたの通信を読んで耽美、羞恥、悦虐についてのお考えを非常にうまく表現しておられるのに感心しました。あなたの賢明さ、表現の豊かさに彩られた、あなたの希望と想像が、あくまで良識の世界のものであることが、何よりも私に、このような願望の気持を起こさせます。私はあなたが賛成なさるのなら、つぎのようなサービスをして差し上げたいと思います。二時間程度、痛さや苦しさを余りともなわないポーズの開脚縛りの上、羽毛や毛筆や類似のもので、しかるべき箇所に繰りかえし軽いタッチ。あなたの全身へのディープキス。特に前や後、耳穴、足指には念入りにやります。また色々な形や大きさのコケシやバイブレーターが、あなたを困らせたり、よろこばせたりするでしょう。あなたがよろこびの余り大きな声を出しすぎるようでしたら、マスクも用意しておきましょう。以上は私のサービス

ですが、逆にあなたが私にして下さるサービスプロジェクトの内容については、私は充分ご期待申し上げます。(芦屋市・山本隆)

○

小生、幼いときよりS、Mにひかれ、たまに手にとつて読もうとすると、ぞくぞくする気持を免れ得ませんでした。なにかしら、うしろめたい感じを持っていました。が、最近、SMといえども人間の本性に基づいているのなら、正常を逸したというだけの理由で非難することはできないだろうと考えます。奇クを愛読してますが、実際にSMプレイをしたくてたまりません。指導して下さる方や、ともにプレイのテクニックを上達させて下さる女性の方にめぐり合わないものかと考えています。小生はSとMの両面を持っています。が少しM型です。二十一三十才ぐらいの女性でプレイをして下さる方の連絡をお待ちします。小生は二十一才の青年会社員です。(東京・渡辺わたる)

○

私は、もう五年ほど前から奇クのファンでしたが、初めてお便りを出します。十三年間、一しよに暮した妻を亡くしましたので、プ

レイを楽しむこともできなくなり独り寂しく絵に描いて楽しんでおりました。しかし緒方則子さんのお便りを読んで、私は便りを出す決心ができました。四十を過ぎた身体で責任ある立場なので、再三プレイを楽しむことはできませんが、よろしければお便りを下さいます。暖かくなって参りましたので、少々ハッスルしてみたいと思っております。所長という立場を利用して、貴女を会社に入れて朝夕、縛っておきたいとさえ、思うのです。美人でないこと。巨体であること。ハイミスであること。すべて好条件だと思い、ハッスルいたしております。(福岡・腹乗夫)

○

ぼくは、奇クを愛読し始めてから二年半。近頃、カメラハントのような縛り吊りを実行したいのです。ぼくは甘えんぼで、わがままです。希望する女性は、和服の似合う方で、大阪府北部の人を望みます。ぼくは、いつも寝る前にノートに計画を書いたりしているのです。ぜひ、ぼくのパートナー、恋人になってほしいのです。オネガイシマス。(豊中市・ベルベット)



## 本誌既刊号在庫一覽表

○本誌既刊雑誌は左記一覽表の通り在庫しておりますが、40年に發行のものについては在庫の僅少ななものもありますから、お早い目に御注文願います。

○従来、雑誌の送料は当社にて負担しておりましたが、今後は三カ月以上予約御注文以外（既刊号は含まず）は一部につき送料二〇円（御負担を願います。多数一括してお求めの際は、△小包▽にて発送申し上げます。

既刊雜誌在庫案內

[illegible]

昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭  
 和和和和和和和和和和和和和和和和和和和和  
 434242424242424242414141414141414141  
 年年年年年年年年年年年年年年年年年年年年  
 11211109865412111087654  
 月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月  
 号号号号号号号号号号号号号号号号号号号号  
 送送送送送送送送送送送送送送送送送送送送  
 共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共  
 三七三七三七三七三七三七三七三七三七三七  
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○  
 円円円円円円円円円円円円円円円円円円円円

昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭  
和和和和和和和和和和和和和和和和  
4444444444443434343434343434343  
年年年年年年年年年年年年年年年年年  
6 5 4 3 2 1 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2  
月月月月月月月月月月月月月月月月月  
号号号号号号号号号号号号号号号号号

送送送送送共送送送送送送送送送送  
共共共共共送共共共共共共共共共共  
三三三三三三三三三三三三三三三三  
七七七七七七七七七七七七七七七七七  
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇  
円円円円円円円円円円円円円円円円

河森真理子様。その後、如何お過ごしですか。四十二年七月号の「カメラ・ハント」に登場以来、ぶつりと姿を消された様子。さびしく思っております。私が四十二年九月号の「陶酔の乳房を読ん」で呼びかけてから、はや一年半たちました。時折、KK誌をとり出し、辻村隆氏のカメラと筆による「陶酔の乳房」を読むと、つい近くに貴女がおり、ふっと声をかけたくなる心持になり、はっと我にかえり、アアッ、真理子さん、は裸にいたのだと、気づく次第です。一度、お目にかかりたいと強く心中に思っております。

(東京都・浦沢文夫)

神戸市の小杉千恵様。貴女のお便り、二回とも楽しく読ませて頂きました。二十四才の女盛り、しかもグラマーときては、我々S男性にとって、こたえられない存在ですね。貴女が六月号誌上にて同好のマニヤの方から、花と蛇のような耽美な倒錯の責めを欲しがっておられますが、私がその希望をかなえてあげたいと思います。私は三十五才、伊丹市で、ささやかながらも、建築業を営んでおります。貴女を遠山静子夫人のように思いきり虐めてあげたいと思います。私も鞭打ちのような責めより

も、花と蛇のように悦虐、羞恥責めの方が好きですし、貴女の好みと一致すると思います。貴女は、なかなかのグラマーですし、きつと美人で、素晴らしい人だと思えます。それに文章もなかなかお上手だし、ポロライド・カメラもお持ちとのこと、プレイをすると、その場でフォトが楽しめるわけですね。勿論写すのは私、貴女は丸裸にされ、手足を縛られている以上どうすることもできません。貴女が五月号で宮城みち子様呼びかけておられたことを、私が貴女にしてあげたいと思います。もし私と貴女の二人っきりのプレイが実現されましたら、奇ク誌上にフォト

トをそえて発表するのも楽しいこと  
 と思います。貴女と夢のような  
 アブ・ラブ・デイトを楽しもうで  
 はありませんか。

(伊丹市・吉井幸男)

福岡の緒方則子様。私は五月号で貴女を知りました。どうか私の相談相手になって下さい。ぜひ、お会いして話したいでしょう。貴女を、ぜひ私の奴隷女として教育したいのです。私は暗室を持っておりますので、現像、焼付などすべて自分でやりますので秘密は守れます。貴女のすばらしいお便りを、お待ちしております。

(奈良・加藤昇)



# ☆編集後記☆

○今月号の『カメラ・ハント』連絡を受けた時には、相当に編集整理は進んでいた。十一月振りとかのダイヤモンドウィークを見越してピッチを上げたつもりが思わぬ役立ちを見せ、組み替えた上で大体の頁数を見込んで待機していたのだが、いよいよ締切りギリギリになってドサツと飛び込んで来た原稿の束にウンザリ。口の中でブイブイいながら再度の組み替え。既に割付けた原稿を割愛しなければ、とてものこと頁数不足だし、モタツイていては印刷の間に合わない。○五十数頁もの誌面を一本で費すことは、普通号としては初めてではないか。単に映画紹介としては長すぎる。しかも、この映画の上

映が五月三日よりとなれば、本号が発売される頃には、三番手の映画館でも済んだ後だ。PR効果はない。等々、ブイブイの余波は文句に変わって、スタッフのうるさいこと。○PRというのではなく、辻村氏の活躍ぶりをルポするとういうふうに解釈すべきだ。それにしてもずいぶん書いたものだ。京都日参とかけ持ちだから忙しかったことだろう。いつもの「S.M.」が「映画」になつているところがミソか？ モデル嬢をいじめ飽いて整理部をいじめたか。否、いじめられたのは氏のほうだろう。などと、割付用紙の枚数と共に文句の風向きも変り始めて、本号の『映画カメラ・ハント』百五十枚、写真五十数葉一挙収載となった訳である。氏独得の辻村節を味読されんことを乞う。

## 「懸賞原稿募集」

### △体験、告白、手記△

読者の皆さまが自分で親しく体験されたことや、かくされた性癖や性向について語ってみたいと思われたこと、或はこれだけ、どうしても書き残しておきたいと考えられた事を大胆にお寄せ下さい。採用しました原稿には三千円以上の賞金を贈呈します。

### △創作、小説、物語△

本誌の編集内容に適した特異な素材を駆使した力作をお待ちします。すべて自作の未

発表作品に限ります。これはと思う作品は必ず誌上に取り上げます。腕試しの意味で奮って御投稿願います。採用篇には賞金十万円迄贈呈。

### △感想、論評、批判△

本誌に関連したものでしたら話題の内容は問いません。忌憚なき皆さまの御意見をお待ちします。採用篇には二千元以上の賞金を呈します。

### △(映画、雑誌)通信△

映画、雑誌、演劇、新聞、単行本或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出

処は詳しく明記願います。採用篇には本誌三月分以上又は二千元以上の賞金贈呈。

◎御送付下さいました原稿は原則として返却の求めに応じないことになっております。故に悪しからず御諒承願います。

◎本文記事中に各種の「懸賞原稿募集」を致してあります。故、御応募の方は項目を御明記の上御送稿下さい。

### △読者通信原稿△

巻末の読者通信欄は読者の皆さま方のための公共の広場として開放してあります。御遠慮なくお寄せ下さい。

# ☆本誌御購読の榮☆

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

予約に限り  
一月分(1冊)三五〇円△送20円△  
三月分(3冊)一〇五〇円△送共△  
半年分(6冊)二一〇〇円△送共△

## 奇譚クラブ 定価 三五〇円

七月号 (第二十三巻第八号)  
昭和四十四年六月二十日 印刷  
昭和四十四年七月一日 発行

編集人 杉原 虹児  
発行人 北村 俊夫  
印刷人 村 俊夫

郵便番号558 大阪市住吉郵便局私書函第四十一号

## 発行所 暁出版株式会社

△振替口座大阪四二七八三番△  
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)  
(昭和四十二年四月二一日)  
国鉄大局特別取扱承認雑誌第二一〇号

## ☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビア写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に努める各条例に指定されないうえ、本誌の編集方針として、絶えず、関係人向として発行を企図しております。十八才未満の方には、絶対お売り下されません。特にくれぐれもお願ひ申し上げます。